浪人八景

山手樹一郎長編時代小説全集＝39

春陽堂

浪人八景

山手樹一郎長編時代小説全集＝39

春陽堂

作品案内

——文芸評論家　石井富士弥

　恋人も友達も、同僚も上役も、ひょっとしたら家族さえも信じられないという現代——あなたのためなら命を捨ててもいいという絶対に頑固で頼もしい友達が三人、そして、純情なのと濃艶なのと飛び切りの美女二人が現れたとしたら、どうだろう……。しかも、あなたは雲の上のような和州郡山十万石のお姫さまに、家も家来も捨てても、とまで慕われているのだ。——こういう立場になったら、いったい、どう生きられるか!?
　こんな英雄願望を、さりげなく箱根八里の街道から作者は読者を招待し、いつの間にか明石藩のお家騒動に引き込んでゆく。本編のなによりの特色は、主人公の比良雪太郎を助けるしがない浪人三匹の〝人が人を信じて〟命を賭けるいきさつのたのしさで、これは息もつかせずまき起こる事件の中で、もっとも読者の後味をさわやかにすることだろう。
　この辺りが、やや味の変わった山手版「三銃士」として、浪人物中の興趣編だ。

浪人八景

山手樹一郎長編時代小説全集＝39

春陽堂

春陽堂●定価580円
0193-200439-3066

浪人八景

山手樹一郎長編時代小説全集

39

浪人八景

山手樹一郎長編時代小説全集

39

春陽堂

春陽堂

浪人八景

山手樹一郎長編時代小説全集

39

春陽堂

●編集／解説
尾崎秀樹

●巻末付録執筆者
井口朝生
＊一条明
伊藤文八郎
風巻絃一
木屋進
郡順史
多勢尚一郎
竹村篤
中村豊秀
永岡慶之助
松永義弘
水野泰治

＊本巻執筆者

浪人八景

箱根越え

比良雪太郎が三島の旅籠を立ったのは朝の五ツ（八時）で、箱根八里を一日で越えるにしては、むしろ遅立ちのほうだった。

　箱根は三島から行けば上りが三里二十八町、下りが四里八町、かっきり八里の上り下りである。日がめっきり短くなった秋も半ばすぎの季節だから、普通の足では五ッ立ちだと、小田原へ入る前に日が暮れる。

　が、足には自信があるし、たとえ山崎あたりで日が暮れても、後はもう平坦な道だから、雪太郎は今朝もゆっくりと宿を立ってきたのだった。

　今日もからりと晴れた秋日和だった。

「あの、お早うございます」

　三島大明神の前へかかると、そこの境内から小走りに出てきて、小腰をかがめた旅の武家娘がある。

「やや、あなたか――」

　年ごろ十八、九、はっきりとした目鼻立ちの、人目につく美貌の上に、多少武術のたしなみがある、そういった伸び伸びとした肢体の持ち主で、娘としてはやや颯爽と歩いているのを、昨日もおとといもおなじ道中で見かけているので、雪太郎は思わずにっこりして立ち止まった。

「なにか、わしに用ですか」

「いいえ、あの、今日は箱根越えでございましょう」

「そうです」

「ごいっしょさせてくださいませ」

　ぽっと顔を赤らめながら、さっさと歩き出すので、さそわれるように雪太郎は肩をならべながら、

「わしに道づれになれというんですか」

と、聞きかえさずにはいられなかった。

「御迷惑でございましょうか」

「さあ、そう聞かれると困るんだが、今日これからでは、男の足でも途中で日が暮れますからなあ」

　女づれではなお無理だし、下りの途中で日でも暮れようものなら、それこそ事だ。

「あたくし、歩くのは大丈夫ですの」

「なるほど、そういえば昨日もおとといも、あなたはなかなか颯爽と歩いていましたな」

「お恥ずかしゅうございます。あたくしこんな男みたいな気性だものですから、つい足にまかせるようになってしまいまして」

　道はいよいよ上りになってきたが、娘は自分でいうとおり、平気でいっしょに歩いていく。もっとも、雪太郎のほうで多少加減しているのも事実だった。

「あなたは昨日もおとといも一人で歩いていた。一人旅ができるくらいだから、たしかに気性の娘さんに違いない。その強い娘さんが、どうして今日は道づれがほしくなったんです」

　雪太郎はわらいながら聞いてみる。

「あの、箱根峠には悪いおおかみが出ると聞いてまいったものですから」

「いや、昼間はおおかみなど出やしません」

「でも、途中で日が暮れるかもしれませんもの」

「それは少しおかしい。それなら、わざわざ三島さまの前でわしなど待たずに、峠へかかれば日の暮れないうちに小田原へ入れたんだがなあ」

「あら、そんなにおきらいあそばさなくたって」

　娘は急にはにかんだように、耳たぶまで赤くなる。

「正直にいってみましょうかな」

　雪太郎がまじめにいう。

「どうぞ――。あたくし正直は大好きでございます」

　はっきりとした口をきく娘だ。それならこっ

ちも話しいいと、雪太郎は思う。
「あなたはなにかちゃんとした、というより大切な用があって道中をしている人だ。油断のない歩き方でわかる。そういうしっかりした娘さんが、ここまできて急に誤解されやすい男の道づれがほしくなる、きっとなにか理由があるんだろうと、わしは思うんだが、どうなんです」
「あの、あたくしも正直に申し上げます」
「そうしていただきたいな。わしも正直は大好きです」
雪太郎はちょいとさっきのおかえしをしておく。
「あたくし松江と申します」
「申しおくれました。拙者は比良雪太郎、浪人者です」
「比良さまとおっしゃると、あの比良の暮雪の比良でございますか」
「そうです、その比良です。頭がいいなあ、松江さんは」
うっかり口に出たのは、比良雪太郎とは比良の暮雪から思いついた変名で、本名は生涯(しょうがい)使うことができない因果をしょっている雪太郎なのである。
「比良雪太郎さま、――いいお名前ですわ」
松江もなにか感じたらしく、口の中でつぶやくようにいっていたが、
「本当はあたくし、雪太郎さまなら大丈夫とお見うけして、三島さまの前でお待ちしていましたの」
と、やっと本音が出たようである。
「なにが大丈夫と見たんです」
「雪太郎さまは、失礼ですが、お身なりがいつもきちんとしていらっしゃいます。それから、あの、男らしいお顔をなすっていて、お目がとても澄んでいます。きっと、お行儀の正しい、勇気のある、お心のやさしいお方だとお見うけいたしましたの」
これは面と向かってあまりにも正直すぎる。

雪太郎もいささか照れて、
「どうもありがとう、いろいろほめていただいて」
と、苦笑せざるをえない。
「あたくし、お祭しのとおり、身にあまる大切な御用を持って、江戸へいそぎます。それはそれでよろしいのですが、ここまでまいってふと気がつきました」
「どう気がついたんです」
「箱根のお関所は、下りは男女とも手形はいらない、ただ女は行く先を申せば通れるそうでございますね」
「そのおとりです。少しも心配はいりません」
「でも、本当のことをいって、あたくしのような娘の一人旅、雪太郎さまも変だとお思いになるでしょう」
「それはそうですな。若い女は、一人旅をするものではないとされていますからな」
「ですから、あたくし、お関所でそんな風に怪しまれないために、雪太郎さまの妹ということにして、おつれいただきたいのでございます」
これは大した娘だと、雪太郎は目を丸くした。
峠は塚原(つかはら)へかかって、やっと一合目をのぼったあたりでもあろうか。秋の日は強いから、なんとなく膚が汗ばんでくる。
「辛崎(からさき)さん――」
「ええ――?」
「あんたは辛崎の松江さんだろう」
「まあ」
くすりとわらったところを見ると、これも変名を使っているのかもしれない。
「辛崎の松は花よりおぼろにて――」
「芭蕉(ばしょう)さんの句でございますね」
「そうです。そして、あんたを詠んだ句のようでもある」
「あら、どうしてでございます」
「辛崎の松は花よりおぼろでおもしろいが、おぼろだからなんにもわからない」

「そんな、あたくし——。いまにみんなお話しするつもりでいますのに」
あわててそんな言い訳をする松江である。
「しかしねえ、松江さん、妹というのはかえってまずい。きょうだいの情というものは、なかなか出しにくいものだから、疑うほうから見ると余計これは変だぞということになり勝ちなもんじゃないかな」
「では、あの、いいなずけでもあたくしはよろしいのでございますけれど」
悪びれもせずにそれが言える娘なので、
「それなら、いっそ夫婦のほうがいいと思うな」
と、こっちもあっさり出てやる。
「でも、あたくし丸髷ではございませんし、歯も白くて、変に取られませんかしら」
「いや、新婚ならそれでおかしくないし、駆け落ち者と思ってくれてもかまわない。駆け落ち者は関所を通さないというおきてはないだろうからね。ただ怪しむだけなら、先方の勝手にさせておくんです」
「では、あたくしはどちらでもかまいませんの」
「そうでしょうな。関所さえ無事に通ってしまえば、さようならといって、さばさばと駆け出せばいいんでしょうからな」
雪太郎がわらい出すと、まあといって松江はちらっとこっちの顔色を見ながら、
「雪太郎さまはお上品なお顔をしていらして、案外お口が悪いんでございますのね」
と、自分もわらい出す。
「さよう、物いえばくちびる寒し秋の風、これも松尾芭蕉さんの句です」
「この道や御夫婦で行く秋の暮れ、あたくしの句でございますの」
「うまいなあ。松江さんは芭蕉さんの子孫の娘さんかね」
「わかりませんわ、先祖はおぼろすぎて」
明るくて、そのくせ芯じまりで、その奥にどんな秘密を持っている娘かはわからないが、こ

れなら関所を夫婦で通ってもぼろを出す心配はなかろうと、雪太郎は思った。
娘のほうでももうその気らしく、澄まして寄りそって坂をのぼっていく。
言うだけのことを言ってしまえば、あまり話題のない二人だし、それに坂から坂だから、さすがに息がはずんできて、もうあまりむだ口もきけなかった。
「だんな、もうくる時分だと思いやしてね、待っていたんでさ。——今日は」
一の山へかかろうとして、ふっとそこの木の根に腰かけて休んでいた男が、心やすそうに立ってきた。
この男も、道中でたしか二、三度見かけている。年ごろ二十六、七の、どこかやくざっぽいやつで、口が目立って大きく、うすよごれた破れぢょうちんといった感じのおどけた顔つきだ。身なりもあかじみた素袷一枚で、それでも道中差しを一本さしている。
「お前とはどこかで、二、三度会っているな」
雪太郎はだれとでも友達になれる明るい性分だから、かまわず歩きながら返事をしてやる。
「へえ、毎日おなじ道を歩いていやすからね。あっしは中村吉松っていう、これでも江戸の役者でござんしてね。御存じですか、中村鶴蔵、あの仲鶴さんの弟子なんでござんす」
「わしは芝居道はあまり知らんが、お前は役者か」
「へえ、これでも役者なんで」
「ずいぶんよごれている役者だな。わしはごまかなと思っていた」
「ごま——？」
「下にはいのつくごまだ」
男同士が肩をならべてしまったので、一足うしろへ遠慮した松江が、くすりとわらっている。
「こいつは驚き入谷。だんなは鈴ガ森の権八が前髪を忘れてきたようなかわいい顔をしていながら、おそろしく口に毒があるんですねえ」

「うむ、その口の毒のために、こうして浪人になった。まあ、悪く思うな。で、わしになにか用か」
「実はお願いがありやしてね」
「言ってみろ、できることなら聞いてやる」
「ごくお安い御用でござんしてね。ごらんのとおり、あっしは道中で少しおごりすぎて、ここんところ我ながらうすよごれていやす。おまけに役者稼業だから、手のつめが白い。おっとりしただんなの目にさえはいかなと見られるくらいだから、下手にお関所で疑われると、日一杯に小田原へ下れなくなりやす。なにか一つだんなの荷物を持たせてやってくれませんか」
つまり、家来にして、関所を通ってくれというのである。
「あいにく、わしは見てのとおり、荷物はなんにも持っていない」
「なあに、お関所を通る時、吉松、秋の日は短い、いそげとかなんとか、うまく一声かけていただけば、それで家来に見えます」
「そうか。そのくらいのことならやってやってもいいが、悪心だけは必ず起こすなよ」
「あれだ。じゃ、だんなはどうしてもあっしをはいにするんですね」
「いや、無理にはいにしようというのではない。お前がなるなと、注意しているんだ」
「知らねえな、だんなは」
にやりと吉松が冷やかすようにわらう。
「なにを知らぬというんだ」
「世の中ってものはね、だんな、うすよごれているからはいだ、赤いものをちらつかせているからお腰元だと、身なりで人柄がきまるもんじゃありませんぜ」
ちらっとうしろを振りかえって、松江の足が十間ばかりおくれてきたのを見とどけてから、吉松は小声でのべ立てる。
「それはどういう意味だ」
「まだわからねえかなあ。だんなはふところに

大金を持ってるでしょう。たしか、まだ胴巻きの百両には手がついていないはずだ」
ぴたりと人のふところを当ててくる吉松である。
「お前、目が高いなあ。ぴたりと当たったぞ。役者には惜しい勘だ」
雪太郎はわざと感心してみせる。
「いやな感心のしかたをするねえ、だんなは」
吉松はやっぱりそれが気になるらしく、
「あっしはねえ、だんな、こう見えてもおしゃべり吉と、人にあだ名をつけられるくらいおしゃべりなんでさ」
と、妙なことを言い出す。
「そういえば、お前はよく舌がまわる。口が大きいせいだろうと、わしは見ていたんだ」
「ありがとうござんす。おかげで、あっしは一人でいても黙っていられない性分でしてね。こんなのはごまのはいやぬすっとには不向きなんでさ」
「どうしてだね」
「ぬすっとに入って、人がよく眠っているでしょう。――しめしめ、よく眠りこんでいらっしゃる。まあごゆっくりお休みなすって、寝る子は育つっていいやすからね。その間にこっちはたんまり仕事をさせていただきやすなんて、ひとり言をいや、たいてい相手が目をさましちまいますからねえ」
まじめなのか、人を食っているのか、そんなことで自分がぬすっとではないという証明をしようとするんだから、頭はあんまりいいほうではなさそうだ。
それとも、わざとそんなとぼけ方をしているやつなのか。
「なるほど、おしゃべりも病のうちだからな、かわいそうに」
と、雪太郎はわらっている。
「そうわかっていただけば、あっちも一安心だ。そこで、だんな、娘なんてものはとても弱いも

んだってことを、だんなは知っていやすか」
「ふうむ、そんなに弱いものか」
「弱いのなんのって、ぐいと一つにらみつけて、黙って陰へ引っぱりこんで、おっ伏せてしまえば、もうそれっきりのもんさ」
「お前、やってみたことがあるのかね」
「御冗談で――。あっしはそんな悪どいまねをしなくたって、これでも役者でござんすからねえ」
　おほんと反りかえってみせる吉松である。
「そうか、いつも立て役に殴られて、とんぼを切って、おっ伏せられている組だな」
「だんな、その口の毒だけはなおさなくちゃいけませんぜ。生涯出世のさまたげになる。第一、女の子にもてないだけでも損でさ」
「これも病のうちでな、浪人させられるくらいだから、たしかに出世のほうはおぼつかない。しかし、女の子にはそうでもなさそうだぞ」
「そうらね、それがあぶねえっていうんでさ。あのお腰元さんでげしょう。箱根には悪い雲助が出ると申しますから、どうぞ道づれになすって下さいましと、ほんのり顔を赤らめたのを見て、だんなは、おれにほれたな、しめた、と思った。ところが、しめたと思ったのは、本当はあちらさんですぜ。なにもだんなに心をひかれているんじゃない、だんなの胴巻きの百両に気をひかれているんでさ。ようござんすか、おっ伏せられればそれっきりの弱い娘が、一人であぶない旅に出るはずないし、また親のほうで出すはずもない。それがああして一人で歩いている。あの娘こそ、一皮はいでみれば、御守殿なんとやらいう怖い肩書きのある白ばいにちげえねえんでさ」
「そうか、あの娘は白ばいか」
　峠はやがて四分ほどのぼり三ッ屋の立て場が近いあたりで、松江はもうかなりおくれている。
「あっしはねえ、だんな、昨日おとといからあの白ばいがどんなかもをつかまえやがるかと、

実はたのしみにしていたんでさ。そして、ことによると、だんなかもにされるんじゃないかとにらんでいた。百両のかもなんてのは、そうざらにあるもんじゃありやせんからね。案の定、あそこで待っていると、だんなはちゃんとかもにされている。一体、だんなはどこであの白ばいにかもにされたんでげす」
「三島神社の前だった」
「へえ、三島さまの前でね。なんといって持ちかけてきやした。まさか、癪を起こして道端へしゃがんでいる、なんて手は古うござんすからね」
「そんなんではない。すみませんが、お嫁にしてくださいましと、たのまれたんだ」
「へえ、こいつは顔負けだ。娘っ子のくせに、ずうずうしいことをぬかしやがる。だんなはなんと返事なすったんで」
「ちょっと待て――。お前どうしてもわしの家来になって関所が通りたいのか」
　雪太郎はわらいながら立ち止まる。
「どうぞ、そうしてやっておくんなさい。そのかわり、あの白ばいは赤い顔をして逃げ出すように、うまくあっしが追っ払ってみせやす」
「そうか、それなら、とにかく相談してみてやろう」
「だれに相談するんです」
「家内にだ」
「家内――?」
「道づれにお嫁のほうが先口だからな。わし一存でお前を家来にするわけにはいかん」
「あれえ、だんなはもうあの白ばいと夫婦約束をしちまったんですか」
　おしゃべり吉があきれた顔をしているところへ、松江が追いついてきた。相当険しい上りだから、さすがに汗ばんだ顔がさくら色にぽっと上気している。
「松江さん、この男が家来にして関所を通らせてくれとたのんでいるんだが、どうするね」

雪太郎がさっそく相談するように聞く。
「雪太郎さまさえよろしければ、あたくしは別に――」
　にっこりと肩をならべてくる松江だ。
「吉松、お嫁さんのお許しが出た。ついてきてもいいぞ」
「へえ、ありがとうござんす」
　おしゃべり吉はぺこりと雪太郎のほうへおじぎをして、
「ねえさんはいいだんなさまをつかまえて、うまくやりやしたねえ」
　と、うすらわらいをうかべる。
「吉松、主人にそんな口をきいていいのですか」
　松江がじろりと吉松をにらんでたしなめる。なかなかいい度胸である。
「へ、へ、恐れ入りやした。こりゃ大した白ばいだ」
「なんのことです、その白ばいというのは」
「さあ行こう。それはわしが歩きながら説明しよう」
「だんな、だんな、つまらないことをいうもんじゃありやせんぜ」
　吉松があわてていいながら、うしろからついてくる。
「吉松、いっしょに箱根越えをするんなら、ものごとは正直がいいんだ」
　雪太郎はうしろへ言っておいて、
「吉松はねえ、松江さん、娘の一人旅はおかしい、松江さんはきっとごまのはいだろう、女のごまのはいだから白ばいだと、一人できめている。まあ、わしに用心しろという親切心なんだから、悪く思わんでもらいたい」
　と、わらいながら説明した。
「ふ、ふ、御自分が黒ばいだから、人までそんな風に見えるのではありませんかしら」
　松江が平気でやりかえす。
「おや、変なことを言いやすねえ、ねえさん。あっしはこう見えても中村吉松っていう役者な

んだ。人にはいうことといわないことがありやすぜ。あっしをごまのはいだっていうんですかい、ねえさんは」
　うしろから吉松が食ってかかる。
「黒ばいといわれるのがおいやでしたら、人のことも白ばいだなどと、陰口はきかぬものです。男らしくありませんわ。それとも、役者は男ではないのですか」
　見事なしっぺ返しだった。
「そうかなあ。じゃ、ねえさんはどうしても白ばいじゃないと言いはるんだね」
「吉松、あたくしは雪太郎さまのお嫁です。御新造さまとお呼びなさい」
「こいつはまったく驚き桃の木だ。だんな、だんなはそれでいいと思ってるんですか」
「うむ、わしはそれでよろしい」
　雪太郎はわらっている。
「甘いなあ、だんなは。いまに後悔するんですぜ。箱根を越えて、今夜は小田原泊まりだ。だれでも箱根を無事に越した晩は山祝いというやつをやる。だんなさま、おめでとうございます。山祝いにお一つおすごしあそばせと、杯をさされる。だんなは甘いから、うむ、めでたいのうとかなんとか目じりを下げて、酌(しゃく)をうける。お前も一つどうだ、いいえ、あたくしは不調法でございますから、とかなんとかいって、お嫁は決して杯をうけない。そのはずさ、中には薬がしこんであって、そのうちにだんなの口からだらっとよだれが流れてくるって寸法だ。これが白ばいのほうのおきまりの手でござんしてね」
「黒ばいのほうはどんな手を使うのかね」
「あれえ、本当にしねえんだな、だんなは」
「いや、おもしろく聞いている」
「へえ、おもしろくねえ。結構でござんすよ、人の話がおもしろいうちはね。ところが、明日の朝になってみると、とたんにおもしろくなくなるから不思議でさ。お嫁と胴巻きの百両が、煙のように消えているんだ。南無三(なむさん)、さてはア

と、そこで歯ぎしりをしたって、六日のあやめ、十日の菊でござんすからね」
「いや、このお嫁は辛崎の松なんだ」
「なんですって――」
「松は花よりおぼろにて、――なあ、松江さん」
一向気にもとめていない雪太郎である。
雪太郎に言わせれば、お嫁の松江も、家来のおしゃべり吉も、怪しいと疑えば五分五分の道づれで、両方とも関所を越えるまでの約束だから、別に深い詮索はいらないのだ。
そして、その日の昼すぎごろ、芦ノ湖の逆さ富士をながめながら、箱根でゆっくり中食を取り、いよいよ問題の関所へかかったのである。
箱根の関所は明け六ツにあいて、暮れ六ツにしまる。夜は絶対に人を通さない。夜ここが通れるのは御用飛脚だけだ。
小田原藩の大久保家があずかっている大切な関所で、番頭一人、横目付一人、番士五人、足軽三十人で守っている。大久保家は十一万三千石の所領だが、このうち、一万三千石は関所の預かり料として給されているものだ。
上りは男女とも手形がいるが、江戸へ入る者は手形はいらない。ただし、女は行く先を告げて通ることになっている。
雪太郎は松江と吉松をつれて、自分から番士の前へ出た。
「浪人比良雪太郎、家内松江をつれて江戸御徒町伊庭軍兵衛先生の道場へ修業にまいります」
すらすらと言ってのけると、若い番士はじろりと松江のほうをみて、
「お通りなさい」
と、うなずいてみせた。
松江はしとやかに会釈して、いそいそと雪太郎の背につきながら番士の前を通りぬける。
吉松もその後について通ったが、番士の目は松江のほうばかり見ていて、うすよごれた吉松などにはなんの関心も持たなかったようである。

足軽がかためている小田原口の関所の門を出ると、間もなく道はのぼりになる。
「雪太郎さま、どうもありがとうございました」
のぼりにかかってから、松江が礼儀正しく会釈をした。
「いや、その礼には及びません」
雪太郎は軽くあいさつをかえして、
「松江さん、もう約束はすんだから、わしに遠慮はいらないよ」
と、言葉をそえた。
いそぐなら先へ行ってもいいし、足がくたびれたのなら後からゆっくりきてもかまわない、自由にするがいい、という気持ちだった。
「いいえ、小田原までお嫁にしておいていただきます。悪い黒ばいにねらわれると怖いのですもの」
「けっ、おっしゃらあ」
と、うしろの吉松が黙ってはいない。
「その口で小田原へ入ると、あの、今晩だけお嫁にしていっしょに泊めてくださいましと、色目を使って、それからがいよいよ白ばいの腕の見せどころさ」
「吉松、お関所が無事に通れてようござんしたね」
松江がおだやかにやりかえす。
「おたがいさまにね」
「お前はお関所が無事に通れたんですから、家来はもういいでしょう。暇をあげますから、どこへでも勝手においで」
「だんな、だんな、白ばいがあっしをじゃまにして、あんなことを言いやすぜ。黙っていていいんですか」
ちょうど峠の上へかかって、芦ノ湖が一目で見晴らせるところへきた。富士のながめが美しい。
そこに突っ立って、ゆうぜんと富士をながめていた浪人体の、あまり風体のよくないやつが、くるりとこっちを向いて、

「おい、お前たち、待て」
　と、おおかみのような目を光らせてきた。
　雪太郎も上背五尺七寸はあるから決して小さいほうではないが、いま前に立ったやつはそれより一寸あまりは高いと思われる筋骨たくましい浪人者で、年も二つ三つ上だろう。
　さっき関所を通る時、たしかにうしろからきて大またに通りすぎていった男だ。
　一見剣客風と言いたいところだが、いかにも旅の垢にうすよごれた身なりの上に、ひどく人相がよくない。おそらく、人を恐喝して飯の種にして歩くいわゆるごろんぼ剣客、おおかみ浪人のたぐいらしい。
「なにか用かね」
　雪太郎はおだやかに聞いた。
「とぼけるな。貴様らはけしからんやつだ。いま関所破りをしてきたろう。この目でにらんでいたんだから間違いはない。関所破りは天下の重罪だぞ」
　おおかみ浪人はわめくようにいって、じろりと二人をひとにらみにする。
「こいつはいけやせん」
　と、おしゃべり吉は首をすくめてしりごみをする。
「まあ、歩きながら話そう。日が短いから、峠で日が暮れるとおたがいに難儀だ」
　雪太郎は誘うように歩き出す。
「おい、逃げようったって、そうはいかんぞ」
　ぎろりと目をむきながら、それでも肩を怒らせて並んでくるところを見ると、目的はゆすりなのだろう。
「いや、こっちは女づれだから、貴公のような豪傑につかまっては、とても逃げられない。しかし、我々は別に関所破りはしない。ちゃんと関所を通ってきた」
「黙れッ。貴様、関所を通る時、なんといって通った」
「比良雪太郎、家内松江をつれて――」

「うそをつけ。その娘は貴様の家内ではない。昨日一日中一人で歩いていたのを、わしはちゃんとこの目で見ておる。しかも、ゆうべは三島の伊勢屋という旅籠に一人で泊まり、今朝立つ時も一人だった。夫婦でもない者が夫婦だといって、関所を欺いて通る。関所破りに違いあるまい。次第によっては小田原藩へ引っ立ててやるからそう思え」
「貴公、よくわしの家内のことを知っているようだな。後をつけていたのかね」
「けしからんことをいうな。後をつけていたんではない。娘の一人旅、あぶないと思ったから、親切でそれとなく見ていてやったんだ」
「それでわかった」
「なにッ」
「貴公のような送りおおかみがつきまとうんで、急に家内は怖くなったとみえる」
「黙れッ、家内ではない。貴様らは偽物だ。強情を張ると小田原藩へ引っ立てて、白い黒いをつけてやるぞ」
「おかしなことをいうなあ。昨日までの娘が、今日から家内、お嫁にかわる、夫婦というものはみんなそうなんじゃないのか」
「バカッ、それは野合だ。さては、貴様たち、野合をやったのか」
「いや、野合ではない、ちゃんと三島大明神の前でお嫁にしたんだ。神聖なものだ」
「なんだ、娘のほうは三島神社の中へかくれていたのか。どうも足が早すぎると思った」
　問うに落ちず、語るに落ちるで、どうやらこの豪傑は、今日も朝から松江を追いまわす気だったらしい。
「貴公、御姓名は――」
　すかさず雪太郎が切りこんでいく。
「わしは剣をもって諸国修業中の三井鐘太郎。野合は断じてゆるさんぞ」
　三井豪傑はまだ野合にこだわっている。もっとも、野合の夫婦をみとめては、関所破りが成

立しなくなるのだ。
「案外苦労性だな、貴公は。三島の神前で松江さんをお嫁にはしたが、まだまじわりは結んではいない。安心しなさい」
うしろから吉松といっしょについてくる松江が、きっと顔を赤くしたろうと思う。
「ふざけるな。真っ昼間からまじわりを結ぶのは犬ぐらいのものだ」
「そのとおり——。真っ昼間から一人旅の娘を追いまわすのは、おおかみぐらいのものだ」
「なにッ」
「貴公の親切はよくわかるが、正直にいってあまり人相がいいほうではないから、娘としては怖がるのは当然だと思うな」
ずばりと言ってのける雪太郎だ。
「こやつ、拙者をおおかみだとぬかしたな」
「いや、貴公は人間だ。人間だからそうして口がきける。しかし、人を頭から恐喝するような態度に出てどなりわめく人間は、おおかみより柄が悪いということになる」
「許さん」
三井はどすんと一つ足踏みをして立ち止まり、
「よし、あの松林で話をつけよう、来い」
と、ちょうど一峠下って両側がやや平坦な松山になってきたので、我から先にがさがさと熊笹をわけて入っていく。
「松江さん、一足先へ行っていていいよ」
どうせなんとか始末をつけなくてはおさまりそうもない相手だから、雪太郎はうしろからくる松江にそういった。
「だんな、大丈夫かね。強そうですぜ、あのおおかみは」
心配そうにいったのは吉松で、松江はただ青い顔をして、じっとこっちを見ているだけだ。
「心配するな。おおかみより人間のほうが利口だ。後から追いつくから、先へ行っていてくれ」
雪太郎はにっとわらってみせてから、かまわ

ずおおかみ豪傑の後を追う。
一丘越えると、手ごろな空き地があって、もう街道からは見とおせない。そのあたりしいんと秋の日が澄んで、こおろぎが鳴いていた。
「よし、ここでやろう。支度をしろ」
三井はくるりとこっちを向いて仁王立ちになる。
「よかろう。では、やるか」
「うむ、やる」
「やめたらどうだ」
「なにッ」
「刀を抜けば、どっちかが死ぬ。そう大して恨みもないのに、死んでおおかみの餌になったってつまらない。貴公の目的は別にあるんだろう」
にっとわらってみせる雪太郎だ。
すごんでみせても、あまり驚かないから、三井のほうでもこれはだめだと見たのだろう。
「貴公、いい度胸だなあ」
と、急にくだけてきた。
「江戸へ行くのかね」
「そうだ。江戸の道場荒らしに行くところだ」
昂然と胸を張って、やるんならいつでもやるぞと目を光らせながら、まだ本音は出そうとしない。
「腕には相当自信がありそうだなあ」
雪太郎はまずおだててみる。
「無論、わしは強い。強くなければ、今ごろ何度冥土へやられているかわからん」
三井豪傑はうまいことをいう。広い世間には、おとなしく恐喝されっ放しでいるやつばかりはいないだろうから、相当危ない橋も何度かわたってきているに違いない。
「しかし、それで世渡りができるようなら大したもんだ。わしも意を強くするに足る」
「なにッ」
冷やかすのか、承知せんぞと、またしてもかみつきそうな顔になる。
「貴公、江戸へ行くといったな」

「それがどうした」
「わしも浪人者です。たくわえがあるうちはいいが、金がなくなるとやっぱり世渡りというやつをやらぬと食っていけぬ。どうだ、江戸までの一切の費用をわしが持つことにするから、一通り貴公の世渡りというのを、わしに伝授してみてくれぬか」
「本気か、貴様」
「本気だとも。浪人した以上は、浪人の勉強をしておかぬと、生きていけなくなる。わしは人のやることはなんでもやってみる気だ。良心の許すかぎりな」
「そうか」
三井はちょっと妙な顔をして、雪太郎を見すえていたが、
「よし、晩酌一升つきなら承知しよう。どうだ」
と、わざとふて腐れた面構えになる。
「よかろう、毎晩一升つけさせよう」
「もう、一つ条件がある」
「なんだね」
「世渡りを伝授するからには、わしは貴公の師匠番だ。道中、わしを先生と呼ぶか」
「お安い御用だ。先生と呼ぼう」
「きっとだな」
「武士に二言はない」
雪太郎がわらって答える。
「気にいったぞ。——しからば、雪太郎、まいれ」
三井は肩を怒らせて街道のほうへ歩き出す。
——これも根っからの悪人ではなさそうだな。
世をすねて空威張りをしている貧乏くさいうしろ姿が、堂々たる上背があるだけに、雪太郎は内心おかしい。
「雪太郎、許す、並べ」
街道へ出ると三井がいった。
「先生は江戸は初下りですか」
肩を並べていきながら、約束だからさっそく先生あつかいにする。

「わしは江戸で浪人したんだから、初めてどころか、故郷へ帰るようなもんだ」
「すると、故郷へ錦をかざるわけですな」
「こらッ、師匠を愚弄するやつがあるか」
「いや、愚弄などと、そんなつもりはありません。世につづれの錦ということがありますからな」
「なるほど、つづれの錦か、うまいことをいうなあ」
三井は思わず感心しながら、
「雪、お前その手で、あの娘をうまく丸めこんだんじゃないのか」
と、まだこの豪傑は松江にこだわっているようだ。
「先生は、あの娘をどこからつけまわしていたんです」
雪太郎は平気でそんな口をきく。
「こらッ、師匠に向かって失礼なことを聞くな」
「いや、わしは正直を愛し、公明正大を信条としている青年ですからな、つい思ったことは口に出してしまうのです」
「そうか。それは立派な心がけだ」
三井はちょっと苦い顔をして、
「しかしな、浪人をすると、それではなかなか食っていけぬぞ」
と、きめつけるようにいう。
「世の中というものは、そんなに汚いものでしょうかなあ」
「うむ、汚いものだとも。水清ければ魚すまずという言葉があるくらいのものだ」
どうだ、まいったかと言いたげに、豪傑は横目でじろりと雪太郎をにらむ。
「なるほど——しかし、あゆだとか、こいだとかいう、人に愛される魚は、元来清流を好みます。どろ水を好むのは、どじょうとか、なまずとか、おくびょうな下魚にかぎるんじゃありませんか」
「理屈をいうな、そんな心がけだから、お前は

浪人なんかさせられるんだ」
「いや、わしが浪人したのは、ギヤマンの中に飼われている高貴な金魚をかわいがりすぎたからです」
「なに、金魚――？　そういえば、あの娘もちょいとした金魚だな、お前、本当にお嫁にする気なのか」
「あれはもう破談になりました」
「破談――？」
「箱根の関所を通るまでのお嫁の約束なんだから、ここまでくればもう約束は自然消滅です」
「しかし、惜しいことをしたなあ。なんでそんなバカな約束をしたんだ」
「それはただの金魚ではありません。なにか大切な用を持って、江戸へいそぐ金魚です。わしのもう一人の連れは、中村吉松という江戸の役者だそうですが――」
「なに、あれが役者――。きたない役者だなあ」
「まあ、清流にはすめないほうのどじょう役者でしょう。あれがあの金魚を、白ばい、つまり娘ごまのはいだと見立てました。娘の一人旅はとかく怪しまれる。ほかのやつにはどう怪しまれてもかまわないが、関所で怪しまれるのは困る。あなたはお人柄がいいから、関所を越えるまでお嫁にしてくれとたのまれたんです」
「なぜ、江戸までの約束をしなかったんだ。ちょいと惜しいではないか」
「なにが惜しいんです、先生」
「なにがって、遠くて近きは男女の仲だ。それに、あの金魚は相当路銀の用意があるし、江戸へ行けば、いい親戚なり、奉公先があるに違いないんだ」
「先生はそれが目的で、あの金魚をつけていたんですか」
「正直に言えばそうだ。今朝旅籠を立つと、すぐに後をつけたのに、行けども行けども追いつかん。三島神社の境内にかくれたとは、つい気がつかなかった。惜しいことをしたもんだ」

「つまり、先生より娘のほうが、はるかに頭がいいということになりますな」
　雪太郎はずばりといって、わらっている。
「頭ぐらい多少よくても、たかが小娘だ。手はいくらもある」
　三井豪傑はだんだんおおかみ浪人の生地を出してくるようだ。
「先生、その手というのを一つ、御伝授願いたいですな」
　雪太郎がもっともらしくおだてて出る。
「よし、口で伝授するより、実地にやってみせてやろう。しかし、あれはもう本当に貴様のお嫁ではないんだろうな」
「はあ、先方は小田原までお嫁にしておいてくれといっていましたが、約束の上からいえばお嫁の期間は切れていることになります」
「それにしても、もう追いつくはずだがなあ」
　三井は駆け出しそうな様子だが、雪太郎は知らん顔をして、
「先生はあの娘に追いついて、林の中へでもつれこみ、いやおうなしにおっ伏せてしまう、その手を用いようというんですか」
　と、ゆっくり歩きながら聞く。
　頭のいい娘だから、いっしょに行きたければ、無理に追いかけなくても、どこか途中で待っているだろうし、もう一人でも大丈夫と思えば、さっさと先へ行く。雪太郎はなるべく娘の自由意志にまかせておきたいのだ。
「うむ、場合によってはおっ伏せるのも手だ」
「また、場合によっては、お前はなにか秘密を持っているだろう、おれの言うことをきかぬと、問屋場へ引き立てるぞと恐喝に出る」
「そうだ、手としてはその方が上だな」
「しかし、どっちも金魚に愛される手ではないようですな」
「なあに、女などというものは、一度おっ伏せてしまえば、しかたなくその男を愛するようになるもんだ」

「なるほど、そういうもんですかな。先生はそういう経験がもう何度もあるんですか」
「これ、あんまり人聞きの悪いことをいうな」
　それでも恥は心得ているようである。
「といいますと、黙ってやっつけてしまうんですか」
「そうだ、断じて行うのだ」
「人にかくれて、断じて悪いことを行うのは、男として少しひきょうのようですな」
「理屈をいうな。多少ひきょうなこともやらんと、浪人者はなかなか食っていけぬぞ」
「つまり、頭の問題ですな」
「なにッ」
「先生は、人に愛されて世渡りをするのと、人に憎まれて世渡りをするのと、どっちが好きですか」
「そりゃ、人に愛されて世渡りができれば、これに越したことはないにきまっておる」
「どうです、その人に愛されて世渡りをする法を御伝授しましょうか」
「生意気なことをいうな。くちばしの黄色いくせに」
「それがいかんのです。そう頭からかみつくところを、うむ、ぜひ伝授してもらいたいなと、下からおとなしく出てごらんなさい。人にも愛されるし、第一それを伝授してもらえば、先生の一生の徳になるんですがなあ」
　雪太郎は惜しいなあというようにわらっている。
「失礼ながら、おのおの方——」
　うしろから駆けおりてくるような足音が近づいて、ふいに声をかけてきた者がある。
　雪太郎が振りかえってみると、どこかの藩士とも見える二人づれの旅の若侍である。よほどいそいできたと見えて、二人ともじっとりと汗ばんだ顔をしている。
「なにか御用ですかな」
　雪太郎はおっとりと立ち止まった。

「我ら急用にて先をいそぐもの、無礼の段はお許し願いたい。ぶしつけですが、あなた方は道にて、年ごろ十八ばかりの腰元風の娘を見かけませんでしたでしょうか。さっき関所で聞いてきたのですが、若い旅の侍と二人で歩いているそうです」
　そう聞きながら、まじまじとこっちの顔を見ているのは、関所でそのつれの若者の風体までよく聞いてきているに違いない。
「さあ、見かけませんでしたなあ。——ねえ、先生」
　雪太郎は空っとぼけて、三井に同意をうながす。
「うむ」
　三井もうなずいてみせながら、
「その旅の娘というのは、なにかわけがあるのかね」
　と、さっそく好奇心をおこしたらしい。
「事情は言えないが、我々は藩命でその娘を追っています。あなた方は本当に見かけなかったのですな」
「おもしろい。次第によっては、いっしょにさがしてやってもいい」
「いや、それには及びません」
　藩士たちはちらっと顔を見あわせて、うなずきあい、
「失礼いたした。我々はいそぎますので、お先へごめん」
　あいさつをするなり、せかせかと先へ出て、坂を駆けだしていく。
「おい、貴公のお嫁をさがしているようだぞ」
　三井がぎろりと目をむいた。
「どうもそうらしいですな」
「ほうっておいてもいいのか。あの分では、すぐつかまってしまうぞ」
「やむをえんでしょう。今からではどうしてやりようもありませんからな」
　雪太郎は落ち着いている。

「なんだ、貴公急に冷淡になったんだな。そんな男なのか、貴公は」
「先生はまた急にあの娘に同情し出しましたな。それも先生の世渡りの手のうちにあるんですか」
「バカなことを言え。窮鳥ふところに入ればということがある」
「後でしめて食ってしまう。つまり、たなからぼたもちですな」
「本気か、貴様――」
「いや、わしはそんな人に愛されないようなことはしませんが、先生のさっきからの筆法で行くとそうなりそうです。多少のひきょうは断じて行ってしまうんでしょう」
　にやりと雪太郎がわらってみせる。
「おい、冗談も時によりけりだぞ。貴様、頭を自慢するんなら、こんな時いい知恵を出してみろ。おれが感心するような知恵を出してみせたら、おれはその場で貴様の家来になってもいい」
　三井は真顔になっている。さすがに、おぼれる者を目の前に見ては、人として川へ飛びこまずにはいられない気持ちなのだろう。
「わしの良識から割り出してみるに、あの娘さんは頭がいいから、たぶんあの二人にはまだつかまらないと思いますな」
　雪太郎は自信ありげにいう。
「そんなことをいくら貴公が一人できめたって、そうはいかん。この峠は小田原まで一本道だぞ、男の足は女の足より早い。だれが考えたって、これはつかまるのが当然だ。賭をしてもいい」
　三井は断然主張する。
「では、なにを賭けますな、先生は」
「よし、もしあの娘がつかまらないとわかったら、わしはその場から貴公の家来になって、犬馬の労をつくすことにしよう」
「よろしい。もしあの娘さんがつかまったとわかったら、わしは一生先生を師匠として、先生

のためにその日の暮らしをかせぐことにしましょう」
「つまり、わしの食いぶちをかせいでくれるというのか」
「はあ、先生は一生遊んでいていいです」
「おもしろい。武士に二言はないだろうな」
「大丈夫です。先生のほうがどうですか。多少のひきょうはやむをえんなんて食言は、この際禁じますぞ。男の賭ですからな」
「バカをいえ。三井鐘太郎やむなく恐喝を稼業にしてはいるが、まだそこまで魂は腐ってはおらん。――ううむ」
　三井はぎょっとしたように立ち止まって、うめいた。そういう目の前へ、杉木立の土手の小道から、身軽に松江が走りおりてきたからである。
　後からおしゃべり吉が、のこのことおりてくる。
「どうした、松江さん」
「あの、ここでお待ちしておりましたの――」
　そう答えながら、松江の目はそこに唖然として突っ立っている三井を、不審そうにちらっと見る。
「ああ、三井うじはねえ、松江さん、少し考えるところがあって、今日からわしの弟子になりたい、必ず犬馬の労をつくすからと、たった今誓っているところだったんだ。――そうだな、三井」
　雪太郎がわらいながら三井をうながす。
「うむ、約束であってみれば、まことにやむをえん」
　三井は苦い顔をしている。
「では、小田原まではあたくしはまだ雪太郎さまのお嫁なのでございますから、あたくしにも犬馬の労がつくしていただけますの」
　松江は相かわらず人見知りをしない娘である。
「ううむ。――やるなあ、このお嫁も」

いささか豪傑はあっけに取られながら、
「しかし、あんたはいま二人の若侍に追いかけられている。冗談どころじゃあるまい。知っているのか」
と、目をぎろつかせる。
「はあ、ここにかくれて待っていたおかげで、うまく助かりましたの。正直者の頭に神宿るって、本当でございますのね」
にっこりしてみせる松江だ。
「さあ、出かけるよ、松江さん」
峠はまだ半道なのである。
それにしても、あのおしゃべり吉がさっきから黙りこんでいるのはどうしたことか。
「松江さん、吉松はなにかあんたにいたずらをしかけたんじゃないのか」
肩をならべて二、三間先を歩きながら、雪太郎はそっと松江に聞いてみた。
吉松ののどに絞めつけられたような赤く充血した跡が残っている。根はそう悪党とも思えないが、男心でつい女一人と侮り、ふいにいどみかかって、あべこべに柔らの手で絞めを食った。そんなところだろうと雪太郎は見たのだ。
「いいえ、よろしいんですの」
松江はくすりとわらっただけで、そんなことは問題にしていないようだ。一人で大胆な道中をしているだけあって、いい度胸である。
「あの豪傑さん、刀は抜きませんでしたの」
こんどは松江が聞く。
「抜かなかった。江戸までの諸費用を持ってやる約束で、話をつけたんだ」
「では、まるっきりのおおかみさんでもなかったのですね」
「根は松江さんなどより、よっぽど善人かもしれないな」
「あんなことを――」
またしてもくすりとわらいながら、
「あたくし、お願いがございますの」
と、その口の下から澄まして切りこんでくる。

「わしにできることかね」
「雪太郎さまなら、きっとおできになります。お強くて、頭がよくて、正直を愛する立派なお人柄でいらっしゃいますもの」
どうも人の悪い娘だと思いながら、
「まあ、用件をうかがいましょう」
と、雪太郎はわらいながらうながす。
「あの、今夜ごいっしょに旅籠へ泊まらせてくださいませ」
「お嫁としてかね」
「いいえ、それは御迷惑でございましょうから、ほんの名目だけでよろしいのです」
「なるほど――」
「それから、明日の朝は一番立ちにしていただきとうございますの」
「それから――?」
「普通なら明日は藤沢か、戸塚泊まりでございますのね」
「そうです。小田原から藤沢まで八里あまり、戸塚までだと十里だから、男の足でも日が暮れますな」
「程ガ谷までは無理でしょうか」
「それはあなたの足次第です」
「あたくしはきっと歩きます」
「そこでまた名目だけお嫁になって泊まるんですか」
「ええ」
「翌朝はまた一番立ちでしょうな」
「いいえ、それはその時きめさせていただきます」
「なるほど」
松江は、さっき追い越していった追っ手の藩士二人のことについては、まだなんにもいわない、が、この行程は、あの追っ手の足を計算に入れてのことに違いないのだ。
「ずるいなあ、あんたは」
「あら、どうしてでございますの」
「まあ、しょうがない。一度お嫁の約束をした

んだから、あんたを信用して、黙って利用されることにしよう」
　雪太郎はあっさりと長兵衛(ちょうべえ)をきめこむことにした。

それぞれの道

　その日、雪太郎がこの奇妙な三人の道づれといっしょに小田原の城下へ入ったのは、たぶんそうなるだろうと考えていたとおり、もう日が暮れてからであった。
　旅籠(はたご)は俵屋というのにきめて、
「吉松、お前もわしのふところが当てで道づれになったんだろう。江戸までは賄ってやるから、家来になって泊まれ」
　と、おしゃべり吉をわきへ呼んで言ってやると、
「恩にきやす、だんな」
　と、吉松はいそいで頭を下げていた。
「そのかわり、二度とわしのお嫁に手を出してはいかんぞ」
「すんません。どうか、あのお嫁にもだんなから、よくあやまっといておくんなさい」
　神妙に白状したところを見ると、やっぱり吉松は松江にのどを絞めつけられていたに違いない。
　旅籠についた男たちは、座敷がきまるとひとふろ浴びたが、松江は無論ふろへは入らず、着物も着替えようとはしなかった。
　膳(ぜん)が出ると、男たちの膳には銚子(ちょうし)が一本ずつついている。雪太郎が言いつけておいたのだ。
「三井、わしの分は貴公にやろう」
　雪太郎は自分の銚子を三井にわたしてやる。
「貴公は酒はきらいなのか」
「いや、きらいじゃないが、今夜はよす。そのかわり、だんなはしびれ薬が怖いんですね」
　つい口に出たのだろう、吉松は松江のほうを見ながら、思わず首をすくめていた。

　明日は一番立ちの約束なので、夜食がすむと間もなく床をのべさせたが、女中は八畳のほうへ雪太郎と松江の床をのべ、六畳のほうへ三井と吉松の床をしいて、間のふすまをしめ切っていった。
　雪太郎妻松江と宿帳に書いたのだから、女中がそう床を取るのにふしぎはない。
「おい、比良、うまくやれよ」
　松江を先へ寝間へやっておいて、後から雪太郎が立とうとすると、三井がにやりとわらいながら小さな声でいう。
「心得た」
　雪太郎がそう答えて寝間へ入ると、松江はまだ帯も解かずに、きちんと床の上へ座っていた。
「ここをあけておこうかね」
　そのつもりで、今あけて入ったふすまをそのままにして聞くと、
「いいえ、よろしいんですの」
　と、さすがに伏し目になりながら、松江は細い声で答えた。
　雪太郎はいうなりに、ふすまをしめ切り、
「じゃ、お休み。明日は早い」
　と、さっさと寝床へ入る。
「お休みなさいませ」
　松江はていねいに両手をついたようだが、雪太郎はわざともうそっちは見なかった。
　どうやら、松江は着のみ着のまま、帯も解(と)かずに横になったようである。御殿づとめで、宿直(とのい)の腰元はみんなそうするのだから、松江も慣れてはいるだろうが、しかし、今夜のそれには無論別の意味がある。
　――ずるいお嫁さんだ。
　雪太郎はなんだか胸がくすぐったい。
「吉松、気がもめるのう」
　ふすま越しに三井が冷やかすようにいう。
「へえ」
　吉松は一度懲りているから遠慮しているようだが、それだけにこれも気がもめているに違い

ない。
　――人をおだてて利用するなどということは、あまり感心したことではないが、この娘のは切羽詰まってどたん場に立っているんだ。
　雪太郎はそう善意に取って、時にはバカになって人に利用されるのも、男の生きがいの一つかもしれないとうぬぼれているうちに、いつか眠ってしまったようである。
　翌朝は明け六ツ立ちで、しかも程ガ谷泊まりにするにはたっぷり十二里歩かなくてはならないのだから、まったくいそがしい道中であった。
「松江さん、ゆうべはよく眠れたかね」
旅籠を立ってから雪太郎は聞いてみた。
「ええ、おかげさまで。――雪太郎さまは」
「わしはなかなか寝つかれなかった」
「あら、どうしてでございましょう」
「番犬の役目があるんでね。これでなかなか気苦労なもんです」
「でも、一番さきにいびきをおかきになったのは、番犬の雪太郎さまでございましたわ」
　松江がわらい出す。
「そうだったかなあ」
「それから豪傑さんが大きないびきをかき出して、その次が吉松」
「なるほど、おおかみどもがみんないびきをかき出したのを聞いてから、松江さんは安心して眠りについたというわけだな」
「別に悪気があったわけではございませんの」
そんな冗談口はきくが、追っ手のことについては一言も口にしない松江である。
「比良うじ、ゆうべはどうだった。うまくおっ伏せたか」
　松江がそばにいない時、三井がまじめな顔をして聞いた。
「うむ、うまくいった」
「本当か――」
　三井は半信半疑の目を丸くする。
「遠くて近きはというが、ゆうべは手のとどくところにいたんだからな」
「惜しいことをしたなあ。たぶんそうなると思って、ずいぶん眠いのを我慢していたんだが」
「案外苦労性だなあ、貴公も」
「からかっちゃいかん。これが男の本能だ」
「本能は煩悩に通じる」
「しかし、貴公はたしかに偉物だ。一番先にいびきをかき出したのは貴公だからな」
　三井もまたそれを聞いていたらしい。
「ところで、あの娘は昨日の追っ手のことを、なにか貴公に話したか」
「いや、残念ながら、まだそこまでは信用されていないらしいな」
「そうか、よっぽど意地の強い娘なんだな」
　三井にもこれだけはふしぎだったようである。
　その夜、程ガ谷の旅籠についたのは、宵ももうすぎようとするところで、さすがに一行は口をきくのも大儀なほど疲れていた。
　雪太郎は昨夜とおなじように、自分の銚子は三井にゆずり、その席で、
「松江さん、明日も一番立ちかね」
と、念のために松江に聞いてみた。
「あの、今日は御無理な道中をしていただきましたから、明日はゆっくりでよろしゅうございますの」
　さすがに松江も今夜は多少げっそりとしているようだった。
「では、明日は五ツ（八時）立ちときめよう」
　雪太郎が出発の予定をきめる。
「よかろう。品川までは六里半ほどだから、それでも十分明るいうちに江戸へ入れるわけだ」
　三井は軽くなった銚子を何度も振ってみせながら答えていた。
「けど、お嬢さんはまったく足が達者でござんすねえ」
　吉松は感心したようにいう。
「白ばいなみにですか、吉松」

「とんでもねえ、あれだけはあっしのめがね違いで、どうもすんません」

「しかし、こうして一日でも二日でもいっしょに道中をしてくると、なにかふしぎな縁というものを感じるな。いずれ明日は江戸でばらばらになるんだろうが、おたがいに一生忘れられない日記のひとこまになることだけはたしかだな」

純情な雪太郎が、正直にそんな感慨をもらす。

「比良うじと松江どのはさようでござろうて。ところで、今夜はまだお嫁のうちなんでござろうな」

三井がぶしつけに松江に聞く。

「はい、そうさせていただきます」

澄まして答える松江だ。

「やれやれ、もう一晩気がもめることだて」

三井がいうとおり、その夜も二組にわかれて、間のふすまをしめきり、雪太郎は松江と床をならべて寝たが、やっぱり一番先にいびきをかいていたようである。

「雪太郎さま」

松江に呼ばれて雪太郎がふっと目をさますと、疲れているからぐっすり一眠りはしたとみえて、もう外ですずめの声がしていた。

どうやら、松江はちゃんと旅支度をして、まくらもとへ座っているようである。

「どうした、松江さん」

「いいえ、どうぞそのままお横になっていらしてくださいませ。まだ早いのですから」

そういわれても、まさか寝ているわけにはいかない。

「あんた、もう支度をしたのか」

「はい、勝手でございますが、今日は一足お先に立たせていただきたいと存じまして」

「ああ、そうか。つまり、予定の行動なんだね」

「どうか悪くお思いあそばさないで、――あたくし、御恩は一生忘れません」

松江は改めてそこへ両手を仕える。

「いや、そんなことはどうでもいいが、一人で大丈夫かね」

「はい、ここまでまいれば、もう大丈夫でございます」

にっこりわらってみせて、

「あの、これお立てかえいただいたお勘定でございますの。ありがとうございました」

と、帯の間から紙包みを出して前に置く。

「そりゃいかん。箱根からここまではお嫁の約束なんだから、その路銀はわしが持つのが当然なんだ。そんな後味の悪いことをしてはいかん。松江さんはもっと聡明な娘さんのはずだ」

雪太郎はおだやかにたしなめる。

「あたくしが悪うございました。それではお言葉にしたがいます」

松江は赤くなって、金包みをもとの帯の間へおさめる。

「それでいい。あなたにしても、金銭ずくや面白半分でこんな道中をしているはずはない。人にはそれぞれの道がある。その道をおたがいに助けあってこそ、世の中はたのしいのだ。どうか、あなたはあなたの道を、無事にまっすぐ進んでください」

「そんな、そんなにおっしゃられると、あたくし悲しくなります」

松江が急にべそをかきそうな顔になったので、

「さあ、玄関まで送ってあげよう。あんた一人で立って怪しまれるといけない」

と、雪太郎は気軽に立ち上がる。

「すみません」

松江はひっそりとうなだれながら、廊下へ出た。

いまやっと夜が明けたばかりらしく、ちょうど番頭が門口の大戸をあけているところだった。

「番頭、都合で家内だけ一足先に立つから、履物を取ってやってくれぬか」

「お早うございます。それでしたら、だんなさま、もう朝のお支度はできていると思いますが」
「いや、それは食事をしてすぐ歩くと、腹がいたくなるほうだから」
「さようでございますか。そういっておいていただけば、いつでもお支度はしたんでございますがねえ」
　番頭はそんなことをいいながら、わらじのひもを手伝ってくれる。
「では、あの、お先へまいります」
　土間へ立った松江は、番頭の手前、余計なことは口に出せないので、ただじっとこっちを見あげる。
「気をつけていきない。夕方までには追いつけるはずだから」
「はい」
　ていねいに会釈をすると、松江は番頭のあけてくれた油障子の間から、すっと往来へ出ていった。
　街道はまだ日の出前で、今朝もしっとりと水霜がおりているようである。
　――お嫁さん、とうとう逃げ出してしまった。
　今こうして別れて、一生にもう一度会う時があるものやらないものやら、さすがに雪太郎の胸に一抹の感傷がうずく。
「比良うじ、あのお嫁、逃げ出したようだな」
　部屋へ引きかえしてくると、隣から三井が声をかけてきた。
「目がさめていたのか」
「いや、話し声で目がさめた。しめたと思ったら、別れ話だった」
「そうか、それはあいにくだったな」
「だんな、胴巻きは大丈夫なんでしょうね」
　吉松が心配そうに聞く。
「うむ。それは大丈夫だ」
「しかしなあ、比良うじ、あのお嫁一人で、本当に大丈夫なのかなあ」
「たぶん、大丈夫なんだろう」

「それにしても、今になってどうして一人で立つ気になったのかなあ」
　三井はふしぎでたまらぬらしい。
「比良うじ、あの娘は追っ手のことが少しも心配にならんのかなあ」
　三井がまたしてもそれを言い出したのは、今日は男たちばかり三人旅になって、ゆっくり程ガ谷の旅籠を立ってからであった。
　街道は今日もからりと晴れた秋日和である。
「いや、昨日からあの娘はそのことばかり考えていたらしいな」
「そうかなあ。それなら、なぜ今朝一人であんな早立ちをしたんだ。もし追っ手にぶつかったら、どうしようもないじゃないか」
「それはちゃんと考えの中に入っているんだろう。おととい我々が追っ手にぶつかったのは、箱根の下り道だった」
「うむ」
「あの追っ手は、娘を見かけたらつかまえろ、あるいは切ってしまえと命令されているが、それより重大なのは、娘より半日でも早く江戸へ万全の処置を取れと命令されてきているんだろう。だから、箱根の関所で聞いて、もう娘は近いとわかったが、強いて途中で待ち伏せをかけようともせずに江戸へ急いだのだ」
「なるほど」
「時刻からいって、あの日我々は小田原泊まりだったが、追っ手はたぶん四里先へ出て大磯泊まりにしている。そして、追っ手は完全に娘を追い越したという自信ができた」
「すると、追っ手はゆうべのうちに江戸へ走ったということになるのか」
「いや、大磯から十二里歩いて、川崎泊まりだ。六郷の渡しは暮れ六ツで終わるから、その先へは出られない」
「そうだとしても、川崎から日本橋までは四里半、追っ手は昼まえには江戸藩邸へ入る。それから手段をかまえて大森あたりへ網を張るとし

ても、十分あの金魚を生け捕りにできるわけだぞ」
「と、あの娘もちゃんと考えている。頭のいい金魚だからな」
「皮肉をいうな。どうせわしは頭の悪いおおかみだ」
三井はぷっとふくれっ面をする。
「まあ、そうひがむな。程ガ谷から川崎へは四里、追っ手が江戸の藩邸へ着くころに、娘は川崎へ着く。川崎から六郷はわたらずに、川ぞいにさかのぼって、多摩川の渡しをわたれば、目黒から江戸へ入れる」
「なるほど、考えたもんだなあ」
三井は正直に感心しながら、
「しかし、あの娘は一体どんな秘密を持っているんだろう」
と、こんどはそれが気になってきたようだ。
「それはわからんな」
「貴公のいい頭をもってしてもわからんか」
「うむ、わからん。しかし、だれしも人の秘密というものは知りたがるのが人情だ。そこを考えて、今朝あの娘は我々と別れる気になった。いっしょに江戸へ入ると、屋敷まで後をつけられる心配があるからだ」
「つまり、貴公はあの娘にいいように利用されたことになるぞ」
「しかも、散々おだてられてな」
「考えてみると、ちょいと小面憎いな。貴公はついにお嫁の手一つ握らずじまいなんだろう」
「うむ、わしにはギヤマンの金魚がついているんでな、ほかの金魚の手を握ってやるわけにはいかんのだ」
雪太郎が負け惜しみのようなことを言い出す。
「そういえば、貴公は頭がいいくせに、どうして浪人なんかしたんだ。やっぱり、そのギヤマンの金魚というのに関係があるのか」
男づれの道中は気が楽だから、つい道々話が

はずむ。
「うむ。関係がある」
「金魚っていうと、だんな、女ですね」
おしゃべり吉がうしろから口を入れてきた。
「うむ、女だ」
「お安くねえなあ。お腰元でしょう、相手っていうのは。殿中で手かなんか握りあっていちゃいちゃしていた、そこへ運悪く赤っ面が通りかかって、やあ不義者を見つけたぞと、わざと大声を立てたんで、もうしょうがない、不義はお家の御法度だから、殿さま直々のお手討ちときまる」
「吉松、お前見ていたのか」
雪太郎がわらいながら聞く。
「見ていやしたとも。こう見えても、あっしは役者ですからね、そういう舞台は何度もつとめていまさ」
「おかしいなあ。芝居でやると、そんなところへねずみが出てくるのか」
「なんですって――」
「まさか、いくら芝居でも、御殿へ馬は出てこないだろうからな」
「けっ、口が悪いねえ、だんなは」
「しかし、貴公のいうギヤマンの金魚ってのは腰元なのかね」
三井がまじめな顔をして聞く。
「いや、腰元じゃない。腰元の金魚は、ギヤマンの中へは飼わない。精々、桶か瓶の中だ」
「そうか。すると、どこかのお嬢さまということになるのか」
「うむ、お嬢さまには違いないが、大名の娘だから、お姫さまと呼ぶようだな」
「おいおい、正気か、貴公」
「あいにく正気だったんで、こうして浪人しなくちゃならん身の上とは相なった」
「わかりやしたよ、だんな」
またしても吉松がうしろから口を出す。
「だんなはお姫さまに懸想して、及ばぬこいの

滝のぼりとは承知しながら、煩悩の犬追えども去らずで、文ってやつをつけたんでしょう。お姫さまがそれをおとっつぁんの大名に見せたもんだから、本来なら手討ちにしてもあきたらないやつだが、先祖に手柄かなにかあるんで、その功に免じ、たぶん気が狂ってのことだろうということにして、あほう払いですませてくれた。つまり、家老のうちにさばけた出来物がいたんで、命だけは助かった。どうでげす、こんどは当たったでしょう」
「半分当たったなあ」
「あれえ、たった半分ですか。どこの半分が当たってるんです」
「わしは別に文などつけなかった」
「なるほど——」
「本当は、お姫さまのほうが、雪太郎を好きですといった」
「おやおや、まるっきり逆ですね」
「うむ、逆だ。家老のほうが、しようがない、お前身をひいてくれぬかと、わしにたのんだ」
「あれあれ、それじゃまるっきりあべこべで、一つも当たっちゃいやせんね」
「いや、浪人したことだけは、ぴたりと当たっている」
「よう言いまへんわ。とてもだんなにゃかなわねえ」
　おしゃべり吉は、さじを投げてしまったようである。
「なるほど、大名の姫君ならたしかにギヤマン入りの金魚ということになるが、しかし、その金魚が本当に、雪太郎は好きだなどといったのか」
　三井豪傑は小首をかしげている。
「うむ、いった」
「すごいのう。一体、どこでそんなことをいったんだ」
　大名の姫君ともなれば、絶対に一人でなどはいない。いつも必ず侍女がついているはずだから、到底好きだなどと、そんなすごいことは口にはできないはずである。
「わしは十七の時江戸へ修業に出された。築地の中屋敷から、学問の師と、剣術の道場へかよった。そこに金魚の姫君が御生母と住まわれていたんだ」
「だいぶ古い話だな」
「うむ、八年前だ。その時金魚姫は八歳だったが、今から考えてみると、聖人の教えにも男女七歳にして席をおなじくするなということがある。すでに金魚姫は八歳だった。にもかかわらず、心やす立てに席をおなじくしたのが、わが生涯の誤りだったんだな」
「なんだ、八つの時もう色気がついていたのか、その金魚は」
「早合点をしてはいかん。まず遠因から説きおこしたわけだ」
「そうだろうなあ。八歳では少し早すぎる」
「金魚姫の御生母は、わしの家と多少引っかかりになっているので、わしはよく奥へごきげんうかがいに出て、金魚姫の遊び相手になった」
「どんなことをして遊んだんだ」
「昔話をしてやったり、鬼ごっこをしたり」
「かくれんぼはしなかったな」
「それもやった」
「貴公、腰元金魚と二人で、かくれるほうへばかりまわったんだろう。白状しろ、ずるいやつだ」
「あいにく、わしは娘とさえ見ればおっ伏せたがる俗人とは少し人間が違う」
「なんだ、逆ねじか」
　三井は照れかくしに、あははと高笑いをする。
「年移り月かわってここに七年——」
「つまり、去年のことだな」
「うむ、去年の秋、わしは金魚姫の兄君にあたる若殿のお相手役をつとめていた」
「貴公は秀才らしいからな。しかも、家柄も悪

くない」
「金魚姫は十五歳になられて、たまたま御縁組みの話が持ちあがった。先方はしかるべき大名の御当主で、年は一つお下の十四歳、まことに良縁だというので、御主君、御生母はじめ、老臣ども一同大乗り気だったが、肝心の金魚姫がどうしてもいやだと仰せられる」
「なるほど――」
「御生母をおなじくする実の妹君のことだから、若殿がたいそう心配されて、雪、お前中屋敷へまいって、なぜこの縁組みが気に入らないのか、よく聞いてまいれ、お前なら昔なじみだから話しいいかもしれぬと、仰せつけられたのだ」
　街道はやがて川崎が近くなってくる。
「それで、金魚姫はその理由を白状したかね、どうしてお輿入れがいやなのか」
　どうやらこの話はまるっきりうそでもないらしいと、三井はだんだん本気になってきたようだ。
「うむ、ついに白状した。ただし、条件つきでな――」
「条件つきというと――」
「だれにも口外しなければ、雪にだけは話してもいいというのだ。しかし、それでは困る。わしは若殿の申しつけで使者に立っているんだからな」
「貴公、バカッ正直にそう申し上げたのか」
「うむ、復命しなければ役目が立たん」
「困った堅人だな。そういう時は、方便というやつを使うのだ。だれにも言わないからお話しなさいとな。それでどうした」
「それから庭へお供をして、築山のあずまやへ行った。そこでやっと白状した。雪のところへならお嫁に行くというんだ」
「なるほど、すごいことになったなあ」
「それはできません。あなたは姫君、わしは家来ですというと、では、どこへもお輿入れはし

ませんというのだ。しようがない、そこでわしは方便というやつを使った」
「どんな方便を使ったね」
「来世ということを説いたのだ。今生では今生にしたがい、来世を約束しましょうとな」
「納得したか」
「考えておきますと、涙をためていた」
「十五の金魚にしては、すこしおませだな」
　三井はちゃかすように言ってから、
「純情愛すべし、じいんと胸へくるものがある」
　と、天を仰いでいた。
　――こいつ、案外うれしい男だなあ。
　と、雪太郎は三井をちょいと見なおす。
「まさか、若殿には本当のことは復命できぬ。真意ははっきりわかりませんが、よく話はしてまいりましたといっておいた。それから、国のおやじさまのところへ手紙を書いて、相談したいことがあるからわしを一度国もとへ呼びもどしてくれとたのんだ」
「なるほど――」
「国へ帰って、実はこれこれだから、わしは藩にいないほうがいい、勘当してくださいというと、それよりしようがあるまいと、おやじさまも同意で勘当ということになった。気の毒なのは、なんにも知らない母上と弟だった」
「さもありなん。それで、金魚姫のほうはどうした」
「わしは京都で聞いたのだが、この三月めでたくお輿入れをして、婿君はこの秋、国もとから参覲出府する、それを待って祝言の式をあげることになっているそうだ」
「聞くも涙、語るも涙というやつだな」
「いや、もう昔の話だ。さて、金魚のほうが片づいたとなると、わしも安住の地を求めなければならん。どうせ住むならやっぱり江戸が恋しいので、こうして出てきたというわけだ」
「すると、貴公は一生浪人暮らしということに

なるのか」

「まずそうだ」

「折を見て帰参というわけにはいかんのか」

「そうはいかぬ」

「やれやれ、かわいそうに」

三井が同情するようにいう。

「三井先生――」

うしろからおしゃべり吉が呼んだ。

「なんだ」

「それはかわいそうだなあってのは、だんなのほうではなくて、三井さんのほうじゃありやせんか」

「なにッ」

「雪だんなのほうはおなじ御浪人でも大名浪人に見えるが、三井さんのほうは柄からいってもかわいそうな食い詰め浪人――」

「黙らんか、下郎。わしのほうは食い詰め浪人だから、これ以上なり下がりようはないが、大名浪人が食い詰め浪人になると、苦労が骨身にこたえる。だから気の毒なもんだなあと、同情したんだ。下司の知恵はどこまでいっても下司、大鵬の志はわからんとみえる」

「わかってまさ、大砲はどかあん」

「やめておけ、話にもなんにもならんやつだ」

「三井うじはどうして食い詰め浪人になり下がったんだね。出生は江戸と聞いたようだが」

雪太郎がわらいながら聞く。

「わしのはなあ、貴公などと違って、はじめから家柄がひどくよくない。代々十石二人扶持という情けない微禄の家へ生まれた。よし、おれの代に出世してやれと思ってな、十三歳の時から剣を学ぶこと十年。これでも藩中第一の腕になった」

「なるほど――」

「しかるにだ、一向に人材登庸はしてくれぬ。微禄には惜しい腕だと、かえって変な感心をしてくれるだけだ。賄賂が持っていける身分ではないし、第一わしにはおべっかというものが使

えぬ。これがいかんのだな。ついに上役とけんかをして、こんなあきめくらばかりそろっている藩にいたってしょうがない、もっと話のわかる大名に仕えて出世してやれと、いさぎよく自分から十石二人扶持をなげうったんだ」

「惜しいことをしたなあ」

こんどは雪太郎が同情する。

「うん、まったく惜しいことをした。もう五年も浪人をして、諸国をまわっているが、講釈に出てくるような話のわかる大名なんて、どこにも一人もおらん。たとえ十石二人扶持でも、辛抱さえしていれば、おれ一代でなく、孫子の代まで尾羽打ち枯らさずにすむんだからな。と気がついたのは、やっとこのごろのことだ」

「すると、ずいぶん苦労しているわけだな」

「苦労したとも。浪人なんてやつは、江戸にばかりだって、秋の落ち葉ほどころがっている。一軒の道場の主とか、寺子の指南とかで身が立てば、浪人も一流だが、後はみん楊枝削りとか、傘張りの内職でやっとかゆをすすっている連中ばかりだ。もっとなり下がると、わしのように毒虫稼業をやって歩くか、博徒の用心棒だ。最下等が辻切り強盗武士のならいで、こうなると明日の命があぶなくなる。――どうだ、貴公は何流品ぐらいのところをねらうな」

「ありがとう、よくわかった。まあ、ゆっくり考えることにしよう」

「それがいい。いつまでも金魚の夢などを見ておってはいかん。――時に、比良うじ、少し腹がすいてきたな」

その鼻っ先へ、ちょうどここは川崎の町へかかって、

「助けてえ、兄さん」

いきなり、金魚のような派手な女が、飯屋から飛び出してきて、雪太郎にしがみついた。

女は年ごろ二十二、三、一見江戸の女芸人とも見えるこいきな身なりで、品にこそ乏しいが、ぱっと人目につく。金魚というよりは、むしろ

ひごいにもたとえたい水ぎわ立った年増女だ。
「どうした、ねえさん」
腕へしがみつかれたのは雪太郎だが、とっさに声をかけたのは三井のほうで、――しかし、そんなことは聞くまでもなく、
「こらッ、女、逃げるか」
おなじ飯屋からすごい勢いで女を追って飛び出してきたのは、紺絣の着物に黒小倉の袴という当時としてはちょいと珍しい剣客風をした二十八、九の気の荒っぽそうな男である。
「おい、貴公、その女と知り合いか」
いきなり女にしがみつかれた雪太郎がびっくりしていると、紺絣は血相を変えながら突っかかってきた。
「まあお待ちなさい。そう頭からかみついてはいけません」
「黙れッ、その女はきんちゃく切り、女すりだぞ。知っているのか、貴様」
「違うんです、兄さん、人違いなんです」
女が困ったように訴える。
「黙れ黙れッ、わしは人違いをするほどまだ耄碌はせん。この春、貴様は深川で、たしかにわしの紙入れをすった女に違いないんだ」
よっぽど悔しかったとみえて、紺絣はがんがんわめき立てる。
「すると、事件はこの春のことなんですな」
「なにッ」
「いまこの人が、貴公のふところへ手をかけたというのではないですね」
「うぬッ、貴様などに用はない。その女をよこせ」
紺絣はいきり乱暴にもたくましい手を出して、女のえり髪を引っつかもうとする。
雪太郎が素早く女をかばって一歩さがると、三井がひょいとその前へ出た。
「じゃまだ、どけ」
紺絣が三井を突きのけようとする。
「乱暴をしちゃいかん」

三井はぬっと立ちはだかったまま、びくともしない。
「うぬッ、やる気だな」
三井より体は一まわり小さいが、二人ともどっちもいえない大男のほうで、またすごい面構えという点でも甲乙なしだが、精悍という点では身なりのきちんとしている紺絣のほうが一枚上らしい。とっさに一足さがって一刀の柄に手をかける。
「待てッ」
三井が一喝した。
「おれは文句はきらいだ。腕で来い」
「六郷の河原へ行こう。ここでは往来のものが迷惑する」
ここは川崎の宿の真ん中あたりだから、もう一杯の人だかりなのだ。
「逃げる気か、貴様」
「行ってみればわかる」
「よし、来い」
紺絣が殺気立って歩き出そうとすると、
「大平、どうしたのか」
飯屋の軒下から、まだ四十前とも見える黒々とした総髪黒羽二重の紋服、羽織、緞子の野袴といういでたちの、どう見ても一流の師範といった立派な武士が、鷹揚に声をかけてきた。
「先生、ちょっと六郷河原まで行ってきます。武士の意地で、こうなったら後へひけません」
大平と呼ばれた紺絣は、昂然と総髪に告げる。
「相変わらず一徹だのう」
先生は引きとめるかと思いのほか、軽くわらって、
「そちらの御仁、やはり後へはひけぬほうかな」
と、まるでけしかけるように三井にいう。
「無論――」
三井はあっさりと答えて、
「比良うじ、どこかで待っていてくれ」
と、雪太郎のほうを向く。

「いや、わしもいっしょに行く」
「そうか」
三井はさっさと六郷の方へ歩き出す。
大平紺絣が負けずに歩き出した。
雪太郎がその後を追うと、女が肩をならべてついてくる。
「ねえさん、今のうち消えてしまったらどうだね」
雪太郎がそっとすすめてみると、
「だんな、そいつはだめです。後からあの先生が門弟三人をつれてついてきやす」
と、うしろから吉松が教えてくれた。
「すみません、兄さん、とんだことになってしまって」
さすがに女はすまなそうにいう。
「まあ、しようがなかろう。ねえさんがつかまりいいように、ちょうどあの飯屋の前へさしかかったのが運のつきと覚悟するほかはない」
「おっしゃるのねえ、兄さんは」
女はふふふとわらって、
「でも、あのお連れの浪人さん、大丈夫かしら。大平鉄之進てやつは、相当に強いんですって」
と、ちょっと心配そうな顔をする。
「あんた大平って男を知っているのか」
「知っています。悪いやつです」
「まさか、この春本当にその悪いやつのふところをねらったんじゃないだろうね」
雪太郎は念のために聞いてみる。
「兄さんは若だんな育ちですね。御身分がいいんでしょう」
「いや、こう見えても浪人者なんだ」
「まだ浪人さんのなりたてでしょう」
「そのとおりだ」
「じゃ、教えてあげますけれど、うしろを振りかえっちゃいけませんよ。あの大平の先生の大俵玄蕃ってのは、大山師なんです」
「山師――?」
「飯田町の中坂下に孔明館て町道場を持っているんですけど、腕はあの師範代の大平のほうが強いんだっていううわさがあるくらいで、本当は口入れ屋でもうけているやつなんです」
「どんなことをするんだね、口入れ屋って」
「つまりね、浪人さんはだれだってみんな仕官したいでしょう。その弱みをねらって、兄さんのようなお金のある浪人さんに、いい仕官の口がある、世話をしようと、うまく持ちかけて、貴公は人品がいいから、水戸家がいいだろう、十両もつかえばわしの顔できっとなんとかなると引きうけるんです。あの押し出しだから、兄さんだってちょいと十両ぐらいは出したくなるでしょう」
いんちき口入れ屋を世渡りの種にしているという大俵玄蕃もふしぎな存在だが、そんな話を平気でしてくれるこの年増女も、雪太郎にはちょっと正体がつかみにくい。
「そういえば、あの先生の顔は、どこかずるいきつねに似ているな」
「うまいうまい、兄さん。あの目のつりあがっているところなど、たしかにきつねつきね。すると、その玄蕃ぎつねとなれあいで、気の毒な浪人さんの生き血を吸っている大平鉄之進てやつは、色が黒いから古だぬきがいいかしら」
女はうれしそうにわらい出す。
「そう無理にあだ名をこしらえなくてもいい」
「無理じゃないわ。あの鉄だぬきときたら、玄蕃ぎつねに負けない悪党なんだもの」
「そんなに悪いやつか」
「ええ、悪いやつですとも。うちの近所に堅田雁之助さんという若い浪人さんがいて、この春それで玄蕃ぎつねに十両かたり取られてしまったんです。ちゃんと水戸家の重役に会わせてくれたというんですけれどね、それがいんちきなんだかどうかわかりゃしない。それっきり音さたなしだもんだから、堅田さんが玄蕃ぎつねの道場へ催促に行くと、あの鉄だぬきが出てきて、仕官なんてそうあわてたってしようがないと、

鼻であしらって、しまいにはけんか腰に出てくるんですって」
「つまり、鉄だぬきは追っ払い役なんだな」
「そうなんです。堅田さんにすれば、浪人の身でやっとこしらえた十両なんです。わしがうかつであったのだから、しようがないと御当人はわらっているんですが、おかみさんがかわいそうです。それからは、せっせと人仕事をして、御亭主を養っているんですものね」
「そうか、気の毒だなあ」
「その話を聞いて、あたしあんまりしゃくにさわるから、一度あの鉄だぬきの野郎のふところをはたいてやったんです」
「ふところをはたく——」
「あらあら、自分でしゃべっちまったわ。でもねえ、兄さん、あたしはそれを稼業にしているんじゃありません。あたしは南蛮お妻っていう手品師で、指先が器用なもんだから、あの時は堅田さんの敵討ちにやっただけなんです。だれにも黙ってて下さいね、兄さん」
けろりとしてわらっているお妻だ。
「おどろいたなあ。わしは正直を愛する男だから、まあ信用しておく」
「まあだなんて、いやですわ。本当に信用してくれなくちゃ」
「よし、本当に信用しておこう」
「あたしが時々やるのは、きんちゃく切りのふところからはたいた紙入れをすりかえして、すられた人にかえしておく時だけなんです。ですから、あだ名が春つばめのお妻、つばめは春になると元の巣へ帰るでしょ」
「なかなか風流っ気があるんだねえ。しかし、そんなまねをして、かえってかえされた人が姐御をすりだと間違えやしないかね」
「大丈夫よ、すりに物をすられるようなぼんやりした人は、黙ってもとのふところへかえしておいてやっても、案外気がつかないもんだから」
これはまた大した女に腕へしがみつかれたものである。

「なによ、急にふところなんか押さえて」
どすんとひじで腕を小突かれて、雪太郎は思わず苦笑する。
「三井はとんだとばっちりを食ったことになるんだな」
たとえどんな理由があるにもせよ、この女が鉄だぬきのふところをすったことがあるとすれば、怒るのは当然なのだから、いざ掛け合いとなると、ちょっと事が面倒になる。
「かまやしません。あんなやつ、たたっ切ってしまったほうが、世の中の人が助かります」
「そりゃまあそうだが——」
「うしろから玄蕃ぎつねのやつ、若い旅の浪人さんを二人つれているでしょう」
「うむ」
「あの二人も仕官の口を世話してやろうといわれて、ついつられてしまったに違いないんです。あの人たちだって、江戸へ出ていこうと思って出てきたくらいだから、まだふところに五両や八両は持っているでしょうからね」
「なるほど——」
「兄さんは比良さんていうんですか」
「うむ、比良雪太郎という、やっぱり浪人者だ」
「三井うじは文なしらしいけれど、雪太郎さんはどっさりお金を持っているんでしょ」
にっとわらってみせるお妻だ。
「どっさりというほどでもないよ」
「御謙遜ね。百両も持っていればどっさりのほうです。玄蕃ぎつねから見れば大かもですからね。いまにうまくきっかけをつけてくるから、見ていてごらんなさい」
「そうかなあ」
「だまされちゃだめよ、兄さん」
「しかし、いまけんかの最中なんだから、きっかけのつけようがないだろう」
「まあ見ていらっしゃいよ、そこがあいつらの稼業なんですから」

「よし、それが本当なら、わしに考えがある」
「どんな考え——」
「できれば、あの二人の若い浪人を助けてやりたいな」
「偉いわ。話せるわねえ、兄さんは。あたしそういうおとこ気のある人、大好きなんです」
「おだてちゃいけない」
「いいえ、本当なの。しっかりおやんなさいね、あたしがついていてあげるから」
　この女もまたひどく変わっているようである。先を歩いていく三井鐘太郎と大平鉄之進は、どっちも負けずに颯爽と土手を越えて、六郷河原へおりていく。
　つづいて、雪太郎とお妻が土手へのぼった。川上のほうの空にもう半分雪をかぶった富士がくっきりと見え、広い河原の真ん中を六郷の清流が秋の日に輝いて、長々と海へ流れていく。いいながめだ。
　うしろからおしゃべり吉が、さすがに心配そうな顔でつづき、少し離れて堂々たる風采の大俵玄蕃ぎつねが、なるほど浪人らしい若い旅の男を二人つれて、なにか話しながら土手へかかってくる。
　この道はすぐそこが六郷の渡しだから、後から何人か渡しへいそぐ人々がつづいているようだ。
「おい、ここでいいだろう」
　河原へおりた大平は、道をよけて少し川下へ行ったところで立ち止まり、くるりと三井のほうを向いた。相かわらずすごい形相である。
　大平鉄之進は下げ緒を取ってたすきにかけ、手ぬぐいをはち巻きにして、たちまち支度ができあがる。
　三井も負けてはいなかった。おなじように下げ緒をたすきにして、手ぬぐいではち巻きをしめ、これは着流しのすそを高々と、じんじんばしょりにする。
「来いッ」

　と、大平だぬき。
「行くぞ」
　と、三井豪傑。
　まるで闘犬と闘犬とがかみあうように、さほど理由もなく、問答ぬきにして、
「えいっ」
「とうっ」
　もうさっと抜きあわせた。相青眼の二条の白刃が、秋日に光る土手のすすきの穂よりも白い。
「三井さん、しっかり」
　春つばめのお妻が、思わず雪太郎の腕につかまって黄色い金切り声をあげた。
　二人の若い浪人をしたがえて、向こう側へまわった大俵玄蕃が、さすがにじっと目を光らせながら、三井の腕前を見ているようだ。
「若だんな、三井さん大丈夫でしょうかねえ」
　吉松が三井のことを心配する。二日でも三日でもいっしょに旅をしたのだから、それだけ人情がうつるのだろう。
「大丈夫そうだな」
　雪太郎にはすぐそれがわかった。どっちも相当の腕で、まず互角、ひょっとすると三井のほうが少し上かもしれないが、三井は自分のほうから切って出る意志はないようだし、大平のほうもただかっこうでおどかしているだけで、これも本当に勝負を決する気はないようだ。
　つまり、両方ともいまに仲裁が入るだろうと見て、形だけつけているのである。いってみれば、二人とも浪人ずれがしているから、言わず語らずのうちにそんな人を食ったまねができるのだろう。
「えいっ」
「とうっ」
　じりじりと一人が間合いを詰めて出れば、一人のほうがそれだけさがって、また押しかえす。
　——どうせ、玄蕃ぎつねがなんとかするだろう。
　そう思ったから、雪太郎は黙って見ていた。

渡し場の近くだから、だんだん人立ちがしてくる。

「両人、待たっしゃい」

果たして、玄蕃ぎつねがつかつかと二人の前へ出て、双方へ声をかけた。

「大平、引け。――そちらの御仁も、まずお控えなさい。大俵玄蕃、仲裁をいたす」

堂々たる風采だから、見た目にそれだけの貫禄はある。

「ふうんだ、もう少し待っていれば、三井さんのほうが勝っていたのに」

お妻にも勘でそれがわかるとみえて、不平そうに鼻を鳴らしていた。

「御仲裁くださるそうだが、どう仲裁していただけるのですな」

三井は刀をひいて、ゆうゆうと大俵のほうを向く。身なりは悪いが、颯爽たる態度だ。

「わしは江戸飯田町中坂下に道場をひらいて、天流の指南をしている大俵玄蕃です」

玄蕃が重々しく名乗りをあげた。

「御高名はうけたまわっています。拙者は江戸浪人三井鐘太郎藤原の吉秀です」

臆面もなく三井が藤原姓までかつぎ出す。

「事の起こりはあれなる女からのようだが、見うけるところ、貴公はなかなか大した腕前だ。竜虎争えばいずれかが傷つくのたとえで、たかが女一人のためにまことに惜しい、どうだな、今日のところはあの女のことは不問に付すということにして、双方刀をおさめてくれぬか」

玄蕃が穏便な仲裁の条件を出す。

「結構です。わしはなにも事を好む男ではありません。そっちがそれでよければ、いかにも刀をおさめましょう」

三井はあっさりと納得する。

「大平、お前も納得してくれるだろうな」

「すると、先生、あの女をつかまえて旧悪をただすわけにはいかなくするんですか」

鉄之進は大いに不服のようである。

「うむ、今日は我慢して、一切を水に流すことにせい」

「残念ですなあ。この春、深川でわしの紙入れをすったのは、たしかにあの女に違いないんですがなあ」

「それをここでいうと、また角が立つ。まあ我慢せい」

玄蕃はなにか胸に一物あるらしく、我慢せいの一点張りだ。

「先生がそうおっしゃるなら、しようがありません。今日のところは我慢します」

「うむ、それがいい」

玄蕃ぎつねは大きくうなずいて、

「そこで、三井うじ、話がそう丸くおさまった上は、仲裁役としてわしが一盞献じたい。貴公ばかりでなく、貴公の連れの仁も、あの婦人も改めて招待しよう。貴公から誘ってみてくれぬか」

と、もっともらしく切り出す。

ねらいは、ふところの重い雪太郎と、あの年増盛りの美女にあるとは、三井にもすぐわかる。

「せっかくですが、先生、我々はあいにく子細あって江戸へいそぐ者です。和解の宴はいずれ江戸に落ち着きましてから、改めてお招きいただくとして、今日のところはこれで失礼させていただきます」

三井はきっぱりといって一礼し、刀を鞘へおさめて、たすきはち巻きを取る。

「それは残念だのう」

玄蕃は苦い顔をしたが、いそぎの旅だというものを、無理に引きとめる理由はない。

「では、こういたそう。我々も江戸へ帰る道なのだから、そこまで同行しながら、いろいろ話をうかがうことにしよう」

「それはかまわんですが、今も申すとおり我々は道をいそいでいます。その点失礼がありましても、どうぞ御寛容にあずかりたい」

そうことわっておいて、三井はもうさっさと

雪太郎たちのほうへ進み、
「さあ、比良うじ、とんだことで道草を食ってしまった。いそいだりいそいだり」
と、先に立ってどんどん渡し場のほうへいそぎ出す。
「豪傑さん、どうもありがとう」
お妻が雪太郎のたもとをつかんで歩きながら、三井の背中へ礼をいう。
「礼なんかどっちでもいいから、そのうちの若だんなにいたずらだけはしてくれるなよ、姐御」
三井がうしろを振りかえって小声でいう。三井もまたお妻の素姓を見ぬいているらしい。
「おっしゃるわ、この人」
お妻は肩をすぼめて、くすりとわらっていた。
雪太郎の一行は、ちょうど今出ようとしている渡し舟へ、どかどかと乗りこんでしまった。
大俵玄蕃たちはまだ向こうでなにか話し合っているようである。
「三井さん、あの連中ついてきやせんね」
おしゃべり吉がそっちを見ながら言った。
「勝手にさせておくさ。我々の知ったことじゃない」
三井はそっちを見ようともしない。
「ところがねえ、三井さん、あの玄蕃ぎつねはなかなか執念深いって話だから、そうあっさり若だんなをあきらめやしないでしょうよ」
お妻は舷を手ぬぐいで払って雪太郎を腰かけさせ、自分もその隣へ席を取りながらいう。
「なるほど、若だんなに仕官をすすめるという手があるな」
「あら、知ってるの、三井さんも」
「うむ、会うのは初めてだが、話には聞いている」
「それだけ悪名が高いわけね」
「姐御とおなじさ」
「おや、あたしの御高名も御存じでいてくれたんですか」
「いや、まだ知らないが、たぶんそうだろうと

見た。蛇の道はへびでな」
けろりとしている三井だ。
「わかったわ。あんたのは座りこみでしょ」
お妻がくすりとわらう。
「人聞きの悪いことをいうな。こう見えても、わしは三井鐘太郎藤原の吉秀だ」
「こんな目くされ金でこの場が立てるかと、店中をじろじろにらみまわす。あんたなら相当にらみがきくわ」
臆面もない二人の話に、乗り合いの者はなるべく遠く離れて、みんな聞き耳を立てているようだ。
渡し舟はもう中流へかかっている。
「三井うじ、その藤原の吉秀というのは、なにかいわれがあるのかね」
それを振りまわすのはこれで二度目だから、雪太郎はわらいながら聞いた。
「藤原は源平藤橘の藤原だ。吉秀は太閤秀吉をさかさにした。せめて日本の半分ぐらいはわがものにしたいと思ってね。どうだ、立派だろう、三井鐘太郎藤原の吉秀」
「あきれた人ねえ、あんたって人は。どこで若だんなに食いついたの。はじめから道づれって柄じゃないわ」
「さすがに姐御でげすなあ、目が高い」
にやにやと吉松がわらい出す。
「役者は黙っておれ」
「あら、この兄さん役者なの」
「うむ、中村鶴蔵の弟子で中村吉松、当たり役はねずみだ」
雪太郎が説明してやる。
「ああ、床下で鉄扇をくらう先代萩のねずみ」
「違う違う。御殿の不義の場を、のぞいて歩くべいすけねずみだ」
と三井。
「あら、御殿に不義の場なんてのがあるかしら」
「あるある、この若だんなが地でいったんだ」
「なんですって——」

「話せば長いことながら――」
三井がちょいと見得を切った時、とんと舟が六郷側の桟橋へ着いていた。
「お中入りぃ」
と、吉松がすっとんきょうな声をあげる。
川崎で中食を取りそこなってしまった一行は、六郷の一膳飯屋で昼食をとった。
その間に渡しを一つおくれた玄蕃ぎつね組は、ここで百両の大かもが羽根を休めていると知ってか知らずにか、さっさと前を通りぬけていってしまった。
「気がつかなかったようね」
お妻がぺろりと赤い舌を出してみせる。
「なあに、途中で気がつくだろう」
どうもただではすみそうもないと見ている雪太郎である。
「あっちも稼業だからな」
三井もその気でいるらしい。
「待ち伏せをかける気かしら。少し心配になってきたわ」
「というほどしおらしい姐御でもあるまい。そうそう、若だんなに一つだけ注意をしておく」
雪太郎はとうとう若だんなにされてしまったようである。
「どんなことだね」
「大俵玄蕃というやつは、腕は鉄だぬきとそう甲乙はないという話だが、含み針という器用なことをやるそうだ。いざという時は気をつけるほうがいいな」
「含み針って、口から針を吹きつけるやつのこと――」
お妻がまゆをひそめる。
「うむ、目にさえ当たらなければ大したことはないが、まともにひとみをやられるとめくらになる。真剣勝負の時は、ちょいと始末の悪いやつだ」
「ありがとう。聞いておいてよかった」
「そうだとも。貴公がめくらになったと聞いた

ら、金魚が泣くだろうからな」
「なにさ、金魚って――。女のことでしょ」
きらっとお妻の目が光る。
「おや、顔色をかえたな、姐御」
「ふんだ。いいじゃありませんか、なにしたってあたしの顔なんだもの」
「気の毒だなあ。若だんなには、金魚のほかにもう一人、二晩お嫁で一つ座敷へ泊まりをかさねたお腰元さんがいるんだ」
おしゃべり吉までからかいだす。
「うそばっかし――。ここにいないじゃありませんか」
「それが、ちっとばかりわけがありやしてね。そういや若だんな、あのお嫁、今ごろ江戸へ無事に入りましたかねえ」
これは冗談でなく、本当にちょいと気になるという吉松の顔だ。
「なるほど、吉はちょいと気がもめるだろう。あのお嫁に、いやじゃわいのうと、たもとで打たれているらしいからな」
三井が遠慮なくすっぱぬく。
「けっ、よういいまへんわ」
うらめしそうに吉がそっぽを向く。
「さあ、出発としようか。この分だと、大森あたりで日が暮れかかるかもしれんぞ」
雪太郎が勘定を払って立ち上がる。
飯屋でもそうだったが、街道へ出てもお妻は雪太郎のそばを放れようとしない。さっさと肩をならべて歩き出す。
「ねえ、三井さん」
「なんだ」
「姐御のは色気か、かねっけか、どっちだと思いやす」
後ろから連れ立って歩きながら、おしゃべり吉がにやりとわらった。
秋の日は雪太郎が思ったとおり、大森をすぎるころ西の空へ落ちて、あたりが急に冷え冷えとしてきた。

これから一足ごとにたそがれてはくるが、しかし、もう江戸は近い。
「若だんな、江戸へ入ったらあの二人とさようならをしてもいいんでしょ」
ずっと肩をならべて歩いているお妻が、ふっと雪太郎の腕を引きつけるようにして、うしろの二人に聞こえないように小声で聞いた。
「うむ、約束はそうなんだが、どうしてだね」
「あたしこれでも、深川の大工町ってところに一軒家を持ってるのよ。万年橋のそばで、新大橋をわたればすぐ浜町だし、わりに出場がいいんです。二階の六畳があいているから、若だんなに貸してあげます。旅籠屋なんて、お金ばかりかかってつまらないわ」
「ありがとう。考えてみよう」
「あら、どうしてさ、なにも考えることとなんかないじゃありませんか。家はお浜っていう十六になる女弟子とあたしと二人っきりなのよ。あたし、きっと大切にしてあげますから、いっしょに行きましょうよ」
「うむ、その好意はありがたいが、実は少し考えていることがあるんだ」
「あんた、まさか、その松江っていう腰元のお嫁と、なにか約束をしているんじゃないでしょうね」
道々三井がからかい半分にその話をぶちまけているから、お妻の顔色が急に変わってきたようだ。
「いや、あのお嫁は今朝きれいに離別してしまったから、もうなんでもない。第一、どこの腰元か、それさえ聞いていないんだ」
「きっとですね」
「うむ、きっとだ」
「若だんなはたとえ二晩でもその腰元とお嫁の約束をしたんですから、あたしとだって約束してくれたっていいじゃありませんか」
お妻の声がだんだん高くなってくる。
「しかし、ここから先はもう関所はないからね。

なにも無理にお嫁の約束をしなくたっていいじゃないか」
「そうはいきません。あたしだって大平鉄之進という大だぬきに命をねらわれているんです。若だんなが本当に男なら、家まで送ってきて、当分あたしをまもってくれるはずだわ」
お妻が勝手な理屈をこね出す。
「姐御、若だんなのかわりにわしがお嫁の約束をしてやろう。これでもわしは女にとても親切だぞ」
うしろから三井が名乗りをあげて出た。
「三井先生、もう少し黙っていてくださいな。今が大切な掛け合いの最中なんですから」
「よろしい。じゃ、そっちの口がだめだったら、こっちへ口をかけろ。きっと相談に乗ってやる」
「へ、へ、お嫁の安売りなら、あっしも一口乗せておくんなさいな」
「ねずみさんは黙っておいで、——いやらしい」
「やれやれ、これでも役者なんだがなあ、かわいそうに。吉、なんとかいわぬか」
いつか鈴ガ森へかかってきて、右手の海が蒼茫と暮れかかっている。その左手の刑場のある松林の中から、ばらばらと行く手の街道へ出てきて、こっちの近づくのを待ちうけている武士の一団が目についた。
「出たらしいな、若だんな」
うしろから三井がいった。
「うむ」
「玄蕃ぎつねかしら」
お妻もちょいと息をのむ。
「いや、違うだろう」
雪太郎はたぶん松江の追っ手だろうと見て取っていた。
近づいていってみると、果たして待ちうけていたのは七人ばかりの若侍たちで、その中に箱根峠で松江を追っていた藩士が一人まじっていた。
「しばらくお待ちを願いたい」

つかつかと雪太郎の前へ出てきたのは、その藩士である。
「やあ、あなたはたしか箱根で一度お目にかかっていますな」
　雪太郎はおだやかにうけて立ち止まった。
「さよう、貴公はたしか御徒町へ修業に行く比良雪太郎どのですな」
　その藩士は関所で聞いてきているらしく、ずばりと図星をさして、鋭い目をつれのお妻のほうへ向ける。
「そうです、浪人比良雪太郎です。なにかわしに御用ですか」
「失礼だが、するとお連れは御家内の松江どのですか」
「いや、違います。なぜです」
「箱根の時も申し上げておいたが、我々は子細あって松江という腰元風の娘を追っている者です。関所で調べると、その松江は貴公の妻として関所を通行している。しかし、我々が下りの道で貴公に追いついた時は、松江はいっしょでなかった。その辺の事情を、一応御説明願いたい」
「あなた方は、いずれの御藩中です」
　雪太郎はなにげなく聞く。
「勝手ながら、それは申し上げかねます」
「困りましたなあ。拙者はまだあなた方の姓名さえ聞いていない。申さば、路傍の人に私事は申し上げにくい。せっかくですが、おことわりするほかはない」
　言葉はおだやかだが、雪太郎はぴしゃりと拒絶した。
「あたりまえだわ。失礼な人たちね」
　お妻は小声でつぶやく。
　理の当然にぐっと言葉に詰まった藩士は、思わず目を光らせていたが、思いかえしたように、
「いかがでござろう、拙者は高柳峰十郎という者だが、一応我々と屋敷へ御同道くださるまいか。その上で、藩名も事情もお話しいたそう」
　と、改めて条件を出す。

「考えておいて、いずれ明日御返事します」
「おかしなことをいうなあ、貴公。明日返事をするって、どこへ返事をするんだね」
　高柳と名乗る藩士は、とうとう本性を出してきたようだ。
「いや、あなた方のほうで返事の必要がなければ、わしのほうは無理に返事をしようというのではありません」
「なにッ」
「返事がほしいのはあなた方のほうだ。どこへ返事をしていいかは、あなた方のほうできめればよろしい。どうもあなた方は少しあわてているのではないかなあ」
「うまい、うまいわ、若だんな」
　お妻は一人でうれしがっている。
「なかなかやるなあ、貴公」
　高柳というやつも相当腹のある男らしく、にやりとわらって、
「念のために聞いておくが、今夜の貴公の宿はどこだね」
　と、改めて出直す。
「深川大工町のあたしの家、近所へ来て娘手品のお妻さんの家はと聞いてくだされば、すぐわかります」
　すかさずお妻がかわって答えてしまった。
「たしかにそれでいいんだな、貴公」
「うむ、まあとにかくそうしておこう」
　雪太郎は苦笑しながらうなずいてみせる。
「よし、それなら明日そっちへ返事を聞きに行くと言いたいが、あいにくこっちはそうのんきに構えてはいられないんだ」
　高柳は次第に図太さを露骨にしながら、
「貴公、本当は松江からなにもかも聞いているんだろう」
　と、雪太郎の顔を見すえる。
「いや、別になにも聞いてはいない。あのお腰元さんはしっかり者で、ちゃんと分は心得ていたようだ」

「どこで松江と別れたんだね」
「今朝、程ガ谷の宿で別れた」
「そうか。六郷から目黒へまわったんだな」
高柳はしまったという顔がかくし切れず、
「じゃ、貴公、松江の行く先を聞いているんだろう」
と、突っこんでくる。
「貴公たちはなにか人に聞かれては都合の悪い仕事のために、そうやって苦労して働いているようだな」
「なにッ」
「侍として恥ずかしからぬ仕事に義を誓う人たちなら、そんな口のきき方はしない。少し反省してみるとすぐわかることだ」
雪太郎がわらいながら一本きめつける。
「うぬッ」
高柳はさすがに一瞬凶悪な形相になって、思わず柄に手をかける。
「待ちたまえ。わしはあまり理由のない私闘は好まんのだ。おたがいに闘犬じゃないんだからな」
雪太郎は乗ろうとしない。
「黙れッ、貴公はいま拙者を侍らしからぬと侮辱をした。このまま黙って引きさがっては武士の面目が立たん。抜け」
逃げを打つとでも思ったか、高柳が居丈高になって詰めよる。
「侍として果たし合いを望まれるのか」
「そうだ」
「侮辱を感じたのは貴公で、それを感じさせたのはわしだ。貴公にも仲間があるし、わしにも連れがある。しかし、ほかの者には関係のないことだし、迷惑をかけたくない。貴公とわしだけの一騎討ちなら、男らしく果たし合いに応じてもいい」
ほかにけが人を出したくないから、雪太郎はうまく一騎討ちに誘いこもうとする。
「おもしろい。いかにも一騎討ちでやろう。支

度をしろ」
即座に応じたのは、高柳も腕には十分自信があるのだろう。
「三井、聞いてのとおりだから、絶対に助勢はいかんぞ」
雪太郎は振りかえって三井に宣告する。
「よし、骨は三井鐘太郎きっと拾ってやる。しっかりやれ、若だんな」
三井は昂然と言い放って、とんと一刀の柄をたたいてみせた。
「でも、大丈夫なの、若だんな」
お妻は髪から銀の平打ちのかんざしをぬき取って懐紙でぬぐい、手早く手ぬぐいにくるんではち巻きの用意をしてくれる。
その間に雪太郎は下げ緒をはずしてたすきにかけ、袴の股立ちをきりっと取る。
いってみれば無用の腕好みにも似ているが、衆をたのんで横車を押してくるのを、黙ってよけて通るとなると、これからいつも卑屈な道を歩かなければならなくなる。
強いものが横車を押してのさばり、弱い者は横車を押されて泣き寝入りにするのが当たりまえのような世の中になりすぎているのだ。敢然と事の善悪が言い切れる勇気のある者は、常に善を善とし、悪を悪と主張して、世の中から一つでもそういう横車を排除してやる責任があるはずである。
支度はできた。
日はほとんど暮れかかって、海手に五日ばかりの秋の月がほのあかるい。
「おい、いいか」
味方をずっとうしろへさげた高柳が、真ん中へ進みながら声をかけてきた。
「よろしい」
雪太郎も答えて、静かにそっちへ進む。
双方二間ばかりのところへきて、ぴたりと立ち止まった。高柳は品川のほうを背にし、雪太郎は大森のほうを背にしている。

「行くぞ」
「来いッ」
双方同時にさっと抜きあわせた。
「えいっ」
「とうっ」
相青眼の剣尖の間合いは六尺ばかりである。
――こやつ、強い。
雪太郎はすぐに見て取った。藩でも一方の大将をつとめているだけあって、川崎で見た大平鉄之進などよりたしかに腕は一枚上だ。
自分でも強いという自信があるのだろう、あざやかにたたっ切ってやろうという意気ごみで、わしのように容赦なくこっちのすきをねらっている。
――どこからでも来い。
真剣勝負に小細工は無用だ。一度武士が刀を抜いた以上、どっちかが死ぬにきまっているのだから、まず未練をすてて、まっしぐらに突いて出ればいいのである。
雪太郎は自分なりにいつもその覚悟でけいこもし、試合にものぞんできた。
師匠は小野派一刀流浅利又七郎で、
「それでよろしい」
と、二十一の時免許をゆるされている。
免許の上に皆伝があるが、主持ちで、別に剣をもって世に立つ希望はなかったから、実戦に備えるだけの修業で、つい道場通いのほうはおろそかになっていた。
実をいうと、育ちがいいから真剣勝負は今日がはじめて、かたくなるかなと、刀を抜く前にちょっと心配したが、抜いてしまうと案外そうでもないらしい。度胸がきまってしまったのだろう。
「えいっ」
じりじりと急に高柳が激しく間合いを詰めてきた。
――切れる。
と、高柳は見て取ったのだ。

いや、京都の桃井の道場で皆伝に近いおれの腕で、たかがこんな青二才一人が切れぬはずはないと、傲慢強気の高柳にははじめから多少うぬぼれがあった。
「おうっ」
一気に間合いを詰めて敵を圧倒しながら、必殺の一刀をさっと振りかぶったとたん、
「とうっ」
地をけった雪太郎の双手突きが、無謀にも体ごとこっちの振りおろす剣の下へ飛びこんできたのだ。
思ったより敏捷な太刀だったが、それよりその気魄の激しさに、高柳は思わず冷やりとしながら、振りおろす剣が双手突きを引っ払う剣に変わって、白刃が火花を散らし、ひらりと飛び違っていた。
位置が入りちがいになった二人は、くるりと向きなおるなり、
「おうっ」
「えいっ」
こんどは息もつがせず猛烈な突きを雪太郎のほうから仕掛けて、高柳があやうく引っぱらい、またしてもつむじ風のように飛び違っていく。
「三井さん、どうしよう」
あまりにも激烈な切り合いに、お妻が真っ青になって三井の腕にしがみついた時、
「えいっ」
元の位置へかえった乱髪の雪太郎が、立ちなおるなり、三度地をけって火のような双手突きに出た。
命知らずというのか、度胸がいいというか、しかも気魄一杯の正確な双手突きだから、さすがの高柳もこんどは払い切れず、
「おうっ」
絶叫にも似た気合いがかすれて、たっと松原のほうへ横っ飛びにあやうくのがれ、不覚にも腰がくだけて、どっと横ざまに転倒していた。
「勝負はこれまで」

すっくとその前に立った雪太郎は、はっきりそう宣言すると、まだ抜刀をさげたまま、すたすたと品川のほうへ歩き出した。
そっちにかたまっていた敵の仲間たちは、颯爽たる雪太郎の進退に気をのまれてしまったらしく、みんな松原のほうへ道をよけてしまった。
雪太郎はちょっとそっちへ会釈をして、敵に戦意がないと見ると、そこではじめて抜刀を鞘におさめた。
「雪さあん」
はっと気がついたように、お妻が呼びながら、ばたばたと後を追う。
「ころぶなよ、姐御」
三井がわらいながら、大股に敵の前を通りすぎた。
「ごめんなすって――」
おしゃべり吉がおじぎをして、こわごわ藩士たちの前を駆けぬける。
浜川橋をわたると、もう南品川だった。

「どうして一人で行っちまうのよう」
お妻は雪太郎に追いつくと、いきなり左腕へぶらさがるように飛びついていった。
「怖いから逃げ出したんだよう」
雪太郎はそんな冗談を言いながら、さすがに少し息がはずんでいるようだ。
雪太郎は一行をつれて品川の小料理屋へ入り、ともかくもそこで夕飯をとることにした。
ここまで来ればもう江戸へ着いたもおなじだから、三井と吉松を江戸まで賄ってやるといった約束は、この夕飯で一応果たしたことになるのである。
「しかし、若だんな、貴公は江戸で修業中、金魚とかくれんぼをして遊んでいたにしては、ちょいとすごい腕前だなあ」
三井は遠慮なく杯をあげながら、大いに感心する。
「いや、残念ながら、あれはわしの負けだ」
雪太郎はうかない顔つきだ。

「だって、高柳ってやつはだらしなくころんだじゃありませんか。負けってことはないと思うわ」
お妻は雪太郎にだけ酌をしてやりながら、不服そうな顔をする。
「本当のことをいうと、後でわしは冷や汗をかいていた。真剣勝負は初めてなんでね。幸いあっちがころんでくれたからいいようなものの、――道場でやれば、向こうのほうがどうも一枚上らしい」
「さあ、そいつはやってみなければわからんが、真剣勝負はあれでいいんだ。たしかに敵のほうが気魄の点で劣っていた、技などはどっちでもいい。切るか切られるかということになれば、結局は度胸だ。本当の度胸は腹だ。人格からくるものだ。その点、貴公の剣は達人の域に達している」
「ひどくおだてるなあ」
「いや、おだてるんじゃない。ああいう場合、おれなどはすぐ、くそ、死んでやれと捨てばちになる。それがおれなどの精一杯の勇気なんだ。そこへいくと、若だんなのは、育ちであっさり生死が超越できるようだ。やるだけやって後は天命にまつ、つまり、無念無想になれるんだな。育ちというか、人間の格というか、貴公はたしかにいい魂を持っている。うらやましい」
「三井先生、どうぞお一つ」
お妻がうれしそうな顔をして三井に酌をしてやる。
「姐御、おれは貴公をほめているんじゃないぜ」
「いいえ、あたしがほめられたのもおんなじなんですから。ねえ、三井先生、もっとほめてくださいよ。うちの若だんな、そんなに育ちがいいですか」
「気の毒だがなあ、姐御、こんな風だと、うちの若だんなは畳の上で死ねそうもないぞ」
「あら、どうしてさ」

「こういう魂の男は、損な役割ばかり引きうけさせられるようになる。世の中のやつらはずるすぎるからなあ」
「ふうんだ。そんなやつ、あたしが片っ端からことわってやるからいい。ねえ、若だんな、きっと人になんかだまされちゃだめですよ」
「三井先生、この辺に氷屋はございませんかねえ」
おしゃべり吉がとぼけた顔をあげる。
「氷屋――？」
「姐御の頭を冷やしてやるんでさ。こうのぼせていちゃ、いまにてんかんを起こしやす」
「お黙り、おしゃべり――。ああ、そうそう、今夜は家へ来てくれますねえ、若だんな」
お妻は急にそれが心配になってきたようである。
「姐御、それは危険だ」
三井が真顔になって、そばから口を出す。
「あら、水をさす気なんですか、三井さん」
むきになって座りなおすお妻だ。
「いや、水をさすわけじゃないが、姐御はさっき高柳というやつに、若だんなは家へ泊まる、あたしの家は深川大工町だとはっきり教えている。わしは、あの連中はただではすまさないと見ているんだ。――そうだろう、比良うじ」
「そうだなあ。あれだけのことをやるんだから、かなり根は深そうだな」
雪太郎はうなずいてみせる。
「あの腰元のお嫁は、敵にとって相当重大な秘密を持って、江戸へ出てきたんだ。敵はその一端を貴公に聞かれていると疑っている。いや、もっと邪推をまわせば、貴公があの腰元をどこかへかくしていると見ているかもしれない。当分、貴公あの連中につけまわされることになりそうだぞ」
「おどかさないでくださいよ、三井さん」
さすがにお妻もはっと顔色を変えたようだ。
「まあそれはしようがないとして、三井は江戸に泊まる当てのある家があるのか」

雪太郎が話題をかえる。
「あいにく当てはないな。わしはないないづくしだ。親なし、家なし、妻子がない、当てもなければ銭もない、これではまったくしようがない」
「吉松はどうなんだ」
「あっしはこれでも神田三河町にちゃんとお館がありやす。あいにく二階借りでしてね、初めからことわっときますが、とてもだんな方をおつれするようなお館じゃありやせん」
「いや、我々はおつれしてもらわなくてもいいが、それじゃお前はその神田のお館へ帰れ」
「ずばりとそういわれると、名残惜しいな、なんだか」
急に吉松はしょぼんとなる。
「なあに、おなじ江戸にいるんだ、またいつでも会える。そこで、三井だが、貴公ないないづくしなら、当分わしと行動を共にしてみる気はないか」
「あるなあ。三井鐘太郎、大いに犬馬の労をつくすぞ、若だんな」
「藤原の吉秀をはぶきやしたね、三井先生」
「あれはおおかみ用だ。犬馬が使ってもはえんからなあ」
そんな時の三井の顔はごく善人に見えるからふしぎである。
「ところで、姐御――」
「二階を貸せでしょう、若だんな」
「いや、こぶつきで二階借りでもなかろう。姐御の近所に空き家はないかなあ」
「そりゃないことはないけれど、あたしの家ではどうしてもあぶないかしら」
お妻はちょっと情けなさそうな顔をする。
「うむ、我々は別にやつらなど恐れはせんが、無理にあぶないまねをすることはないからな」
三井がさとすようにいう。
「あたし、あの時黙ってればよかったのに、つまらないことをいっちまったわ」

「それに、三井とわしはこれから傘張りの内職をやるつもりだから、やっぱり二階でないほうが都合がいいだろう。なあ、三井」
　雪太郎はなるべく、こののぼせ性で、はっきり正体のつかめない女性は敬遠しておいたほうがいいと考えている。そして、これでどうやらお妻の二階へ引っぱりこまれることだけはまぬかれたようだ。

江戸のほこり

　雪太郎は江戸の仮住まいを、縁あって、深川大工町、お妻の裏の三軒長屋の一軒を借りて、当分そこで暮らすことになった。
　万事はお妻の肝いりで、ほんの三食に事を欠かぬだけの所帯道具もそろったし、向こう三軒両隣へ引っ越しそばもくばった。
　炊事は、犬馬の労をつくすと約束の三井鐘太郎が、案外器用にやってくれる上に、路地一つへだてたすぐ向こうがお妻の家の台所口になっているから、のぼせ性のお妻がなにかと総菜を運んでくれる。
　少し親切がすぎて時にはうるさいこともあるが、そんな時は三井に相手をさせておけばいいのだから、雪太郎は大体気ままな若だんなでいればよかった。
　家は四畳半と三畳の二間で、右隣は古着屋だという中年の夫婦者、左隣はこの春大俵玄蕃の仕官のいかさまに引っかかって十両巻きあげられたという若い堅田雁之助夫婦だった。
　どっちも子供がない上に、古着屋のほうは夫婦共かせぎで昼間は家にいないし、堅田夫婦も雁之助は楊枝削り、家内の千代は針仕事の内職に一生懸命だから、まことに物静かである。
　うるさいのは、暇さえあれば自分の家のようにやってきて、雪太郎の世話をやきたがるお妻だけということになるが、これも昼間は内弟子のお浜をつれてかせぎに出ることが多いから、なやまされるのは大抵朝と晩である。

「若だんな、今もって高柳のほうからなんのあいさつもないところを見ると、あれっきりあきらめたらしいな」
　浪宅におさまって三日目、ふっと思い出したように三井がいった。
「うむ、ちょっとおかしいな」
「わしもそう思う。ことによると、あのお腰元さん、つかまってしまったんじゃないかな」
「さあ、なんともいえんな。こっちは別に事を好むわけじゃないが、あの事件はそう簡単なものじゃなさそうだからな」
　一度窮鳥を助けているだけに、雪太郎もちょっと気になる。
「それと、もう一つおかしいのは、あの日玄蕃ぎつねがよく若だんなを見のがしたということだ」
「本当だなあ。あのきつねは、春つばめの姐御にも食指が動いていたはずだ」
「あの姐御はだめだ。いくらきつねが食指を動かしても、あべこべにかみつかれるだけの話だろう」
「しかし、江戸は広いなあ。あんな口入れ屋でも、結構食っていけるんだからな」
「そりゃ柄の悪いのを承知なら、どんな仕事だってある。だが、若だんなにゃ向くまい。そこでわしは考えてみたんだが、さて若だんなに向く仕事となると、楊枝削りか傘張りぐらいなもので、どうもこれはという仕事はなさそうだ。といって、こうして二人で遊んで食っていた日にゃ、いまにふところを食いつぶしてしまうのは火を見るよりあきらかだからな。どうだ、若だんな、隣の堅田うじにならって、こっちも今日から楊枝削りをはじめるか」
　貧乏浪人で苦労しているだけに、三井がそんな地道なことを言い出す。
「そうだなあ、遊んで食っているというわけにもいかんな」
　雪太郎はあまり気がすすまない。まだ貧乏が

身にしみていないからだ。
「堅田うじ、——お隣の堅田うじ」
三井がかまわず壁越しに隣を呼ぶ。
「はあ、なにか御用ですか、お隣さん」
ちょっと間をおいて、壁越しに返事があった。
「お仕事中まことに恐縮ながら、少々御教授願いたい儀がござってな、当方へ御足労いただけまいか」
三井がいんぎんに申し入れる。
「承知つかまつりました。ただいま参上つかまつる」
間もなく堅田の家の門口があく音がして、足音がこっちの門口でとまった。
「たのうむ」
律義に玄関先に立って、案内を請う声がする。
「本式だなあ、若だんな」
三井がうれしそうにわらいながら、
「どうれ」
と答えて、三畳のほうへ出ていった。
「これはこれは、堅田うじ、ようこその御入来、いざまずこれへ」
芝居気たっぷりの三井だ。
「ただいまお招きにあずかった隣家堅田雁之助です。さっそく参上つかまつりました」
堅田もおおまじめのようだ。みんな昔がなつかしいのだろう。
「さあどうぞ、ずっとお通りください」
「しからば失礼」
四畳半へ通った堅田は、女房持ちだけに貧乏はしているがこざっぱりと垢っけはどこにもなく、なかなかの美丈夫だ。
「先日ごあいさつに出た比良雪太郎です。どうぞよろしく」
雪太郎は家にばかりいるから、堅田と親しい口をきくのは今日が初めてである。
「拙者は堅田雁之助です。よろしくお願い申す」
「堅田さん、これのほうの手間を欠いて、悪くなかったかなあ」

三井が楊枝削りのまねをして、すまなそうな顔をした。
「いや、かまわんです。むしろ、ちょうどよかったです」
堅田はにっこりして、なぜかそのわらいに一抹のさびしさがただよっている。
「ちょうどよかったとは——」
「実は、夫婦げんかというやつを始めていましてな」
「こりゃ驚いた。ちっともそんな声は聞こえなかったがなあ。——そうだろう、若だんな」
「うむ」
雪太郎もちょっと意外だった。もっとも、ふだんからあまり大きな声は立てない堅田夫婦なのである。
「いや、家内がひどく恥ずかしがり屋でしてな、お隣へ聞こえてはみっともないからと、少し大きな声を出すとべそをかくもんだから」
堅田は苦笑している。
「つまり、御家内は貞淑なのですな、うらやましい。その貞淑なる御家内を相手に、なんでまたけんかなどはじまりましたな」
「三井、よせ。そんなこと堅田うじに失礼じゃないか」
雪太郎がいそいでたしなめる。
「いや、そうじゃない、若だんな。これも近隣のよしみだ、場合によってはぜひ仲裁に立たなければならんからな」
三井のは冷やかしているのではなく、どこまでもまじめな顔つきなのである。
「堅田うじ、このほうはどうかな」
三井はぐいと一杯引っかける手つきをして見せる。
「好物です」
「善哉善哉。しからば、お茶がわりに拙者の寝酒を一碗だけ献じよう。よろしかろうな、若だんな」
「うむ」

雪太郎の承諾を得て、三井は台所から湯飲み二つに冷酒をつぎ、盆にのせて運んできた。さかなはたくわんである。

「ほんのお茶がわりでござる、どうぞ」

「結構ですな。比良うじはやらんのですか」

堅田が自分の湯飲みを取りあげながら聞く。

「若だんなはあってもなくてもいいほうでしてな、自分からほしいといわぬかぎり、倹約してもらっています」

そばから三井が説明する。

「それもまた結構でござるな。しからば、遠慮なくちょうだい」

堅田はたのしそうに、ちびりちびりと茶わん酒をやり出す。なかなか行儀のいい飲みっぷりだ。

「いかがでござるな、そろそろ酒のさかなに夫婦げんかの顛末を物語られては」

「三井、それを酒のさかなにしては失礼じゃないのか」

雪太郎がまたしてもたしなめる。

「いや、よろしかろう。わしは女房というものを持ったことがないから、夫婦げんかの味は知らんが、聞くところによると、当人同士にとってはこれまた大いにたのしいものだそうだ。しかし、他人にはあまりおもしろいものじゃない。だから、犬も食わぬ。そうだろう、堅田うじ」

「まことに恐縮です」

「つまり、たくわんだけではあまりさかなが寂しすぎるから、せめて堅田うじののろけでも聞いてあげて、それを酒のさかなにしていただこうと、こういう当方の腹なのだ」

「まことに恐縮です」

堅田はにこやかにわらっている。

「そういえば、堅田うじはこの春、中坂下の大俵玄蕃にうまくしてやられたそうですな」

雪太郎がそれとなく話題をかえる。

「うまくやられました。不覚の至りです」

「しかし、水戸家の重役とかには一度会ってい

るのでござろう」

「会いました、料亭でな。その節、土産として十両つつむがいいという話で、言われるとおりにしましたが、果たして相手が本物だったかどうか、真偽のほどはわかりません」

「水戸家へたずねてみれば、真偽のほどはすぐわかるはずだがなあ」

「いや、そうも考えてみましたが、家内がよせといいましてな、たとえ真偽のほどがわかっても、仕官ができなければ、腹が立つだけのことだ、だまされたのはこっちの不覚なんだから、きれいにあきらめたほうが気が楽だろうと、――家内のほうが拙者より人間が一枚上のようです」

少しも鬱憤らしいものは見えず、平気でそれが言えるところを見ると、堅田という男もかなり意地のある侍に違いない。

――この男とも、どうやら友達になれそうだ。

雪太郎はひそかに心たのしい。

「堅田うじの御家内は、たしかに賢夫人なんだな。うらやましい」

三井は残りの茶わん酒をぐっとのみほして、

「堅田うじ、ぐいとおほしください。賢夫人のために、もう一盞献じたい」

と、これももう残りすくなになっている堅田にすすめる。

「いや、手前はこれで十分です」

「まあよろしいではないか。二杯ぐらいで内職にさわるということもござるまい。実は、拙者もお相伴いたしたいのだから」

「せっかくでござるが、家内がたのしみもなく家で人仕事をしているのに、これ以上自分だけ酒をたのしんでいては不憫です。御好意はかたじけないが、平に御容赦にあずかりたい」

堅田は正直にいって、わらいながらおじぎをする。

「なるほど、さようか。これはお美しい」

三井は感心しながら、そっと自分の茶わんを

盆の上へおいてしまう。

「三井、ほしければ貴公だけもう一盞やりたまえ」

　雪太郎はわらって、

「しかし、堅田うじ、それほど御家内思いの貴公が、なんで夫婦げんかなどになったのかな」

　と、ふしぎそうな顔をする。

「もう、ここまでのろけてしまったのだから、白状しますかな」

「ぜひうかがいいたしたいなあ」

　三井も乗り気のようである。

「あれは親兄弟にそむいて、手前といっしょになりました」

「つまり、恋仲でござるな」

「というほどでもないのですが、縁談の最中に手前は上役と衝突して、国もとを立ちのくことになりました。同藩の者の娘だから、浪人した者へかたづけるのは親として心配なのは当然で、自然縁談は中止ということになりました。そして、拙者が江戸へ立つ朝、千代が旅支度で城下外れに待っていましてな、ぜひいっしょにつれていけという。もう親兄弟に勘当してもらってきたのだから、いけないといえばここで自害するほかはないといいます。まあ、そういう仲の家内なのです」

「なるほど、これはお立派だ」

「そこで、江戸に出るとすぐここへ落ち着きましたが、そういうわけだから、どうしても生涯、江戸のほこりで終わりたくない。そのあせりもあって、うっかり中坂下の山師に引っかかりもしたわけです」

「そう聞くと、あの古ぎつねめ、なお憎いなあ」

「実は、江戸へつれてきて、まだろくに江戸見物もさせていません。せめてそれだけでもさせてやりたいと思いましてな、拙者がこの刀を売ろうと、今朝家内に相談しました。これでも肥前の忠吉だから十両ぐらいにはなるだろうと言いますと、自分のためにならやめてくれというのです。それより、刀を売って得た十両は、つかえばなくなってしまう。暮らしの足しにはならない。いっそ、手前の身の立つまで、こんな内職をしているより、自分がどこかへ奉公に出ようと思うが、どうだろうと相談をうけましてな」

「なるほどなあ」

　雪太郎は思わず三井と顔を見あわせずにはいられなかった。

「これはどうも、手前ばかり勝手なおしゃべりばかりしてまことに恐縮、——手前をお招きくだされた御用というのは、なんでござろうか」

　堅田は飲みおわった湯飲みを盆の上へ伏せて、改めて三井の顔を見た。

「若だんな、すっかり聞かされてしまったなあ」

　三井もしかたなさそうに茶わんをおなじ盆に伏せて、

「実はねえ、堅田うじ、我々両人もこんど江戸のほこり組に入ることになった。若だんなはまだ多少のたくわえは持っているようだが、座してくらえば山をもむなしで、むなしくなってしまってからではあまりにも能がなさすぎる。今から二人で内職を始めようということになってね、貴公の楊枝削りに目をつけたわけだ。失礼だが、あれは一日どれほどの収入が得られますな」

　と、単刀直入に切り出す。

「なるほど、楊枝削りをな。それは大変だ、あまりおすすめできんな」

「そんな難しい仕事ですかな」

「いや、仕事としては楊枝を削りさえすればいいのだから、だれにでもすぐできるが、あれを一本ずつ削って、百本を一束といいましてな、これを日に十束、すなわち千本削って百文足らずです。一口に千本といいますがな、朝から晩まで根よくやって、初めのうちは五百本が精々でしょう。二八そば三杯分ほどのかせぎですからな。大の男のやることではありません」

堅田は正直に情けなさそうな顔をしてみせる。
「なるほどな。——どうする、若だんな」
三井もさすがに憮然としたようだ。
「わしはあんまり指先が器用なほうではないんだ」
「しかし、これは生活の問題だからな、器用不器用はいっていられまい。——どうです、堅田うじは日に千本いきますかな」
「このごろはどうやらいきます。はじめて千本に達した時、念願かなったりと思わず勇み立って、お情けないと家内に涙をこぼされましてな」
「ごもっとも——」
いよいよ憮然たる三井である。
「いやあ、どうも。——また家内の話が出ました。申し訳ござらん」
「いや、結構です。すると、御家内はまだ一度も江戸見物をしておらんのですな」
雪太郎が同情するように聞いた時、だれかの足音が隣の堅田の家の前でとまって、
「たのうむ」
とおとなう野太い声がした。
——はてな。
というように堅田が聞き耳を立てる。
賢夫人が出てあいさつをしたようだが、その声は聞き取れない。
「拙者は飯田町中坂下の大俵玄蕃先生の使者としておたずねいたした藤倉三平と申すものでござるが、堅田うじは御在宅でござろうか」
千代は留守だと答えて、用件を聞いたらしい。
「実は、先生が申されるには、かねて堅田うじ御依頼の仕官の口ができた。それについてぜひ面談いたしたいから、御足労を願うようにと申すことで、拙者がお迎えにあがったのです。お留守とは残念ですなあ」
使者はいかにも残念そうな口ぶりである。
三井は、行かなくてもいいのかというように、堅田の顔を見ている。

が、堅田はそっちへ耳を澄ましているだけで、立とうともしない。
隣の賢夫人は、帰ったらそう伝えますと返事をしたらしく、
「さようか。それでは、おもどりになりましたらすぐにおいでくださるよう、よろしくお伝え願いたい」
と言いおいて帰っていく。
——さすがだなあ。
と、雪太郎は感心した。
妻女を信用しているから、堅田は軽々しく立たない。その必要があれば、妻女のほうからこっちへ声をかけてくるはずだ。この使者好ましからずと見たから、妻女はあくまで夫を留守にして、ひとまず独断で使者を帰した。
この夫婦は本物だという感が深い。
「また妙なところから、妙な使者がきたもんだなあ、堅田うじ」
三井が苦笑しながら言う。
「どうせ、ろくな口ではござるまい。それに、拙者にはもう進物をするたくわえもない」
「しかし、堅田うじ、一応は中坂下へ出向いてみるのもむだではないと思うな」
雪太郎が考え深そうに口を入れた。
「どうしてです、若だんな」
堅田も三井の若だんな呼ばわりがとうとう口についてきたらしい。
「山師がどんな口を見つけてくれたのか、念のために聞いておいて、後者のいましめにする。また、どんな風にもう一度人をだまそうとするか、それを見ておくのも後学のためになると思います」
「なるほど——」
「もう一つ、これは物好きのたぐいに属するかもしれぬが、山師が見つけてくれたという口は、貴公のためになる口ではなく、どうも山師自身が得になる口ではないかと思う。つまり、貴公をなにかに利用しようとたくらんでのことに違

いない。それを聞いておくと、ことによると人助け、大きくいえば世の中のためになるかもしれない。と考えるのは、少しわしの考えすごしかな」

「おもしろい。こりゃ若だんなのいうとおりかもしれぬ。一つこれから行ってみることにしよう」

多少酒気のせいもあるが、堅田の目が生き生きと輝いてきた。

「ただし、堅田うじ、一度帰って賢夫人の意見をたたいてみる必要がある。賢夫人がそれはいけないといったら、やめていただきたい」

雪太郎はそう念を押すことを忘れなかった。

「いや、拙者は自分がみたバカを二度と人にくりかえしてもらいたくないと考えている。千代も決して反対はしないでしょう。とにかく、一度家へ帰ってみます。失礼いたした」

堅田はていねいにおじぎをして、隣へもどっていった。

「なかなか人物のようじゃないか、若だんな」

隣へ耳を澄ましながら、三井がにっこりと声をひそめる。

「三井、たのみがある」

雪太郎の声も低い。

「なんだね、改まって」

「もし堅田うじが本当に中坂下へ出かけるようなら、貴公、後からそっとついていってみてくれぬか」

「後をつけるのか、若だんな」

なんのためにといいたげな三井の顔だ。

「うむ、行く先の相手が相手だ。堅田うじに万一のことでもあると、賢夫人に対して申し訳がない」

雪太郎がそっとささやく。

「なるほど、心得た」

「深編み笠をかぶっていくほうがいいな」

「よし、そうしよう」

相かわらず隣は物静かで、少しも話し声は聞

こえないが、間もなく玄関のあく音がした。

「やっぱり、出かけるらしいな」

三井がもう立ち上がる。

「たのむよ」

「大丈夫だ」

間もなく、三井は深編み笠を持って気軽に出かけていった。

時刻はやがて八ツ（二時）ごろだろうから、これから飯田町まで行って帰ってくれば、どうしても夕方になる。一人でぽつねんと家にいてもしようがないので、雪太郎はそのころまで両国あたりをひとまわりしてみる気で、三井が出かけると自分もすぐ家を出た。

隣の家の前へ立って、

「お隣どの、――お隣どの」

と呼ぶと、すぐに千代が玄関の障子をあけて、

「ああ、比良さま、ただいまは主人が長い間おじゃまをいたしまして」

と、行儀よく両手を仕える。十八、九でもあろうか、多少貧にやつれているが、しっとりと落ち着いた初々しい新造ぶりである。

「いや、こちらこそお手間を欠かせて、申し訳ありません。実は、三井の留守中、拙者もその辺まで出かけてきたいと思いますので、しばらくの間お願いいたします」

「はい、行きとどきませんけれど、行っておいでなさいませ」

「御承知のとおり、家の中はなんにもないのですから、もし人でもたずねてまいりましたら、用件を聞いておいていただけばよろしいので、ほんのお心づかいは御無用に願います」

「かしこまりましてございます」

雪太郎はふらりと路地を出てきた。

別にどこへ行くという当てもないのだから、万年橋をわたって、すぐ向こうに見える長い新大橋が目につくと、なんとなくそれをわたってみる気になった。

秋の日はからりと晴れて、広々とした大川の

流れが藍色に澄んでいる。
——わしもついに江戸のほこりになったか。
さっきの堅田の話を思い出して、妙に胸にしみてくる。堅田や三井にはまだ時世と時節さえ得れば仕官のたのしみもあるが、雪太郎は生涯、浪人で終わらなければならない因果をしょっている。
——考えてみると、楊枝削りの内職などおぼえても、しようがなかった。
なんとか浪人で身の立つ工夫をしなければ、本当に江戸のほこりで終わってしまわなければならないのである。
——それに、わしは堅田のように賢夫人を迎えるという自由さえ禁じられている。
雪太郎はふっと露姫の人形のような高雅な顔を思いうかべて、夢のような気がしてくる。
露姫はこの春十六歳で和州郡山十万石松平又一郎のもとへ輿入れをした明石の松平家の第三女である。
緋の大輪のぼたんのつぼみがいまにも花になろうとするような初々しくもおおらかな生まれつきで、生母お綾の方とずっと築地の中屋敷で成長した。
郡山との縁組みがおこったのは去年十五歳の秋で、露姫はどうしても承知しない。
「露はまいりたくありません」
と、はっきりいって、だれがそのわけを聞いても、ただわらっていて返事をしないのだという。
「わしも相当強情だが、女の強情は困る。お方さまもだいぶ手こずっているようだから、雪、その方まいって、一度よく聞いてみてきてくれ。そちなら昔なじみだから、なにか話すかもしれぬ」
おなじお綾の方の同腹の若殿信太郎の申しつけで、なんの気もなく中屋敷へ出向いたのが、雪太郎の最大悪日になろうとは、まったく思いもかけないことだった。

「雪、お庭へ出ましょう」
露姫は雪太郎にもただわらっているだけで、散々手こずらせてから、ふいに庭へ誘った。
中屋敷の築山からは品川の海が青く見晴らせる。からりと晴れた秋の日の午後で、飛び交うかもめの羽ばたきが日に輝いて真っ白だった。
「雪、かくれんぼをしましょうか」
あずまやの前に立って、黙って海をながめていた露姫が、にっとわらいながらこっちを振りかえった。
「はあ」
冗談じゃないと雪太郎は思った。まだ姫君が七、八つのころ、ここでかくれんぼの相手はしたことがあるが、今は縁組みさえ持ちあがっている姫君を相手にそんなまねをしたら、それこそ切腹ものである。
——そうか、お姫さまはまだ子供がぬけきらないんだな。
だから、なんとなく縁組みというものが怖いのだろうと、雪太郎は露姫の顔を見ていた。
生母お綾の方の注意があったのだろう、腰元たちはずっと離れた築山の中腹で待っていて、ここは二人きりだった。
「雪、今日こそ姫の心の中をよく聞いてみてください。たのみますよ」
さっきごきげんうかがいに出た時、お綾の方からもくれぐれもたのまれている。お綾の方は雪太郎の一門の中から藩主の目にとまったお部屋さまだった。
「お姫さま、あなたはお輿入れが怖いんですね」
雪太郎は思い切って聞いてみた。
「違います」
露姫はきっぱりといって、一瞬怒ったような顔をする。
なにか燃えるような目で、きっと雪太郎を見すえてから、くるりときびすをかえして、あずまやへは入らず、海の見える斜面の日だまりのほうへ静かに歩き出す。

少しすねたような歩きつきだった。

「おあぶないですよ、お露さま」

しようのないだだ姫さまだなと思って、雪太郎はいそいで後を追い、手を取ってやろうと少し前へ出て、横から右手をさしのべた。

「雪――」

露姫は雪太郎のさし出した手をしっかりと取って、

「露は、露はそなたのところへなら、まいります」

と、真っ赤になりながら正面を切って、ひたと目をあわせてきた。

「なんとおおせられます」

雪太郎はどきりとして、耳を疑わずにはいられない。

「露は、ほかのところへは、どこへもまいりたくありません。そなたのところへまいります。いけませんか」

姫君は大胆にも雪太郎の胸へそっと顔をうずめてくるのである。

「抱いて、雪。切ない」

あえぐように肩をはずませながら、いまにも泣き出しそうにいう。

――これは一体どういうことなんだ。

雪太郎はぼうぜんとしながら、しかし言われるとおりに露姫の肩を抱いて当惑していた。

「雪は露がきらいですか」

「きらいじゃない。好きです」

「では、おぼえていますね。子供の時かくれんぼをして、雪は露を抱いてくれました。その時、露を、かわいいからお嫁にすると約束しましたね」

胸の中から、じっと熱い目を見あげてくる姫君だった。

あっと、肩を抱いている雪太郎の手に、思わず力がはいる。たしかにそんなことが一度か二度あったのをおぼえている。

まだ自分が故郷から修業に出てきたばかり

で、姫君はたしか七つ、自分は十七だった。おかっぱ姿があまりにも人形のようにかわいかったので、たわむれにひょいと胸へ横抱きにすると、人形は両手で首を抱くようにからみついて、ひたとほおをよせてきた。

「お露さんあんまりかわいいから、わしのお嫁にしてしまおうかな」

「本当、雪」

「しかし、お方さまにしかられると怖いな」

「露、だれにもいわぬから、いいの」

それは夢のようなたわいのないその時かぎりのたわむれだったが、だれにも言わぬといった幼い露姫の胸の中には、そういうことが人に知れては悪いという娘心が、すでにはっきりと芽吹いていたのだろう。

それからしばらくたった別の時、居間でほんの少しの間、二人きりになったことがある。露姫はいきなり雪太郎のそばへ立ってきて横に並んで座り、

「雪、約束ですよ」

と、うれしそうにわらったことがあった。

それから八年、姫君が成長するにつれ、そこは主と家来だから、おたがいに行儀よく分をまもって、雪太郎にすればほんのたわむれにすぎなかったのだから、そんなことは忘れるともなく忘れてしまっていた。

それを乙女心のいちずに、八年間思いつめてきたればこそ、郡山家との縁組みをがんとして承知しなかったのだと、思いそこにいたると、雪太郎はもともと自分のまいた種なのだから、

「姫君――」

思わずいじらしさが先に立って、しっかりと露姫の肩を抱きしめずにはいられなかった。

「お露さま、それはなりません。お主と家来の垣、この世ではどうしようもない宿命なのです」

雪太郎は胸の中の、いちずな露姫の顔へさとすようにいった。

「どうしてもだめなのですか、雪」

「それは、まれには姫君が家来のもとへ縁組みする例がないではありませんが、大名の姫君は大名に嫁ぐ、それが現世のおきてです。世の中のおきてを破るということは、だれにもせよ、決して幸せなことではありません。ことに、武家に生まれた者は武家の作法にしたがわなくてはならないきびしい約束があります。その約束にそむいて、もし雪がお露さまをくださいと、殿さまにもせよお方さまにもせよ申し出ることは、不義者として御成敗をうけるだけの結果にしかなりません」
「では、露はどこへもまいりません。やっぱり尼になります」
「お露さまを尼にするようなことになれば、雪は切腹して殿さまにおわびしなければなりません」
「いいえ、露が黙っていれば、だれにもわかりません」
「人が知らなくても、自分が知っています。第一、お露さまが尼などになるのを、雪は黙って見ているにしのびません」
「では、露はどうすればいいのです。雪」
「来世をお待ちください。この世では素直にこの世にしたがって生き、来世を待つのです。そのかわり、雪はこの世で決して妻はめとりません」
「来世を待つのですか」
「そうです。雪はきっと来世を待っています。命にかけて誓います」
　露姫はひしと胸にすがったまま、容易に顔をあげようとはしなかった。が、自分でもとてもかなわぬ望みだとは、よく承知していたのだろう。承知していればこそ、いままでだれにもいわずに、今日のくる日をじっと待っていたのだ。
「雪、もう一度だけ、昔のように抱いて——」
　やっと顔をあげた露姫の目には、涙が一杯たまっていた。
　雪太郎は思い切って露姫を抱きあげた。それはもう昔の人形ではなく、いまは乙女としてにおやかに成長した露姫である。
　自分がいまどんな大罪をおかしているか、雪太郎ははっきりと自覚しながら、乙女の熱いほおにほおずりして、それでもあきたらず、思わず愛情のくちびるまでかさねていた。
「来世こそ、——来世こそ」
「うれしい、雪」
　さざんかが一杯に色をつけている花かげの日だまりだった。
　自分の罪は自分でつぐなわなくてはならない。間もなく江戸を去った雪太郎は、国もとの父にだけ事実をうちあけて、勘当してもらい、生涯浪人を自分で誓ったのである。
　——この川下にあたるなあ。
　雪太郎はいつか新大橋の中程に立って、藍色の大川をながめていた。築地の中屋敷は、永代橋を越したはるかな川下にあたる。
　無論、いまは露姫は郡山家へ嫁してそこにはいないはずだが、川面をかすめては飛び交うかもめの白い羽ばたきにも、あの日が思い出されてくる雪太郎だった。
　——おなじ江戸のほこりでも、このほこりはちゃんとかわいいお露さまの胸の中に生きているほこりなんだからな。どこにいても粗末にはできないほこりなんだ。
　そういう悲しい因果があるから、雪太郎はわが一生を清く正しく、そして、できれば世の中のために少しでも役に立って終わりたいと考えている。
「失礼でございますが——」
　ふっとそばへきて、小腰をかがめる中間風の若い男があった。
「わしになにか用かね」
「ぶしつけではございますが、あなたさまはこのほど江戸へまいられました比良雪太郎さまでございましょうか」
「よく知っているな、わしは比良雪太郎という

浪人者だが」

「手前は松江と申すお中老さまの供の中間でございますが、お中老さまがあなたさまをお見かけいたしまして、ぜひ一言ごあいさつが申し上げたいと、あれにてお待ちになっています。おいでいただけませんでしょうか」

「なに、松江どのが――」

見ると、なるほど、数間向こうの橋の上に、供の者七、八人をしたがえた女乗り物が、欄干に片寄せておりている。この行列は今し方深川のほうからわたってきて、雪太郎のうしろを通りすぎていったものだ。

「よろしい、お目にかかろう」

程ガ谷の宿で別れたきり、その後どうしたろうと心配していたのだから、松江と聞けば雪太郎もなつかしい。

中間にともなわれて乗り物のそばへくると、駕籠は往来の者に顔を見られないように、欄干側のほうのとびらをあけて待っていた。

「お中老さま、おつれいたしましてございます」

中間がひざまずいて取り次ぎ、後へさがると、供の者たちは侍も女中も雪太郎に会釈をして、少し駕籠から遠ざかる。

「やあ、松江さん――」

中間にかわって駕籠の前へひざまずいた雪太郎は、思わずなつかしい目をみはった。

「比良さま、おなつかしゅうございます」

顔を輝かせて迎えた松江は、白に緋羽二重をかさねた正装の上から豪華な打ち掛けをきて、片外しに結いあげた御殿髷もぴたりと格にはまり、見違えるようなお中老さま姿になっていた。

「なつかしいなあ、松江さん」

「こんな乗り物の中からごめんなさい、雪太郎さま」

「いや、そんなことはかまわぬ。しかし、こうして見ると、お役目は立派に果たされたようだな」

「ありがとうございます。おかげでどうやら役

目だけは果たしましたが、実はこれからまだまだ大役がございまして、申しかねますが、ここもまだあの道中のつづきとおぼしめしていただきとうございます」

つまり、余計なことはなにも聞いてくれるなというのだろう。

「承知しました。すると、まだ嫁だと思ってもいいのかな」

心やすだてに、雪太郎はつい冗談が出る。

「はい。駕籠の中からちらっとお見かけして、あたくし、あんまりおなつかしかったものでございますから」

「しかし、わしも松江さんの無事な顔を見て安心しました」

「本当にいろいろ世話になりまして、――あの、いまはどちらでございますの、お住まいは」

自分のほうのことはなんにもいわず、相かわらずずるい松江である。

「わしはすぐそこの大工町というところの裏長屋に浪宅をかまえた。とうとう江戸のほこりになったわけです」

「ほこり――?」

「さよう。吹けば飛ぶ身軽な浪人者です」

「ほ、ほ、おうらやましい御身分ですわ。あの、ぜひ一度おたずねさせていただきます」

「とんでもない、お中老さまなどのお越しあそばす家じゃありません」

「あんなことを――。梅が香や隣は荻生なんとやらで、きっと風流でございますわ、雪太郎さまのお住まいなら」

「あいにく、隣は堅田雁之助という若い浪人さん夫婦でね、――そうそう、その妻女が、どこか武家奉公の口はないだろうかといっていた、なかなかしっかりした貞女なんだが、いい口はないものかなあ」

無論、これも半分は冗談だった。

「かしこまりました。御恩がえしに、必ず心がけておきます。あの、雪太郎さまは御仕官なさ

いませんの」
「わしは少し子細があって、二君に仕えるわけにはいかんのです」
「悔しいと思いますわ、あたくし」
松江は心から惜しそうにいったが、
「あの、三井さまや吉松はどうなさいましたの」
と、思い出したように聞く。
「三井はわしといっしょに住んでます。吉松とは江戸へ入って別れたきりだが、そのうちたずねてくるでしょう」
「どなたもなつかしい。よろしくおっしゃっていただきます」
「承知しました」
「では、これで失礼いたします。そのうちきっとおたずねいたしますから、その時はどうぞ意地悪なさらないで、お寄せくださいませ」
「よろしい。では、失礼いたそう」
「お目にかかれて、本当にうれしゅうございました」
まだ名残惜しそうな目に、会釈をかえして、雪太郎は駕籠の前をさがった。
道をよけて片側をおそるおそる往来している通行人が、みんなそれとなく好奇な目をして通っていく。
供侍たちに目礼して、後へさがると、供の者たちはいずれも丁重に会釈をして、やがて駕籠があがった。
この供ぞろいから見ても、松江は奥では相当にらみのきくお中老さまなのだろう。
——お嫁にしなくてよかった。
雪太郎は浜町のほうへ橋をわたっていく行列を見送りながら、なんとなくほほえましかった。
それにしても、意外なところで意外な人に出会ったものである。
——世間は広いようで狭い。
しみじみとそんなことが考えられる雪太郎だった。
「おや、若だんな、今ごろどこで浮気をしてき

たんです」
雪太郎が新大橋をもとの橋だもとのほうへ引きかえしてくると、東両国のほうから内弟子のお浜をつれて帰ってきた春つばめのお妻が、顔も目も輝かしながら、いきなり派手に走り寄ってきて、腕をつかまえた。
往来の者がちょっとあきれ顔をして通りすぎていく。
「いま帰りか、姐御」
「ええ、いまお帰りなの」
「酒くさいな、少し」
「あら、ごめんなさい。若だんなはあんまりお酒好きじゃありませんでしたっけね」
「まあ腕を放せよ。人が見て通る」
「いいじゃありませんか。どうせ、いまにうちの人になるんだから」
臆面もなく流し目をつかいながら、
「さあ、いっしょに家へ帰りましょう。いいえ、そんなに酔っちゃいません。実は、ちょいとうれしい話があるもんだから」
と、しゃっきりと肩をならべて歩き出す。
「お浜、お前先へ帰って、うちの支度をしておいておくれ」
「はい」
小荷物を持たされているお浜は、おとなしくおじぎをして、先へ小走りに走り出す。少し寂しい面立ちだが、稼業柄になく品のいい娘で、性質も素直らしい。
「あの子はなかなかいい娘だなあ」
「若だんな、それ本気——」
そういうお妻の声のほうが、よっぽど本気に聞こえる。
「なにが本気なんだ」
「いいえ、あの子に変な気をおこしちゃいやだってことなの」
「冗談いうなよ。素直でいい娘だと、わしはただほめただけだ」
「それならいいけど、好きになられちゃ困っち

まうわ」
「おれは姐御のようにほれっぽくないから、大丈夫だよ」
「あんなことを――。あたしだって、ほれたのは若だんなだけです。こんなこと、初めてだわ」
「しかし、わしは感心しているんだ。姐御があの子の面倒をよく見てやる。親身になって育ててきたから、あの子は素直な心の娘でいられるんだ。正直にいって、姐御は少しがらっぱちなところがあるが、あの子はおっとりとしていて、お嬢さまといった品がある」
「おっしゃるのねえ、若だんなも。でも、あの子のことほめられると、あたしうれしいのよ。あの子にだけは苦労させたくないと思って、大事にしているんだもの。ねえ、若だんな、本当にあの子にだけはほれちゃいやですよ」
「よし、わかった。きっと、ほれないことにする」
「そのかわり、あたしにならいくらほれてもかまいません」
　万年橋をわたって第一の横町を左へ曲がると大工町になる。その横町の三つ目の広い路地を右へ曲がると、突き当たりは小名木川で、左側の三軒目の二階家がお妻の家である。
「さあ、若だんな、お上がんなさいな。今日はいい話があるんだから」
　お妻は格子をあけて、いやおうなしに雪太郎を玄関へ押しこみ、ぴしゃりと格子をしめてしまう。
　お妻の家の台所口の筋向かいが、堅田の家の玄関になっている。
「お浜うじ、すまんが堅田さんへ声をかけてな、比良はいまもどってここへ立ち寄っている、ありがとうございましたと、妻女に伝えておいてくれぬか」
　雪太郎がお妻の茶の間へ通るとすぐ、お浜にそうたのんだ。
「はい」

　お浜は茶の支度をして、台所口から出ていったようである。
「あら、今日三井さん留守なの」
「うむ。実は、中坂下の大俵から、さっき堅田さんのところへ迎えがきてねえ」
　雪太郎はざっとそのいきさつを話して、
「もし堅田さんに間違いがあるといかんと思ったものだから、三井にそっと用心棒をたのんでやったんだ」
　と、事実を打ちあける。
「あんたって人、ほんとによく気がつくのね。だからあたし好きだなあ」
「ありがとう。それで、姐御のほうのいい話ってのは」
「その前にちょいとうかがっておきますけど、若だんなはあたしがもしいい仕官の口をさがしてあげたら、行ってくれますか」
　二つ返事だろうといいたげに顔を輝かしている長火ばちの向こうのお妻を見ると、雪太郎はなんとなく返事がしにくくなってくる。
「今日はまた、ばかに仕官の口がある日だなあ」
「いいえ、あたしは大俵なんかのと違うんです。そんないんちきなのといっしょにしちゃいやだわ」
「そうか、その口というのは、どうしてもわしでなければいけないのかね。堅田うじじゃだめなのか」
「そりゃ先さまは堅田さんでもうんというかしれないけど、それじゃあたしがつまらないじゃありませんか」
「まあそういうなよ。わしにはやっかいな金魚がついているんで、仕官もお嫁も一生だめなことになっているんだ」
「その話は聞いたけど、若だんなはそんなに金魚に義理を立てて、本当に一生ひとりで暮らす気なの」
「まあ、それよりしようがなかろうな」
「お部屋さまもだめ――」

正直にお妻の目の色が変わってくる。
「うむ、因果な生まれつきさ」
「がっかりだなあ、あたし」
お妻はまじまじと雪太郎の顔を見詰めて、
「いいえ、あたしはあきらめませんからね。清姫みたいに、へびになって、あんたの体に巻きついてやる」
と、意地になってくる。
「まあそうむきになるなよ。こうしておなじ長屋に住んで、仲よく暮らしていければ、なにもへびや鬼にならなくたって、おたがいにたのしい。それでいいじゃないか」
「いけないたって、あんたがその気ならしようがないけれど、あんた本当にお部屋さまなしで暮らせるかしら」
どうしてもお部屋さまぐらいにはなりたいお妻のようだ。
「とにかく、その姫御のほうの仕官の話ってのを聞こうじゃないか。うちには三井鐘太郎藤原の吉秀うじもいることだしな」
「つまらないなあ、若だんなといっしょでなければ、あたし」
お妻はまたしてもがっかりした顔になる。
「そんなにいい口なのかね、姫御のほうの口ってのは」
「なんだか知らないけど、今日楽屋へ口がかかってきて、あたしお浜をつれて東両国の鳥安へ行ったんです。お客は大俵なんかとは段が違う立派な中年のお武家さまで、曲崎将監さまとおっしゃるとかで、橋渡しの花長親分も、お供の若侍も、お重役お重役といってましたから、きっとどこか大藩の御家老さまじゃないかしら」
「なんだ、まだ主家の名はわからんのかね」
雪太郎はうっかり口走ってしまってから、
「そうか、場所が場所だからな、話がきまってから、改めて正式の対面ということになるんだね」

と、へそを曲げられないうちに、いそいで言いなおしておく。
「そうなんです。今日のはほんの瀬ぶみってところなんでしょう」
「それで、その曲崎さまは、姫御が美人なんで、ぜひ殿さまのお部屋さまに――」
「若だんな、あたし怒るから」
「失礼失礼――まあ怒るな。日ごろ姫御の親切が身にしみているもんだから、つい気がまわりすぎるんだ」
「もうあたし、この話はことわってしまいますからようござんす。あたしだってなにも一人で出世なんかしたかあありません」
とうとうお妻はへそを曲げてしまったようだ。
「そういわれると、余計聞きたくなるな。もうすっかり話がすむまで、決して口は出さないから、一通り聞かせてくれないかなあ」
「いいえ、もういいんです。あたしは一生長屋のお部屋さまで暮らします」
味なすねかたをするお妻だ。
「なあんだ。それじゃ姫御の出世っていうのは、やっぱりお部屋さまじゃないのか」
「違うんですってば――。殿さまが堅人で、あんまり学問にばかり凝りすぎる。あたしとお浜に腰元になってもらって、時々お気晴らしのお相手をしてもらいたい。うまくいくようだったら、あたしをお中老さまにするというんです」
「なるほど、こりゃありそうな話だな」
雪太郎はひどく感心した顔を見せて、後を引き出そうとする。
「しかし、学問に凝った人間をほぐしてやるのは難しいぞ。ほうっておけば気ちがいになりかねない性質の殿さまなんだろうからな」
「そうなんですって――。うまくいけばいいがって、お重役さまがいうから、お気持ちさえまぎらせればいいんでしょう。そんなのなんでもありませんて、あたしいってやったんです。そ

のくらいのことができなけりゃ、花の両国で高座や舞台はつとまりませんからね」
「うむ、たしかにそうだな」
「お重役さまも、なるほどとおっしゃって、ではぜひ御奉公してみてくれないかっていいますから、あたしにはひもがついているんです、浪人さんなんだけど、いまさら別れるのはつらいからって、いってやったんです」
お妻の目がなんとなく熱ぼったくなってくる。
「先方さまでは、そんなひもがついているんでは困るといったんだろう」
雪太郎はわらいながら聞く。
「いいえ、一度ぜひ会いたい、その上で、そんなにたのもしい人なら、いっしょに召し抱えてもいいといってました。でも、若だんなはおいやでしょう」
うらめしそうなお妻である。
「うむ、わしは困るんだが、三井じゃいかんかなあ」
「三井さんはあたしのひもじゃないじゃありませんか。いやな人ねえ」
「ああ、そうか。ちょいと惜しい話のようだがなあ」
口ではいったが、これも山師大俵と五十歩百歩の口だと、雪太郎には読める。学問に凝っている大名を、手品でなぐさめようなどと考えるのも変だし、そういういわば大道芸人を、いきなりお中老や腰元にするなどということは、格式のやかましい大名の奥でできもしないし、また、なれといってもそう簡単になれるものではない。
要するに、その曲崎将監という男は、よかれあしかれ、なにかほかに目的があって、お妻をだまそうとしているに違いない。
「その橋渡しの花長ってのは、どんな男なんだね」
「東両国一帯をなわ張りにしている香具師の親

分なんです。花屋長兵衛だから花長さん」
「幡随院長兵衛のようにおとこぎのある親分かね」
「さあ、どうかしら。あんまりいい評判は聞かないけど」
「そうか。じゃ、姐御も考えたほうがいいようだな」
「だって、花長親分はただ橋渡しだけで、曲崎さんのほうとは別に深い引っかかりがあるわけじゃないんでしょう。でも、いいんです。わたしもうその話はことわりますから」
お妻はすっかり興がさめてしまったようだ。
「あら、三井さん、若だんなはうちへきています」
台所で水仕事をしていたお浜が、路地へ呼んだ。三井が帰ってきたらしい。
「お浜、三井さんにお寄りなさいっておいい」
「堅田さんもごいっしょです」
「じゃ、堅田さんも呼んでおあげ」
「はい」
お浜は堅田にも声をかけたが、堅田は後刻といって、愛妻のところへ帰ったようだ。
「やあ、若だんな、ただいま――」
三井が台所口からのっそり茶の間へ入ってきた。
「姐御、おじゃまいたす」
「さあ、どうぞ――。三井さんこのごろだいぶお行儀がよくなったんじゃないかしら」
「そうかなあ。三度三度飯が食え、寝酒までのめれば、おおかみもいつか人になれてくるだろう」
三井はあかるくわらっている。
「堅田うじといっしょのようだったね」
雪太郎は早くその話が聞きたい。
「うむ、帰りに肩をたたいてやると、なあんだそうだったのかと、若だんなの好意を感謝していた」
「じゃ、あっちの話は、おだやかにすんだんだ

な」
「大俵先生、今日は大いに気取っていて、なかなかおもしろかったそうだ」
三井がにやにやわらい出す。
「それで、仕官の口というのは本当だったのかね」
雪太郎にすれば、この春一度ぺてんにかけて十両まきあげているんだから、いまさら本当の話が出るはずがないような気がするのだ。
「つまり、話というのは、なんでもある大名の分家さまがこんど本家をつぐようになる。ところが、大きな声ではいえないが、その本家に別の世つぎを立てたい家老がいて、これがひそかに一味を集めて暗躍しているから、たとえ話がきまってその分家さまが本家へ乗りこむにしても、うっかり先方の家来は信用できない。そのために、今から腹心の家来を召し抱えておきたいので、そういうわけだから当分支度金しか出ない。その上、家来となってお味方につくからには、必ず主人の申しつけには背かないという誓紙血判がいる。それでよろしければ、支度金として即座に金五両下しおかれるが、いかがでござるなという話で、玄蕃ぎつねは二つ返事だろうという顔だったそうです」
「ふうむ。つまり、誓紙血判をした上でないと、先方の名は言わない仕組みだな」
「そうなんだ。そこで、堅田うじは、新規お召し抱えは何人ぐらいですかと聞いてみたそうだ。さよう、腕の立つ者ばかりを十人ほど求めておられる。その人選を拙者が依頼されたのだと、大俵は大いに得意だったらしい。先生もはせ参じるのですかと、堅田うじがまた聞くと、無論わしは軍師として招かれているという。お話の様子ですと、相当命がけの御奉公になりそうですなと念をおしたら、侍が主に仕えるということは、命がけにきまっているではないかと、先生苦い顔をしたそうです」
「それは主人に命をささげるのは侍として当然

な話だが、山師先生に命をささげるようになってはつまらんからな」
「一度立ち帰って、家内ともよく談合してから御返事いたしますと、堅田うじは答えて引きさがってきたそうです」
「それは賢明だった」
「この命はまだ五両では売れませんと、堅田うじもわらっていた」
「しかし、さすがに江戸は広いねえ。姐御のほうにも、今日さる大名のお重役から、ぜひお部屋さまにという口が――」
「違うっていうのに――。お部屋さまじゃない、お中老さまじゃありませんか」
お妻が引ったくるように言いなおして、雪太郎をにらむ。
「ふうむ、姐御のほうにもねえ。今年はかぼちゃの当たり年かな」
「なんですって、三井さん」
「これは失礼――。ゆうべおすそわけにあずかったかぼちゃは、たしかにうまかったなあ、若だんな」
「おぼえてらっしゃい、三井さん。あたしはなにも三井さんにおかずを運んでるんじゃないんですからね」
「よく承知いたしておる。姐御には悪いひもがついているでな」
三井はちゃんとお妻殺しの文句を心得ている。
「そういえば、三井、わしは今日箱根のお嫁に会ったよ」
「箱根のお嫁って、松江さんのことかね、若だんな」
三井がびっくりした顔をする。
「うむ、その松江さんだ。さっき貴公たちが出ていった後で、ぶらりと新大橋の上まで出てみると、立派な女乗り物がうしろから橋へかかってきて、一度は通りすぎたが、橋の真ん中でその駕籠が止まったんだ」

「なるほど——」
「中間が呼びにきてね、比良さまでしょうというから、そうだと答えると、お中老さまがお目にかかりたいと申していますからと、その駕籠の前へつれていかれた」
「ふうむ。じゃ、あの娘はどこかのお中老さまだったわけだな。そういえば、すばらしくしっかりした娘だったからな。で、なんといっていたね」
「道中いろいろお世話になりました。おかげさまで無事に役目は果たしました。あんまりなつかしかったものだからと、よろこんでいた」
「どこに仕えているんだか、それは言わないのか」
「うむ、まことに申しかねるが、まだあの道中のつづきだとおぼしめして、駕籠に乗ったままこんなところから失礼しますと、のっけにちゃんと一言くぎをさされているんだ。相かわらず、すばらしく頭がいい」
「まったくだなあ」
「そのくせ、比良さまは御仕官の御希望はと、気を持たせるようなことをいう」
「ぴしゃりとことわったんでしょうね、若だんな」
　お妻が長火ばちの向こうから、目を光らせながら切りこんでくる。
「無論、ことわった。そのかわり、御殿奉公をしたい貞女が一人いるんだが、そういう口はないかとたのんでおいた」
「そりゃいい。堅田うじの妻女の口だろう」
「うむ、いずれ浪宅をたずねるといっていた」
「なんですって——。その女がここまで押しかけてくるっていうの。ずうずうしい」
　お妻は内心むかむかしてたまらないようだ。
「まあ、姐御、そう心配するな。この若だんなは、そのお中老さまと、道中だけお嫁の約束をして、二晩二人きりでまくらをならべて寝ながら、いつも先にいびきをかき出していたくらい

の偉物なんだ。普通の男とは違う」
「知ってるわ、そのくらいのこと。だから、あたしがほれちまったんだもの」
「あれえ、こいつは手放しだ。姐御にはまったく恐れ入る」
　三井は感心したようにわらいながら、
「しかしなあ、若だんな、わしはふっと考えたことがあるんだ」
　と、急に真顔になる。
「なにをだね」
「かりそめにもだな、夫婦の約束で一つ部屋へ二晩泊まった。女としては忠義のために、どうしても若だんなをたよらなければならなかったんだから、いざという時は覚悟をしていたと思う。たとえ身はまかせても、忠義のほうが大切だという悲壮な覚悟をな」
「さあ、どうだかな」
「第一夜は男に先にいびきをかかれてほっとした。そして、たのもしい男と思ったとたん、女ならそこに尊敬と恋慕の情がわく。だから、第二夜は自分からはさそえないまでも、本当にお嫁にされてもいいと考えていた。——女ってそんなものだろう、姐御」
「三井さん、けしかけちゃいやだったら、そんな」
　お妻の顔がなにか泣き出しそうになってきた。
「いや、別にけしかけるわけじゃないが、わしにはそういう時の女の悲壮な気持ちと、若だんなの胸の中にあるもっと悲壮なものがちゃんとわかるような気がして、美しいなあと思うんだ」
「三井にも、そんな味なことがいえるのかなあ」
　雪太郎はからかうようにいって、静かな微笑をたたえている。
「バカにしちゃいかん。これでも武夫だからな、物のあわれということはちゃんと心得ているんだ」
「ねえ、藤原の吉秀さん」

「なんだ、姐御、改まって」
「それでも鐘太郎うじは恋ってものしたことあるの」
「あるともと言いたいが、わしはまず出世、それから女と考えていた。ところが、出世をしないうちに、事情やむなく主家を飛び出して、食い詰め浪人が五年、そりゃ男だから女あさりは多少やったが、恋だのいろだのという物のあわれは味わうゆとりなんかなかった」
「そうでしょうねえ。よっぽど物好きな女でなくちゃ、三井さんなんかに物のあわれは感じやしないでしょうからね」
「なあんだ、ひでえことになるもんだ」
三井は苦笑しながら、
「若だんな、もうおいとましよう。わしは台所の物のあわれが恋しくなった」
と、茶わん酒の手まねをしてみせる。
「だめよ、まだ帰っちゃ。三井さん、今夜あたしとお酒の飲みっこしようか。若だんなじゃ相手にならないから」
「姐御は物のあわれを持てあましているんだな」
「そうよ。どうせあたしは一生長屋のお部屋さまなんですってさ。ことわっときますけどね、若だんな、もしそのお中老さまがここまで押しかけてきたら、あたしは遠慮なく出刃包丁を持ってあばれこみますからね」
その晩お妻はとうとう三井に酔いつぶされて、くりかえしくりかえし金魚とお中老さまの悪口をつきながら、雪太郎にからみついていた。
翌朝——。
「三井、たのみがある」
おそい朝飯がすむと、雪太郎はふいに言った。
「なんだね、若だんな」
「ここに金子を五両つつんでおいた。昨日堅田うじは肥前忠吉を売りたいようなことをいっていたな。もしあれを売る時がきたら、ぜひわしが所望したい。これは前金としてあずけておく

といってな、うまくおいてきてくれぬか」
「そうか」
三井はまじまじと雪太郎の顔を見てから、
「よし、引きうけた。きっとうまくおいてきてみせる」
と、何度もうなずいてから、雪太郎の袴をはいて出ていった。
「たのうむ」
間もなく隣の玄関先で、三井の声が呼んでいる。
「はい」
返事があって、しとやかに障子をあけ、
「お越しあそばしませ」
と、笑顔で両手を仕えたのは妻女の千代である。
「堅田うじ、御在宅でござろうか」
「はい、おりましてございます」
「三井鐘太郎藤原の吉秀、ちと御意を得たい儀がござってまかり越したが、御引見くださるでござろうか」
三井がいんぎんに取り次ぎをたのんでいると、
「引見つかまつる。どうぞおあがり願いたい」
と、茶の間から雁之助が直接声をかけてきた。
「取り散らしておりますけれど、さあどうぞ」
千代は茶の間へ引きかえして、いそいで自分の針仕事を片寄せる。
この夫婦はとっくに朝飯をすませて、もうそれぞれ自分の内職に精出していたのだろう。雁之助は楊枝削りの小机をわきへどけて、木くずだらけの前掛けをそっと外していた。
「堅田さん、仕事をしながらでもよかったのに——」
三井は妻女のすすめる座布団に座りながら、こんどは気軽に出る。
「いや、友あり、遠方よりきたる、また楽しからずやでござってな」
江戸に友達のない堅田は、よき隣人のできた

のを、とてもよろこんでいるようである。
　この家もあまり道具らしいものはない貧乏所帯のようだが、女っ気があるだけに掃除が行きとどいて、なにか温かみのあるのは争われない。
「三井うじ、昨日は失礼した」
「いや、拙者こそ」
「ゆうべはだいぶおにぎやかのようでござったな」
　すぐ前がお妻の家なのだから、よくわかるはずである。
「実は、前の姐御(あねご)と酒合戦をやりましてな、ぜひ堅田うじを仲間にと姐御はいったんだが、いや、堅田うじは妻女のそばへおいてあげたほうがいい、今日は半日留守にしたのだからと、拙者がとめました」
「おかげさまで――」
　茶をいれてきた千代が、わらいながら感謝の意を表す。
「正直に言いますとな、拙者などもさしみのつまみたいなもんで、姐御のお目あてはうちの若だんななんだから、迷惑千万」
　三井は急に声をひそめて、ちらっと舌を出してみせる。
「姐御はだいぶ若だんなに御執心のようでござるな」
「さよう、俗に足駄(あしだ)をはいて首ったけということがあるが、姐御のは竹馬に乗っているんだからあぶなっかしくて、――はてな」
　ふっと小首をかしげて、千代を見る三井だ。
「どうかなさいましたの」
　なにか落ち度でもあったかと、千代が初々しく聞く。
「いや、こちらさんは竹馬で間に合わなくて、はしごをかけたとかうかがっているが」
「まあ、お人の悪い――」
　千代は真っ赤になって、台所へ逃げていく。
「しかし、若だんなはなかなか人物でござるな」
　堅田が感心したようにいう。

「御貴殿もさように思われますかな」
　三井はすかさず切りこんで行く。

毒　虫

「比良うじはたしかに人物です。第一、我々とは育ちが違うようだ」
　堅田はもう一度誓言でもするようにいう。
「おほめにあずかってかたじけない。ごらんください。拙者は今日、袴(はかま)をつけています」
「なるほど」
「三井鐘太郎藤原の吉秀、今日は若だんなの名代として参上いたしました」
「これはこれは――。すると、手前も袴を着用しなければなりませんな」
「いや、それには及びません。堅田うじは当家の御主人でござるからな」
「恐縮――」
「そこで、これから名代の口上をのべます」
「どうぞ」
「少し気にさわるようなことを申し上げるかもしれぬ。それは拙者の口べたと御寛容ねがいたい」
「御念の入りましたことで――」
「昨日、堅田うじは、お差し料肥前忠吉(ひぜんただよし)を売却したい意志があるように申されましたな、これは竹馬どのの反対にて、思いとどまられた」
「はい、そのとおりでござる」
「実は、うちの若だんなが、今朝になりましてな、万一堅田うじがあれを手放すようなことでもあると、まことに惜しい。そういう時にはぜひ自分にゆずっていただきたい。もしも、黙って売却されてしまってからでは残念至極だから、念のために、そういう時の場合の予約金をうっておきたい。そんなことを言い出しましてな、それは若だんな少し失礼じゃないかと、手前は忠告いたしましたが、なんでもこれをお納め願ってこい、それでないと安心できぬと、育ちがいいものですから、そうなると強情でして

な、いかがでござろう、手前に免じて、まずこれをお手もとへお納め願えまいか」
　三井はまことしやかにいってのけ、そっと包み金を堅田の前へおいた。
「なるほど――」
　堅田はそういったきり、しばらく黙念と思案している。
　三井が心配する。
「お気にさわられたかな」
「いや、せっかくの御名代、雁之助よろこんでおうけいたす」
　堅田は決心がついたように、包み金をうけて、ていねいに会釈をした。
「安心いたした。名代の顔が立ちます。ついては、もう一つ」
　すかさず三井が、刀の話はそれきりに流そうとして、ひざをすすめる。
「まだ袴のつづきでござるか」
「いや、こんどは手前の老婆心から――」
「うけたまわりましょう」
「実は、竹馬どのの儀でござるが」
「三井うじ、せっかくでござるが、あの竹馬は当方においても毛頭売却の意志はございません」
　堅田がわらいながら先手を打ってくる。
「恐縮――。さようでござろうな。実は、ひょっとすると、奥方に仕官の口があるかもしれないと、若だんなはいっているんだが、これは俗にいう生木を裂くたぐいだ。よろしい、手前から断然若だんなにことわっておきましょう。おじゃまつかまつった。しからばおいとま――」
　三井は改めて両手をついて、大きなおじぎをした。
　その日の宵（よい）もすぎようとするころ、
「若だんな、今晩は――」
　がらりと格子があいて、お妻の声がしたと思うと、もうさっさと茶の間へあがってきて、

「ああよかった。もう寝たかと思って、心配してきたの」
　と、火ばちの前の雪太郎のそばへ、横からぺたりとひざを突きつけるようにして座った。
　今夜もいくらか酒が入っているらしく、いい顔色をしている。
「姐御（あねご）、ゆうべはごちそうに相なった」
　そばから三井がわらいながらあいさつをする。
「あら、ごめんなさい。三井さんそこにいたのね」
「やれやれ、お前さんの目には若だんなの顔しか見えないとみえる」
「そうなんです。寝ては夢起きてはうつつまぼろしの、――憎いなあ、この人」
　お妻の白い指が素早く雪太郎のひざをつねっている。
「痛いな。姐御、不意討ちはいかん」
「ああ、そうそう、今夜はたいへんなの。若だんな、あたしといっしょに行ってください。駕籠（かご）を持って迎えにきたんですから」
「どこへ行けというんだね」
「薬研堀（やげんぼり）の松月っていう料理屋なんです。昨日話したでしょ、曲崎さまのこと。今日も夕方からお迎えをうけて、お浜といっしょに松月へ出向いたんです。そして、あの話はきっぱりとおことわり申し上げました」
「うむ、それで――」
　なにか裏がありそうだと見ていただけに、雪太郎は真顔にならずにはいられなかった。
「先さまはがっかりなすって、つまりそのひもというのが仕官は好ましくないというから、それもいやだと申すのかと、念を押してきました。はい、まことに申しかねますけれど、お妻はひものために生きているような女でございますから、どうぞおわらい下さいまして、そのお話は水に流していただきますと申し上げました」
「うむ」

「すると、そばから花長親分が、それでは橋渡しをしたおれがどうも御家老さまに気がすまない。どうだろう、その御浪人さんをここへ呼んで、もう一度話しあってみるというわけにはいかぬものかと言い出したんです。あたしは、たぶんだめでしょう、おなじことです、といったんですけれど、たってといわれてみると、それまでことわっては、なんだかあたしがうそをついてるみたいになるでしょう。しようがないから、駕籠を飛ばしてきたんです。ねえ、若だんな、すぐに行ってくれますね」

「そうか」

　雪太郎は三井と顔を見あわせる。どう考えても、お妻のような女をそれほど執心するには、それだけの理由が裏になくてはならない。

「姐御はわしの名を先方に話したかね」

「いいえ、そんなことといいやしません。向こうだってまだ殿さまの名は明かさないんだもの」

「こりゃくさいぞ、若だんな」

　三井がそばからいった。

「どうくさいの、三井さん」

「学問に凝っているという大名は、決して恥にはならぬ。名前をかくす必要はないからな。まして、姐御をこの人ならと見こんでの話じゃないか」

「三井、とにかくわしは一度その曲崎というのに会ってみよう。袴を出してくれ」

　そのほうが早いと、雪太郎は思った。

「行ってくれる、若だんな」

　お妻がうれしそうに目を輝かす。

「うむ、お浜が人質に残っているんだろう」

「人質だなんて、人聞きが悪い。あたしでなくちゃ若だんなはおみこしをあげてくれないと思ったから、あの子を残してきたんじゃありませんか」

「無論、それはそうだろうが、こっちの出ようによっては、それが人質にされるんだ」

「曲崎ってのは、そんなに悪い人なのかしら」

「会ってみなくてはわからんが、いずれにせよ、なにかたくらんでいることがありそうだな」

　雪太郎は話しながら、三井の出してくれた袴をつけてしまう。

「若だんな、わしがついていかなくてもいいか」

　三井が心配そうに聞く。

「いや、そりゃ大丈夫だ。貴公は城をあずかっていてくれ。だれがたずねてくるかわからんからな」

「あら、若だんなは昨日のお中老さまを、まだ待っているんですね」

　お妻の目の色が変わってくる。

「姐御はどうしてそう気が多いのかなあ。わしはこれから姐御といっしょに出かけるといってるじゃないか」

　雪太郎の声が思わず強くなると、

「ごめんなさい。あやまります。そんなに怒っちゃいやだ」

　お妻はびっくりして、おろおろと立ちあがる。

「いや、別に怒っちゃいない。――じゃ、三井、後をたのむ」

「気をつけてくれ、若だんな」

「なあに、案外こっちのひとり相撲かもしれないんだから――。出かけるぞ、姐御」

　雪太郎は刀を取りあげて、颯爽と玄関から路地へ出る。外には九日ほどの月があかるかった。

「待っててくださいってば」

「姐御、ころぶなよ」

　三井が玄関口からわらっていた。

　なるほど、路地の入り口に町駕籠が一丁待っていて、

「今晩は――。だんな、お供いたしやす」

と、駕籠屋がいそいで立ち上がった。

「いや、駕籠へ乗るのは姐御のほうだ。――姐御、乗りなさい」

「いいえ、あたしは歩くから」

「冗談いっちゃいかん。女を歩かせて、男が駕籠に乗っていけるか。病人じゃあるまいし」

「へ、へ、だんなはうまいことをおっしゃる。ねえさん、ああおっしゃるんだから、遠慮なくお乗んなさいまし」
後棒がわらいながら、垂れをあげてくれる。
「なんだか申し訳ないみたいだけど、じゃ若だんな、ごめんなさい」
「うむ、遠慮はいらん」
「駕籠屋さん、松月へかえるんです、わかってますね」
お妻がそういいながら、器用にすっと駕籠へ乗ると、その下駄を後棒が駕籠の布団の下へしまって、
「いいぜ、先棒」
と、後ろの棒へ飛びついていく。
お妻をのせた駕籠は、万年橋を渡って籾蔵の前へかかり、そこから左へ折れて新大橋をわたる。
薬研堀は橋を渡り切って右へ折れ、大川端をまっすぐ元柳橋へ出るのが道順である。
えんほい。
えんほい。
大川端は元柳橋までずっと諸侯の下屋敷、中屋敷の土塀、板塀つづきで、日が暮れるとほとんど人通りがなくなる。
「待てッ」
やがて、本多家の中屋敷の塀がつきようとするあたりまできた時、そこの横町からばらばらっと覆面の侍どもが四、五人飛び出してきて、駕籠の行く手をふさいだ。
「わっ、出たあ」
駕籠屋はたわいもなく駕籠をどすんとおろして、もう逃げ腰になっている。
――やっぱり出たな。
なにかそんな予感を持っていた雪太郎は、すっと駕籠の前へ出ていった。
「人違いをしないでいただきたいな。この駕籠に乗っているのは女だ。あなた方にねらわれるような者ではありません」

「いや、駕籠の女に用はない。貴様に用があるんだ」
覆面組の大将とも見える男が、ぐいと前へ出てきていった。
「わしに――」
「そうだ。浪人比良雪太郎を待っていたんだ」
「すると、貴公たちはこの間鈴ガ森で出会った御仁たちかね」
「さよう。覚悟するがいい」
「おかしいなあ。わしになんの恨みがあるんだね」
相手はさすがにぐっと言葉に詰まったらしい。
「わしは貴公たちに恨みをうけるようなことは、なにもしていない。この間の鈴が森でも、貴公たちのほうがわしを待ち伏せしていて、あらぬ嫌疑をわしにかけ、貴公たちのほうから真剣勝負をいどんできたから、やむなく相手をしたんだ。わしは、貴公たちのやっていることは、まだなんにも知らぬ。そのわしが、どうして覚悟をしなければならんのだね」
雪太郎は一応きっぱりと自分の立場をあきらかにする。
「気の毒だが、貴様は我々の仕事のじゃまになるんだ」
相手は悪たれたようなことを言い出す。
「すると、貴公たちは曲崎とかいう仁と一つ仲間なんだな」
無論、はじめからそうだとわかっているが、雪太郎は改めて念を押してみる。
「余計なことはいわなくともよい。ねらわれたが因果とあきらめて刀を抜け」
「それは暴言だ。侍たる者は、自分の都合や、利益のために人を切るもんじゃなかろう。それは追いはぎ、強盗のたぐいのすることだ、反省してみたまえ」
雪太郎はあくまで冷静である。
「なんのかんのといって、貴様命が惜しいのか」

「貴公の名は、たしか高柳峰十郎といったな」
「そうだったらどうする」
「貴公は人間のうちでも一番愚劣なバカ者だとけいべつする」
ぴしりとむちで打つような、痛烈な雪太郎の面罵だった。
「うぬッ、たたっ切ってやる」
高柳は痛いところを突かれて、かっと抜刀した。
「来いっ」
雪太郎も今夜は切る気で、つと大川を背にしながら同時に抜きあわせる。
「若だんな、あぶない」
さっきから駕籠を出て、事のなりゆきを心配していたお妻が、思わず金切り声をあげたのは、高柳についてきた覆面の四人が、これもいっせいに抜刀して、ばらばらっと高柳の左右へ並ぶなり剣陣を作ったからだ。
「えいっ」
「とうっ」
そのあたりからおびただしい殺気がむらむらとひろがっていく。
雪太郎としては、敵が何人いようとも、目当ては真ん中の高柳峰十郎一人だった。
すでに鈴ガ森で一度刃をあわせて、高柳の腕は十分わかっている。この男はおそらく、腕が立つから一方の大将に抜擢されているのだろう。雪太郎にとっては決して油断のできない強敵なのだ。
「えいっ」
「おうっ」
高柳は鈴ガ森では思わぬ不覚を取っている。腕はたしかに自分のほうがいくぶん上だという自信があるだけに、今夜こそはという腹があった。
しかも、たった今痛烈な面罵をあびせかけられている怒りが、火のように全身にたぎっている。

――くそッ、思い知らせてくれる。
鈴ガ森ではこいつの捨て身の突きに悩まされたのだ。今夜は敵の得意な突きで逆襲してやろう。それは敵の突きを封じることにもなるのだ。
が、雪太郎の構えは、五人に取りかこまれながら、この間とおなじで、なんの恐怖も感じていない伸び伸びとしたものがある。
このくそ度胸というか、怖いもの知らずというか、これだけは残念ながらあきらかに自分より一枚上と見るほかはない。
――よし、かまわず行け。
自分が率先して突っこんでいかなくては、仲間の四人には手の出しかねる相手だ。一本突っこんで敵の構えをくずせば、仲間の四人のうちのだれかが乗じるすきをつかんでくれる。
そう考えたとたん、
「とうっ」
高柳は土をけって、もう猛然ともろ手突きに出ていた。
「おうっ」
意外にも、敵は同時に自分からも一歩踏みこむように、がっと高柳の剣を引っぱらい、二の太刀がつばめがえしに右をなぎ払っている。
その二の太刀のほうへ切りこんでいった覆面の一人が、
「わあっ」
腰のあたりをながれて、どっとしりもちをつく間に、雪太郎は風のように剣陣を飛びぬけて、反対側の本多の土塀の前に立ち、くるりと川のほうへ向きなおる。
「くそッ、――おうっ」
高柳はもう騎虎のいきおいで、すかさず第二の突きを入れていった。
「とうっ」
がっとその剣を引っ払った雪太郎が、またしてもつばめがえしに右を払いながら、もとの川端へ飛びぬける。
二度目のもろ手突きも失敗に帰して、しかも

また一人犠牲者を出した高柳は、もう悪鬼の形相になっていた。
「おうっ」
あくまでも初志を貫徹する気で、息もつかせず、三度目のもろ手突きを体ごと火のようにぶつかっていった。
が、雪太郎の体勢はいささかのくずれも見せず、
「おうっ」
三度高柳の剣を正確に引っ払って、さっと土(ど)塀(べい)のほうへ飛んだ。
雪太郎は水のように冷静だったが、高柳にはこんどこそという必殺を期するあせりがあったから、つい目測を誤り、敵にかわされて、見ると、すぐ目の前は大川だ。
――しまった。
と思ったが、力一杯の足はどうにも岸で踏み止まりえず、
「あっ」
自分から思い切りどぶうんと川の中へ飛びこんでいって、白い水しぶきをあげている。
「いかん、引け」
残る二人の覆面は、急におじけづいて、ばらばらっと横町のほうへ逃げこんでしまう。
「若だんな――」
それと見たお妻が、あまりにもすさまじい切り合いに真っ青になって、夢中で雪太郎にすがりついていく。
「けがは、どこもけがは大丈夫なの」
「うむ、大丈夫だ」
さすがに雪太郎は息をはずませている。
「あたし、どうなるかと思って――。よかったわ、けががなくて。さあ行きましょう。ああ、草履がないのね」
お妻は川端にそろえてぬいである草履をいそいで取りに行く。
その間に、雪太郎は刀をぬぐって鞘(さや)におさめる。

はじめから敵に凶暴な殺意があって、こっちはたすきをかけているひまさえないほど、それは激しい乱闘だった。
――よくけが一つせずにすんだものだ。
雪太郎はほっとせずにはいられなかった。
どろ足袋を払って、お妻の取ってきてくれた草履をはき、さっさと元柳橋のほうへ歩き出しながら、
「姐御(あねご)、曲崎というのはやっぱり怪しいな」
と、雪太郎はいった。
「じゃ、今の覆面たちは曲崎のまわし者なのかしら」
「たぶんそうだろう。そうでなければ、わしが今夜こんなところへくるのを知っているはずはない」
「高柳ってのは、この間鈴ガ森で待ち伏せしていたやつでしょ」
「うむ。あの時も姐御がいっしょだった。姐御はまだ曲崎にわしの名はいっていなくても、高柳があっちについていれば、姐御のひもはたぶんわしだろうと見当がつく。だから、今夜切ってしまえということになったんだ」
「若だんなを切って、曲崎はあたしをどうしようというんでしょう。若だんなを切れば、あたしが曲崎のいうことを聞かなくなるぐらいわかりきってるじゃありませんか」
「うむ、どうもわしにもわからん」
雪太郎はなにか思案しているようである。
「若だんな、じゃこれから松月へ行っても大丈夫かしら」
はっと気がついたようにお妻がいう。
「さあ、案外そらっとぼけて会うという手もあるが、ことによると曲崎はもう帰ってしまったかも知れないな」
「なんですって――」
「人に刺客を向けておいて、それでも平気でわしに会うようなら、悪党にしても見上げた悪党だ。しかし、曲崎はおそらくここでわしは切ら

れるものと見て、引きあげたんじゃないかと思う」
　雪太郎はどうもそんな気がする。
「じゃ、曲崎はあたしに用があるんじゃなくて、若だんなを呼び出す道具に使ったんですか」
「いや、敵にとって今のところ、わしはそれほどじゃまになる人間じゃない。黙ってほうっておけば、わしは敵がどんなことをたくらんでいるかなにも知らない路傍の人なんだ。ただ、姐御を味方にするについて、わしというものがじゃまになってきた。それに、高柳にとっては、鈴ガ森で一度失敗した遺恨があるしね」
「わかったわ。若だんなは松江さんというお中老さまを助けているでしょう。曲崎はそのお中老さまの組と敵味方になるんです。だから、いっそ今のうちに切ってしまえということになったんじゃないかしら」
　どうやらお妻もやっとそこへ気がついてきたようだ。
「無論、それもある。つまり、それとこれとが重なってきたんだ。その点からいえば、じゃま者は切るというのが悪党の常套手段だから、わしはねらわれてもしようがないが、今夜のことはわしを切るというのがはじめからの目的ではなく、あくまでも姐御を味方に引き入れたいというのが主眼だろう」
「そうはいきません。あたしの大事な人に手出しをするようなやつ、だれが味方になんかなってやるもんですか」
　お妻が吐き出すようにいう。
「そこなんだ。そのくらいのことを曲崎が考えないはずはないんだから、どうもわしには解せなくなってくるんだ。しかし、ただ一つ、もしやと思いあたることはある」
「どんなこと――」
「敵が手に入れたいのは、姐御ではなくて、お浜のほうだったんじゃないかということだ。もしそれだと、曲崎は今ごろお浜をさらって、松

月を引きあげている」
「本当、若だんな」
　思わずお妻が雪太郎の腕を引っつかんでくる。
「とにかく、いそいでみよう」
元柳橋をわたってすぐ左へ切れ、薬研堀にそって半分ほど行った右手に松月はあった。
いきなり門を入って玄関に立ち、出迎えた女中に取り次ぎをたのむと、案の定、
「あの、花長の親分さんとごいっしょのお客さまでしたら、先ほどお帰りになりましたけれど」
　と、変な顔をしている。
「お浜というあたしの妹がいっしょだったはずなんですけれど」
「はい、なんですか、これからみんなでねえさんのお宅へ行くのだといって、駕籠でお出かけになったんですよ」
　途中で会わなかったんですかと言いたげな、女中の口ぶりである。
「あの、花長の親分もいっしょなんですか」
　お妻の声はせきこんでいる。
「ええ。親分は案内役だからって、歩いておいでになりました」
「よっぽど前のことかしら」
「そうですねえ、今ごろ新大橋をわたるころでしょうか」
「どうもありがとう。あたし、いそいで帰ってみます」
　お妻は女中に礼をいって、もうせかせかと玄関を出ようとする。
「つかぬことを聞くが、ねえさんはそのお客、つまり曲崎という人の屋敷を知らないかなあ」
　念のために雪太郎は聞いてみた。
「さあ、初めてのお客さまで、まだ存じあげていないんですけれど」
「そうか、お造作をかけた」
　あいさつをして、雪太郎はお妻の後を追う。
「姐御、どうするね」

「とにかく、あたし、一度家へ帰ってみます」
「うむ、それよりしようがないだろうな」
「こんどは表通りを行ってみましょう」
お妻はどんどん矢ノ倉のほうへ歩き出す。
しかし、家へ帰ってみてもおそらくむだだろうと、雪太郎は思った。
それは、お妻もおなじ思いだったらしい。
「若だんな、曲崎は一体お浜をどうしようっていうんでしょう」
と、しばらく歩いてから聞く。
「どうも、わしにもまだ見当がつかぬ」
「まさか、殿さまのお側妾にでもしようっていうんじゃないでしょうね」
「姐御は十一の時からお浜を引き取ったといったな」
「ええ。あたしはその時、本所一ッ目のほうにしばらく住んでいて、そのころお浜はおばあさんと二人っきりで隣に住んでいたんです。なんでも、あの子のおっかさんてのは、どこかへ武家奉公に出ていて、暇を取って帰ってきたと思ったら、あの子をみごもっていた。そして、あの子を生むと産後が悪くて、間もなく死んでしまったというんです」
「父親の名はわからんのかね」
「どういう事情があるのか、死ぬまでいわなかったそうです」
「しかし、その奉公先はわかっていたんだろう」
「そりゃ、おばあさんは知っていたんでしょうけれど、卒中で倒れて、あたしが死に水を取ってあげた時は、もう口がきけませんでした」
「しかし、お浜はおばあさんからなにか聞いちゃいないのかね」
「聞いていないんですって。一度お浜がそれを聞いたら、ひどく怒ったとかで、あの子は素直な性分だから、それっきり二度とは聞かなかった。なんでも、おばあさんはひどくその主人の家を恨んでいたっていうんです」
「ふうむ。無論、恨むには恨むだけの深いわけ

があるんだろうな」
「きっとそうなんでしょうねえ。それに、縁日商いをして、十一になるまで孫のお浜を女手一つで育てあげるくらいだから、ひどく勝ち気なおばあさんでした。隣家のよしみで、あたしが死に水を取って、あたしの手でろくなこともできませんでしたが、どうやら野辺の送りをすませてやりました」
いつになくしみじみとした口ぶりのお妻である。
「あたしも親に縁のうすい子で、旅芸人の中で泣き泣き大きくなったんです。その時十八でしたが、どうやら一本立ちになっていたんで、お浜ちゃん、今日からあたしの妹になるって聞くと、あの子は、あたし、御飯もたけるし、おせんたくもできますって、そんないじらしいことをいいました。なにか働かなくちゃ食えないってことを、ちゃんと知ってるんです」
「憎いなあ、姐御、子供をそんな目にあわせる親は」
雪太郎は本当にそう思った。
「あたしはこんな女で、あの子にろくなことはしてやってはいませんけど、本当の妹だと思って、一つしかないものは半分ずつわけて食べてきたんです。あの子がまたそれはあたし思いで、あたしが風邪でもひいて一日寝こもうものなら、それこそはだしまいりでもしかねないような騒ぎをやってくれます」
「そうだなあ。姐御もお浜も、その点おたがいに幸せだし、またうらやましいほど美しいなあと、いつもわしは見ている」
「そのあたしから、あの子を黙ってさらっていくなんて、あたしは承知できない。曲崎だろうと、花長だろうと、あたしはきっとなぐりこみをかけてもお浜は取りもどしてやるからいい」
「よし、わかった。及ばずながら、わしも三井もついているんだ。必ず力になろう」
「本当ですよ、若だんな」

「うむ。しかし、なんで曲崎がそんなにお浜を必要とするのか、今の話だけでは判断がつかないな。仮に、お浜の父親が、今になってお浜がほしいというなら、いくらなんでも一度は話し合いに出るだろうからな」
「あの子はああいうおっとりした娘だから、だれかに横恋慕でもされたのかしら」
「そんなこととじゃあるまい。常識で考えられるようなことなら、ともかく一応姐御に相談する。相談しても到底姐御がうんといえないことだから、非常手段を取ったんだ」
「じゃ、たとえばどんなことなの」
「たとえば、だれかの身がわりにするとか、業病をなおす秘薬の生き血生き肝がほしいとか、いずれにしても命にかかわることだ」
「どうしよう、若だんな。じゃ、あの子は殺されるんですね」
　お妻は自分がいまにも殺されるような必死な声になって、雪太郎の腕にすがりついてくる。
「いや、これはまだわしの想像なんだから、――少し言いすぎたかもしれない」
「お願い、いそいでください、若だんな」
　新大橋をまるで走るようにわたって、大工町はもうそこへきたが、無論、曲崎の駕籠などに出会うはずもなかった。
　――お浜の誘拐は、どうも松江のほうの事件となにか引っかかりがありそうだ。
　雪太郎はさっきからそれを考えながら、今となっては昨日松江の居所をたって聞いておかなかったのが悔まれる。主家の名がいえなければ、どこか話がとどく中継ぎの場所でもきめておくべきだったのである。
「やっぱり、家へなんか帰っちゃいないわ」
　横町へ曲がったとたん、お妻がいった。
　お妻の家は表がしまって、あかりさえついていないのである。
　雪太郎は、念のためにお妻をつれて、裏の浪宅へもどってみた。

「いや、別にだれもこなかったが、どうしたんだ、若だんな」
　玄関先まで出てきた三井が不審そうな顔をする。
「姐御、まあともかく上がってはどうか」
「いいえ、若だんな、あたしはこれからすぐ花長親分のところへ行ってみます」
　お妻はどうにもじっとしていられない気持ちらしい。
「実はねえ、三井、さっきここを出て、駕籠が大川端にかかると、例の鈴ガ森で松江を待ち伏せしていた高柳峰十郎が、あの時とおなじ五人組であらわれたんだ」
　雪太郎はざっとそれからここへもどってくるまでのいきさつを話して、
「つまり、その曲崎というやつの目的は、こうなってみると、姐御の体が必要だったのではなくて、お浜が必要だったと見るほかはないと思うんだが、どうだろうな」
と、一応意見を求めてみる。
「うむ、たしかにそうなんだろう。そこで、これから花長というやつのところへ行けば、曲崎の正体も住所もわかるだろうと、姐御は考えたんだな」
「そうなんです」
「どこなんだね、その花長って親分の家は」
「本所一ッ目なんです」
「そうか。いや、いっしょに行くんじゃなくて、そっと後をつけてみる。一足先へ出かけてくれ」
　いやもおうもなかった。三井はさっさと茶の間へ引きかえして、火の始末をしているようだ。
　なるほど、敵はもう大川端の失敗を知っているだろうし、お浜をさらった以上、必ずこっちが一ッ目をたずねていくのは当然と見ているだろうから、第二の待ち伏せを用意しているかもしれない。三井はそれに備えようというのだろう。

雪太郎はそう考えたから、
「出かけよう、姐御」
お妻をさそって、一足先に往来へ出た。
「花長のやつ、本当のことを教えてくれるかしら」
お妻にもその不安はあるらしい。
「そうでしょうねえ。もし本当のことをいわなかったら、どうすればいいかしら」
「まあ、行ってみてからの話だ。臨機応変ということがある」
「そうねえ」
お妻はそれっきり黙ってしまった。
長い舟蔵のそばを通りぬけて、一ッ目橋へ出るまでに、待ち伏せをかけられるような寂しい場所が二、三ヵ所ないでもなかったが、別に敵はあらわれなかった。
三井もよほどうまく後をつけているとみえて、一度も姿は見せない。
一ッ目橋をわたって、川っぷちをすぐ右へ折れると相生町一丁目になる。
花屋長兵衛の家は一ッ目橋から右手に見える表通りにあって、もう宵すぎだから、三間間口の大戸がおりていた。
お妻は先に立って、つかつかとそのくぐりの前へ行って立つ。
「今晩は、——花長さん、今晩は」
お妻がとんとんと大戸をたたいて呼ぶと、
「だれだね、くぐりはまだあいてますよ、お入んなさい」
と、すぐ中から返事があった。
「ごめんなさい」
お妻は雪太郎を目で招きながら、くぐりをあけて中へ入る。
中は広い土間になっていて、正面の店座敷に若い者が四、五人、鉄の火ばちをかこんで、いっせいにこっちを見ている。
「みなさん、今晩は——。あたしは大工町のお

妻ですけれど、こちらの親分さん、もうお帰りになっていますかしら」
「娘手品のお妻さん、知ってますよ。お連れさんがあるようですね」
兄い株らしい二十七、八の男が上がりがまちのところまで出てきて、じろりと雪太郎のほうを見る。
「これはあたしの家の裏の浪人さんで、比良雪太郎さんというんです。親分さんは知ってるはずなんです」
「そうですか。どんな用なんです、ねえさん」
「親分にお目にかかりたいんです。あたしがひもをつれてきたと取り次いでもらえば、わかると思います」
「へえ。すると、そちらさんはねえさんのひもなんで——」
若い者はからかうように、にやりとする。
「若だんな、怒らないでくださいね」
お妻は雪太郎のほうを振りかえって言ってから、
「どうぞ、親分さんに取り次いでくださいな、兄さん」
と、闘志をみなぎらせているようである。
「富、どなたか見えたのか」
奥から野太い声がして、のれんを分け、ぬっと出てきたのは、長半纏姿の四十がらみの苦味走った男で、これが花屋長兵衛という親分なのだろう。見るからに一癖ありげな面魂である。
「やあ、お妻さんじゃねえか。おれも今帰ったところなんだが、どうしたんだね」
「親分さん、うちのお浜はどうしたんでしょう、教えてくださいまし」
お妻はあいさつぬきにして、いきなりぶつかっていく。
「はあてね、お浜はたしかもう家へ帰ったはずだがなあ」
花長はいかにもけげんそうな顔をする。
「それが、まだ家へ帰っていないんです。御存

しのとおり、あたしは曲崎さまのおおせで、この人を迎えに中座しました。いそいでいっしょに松月へ駆けつけてみると、なんですか、親分さんたちはあたしがおそいんで、お浜をつれてあたしの家へ出かけたと、松月の女中さんのあいさつです。それからまたあたしはいそいで家へもどってみたんですが、そんな人たちはどなたもお見えにならなかったということで、お浜も帰ってはいません。心配ですから、すぐこちらへうかがってみたんですけれど、どうしたというんでしょう」

お妻は一気にまくし立てる。

「すると、そちらのお方が、師匠の知り合いの御浪人さんなのかね」

花長はおだやかに聞いて、雪太郎のほうをちらっと見る。

「拙者はお妻の家の裏に住まいいたす比良雪太郎、見知りおいてくれ」

雪太郎もおだやかに自分で名乗ったが、決して卑下するような言葉は使わなかった。浪人はしても、雪太郎にはそれだけの自負があるのだ。

「これはこれは、端近で恐れ入りやすが、手前は花屋長兵衛というがさつな稼業の者、よろしくお願い申しやす」

花長はていねいにあいさつをかえしてから、

「しかし、師匠、それは少しおかしいなあ」

と、お妻のほうへまゆをひそめてみせる。

「どうしてです、親分」

「いま師匠がいうとおり、曲崎さまはしばらく松月で師匠をお待ちになっていたが、だいぶ師匠のもどりが手間取れる。曲崎さまにはお屋敷の門限というものがあるんで、そうそうは待ってもいられない。まあ、師匠のほうにもいろいろ都合があるんだろうから、今夜は帰ることにしよう。花屋、お前お浜を駕籠で家まで送っていってやってくれということになって、いっしょに松月を出たんだ」

お妻はだまされるもんかというように、じっと花長の顔を見ている。

「途中で曲崎さまの駕籠にわかれて、こっちは新大橋をわたり切ると、親分、あたしはここから一人で帰りますから、こんどは親分がこの駕籠で家へ帰ってくれ。家まで送ってもらっては、なんだか冥利につきそうだし、姉さんにも申し訳ないからと、お浜が言い出したんだ。そんな遠慮はいらない、曲崎さまがせっかくくれた駕籠なんだからと、おれはいったんだが、お浜がどうしても承知しないんで、それならと駕籠はそこでかえし、おれはお浜を万年橋まで送って、たしかに大工町のほうへ曲がるのを見とどけて帰ってきたんだ。まさか道を迷うという年じゃなし、どこかで師匠と行き違いにでもなっているのか」

花長はもっともらしく小首をかしげている。

「いいえ、行き違いだなんて、あたしは一度家へ帰ってきているんですから、そんなはずはありません。——あの、親分さんは曲崎さまのお屋敷を御存じなんでしょう。教えてくださいまし」

お妻がすかさず切りこんでいく。

「それは、師匠、いけねえな、曲崎さまとは今もいうとおり途中で別れたんだから、お浜のことは聞いたってわからない。それとも、なにかおれのいうことに不審でもあるっていうんかね」

なんとなく花長の目が光ってくる。

「そうじゃありませんけれど、あの子には少しわけがあって、本当の父親をさがしているんです。そんなことで、自分から曲崎さまの後を追ったのかもしれないと思って」

「ふうむ。お浜の実父ってのは、侍なんかね」

「そうなんです」

「こいつはどうも少し妙な話になってきたが、まさか曲崎さまがお浜の実父だったなんて、そんなことも考えられねえ。まあ、それはそれとして、はじめの約束が、師匠が曲崎さまのいうことをうんと承知したら、その時お屋敷の名を

打ちあける、そうだったろう、師匠。師匠はまだろうんと承知はしていないんだから、おれが勝手にここでお屋敷の名はいえねえじゃないか。これでも花屋長兵衛は男の端くれだからね」
　花長はきっぱりと言い切るのである。
「親分、事は娘一人の生死にかかわるかもしれない瀬戸ぎわなんです。それでも、男の意地だからお屋敷の名は教えられないとお言いなさるんですか」
　お妻は一生懸命である。
「そうまで師匠に詰めよられると、おれもちょいとつらくなる。じゃ、こうしよう。明日の朝まで待ってくれ。おれが曲崎さまにお目にかかって、お浜のことも耳に入れ、こういうわけだからお屋敷の名を教えてもかまいませんかと、談じこんだ上で、師匠の納得のいくような返事をしよう。これならいいだろう」
　要するに、一晩待てというのだ。
　こっちはそんなのんきなことはいっていられない場合だが、待てないといえばけんか別れになるばかりである。
「じゃ、明日の朝はきっと返事をしてくださいますね」
「きっと返事をする。おれも花屋長兵衛だ。二枚舌はつかわねえ」
「しょうがありません。では、今夜はこれで引き下がります」
　お妻はとうとう折れて出るほかはなかった。
「そうか。そうわかってくれりゃ事は穏便にすむ。けど、師匠、これで案外家へ帰ってみたら、お浜が先へ帰って待っていたなんてことがないともいえねえんだからな」
　そんな気休めみたいなことを、けろりとして口にできる花長なのだ。
「それだといいんですけど――。どうもおじゃまいたしました」
　悄然とおじぎをする尾について、
「失礼した」

　雪太郎もあいさつをして、表へ出た。
「おとなしそうなひもだな」
「よせよ、バカ」
　子分たちがくすくすわらっているのを、お妻は悔しいと思ったが、事実、雪太郎は一言も口をきいてくれないのだから、どうしようもない。
「若だんな、やっぱりいいようにおもちゃにされちまいましたねえ」
　一ツ目橋をわたりながら、お妻はつい鬱憤が口に出る。
「うむ、憎いやつだな。まあ、明日を待つことにしよう」
「明日になれば、あの野郎、本当に曲崎の屋敷を教えてくれるでしょうか」
「まずだめだろう。それは姐御が一人で行けば教えてくれるかもしれぬ。そのかわり、姐御も二度と帰ってこられなくなる」
「なんですって――」
「あの男は自分の都合のいいことしか考えない悪党なのだ。平気で人の生き血を吸って生きていられる毒虫なんだ。そのつもりで付き合っていないと、とんだ目にあわされる」
「じゃ、お浜は、お浜はどうなるんです」
「こっちの手で助けるんだ。まずこっちの手で曲崎の屋敷をさがし出してみよう」
「そんなことできるかしら」
「できなければ、姐御はお浜をさがすのをあきらめるかね」
「あきらめやしません。あたしは花長のやつと刺しちがえても、きっと曲崎の屋敷を聞き出してみせます」
　お妻はとうとう意地になってきたようだ。
　翌朝――。
　こっちの食事が終わったころを見はからって、
「たのうむ」
　と、隣の堅田雁之助が玄関をおとずれてきた。
「どうれ――」

三井が、もう侍ごっこにはなれているので、澄まして玄関へ取り次ぎに出ると、
「三井うじ、昨日は失礼つかまつった。若だんな御在宿なれば、堅田雁之助ちとお願いの筋があって参上したと、よろしくお取り次ぎ願いたい」
と、堅田はちゃんと白小倉の袴をつけている。
「かしこまりました。――若だんな、袴をつけぬといかんようですぞ」
三井がわらいながら茶の間へいう。
「いや、それには及びません。しからばごめん」
堅田もわらいながら、さっさと上がってくる。
「やあ、堅田さん、改まっての御来訪、なんですな」
雪太郎が笑顔で迎えると、
「実は、拙者にもこのとおり袴のあることをお目にかけたかったのでな」
堅田は例によって行儀よくそこへ座り、
「若だんな、昨朝は三井うじをもってわざわざ御丁重なる御厚志かたじけなく存ずる。その折もあれば、この肥前忠吉は必ず若だんなに献上つかまつる」
と、感謝の意を表する。
「これはこれは御丁重なごあいさつで、かえって恐縮いたします」
「堅田うじ、粗茶でござる」
三井がさっそく台所から茶わん酒を持ってきてすすめる。
「これはどうも――。せっかくですからちょうだいつかまつる」
堅田はうれしそうに茶わん酒をうけて、
「さて、こんどはお願いの儀でござるが、昨夜以来、御当家はだいぶ御多用のようにお見うけいたす。いかがでしょうな、お手が御入用なら、わずかな日当でよろしい、拙者をお雇いくださらんか。これでも少々ばかり小野派一刀流をつかいます」
昨夜からのこっちのごたごたを耳にしていて、助太刀を申し入れてきたのだろう。
「ありがたい。大きに助かります」
まず三井がうなずいて、
「なんの因果か、若だんなはとんだ渦中にまきこまれて、しかもその敵の正体がいまだにはっきりしない。こいつが一番心配なんだ。暗夜のつぶてとおなじだからねえ」
と、まゆをひそめる。
「一通り子細をうかがいたいな」
「よろしい、そもそも事の起こりというのは、箱根のお嫁からはじまるんだが――」
三井は松江との出会いから、お浜をさらわれた昨夜のいきさつまで、ざっとわかるように筋を通して、
「今のところ事件はばらばらに起こっているが、どうも根は一つだとわしはにらんでいる。若だんなもおなじだろう」
と、雪太郎に同意を求めた。
「すると、三井うじ、その一つのいとぐちさえつかんで、それをたぐっていけば、事件の正体がわかってくるんじゃないかね」
堅田は雪太郎にはかまわず、三井にぶつかっていく。
「堅田さん、なにか心あたりがありますかな」
三井がもう空にした茶わん酒の湯飲みを盆にかえしながら聞く。
「どうだろう、花長というやつの身辺を二、三日根気よく見張っていたら、必ずその曲崎という怪人物とどこかで会うと思うんだが」
「それはわしも考えたんだが、張りこみというやつはなかなか大変な仕事だし、若だんなは今日昼から姐御といっしょに、もう一度花長をたずねることになっている。どうせろくな返事はしないだろうが、それからにしてはどうかと若だんながいうんで、目下待機中というところなんだ」
「よろしい。おなじ日当をちょうだいするんでも、骨の折れる仕事でないともらいにくい。そ

っちはそっち、こっちはこっちということにして、張りこみの役はわしにまかせていただきたいな」
「どうだろう、若だんな、せっかく堅田うじがああいってくれるんだから、一つ御助力を願ってみちゃ」
　三井がそばから口をそえる。
「その御厚意はまことにかたじけないが、しかし、堅田うじには奥方がある。わざわざこんな妙な渦中に引っぱりこむのは遠慮したい」
　雪太郎は相かわらず用心深かった。
「いや、その心配は無用に願いたい。家内としても、わしが一日中楊枝削りをやっているより、ともかくも一つの仕事を持ったとなれば、そのほうが安心だと思う。善はいそげというから、さっそく出かけることにいたす」
　堅田は残りの酒をのみほして、すぐに立ち上がろうとする。
「堅田うじ、花長を御存じかな」
「まだ会ったことはありません。しかし、家は一ツ目橋の近所だというから、そこへ行って張りこんでいればきっとわかるだろうし、先方もわしを知らないということが、かえって好都合だと思う」
「なるほど、それはたしかにそうだ。お願いしようじゃないか、若だんな」
　三井が雪太郎をうながす。
「そうか。じゃ、堅田さん、お浜という気の毒な娘のために、一つ尽力をたのみます」
　雪太郎はひざに手をおいておじぎをした。
「承知いたした。うまくいくかどうか、やるだけはきっとやってみます」
　堅田はそう引きうけて玄関を出ると、一度自分の家の玄関先までもどって、妻女になにか言いおき、そのまま路地を出ていった。
　時刻はまだ四ツ（十時）前である。
「若だんな、こうなると、人を働かしておいてこっちが家に安閑としているのも、ちょっと変

なものだな」
　三井はなにか申し訳なさそうな顔をする。
「まあ、もう少し待とう。そのうちに姐御からなんか言ってくるだろう」
「はてな、堅田うじ忘れ物かな」
　ひたひたと路地へ走りこんでくる草履の音がして、ふうと玄関前で立ち止まったようだ。
「ごめんくださいまし」
　若い男の声だ。
「どなたかな」
「ちょっと物をおたずねいたしますが、比良雪太郎さまのお宅はこちらでござんしょうか」
「さよう、当家が比良の浪宅だが」
　三井がいそいで立っていく。
　三井が出てみると、格子の前に立っているのは、意外にも紺看板を着たどこかの若い中間である。
「比良雪太郎の浪宅はここだが、なにか用かな」
「ごめんくださいまし」
　中間は格子をあけて中へ入り、
「失礼でございますが、あなたさまが比良さまでございましょうか」
　と、ていねいに小腰をかがめる。
「わしは三井で、比良は奥におる」
「ああ、三井さまでございますか。では、これをどうぞ比良さまにお取り次ぎ願います」
　中間はふところから結び文のようなものを出して、三井にわたした。
「しばらく待て――」
　三井はそれを持って茶の間へ入り、
「若だんな、なにかわけがありそうだ。これを見てくれ」
　と、雪太郎に手わたす。
「どれ――」
　雪太郎が結び文をひらいてみると、
　――取りいそぎお目もじの上、御相談いたしたきこと出来、わがままながらこの使いの者と御同行お待ち申し上げ候

と、懐紙に女文字で書き流し、署名は箱根のお嫁より、あて名は雪さまとなっている。
「三井、やっぱり松江さんからだ」
雪太郎はそれを三井に見せる。
「なるほど、箱根のお嫁だな。これはほうっておくわけにはいくまい」
「うむ。ことによると、こっちのほうから先に、事件の正体がわかってくるかもしれんしな」
「よし、ゆうべのようにわしが尾行しよう」
「そりゃいかん。昼までにお妻からなんとかいってくることになっている。そっちもほうってはおけぬ。もし、それまでにわしが帰れなかったら、貴公はそっちの名代をつとめてもらいたい」
「なるほど――」
三井はうなずいたが、
「あの姐御、わしの名代で納得するかな」
と、苦笑する。
「かまわぬ。へそを曲げるようだったら、しかってやってくれ。今は下らんことにこだわってはいられない場合だ」
雪太郎はさっさと立ち上がって袴をつける。
「よし、わかった。しかし、若だんな、いよいよのっぴきならんことになってきそうだから、十分気をつけてくれ。いいな」
雪太郎は刀を取って玄関へ出て、
「お使いご苦労、わしが比良雪太郎だ。同道するから、案内してくれ」
と、中間にあいさつをした。
「かしこまりました。手前は菊造と申します。御案内いたします」
「若だんな、やっぱりこれがいるだろう」
三井が深編み笠を持ってきてくれる。
「そうだな。用心するに越したことはないな」
雪太郎はそれを受け取ってかぶり、中間といっしょに路地を出た。
「お前、よくわしの浪宅がすぐわかったな」
通りへ出ながら、念のために聞いてみる。

「へえ。路地口で若い浪人さんに出会って聞きましたら、この裏だと教えてくれました」
教えたのは、たぶん堅田雁之助だったのだろう。
万年橋の橋たもとへ出ようとすると、
「あれにお待ちでございます」
と、菊造は河岸の桟橋のほうを指さす。
なるほど、そこに屋根船が一隻もやってある。なんだ、こんな近くまで来ていたのかと思い、うなずいてみせると、菊造は先に立って桟橋をおり、
「おつれいたしましてございます」
と、船房へ声をかけた。
「どうぞ――」
答えたのは松江の声らしい。
その間に船頭が杭をおさえて、雪太郎を迎えてくれる。
雪太郎は深編み笠を取って、菊造にあずけ、
「ごめん」
声をかけて船房の戸をあけた。
「比良さま、ようこそ――」
両手を仕えたのは、一昨日の時と違って、箱根ではじめて出会った時の腰元姿の松江である。
雪太郎が船房へ入って、後ろの戸をしめると、船はもやいを解いて、すぐに桟橋を離れたようだ。
水に反射する光のかげが、障子にちらついて、その明るい光の中で見る松江の顔は、いくぶんやつれて、ひどく強い顔に見える。なにか相当重い責任をしょわされて、絶えず緊張していなければならないからだろう。
「今日はお中老さまではないんですか」
雪太郎はわらいながら聞いた。
「はい。今日は箱根のお嫁でございますの」
にっこりとわらってみせる松江だ。
「そう、手紙にもそう書いてありましたな」
「わがままばかり申しまして――」

「しょうがない。箱根のお嫁ははじめからわがまま娘だったんだから」
「申し訳ございません」
「さっそく御用をうけたまわりましょうかな」
「比良さまは御浪人で、まだどこにもお体を縛られてはおいでにならないのでございましょう」
「ずるいなあ。あんたはまずそれを聞いておいて、またわしになにか用を言いつけようというんじゃないのか」
　雪太郎は相手が話しいいように、わざとくだけて出る。
「あの、本当はそうなのでございますの」
「どうもありがとう。箱根のお嫁さんの御用とくると、命がけなんだから物騒だ。この間は道端だから黙っていたが、わしは程ガ谷で松江さんと別れた日の夕方、鈴ガ森で覆面の侍五人に待ち伏せをされていた。敵はてっきり松江さんといっしょにくると考えていたんだね」
「まあ、本当でございますか」
「どこの藩の者だか、無論それは言わなかったが、大将は高柳峰十郎と名乗っていた」
「その高柳と申しますのが、箱根であたくしを追っていた追っ手の一人なのでございます」
「うむ、たぶんそうだろうと、見当はついていた。わしがなにか松江さんから秘密でも聞いていると考えたんだろうな、一騎討ちの勝負をいどんできてね。おそろしく強い男だなあ、あれは」
「国もとでも一番強いほうで、微禄(びろく)の者ですが、そのために敵も重く用いているようでございます」
「そうだろうな。腕もすごいが、度胸のほうも大したものだ。鈴ガ森の時はそれでもどうやら切りぬけたが、ゆうべまたぶつかってしまってねえ」
「高柳にでございますか」
　松江が思わず聞きかえす。

「ゆうべも顔をつつんで、五人で待ち伏せしていたが、大将はたしかに高柳だった。口をきいたんだから間違いない」
「どこに待ち伏せしていましたの」
「松江さんは曲崎将監(まがりざきしょうげん)という男を知らないかなあ」
「まあ」
　びっくりしたところを見ると、やっぱり知っているのだ。
「実は、浪宅の前にお妻という女芸人が住んでいて、わしたちは、あの日、川崎でお妻に出会った縁で今の家を借りてもらったんだが、そこにお浜という内弟子がいる」
　雪太郎は松江が曲崎を知っていると見たので、昨夜からの出来ごとをくわしく話してみた。
　案の定、松江は一言も聞きもらすまいという面持ちで、じっと耳を澄ましている。
「そんなわけで、我々はぜひその曲崎という男の屋敷を突きとめようと、今朝から骨を折っているところなんだが、どうやら曲崎という男は、松江さんのほうの事件ともなにか関係があるようだな。違うかね」
「あの、曲崎も高柳も、姫君さまの敵でございます」
「姫君——?」
「比良さま、もう因縁ごととおあきらめあそばして、どうぞ松江の味方になってくださいませ」
　事情を打ちあける前に、まず言質を取っておこうというのだろう。どこまでも用心深い松江である。
「事の善悪にかかわらずというのかね」
「はい。あたくしを信用してくださいませ」
「うまいなあ、松江さんは。よろしい、信用しよう。そのかわり、こっちも信用してもらわなくては困る」
「それはあたくし、箱根の時からでございますもの」
　澄んだ目に信頼と尊敬をこめている。

「きまった。さあ、お話をうけたまわることにしよう」
「はい」
松江は目を伏せて、ちょっと考えるようにしてから、
「あたくしは和州郡山十万石の家中の者でございます」
と、静かに切り出した。
「和州郡山ねえ」
雪太郎はひそかにどきりとせずにはいられない。郡山藩は、露姫がこの春輿入れをした家中だからだ。
「御当主又一郎君は、昨年の秋、初のお国入りをされ、この春国もとでお元服あそばしました」
「すると、十五歳ですな」
「はい。明石の松平さまから露姫さまと申される一つ年上の姫君さまが、この春お輿入れあそばしまして、この秋、殿さま御参府を待ってめでたく御祝言の式をあげられることになっておりましたの」
――やっぱりそうだった。
雪太郎は松江の端麗な顔をながめながら、この話はもう人ごととして聞き流せなくなってきた。
「ところが、殿さまは御参覲間際になって疱瘡にかかられ、御重態のため、御参府延期願いを公儀へ届け出なくてはならなくなりました。国家老赤柴刑部さまは、それといっしょに、万一の時のためにお跡目を届け出ておくように、お跡目は池ノ端に隠居していらっしゃる先君の御末弟大学さまがよろしい。しかる上にて、露姫さまには殿さま御病気見舞いのため、至急御入国あるようにと、江戸家老諏訪頼母さまに急使を立ててまいりました」
「なるほど――」
「大学さまは今年二十四で、国もとの刑部さまのお姉さまがお腹さまになっております」

「つまり、平ったくいえば、叔父さんと甥ということになるんだな」
「そうですの。ところが、御当主又一郎君には御同腹の弟君順之助さまがございまして、今年十三になられます」
「順からいえば、当然お跡目は順之助さまということになる」
雪太郎は大体騒動の原因が読めてきた。
「このお跡目のことは、一昨年先代さまがなくなられました時も、又一郎さま組と大学さまの組とに分かれ、この時は江戸の頼母さまの主張がとおりまして、今の御当主さまがお家をおつぎになりました。しかし、何分にも刑部さまは国もとで大きな勢力を持っています上に、又一郎君は御弱年ですから、間違いのないうちにと、公儀にお力のある明石家から露姫さまをお迎えして、江戸組の根をかためたのでございます」
「問題は、又一郎君が御本復しさえすれば、自然に片づくんじゃないのか」
「比良さま、失礼いたします」
松江はすっとひざを近づけてきて、
「御当主さまは、もう御本復いたしません」
と、声をひそめる。
「なにッ――」
「すでにおなくなりあそばして、今は身がわりが御病間に寝ています」
「ふうむ。あぶないまねをしたもんだなあ」
もっとも、当主が急死して、相続人がきまっていなければ、いやでも家名は断絶するのだから、それも切羽詰まった手段だったのだろう。
「そうか。それで、公儀の目をくらますためにも、露姫さまのお見舞いがぜひ必要なのだな」
「そうなのでございます。その上、刑部側はその露姫さまをとりこにして、頼母さまを失脚させ、大学さまをお跡目にして、改めて露姫さまを大学さまの奥方におなおししようとたくらんでいるのでございます」
「露姫さまはそれを御存じなのか」

「いいえ、まだなにも申し上げてございません。それがお耳に入りますと、姫君はお里方へお帰りになると、必ず仰せ出されます」
「無論、それはそうだろう」
「殿さまがおなくなりになったことは、まだ刑部一門しか知らないことになっています。あたくしは国もとの奥に御奉公していて、その一大事を知りましたので、いそいで江戸へ出てまいりましたが、一足違いで姫君お国入りのおゆるしが公儀から出てしまった後だったのでございます」
　問題はだいぶ差し迫った段階へかかっているようである。
「すると、露姫さまは結局なんにも知らされずに、お国入りをすることになるのかね」
　雪太郎は聞いてみる。
「はい。一度公儀からお許しが出てしまっては、殿さま御快癒か、姫君さま御急病か、この二つのほかに、お取り消しを願う理由はございません」
「つまり、姫君お国入りは決定的で、かえるわけにはいかないことになるんだな」
「はい」
「お跡目のことはどうなっているんです」
「姫君さまが江戸をお立ちになる前にきめておかなくてはなりませんが、順之助さまお跡目は国もと組が承知いたしません」
「無理に順之助さまをお立てするとどういうことになるのです」
「おそらく、刑部さまは露姫さまをとりこにして、頼母さま派を脅迫し、最後の切り札は偽殿さまをこしらえた策謀を江戸組がやったこととして、公儀へ訴え出ることさえ辞さないだろうと、頼母さまは見ております」
「たとえ家名が断絶しても、大学さまを立てよう。むしろ、大学さまを立てなければ、郡山十万石をつぶしてやる。それが国もと組の腹だと見ていいんだね」

「はい」
「念のためにうかがうが、江戸組が大学さまを立てたくない理由は――?」
「江戸組だけではなく、大学さまのお跡目は家中のほとんどが反対なので、前の時も正統な又一郎君がお跡目ときまりました。これはただの勢力争いではなく、大学さまにも刑部さまにも人としておもしろからぬところがあるからだと存じます。おのれに私利私欲がなければ、お家には又一郎君、順之助さまという正統なお世つぎがあるのですから、無理に大学さまをお迎えする必要はないのでございます」
　松江の返事ははっきりしている。さすがに頭のいい娘だと、雪太郎は思った。
「松江さん、これは言わずもがなのことだが、御当主の死因にも多分に疑惑があるんじゃないのか」
　松江はぎくりとした顔になりながら、
「そこまではあたくし――」
と、口をつぐんでしまう。
「よろしい、それは聞かずもがなのことだったとして、とにかく刑部が大学さまを擁して非をたくらんでいるということは明白らしい。曲崎将監というのは、どうせその池ノ端の用人くさい気がするんだが、違うかね」
「はい、そのとおりですの」
　さすがだと言いたげに、松江は目でわらう。
「さて、これからが問題だな」
　雪太郎はちょっと考えてから、
「それで、松江さんはわしにどんな役割をいいつけたいんだね」
　と、改めて切り出してみる。
「あの、今日から御菩提寺で先殿さま御三回忌の御法事がございます。その席でお跡目は順之助さまと取りきめ、明日公儀へおとどけいたします。中二日おいて十四日に、姫君さまは江戸をお立ちになります。それまでに池ノ端組がどんなたくらみをしかけてくるか、十四日に姫君

さまが無事に江戸が御出発できますよう、お力になっていただきたいのが一つ」

松江はそんな大事をさばさばと言ってのける。

「まだほかにも役割があるのかね」

「はい、これからが大役なのでございます」

「あっさりおっしゃるんだなあ」

雪太郎は苦笑しながら、

「よろしい、まあうかがうことにしましょう」

と、真顔になる。

船はどこへ行くのか、さっきからゆっくりとこぎつづけている。

「露姫さまは御祝言のお式がありますまで、三ツ俣(みつまた)の中屋敷にお住まいでございます。順之助さまは鍛冶橋(かじばし)内の上屋敷ですから、そちらは御家老の諏訪頼母さまがお守りになり、中屋敷のほうは御用人牧山源左衛門(げんざえもん)さまと、御家老さまの御長男弥一郎(やいちろう)さまがおつきしています」

「なるほど、どっちもねらわれているんだから大変ですな」

「はい。姫君さまお国入りについて、御家老さまはお上屋敷を留守にできませんから、お供は牧山さまと弥一郎さままでございます。家中にもしっかりした味方はおりますが、池ノ端組では曲崎が采配(さいはい)を取って、ひそかに浪人どもを集めていますとかで、こちらも姫君さまがお国入りをあそばして無事に江戸へお帰りになるまで、本当にたのみになる正義の士が両三人ほしいと、弥一郎さまが申されるのでございます。ですから、あたくし、一人だけございますと申し上げました」

「それが比良雪太郎だということになるんですか」

「あたくしが心から信頼できますのは、比良さまのほかにございません。そして、比良さまなら、お二人や三人、きっと立派なお友達があると思います。弥一郎さまも、烏合(うごう)の衆などいくら集めても役に立たぬ、わしといっしょに正義のために死んでくれる者が三人もあれば十分だ。必ず露姫さまをお守りしてみせるとおっしゃっています」

「なるほど――」

それが本当なら、これは相当の人物と見ていい。

「おいくつになられるのです。弥一郎さまは」

「今年二十六かと存じます」

「松江さんが感心しているくらいの人物なら、たのもしい人に違いない」

「お力になっていただけますね、比良さま」

松江はもう一人でちゃんとそうきめているようだ。

「その前に、ぜひ聞いておきたいことがある」

「どうぞ、なんなりと――」

「姫君にはまだ偽殿さまのことはお耳に入れてないのですな」

「はい。これは江戸を立ってから、途中でお耳に入れて、おわび申し上げることになっております」

「お国入りをして、しばらく御看病のうちに殿さまがおなくなりになる。それからの姫君はどうなるのです」

「江戸へお帰りあそばして、三年喪に服されますと、順之助さま十五歳になられます。姫君さまは十八歳、できますれば改めて奥方さまにと、だれしも考えているのではございませんでしょうか」

「もし、お里方へおもどりなされたいお考えの時は――」

「それはまたその折のことだと存じます」

松江はなぜそんなことまで聞くのだろうというような顔をする。

「わたしはねえ、松江さん、義のために悪臣どもと戦うのは、男の仕事として辞するものではないが、姫君をあくまでもお家の都合で道具あつかいにするのは、あまり賛成できないんだ」

言うだけのことは言っておくべきだと、雪太

郎は考えたのである。
　そこは頭のいい松江のことだから、はっと胸を突かれたような目をする。
「江戸を立ってから姫君には国もとの事情を申し上げる。これはどうしても一度お国入りを願わなくてはおさまらないお家の立場があるのだから、まずしようがないとしても、後の縁組みのことまでは、強いたくない。姫君のお心にまかせるべきだと思う。こんなことは後の話ではあるが、あなた方がそこまでの思いやりというか、心構えというか、わし流の言葉でいえば、武夫のあわれということを理解してくれる方々なら、わしは喜んで今からでもお味方します」
　伏し目になって、じっと聞いていた松江が、静かに座布団を滑り下りて、そこへ両手を仕える。
「今のお言葉はよくわかりました。あたくし一存でおこがましゅうはございますが、身に替えても姫君さまのお心にかなわぬことは致させません。どうぞ、姫君さまのお味方になってあげてくださいませ」
「承知しました。今日から姫君さまが無事に江戸へもどられるまで、かならずお力になりましょう。誓います」
　露姫のためには、どんなことでもしなければならない雪太郎だから、きっぱり誓いはしたが、しかし、その露姫にこの顔を見せていいかどうか、そこに一抹の不安がある。
「さあ、約束はすんだ。席へ直ってください」
「では、お言葉に甘えまして……」
　松江はもとの座へ帰って、
「比良さまはどうしても仕官はなさらないおつもりですか」
　と、笑いながら聞く。
「わしは一生仕官とお嫁はもらわないことにきめているんだから」
「どうしてでございますの」
「それはいずれ無事に約束を果したとき、松

江さんにだけは話してもいいが……それより、今日のわしの仕事はなにをすればいいんですな」
　雪太郎はうまく話をかわす。
「ごめんあそばせ。つい箱根のときのわがままが出てしまいますの」
「そういえば、わしはあの時からもうこうなる因果をしょわされていたんだねえ」
「あの曲崎は、どうしてお浜という娘さんをさらったのでございましょう。きっとなにか恐ろしいことをたくらんでいるのですわ」
　松江は思い出したように、はっと顔を曇らせながら、
「比良さま、姫君さまは今日四ツ（十時）に中屋敷をお立ちになって御菩提所へ向かわれます。あたくしは御菩提所へ一足先に参って、姫君さまをお迎えすることになっておりますの。おととい新大橋でお目にかかったのは、そこの下見をしてのもどりでございました」
　と、いよいよ今日の仕事を持ち出す気らしい。
「今日の御法事には、無論池ノ端もくるはずなんだろう」
　雪太郎としては、お浜のためにも池ノ端は今日から敵にまわさなくてはならなくなったのだ。
「はい、お上屋敷の順之助さま、池ノ端さま、中屋敷の露姫さま、露姫さまのお兄君で、明石家の若殿信太郎さまも、父君佐渡守さまの御名代としてお越しくださいます」
「なるほど」
　明石の若殿信太郎は、自分がお相手役として少年のころから仕えてきたのだから、その名を聞いただけでもなつかしい。それだけに、今はこの人にも顔を見られたくない雪太郎である。
「つまり、その御法事の後で、順之助さまお跡目の相談があるわけですな」
「はい、御相談と申しますより、これは当然のことなのですから、こういたしますと申し上げ

て、それはいけないと反対のしようのないことでございます。そして、それからが心配なのでございます」
　松江の顔が極度に緊張する。
「それはそうだな。いよいよ敵に果たし状をつきつけたことになるんだからね。で、今日のわしの仕事は——」
「あの、とにかく一度頼母さまにお会いになっていただきたいのです。御菩提寺は宜雲寺でございますので、この船は秋元但馬さまお下屋敷の角あたりにつきます。あたくし先に御菩提寺へまいりまして、お迎えをよこしますから、しばらくこの船の中でお待ちになってくださいませ」
「よろしい、承知しました」
「菊造を残してまいりますから、なにか御用がございましたら、御遠慮なく使っていただきます」
「松江さん、これは余計なことかもしれないんだが、一言注意しておきたいことがあるな」
　雪太郎が思い出したようにいう。
「なんでございましょう」
「池ノ端組は、さっきも話したように、ゆうべすでにお浜をさらっていっている。なんのためにさらっていったかはわからないが、いずれ彼らの目的は、こんどの仕事に使うためだろうと思う。それに、敵は浪人者をかき集めている形跡さえある。ということは、今日菩提寺でお跡目のことがきまってから、なにかをたくらもうというのではなく、今日の法事にもう事を起こそうと計画しているのかもしれないんだ。如才もなかろうが、その点の用心はどうなんだろうな」
「はい、それはもう十分用意はしているつもりでございます。しかし、それだけではあたくし、なんとなく心もとない気がいたしますので、こうして一足先へ出まして、比良さまにお味方をお願いしたのでございます」

「まいった。松江さんはやっぱり頭がいい」
　雪太郎はいまさらのように、同志としてもたのもしい娘だなあと感心する。
「ほ、ほ、比良さまにそんなことを言われますと、恥ずかしい、あたくし」
　松江はほおを赤らめている。
「お中老さま、着きましてございます」
　艫のほうから中間の声がして、船はとんと桟橋の杭へ舷をあてたらしい。
　そこの桟橋には、この間新大橋で見かけた若党が、ちゃんと松江を出迎えていた。さすがに抜け目なく手順がついているようだ。
　雪太郎は、松江が去ると間もなく、一応地の利を見ておく必要があると思ったので、
「菊造、わしもちょっと菩提寺の門前まで行って、見てくる」
　と、中間にことわって、船をおりた。
「では、比良さま、お供をいたします」
　菊造が深編み笠を取ってわたしながらいう。
「いや、すぐもどってくるんだから、お前はここに待っていてくれ」
「へえ」
　岸の往来へあがってみると、なるほど左が秋元但馬守の下屋敷の角で、右は旗本のこれも下屋敷らしい。両家の間の道をまっすぐ突きあたったところが、宜雲寺の土塀になっているようだ。
　この辺はまだ大工町のうちで、はるかに川上に高橋が見える。
　対岸は土屋、田安、太田諸家の下屋敷がならんで、この小名木川の両岸は、ほとんど諸侯の下屋敷つづきである。
　雪太郎はその横町をまっすぐ宜雲寺の塀のほうへ歩いていった。
　時刻は四ツ半（十一時）に近いだろうか、秋の日がしみいるようにあたたかかった。
　——露姫さま。
　雪太郎は胸の中でそっと呼んでみる。別れて

すでに一年、なつかしい名前である。

――お露さま。

――雪。

姫君の両手がしっかりと首を抱いて、燃えるようなほおをほおへ押しあててきた。

あれから一年、お露さまは郡山家へ嫁して、またしてもあやしい運命の岐路に立っている。

こんどは陰ながらその姫のために、命がけにならなくてはならない。

露姫の幸せのためになら、いつでもよろこんで死ねる雪太郎だが、その比良雪太郎があの時来世を誓った平井雪之助だということは、死ぬまで知らせてはならないのだ。

せっかく雪之助を忘れて、郡山家の人となり、おさまりかけている乙女心を、いままた乱すようなことがあっては、なんのためにこうして世をすてて浪人までしたか、まるっきり意味がなくなってしまう。

――わしはどんなことがあっても、お露さまに顔を見せてはならない。

そのくせ、どこかでひょっと会ってしまうのではないか、そういう渦中にまきこまれてきたことを、むしろよろこんでいるような自分の心に、雪太郎は改めてはっきりと言いきかせる。

いつの間にか宜雲寺の山門のある通りへ出ていた。

右手を見ると、筋向かいが真光寺の山門になっている。

はっと雪太郎は塀のかげへ身をひいた。そっちからだれかの行列が、しずしずとこっちへ進んでくるところだったからだ。

――郡山家の行列らしいな。

ちらっと目についた挾箱の紋所が、たしかに九曜のようだった。

すると、今日の法事に当主の名代として施主に立つ上屋敷の順之助君か、それとも中屋敷の露姫の行列か、雪太郎はいそいで深編み笠を取って、そこへひざまずいた。

挑　戦

宜雲寺の本堂で行われた郡山の先君美濃守の三回忌法要の席上、諸僧の読経ののちに施主名代として第一番に焼香に立ったのは、当主又一郎の弟順之助であった。

二番目が当主の夫人ときまっている露姫、三番目が先君の舎弟大学、四番目は親戚総代として明石藩主佐渡守の名代信太郎、以下親戚一門から家来たちに及ぶ順である。

この焼香順をきめたのは江戸家老諏訪頼母で、施主名代をつとめた順之助は当然郡山家の跡目ということになる。

法要がすんだのはやがて九ツ半（一時）ごろで、一同はひとまず本堂から控え座敷へ移り、茶菓が出て、くつろいだ物語のうちに、順々に帰館の途につくことになるのである。

供ぞろえの者たちには、無論折り詰めの中食が出る。

池ノ端の大学は、法要がすむと控え座敷へは入らず、本堂からすぐ帰っていった。焼香の順に不満があったことはいうまでもない。

「頼母、お国もとの又一郎どのは、よほどよろしくないのか」

控え座敷へくつろいだ信太郎は、気づかわしそうに頼母に聞いた。

「はい、なにぶんはかばかしくございませんそうで、家中一同憂慮いたしております」

事実はすでに死んでいるのだから、頼母の顔はひどく暗い。

「さようか、それはいかんな。疱瘡は長じてからのほうが重いと聞く。順之助はもうすまされたのか」

「はい、三つの時軽くすんだと、乳母から聞いています」

美少年の順之助ははっきりと答えて、にっとわらってみせる。

「それはよかった。夷国にはこのごろ種痘とい

うものが行われて、これをしておくと疱瘡にはかからぬそうだ」
「どのようなことをするのですか」
「さあ、わしもくわしいことは知らぬが、牛の血を腕にうえるのだそうだ」
「牛の血ですか。牛の血をどんな風に腕へうえるのでしょう」
「さあ」
信太郎はちょっと当惑する。
「露姫さまはこんど兄上を見舞われます。その牛の血のことがわかると、兄上の腕にうえていただくのですがね」
順之助のはただの好奇心ではなく、そういう兄思いの心から出ていたのだ。
「なるほど、それが日本でできるものかどうか、さっそく帰って典医に聞いてみよう」
「どうぞお願いいたします」
順之助は正直に頭を下げていた。
「露どのは、いつごろ江戸を立たれるのか」
信太郎が妹のほうを向く。
「この十四日と聞いております」
兄の目にもめっきりとおとなびて、いよいよ端麗さを増してきた露姫である。
「さぞ心痛であろう。お方さまにおいとまごいにはまいれぬのか」
築地(つきじ)の中屋敷におなじ生母を持つ信太郎だから、江戸を立つ前にぜひ母に会っていってもらいたいと思う。
「その儀は、明日にでもおしのびで築地へおうかがいいたすことになるかと存じます」
頼母がそばから口を入れた。
客のうちでは、まず信太郎が一番に帰館の途についた。
兄のことだから、露姫がわざわざ玄関まで見送りに立つ。今日別れると、また当分会う機会がなくなるのだ。
「露どの、長い道中だ。くれぐれも体を大切にしなさい」

玄関で立ち止まった信太郎が、愛情をこめていった。
「はい、お兄上さまも、ごきげんよろしく」
「うむ」
にっこりとうなずいてから、ふっと、
「そう申せば、ここへ来る門前で、わしは雪之助をちらっと見かけたようだが、そなたは気がつかなかったか」
「あの、雪をでございますか」
と、意外なことを口にする。
露姫の星のような目がさっと輝くのを見て、
「人違いであったかもしれぬ。雪が江戸にいるはずはないからな」
信太郎はいそいで取り消して、
「では、堅固でな」
そのまま式台へおりて、横づけになっている駕籠(かご)に乗った。
「松平信太郎さま、お立ちい」
高らかに触れる声といっしょに駕籠があがり、行列は先頭から山門を出はじめる。
――たしかにこの辺であったが。
信太郎は駕籠のとびらを細目にあけて、さっきの横町のあたりを注意していたが、平井雪之助の姿はどこにもなかった。
――露と雪之助。
いまの露姫の目の色を見ても、なにかあったのではないか、そう考えなくては、雪之助の突然の帰国、それから勘当、それらがどうしてもふにおちぬ信太郎であった。
兄を送り出した露姫は、
「松江、少し休みたい」
と、中老姿でつきそっている松江にいった。
「お疲れあそばしましたか」
松江はいたわるようにうなずいて、控え座敷へはもどらず、支度部屋に用意してある小座敷へ案内した。
ちょうど老用人牧山源左衛門が、それと見て後を追ってきたので、

「御用人さま、姫君さまには少しお疲れのようでございますから、しばらくこれにて御休息あそばします。御家老さまによろしく申し上げておいていただきます」
と、取り次ぎをたのんだ。
「承知いたしました」
老用人はすぐに控え座敷へ出ていく。
小座敷に残ったのは、松江と腰元二人であった。
露姫は褥に座って、障子にあかるい秋の日ざしをうけながら、うっとり目を伏せている。
老用人が言いつけていったのか、間もなく小坊主が四人つれ立って茶を運んできて、めいめいの前へおいていった。
「姫君さま、御気分がお悪ければ、帯を少しおゆるめいたしましょうか」
「いいえ、ただ疲れているだけだから」
露姫はわらってみせながら、茶わんを取りあげて、一口二口のどをうるおす。
——雪之助。
胸の中でうっとりと呼んでみる。
——本当かしら、兄上さまのおっしゃったことは。
露姫はそれを聞いた時から、しきりに胸がときめいて、どうにもおさまらない。
雪之助が去年の秋、国もとへ帰って、間もなく勘当され、行方知れずになったと聞いた時は、まるで魂を持っていかれたように、露姫は本当に寂しかった。
たとえ顔は見られないまでも、雪はいつも兄上のそばにいるとわかっていれば、うわさぐらいは耳に入るし、それだけでも安心だったのに、どこにいるかわからなくては、もう一生顔さえ見られないだろう。死んだか生きているか、それさえわからない。
これから先、長い間、生きているかぎり、雪はいまごろどうしているだろうと、そればかり考えて暮らすのはつらいと思った。

来世を約束したのだから、あの世へ行けば会える。そうは考えても、露姫は本当はまだこの世での縁もすっかりあきらめているというわけではなかった。
しかし、今となってはもうなにもかもおしまいになってしまったのだ。生きているのさえ、つまらないと思った。
「現世は現世にしたがわなければいけません」
雪がそういっていたし、母上や兄上がとても心配してくれる。
「露どのは、雪となにかあったのですか。本当のことを話してくれなければいけません」
母上にそう問い詰められると、
「いいえ、別に——」
やっぱりそう答えてしまうよりしようがなかった。
そして、この春、露の魂はもう雪之助にやってしまったのだから、そうあきらめて郡山家へ輿入れを承知したのだった。
——雪はいつもあたくしの胸の中にいる。
今の露姫はそう考えて、ただ人形のように家来たちのいうなりになっているだけだった。
それなのに、兄上は今朝この菩提寺の門前で雪を見かけたという。
——本当かしら。
本当ならうれしいと思う。たとえ会ったり口をきいたりはできなくても、雪が本当に影身にそって見ていてくれると思うと、それだけでも安心である。
それに、郡山家はいま跡目のことでごたごたしているようだ。当主又一郎さまの御病気にも、なにかわけがありそうなことを耳にしている。
松江は頼母がつけてくれた女中で、まだなじみが浅いから、くわしいことはなにも話してくれないし、また聞こうとも思わないが、どうしてもお国入りだけはしなくてはならないようである。味方が松江と弥一郎だけでは心細い。
——雪がいっしょなら。

安心してどこへでも行ける。
うれしいと思いながら、雪の男らしい顔をまぶたにうかべているうちに、うつらうつらと体中が甘くとけていきそうで、
——まあ。
我にもなくひざの上で手にしていた茶わんを取りおとし、急に体が支えきれなくなってきた。
「あっ、姫君さま——」
松江がぎょっとして支えようとした時は、露姫の体はくずれるようにもう前のめりになっていた。
——しまった、このお茶に違いない。
松江は蒼白にならずにはいられなかった。
「姫君さま、どうあそばされました」
肩をおさえながら、少し抱きおこしてみると、ぐったりと正体はないが、別に苦悶もしなければ、血を吐く様子もない。
——すると、眠り薬かしびれ薬。
それならお命に別条はあるまいと、それだけはほっとしたが、とにかく一大事である。
「お中老さま、どういたしましょう」
二人の腰元たちも、ただおろおろしながら真っ青になっている。
「手を貸してください。お楽にしてさしあげなくては」
松江は手早く掻取りをぬがせ、重い帯を解かせて、自分の掻取りをそこへ敷いて、脇息をまくらに、露姫を横たえた。
上から姫君の掻取りをかぶせかけて、もう一度じっと顔色を見る。
寝息も苦しそうではないし、乱れてもいない。それは人形のように美しい寝顔だった。
「花世どの、お広間へまいって、そっと弥一郎さまと御用人さまを呼んできてください」
「はい」
「姫君さまのことは、なにも申し上げてはいけません」
「はい」

「落ち着いてお口をきくのですよ。おなかに力を入れて、そのお顔の色をなおしていかぬと、気取られます」
だれに知られてもまずい。極秘のうちに、できるだけ早く善後策を講じなくてはと、松江はとっさに考えたのだ。
「かしこまりましてございます」
花世はおじぎをして出ていった。
「小枝どの、次の間に詰めて、どなたもここへ通してはなりません」
「はい」
「御用の方は、用向きをうかがって、そこから取り次ぐのです。そこのふすまをしめてください」
「はい」
小枝は立って次の間との間のふすまをしめ、廊下のふすま口をかためた。
この茶を運んできた小坊主は四人であった。姫君の前へ茶わんをおいたのは、先頭に立ってきたまだ十一、二の一番小さい小坊主である。無論、眠り薬は池ノ端組の者が入れたに違いあるまい。どうして、どんな風に、姫君の茶わんにだけそんな細工ができたのか。
いや、それより重大なことは、敵は姫君を眠らせて、次にどんな手を打ってくる気か、すでにその準備ができているに違いないのだから、一刻も油断はできないのだ。
——それにしても、お毒味をしてさしあげなかったのは一生の不覚。
万一のことがあったら、自害しておわびをするほかはないと、松江は思った。松江は江戸家老諏訪の一門で、国もとで郡奉行をつとめている丹羽市之進の妹だから、大事な役目を持って国もとを立った時から、命はないものと覚悟はできている。
——しかし、ただは死にたくない。
あくまでも悪人どもと闘ってからだと、みなぎるような闘志を感じてくる。

「松江どの、どうなされたのだ」

いそいで駆けつけた裃姿の弥一郎は、ふすまをあけて一目姫君の様子を見るなり、あっと目をみはった。

「申し訳ございません。お寺から運んでくれましたお茶を、あたくしどももごいっしょにいただいたのでございますが、姫君さまのにだけ眠り薬が入っていたとみえまして――」

松江は消え入りたい風情で、弥一郎の前へ両手を仕える。

「眠り薬だな」

ずいと姫君のまくらもとへひざを進めた弥一郎は、じっと寝顔に目をすえて、息の調子に耳を澄まし、

「毒薬でなくて、まだしもよかった」

と、しみじみという。

「松江どの、御用かな」

そこへこれもいそいで顔を出した老用人が、

「あっ、これは――」

と、血相を変えて座ってしまう。

「源左、小坊主が運んできた茶の中に、眠り薬が仕かけてあったらしいということだ」

「すると、お命には――」

「まず、その心配だけはなかろうと思う。不幸中の幸いだ」

「はい」

「父上にだけそっとお耳に入れて、順之助君にはそのまま御帰館を願い、一応小坊主どもをそれとなく調べてみてくれ」

「委細承知つかまつりました」

老用人は即座に立っていく。

「池ノ端の挑戦だな、松江どの」

「はい。松江もそう存じます」

「今日思い立って、今日やったことではあるまい。敵は前から手をまわして、準備していたのだ。つまり、予定の行動といえる」

「はい」

「問題は次に打ってくる手だ。これも敵はすでに準備していると見なければならん」

さすがに弥一郎は父頼母にかわって中屋敷をあずけられるだけあって、もうすっかり落ち着きを取りもどしている。

「どんな手を打つつもりでございましょう」

「おそらく待ち伏せだろう。姫君を池ノ端へ奪っておいて、それから頼母を脅迫する。お命をとっては、脅迫はきかぬ」

「お帰りのお道筋をさぐらせてみましょうか」

「比良雪太郎という男にか――?」

「はい、まだ船に待っていると存じます」

「それも手だな。松江さんがいうとおりの人物なら」

「一度、お会いなさいましては」

「その暇があるかな」

弥一郎はまだ雪太郎が信じ切れないようだ。会っていないのだから無理もない。

「姫君さまの御帰館はお時刻どおりにしませんといけませんでございましょう。しかし、このままお乗り物にお移しはできぬかと存じますが」

「空駕籠をかえして、ひそかに船でおつれするほかはないな」

「弥一郎さまも松江も、行列を離れてはうそになりますし、この寺内に敵のまわし者がいることも考えておかなくてはなりません」

「うむ」

「御家老さまのお指図がいずれございましょうが、それまでにお暇をお作りになってはいかがでございましょう。順之助君お立ちになりましてからでは、もうお暇はございません」

雪太郎を必要とするのなら、今会っておかなくてはその暇がなくなると松江は思うのだ。

「よし、松江どのの言葉にしたがおう」

弥一郎は決心がついた。浪人者などをたよりにすると考えるからいけないので、この際信用のできる人間はできるだけ信用してお家のために働いてもらう、その考えでなければならない

と気がついたのだ。
「お会いくださいますか」
「うむ。――船だな」
「はい。お会いくださるのでございましたら、こちらへ呼びましょう。こちらから出向いては人目につきます」
「ここへ呼ぶのか」
「いいえ、御先代さまのお墓所がよいと存じます。あそこなら、弥一郎さまもそのお姿のまま、ここからお庭下駄でまいれますし、人も怪しみません」
「だれを呼びにやるんだね」
「若党がお庭のかげで見張りをしております。お待ちくださいませ」
松江は立って廊下の障子をあけ、縁先へ出て、
「光吉、――光吉」
と、庭へ呼んだ。
「はい」
植え込みのかげから若党が出てきて、そこへひざまずく。
「船へまいって、弥一郎さまがお目にかかりますからと、比良さまを御墓所までおつれしてください。大事が出来いたしましたからと申し上げて、如才もあるまいが、なるべく人目をさけてください」
「はい」
若党はすぐに立って、庭から出ていった。
「あなたは憎いなあ。女に生まれたのが惜しいと、おやじさまもいっていたが、まったくよく気がつく」
姫君のまくらもとへもどった松江の顔を見て、弥一郎は心から感心せずにはいられなかった。
「いいえ、あたくしは女でよろしいのです」
「なぜだね」
「いまにおわかりになります」
松江はちらっと微笑して、
「あの、また余計なことでございますけれど、比良さまはきっと大丈夫ですから、大胆にお話しあそばすほうがよいと思います。お会いになれば、すぐにおわかりでございましょうけれど――」
と、それとなく注意する。
「心得た。客人を待たせては失礼だから、こっちが先へ行っていよう。それでないと、また松江さんに注意されそうだ」
弥一郎は苦笑しながら立ち上がった。
――まったく憎い女だ。
庭下駄をはいて、庭から墓地のほうへ出ながら、弥一郎はそう思った。
比良という男をあんなにまで信用できるのは、旅先でなにかあったのではないか、ふっとそんな疑惑さえわいてきて、それだと油断はできない、ほれた欲目というからな、とも考えてみる。
――いや、邪推はやめよう。白紙で勝負すべきだ。
弥一郎は邪念を払いのけた。
とにかく、どれほどの人物かは、会って話してみればわかる。たのむに足る人物であってくれるように、この際はそう願うほうが本当だと思う。
弥一郎が今日法事のあった先君の御墓所へ参拝して、しばらくそこに待っていると、やがて光吉が深編み笠の武士を案内して、墓地の小道を近づいてきた。
「若だんなさま、御案内申し上げました」
「御苦労だった。そちはそこの角に立って、人のこぬように見張っていてくれ」
「はい」
その間に武士は深編み笠を取って、まず先君の墓のほうへ恭しく頭をさげている。眉目清秀といった優れた容貌で、態度も重厚のようである。
――なるほど。
第一印象は決して悪くなかった。

「浪人比良雪太郎です。お見知りおきください」
こっちを向いた比良は、はっきりと自分から名乗っておじぎをした。
「諏訪弥一郎です。拙者こそどうぞよろしく――」
弥一郎はあいさつをかえしてから、
「この度は松江が度々お世話になった上、またやっかいなことを持ちこんで、恐縮です」
と、言葉を足した。
「松江さんのように、頭から信頼されてしまうと、いやだとはいえなくなります。あの人にそれだけの徳が備わっているんでしょう」
比良の涼しい目には一点の曇りもない。
「実は、わしもあの娘には追い使われているほうです。あれは女には惜しい器量人です」
比良は微笑しながらうなずいて、
「なにか、大事が起こったそうですな」
と、改めて切り出す。
「面目ないことですが、姫君が眠り薬をのまされたのです」
弥一郎はいきなり切り出してみた。
「なにッ」
比良はじっとこっちを見すえて、
「お命は保証できるんですか」
と、その目に深い憂慮の色がおおい切れない。
「それは大丈夫のようです」
「そうですな。敵はお命が目的じゃない。死なれてはかえって困るはずだ」
比良はわがことのように、もう問題の核心へ自分から没入していく。
「そのとおりです。だから、敵が次に打ってくる手、それが心配なんだ」
弥一郎は我にもなく、ぐんぐん比良に引きずられている。
「眠っていては帰館できない。帰館は夜になる。あるいは空駕籠をかえしても、姫君はここへ残る。いずれにしても、次の手は襲撃です。敵の目的は、姫君をわが手に入れることです」

「襲撃はさくべきか、迎え撃つべきか」
「両面の策を立てましょう。姫君さえいなければ、一度敵の襲撃ぶりを見ておくのも、今後のために必要なことです。闘いはこれからお国入りまでつづくのですからな」
「さけるほうの策は――？」
「敵の意表を突いて、順之助君御帰館の前に、即刻姫君をわしの船に移しましょう」
「そんなことができるかなあ。ここはすでに内からも外からも敵の目に取りかこまれていると見るべきだが」
弥一郎は比良の顔をながめずにはいられなかった。
「人目につかずに姫君を船へ移す手、一つだけあります」
雪太郎はきっぱりという。
「あるか、かたじけない」
こうなってはわらにもすがりたい弥一郎である。
「この寺の横町に、折り詰め弁当を運んできたらしい手ごろの竹籠が、荷車ごとおいてあった。あの籠を若党にそっと座敷へ運ばせて、姫君を移し、とにかく荷車で船へ運んでしまいましょう。どうですな」
「籠詰めにしてな」
おいたわしい気がして、弥一郎はちらっとまゆを寄せたが、今はそれをいっている場合ではない。
「よかろう。だれが荷車をひく」
「船へ帰って、菊造をよこそう。菊造と若党光吉の二人きりでやらせる。河岸の横町までうまく二人で荷車をひいてくれれば、そこにわしが待っている」
「船の護衛はどうする」
「しばらくは、わしと光吉、菊造の三人でたくさんだ。姫君御帰館の行列に、貴公や松江さんが加わっていなければ、敵は姫君がひそかに寺へ残ったと見る。また、そういう風に見せかけ

て、ここへ敵の襲撃をかけさせる策を取る」
「わかった。では、すぐ実行しよう。なにぶんたのむ」
「承知しました。船へもどって菊造をよこしましょう」
雪太郎は深編み笠をかぶって、ふらりと墓地を去っていく。
——あれは立派な人物だ。
弥一郎は安心して座敷のほうへ引きかえした。
が、考えてみると、まだ第一難関の、姫君を人目につかずに船へ移すということがきまっただけで、後のことはこれからなのである。
幸い、座敷へもどってみると、父頼母がきて、松江から事情を聞いているところであった。
「どうした、比良という男に会いに行ったそうだな」
頼母がいきなり聞く。
「はい、会ってきました」
「なんと申していた」
どこかきびしい目である。浪人者などにうっかり大事をあかす、それでよいのかと、とがめているのだろう。次第によっては、討っ手を向けて今のうちに始末をと、そんなことまで考えているのかもしれない。
「父上、比良は、まず今のうちに姫君を、だれの目にもつかず船に移せ、策はそれからだと申していました。拙者はあの男は十分信頼できると思います」
弥一郎は単刀直入に切り出す。
「うむ、それができれば一番安全な道ではあるが、どうしてお運びするのか」
「この寺の横町に、折り詰めを運んできた竹籠が荷車にのせてあるそうです。菊造と光吉にそれをそっとここへ運ばせろと申しておりました」
「うむ」
頼母はちょっと思案しているようである。

「比良はここへ敵の襲撃の目を向けろと申していましたが」
弥一郎が一言つけ足す。
「よかろう。急な場合だ。人を疑っていてはなにもできぬ。すぐに手配をせよ」
頼母は決心がついたようだ。
「はい、ただいま光吉が籠を取りに行っております」
「そうか。——ここへ敵の襲撃の目を引きつけるというのは、たしかに妙策だ。比良という男は使えそうだな」
「なかなか人物のようです」
「松江から道中の話を聞いた時から、それが事実なら、いまどき珍しい男だと感心はしていた。いままたお前が会ってみて、人物だというのなら、もう間違いはあるまい」
「その点は拙者が引きうけます」
弥一郎はそう断言できると、今になって自信がでてきた。
そばで聞いている松江が、ほっとしたような顔をしている。
「姫君の始末がついたら、知らせてくれ。わしはすぐ順之助君のお供をしてここを立つ」
「はい」
「次に、姫君の駕籠へ身がわりをのせて立て、お前と松江はここへ残る。ここの警固は、上屋敷の供の中から五人だけ残して、この庭へひそかに詰めるように申しつけておこう」
「はい」
「お前と松江は、姫君の駕籠が立ったらすぐ、裏口から別々に人目につかないようにここを出て、万年橋あたりで比良の船に乗りこむがいい」
「承知いたしました」
「姫君の船は、新大橋のあたりをこぎまわりながら、わしの行くのを待っているのだ」
「すぐに中屋敷へ入っては危険ですか」
「危険ということはないが、敵が挑戦を露骨にしてきた上は、こっちもそれだけの手を打たね

ばならぬ」
「わかりました。仰せつけのとおりにいたします」
「おいたわしいかぎりだ」
頼母はもう一度じっと姫君の顔をのぞきこんでから、
「十分注意してくれよ」
と、二人に言いおいて座を立っていった。
「松江さん、源左衛門老人はあれっきりまだ帰ってこないのかね」
弥一郎は松江に聞いてみた。
「いいえ、一度おもどりになりまして、ちょうど御家老さまがおいでになっておりましたので、御返事なすっていました」
「じゃ、わかったのか、小坊主のほうは」
「わかるにはわかったのでございますが、あのお茶は家中のだれかが庫裏へ申しつけにまいって、その人の指図でこちらへ運んだとかで、すぐに小坊主たちにそっと首実検をさせてみると申しつけられまして、まいっております」
「そうか、家中の者が言いつけに行ったのか。おそらく、それは敵のまわし者だろう。もうとっくに逃げている」
「はい。御家老さまも、敵のまわし者ならそれでよいが、万一味方の中に裏切り者がいては大事だからと申しておりました」
「うむ、それはそうだ」
さすがにおやじさまはよく気がまわると感心しながら、いや、ただ感心ばかりしている場合ではないと、弥一郎はすぐに反省させられる。
深川高橋の北詰め、常盤町の角に『並川』という当時繁盛したうなぎ屋がある。
曲崎将監が池ノ端へ帰る主人松平大学の行列を離れて、橋をわたり、『並川』へ入ったのは九ツ半（一時）を少しまわった時刻であった。
「高柳という者がまいっているはずだが」
玄関へ立って、出迎えた女中に聞くと、
「はい、お待ちになっております。どうぞこちらへ」

女中は先に立って奥まった離れへ案内する。
来てみると、座敷には高柳峰十郎のほかに、花長が娘手品のお妻をつれてきていた。
「おお、お妻もきていたか。ゆうべは先へ帰って悪かったな」
将監は如才なく声をかけながらゆったりと設けの上座へ着く。
「どうも相すみません。なんでも、お妻が御用人さまに会わせろと、手前の家へ押しこんできて動きませんのでな」
花長がそばからわらいながら説明する。
「そうか、わしになにか用かな」
そのそらっとぼけた聞き方が、癇の強い女だからぐっと胸にきたんだろう。
「御用人さま、お浜は大事なあたしの妹なんです。あんまりあこぎなことをなさらないで、どうぞあたしにかえしてくださいまし」
と、お妻はいきなり浴びせかけてきた。
「おいおい、お妻、気をつけて口をきかねえか。それじゃお前、まるで御用人さまがお浜をさらっていったようじゃねえか」
花長が顔色をかえてたしなめる。
「いいえ、親分、だれがなんといったって、お浜が途中で迷子になるはずはありません。御用人さまがおつれになったに違いないんです」
「なにッ、お前そんな言いがかりを本気になっていうのか」
「長兵衛、まあよい」
将監は花長に目くばせして、
「お妻、実をいうとな、わしはお浜をさらっていったおぼえはないが、子細あってたしかにあずかってはいる」
と、あっさり言い切る。
「そんなことどっちだってかまいません。あたしはお浜さえかえしてもらえばそれでいいんです」
「では聞くが、お浜はお前の実の妹か」

「なんですって――」
　お妻はぎくりとしたように顔色をかえる。
「それみなさい。なるほど、お前はお浜を妹として引き取り、情けをかけて育ててきた。お浜もお前を実の姉のようにしたってはいる。しかし、お浜は身の上に事情のある娘だ。わしが子細あってあずかったというのはそのことだ」
「じゃ、じゃ、あの子の実のおとっつあんがわかったんですか、御用人さま」
「その話をする前にな、師匠、ゆうべはこっちの都合でどうにも待っていられず、まことに失礼したが、今日はぜひ師匠のひもの比良さんに会いたい。比良さんの前で、なにもかも話そう。どうだ、もう一度ここへ呼んできてくれぬか」
「御用人さま、そんなことを本気でおっしゃるんですか」
　お妻はあきれたような顔をする。
「気論、冗談などでいうのではない。ぜひ会いたいのだ」
　将監はあくまでも真顔でいう。
「だって、この方は高柳峰十郎さんとおっしゃるんでしょう」
　お妻が聞く。
「うむ、高柳がどうしたな」
「いつも覆面をしていましたから、お顔を見るのは初めてなんですが、高柳さんは鈴ガ森で一度、ゆうべは大川端で、比良さんを切りたがっている人です。御用人さまも比良さんをお切りになりたいんですか」
　お妻はそんな皮肉に出てきた。
　高柳がむっとしたような顔をして、お妻をにらみつけている。
「それはな、お妻、今までは事の行きちがいでそうなったまでのことだ。本当に切る切らぬは、これから会ってみてきまる。お前が帰ってそういえば、比良という男はきっと話がわかるに違いない」
　将監はそんなすごいことを平気でいってのける。
「お浜のことも、その時わかるんですね」
「うむ、その時子細を話そう」
「ようござんす。留守だったらしようがないけれど、家にいればきっとつれてきます」
　高橋を一つ渡った向こう河岸がすぐ大工町になっているのだから、お妻は思い切って立ち上がった。
「御用人さま、ほうっておいてもようござんすか」
　お妻が出ていくと、花長がそっちへ目を光らせながら声をひそめる。
「うむ、お妻のほうはなんとでもなる。それよりな、長兵衛、お前はこれからすぐ寺のほうへ行ってくれ」
「といいやすと――」
「頼母め、こっちがあれだけ手をつくしているのに、こっちへは無断で順之助を跡目に立てるようだ。もうしようがない、こっちも予定どおり火ぶたを切った」
「そのほうが早いでしょう。どうせただでは目のさめぬおいぼれです」
　高柳が昂然とけしかける。これは軽輩上がりの上に、国もとの勢力をよく承知しているから、はじめから主戦派だった。
「そこでな、いま姫君は菩提寺の例の小座敷でよく眠っているはずだ。帰館はどうしても夜になる。もし姫君の行列が予定どおり寺を立つとすれば、これは偽駕籠だ。本物は小座敷へ残って正気にかえるのを待つか、それとも裏口からこっそりつり台で運び出すか、手は二つしかない」
「わかりました。あっしの役目は、小座敷の張りこみですね」
「そうだ、特に裏口を注意して、なにかあったらいちいちここへ注進をよこせ」
「かしこまりやした」
「至急に手配してくれよ。もうそろそろ上屋敷

組の行列が立つ時分だからな」
「へえ、いそぎやす」
花長は即座に座を立っていく。
「御用人、あの連中だけで大丈夫でしょうかなあ」
「こういう仕事は、かえってあの連中のほうが慣れている。それより、高柳、中坂組はもう集まっているかな」
「中坂組は表二階へ集めてあります。大俵をここへ呼びますか」
「何人ぐらいつれてきているのかね」
「十人ばかりでよかろうといっておきましたが」
「わいわい連では困るんだが」
「その点は大丈夫です。拙者が一応立ち会って、免許以上と思われるやつばかり選んであるんですから」
高柳が自信をもって答える。
「よろしかろう。浪人組は貴公の責任なんだから、一切の采配は貴公にまかせる」
「今日の大体の手はずをおうかがいしておきましょうか」
「寺になるか、つり台になるか、それは敵の出よう一つだが、目的は無論姫君だ。うまく手に入ったら、わしの船へ運んでくれればいい。わしの船は菊川橋の下屋敷の向こうだから、一同は尾行されないようによく注意して、ひとまず菊川橋へ引きあげてきてくれ」
「承知しました。つり台の場合は白昼でもやりますか」
「いや、敵のほうで、つり台は白昼かつぎ出すまい。目に立つからな。早くても夕方出て、日が暮れてから中屋敷へ入る時刻を選ぶ」
「なるほど、それはそうですな。しかし、これは念のためにおうかがいしておきたいのですが、御用人はお浜をなんに使うのです。あなたが御寵愛になるというんなら、余計なことだから、拙者は黙って引きさがります」

にやりとわらってみせる高柳だ。
「バカなことをいいなさい。池ノ端さまとは違う」
将監は苦笑して、
「あれはな、露姫さまの身がわりに使うのだ」
と、意外なことをいう。
「身がわりといいますと――」
「わからんかな。中屋敷に姫君がいなくては、国もとへお立ちになることができまい。姫君のお国入りはすでに公許を得ていることだ。取り消すわけにはいかぬ。そこで、こっちから偽姫をかえしてやれば、いやでも偽姫を国もとへ運ぶことになる。無論、偽姫はお浜にかぎったことではないが、わざわざそうしてやることは、こっちに本物がいるぞ、もう一度考えろと、頼母に匕首を突きつけたのとおなじことになる」
「なるほど――」
「しかも、露姫さまはいやでも池ノ端さまの奥方にならなければならない。事実がそうなってしまえば、姫君の口から里方へ申し入れて、明石を味方につける。頼母がどうもがいても、引きさがるほかはなくなるのだ」
「さすがに、思慮遠大ですなあ」
高柳は感心した顔をしながら、
「あのお妻という女は、どうさばくおつもりですな。もうそろそろ比良というやつをつれてあらわれる時分ですぞ」
と、こんどはそっちが心配になってきたようだ。
「さあ、比良をここへつれてくるようなら、しめたものということになるんだがなあ」
将監の細い目が針のように光っている。
「それはどういう意味ですな、御用人」
高柳が思わずひざを乗りだした時、
「御用人さま――」
と、入り口のふすまの外で呼ぶ声がした。
「倉平か――。入れ」
「はい」

ふすまをあけて顔を出したのは将監の若党倉平で、
「だんなさま、ただいまお上屋敷の行列が、橋向こうを通りすぎました」
と、両手をついて報告した。
「頼母はついていたか」
「はい、お駕籠のすぐ後ろにおりました」
「御苦労だった。次は中屋敷だ、弥一郎と松江を見のがすなよ」
「かしこまりました。では行ってまいります」
倉平はふすまをしめて、いそいで引きかえしていく。
時刻はすでに八ツ（二時）すぎである。
「頼母もつらいところですな。顔を見てやりたかった」
高柳が嘲笑するようにいう。
「これからが勝負だ。あっちが音をあげるか、こっちがかぶとをぬぐか」
「無論、音をあげるのはあっちでしょう。こっちはすでに先を取っているんですからな。そこで、今の比良の話ですが、あいつがここへくるこないが、どうしてそう問題になるのです」
「それはな、高柳はいまこっちが先を取っているといったな。しかし、お妻が比良をつれてこられないとなると、比良は松江との関係で頼母へついたと見なければならん。お浜の問題もあるのだし、それ以外に比良がここへこないという理由はなにもないはずだからな」
「なにかの用で外出していたらどうします」
「そんなはずはない。比良はゆうべお妻と長兵衛の家へまでいっしょに押しかけている。そのお妻が、今日一人で花屋へきたというのがすでにおかしいのだ。いまさらお浜の事件から手をひくような男じゃあるまい」
「なるほど」
「万一、松江のほうへ引っぱられたのだとすると、頼母側にもそれだけの用意ができていたと見なければならんから、こっちの先は先にならぬおそれがあるのだ。といって、別に浪人者の一人や二人恐れるわけではないが、万事につけて油断は禁物だ」
将監はさすがに策士だけあってよく目端がきく。
そのころ——。
皮肉にも話題の人比良雪太郎は、無事に露姫を船へ移して、船は並川とは目の前の高橋の下をゆっくりこぎぬけていた。
本当はこの橋のたもとで弥一郎と松江が乗りこむのを待つはずだったが、ここは人通りが多いので、なにかと目立つおそれがある。
むしろ、もうしばらく万年橋のほうへこぎのぼると、お妻の家の前の横町の突き当たりの下へ出て、そこに近所の者たちが川水を利用できるように桟橋ができている。
場所は菊造がさっき長屋へ迎えにきてよく知っているので、そこへ二人を案内してくるようにと言いつけて、迎えにやってある。
これで、弥一郎と松江さえうまく船へのがれてきてくれれば、こっちの計画は九分九厘成功したことになるのだ。それにしても、まる一年ぶりで露姫とこんな対面をしようとは、まったく思いもかけない雪太郎だった。
露姫は座布団を四つに折ってまくらにされ、上から松江の掻取りをかけられて、目の前に宿命の恋人雪太郎がいるとも知らず、まだ昏々と眠りつづけていた。
その寝顔は清らかで、一年前と少しもかわってはいない。いや、一年前よりはめっきりと女らしく成長して、高雅な美しさを増しているだけに、雪太郎は感慨無量なるものがある。
この一年は、たってしまえば近いようにも思える一年だったが、心の内容は決してそう簡単なものではなかった。形の上からは家をすて、親をはなれ、兄弟にわかれて、生涯浪人の覚悟でちまたへ出た。そうしなければ家来という分がすまなかったし、お露さまのためにならぬと

考えたからだった。

が、自分の心はそれで安住したのではない。いや、むしろ心の苦悩はそれからはじまったといったほうが本当かもしれぬ。

なぜ、好きな男と女がむすばれてはいけないのか。なぜ、主従の恋は遠慮しなければならないのか。人の恋というものはなになのか。そういう一切の煩悩を悟り切るには、あまりにも若すぎたし、肉親のきずなを自分から断って孤独になった身には、いっそうお露さまのひたむきな恋がいじらしくて、狂おしいような昼と夜とがつづいた。

魂がうつろになってしまったような寂しさ、これがこれからのわが一生だろうかと思うにつけても、おなじ寂しさ、世の悲しさに、さぞお露さまも人知れず泣き暮らしていることだろう。いっそ姿をかえて江戸へ会いに行こうかと、何度常軌を逸しそうになったことか。

――こりゃいかん。生きていると思うから欲が出るんだ。

一切空、わかってもわからなくても、そこから出なおしてみよう。やっとそう思いなおして、どうやらいくぶん落ち着いてきたのはついこのごろのことで、自分でももう大丈夫だ、そう狂い出すこともあるまいと考えたから、こうして江戸の地を踏んでみる気になったのである。

それがこんな思いがけない再会をすることになって、さっき竹籠からいたましい人形のような姫君を抱きあげて船房へ移した時は、その持ちおもりのする、におわしい肉体を思わず抱きしめて、

――お露さま。

雪太郎はあやうく涙が出そうになるのを、必死にこらえなければならなかった。

胸にたぎってくるあらしのような感情、その片鱗さえ人に見せてはならないのだ。

が、心の中ではたえず妻と呼んでいる姫君、その人もまた魂はそなたのものと誓っているお

露さま、そのお露さまをいましっかりわが胸に抱いているのだと思うと、夢にもこうしたことが二度とあろうかとあきらめ切っていただけに、雪太郎は狂おしくならずにはいられない。

――お露さま。

雪太郎は菊造を菩提寺へ走らせ、光吉が船房の外へ遠慮するとたえきれなくなって、姫君のほおへほおをおしあて、しばらくはどうにも下へおく気にはなれなかった。

しかし、若党光吉を外へおいては危険である。どんなことで敵の目につかないとはかぎらないので、やがて姫君をそこへ横たえ、上から掻取りをかけて、光吉を呼んだ。

「お呼びでございますか、比良さま」

光吉が船房の戸をあけて聞いた。

「うむ、人目につくといかん。中へ入っていてくれ」

「はい」

光吉は素直に中へ入って戸をしめたが、自分たちの同席できる場所ではないことを知っているから、戸際を動こうとはしなかった。

それにしても、なんという薄幸な姫君なのだろう。ようやく納得して輿入れをした郡山家の当主又一郎は、すでに悪人どものためにこの世を去っている。

それとも知らず、お露さまは家名のために、近く危険な国入りの道中に旅立たなければならないのだ。

一つ間違えばこの姫君もまた悪人どもの私欲のために、いつ命を奪われるかわからない。いや、その第一の魔手は現に眠り薬の策謀となってあらわれ、お露さまはここにこうして昏々と意識を失っているのである。

第一の難関はどうやらこれで突破できたようなものの、第二、第三の迫害はだれが親身になってふせいでくれるのか。

頼母にしても、さっき会ってきた弥一郎にしても、お家ということが第一で、家名をまもる

ためにはやむなく姫君を犠牲にする、そんなことが絶対にないとはどうしていい切れよう。
　あえていえば、途中の危険をおかしてまで、お露さまをこんど国もとへつれていくということは、ただ家名をまもりたい、それ以外になにもないのだ。
　無論、大名の家というものは、多くの家臣をかかえているのだから、ぜひ家名をまもらなければならない。
　しかし、その大切なお家を悪人どもに引っかきまわされて、こんなあぶない事態に立ちいたらしめたのは、重役どもが無能だからである。なんの罪もない姫君を、家来たちの無能のために犠牲にする、そんなことは断じてゆるされない。
　――こうなったからには、お露さまの命はわしの手でまもる、それ以外にないのではないか。
　雪太郎の胸へそんな義憤が次第にたぎってきた。
　正直にいえば、当主又一郎が死去したからには、お露さまは当然そのまま明石家へかえすのが本当なのである。
　それを、喪を伏せて、お露さまにそれを秘し、方便のために国入りをさせるということは、大名の家として、またやむをえない節はあるにしても、この気の毒な姫君の命だけは、絶対にまもらなければならないのだ。
　――よし、わしはどんなことがあっても、お露さまの命だけはきっとまもってみせる。
　雪太郎ははっきりとそう決心した。
　そう決心してみると、お露さまの身の上に関するかぎり、郡山家のこんどの騒動は、雪太郎にとって、もう他人のことではなくなってきたのである。
「だんな、着きやしたよ。ここでいいんですか」
　艫（とも）のほうから船頭が、そっと声をかけてきた。
　雪太郎がそっちの船房の窓障子を少しあけてみると、たしかにお妻の家の前の横町の桟橋（さんばし）だ。

「よし、ここでいい。光吉、上へあがって、通りまで様子を見に行ってくれ」
「かしこまりました。見張りをすればよろしいのでございますな」
「うむ、怪しい節があったら、すぐ知らせてくれ」
「はい」
　光吉はおじぎをして、そっと船房を出ていった。
　――お露さま、雪はもうあなたをだれにもわたしたくない。
　雪太郎は眠りつづける露姫の美しい寝顔をながめながら、本心をいえばそんな気がしてきた。今は結局自分以外に露姫をしあわせにしてやれる者はだれもいないのだと、はっきりわかったからである。
　この姫君の命を他藩のために犠牲にするくらいなら、むしろあの時自分がもらいうけていたほうが、そこに多少の問題はあっても、おたがいにどれだけしあわせであったかしれないのだ。
　――雪は、お露さまのしあわせのためには、いつでも命を投げ出せる男なのだ。
　雪太郎はまたしても露姫のほおへ自分のほおを押しあてていかずにはいられなかった。
　急に、地を踏んでくる人の足音が、はっきりと耳についてきた。
　はっと露姫を放した雪太郎は、とっさに刀を引き寄せる。
「比良さま、弥一郎さまとお中老さまがお見えになりました」
　桟橋（さんばし）から光吉が小声で取り次いできた。
「そうか、御苦労だった」
　果たして、間もなくばたばたと小走りに近づいてきた足音が桟橋でとまって、
「これだな」
　と、弥一郎の声が聞き、
「はい、これでございます」

と、光吉の答える声がして、弥一郎はもう船に移り、素早く船房の戸をあけていた。
「やあ、ありがとう。やっとのがれてきた」
若党姿に化けている弥一郎は、船房の中を一目見て、ほっとした顔である。
「比良さま、お待たせいたしました——。姫君さまは大丈夫でございましょうか」
つづいて船房へすべりこんだ松江は、これは例の腰元姿だからすっかり板についていて、すっと露姫のそばへ寄るなり、その顔をながめている。
「まだよくお眠りのようでございますね」
「眠っています。少しも苦痛の様子のないところを見ると、オランダわたりの眠り薬かもしれませんな」
雪太郎はどうもそんな気がするのだ。
「船を出してよろしゅうございますか」
外から光吉が聞いてきた。
「いや、ちょっと待ってくれ」
雪太郎はそうとめておいて、
「弥一郎さん、船はあなた方にまかせておいて、わしはここでおりることにしよう」
と、弥一郎にいった。
「と、いうと——」
「菩提寺へ引きかえして、敵の出ようを見ておく必要もあるし、ほかに少し心当たりもある。とにかく、一通り様子をさぐって、今夜連絡を取ることにします」
「なるほど、——で、その連絡の方法は」
弥一郎はじっとこっちの顔を見ている。
「無論、菩提寺のほうへは、なにか手が打ってあるんでしょうな」
なにげなく雪太郎が聞く。
「手とは——?」
そう聞きかえすところを見ると、弥一郎は船のほうへばかり気を取られていて、そこまではうっかりしているようだ。
「姫君の偽行列が立つと、敵はたぶん菩提寺へ

襲撃をかけます。その敵に尾行をつけておけば、ある程度まで敵の様子がわかってきます。しかし、あの小座敷へだれも残らなければ、敵は襲撃を見あわせるでしょう」
「いや、それは残してある。裏庭のほうへも、何人か上屋敷の者が警固に残っているはずだ。その尾行のほうは、父が手を打っているかもしれぬが、念のために貴公にもたのんでおきたいな」
「承知しました。連絡の方法は、今夜五ツ（八時）新大橋へ光吉か菊造をよこしてください。わしがなにかの都合で行けなければ、雪という合い言葉を持った者を代理に立てます」
「わかった。では、なにぶんたのむ」
「承知しました」
「比良さま、どうぞお願いいたします」
松江がなにか言いたげにそこへ両手をついていたが、雪太郎はそれに微笑でこたえて、思い切って船房を出た。
——どうも松江のほうが一枚上手のようだな。
なんとなく雪太郎にはその感が深い。連絡の方法などは、こっちへ聞くまでもなく、そっちがきめることで、こっちが中屋敷の表門なり、裏門なりへ行きさえすればいつでも用がたりるようにしておいてくれるのが一番手っ取り早いのである。
松江がちょっと申し訳なさそうな顔をしたのも、それがあるからだろう。
——つまり、弥一郎は育ちがよすぎて、そこまでは気がまわらないんだろう。
雪太郎は苦笑しながら、船が万年橋のほうへこぎ出すのを見とどけて、お妻の家の方へきびすをかえした。
まず浪宅へ寄って、三井鐘太郎を引っぱり出す必要があるのだ。花長を張りこみに行っていてくれる堅田雁之助のことも気になる。
いそいで浪宅の路地口のほうへ近づいていく

と、その路地口からひょいとお妻があらわれ、続いて三井が出てきた。

「まあ、若だんな、どうしたんですよう」

お妻はぱっと顔中を輝かして、いきなり雪太郎に飛びついてきた。

「姉御こそどうしたんだ」

「しかし、若だんな、貴公は変なほうからきたなあ」

さすがに三井は目が早い。

「うむ、わしはいま川からあがってきたんだ」

「川から——?」

「それより、姉御は堅田うじに会わなかったのかね」

雪太郎はお妻の顔を見る。

「会ったわ。それが大変なの。ああ、そういえば、若だんなは箱根のお嫁に引っぱり出されたんですってね。会ってきたんですか、憎らしい」

「まあ待て、姉御。その堅田うじの話のほうが先だ」

急に雪太郎の顔から微笑が消える。

「よし、わしがかわって話そう」

お妻では話にむだ言が多くなると見て、そばから三井が買って出た。

「姉御は今日一人で、花長の家へ掛け合いに乗りこんだ。花長はこれから曲崎に会いに行くところだからといって、姉御をつれて高橋際のうなぎ屋『並川』へ行った。そこに高柳峰十郎が先にきていて、これも将監を待っていた。将監が『並川』へ着いたのは、ついさっきだそうだ」

「いやだなあ、人の話を横取りしちゃ」

お妻はあきれて三井の顔をながめている。

三井はかまわずつづける。

「姉御は曲崎に、お浜をかえしてくれと、いきなり食ってかかった。よろしい、話をつけるから、もう一度若だんなをここへつれてこいと、曲崎は出たそうだ。また高柳に切らせる気かと、姉御が詰め寄ると、切る切らぬは会ってからのことだと、将監は突っぱねる。そこで、姉御は

若だんなを呼んでくる気で、『並川』を出た。高橋をこっちがわへ渡ってくると、そこに堅田うじが立っていて、見張りだということがはじめてわかった。並川には例の中坂下の玄蕃ぎつねの一味が十人ばかり集まっている。わしは将監を見張っているから、姉御は若だんなを呼んでくるがいいと堅田うじがいうんで、姉御はここへきた。こっちはざっとこんな次第なんだ。そうだろう、姉御」

「御苦労さん。——だから、若だんな、いっしょに『並川』へ行ってくれるでしょう」

お妻は改めて雪太郎の顔を見る。

「よかろう。じゃいっしょに行くことにして、こっちの話は歩きながら話そう。三井もきてくれ」

雪太郎は二人をさそって表通りのほうへ歩き出す。

「若だんなはお嫁に会ったのかね」

「会った。あのお嫁は、郡山家の中屋敷に仕えるお中老で、中屋敷には明石家から輿入れしたばかりの露姫さまというのがいる」

雪太郎は跡目問題の大体を話して、今日の菩提寺のいきさつに及び、

「つまり、曲崎将監というのは、その池ノ端の松平大学の用人なんだ」

と告げた。

「ふうむ。すると、中坂組は姫君略奪のために雇われて、『並川』に待機しているわけだな」

三井はいささかあっけに取られているようである。

「だって、お姫さまはもう船で大川へ逃げちまっているんでしょう」

お妻は女だけに、露姫のことが気になるらしい。

ちょうど高橋のほうへ曲がろうとする町角へかかった時、露姫の行列の先頭が見えはじめた。

「あれらしいな、若だんな」

「うむ」

「あたし、なんだか胸がふるえてきたわ」
三人は道端へよけて、行列を見送ることにする。時刻はすでに八ツ半（三時）すぎだった。
美しい女乗り物にはだれか身がわりの腰元が乗っているようだが、無論とびらがしまっているので、外からは見えなかった。
「わかったぞ、若だんな」
行列を見送ってから、三井が思いあたるようにいった。
「なにがわかったんです、三井さん」
お妻が三井に聞く。
「いや、よろしい。いまにだんだんわかってくる」
三井は軽率をつつしむように、雪太郎の顔を見て微笑しながら、
「若だんな、わしの今日の仕事は」
と聞いた。もう敵地に近い。あまりぐずぐずはしていられないのだ。
「三井、これを貸そう」
雪太郎は手にしていた深編み笠を三井にわたして、
「貴公は堅田うじと相談して、浪人組が動き出したら、後をつけてみてくれないか。できるだけ敵の行動をさぐり出すのが目的なんだから、衝突は極力さけることだ」
と注意する。
「承知した」
「後の連絡は、その必要があれば、隣の奥方にしておく。貴公のほうもそうしてくれ」
「わかった。しかしなあ、若だんな、敵は眠り薬というやつを使っている。都合によってはいつ毒薬を用いないともかぎらんから、十分気をつけてくれよ」
「ありがとう。では、ここで別れよう」
雪太郎はお妻をうながして、町角を高橋のほうへ曲がった。
「あたしなんだか胸がどきどきしてきたなあ」
お妻はいそいそと雪太郎に寄りそってくる。

「姐御、わしがさっき話したことは、一切知らぬことにしておかんといかんぜ。少しでも事件に関係があると見られると、曲崎はいつ命をねらう気になるかわからない。姐御の目的は、ただお浜を取りかえすことにある。それでいいんだ」
「わかってます。でも、若だんなはもう、お姫さまのほうから手がひけないんでしょう」
「うむ、乗りかかった舟だからな」
「じゃ、あたしだって、その舟へいっしょに乗りますからね」
いけないといったところで、素直にうんというお妻ではないので、
「舟はいつ引っくりかえるかわからんからな、お手やわらかにたのむ」
と、わらっておく。
「いいわ、あんたといっしょに沈むんなら本望だもの。お嫁なんかそばへ寄ってきたら、けとばしてやるからいい」
お妻は松江に対する敵愾心をかくそうとしない。
高橋へかかろうとして、それとなくあたりを見まわすと、下手の川っぷちに堅田がしゃがみこんで、ぼんやり川をながめていた。
無論、こっちに気がついて、きたなと思ってはいるだろうが、そんな様子をちっとも見せないのはさすがである。
「堅田さん、あそこにいるわ」
「そっちを見ちゃいかん」
「わかってるっていうのに――。子供じゃあるまいし」
橋をわたり切って、左手の角が『並川』だった。
「ここよ」
「うむ」
お妻はさっさと先へ玄関へ入っていって、いそいで出迎えに出た女中に、
「曲崎さまのお座敷へ通ります」

と告げて下駄をぬぐ。
案内はわかっているからと女中をことわり、廊下づたいに離れへきて、
「ごめんください」
と、ふすま口から声をかけると、
「はい」
待ってでもいたように、中からふすまをあけたのは若党風の男である。
——はてな。
この男はたしかにさっき姫君の行列を見送っていた時、町角にいたやつだと、雪太郎は素早く見て取る。
「やあ、お妻か。遠慮なく入りなさい」
座敷に座っていたのは曲崎一人で、如才なく声をかけてきた。
「どうぞ——」
若党は二人が座敷へ入るのを待って、自分は座を外し、外からふすまをしめる。
「御用人さま、比良さんをつれてきました」
「そうか。——さあ、どうぞこれへ。わしが曲崎将監です」
将監は気軽に雪太郎を請じたが、どこの家来だということは口にしない。四十を三つ四つ出たかと思われる、いかにも策士らしい風格の男だ。
「失礼します。拙者は比良雪太郎、お見知りおき願いたい」
雪太郎もなにげなくあいさつをしておく。
「御用人さま、高柳さんも花長親分もいませんねえ」
「うむ、二人とも用があって帰った」
「そのほうがあたしにしても安心です。それで、御用人さま、お浜のほうのことなんですが、どういうことになるんでござんしょう」
お妻がさっそく切り出す。
「まあ待ちなさい」
将監はわらいながらお妻を制して、
「比良うじ、失礼だが、あなたは大した腕前だ

そうですな」
と、雪太郎のほうへ話しかける。
「いや、それほどでもありません」
「道中では松江が世話になったそうだが、どうですな、松江のほうからまだなにも話はありませんかな」
「その後別にたよりはありません」
「すると、これからということになるのかな」
将監は意味ありげにいいながら、
「実は、せっかくお妻を迎えにやっても、今日は比良うじは留守じゃないかと、心配していました」
と、あくまでも用心深くずるいさぐりを入れてくる。
「それはどうしてです」
「こっちはゆうべ、あんな失礼をしている。それに、松江のほうからもうどうしても話が行くころだと思ってな」
「御用人はなにか非常に松江さんのことを心配していられるようだが、なにか事情があるのですか」
「無論、それはあります。貴公にもその辺のことはもううすうすおわかりのはずだが」
「それはうすうすはわかっています。鈴ガ森での待ち伏せといい、ゆうべの大川端の出迎えといい、ただごととは考えられませんからな」
「そのとおりです。そこでどうだろう、比良うじ、松江のほうからまだなんの話もないのなら、貴公を高禄でぜひ手前の主人のほうへ推挙したいと思うのだが」
いよいよ将監がずばりと切り出してきた。

敵と味方

「せっかくですが、拙者は少し子細あって、生涯、仕官と結婚とはできない身の上です」
雪太郎はあっさり答えておく。
「ほう、二君に仕えずということはよく聞くことだが、妻をめとらぬとは、どういうわけでし

ょうかな」
将監がふしぎそうな顔をする。
「この人はねえ、御用人さま」
口の軽いお妻は、金魚姫の話をぶちまけようとして、あっと雪太郎の顔を見てしまった。ひょっとすると、さっきの露姫さまというのが、この人の金魚姫なのじゃないかしらと思いあたってきたからである。
「どうしたな、お妻」
将監は若い二人の顔を見くらべながら、さぐるような鋭い目になっている。
「いいえ、なんでもないんです。この人はあたしをお嫁にしたくないもんだから、わざとそんな白を切っているんです。憎らしいってありゃしない」
お妻はうまく言葉をかわしながら、まだじっと雪太郎の顔を見すえている。
雪太郎はただ苦笑しているだけだ。
「すると、お妻がひもだといったのは、うそなのかね」
「うそじゃありません。うそでないから、ちゃんとこうしてあたしとここへ出てきてくれたんじゃありませんか」
「ああ、そうか。つまり、正式の妻にはできないが、めかけならかまわぬというわけか」
なんとなく口に毒の出るのは、若い雪太郎を怒らせてみようという腹になったのだろう。
が、雪太郎は別にむきになる様子もない。
「どうだろうなあ。比良うじ、めかけならかまわぬという論法で、仕官ができなければ客分ということでは——」
「いや、客分などという名義はなくとも、拙者はおのれの心に納得がいきさえすれば、いつでもお力ぞえはおしみません」
言葉はおだやかだが、その態度に断固たるものがある。
「なるほど、あなたは立派だ」
将監は感心しながらも、その一方でこしゃく

なと思ったのだろう。
「お妻、お浜のことだがなあ」
と、ふいにお妻のほうを向く。
「かえしてくれるんですか、御用人さま」
「いや、かえすわけにはいかんが、会いたければいつでも会わせよう」
「そんなこと、そちらの勝手にきめられては困ります。お浜はあたしの妹なんですからね」
お妻はかっとなったようだ。
「無論、それはわかっている。が、こっちも必要があるからお浜の体を借りた。会えばわかることだが、借り物だから決して粗略にあつかってはおらぬ。こっちの用がすめば、必ず無事な体で、嫁入り道具一切、その上相当の持参金までつけて、お前の家へ送りとどける。それなら別に文句はあるまい」
腹に一物あるらしく、こんどは頭から高飛車に出てくる将監だ。
「そんなってありますか。人の妹を黙ってさらっていって、いまさらそんなこと、あたしは承知できません。お浜をすぐかえしてください」
「そんな無理を申してはいかん」
将監は冷笑して、相手にしようとしない。
曲崎があえて無法な放言を口にしているのは、こっちの出ようを待っているんだなと、雪太郎にはすぐわかった。
つまり、曲崎はこっちがお妻といっしょにお浜に会わせろと出るのを待っているのだろう。
「御用人、あなたはいま、お浜に会うだけなら会わせるといいましたな」
雪太郎はおだやかに聞いてみる。
「無論、それは会わせます」
「その折、お妻の体はお浜同様、危害は加えないと保証していただけますか」
「わしは無頼漢ではないから、人の礼儀はつくすつもりだ。それだけは信用していただこう」
将監はきっぱりと言い切る。
こういう人物のことだから、その言葉をどこ

まで信用していいかわからないが、とにかくお浜に会わせるというのだから、会わなければこっちの負けになる。勝負は会ってからのことなのだ。
「姐御、曲崎さんは人の礼儀はつくすと約束してくれたんだ。一度お浜に会ってみてはどうだね」
「あたし一人で行くんですか、若だんなはいっしょに行ってくれないんですか」
お妻はいっしょに行ってもらいたそうな顔をする。
「御用人は無論わしがいっしょに行きたいと希望すれば承知してくれると思う。しかし、わしはせっかくの仕官の厚意を辞退したばかりなんだ。こっちの都合の悪いことはことわって、都合のいいことばかりたのむのは、手前勝手なようで、わしにはできない。わしは家にもどって姐御の返事を待つことにする」
そういわれてしまうと、お妻もたってとはいえなくなる。それに、雪太郎にはもっと重大な仕事があると、ちゃんとわかっているのだ。
「ようござんす。じゃ、あたし一人で行ってきますから、そのかわり、若だんな、あたしが帰るまでどこへも行かないで、きっと家に待っていてくださいよ」
「承知した」
雪太郎はうなずいてみせて、
「曲崎さん、いまお聞きのとおりで、拙者はこれで失礼します」
と、改めてあいさつをした。
「もどられるかな。まことに残念だが、いたしかたあるまい。しかし、いつなりと気が変わって、仕官の決心がついた節は、たずねてください。お力になろう」
「ありがとう。その節はよろしくお願いします」
雪太郎はそう言いおいて廊下へ出た。
「玄関まで送ってあげる」
お妻がいそいで立って、後を追ってきた。

「姐御、大丈夫だ。案内はわかっている」
「そんなにきらわなくたっていいじゃありませんか」
お妻はわざと背中へからみついてきて、
「帰りは気をつけてくださいよ。あいつただのねずみじゃないんだから」
と、素早く耳うちをする。
「姐御、もういいよ。曲崎さんに悪い」
雪太郎は口で答えながら、目で、わかっているよと、うなずいてみせる。
雪太郎はお妻に別れて、『並川』を出た。
暮れやすい秋の日は、もう夕方近く、日はぐっと西へ傾いていた。
高橋をわたりながら、さっきの川っぷちに堅田がまだいるようならお妻のことをたのもうと思い、それとなく目でさがしたが、それらしい姿は見あたらなかった。
――三井といっしょに出かけたのかな。
そういえば、『並川』を出る時、表二階のほうを注意してきたが、ひっそりとしているようだった。あるいは玄蕃ぎつね配下の浪人組がいよいよ菩提寺襲撃に出発したので、その後をつけたのかもしれぬ。
いずれにしても、堅田がいないとなると、自分が将監とお妻のあとをつけなければならないことになる。
そんなことを考えながら、雪太郎がゆっくりと橋をわたり切った時、右手は川っぷちまで人家になっているそこの路地から、ふらりと往来へ出てきた浪人者がある。六郷の渡しで三井と切り合いをやった大平鉄之進であった。
「おい、久しぶりだな」
大平はにこりともしないで、雪太郎の前へ立った。
「やあ、貴公か。なにか用かね」
「うむ、話がある。ちょっとこっちへ来てくれ」
左手の川っぷちの道をあごでしゃくってみせながら、もうさっさとそっちへ歩き出す。

無論、曲崎の刺客に違いないのだ。
こうしてはっきりと敵と味方にわかれた今となっては、敵はあくまで倒して進む以外に道はない。雪太郎は黙って鉄之進のあとからついていった。
この道は、しばらく行くと大工町の町並みがつきて、永井縫之助の下屋敷の塀つづきへ出る。川を越した対岸は、ずっと大きな大名屋敷つづきだ。
「この辺でよかろう」
大平は立ち止まって、くるりとこっちを向いた。ちゃんと川を背にしているのは、そのままでは落日をまともにうける位置になるからだ。
「どうしようというのかね」
雪太郎は自然塀を背にして、往来を斜めに大平と向かいあいながら、まずおだやかに聞いてみた。
「川崎の時の勝負をつけよう」
「相手が違うようだが――」
「貴公もあの時の片割れだ」
「しかし、あの時は大俵先生の仲裁で、一切水に流すことになったんじゃなかったかね」
「文句をいうな、黙って抜けばいいんだ」
「貴公は案外男らしくないなあ」
「なにッ」
「腹にもない川崎の遺恨など持ち出さずに、曲崎にたのまれたんだと、なぜ男らしくはっきりといえないんだね」
雪太郎はわざと冷笑をうかべる。相手を怒らせて、冷静さを失わせるのも一つの戦法なのである。
「世迷いごとをいうな。行くぞ」
「やめたまえ、貴公などにわしは切れぬ。わしは正義の士だからなあ」
「うぬッ」
大平はおおかみのような目を光らせて、かっと抜刀した。
――憎いやつ。

抜きあわせた雪太郎は、むらむらっと、怒りを感じてきた。
金で人にたのまれて、人の命を虫けらのごとく奪おうとするこういうおおかみ浪人がいるから、世の多くの善人が泣かされるのである。
「えいっ」
容赦なく切ってすてる決心で、雪太郎はじりじりと間合いを詰めていった。
「おうっ」
二度まで失敗した高柳にたのまれて、たった一人でこの刺客を引きうけてくるくらいだから、大平は腕に十分それだけの自信はあるのだろう。
たかがこんな青二才一人と、甘く見てかかってきたようだが、抜きあわせてみて、雪太郎の剣に磐石の重みのあるのに、あっと気がついたのだろう。その勝ち誇っていた傲慢な面構えが、たちまち必死の形相にかわってきた。
「えいっ」
雪太郎はまたしても間合いを詰めていく。その剣尖はぴたりと大平ののどもとに吸いついているのだ。
「おうっ」
はねっかえすように大平は絶叫しながら、川端を背にしているから、もう後へさがることができない。じりじりと往来のほうへまわりこみはじめた。すっかり往来へ出てしまうと、落日をまともにうけることになる。そうなってはいよいよ不利だ。
死ぬか生きるかのどたん場へ追いこまれると、窮鼠かえってねこをかむで、そこは何度となく白刃の下をくぐったことのあるやつだから、
「とうっ」
猛然と逆襲に転じ、さっと一刀を上段に振りかぶって、強引に切って出ようとした。
が、雪太郎は敏捷無類な太刀さばきの持ち主である。敵が上段に変化しようとする一瞬、

「えいっ」
だっと踏みこみざま、あざやかに籠手へ切りこんだ。
「わあっ」
ぽろりと右の手首を切って落とされた大平は、たわいなくどすんとそこへしりもちをつく。
そこを拝みうちにすればそれまでの命だが、すでに戦闘力を失った者を切るほど残忍な雪太郎ではないから、
「立てッ」
一歩さがってわざと二の太刀を振りかぶる。
「うぬッ」
そのすきに気丈にも飛び起きた大平は、もう向かってくる気力はなく、
「おぼえておれ、小僧」
捨てぜりふを残して、川下のほうへさっと走り出した。
バカなやつだ。
雪太郎は刀をぬぐって鞘におさめながら、人一人を一生の不具にしたかと思うと、あまりいい気持ちではない。
「若だんな――」
ふっとうしろから呼ぶ者がある。深編み笠をかぶった侍である。
「堅田うじか」
「さよう――。川下をごらんなさい」
堅田は深編み笠の中から妙なことをいう。
「川下――」
雪太郎が不審そうにそっちを見ると、
「あそこへ屋根船が一隻くだっていきますな。あれが曲崎とお妻姐御をのせている船です」
と、堅田は説明する。
「なるほど――」
たしかに屋根船が一隻、ゆっくりとこぎくだっていく。
「こっちが長びくようなら、助太刀をしてからと思ったんだが、いいあんばいにけりがついた。わたしはこれからあれをつけます。いずれ後刻」

堅田はあくまでも曲崎の本陣をつきとめる気なのだろう。今朝からほとんどまる一日、こうして根気よく尾行の役をつとめていてくれるのだから、たしかに我慢強い男に違いない。
「よろしくたのむ」
「承知した。そうそう、三井はこの深編み笠をわしにゆずって、菩提寺のほうへ行ったはずだから」
そう言いおいて、堅田はもうさっさとそっちへ歩き出す。
――たのもしい味方だなあ。
と、雪太郎は心から感謝せずにはいられなかった。
菩提寺を襲撃する浪人組は、結局むなしく曲崎と合体することになるだろうから、こっちも三井と堅田の二人で尾行することになる。
そっちは二人にまかせておけば安心なので、雪太郎はともかくも一度浪宅へ帰ってみることにした。

一方――。
お妻をつれて屋根船へ乗りこんだ将監は、無論、例の秋元の下屋敷の角へ船をつけて、浪人組が菩提寺からさらってくる露姫をうけ取って、横川にある下屋敷へ入る計画だった。
船が雪太郎と大平との切りあいの場所を通りすぎる時、二人ともそれらしい気配は耳にしたが、どっちもちらっと顔を見あわせただけで、窓障子をあけてみようとはしなかった。
「お妻、お前は案外意地っぱりだな」
船がしばらく下ってから、将監がわらいながら切り出す。
「なぜです、御用人さま」
「さっき、岸でだれかが切りあいをやっていたようだが、耳にしなかったかな」
「そういえば、なんだかそんなようでしたね」
「お前は、ひものことが心配にならないかね」
「あら、御用人さまはまたあの人を待ち伏せさせたんですか」

お妻はわざとびっくりしたように目をみはってみせる。

「いや、わしは決してそんな人の悪いまねはさせぬ。しかし、高柳はあの男に二度まで恨みがあるといっていた。あの男の帰りを待っていないとはかぎるまい」

「高柳さんなら、心配ありません」

「あの男のほうが強いからかね」

「いくらか段が違うんじゃありませんかしら」

お妻は平気でわらっている。

「しかし、もっと強い加勢をたのんでいるかもしれないよ」

「御用人さまがそんな知恵をおつけになったんですか」

「いや、高柳にだって、そのくらいの知恵はあるだろう」

「あの人はたいてい大丈夫なんです。ほかの人とは心がけが違いますから」

心憎いほど落ち着いているお妻である。

どうしてそんな自信が持てるのかと、将監はふっと不安なものさえ感じてくる。

「そうか。ほれた欲目ということをいうが、後学のために、あの男がほかの者とどう心がけが違うのか、聞いておきたいものだな」

「あの人には欲というものがありません。ですから、いつも神さまがついていてくれます。きっと、わからないことは神さまが教えてくれるんじゃありませんかしら。驚くほど人の心の中がよく見えるんです」

「なるほど、――しかし、そんなに偉い男が、どうして浪人などしたんだろうな」

「それは、なにか深いわけがあって、浪人したほうがいいと、神さまからお告げがあったんでしょう」

お妻の顔にふっと寂しそうな微笑のうかんだのを、将監は見のがさなかった。

――どうもわからん。

将監の目から見れば、雪太郎がさっきお妻といっしょに『並川』へやってきたのは、それまで浪宅にいた証拠で、松江のほうとはまだなんの関係もないと見ていい。

しかし、こっちの味方をはっきりことわった以上、お妻やお浜を中にした立場からいっても、あきらかに敵にまわさなければならない。だから、さっきも高柳に、たしかな刺客を待ち伏せさせて片づけてしまえと言いつけておいたのだが、それをちゃんと察しているらしいお妻が、こうして落ち着いていられる。ほれた欲目で比良を絶対に強いと信じているからか、それとも比良は『並川』へ出向く前に、あらかじめなにか手を打っていたのか、その点が将監にはなんともふに落ちかねるのだ。

いずれにせよ、刺客がうまく雪太郎をやってくれさえすれば、問題は簡単だが、また失敗したとなると、松江をとおして諏訪のほうへ縁の近い男だけにやっかいである。

「御用人さま、高柳さまがあそこでお待ちになっているようです」

ふっと艫（とも）のほうから船頭が声をかけてきた。

「なにっ、高柳がか――」

将監はぎくりとした。

「高柳一人か」

「いいえ、横町のほうにも何人かいるようです」

「そうか。いそいでくれ」

「へえ」

船が急に早くなり出す。

――襲撃に成功したのか、失敗したのか。

将監の胸はおだやかでない。あれだけ手をつくしているのだから万失敗するはずはないのだが、それにしては時刻が少し早すぎる。菩提寺（ぼだいじ）の襲撃はなるべくたそがれてからと言いつけてあるのだ。

秋の日は今やっと落ちたばかりである。

「御用人の船だな」

とんと船が桟橋（さんばし）へあたるなり、ひらりと高柳が飛び移ってきたようだ。

「高柳、入りなさい」
　声をかけながら、将監は、失敗したなと、敏感にもわかってしまった。
「やあ、姐御もいっしょか」
　声をあげて船房へ入ってくるなり、高柳はなにかためらっている。
「どうした。遠慮なくいいなさい」
　将監はかまわず高柳をうながす。
「あたし、しばらく外へ出ていましょうか」
　お妻がわらいながら聞く。
「いや、そこにいなさい」
　なにげなくいう将監だ。こうして下屋敷へつれていく以上、二度とは家へ帰さない腹をちゃんときめているのである。
「御用人、問題の人は菩提寺にいませんでした」
　高柳もそれと察したらしく、ずばりと切り出す。
「なにッ、いない」
「時刻はたそがれてからという手はずで、墓地から遠巻きにしていたのですが、表門のほうへ張りこませておいた長兵衛が、中屋敷の用人が侍どもを五、六人つれていま帰っていくと知らせてきたんで、時を移さずに踏んごんでみました。あの座敷にはだれもいない。坊主に聞いてみると、姫君の行列が立ってから、何度も茶を運んでいったが、家中の侍たちばかりで、女は一人もいなかったというんです」
「源左衛門といっしょに帰った侍どもの中に、怪しいやつはいなかったのか」
「しかし、姫君はまだ薬がさめる時刻じゃないでしょう」
「うむ、そういえばそうだが――」
「念のために長兵衛にも聞いてみましたが、みんな男たちばかりで、変装と思われるようなやつは一人もいなかった。これだけは間違いないといっています」
「すると、行列の駕籠は本物だったということになるのか」

「それなら、弥一郎も松江も行列の中にいたはずです」
「なるほど――」
「あるいは弥一郎と松江が二人だけついて、まだ寺のどこかにひそんでいるかもしれないとも考えられるので、囲みは解いていませんが、坊主に金をつかませて、一通り各座敷を見てまわったところでは、それも望み薄です」
「では、いつ、どうして、どこから、眠っている人間一人を運び出したことになるな」
　将監が皮肉な顔をする。
「池ノ端さまがお立ちになってすぐ、この時は表門にしか見張りはつかなかった。花長が子分どもをつれて裏表をかためたのは、上屋敷の行列が立つ前だというから、御用人が『並川』へ入って、花長が寺へ駆けつける。それまでの間に裏口から弥一郎と松江の二人で細工をしたと見るほかはありませんな」
　高柳が澄ました顔をして、皮肉をかえしている。
「うむ」
　それが本当だとすると、敵はあらかじめ今日なにか起こると予想して、ちゃんと準備をしておいたことになる。そんなことはありえないはずだ。
　と、考えたところに、こっちの油断があったのか。
「しかし、それだと、ここから船ということになりそうだな」
　将監は苦い顔をしながら、なんとはつかずお妻のほうを見る。
　お妻は知らん顔をして、目を伏せながら、つまらなそうにひざの上でたもとをもてあそんでいる。
「だんなさま――」
　若党倉平が船房の戸口へきてひざまずいたようだ。
「倉平か」

「はい」
「そこをあけなさい。どうしたな」
　倉平は大平鉄之進についていたはずだから、将監は思わず高柳と顔を見あわせる。
「大平さんは残念ながら――」
　戸をあけた倉平は、お妻に遠慮するように口ごもる。
「失敗したというのか」
「はい、手首を切り落とされて、御自分で医者へ駆けつけました」
「そうか、御苦労だった」
　将監は倉平をさげて、
「お妻、やっぱりお前の勝ちだったようだ」
と、苦笑しながらいう。
　お妻はちらっと将監の顔を見てわらっただけである。それは、わかりきっている勝負だから気にもとめていないといった無造作な態度に見える。いや、そんなことよりもっとほかに心配なことがあって、それを考えているという風にも取れる。
　――ことによると、この女はもっと重大な雪太郎の秘密を握っているのではないか。
　だんだんそんな気がしてくる将監だ。重大な秘密とは、無論、今日の露姫脱出に関係のあることに違いない。
「大平一人では、やっぱり無理だったようですな」
　高柳が人ごとのようにいう。
「はじめからそれがわかっているのなら、もう少し手段がありそうなものだったな」
「いや、大平がたって一人でやってみせると、自分で買って出たのです。彼らにはまた彼らの意地がありましてな、あまり疑うようなことをいうと、かえってへそを曲げます」
「うむ、まあそういうこともあるだろうが、とにかく今日はこっちの完敗ということになる」
　将監はもう一度苦笑しながら、
「高柳、寺の人数をまとめて、一応下屋敷へ引

きあげてくれ」
　と、あっさり出る。
「承知しました。しかし、あの男をこのままほうっておいてもいいでしょうかな」
　高柳の目に、急に敵愾心（てきがいしん）があふれてきたようだ。大平は一人でいいと豪語したのだから、やられてもしようがないが、さてやられたとなると、どうしてもほうっておけない憎い強敵ということになってくるのだろう。
「だれがやってもかなわないのなら、ほうっておくよりしようがあるまい」
　将監が意地の悪いことをいう。
「よろしい、こんどこそ拙者が必ず息の根をとめてお目にかける」
「結構だな。勝負というものは、何度失敗しても、最後に勝って息の根をとめたほうが勝利者になる。明日の勝利者になるには、今日からその準備が必要だ。まあ、しっかりやってみなさい」
「御忠告感謝します。ごめん」
　高柳は人を食ったおじぎをして、船房を出ていった。
「倉平、船を出させなさい。下屋敷だ」
「はい」
　船はまもなくゆらりと桟橋（さんばし）を離れたようだ。
　堅田と三井がほとんど一足違いに浪宅へ帰ってきたのは、もうすっかり日が暮れてからであった。
　三井のほうが一足先へもどって、
「浪人組が菩提寺（ぼだいじ）へ踏んごんだ時は、もう諏訪党が引きあげた後だった。いや、寺へ残った諏訪党が引きあげはじめたんで、びっくりして踏んごんでいったというほうが本当かな。それから浪人組は高柳というやつにひきいられて、横川筋の下屋敷へ入っていった」
　と、雪太郎に話しているところへ、堅田がもどってきたのである。
「やあ、御苦労だったな、堅田うじ」

雪太郎がそうねぎらうと、

「いや、本当の御苦労はこれからのようですな」

と、雁之助はわらって、

「あの屋根船は、秋元の下屋敷の角でとまって、高柳という男の報告をうけると、新高橋から横川筋へ入って、菊川橋のそばの桟橋へ着き、お妻姐御もいっしょにそこの下屋敷へ入りました。よっぽど屋敷の中へまぎれこんで、様子をさぐってやろうかと思ったが、一応は若だんなに報告しておいたほうがいいと思いなおして帰ってきました。まあ、あの下屋敷が曲崎の根城とみていいんじゃないかと思う」

と、三井の報告と一致している。

「ありがとう。あそこは池ノ端の下屋敷で、お浜はそこにとりこになっているらしい。曲崎はお浜はかえせないが、会いたいというなら会わせるというんで、お妻をやってみることにした」

雪太郎が改めてこっちの事情を話す。

「曲崎は姐御を無事にもどす気だろうかな、若だんな」

三井が心配する。

「いや、まずもどすまい。それに、無事にもどすといっても、お浜がいっしょでなければ、お妻が承知しないだろう」

「すると、どうしても今夜あの下屋敷へ踏んごむということになりますかな」

堅田はもうその気でいるようだ。

「堅田うじ、御好意はありがたいが、貴公には妻女がある」

「それはもういわずにおいていただこう。いまさら仲間外れにされると、わしは千代に離縁されるかもしれませんからな」

「若だんな、わしも堅田うじに賛成だ。事ここにいたって仲間外れにされるのは、されるほうがつらい。それより、たのむと一言いったほうがいい」

そばから三井が真顔ですすめる。

「そうか。では、なんにもいわん。堅田うじ、

よろしくたのむ」

「承知いたした。よろこんで仲間になります」

「よろしい、一杯だけ祝杯をあげよう」

三井はさっそく台所へ茶わん酒をとりに行く。

「ところで、若だんな、姫君のほうは御無事におもどれになったろうかなあ」

「それは大丈夫だろうと思う。わしは五ツ（八時）に新大橋でそっちの報告を聞くことになっているんだ」

「さあ、同志かための杯だ。今夜は若だんなも一つだけつきあいなさい」

三井が茶わん酒を三つ盆にのせて出てきて、雪太郎にもすすめた。

「ありがとう。今後しばらく、ぜひ両君の力ぞえをたのまなければならんのだから」

雪太郎はそういって、素直に自分の茶わん酒を取りあげる。

二人もめいめいの茶わんを取りあげて、

「しからば、誓いの杯」

三井の音頭取りで、三人いっしょにぐいと一口酒をあおる。

「うまい」

三井はついでに二口三口ごくごくのどを鳴らして、舌つづみを打つ。

「さて、若だんな、ここには生死を誓った三人だけだから遠慮なく聞くんだが、露姫というのは、若だんなの金魚姫のような気がするんだが、違ったかな」

三井がわらいながら聞く。

「いや、察しのとおりだ。実は、今日松江の口からそれとわかって、びっくりしているんだ」

「そうか。つまり、つきせぬ縁というやつだな。すると、若だんなは郡山家のためにばかりでなく、ぜひ悪人どもの手から金魚姫をまもり切らなくてはならんわけだな」

「うむ」

「大いによろしい。我々もまた金魚姫のために

忠誠を誓うことにしよう」
「しかし、三井うじ、その金魚姫とお妻姐御のほうとは、どういう関係になるんだろうな」
堅田が改めて聞く。
「なるほど――」
これはちょっと三井にも説明がつかない。
「それはねえ、堅田うじ、曲崎はどんな腹でいるかわからないが、ひょっとすると、お浜のほうを姫君の身代わりにしようとたくらんでいるんじゃないかと、わしは考えている」
「身代わりねえ」
「つまり、曲崎は露姫をとりこにしておいて身代わりに国入りをさせようという腹じゃないかと思う」
「なるほど、そんなことがあるかもしれないな。しかし、いずれにしてもそっちもほうっておくわけにはいくまい」
「それはそうだ。今夜はどうする、若だんな」
三井が残りの茶わん酒をぐいとのみほす。
「そっちはわしが新大橋からもどってからでいい。曲崎のほうでも、なにかに利用しようという腹でとりこにしたお浜とお妻だから、今夜急にどうしようともすまい。必ず大事にあつかっていると思う」
「なるほど――」
「とにかく、わしはこれから新大橋へ出向いてくるから、堅田うじは愛妻のところへもどって、わしの帰りを待っていてもらいたい」
雪太郎はそういって、もう立ち上がろうとする。
「一人で大丈夫か、若だんな」
三井は例によって心配する。
「なあに、大丈夫だ。堅田うじ、すぐ家へ帰ったほうがいいよ。今日は一日中留守にしたんだからな」
「承知いたした。では、もどります」
堅田もわらいながら、茶わん酒をのみほして立ち上がる。

「じゃ、いっしょに出かけよう」
雪太郎は玄関先まで堅田といっしょに出て、そこで別れた。
「若だんな、十分気をつけてくれたまえよ」
別れぎわに堅田はそういって、しばらくこっちを見送っていたようだった。
雪太郎が新大橋へかかるころ、ちょうど五ッ(八時)の鐘を打ち出していた。
からんと秋の月があかるく、橋をわたる人影は一人も目につかない。大川をわたってくる夜風は、もう膚に冷え冷えとしていた。
――おかしいなあ。だれもきていない。
浜町のほうへゆっくり橋をわたり切ってみたが、それらしい者は無論のこと、人っ子一人に出会わないのだ。
「すると、あれからお露さまの身になにか間違いがあったのか」
雪太郎は急に心中がおだやかでなくなってきた。
敵の様子が知りたいのは、むしろ弥一郎のほうなのだから、露姫を無事に中屋敷へ送りこめば、自分で出てこないまでも、だれか使いをよこすはずなのである。
それがだれもきていないとなると、それどころではない事件が露姫の身辺におこっていると見なければならなくなる。
――まさか、あの眠り薬が命にさわってきたというのではなかろうな。
どきりとせずにはいられない。
が、自分が別れるまでは、息づかいも正しく、安らかに眠っていたのだ。命にさわるほどの劇薬なら、もうあの時すでになにかの兆候があらわれていたはずである。
では、使いを出すのをうっかり忘れているのだろうか。
そんなことは考えられない。弥一郎は忘れることがあっても、松江はそんなうっかり者ではないはずだ。

——待てよ。
諏訪頼母からなにか指図があったのではなかろうか。
雪太郎はまだ頼母に会っていない。
頼母から見れば、比良雪太郎は氏素姓のわからぬ一介の素浪人にちがいないのだ。
切羽詰まった場合だから、一度は、松江や弥一郎のすすめるままに利用してみたものの、事件は世間へもれて、万一公儀の耳にでも入ると、郡山十万石が断絶するかもしれない大事件なのだ。これ以上素浪人を介入させるのは危険と見たかもしれぬ。
——たぶんそれだろう。一藩をあずかる老職としては、無理もない考え方なんだ。
それでも雪太郎は、念のために三ッ俣の中屋敷の裏門口まで行ってみたが、ついにだれも出てきそうもないので、むなしく浪宅へ引きあげることにした。
こっちはこれだけ誠意をつくしているのに、その誠意のみとめられないのは、やっぱり寂しい。いや、自分が寂しいだけで事がすめばそれでも結構だが、あの人たちの力だけで露姫がまもり切れるだろうか。
それを考えると、雪太郎はじっとしていられない気がしてくる。
第一、今日露姫が眠り薬をのまされるまで、手をつかねてうっかりしていたなどは、あまりにも能がなさすぎる。意地の悪いことをいえば、当主又一郎君はすでに国もとで悪人どものために落命さえしているのだ。
そういう悪人どもも憎いが、それまでぼんやりしていた老職どももふがいなさすぎはしないだろうか。
「バカッ、大バカ者」
雪太郎は新大橋をわたりながら、とうとう忿懣にたえなくなってきた。
そのころ——。
露姫は激しい頭痛に襲われながら、ふっと目

がさめた。
見ると、まくらもとに松江が座って、心配そうに顔をのぞいている。
「あ、お気づきなされましたか、お姫さま」
その松江の目がさっと輝く。
「露は頭痛がします、松江」
露姫はまゆをひそめずにはいられない。今までこんなに頭がずきずきと痛むのは初めてだった。それに、胸まで少しむかむかするようである。
「お待ちなされませ。ただいま、お薬をさしあげます」
「胸も苦しい」
「きっとお薬のせいかもしれません。これを召し上がると落ち着きます」
松江は典医から言いつけられていた急須の水薬を、いそいで姫君の口へ持っていく。
のどもかわいていたので、露姫はむさぼるようにそれをのんだ。少しほろ苦いが、すがすがしい香気のする水薬で、のんだ後味がいい。
露姫はしばらく目をつむって、頭と胸へ神経をあつめてみる。
むかついていた胸は次第におさまり、激しい頭痛も少しずつ薄らいでいくようだ。
「いかがでございます、お姫さま」
しばらくたってから松江が聞いた。
「ここはどこなのです、松江」
肉体の苦痛がうすらぐと、露姫の記憶力は急によみがえってきて、たしか自分は菩提寺の控え座敷にいたはずだと、思わずあたりを見まわす。
「ここはいつものお寝間でございます」
「もう夜のようですね」
「はい」
「露は菩提寺で、急に眠くなったような気がしますが——」
ふしぎそうなまなざしが、いつものように美しく澄んでくるのを見て、

「まあうれしい。――すっかり正気におかえりあそばしたようでございますこと」
　と、松江は涙がこぼれそうになってきた。
「正気といいますと、露はあれからずっと眠っていたのですか」
「はい、あのお茶の中に眠り薬が入っていたとみえまして」
「だれがそのようなものを入れたのでしょう」
「はい」
　これはまだ松江もうっかり答えられない。
「松江、起きてみたい。起こしてください」
「あの、頭痛はもうよろしいのでございますか」
「もういいようです。きっと眠り薬のせいだったのですね」
「そうだと存じます。起きてごらんなさいますか」
「ええ」
　松江は露姫の項に手をかけて、そっと起こしてやる。露姫は昼間の衣装のまま、帯だけ解いて寝かされていたのだ。
「もう目まいなどもいたしませんか」
　姉のように顔をのぞきこむ松江である。
「大丈夫です。なんともありません」
　露姫はなんとなく自分の白い手をながめながら、じっと考えている風である。
「松江、露はどうしてお寺から無事にここへもどれたのです。本当のことを話してください」
　露姫はふっと松江の顔を見ながら、おだやかに聞く。
「あの、お船におのせ申して、おもどりになりました」
「だれが、どうして船へのせたのです」
「はい」
「池ノ端さまは露をさらうつもりで眠り薬をのませたのでしょう。その難をどうしてのがれることができたのです」
「はい」
「露は醜い争いは好みませぬが、お家のために

間もなく国入りをしなくてはなりません。ですから、本当のことを聞いておきたいのです。露をだまして、お人形あつかいにするようなら、露にも考えがあります」
「いいえ、姫君さまをおだましするなどと――」
　松江はあっと露姫の顔を見ずにはいられなかった。
　松江はつい最近国もとから出てきて、露姫づきになったばかりだが、おっとりとしたやさしい姫君で、こんな強いことを口にするとは、今まで思いもかけなかったのだ。
「松江は本当に露をだましてはいませんか」
「はい」
「頼母になにか口どめされているでしょう」
「まあ」
　では、又一郎君がすでに世にないことまで、この姫君は知っているのだろうかと、松江は冷や汗を感じてくる。
「それはそれでいいのです。露は決して松江を責めているのではありません。松江は露のことを本当に心配していてくれますから、うれしいと思っています。ただ、本当のことを聞いておかないと、露はまたこんどの時、眠り薬から身がまもれなくなりはしないかと、それが心配なのです」
「恐れ入りました。今日のようなことになりましたのは、みんなおそばにおつきしている松江の不注意、申し訳ございません」
「いいえ、それはもういいのです。ただ、露が本当のことを知っていたら、松江といっしょにどんな敵でもきっとふせげるような気がします。ですから、これからのためにも、本当のことが聞いておきたいのです」
「よくわかりましてございます」
　これは聰明すぎるほど聰明な姫君だったのだと、松江はまったく胸をうたれてしまった。そして、こういう姫君になまじ隠し立てはよくないと気がついたので、箱根で比良雪太郎という

浪人者といっしょになったことから、今日はその雪太郎のとっさの策で無事に船へのがれられたことまで、すっかり説明した。

「すると、露は今日、その比良雪太郎という浪人者に助けられたのですね」

「はい」

「一度その雪太郎に会って礼がいいたい。今夜にも屋敷へ呼んでください」

「それが、松江の一存では――」

「頼母がいけないと申すのですか」

「はい」

「では、約束の新大橋へは、今夜だれも人はやらなかったのですね」

露姫の目にはっきりと怒りの色がうかんできたので、松江はまたしても露姫の顔が直視できなくなる。

「あの、御家老さまが申しますには、このようなお家の争いはなるべく外へ知らせてはならぬ。他人の力を借りることは禁物だ。比良さまのほうへは必ず御家老さまからよくごあいさつをしておくから、今後は絶対にたよりにせぬようにと申しつけられたのでございます」

松江はありのままを言ってしまうほかはなかった。

「わかりました。頼母がそう申すのでしたらいたし方ありません」

露姫はふきげんそうな顔をかくし切れない。

「松江、そなたもその男はお家のためにならぬ者だと思いますか」

「いいえ、松江は道中から、比良さまをよく存じております。あの方は千万人に優れた侍のお心をお持ちでございます。それゆえ、御家老さまにも、弥一郎さまにも、あたくしから御推挙申し上げたのでございますが、御家老さまにはまた御家老さまの深い御配慮がおありのことと存じますので」

「そうですね」

露姫はそれっきり黙りこんでしまった。

――きっと雪に違いない。

松江の話を聞いた時から、露姫にはたしかにそうだという気持ちがあった。

しかし、今日菩提寺で久々に対面した兄君が、帰りがけにあの付近で雪を見かけたと言っているのである。

比良雪太郎とは浪人してからの世をしのぶ名で、本当は平井雪之助――そして、雪は眠っている露を抱いて自分の船へ移し、しばらく一人でまもっていてくれたという。

――露は眠っていたのが悔しい。

せっかく会えたのにと思うと、露姫は胸が切なくなってくるほど雪太郎が恋しくなってくる。

雪ならきっと姫を命がけでまもってくれるのに、頼母は決してたよってはならぬと禁じてしまったという。

雪は怒っているに違いない。切羽詰まった時だけ利用しておいて、無事に急場を切りぬけると、せっかく力になってやろうというものをあっさり断ってしまう。そんな法ってあるだろうか。

いや、ことによると、雪は姫の心まで疑い出しているのではないだろうか。郡山家の人になって、露の心が変わった。だから、露が雪を近づけないようにと言い出したのだ、そんな風に取ってしまいはしないだろうか。

――雪、疑ってはいやです。露は一日だって雪との約束を忘れてなどいません。

露姫は切なくて切なくてたまらなくなってくる。

その夜、姫君が正気にかえられたと聞いて、弥一郎が目通りを願い出たが、露姫はまだ気分がすぐれぬからといって、会わなかった。

――だれにも会いたくない。

そして、一人で雪のことを考えていたいと思い、あんまり思いつめて眠りについたせいか、雪太郎に人形のように抱かれている夢をありあ

りと見て、目がさめてからまた余計寂しくなってしまった。

「姫君さま、お顔の色がさえませぬ」

朝になって、いつも髪をあげてくれる気に入りの腰元美代(みよ)が、鏡の中を見て心配そうにいった。

美代は露姫がこの中屋敷へ入ってからずっとかしずいている腰元である。だから、松江より気心が知れている。

家中の藩士の娘で、どっちかといえば明るい気さくな性質だから、話し相手には気晴らしになるほうだった。

「もう御気分は、すっかりよろしいのでございますか」

「気分はなおったようです」

「昨日の夕方、お眠りになったまま裏門口からおもどりあそばした時は、本当にびっくりいたしました」

「美代はなんにも知らなかったのですか」

「いいえ、御気分がお悪くなったということは、存じていましたけれど、お駕籠(かご)の中だとばかり思っていたものですから」

「露は裏門からだれにはこばれたのです」

「松江さまがお背中におぶい、御家老さまと弥一郎さまがおつきして、すぐに御寝所へお移ししたのでございます」

そうか、松江におぶわれて運ばれたのかと、露姫は鏡の中でふっとおかしくなる。

「まるで赤ん坊ですね」

「はい、お顔の色はいつもより青いようでしたけれど、本当にお美しいお寝顔でございました」

その寝顔を雪も見たに違いない。そして、きっと抱いてくれたに違いないと思うと、またしても露姫は雪太郎が恋しくてたまらなくなってくる。

「美代は比良雪太郎という者を存じていますか」

思わずそれが口に出てしまう。

「昨日姫君さまをお船で途中までお送りした方でございましょう」

「ええ」

「それなら存じております」

にっこりしてわらってみせる美代だ。

ちょうど髪があがって、松江が入ってきたので、その話はそれきりになった。

頼母がいけないととめた雪太郎の話を、松江の前でするのはなにかうしろめたい。ふだんは口の軽い美代だが、こっちの心がよくわかるとみえて、松江の前では美代も雪太郎のことは口にしなかった。

朝餉(あさげ)がすむと、弥一郎と用人牧山源左衛門がごきげんうかがいにきた。

昨日の話はもう口にするのもいやなので黙っていると、

「明日はいよいよ築地(つきじ)へおなりの日でございますな」

二人はそんなことをいって、すぐにさがっていった。

明日は築地の里方へ別れのあいさつをして行くことになっている。そして、中一日おいた翌朝は、いよいよ国もとへ立つ日なのである。

——露はだれのためにわざわざ国もとへ行かなければならないのだろう。

もう又一郎君はこの世の人でもないのにと考えると、そんな道中がうとましくさえなってくる露姫だった。

その日は明日の打ち合わせがあるとみえて、松江はよく表座敷へ呼ばれていった。

「美代、庭へまいりましょう」

露姫は二人きりで雪太郎のことが聞いてみたくなって、松江のいない折、美代をさそって庭へ出た。

露姫は泉水のほとりへ進んで、こいを見ていた。が、こいはただ目で見ているだけで、胸の中には雪太郎のおもかげしかない。

——会いたい、雪。

ほっとため息さえ出てくる。

せっかく会えるかもしれなかった雪太郎を自分からさえぎったのは、江戸家老頼母である。その頼母のためにあぶない国入りなどするのは、もういやだと思う。

もっといやなのは、池ノ端の分家大学の目である。そう何度も会っているわけではないが、いつも男の執念のこもった目でじっと自分を見すえている。

――露姫はわしのものだ。いつかはわしのものにする。

その目はそういっている目なのだ。

ことによると、その目が又一郎君の命を奪ったのかもしれない。

国家老赤柴刑部の血をひいているだけあって、強情で、腹黒くて、悪知恵にたけていて、とても恐ろしい男だと、耳に入るうわさの切れ端をあつめてみると、そうなってくる。

そして、その大学には曲崎将監というそれに輪をかけたような付け人がついている。

頼母だけでは到底お家はまもりきれそうもない。

もし頼母が負ければ、自分はきっと大学のものにされてしまう。

――露はどんなことがあっても、あの男はきらいです。

又一郎君が世を去ったのなら、もう自分は郡山家には用のない体なのだから、いっそ里方明石へ帰りたいと思う。明日築地へ行ったら、それをお方さまに相談してみようかしらと、そんなことも考えている露姫だった。

「昨日の今ごろでございましたね、お姫さま」

少しさがってひざまずいている美代が、ふっと話しかけてきた。

「昨日の今ごろ――」

「はい、お姫さまがあの方のお船へお移りになりましたのは」

「ああ、その話――」

そうだったかもしれないと露姫は思い、すると今時この体は雪に抱かれていたのだと、急に胸が熱くなってくる。

「美代、そなたはどうしてあの男を存じているのです」

「あの、申し上げてもかまいませんでございましょうか」

「かまいません。いってごらんなさい」

「御家老さまや、松江さまのお耳に入ると、美代はきっとおとがめをうけます」

「ここにはだれもいません。露だけです。露は告げ口をするようなはしたないまねはしません」

「では、申し上げますけれど――」

美代はもう一度そっとあたりを見まわしてから、

「美代はゆうべ、裏門口からそっとぬけ出して、新大橋へまいりました」

と、意外なことを言い出す。

「それは、あの、雪太郎に会いにですか」

「はい、御家老さまが弥一郎さまと松江さまに、まいってはならぬと堅くおっしゃっておもどりになった後で、あたくし、それでは比良さまにあんまり悪いと思いましたので」

美代はなにか申し訳なさそうにうなだれてしまう。

「美代はゆうべ、その比良雪太郎という者に会ったのですか」

露姫は思わず目を輝かせている。

「はい、新大橋の上でお目にかかりました」

美代は大胆にもじっと姫君の顔を見あげながらいう。

「雪太郎はなんと申していました」

「あの、こちらの事情を、御家老さまの御意見をよく申し上げて、お気を悪くなさらないようとおわびいたしますと、よくわかった、しかし、姫君さまのお国入りはあぶない、お目にかかって、一言申し上げておきたいことがあったのだ

がと、たいそうがっかりなすっていられたようでございます」
　露だって一目会いたかったのに、露姫は悲しい目を泉水のこいに落とす。
「美代は雪太郎の住まいを存じていますか」
「はい、念のためによくうかがっておきました」
「では、露がその者に一言昨日の礼がいいたいといえば、美代は裏門口からそっと雪太郎をつれてくることができますね」
「はい。でも、ここへおつれするのはあぶないと存じます。人目が多うございますから、きっとだれかに見つけられてしまいます」
　美代ははっきりという。
「では、どうすれば一番よいと思います」
「さあ、どうすればと申しましても」
　ちょっと口ごもりながら、なにか思案を持っているらしい美代の目つきである。
「教えてください。露はどうしても雪太郎に会って、一言昨日の礼がいいたいのです」
「でも、そのようなことを美代がおすすめして、もし御家老さまのお耳にでも入りますと、それこそ手討ちにされるかもしれません」
「いいえ、美代の体はきっと露がまもってあげます」
　美代はわらっていて答えない。
「露がうそをいうと美代は思うのですか」
「いいえ、美代は自分の身を恐れているのではございません。ただ、姫君さまに、後で御家老さまにしかられてもいいというお覚悟があるかどうか、それが心配なのでございます」
「そう、わかれば頼母はきっと露をしかりますね。いいえ、かまいませぬ。頼母がしかったら、露はそなたをつれて、築地へもどります。それならいいでしょう、美代」
　露姫は頼母にむらむらっと反感さえ感じてきて、ついそう言い切ってしまった。
「そのお覚悟でございましたら申し上げます。ここからそっと裏門口を出ますと、桟橋に屋敷

の屋根船がつないであります。美代がお供してそれに乗り、比良さまの浪宅のそばの桟橋へ船をつけて、美代はすぐに比良さまを船へ呼んでまいります。お船でお会いになりますのが、一番安全でございます」
　事もなげに言ってのける美代だった。
「もどりはどうします」
「もとのとおり、裏門口からお入りになればなんでもありません。そして、松江さまがおしかりになりましたら、築地へおもどりになるからと、はっきりおっしゃれば、きっと大丈夫でございます」
　そうだ、雪にあいさえすれば、そういうことは雪がきっと取り計らってくれると、露姫は急に勇気が出てきた。
　明日露姫が築地の御生母に国入りのあいさつをしに行く行列は、駕籠にするか船にするか、昨日の例もあるので、弥一郎、老用人牧山源左衛門、松江の三人が表の間で額をあつめて、慎重な協議が行われた。
　そして、行きは駕籠、もどりは船ときまり、松江がやっと奥へもどってきたのは、もう八ツ(二時)をだいぶすぎてからであった。
　露姫の居間には花世と小枝がいて、姫君の姿が見えない。
「お姫さまはどうあそばしたのです」
「さきほど美代どのがお供をして、泉水のこいをごらんになっていられました」
　その泉水は廊下から一目で見える。いまここへくる時、姫君がそこにいれば目についたはずだ。
「あたくしがここへくる時には、お姿が見えませんでした」
「まあ」
「なぜ、あなた方もお供をなさらなかったのです」
「姫君さまが美代どのだけでよいとおおせられ

ますので――」
「そう仰せられても、お座敷に待っているということはございません。かげ供をなさるなり、遠くからおじゃまにならないようにお供するなり、――いつもの時とは違うのですから、気をつけていただかなくては困ります」
「はい」
「それに、もう風が冷たくなる時刻です。大切なお旅立ちをひかえているのですから、すぐにお迎えしなくてはいけません」
松江はきびしい顔になっていた。
「申し訳ございません」
小枝と花世ははっとしたようにいそいで座を立っていく。
年からいえば、二人ともおない年なのに、どうしてもっとしっかりしてくれないのだろうと、松江ははがゆかった。
――姫君さまには御不満がおありになる。
松江はそれをちゃんと知っていた。第一に頼母が比良雪太郎をことわったこと、第二にはいまだに又一郎君のことをかくしていることだ。
頼母が比良を敬遠策に出たことは、松江も決していい気持ちではなかった。
――いつまでもこいを見ているなどと、子供ではあるまいし。
美代は身分の軽い者の娘で、どっちかといえば口が軽く、よくおもしろいことをいう。胸に不満のある姫君は、美代と二人きりで勝手なおしゃべりに気をまぎらせたかったに違いない。
――明日はお里方へ行って、ごゆっくりなされるのだから。
もどられたら、なるべくその話をしておなぐさめしようと、松江は考えていた。そこへ、
「お中老さま、姫君さまはどこにもお見えにならないのでございますけれど」
と、青くなって走ってきた小枝が、縁先から告げた。
「どこにもお見えにならぬ。美代もですか」

「はい、いま花世どのが念のために裏門のほうまでまいっています」
まさかとは思うが、もし屋敷の外へ出かけたとすると、ただごとではない。さすがの松江も顔色をかえずにはいられなかった。
露姫と美代の行方は、表からも家来たちが駆けつけて、屋敷うちをくまなくさがしてみたが、どこにも見当たらず、裏門口の門番は絶対にそんなはずはございませんと言い切るのだが、やっぱりそこから外へぬけ出されたのではないかということになった。
「では、一体、どこへ行かれたのだろう」
昨日の今日だから、弥一郎の顔もすっかり青ざめていた。
「姫君さまが御自分から屋敷をおぬけになったとすれば、築地のお里方へお帰りあそばしたか、ひょっとすると、大工町へまいられたかもしれません」
松江は考え考えいう。
「大工町とは比良の浪宅か」
「はい」
「そんなバカなことはあるまい。姫君は昨日眠っていて、比良雪太郎を知らぬはずだし、美代も大工町の浪宅は知るまい」
「それはそうでございますけれど、雪太郎と申す者に一言礼を申さなくては悪いとゆうべおっしゃって、ごきげんがよくございませんでした」
「礼は姫君が御自分で仰せられずとも、上屋敷からもう使者が出ているはずだ」
松江はそれがいけないのだと思った。上屋敷は上屋敷として、昨夜こっちからも礼の使者を出して、かように取り計ってございますからと、だれにも感謝の心はあるのだと、はっきりさせておけば、まだいくぶん納得してくれたろうにと考えはしたが、さすがに口には出せなかった。
「築地へおもどりになるとは、どういうところから出るのだな」

老用人が不思議そうに聞く。
「姫君さまはだれから耳にされましたか、国もとの儀をもう存じておられます。御聡明なお方でございますから、だまされて国入りをするのはいやだとお考えになっているかもしれません」
「なるほど――」
「しかし、それもこれもお家のためではないか。そうはお考えになれんのかなあ」
弥一郎はいかにも不満そうである。
「それは弥一郎さま、あたくしどもには父祖代代の郡山家でございますけれど、露姫さまは明石からまいられて、まだ一年ともたってはおりませんのですから」
「女とはそういうものなのかなあ。嫁して夫にしたがうなどということは、もう昔のことか」
「いいえ、その夫が亡くなられたことさえ、姫君さまは知らされていないのでございます」
松江はとうとうがまんしきれなくなってきた。
「すると、あんたは父頼母のすることが不満だというのか」
弥一郎もさっと顔色をかえる。
「まあお待ちなされ。ここでお二人で争っていてもいたし方ありません。重大なのは姫君のお行方です。ことによると、池ノ端の手が、この中屋敷まで伸びてきているとは考えられませんかな」
源左衛門のこの発言には、思わず感情に走りかけた若い二人も、あっと顔を合わせずにはいられなかった。
「すると、美代が怪しいというのか」
弥一郎の声が高くなる。
「美代が裏切ったのだとしますと、姫君さまはお船に違いありません」
松江も絶望せずにはいられなかった。これが姫君のただ気まぐれの外出なら、ひょっとしてこうしている間にも帰ってくるかもしれないと

いう希望が持てるが、敵の手に落ちてしまったのでは、もうどうすることもできない。
そして、昨日すでに敵は眠り薬という思い切った手さえ打ってきているのだから、その手がこの中屋敷へのびていないとは、絶対に言いきれないのだ。
「船で、敵はどこへ姫君を運ぶつもりなんだ。池ノ端の屋敷へか」
弥一郎はくってかかるようにいう。
「池ノ端へは船ではまいれません。敵のかくれ屋敷は、ゆうべ比良さまがさぐってきてくれたはずでございます」
それを頼母がこっちから敬遠してしまったのだから、今さら後悔しても追いつかない。
「とにかく、上屋敷へ急使を立てましょう。こっちだけでなんとかなる問題ではないようでございますからな」
落ち度は落ち度として責任を取る覚悟が老源左衛門にはできたようである。
「急使は急使として、その間手をつかねているというわけにはいかんではないか。しようがない、松江、大工町へ行ってみてくれ」
「かくれ屋敷を聞きにでございますか」
「うむ。今さらどの面をさげてということになるが、それをいっている場合ではない。姫君さえ取りもどせれば、弥一郎は腹を切って不覚をわびる」
弥一郎も決心がついたようだ。
「弥一郎さまがそのお覚悟なら、松江はすぐ大工町へまいってみますが、恥をしのんで比良さまにもう一度力を借りますからには、こちらも比良さまの指図をきかなければならなくなります。それでもよろしゅうございますか」
都合のいい時だけ働かせて、都合が悪くなればまた敬遠するのであるというのでは、松江は立ちかねる。
「無論、一切のことはわしが責任をもって、必ず比良に頭をさげる。手ぶらで行きにくければ

ば、誓紙を書いてもいい」
「いいえ、それまでには及びませぬ。比良さまをもう一度動かすことができなければ、松江も生きては帰らぬつもりでまいるのでございますから」
きっぱりと言い切る松江だ。
「ありがとう。その気で行ってきてくれ。駕籠（かご）で行くか」
「いいえ、光吉だけをつれて、やっぱり裏門からだれにも知れないようにまいりましょう」
「そうだな。裏切り者がまだほかにもいると見なければならん。かげ供はいらないかね」
「はい、大丈夫でございます」
「ゆうべわしにこれだけの覚悟があったら、こんなことにならずにすんだかもしれぬ。わしは完全に松江に負けた。あやまる」
弥一郎は素直に頭をさげるのだった。
「そうおっしゃっていただくと、松江も死にがいがございます。では、すぐに行ってまいりますから、光吉を裏門口へまわしておいてくださいませ」
松江はそう言いおいて、しゃっきりと立ち上がった。

秘策

暮れやすい秋の日は、もうたそがれかけていた。
その日、雪太郎は一日中大工町の浪宅へ引きこもって、夜になるのを待っていた。
郡山家のほうは昨夜敬遠されてしまったので、もうこっちからどうしてやりようもない。しかし、菊川橋の下屋敷へつれていかれているお妻とお浜は、なんとかして自分の手で助け出してやらなければならない責任がある。今日は朝のうち隣の堅田雁之助が下屋敷の見張りに立って、人の出入りを見ていてくれた。
昼からは三井がかわって見張りに行っている。

そして、日が暮れたら三人でそこへ落ち合い、なんとか屋敷うちへ忍びこんでみようという約束になっていた。
昼から帰ってきた堅田の話では、朝のうちはあまり激しい人の出入りはなく、裏門口から浪人組が出たり入ったりしたぐらいのものだという。
「とにかく、浪人者は玄蕃ぎつねが肝いりで相当集めているようだから、今夜の忍びこみはちょいと骨が折れますぞ」
「ありがとう、御苦労だった。日が暮れるまでに、なんとか一工夫考えてみよう」
その日暮れがもう近づいているのである。堅田には一工夫するといっておいたものの、別にこれという策もいまだに思いつかない。
――まあいい。なんとかなるだろう。
今日はなんとなくげに、いつもの張りがない雪太郎なのだ。正直にいえば、昨夜の頼母側の不信の行為が、すっかり雪太郎の気持ちをくさらせているのだ。
「たのうむ。――ごめん」
格子をあけて、だれか野太い声がした。
「どなたかな」
雪太郎が立っていってみると、浪人らしい若い男だ。
「御当家は比良うじの浪宅でござろうな」
「さよう、拙者が比良雪太郎だが」
「ああ、貴公ですか、わしは名乗るほどの者ではないから、名乗りませんが、この手紙をあずかってきました。ただおわたしすればいいんで、返事はいらんそうです」
若い男はふところから一通の封書を出して、手わたしする。
上書きはたしかに比良雪太郎殿となっており、裏をかえしてみると、高柳峰十郎となっている。
「たしかに受け取りました」
「では、失礼いたす」

「ちょっとお待ちなさい。どこかで一度お目にかかったような気がするんだが、貴公はたしか大俵先生とこの間川崎の宿にいた方のようだなあ」
　あの時玄蕃ぎつねは、この男と、もう一人旅の若い浪人者をかもにしていたはずである。
「わしもどこかで見た顔だと思っていたんだが、貴公はあの時三井とかいう仁といっしょにいた方でしたな」
「そうです。貴公はあれからずっと中坂下の道場においでかな」
「はあ」
「どこか御仕官の口はありそうですか」
　雪太郎はつい同情するような口ぶりになっている。
「おかげで、仕官の口のほうは、もうほとんどきまりかけているようなものです」
　使いの男は明るい微笑を見せて答える。
「それはうらやましい」
　気の毒に、なにかだまされているんだなと雪太郎は思いながら、それとなく微笑をかえす。
「これは余計なお節介かもしれんが、貴公もどうせ身を寄せるんなら、正しいほうへ味方をする、それが出世の近道ですぞ」
「ありがとう」
「貴公がその気になれば、いつでもわしから大俵先生に話してあげてもよい。わしは秋山信助という者です。その気になったらたずねてきたまえ」
　つまり、この男は大俵玄蕃から、池ノ端党のほうが正しくて、諏訪党は悪人だと吹きこまれているのだろう。
「貴公の御好意は感謝する。しかし、世の中というものは決してそう単純なものではないと思う。貴公もまた常に冷静な目で事の真相を見きわめるように、この上とも心がくべきだと思う。お使者御苦労でした」
　雪太郎がさとすようにいってやると、

「なるほど、常に冷静な目で真相を判断する、これは必要なことですな。いいことをうかがった。では、これにて失礼」
　秋山は一礼して帰っていった。
　――憎めない男だなあ。
　まさか悪人の一味から意見をされようとは思いもかけなかったので、雪太郎は苦笑しながら座にかえり、高柳からの書状の封を切ってみた。
「前略、突然ながら鈴ガ森以来の貴下との勝負、今夜こそ相決すべく、六ツ半（七時）までに横川筋菊川橋の下屋敷裏門口まで御出張相成りたく、お待ち申し上げ候」
　文面はただそれだけで、要するに呼び出し状なのである。
　――味なことをやる。
　と、雪太郎は思った。無論、高柳は今夜こそ自分を呼び出して切る気でこの書状をつけたのだろうが、指定の場所菊川橋の下屋敷は、ただそう書いただけではこっちにはわからないはずである。
　それがこう書いただけで通じるとすれば、雪太郎はすでに諏訪党についてなにか策動しているか、それが単にお妻、お浜の救い出しが目的だとしても、こっちの策動がどの程度のものか、それを試す目安にはなる。
　そんな小細工がこの手紙にはふくまれているのだ。
「若だんな、いまだれかまいったようですな」
　堅田がそう声をかけながら、玄関から入ってきた。
「堅田うじ、今夜菊川橋の下屋敷へ入る手づるができた。これを見てくれ」
　雪太郎は高柳からの書状を堅田に見せる。
「ほう、これは果たし状のようなものですな」
「さよう。敵からこんなものをくれたのはありがたい。裏門口を自分のほうから開いてくれるようなもんだからね」

「そういえばそういうことにもなるが、なにか秘策でもござるかな」
　ただ乗りこんでいったのでは、裏門口はひらけても、敵の剣陣の中へ自分から飛びこんでいくようなものである。
「若だんな、使いにきたのは知っている男らしかったな」
「うむ、知っているというほどじゃないが、江戸へ出てくる時、三井が川崎の宿で昨日の大平おおかみとけんかになった。あの時玄蕃ぎつねに仕官の口でつられたらしい若い浪人が二人ついていたが、そのうちの一人で、秋山信助とか名乗っていた」
「ふうむ。じゃ、気の毒に、やっぱりいくらかたくわえを取られたほうなんだな」
「しかし、当人は仕官の口がきまりそうだとよろこんでいるんだ。例の曲崎のほうの口なんだろうが、そっちのほうが正しくて、こっちは悪人のように吹きこまれているらしい。その気になったらいつでも玄蕃ぎつねにたのんでやるからくるがいいと、親切ですすめてくれた。ああいう純情な男をだまして世渡りにしているのかと思うと、大俵というやつはますます憎くなってくるな」
「本当だ。救えるんなら今のうちに救ってやりたいが、だますほうはなかなかうまいからねえ、自分で気がつくまでは、こっちの忠告など耳には入らない。秋山信助というんだな」
「うむ」
「名前だけはおぼえておいてやろう。じゃ、若だんな、わしはこれから三井うじとかわります」
　堅田はそういって座を立とうとする。
「いや、堅田うじ、もうそれには及ばん。こんどはわしの番なんだから」
　なるべく堅田にはあぶない橋はわたらせたくない雪太郎なのだ。
「若だんな、いまさら仲間外れはいかん。それに、後からのことを聞いておいたほうが、おな

じなぐりこみをかけるにしても、なにかの足しになるだろう。とにかく、わしが行って、三井をかえしてよこすから、若だんなの出陣はそれからにしてくれ」
　堅田はもうさっさと玄関へ出ていく。
「すまんなあ、堅田うじ」
「なあに、気の毒な女たち二人を助けてやるのは、男のつとめだ」
　堅田はそういって、家へも寄らずに路地から表通りへ出ていったようだ。女房に未練がある風など、絶対に見せてはならないと、深くおのれをいましめ、妻女にも言いきかせてあるのだろう。
　――ありがとう、堅田うじ。
　雪太郎はなんとなく目頭が熱くなってくる。
　もうあたりはすっかりたそがれていた。行灯に灯を入れながら、あまり食欲もないが、飯にしようかなと思っていると、
「ごめんくださいまし」
と、静かに格子をあける音がする。
「どなたかな」
　出ていってみると、昨日の若党光吉が小腰をかがめている。
「なんだ、光吉うじじゃないか」
「はい、お中老さまのおしのびのお供をしてまいりました」
「ふうむ、松江どのがきたのか」
　またなにかあったなと、雪太郎は直感して、ゆうべのことは腹が立つが、なにかあったとすればお露さまのことなのだから、やっぱりどきりとせずにはいられない。
「比良さま、あたくしでございます」
　つと物かげから、お高祖頭巾をかぶった腰元姿の松江が、遠慮そうに出てきた。
「松江さんか――。まあおあがり」
　雪太郎はさりげなくむかえる。
「あの、おじゃまさせていただきます」
　松江は手早くかぶり物をとりながら、

「光吉、路地口をたのみます」
と、若党に言いつける。
「はい」
光吉は格子をしめて、そっちへ見張りに行ったようである。
「比良さま、今夜はあたくし死ぬ覚悟でおうかがいいたしました」
茶の間の行灯のほかげの中で向かいあった松江の顔は、本当にそう思いつめているように蒼白だった。
「おうかがいいたそう。姫君の身になにかまた間違いがあったようですな」
「はい、申し訳ございません。姫君さまのお姿が、夕方近く急に屋敷から見えなくなりまして――」
「なにッ」
「美代と申す腰元一人をおつれあそばし、家出をされたのではないかと存じます。ことによりますと、美代が池ノ端組に寝がえりを打って、姫君さまをおだましして屋敷の外へおさそいしたかとも思われます」
松江はその前後の模様をくわしく説明するのであった。
「姫君さまは御家老のゆうべの不信に対して、御不満の様子があったと申されるのですな」
じっと耳をすまして聞いていた雪太郎が、改めて念をおす。
「はい。みんなあたくしどもの不行き届きでございます。いまさら比良さまにおあわせする顔はないのでございますが、弥一郎さまも至らなかったと後悔され、必ず切腹しておわびをするから、もう一度比良さまのお力におすがりしてくれと申しますので、あたくしも死ぬ気でおうかがいしたのでございます」
松江は必死なまなざしをする。
「わかった、松江さん。そのことについては、もうなにもいうまい。こうなったら、おたがいに力をあわせて事にあたるほかはないんだ」

雪太郎は冷静にいって、余計な雑念は禁物だぞと、おのれにも言いきかせる。
そして、ひそかに思いあたることは、お露さまは昨日の松江の話から、比良雪太郎が平井雪之助だということに気がついているのではないかということである。
それでなければ、たとえ美代という腰元がどうだましてもたった二人きりで屋敷をぬけ出す気にはなれまい。
また、美代の立場から考えれば、たとえ姫君が二人きりで屋敷を出ようとさそっても、なにか当てがなければ、そんな無謀なさそいにはのらぬはずだ。美代の当てとは、外に悪人どもが待っているということだ。
「船だな、松江さん」
「あたくしもそう思います」
「姫君は船へ乗せられたのだ。運ばれた先は、無論、池ノ端組のかくれ家だ」
「そのかくれ家がおわかりでございましょうか」
「心当たりはあります」
「ああ、よかった」
ほっとしたように松江の目に涙さえあふれてくる。
「しかし、えらいことになったなあ、松江さん」
雪太郎は、暗然とせずにはいられない。
大切な人質が敵の手に落ちてしまっては、頼母党はもう池ノ端党に頭があがらない。といって、その人質を正面から取りかえすことは、理を説いても力ずくでもおそらく不可能といっていい。どうしても敵の不意を突いて、裏から取りもどすよりほかに手はないのだ。
「あの、敵のかくれ家はどこなのでございましょう」
「菊川橋の下屋敷です。曲崎は昨日菩提寺を急襲して、眠っている姫君を手に入れたら、船でそこへ運ぶ用意をしていた。今日もたぶんそこへ運んだんじゃないかと思う」

「姫君さまを無事に取りかえすには、どうすればよろしいでしょうか」
　かくれ家がわかっただけで安心するのはまだ早かったというように、松江の顔にもふたたび苦悩の色が濃くなってくる。
「どうするといって、敵はこっちの意表を突くような手を打って、たくみに姫君をつれ去っているんだ。こっちもまた敵の意表を突いて取りかえすよりしようがないんだが、わしには一つ心配がある」
「どんなことでございましょう」
「御家老はどうしても姫君を取りもどせぬとなった場合、どんな手を打つか、それだ」
「――」
「姫君は腰元一人をつれて、自分から屋敷をぬけ出されている。これに不義の汚名をきせて、郡山家から離縁するという手を打てば、一応人質はなんの役にも立たないことになる。その点どうなんだろうなあ」
あくまでも家名というものに重点をおいて、という人の幸不幸はある程度まで犠牲にしようという人柄なら、雪太郎はそういう頼母に協力はできない。こんどの失敗も、姫君をあまりにも人形あつかいにしているところに遠因があるのだ。
「さあ、そこまでは、あたくしの身分として、どう御返事申し上げてよろしいか」
「そうか――。松江さんを責めても無理だったな。では、念のためにわしの考えを耳に入れておこう。頼母どのが万一姫君に不義の汚名をきせる手段に出ると、敵もまた姫君を擁して諏訪党に不義不忠の汚名をきせてくる。結果はどろ試合になって、天下に恥をさらけだすだけだ。身をもって姫君を取りもどす、その取りもどすことに家名も勝敗もかかっているんだという覚悟でないと、悪人とは闘いきれない。その心ぐみで、松江さん、屋敷へ帰って、よく御家老と話しあってみてくれ。そして、今夜の四ツ（十時）、その返事をもって、もう一度新大橋へ出て

きてもらいたい」
　雪太郎はきっぱりと言い切る。
「よくわかりました。あたくしお言葉にしたがいます。ただ一つだけうかがわせてくださいませ」
「なんです」
「もし、あたくしが家老頼母のたのむという返事を新大橋へ持ってまいりましたら、比良さまはきっと姫君さまを敵の手から取りもどしてくださいますか」
「相かわらずずるいなあ、松江さんは」
「比良雪太郎必ず命をかけます。これではいけないかね」
　と、誓言するようにいう。
　松江をかえした雪太郎の腹は、もうちゃんときまっていた。
　高柳から果たし状がきているのを幸い、今夜菊川橋の下屋敷へ入ったら、不意を突いてあくまでも奥へ切りこむ。まさか、自分がお露さまに引っかかりのある人間とは知るまいから、そこに臨機の手段が生じてくるのではないか、たのむのはそれだった。
　つまり、四ツまでに新大橋へ自分で出向けるようなら、その時はもうお露さまを助け出しているし、不幸にして失敗すれば、すでに切り死にしているだろう。
　――だが、滅多には死なんぞ。
　自分が死んでしまっては、おそらく敵の手からお露さまを救い出せる者はだれもいないのだ。どんなことがあっても死んではならぬと、雪太郎は心に誓うのである。
　そして、腹ごしらえをしているところへ、三井がもどってきた。
「若だんな、ただいま――」
「やあ、御苦労だったな、三井」
「いまそこで、箱根のお嫁に会ってきた。――ちょっと失礼」

三井は台所へ行って、茶わん酒を一杯持ってくる。
「そうか、松江さんに会ったか」
「うむ。どうやら金魚をさらわれてしまったらしいな」
「うむ」
「わしはさっき、たしかに金魚姫とおぼしき麗人が、船からあがって、菊川橋の下屋敷へ入っていくのを見とどけているんだ」
「ふうむ。たぶんそうだろうとは考えていたが、金魚はだまされたことを、もう知っていたようかね」
「桟橋まで曲崎が出迎えに出ていたんだから、知るも知らぬもないさ。しかし、ああなるとさすがに育ちだねえ。腰元のほうは真っ青になって、ぶるぶるふるえていたが、姫君は鷹揚なものだ。一言二言曲崎をしかっているような様子だったが、少しも悪びれた風はなく、くじゃくのように門内へ入っていった」
「なるほど――」
自害の覚悟ができているなと、雪太郎にはすぐ読める。強情なことにかけては無類な姫君だし、むしろ来世を信じているはずだから、決して見苦しいまねはしないだろうと、その点は安心していられる雪太郎なのだ。
「だから、わしは箱根のお嫁の顔を見るなりしかってやったんだ。自分たちの手で姫君がまもり切れるという自信がおありなら、なんでかような手ぬかりをされたのか。あなた方は若だんなを少し軽く見すぎる。いや、人を見る目がなさすぎるとな」
三井はぐいと一口茶わん酒をあおって、
「さすがに、申し訳ございませんと、今夜はお嫁さんはなはだ神妙だった。しかし、若だんな、あのお嫁も今夜は死ぬ気でここへきたことだけはたしからしいな」
と、同情は惜しまない口ぶりである。
「あの娘は、女には惜しい侍心がある。立派な

ものだ」
雪太郎はわらいながら食事を終わる。
「ところで、堅田うじから聞いたが、高柳から果たし状がきたそうだな、若だんな」
三井も茶わん酒をのみほして、湯飲みを盆に伏せた。
「高柳はおそらく姫君誘拐の計画とは別に、ともかくもじゃま者は片づけておけという独断で、この果たし状をつけてきたんだと思う。時刻は六ツ半とあるから、今から出かければちょうどいい」
雪太郎はいまにも立ちあがりそうにする。
「わしもいっしょに行こう、若だんな」
「そうか、行ってくれるか」
「せっかく向こうから裏門をあけてくれるんだ。後へひくという手はない」
「実は、わしもそのつもりなんだ。わしはなんとかして乱戦に持ちこんで、奥へまぎれこむ。できれば、女たちを助け出したいつもりだ」
「よかろう。若だんなは金魚姫をさがしたまえ、わしは姐御のほうを引きうける」
「そうしてくれるとありがたいな。ただな、三井、堅田うじは船を用意して、外で待っていてもらいたいんだ。みんないっしょに討ち死にすることはないと思う」
雪太郎は隣をはばかるように、声をひそめていう。
「そりゃ若だんな、かえって罪じゃないかと思う。仲間外れはいかん」
きっぱりと言い切る三井だ。
「やっぱり、いかんか」
「うむ、いかん。三人いっしょのほうがいい。それと、事ならずんば死すともかえらずは、どうかと思うな。今夜は無理だとわかったら、一応引きあげる。その判断はめいめい自分でして、他人の心配はしないこと。つまり、入る時は三人いっしょだが、出る時は別々ということにしておこう」

「各人の良識と判断にまかせるわけだな」
「うむ、そのほうが働きいいし、目的にも近づきやすいんじゃないかと思う。無論、目的を達した者は、遠慮なく勝手に引きあげるんだ」
「よし、三井の意見にしたがうことにする」
雪太郎はにっこりしながら、ふところから重い袱紗(ふくさ)づつみを取り出して、
「この金をなあ、三井、隣の奥方にあずけておいてくれ。万一の場合、敵にやってしまうにもおよばんからな」
と、三井にわたした。
「うむ、それはいい考えだ。そうしよう。じゃ、若だんな、一足先へ出て路地口で待っていてくれ」
「心得た」
雪太郎が玄関口を出ると、三井は行灯(あんどん)を吹き消した。
――お露さま、わしはいい友達を持ってしあわせです。
雪太郎はそっと路地をぬけて、横町へ出た。今夜も秋の月が氷のようにあかるい。
この月を果たしてお露さまといっしょに見ることができるか、それとも一人でながめて死んでいくか、神のみぞ知ると思いながら、空を仰いでいると、
「わたしてきたぞ、若だんな」
と、三井が路地口から出てきた。
「ありがとう。――どうだった、奥方は」
「立派なものさ。たしかにおあずかりいたします。どうぞお見事にあそばしますようにと、あべこべに激励されてきた」
「そうか――」
「あれじゃ仲間外れにすると、堅田うじは家へ帰れない」
三井はわらいながら、ゆうゆうと歩き出す。
そのころ――。
露姫を奥座敷へ案内した曲崎将監は、わが事なれりと、内心有頂天にならずにはいられなかった。
昨日はあれだけの手を打って、ついに失敗に終わったのが、今日は美代の働き一つで、さほどの労もなく、すらすらと十万石のかもが自分から網にかかってきたのである。
それでいやでも家督は池ノ端へまわってくることになるだろうし、そうなれば将監は江戸筆頭家老に出世して、郡山家十万石の藩政はほとんど一手に握ることができるのだ。
――とにかく、大切なかもなのだから、十分きげんを取って、なによりもまず安心させておくことだ。
世なれている将監は、その点如才がなかった。
「姫君さまにはようこそお越しくださいまして、将監この上のよろこびはございません。感泣いたしております」
まことしやかに慎んで両手を仕える。
「将監、美代はどうしました」
玄関までいっしょだった美代が、ここへ姿を見せない。露姫はおだやかに聞いた。
「はい、ただいままいりますでございましょう。美代儀は、決して悪意がありましてかように計らったのではなく、これには将監に少しく存じよりのございますこと、お許し願わしゅう存じます」
「露はいまさら美代をとがめようとは思いませぬ。計られた露が軽はずみだったのです」
露姫は毅然(きぜん)として言い切る。少しも狼狽(ろうばい)の色を見せていないのが、将監にはちょっと意外である。
「さように仰せられましては、将監いささか赤面いたしますが、手前が今日姫君さまをこちらへお招きいたしましたのは、姫君さまにあしかれと思う心からではなく、手前はこの度の姫君さまのお国入りに同意いたしかねるからでございます」
「それは、将監、なぜです」
「上屋敷の頼母は、姫君にどう申しているか存

じませんが、又一郎君は国もとにおいて、すでに御死去あそばされております」
　きっぱりといって、将監は露姫の顔色を見る。
　別におどろきの色の見えないのは、それを知っているとみていい。
「すでに御死去あそばされているものを、いまさらなんのお見舞い、御看病でございましょう。いたずらに姫君に御苦労を願うだけの話です」
「露のこの度の帰国は、公儀の前を取りつくろうためと聞いておりますが」
「御賢察のほど恐れ入りますが、その儀なれば御名代、いや、お身がわりにて事がすみます。頼母があえて姫君にお国入りを願うについては、なにか頼母におもわくがある、たくらみがあるものと、手前は見ております」
　将監は正面を切って、そんなことをいい出す。
「頼母のおもわくとは、どんなおもわくなのです」
　露姫の声音はあくまでも落ち着いている。
　これは大した姫君だと、将監は内心小首をかしげずにはいられない。
「おそらく、頼母のおもわくと申しますのは、この度も又一郎君のお跡目にはやはり御年少の順之助君を擁立して、郡山家十万石の藩政を一手に握り、おのれの権勢を張りたいことでございましょう。それには一藩の信望厚い国もとの老職赤柴刑部どのが、なんとしても目の上のこぶになります。そこで、ぜひ姫君にお国入りを願い、又一郎君を御病死させた責任を刑部どのに押しつけ、詰め腹を切らせるか、隠居させるか、いずれにせよ失脚させようという腹に違いないのでございます」
　将監はあくまでも頼母を悪人にしようとする。
「それで、将監は露をここへつれてきて、露にどうせよというのです」
「手前おもいまするに、専横なる頼母をのぞいて、お家の安泰を計るには、お跡目は御年少の

順之助君ではその力がございません。ここはひとまず池ノ端の御舎弟大学さまにお乗り出しを願い、思い切った藩政の立てなおしを実行していただき、やがて順之助さまの御元服を待って家名をゆずられる、それ以外に良策はないと存じます。この儀を姫君のお口から仰せ出されていただきたく、さすれば不肖将監、姫君さまのお口移しを持って上屋敷へ使者に立ち、頼母と対決したい所存にござります」
「頼母が露の申すことを聞き入れぬ時はどうします」
「おそらく、さようなことはございますまい。姫君さまには明石十万石というお里方がついております。その姫君さまが、お跡目を大学さまにと仰せ出されますれば、頼母もお言葉にはそむけぬかと存じます」
「では、将監はこれから露の供をして里方へまいってくれますか」
　露姫が静かに聞く。
「それは、たって供せよとのことなれば、お供いたしますが、その前に姫君さまは、必ず大学さまをお跡目に御推挙くださると誓言していただけますか」
　ずるい将監は、逆襲に出てきた。
「将監は露をとりこにして、それを誓言せよと強いるのですね」
「いや、強いるのではございません。お家のためにお願いいたしているのでございます」
「もし、露が納得せぬ時はどうします」
「やむをえませぬ、御納得のいくまでお待ちいたしております」
「このままとりこにしてですか」
「はい、お家のためにはかえられませぬ」
　半分は脅迫するように、きっぱりと言い切るのだ。
「お家のためには、露の命を断ってもやむをえないと将監は考えているようですね」
　露姫の聡明な目がおだやかに微笑さえ含んで

いる。
——これは一筋なわではいかぬ。
将監は内心あきれながら、もう乗りかかった船だから、
「相なるべくは手段などはかまえたくはございません。しかし、侍の道と申すものは、きびしいものでございます」
と、覚悟のほどをほのめかす。
「頼母にせよ、将監にせよ、お家のため、侍の道のためには、主人を人形あつかいにする、それが郡山家の家風のようですね」
美しい露姫の顔に、はっきりと冷笑がうかんだ。
「とにかく、将監はあしかれと存じて、姫君を当下屋敷へお招きいたしたのではございません。その点御信用の上、なにとぞお心安くおくつろぎ願い上げます。——ただいまおもしろいお相手役をさし出しましょう」
この辺が切りあげどきと見て、将監は腰元を呼び、相手をしているように申しつけて、座を立った。
廊下へ出ると、障子をあけ放した次の間に、腹心の若侍が三人ひっそりと控えている。
目で招くと、青島市郎太がすっと立ってきた。
「姫はなかなか手ごわい。手におえぬようなら、見せしめのために、例のところへ押しこめておくがよい」
「憎まれ役ですな」
国もとから松江を追ってきた高柳峰十郎などより、ずっと悪党度胸のある市郎太は、にやりとわらった。少しわがままなところはあるが、それを承知でうまく使えば、十分将監のふところ刀として役に立つ男なのである。
「やがて、池ノ端から、清野が女中どもをつれて着くだろう。後は清野にまかせるがよい」
「いよいよ御老女さまの御出役ですな」
「うむ、女のことは女でないとわからぬ」
「御用人は今夜どこかへ行くのですか」

「わしは三ツ俣の中屋敷へまいって、とにかく戦の火ぶたを切ってこよう」
「結構ですな。戦は先手先手と打って出て、敵の出端をおさえつけてしまうにかぎりますからな」
「留守の間の采配はまかせるから、手ぬかりのないようにたのむぞ」
「承知しました」
「清野が着くまで、お妻をお相手に出してみようと思う。案外お気がしずまるかもしれぬでな」
「なるほど」
「しかし、お妻はああいう姐御だから、姫君にどんな知恵をつけるかもしれぬ。その点は十分注意してくれ」
「おまかせおき願います。雌のあつかい方は、これでも御用人以上と自負しています」
臆面もなくそんなことがいえる市郎太なのである。
「あまり甘く見てはいかんぞ」
将監は苦わらいをしながら、市郎太に別れた。
手配りはすっかり出来ているから、そっちの心配は少しもない。
そして、このまま持久戦に持ちこめば、ついには頼母側も万策つきて屈服することは明らかである。
が、将監が一番気になることは、露姫が案外聡明で、年に似合わずしっかりしていることだ。
——姫君としては不幸な生まれつきだな。
将監はそう思うのである。
大名の姫君などというものは、多少ぼんやりしていて、家来に人形あつかいにされてもさほど不満を感じないでいられるほうがしあわせなのだ。
あまり利口すぎると、かえってじゃまになるばかりだ。といって、こんどの場合は大切な人質なのだから、じゃまになるからといって一服盛ってしまうわけにもいかないのである。

——しようがない。どうしてもこっちの手にのらなければ、奥の手がある。
主人大学は以前から美貌の露姫に強い執着を持っている。一つ座敷へ放ってやれば、無論ただではおくまい。
女というものは、大抵それであきらめておとなしくなる。
が、これは一つ間違うと、角をためて牛を殺すという例外の場合がないではない。要するに、これはあくまでも最後の手段なのである。
露姫とは反対側の別室に、お浜とお妻が腰元に監視されて、軟禁されていた。これも将監にとっては相当重要な道具なのだから、大切にあつかわれている。
お妻のような気の強い女は、虐待されればどんな反抗でもできるが、あまりちやほやされると、どうにも悪たれきれなくなってくる。
「お姉さん、あたしにかまわずに、すきがあったら逃げてください」
豪華な振りそでをきせられて、姫君あつかいというより、姫君のけいこをさせられているお浜は、そっとすすめるのだが、
「お浜、逃げるときはいっしょだよ。まあ、当分曲崎がどんなことをたくらんでいるのか、おとなしく見物していてやろうよ」
と、お妻は度胸をすえていた。
一つには、雪太郎たちが今夜あたりどんな手を打ってきてくれるか、お妻はそれもたのしみなのである。
「お浜さま、ごきげんでいらせられるかな」
そんなそらっとぼけたことを真顔で言いながら、将監がうやうやしく座敷へ入ってきた。
「はい、おかげさまでごきげんでいらせられます」
とぼけっこなら引けは取らないお妻が、けろりとしてやりかえす。
「それはそれは——。やはり、お中老さまが、お相手だから、お浜さまも安心なのだろう」

「そうかもしれません」
そういうお妻は、昨日のままの町姿で、いくら腰元がすすめても、これだけは掻取り姿に着替えようとはしなかった。
「時にな、お妻どの、そなたに少したのみがあってまいったんだが——」
「どんなことでござんす、御用人どの」
「実は、さきほど当屋敷へ、三ツ俣の中屋敷から露姫さまがお越しあそばされてな」
「露姫さま——」
お妻は内心どきりとしたが、これは将監の前では知らないことになっているので、
「そちらさまは本当の姫君さまなんでござんすか」
と、わざと疑わしそうな目をしてみせる。
「うむ、まあ、まいってみてくれればわかるが、年ごろはお浜さまとおなじだ。いずれお浜さまにもお相手に出てもらうが、あちらさまは退屈しておられるので、池ノ端から女中どもがまいるまで、しばらくお妻どのにお話し相手になってもらいたいのだ。どうだろうな」
ずるい将監は、どこまでも下手に出る。
「あたしの話なんか、お姫さまに通じますかしら」
「いや、世間なれぬ姫君だから、お妻どのの話ならきっとよろこばれる」
「じゃ、どんな話をしたってかまわないんですか」
お妻はようやく乗り気になってきたように見せかける。
「お浜、あたしお姫さまのごきげんうかがいに行ってきてもいいかえ」
「どうぞ、お姉さん」
口では言ったが、お浜の顔は寂しそうだった。
お妻はちょいとお浜のほうを気にする。
「いや、お浜さまにはいま美代と申すいいお話し相手をさしあげましょう」
将監はすかさずなぐさめるようにいって、

「これ、だれかいるか。お妻どのを西の座敷へ案内いたせ」

と、次の間へ声をかける。

「はい」

監視の腰元が一人、次の間から出てきてそこへひざまずく。

「では、御用人さま、あたしでお姫さまがお気に召すかどうか、おうかがいしてみます」

「なにぶんたのみおきます」

将監はあくまで如才がない。

――古だぬきってありゃしない。

案内の腰元の後について廊下へ出たお妻は、決して油断はしていないが、昨日ここへつれてこられてからの将監のあつかいは至極丁重で、少しもいやらしいところがない。おなじ悪党でも、あのくらいになるとどこか違うと、その点は少し意外だった。

しかし、南に面した長い廊下を二つ三つ曲がっていくうちに、今夜の庭の警戒はひどく厳重になっているらしいのが、そこここの植え込みのかげに手くばりがあるのでもわかった。

――露姫さまって、きっと若だんなのあれに違いない。

お妻はそのおとぎばなしのような姫君にたまらない好奇心がわくが、それにしても、昨日はせっかく雪太郎があんなに苦労をして助けているのに、今日はどうしてこんなところへやすやすととりこになってきたのだろうと、それがふしぎでならなかった。

場合によったら、若だんなのために一膚ぬいでやらなくちゃならない、そんなきおった気持ちで行くうちに、案内の腰元はあかりのあかるい障子の前へきてひざまずき、

「お妻さまのごきげんうかがいでございます」

と触れこみながら、そこの障子をあけてくれた。

ここでは昨日からだれもが自分のことを、お妻どのとか、お妻さまとか呼ぶ。はじめはくす

ぐったかったが、それさえいつか耳なれてくるのだから、お妻は我ながらおかしい。

「お越しあそばしませ」

そこにいた腰元が両手を仕えてくれる。

「ごめんなさいね」

人見知りをしないお妻は、平気で中へ入って、正面に座っている人を見た。

年ごろ十六、七、朝露をふくんでいま花をひらいた緋ぼたんともいいたい豪華な気品と端麗さをそなえた、これは生まれながらの姫君と一目でわかる露姫が、いぶかしげにおっとりとこっちを見ている。

――まあ、憎らしい。

お妻ははっと胸をうたれて、雪太郎の顔をまざまざと思いうかべてしまった。こんな姫君に命をかけて思いこまれているとしたら、たとえあたしがどうのぼせあがったって、どうにもなりゃしないと、ついため息が出てくるのである。

「姫君さま、お初にお目にかかります」

お妻は少し離れたところへ座って、ていねいに両手をついていた。

「そなたはだれです」

「はい、大工町のお妻と申します」

「大工町、――あの深川の大工町ですか」

美しい目になにか感情が動いたようだ。まじまじとこっちの顔を見つめている。

それは物問いたげな、ひどくあどけない顔にも見える。

「あの、お姫さまは深川の大工町を御存じなんですか」

「いいえ、名前だけは聞いています」

ほんのりとほおが桜色になってくる。

――憎らしいなあ。なにか思い出しているんだわ。

お妻は自分までわくわくしてくるような気持ちで、

「あたしきっとお姫さまの御存じのお方を知っているような気がします」

と、わらい顔になっている。
「そなたは、この屋敷の者ではありませんね」
姫君はなかなか用心深い。
「ええ、あたしはここのとりこです」
お妻はかまわず言ってのける。
「どうしてとりこになったのです」
思わず聞いてから、ふっと気がついたように、
「あの、もっと前へおよりなさい。そこでは話が遠い」
とすすめる。
「失礼じゃありませんかしら。あたし、お屋敷のお行儀なんてあんまり知らい女なんです」
「かまいません。露もここのとりこなのですから」
はじめてにっこりとなる露姫だった。
「あたし、露姫さまのこと、あの方からうかがっています」
お妻はずっとひざをすすめながら、小声で言った。
障子ぎわに座っている腰元は、伏し目になって控えたまま、人形のように動かない。
「あの方とはだれのことです」
「御浪人で比良雪太郎さん、昨日眠っているお姫さまを船でお助けした人です」
「そなたはそんなことまで存じているのですか」
露姫も身をのり出すようにして、声をひそめる。
「あたしたち、若だんなの仲間なんですもの。若だんなって、比良さんのことなんです。お友達が二人いましてね、一人は三井鐘太郎さん、一人は堅田雁之助さん、二人とも若だんなのためにならどんなことでもしようって仲だもんですから、昨日お姫さまのお話をうかがってから、みんな一生懸命働いているんですよ」
「では、雪はこの屋敷を知っているのですか」
「知っていますとも。大きな声じゃいえませんけど、ここの御用人がどんなことをたくらんで

いるか、若だんなにはもうちゃんとわかっているんです。――それにしても、どうしてお姫さまは今夜こんなところへつれてこられてしまったんです」
お妻がなじるように聞く。
「露がうかつだったんです。いたしかたありません」
露姫は少し恥ずかしそうな顔になる。
「あたしたちは町の女ですから、さらおうと思えばどうにだってなるんでしょうが、お嬢さまにはたくさん御家来がついているんでしょう。その御家来さんたちの知らない間に、お屋敷からさらってくるのは、ずいぶん大変だと思うんですがねえ」
お妻はどうしてもそれが解せないのである。
「将監はどうしてそなたをここへとりこにしておくのです」
露姫にはそれがのみこめないらしい。
「御用人さんのお目あては、本当はあたしじゃないんです。あたしの妹分に、お姫さまとおない年ぐらいの、お浜という子がいます。若だんなの話では、そのお浜をたぶんお姫さまの身がわりにしたいんだろうっていってましたが、御用人さんはおといの晩、あたしに黙って、お浜を料理屋からここへつれてきてしまったんです」
「まあ」
「ですから、あたし、若だんなにいっしょに行ってもらって、『並川』っていううなぎ屋で御用人さんに会って、お浜をかえしてくれっていったんです。すると、御用人さんは、かえすわけにはいかないが、会いたければ会わしてやるといいます。若だんなも会ってこいっていうもんですから、それで昨日ここへきてみたんですけど、それっきりとりこにされてしまったんです」
「では、そなたがとりこにされたことは、雪も知っているのですね」
「知っています。御用人さんはその時、若だん

なに仕官をすすめて、自分の味方にしたかったようなんですが、若だんなは子細あって自分は一代仕官はしない、妻もめとらぬことにしているからと、きっぱりことわりました」

「本当ですか、お妻」

「では、それはたしかに雪に違いありません。雪はいまどこにいるのです」

露姫の顔にかくしきれない感情が、ぱっと花のようにあかるくなる。

「若だんなは大工町のあたしの家の裏に住んでいるんです」

「露をそこへ案内してください。雪に会いたい」

「それはいつでもおつれはしますけれど、今はお姫さまもあたしも、ここのとりこなんですから」

「そうでしたね。露は昨日雪に会っていますのに、眠っていてなんにもわかりませんでした。悔しいと思います」

「ああ、わかりました。お姫さまは松江さんから昨日の若だんなのことを聞いて、それで若だんなに会いに自分からお屋敷をぬけ出してきて、ここの御用人さんにつかまってしまったんですね」

「少し違います。美代と申す腰元が、雪の家を知っているといいますから、裏門口から出て、二人で船へ乗りました。そして、着いたところが、ここだったのです」

「畜生。じゃ、その美代って女は曲崎のまわし者だったに違いありません」

「お妻、美代を責めてはいけません。美代はもうすっかり船の中で後悔して、露の顔も見られずに、ふるえてばかりいました。責めてはかわいそうです」

露姫の目は美しく澄んでいる。

「お姫さまはおやさしいんですねえ」

育ちが違うんだなあと、お妻は感心せずにはいられなかった。

「いいえ、うっかりその気になったのは、露が悪いのです」

「それで、曲崎はお姫さまをとりこにして、どうしようっていうんでしょう」

お妻はひざをのりだしながら、はっと聞き耳を立てる。

だれか庭のほうから廊下先へ走ってくる足音がして、

「青島どの、――青島どのはどこです」

と、あわただしく呼ぶ声がした。

次の間から足早に廊下へ出ていった男が、

「なにか用か、万兵衛」

と、ふきげんそうに聞く。

「いま裏門から、例の比良雪太郎って浪人が乗りこんできたんです。高柳うじが果たし合いに呼び出したんだそうで、ほうっておいてもいいでしょうかな」

「なにッ」

青島の声もせきこんでいるようだが、お妻も思わず露姫と顔を見あわせる。

「しようがない田舎者だなあ。高柳は屋敷うちで果たし合いをやる気なのか」

「再三失敗している相手ですからな。今夜は屋敷うちへ閉じこめて、まかり間違ったらみんなでやっつけてしまう腹なんでしょう」

「その比良って男は、一人で乗りこんできたのか」

「いや、介添え役が二人ついてきています」

「三人だな」

「はあ、こっちは中坂下組を入れて十五、六人はいます」

「引っぱりこんでしまったからには、やるほかはないじゃないか。ただ、絶対に中木戸からこっちの内庭へ入れないように、うまくやれと高柳に注意しておいてくれ」

「はっ」

万兵衛はいそいで引きかえしていったようだ。

次の間へ入った青島が、だれかになにか言いつけている。
「やっぱり見張り役がいたんですねえ、お姫さま」
　お妻はふすまのほうを振りかえりながら苦笑いした。
　障子ぎわの腰元が心配そうにこっちを見ている。
「お妻、雪に会いたい。庭へつれていってください」
　露姫が必死のまなざしになりながら、お妻の手をつかんでくる。おなじ屋敷うちに雪太郎がきていると聞いて、矢もたてもたまらなくなってしまったのだろう。
「無理もありませんけれど、そんなことできますかしら」
「かまいません、露に考えがあります」
「だって、若だんなはもう切りあいの最中かもしれないんですよ」
　やっぱりむちゃなことをいうと、お妻が立ちしぶっている時、次の間との間のふすまがさっと左右にひらいた。
　若侍どもが四人、うさんくさそうな目を光らせて、そこに座っている。少し前へ出て横柄な顔をしている三十がらみの男が青島市郎太だと、お妻は知っている。
「青島さん、一体これはどうしたってわけなんです」
　お妻はわざと意地の悪い目をしながら、次の間のほうへ向きなおる。
「気の毒だなあ、お妻。比良という素浪人が、仲間をつれて、わざわざ裏門口から切られにきたそうだ。本当はお前を助け出すのが目的なんだろうが、食い詰め浪人などという者はあさはかなことを考えるものだ」
　市郎太は憎い冷笑をうかべる。
「そなたたちは、当家の家来どもですか」
　露姫がおだやかに声をかける。

「はあ、手前は近習頭をつとめます青島市郎太でございます」
「そちは露を存じていますか」
「この春明石家からお輿入れになられました露姫さまと存じあげております」
　それがどうしたといわぬばかりの、冷然たる態度である。
「当家の家来どもは、侍の礼儀を知らぬようですね。食い詰め浪人より恥ずかしいことだとは思いませんか」
　露姫のおっとりとした顔に、ちらっとさげすむような微笑がうかんで消える。
「失礼ですが、姫君とはただいまのところ我々どもは敵味方でございます。我々どもは主人よりとりこの番をせよと仰せつけられておりますので、わざと礼儀のほうはさし控えております」
　姫君といったところで、いざとなれば座敷牢へ押しこめてもいいたかが小娘、そういう腹が市郎太にはあるのだ。
「それが大学どのの日ごろそちたちへのしつけなれば、とがめてもいたしかたありませんね」
　露姫のきれいな目が、あわれむように市郎太を見ながらいう。
　――お立派だわ。
　と、血の気の多いお妻は、すっかり感心させられてしまう。
「将監はいませんか。これへ呼んでください」
「御用人はあいにく留守でございます」
　市郎太はあくまでもぬけぬけと正面を切っているが、ついている三人の若侍たちは自然に頭がさがって、恥じ入っているようである。
「どこへまいったのです」
「たぶん、三ツ俣の中屋敷でございましょう。姫君をとりこにした旨を知らせて、主人大学さまのお跡目のことと、それについて露姫さまをぜひ主人の夫人におむかえしたいこちらの希望を申し入れにまいったものと思われます」
「市郎太、将監が留守なればやむをえません。

そなた、露を果たし合いの場所へ案内なさい」
「そんなところへまいって、どうなさろうとおっしゃるのです」
「果たし合いをやめさせたいのです。当家の者にけががあってもなりませんし、たとえ浪人者にもせよ、たった三人をおおぜいで切るなどということは、侍のすることではありません」
毅然(きぜん)として言い切る露姫だった。
「せっかくですが、当家の家来はあまり侍の礼儀は知らぬほうでございましてな」
「そのような負け惜しみは申さぬものです。敵からも味方からも、男と尊敬されてこそまことの男だとは思いませんか」
そのころ――。
雪太郎は三井と堅田の二人を介添えとして、この下屋敷の裏門うちの広場に高柳峰十郎と相対していた。
高柳の背後には国もとから分家へ加勢にきている藩士数人と、大俵玄蕃がひきいる浪人組十人あまりがずらりと顔をそろえている。
いま入ってきた裏門のくぐりはすでに閉ざされて、そこにも二、三人若侍が退路を断っていた。
広場の奥は雑木林になっていて、そこをぬけたところに内庭の中木戸があるらしい。その雑木林の中にも、敵は何人かの警固をおいているようだ。
十日あまりの月のあかるい宵(よい)である。
「高柳さん、お招きに応じて、比良雪太郎、ただいま参上いたした」
雪太郎は果たし合いにきた人とは見えない明るい顔で、まず高柳にあいさつをした。
「貴公、あの果たし状でよくこの下屋敷がわかったな。やっぱり、内々でお妻のしりを追いまわしていたとみえるな」
傲慢(ごうまん)な高柳は、冷笑をうかべながら、頭からけんか腰である。
「当家の曲崎うじが、お妻お浜の姉妹をここへ

つれこんだきりもどしてよこさない。我々は近隣のよしみとして心配しています。できればお妻に会わせてもらいたいと思うんだが」
「お妻に会って、どうしようというんだね」
「お妻姉妹が家へもどらないのは、自分たちの意志か、それともなにかの事情でとりこにされているのか、当人の口から一応それをたしかめて、こちらもしかるべき手段を考えてやりたいと思うんです」
「余計なお世話だ。わしが貴公をここへ呼び出したのは、鈴ガ森以来の勝負をつけるためなんだ。後のことは後まわしにしてもらおう」
「結構です。貴公が余計なことを言い出すから、わしもそれに返事をしたまでで、先にお妻に会わせろとはいいません」
問答はあきらかに高柳の負けだった。それが自分でもよくわかるから、この青二才めと思いながら、
「念のために、介添え人の姓名を聞いておきたいな」
と、横柄に三井と堅田のほうを見る。
「拙者は比良の親友、三井鐘太郎藤原の吉秀」
「手前はおなじく堅田雁之助」
二人が昂然(こうぜん)と名乗りをあげる。
「介添え人のつもりかね、それとも助太刀のつもりかね」
高柳がまたしてもそんな憎まれ口をきく。
「そちらさんはどうなんだね。うしろにだいぶ大勢ひかえているようだが、ただの立会人か、それともかなわなくなったら加勢してもらうつもりかな」
三井が冷やかすように応酬する。
「いや、こっちはわし一人でたくさんだ」
「それなら我々も介添え人でたくさんです」
「棺桶(かんおけ)の用意をしてきたかね」
「いや、貴公の棺桶なら当家で用意してあるだろうと思ったものだから」
浪人組の中から、思わず、あははとわらい出

した者がある。
　雪太郎が見ると、さっき使いにきた若い秋山信助で、そばにいた玄蕃ににらまれて、いそいで人のかげへかくれていた。
「よし、どっちが棺桶に入るか、支度をするがいい」
　高柳は下げ緒を取ってたすきをかけ、手ぬぐいをはち巻きにして、袴のももだちを取りながら、草履をぬぎすてる。
「いよいよやりますかな」
　雪太郎もそれにならって身支度をした。
「若だんな、今夜は遠慮はいらんぞ」
　三井は声援をおくりながら、堅田といっしょに少し後へさがる。
「行くぞ」
　と、高柳が抜刀し、雪太郎は無言で抜きあわせた。相青眼である。
「えいっ」
「とうっ」
　今夜はこっちからわざわざ敵を呼び出しているのだから、高柳はどうしても雪太郎を切らなくては、味方の手前に対しても面目が立たない。
　これまで二度も失敗はしているが、腕からいえばたしかに自分のほうが一枚上だという自負もあるので、高柳ははじめから強引にじりじりと詰めていった。
　無論、一気に切って出る意気ごみだったが、雪太郎は冷然と間合いをつめさせながら、少しもさがろうとはせず、ぴたりと切っ先をこっちののどもとへ吸いつけてくる。
　――うぬッ、この手だ。
　いつもこの度胸のいい捨て身のもろ手突きで、後の先を取られて失敗させられるのだ。
　これを圧倒するには、こっちも捨て身になるほかはない。
　――死ね。
　高柳は歯をくいしばって、
「おうっ」

　さっと一刀を上段に振りかぶった。次の瞬間、体ごとぶつけていってたたっ切る覚悟だったが、それより早く、
「とうっ」
　雪太郎のもろ手突きが地をけって殺到してきたのである。
　度胸のよさというより、はじめから生死の外に身をおいて、機いたれば自然に発する無想剣なのだから、どうしても紙一枚だけ雪太郎の突きのほうが早くなる。
「おうっ」
　高柳は切りおろすべき上段の太刀で、やむをえず敵の突きを引っぱらいながら、激しく飛び違っていく。
　雪太郎が高柳の位置まで飛んで、ぐいと踏みとまった時、ちょうど目の前になった浪人組が、
「それッ」
　と、大俵の命令一下、いっせいに抜刀した。
　そう出るのは最初から敵の計画だったろうし、こっちもそれは覚悟の前だから、
「えいっ、――とうっ」
　雪太郎はすかさずその浪人組の剣陣の中へ、刀をふるって突入していった。
「わあっ」
「おのれ」
　敵はいま抜刀したばかりで、この剣陣の中へまさかそんな大胆なまねもできまいと、衆をたのんでつい油断のあった虚を突かれたので、思わず悲鳴をあげながら、左右に飛び散る。ここでもまた雪太郎はあきらかに敵の機先を制していたのだ。
「えいっ、――とうっ」
　雪太郎は右と左に一刀をたたきつけながら、足をとめては背後からの追いうちがあぶないので、ただ前進あるのみだ。
「切れ、たたっ切れ」
「のがすな」
　浪人組が口々にようやく立ちなおってきたこ

ろには、何人かをなぎ倒して、剣陣を切りひらき、一散に雑木林の小道へ駆けこんでいた。目的は奥庭にあるのだ。

「そら、来た」

「気をつけろ。通すな」

林の中をかためていた足軽たちが、あわてて六尺棒を取りなおしてたたき伏せようとする。

「えいっ、とうっ」

雪太郎は面もふらず左右に切り払いながら、奥へ奥へと進む。

「奥へやるな、切れ切れ」

わあっと浪人組が追ってくる。

が、この時はすでに三井も堅田も抜刀して、おもいおもいに林の中へ飛びこみ、敵勢を引っかきまわしているから、藩士、足軽、浪人組あわせて二十人あまりの人数が三分されて、たった三人をやや持てあました形になってきた。

しかも、裏門口の総帥で、今夜の立て役者たる高柳峰十郎は、三井とわたりあって手がぬけなくなってしまったから、肝心な雪太郎を追うことも、指揮を取ることもできない。

ずるい玄蕃ぎつねは、雪太郎にかかっている浪人組のうしろから、抜刀こそしているが、

「それ、だれか敵の右へ出ろ、こんどは左だ」

と、指図だけはするが、決して自分からかかっていこうとはしない。

雪太郎はついに林をぬけて、中木戸の前へ出てきた。

ここでもう一度追っ手を迎え討って攪乱しておかぬと、木戸破りにかかることができない。くるりと敵のほうへ向きなおった時、

「若だんな、ここは引きうけた」

林の一方から躍り出してきた堅田が、息もつかずに追っ手の中へ火の玉となって切りこんでいった。

「わあっ」

十人足らずの追っ手が悲鳴のような鬨の声をあげてうずをまく。

――今だ。

それと見た雪太郎は、思いきり自分の体を木戸へたたきつけていった。

そこの木戸内をまもっているのは、若侍三人、足軽二人の小人数だ。

「いかん、わしは青島さんに加勢をたのんでくる」

この人数ではあぶないと見たさっきの斎藤万兵衛が、またしても奥御殿のほうへ駆け出した。

露姫の座敷では、相かわらずお妻と青島がにらみあったまま、次第に近くなってくる外庭の乱闘の叫び声に耳を澄ましていた。

「青島どの、中木戸があぶなくなりました。御加勢を願います」

廊下先へ駆けつけた万兵衛が、必死の声で告げる。

「なにッ」

つかつかと立っていった市郎太は、がらりとそこの左右の障子をあけ放して、

「一体、高柳はどうしたんだ」

と、しかりつけるように聞いた。

「高柳さんは闘っていると思います」

万兵衛がそんな間のぬけた返事をする。

「バカッ、責任者の高柳が闘っていて、どうしてこんなへまなことになるんだ」

「思ったより相手のほうが強かったんじゃないでしょうかなあ」

「もうよい。いますぐ加勢を出すから、高柳にもっと責任をもって闘えとつたえろ」

万兵衛などを相手にしていてもしようがなかったと、青島も気がついたのだろう。吐きすてるようにいって、つかつかと座敷へ引きかえしてきた。

「姫君、お聞きおよびのとおり、狼藉者がここへ暴れこむかもしれません。おけががあってはなりませんから、しばらく安全な場所へ御避難ねがいます」

「それには及びません。だから、こんなことに

ならないように、いまもお姫さまが外庭へ案内するようにとおっしゃったではありませんか」
　そばからお妻がわざと意地の悪い目をしてやる。
「あは、は、姐御どのは比良さんが強くてうれしそうだな」
「うちの若だんなは強いにきまっています。青島さん、いまからだってとめるのはおそくはないんですよ」
「いや、せっかくだが、それには及ばん。たかが山犬の二匹や三匹、すぐに始末がつく」
　市郎太はにやりとわらって、
「おい、だれか隠れ間のふすまをおあけしろ」
と、次の間へ命じた。
「はっ」
　若侍たちはいずれもちょっとためらうように、顔を見あわせている。
「早くせい。事は急を要する」
　それをせき立てるように、乱闘の声は次第に近づいてくる気配だ。
　一人が思い切ったように立ってきて、露姫のそばをすりぬけ、床の間のわきの隠れ間のふすまをあける。
　ここは普通刺客などをふせぐ警固の力士を伏せておく居間につくられているのだが、見るとそこに厳重な牢格子がはめてある。曲崎はここをいざという時の座敷牢にこしらえておいたのだろう。
　若侍は手早くその牢格子のくぐりをあけた。
「姐御どの、あれなら山犬がきても安全だ。姫君を御案内申し上げてくれ」
　ふてぶてしい面構えになって、青島はあごをしゃくってみせる。
「お姫さまに座敷牢へ入れというんですか、青島さん」
　さすがにお妻がさっと顔色をかえた。
「そう悪くとってはいかん。あそこが一番安全なのだ」

「あんたって人は、本当にたのもしい悪党にできているんですね」
「さよう、これでも男にたのもしがられる男にできているらしい」
　どうしてくれようかと、腹にすえかねながら、お妻はちらっと露姫の顔色をうかがう。
「お妻、心なき者に口をきいてもむだでしょう」
　露姫は怒りをおさえるようにいって静かに立ち上がった。
　露姫はもうなにも言わずに、牢口から身をかがめて座敷牢へ入った。
　大名の息女と生まれて、牢口をくぐるなどと、こんな屈辱なことはないが、いやだと強情を張れば腕力で押しこめられるに違いない。むしろいさぎよく自分からあきらめたほうがましだと覚悟したのである。
「さあ、姐御どのもお入り願おうかな」
　青島は冷酷な微笑をうかべている。
「あんたもここへ入っていたほうが安全じゃないのかしら」
　お妻はわざと毒づいてやる。
「いや、お二人きりでお寂しければ、いま山犬をつかまえて、お相手に入れてやる」
「かみつかれないようになさいよ」
　引かれ者の小唄になりそうなので、お妻もそれ以上はむだ口をやめて、自分から牢口をくぐった。
　若侍がばたんとくぐりをしめて、錠をおろす。
「このふすまもしめておきますか」
「うむ」
　ふすまがしまると、中は真っ暗になる。
「町田、お前はここをまもっておれ」
「はっ」
「後の者はわしにつづけ」
　青島はいまの若侍一人だけを書院に残して、後の三人をつれ、すぐに庭へ飛び出していったようだ。
「それッ、そっちへ行ったぞう」

「気をつけろう」
「えいっ」
「とうっ」
　数人の足音が近くの庭で入り乱れて、戛然と白刃が火花を散らす音が聞こえたと思うと、ばたばたとまた遠のいていったようだ。
「お妻、雪は中木戸を破ったようですね」
　露姫は低い声でささやきながら、じっと足音に耳を澄ましているようだ。
「はい、いまにきっとここを見つけてくれるかもしれません」
「なんとかして、ここを出られませんか」
　姫君はお妻のほうへにじり寄ってきて、せがむようにいう。
「そうですねえ」
　ふっと気がついたのは、自分は手足を縛られているわけではないし、ちゃんと髪に銀の平打ちのかんざしをさしている。お妻は手品師なのだ。
「お待ちなさい、お姫さま。ぬけ出せるかもしれません」
「うれしい、本当ですか」
　露姫がすがりついてきた。そんなところはお浜と少しもかわりのない無邪気さである。
「若だんなに早く会いたいんでしょう、お姫さま」
「会いたいと思います」
「ようござんす。待ってらっしゃい、いまやってみますから」
　お妻は姫君の体を押しやって、手さぐりで牢口へいざりよった。牢格子の間から錠をさぐってみると、すぐ手にふれる。
「まずいなあ、表に番人が残っているはずですねえ」
　お妻がそれに気がついて、ちょっとためらっていると、わあっという声がまた庭先へ近づいてきたようだ。
「おっ、狼藉者だ。出あえ」

　牢番に残された町田がすぐそこで絶叫したと思うと、
「えいっ」
「わあっ」
　たちまち、どたん、めりめりとふすまか障子にぶつかって倒れていく音が激しく耳を打った。
　それっきり近くの物音はぴたりとやんだが、切ったほうの男はまだそこに立っているらしく、荒い呼吸づかいが耳につく。
　――だれだろう。
　と、聞き耳を立てたお妻は、もう牢口の錠を外してしまっているから、うっかり声はかけられない。
　と、ひたひたと廊下へ別の足音が近づいてきて、
「だれだ、そこにいるのは」
　と、用心深く誰何した。
「やあ、堅田うじ、おれだ」
「なんだ、三井さんか」
「どうもおかしいんだ。ここはたしかに姫君のいた座敷らしいんだがね」
　どうやら二人ともこの辺がそうだろうと見当をつけて、偶然に落ち合ったようだ。
「三井さん、お妻はここです」
　思わず呼んで、お妻は力一杯牢のくぐりを押しあけたから、前のふすまがばさっと座敷へ外れ倒れる。
　座敷は行灯が消えて暗いが、障子をあけ放した庭に月あかりがある。
「おお、姐御――」
「お姫さまもいっしょです」
「なにッ」
「さあ、姫君さま、早く」
　お妻は露姫の手を取って、するりと座敷牢からぬけ出る。
「若だんなは、三井さん」
「向こうの書院で闘っている」

なるほど、乱闘の雄叫(おたけ)びは東の書院のほうから聞こえてくる。

「あっちにはお浜がいるんです。とにかく、お姫さまをおつれして、早く」

幸い今のところこっちには敵の姿はないが、いつまた押しよせてくるかもしれない。逃げるなら今のうちなのだ。

「よし、堅田うじ、二人をつれて裏口からぬけ出してくれ。しんがりはわしが引きうける」

「心得た」

「若だんなはどうするんです、三井さん」

「わしが心得ているから、心配しなくてもいい」

堅田が先頭に立って、庭へ飛びおりるなり、そこの植え込みの中へ身をひそめてみせる。お妻が露姫の手を取って後につづいた。

「お妻、雪は大丈夫ですか」

露姫はしきりに東の書院のほうを気にしているようだ。

「大丈夫です、若だんなは強いんですから」

そう言っておくよりしようがないお妻である。

「三井さん、火ばちが引っくりかえっていたようだけれど、大丈夫かしら」

それを思い出してお妻が三井に聞く。もう畳に火が移っていたらしく、こげくさかったのだ。

「悪党の巣など心配はいらん」

しんがりの三井はそういってわらっていた。敵はすでに多くの手負いを出している。

相手が三人とも強いとわかると、浪人組にしても手柄を立てて仕官したい気持ちより、命のほうが大切になるから、一人で敵をさがし求める気にはなれなくなるのだろう。みんな東の書院のほうへ集まって、雪太郎一人を取りまいているようだ。

そのすきをねらって、堅田は植え込みのかげからかげを縫い、どうやら中木戸の見えるあたりまできた。

見ると、木戸はしめ切ってあって、そこに三

人ばかり番人が残っている。三人とも浪人組の者らしく、のんきに立ち話をしているようだ。

「三井さん――」

と、小声で堅田が呼んだ。

「番人がいるなあ、堅田うじ」

三井がそばへ寄ってきていう。

「わしがあの三人を奥のほうへおびき出すから、その間に貴公二人をおつれして、木戸を出てくれ。ああして木戸をしめてあそこを番をしているところを見ると、外庭にはもうだれもいないんじゃないかと思う」

「なるほど――」

「わしはついでにあっちの戦場へ行って、若だんなに知らせてくる。今夜はもう切りあげどきだと思うんだ」

堅田の声はいつもと少しも変わっていない。その落ち着き払っているのが、三井にはひどくたのもしかった。

「堅田うじ、その役はわしがやる。貴公は大切なあずかり物をつれて、一足先にここを脱出してくれ」

この男なら、きっとそれができると思ったのだ。

「いや、大役は先輩が引きうけてくれるもんだ。落ち合う先は昨日の菩提寺(ぼだいじ)がいいと思うが、どうだ」

なるほど、菩提寺なら帰り道の途中だし、まさか姫君をいきなり長屋へつれていくわけにもいかないから、かくれ家としても思いつきの場所である。

「よし、落ち合う先は菩提寺ときめよう。しかし、この役はどうしても貴公だ」

「よろしい。たのんだよ、三井うじ」

堅田はもうつかつかと木戸のほうへ出ていった。

「しょうがないなあ。あいつは女房がかわいくないのかなあ」

三井は思わず舌うちをする。

「あら、そんなこと考えていたの、三井さん」

露姫の前へしゃがんで、すそをしっかりとしごきでたくしあげてやっていたお妻は、場合が場合、女房という言葉がなんとなくおかしかったので、ひょいと三井の顔を見あげる。

「若だんなからたのまれているんだ。なるべく堅田を殺してくれるなとね」

「かわりに三井さんに死ねっていうの、若だんなは」

「うれしい心意気さ。——そうれ、始まった。姐御、いつでも駆け出せるようにしておいてくれよ」

三井はじっと木戸のほうへ目をすえている。

番人どもは堅田の足音に気がついたらしく、ぎょっとそっちを見て、いっせいに抜刀した。

「あは、は、よせよせ。貴公たち、けがをするばかりだぞ」

堅田はわざと相手を冷やかしてかかる。

「うぬッ」

浪人組三人は堅田に嘲弄されて歯がみをしているようだが、相手の強いのを知っているから、うかつには切って出られない。

「えいっ」

堅田のほうから一足踏みこんでいくと、一度はじりじりと後へさがったが、

「おうっ」

それでも三人そろって必死に押しかえしてきた。

こんどはじりじりと堅田が後へさがる。

その堅田のさがり方に、多少気魄のぬけたところが見えたのだろう。

「とうっ」

三人のうちの一人が、ぐいともう半歩踏み出してきた。

「おうっ」

気合いだけうけて、堅田はまたじりじりとさがる。

それが駆け引きだとは知らないから、御しやすしと見た別の一人が、

「えいっ」

一刀をさっと振りかぶって切って出ようとした。

ひらりと飛びさがった堅田が、素早くきびすをかえしてばたばたと奥へ逃げ出した。

「うぬッ、逃げるか」

「のがすな」

急に強くなった浪人組が、手柄を立てるのはこの時とばかり、勢いこんで追いだす。

が、堅田を追ったのは三人のうちの二人で、一人は抜刀をさげたまま見送っている。

——用心したな。

三井はちょっと当てが外れて苦わらいをしたが、今を外すとまたどんなじゃまが入るかわからないのだ。それに、一人と一人ならなんとかなると考えたので、

「姐御、わしはあいつをやっつける。その間にすきを見て、かまわず木戸を出てくれ」

と、お妻にいっておいて、もうつかつかと月あかりの中へ出ていった。

ぎょっとしたように敵の全身に一瞬殺気が走ったが、

「なんだ、三井うじだな」

意外にも、その男は、にこりとわらった。

まだ若い男で、そう言われてみると、どこか顔に見おぼえがあるようだ。

「貴公、六郷の時の秋山信助うじか」

「そうです。さっき比良さんのところへ使いに行った秋山です」

「うむ、若だんなから聞いているが、貴公手柄を立てる気はないのかね」

「やめました。実は、さっきから様子を見ていると、貴公たち三人のほうが正しいようだ。入門金はちょいと惜しいが、今夜かぎりあの道場は出ます」

「賛成だな。いまの堅田も玄蕃ぎつねに仕官の口でうまく金をまきあげられた一人なんだが、

こいつくさいとわかったんで、いさぎよく金も仕官の口もあきらめてしまったんだ。まだ貴公は若いんだから、早く出直したほうが勝ちだと思う」

「そうする気です。三井うじはもう帰るんですか」

「帰るといったら、木戸をあけてくれるかね」

三井はそれとなく聞いてみる。

「三井さんだけ脱出するんかね」

秋山は解せない顔をする。

「いや、お供が二人いるんだ」

「お供っていうと――」

「露姫さまとお妻姐御」

いかんというなら切りぬけるほかはないと、三井はひそかに覚悟している。

「なあんだ、そうだったのか」

秋山はまじまじとこっちの顔を見ていたが、

「よろしい、わしはちょっと奥を見まわってくる」

にっとわらって、ふらりと奥のほうへ歩き出す。

――味なことをやる男だ。

これなら大丈夫と見たので、三井はお妻たちのかくれている植え込みのほうへ手をあげて合図した。

東の書院の廊下の前では、雪太郎が泉水を背にして、浪人組の剣陣に取りかこまれていた。

その浪人組の背後にも抜刀した敵が大勢ごたごたしていて、今のところ戦闘はここ一カ所になったから、屋敷中の人数がここへ集まったという感じである。

――ここにくぎづけにされてしまっては、結局あぶない。

雪太郎は切って出るすきをうかがいながら、一息入れているという形である。

心にかかるのは、三井と堅田の生死だ。おそらく、二人とも倒れてはいまい。うまく渦中(かちゅう)をのがれて、お妻姉妹をさがしていてくれるのだと思うが、しかしなにぶんにも敵の人数のほうがはるかに多いのだから、いちまつの不安がないでもなかった。

おなじ不安は書院の廊下に立って、総指揮を取っている青島市郎太にもあった。

「高柳、ほかの二人はたしかに討ち取ったんだろうな」

これも抜刀を引っさげて、廊下の前で一息入れている高柳峰十郎に聞く。

「わしが自分で手にかけたわけじゃないから、断言はできないが、一人は玄蕃先生がたしかに深手をおわせたといっている。二人ともここへ出てこないところを見ると、死んだか、ことによると一人が手負いを助けて逃げ出したか、どっちかでしょうな」

「逃げ出すといったところで、中木戸にも裏門口にも手配りがあるんだろう」

「無論、それはあります」

「では、脱出は到底不可能なんじゃないのか」

「そういうことになりますなあ」

「そんなあいまいなことじゃ困るじゃないか」

市郎太は苦い顔をして、

「おい、だれか二、三人、中木戸へ行って様子を見てこい」

と、藩士たちに命じた。

「はっ」

三人ばかりがいそいでそっちへ走り出す。

「高柳、今夜の責任は貴公にあるんだ。わしの見ている前で、比良を切れ」

「そんなことはあんたに指図されなくたって、必ず責任は取る。まあ、そこで見物していてもらいましょう」

「敵の疲れるのを待っている気なら、もう比良はさっきから十分疲れているはずだ」

市郎太は冷やかすように、にやりと冷笑を投げつける。

「青島さん、あんたこそ、そんなところにのんきらしく立っていて、かものほうは大丈夫なの

かね」
　高柳がけろりとして、図太くやりかえす。
「わしのことは心配は無用。打つべき手はちゃんと打ってある」
　頭の働きが違うといわぬばかりに、にやりと冷笑をうかべた時、
「火事だ。火事だぞう」
「西の書院が燃え出したぞう」
　いま中木戸を見まわりに走り出した二人のけたたましい叫び声が、そっちのほうから聞こえた。
「なにッ」
　ここからはかぎ型に曲がっていくので、火の手は見えないが、そういえば煙はもう縁の下一面にまわっているらしく、すうっとここの廊下の下からも煙がはい出してきた。
「青島さん、西の書院が火事だそうですな。やっぱり、あんたの打っておいた手なのかな」
　すかさず高柳が毒づいたが、市郎太はそれに耳を貸している暇はなかった。
「比良を逃がすなよ。半数はわしにつづけ」
　西の書院の座敷牢には、露姫とお妻が入れてある。これを焼き殺してしまっては事なので、市郎太はそう叫びながら、一散に長廊下を走っていった。
「それ、火事だ」
「青島どのにつづけ」
　剣陣の背後に手のあいている連中は、敵の白刃に向かうより、火事のほうがまだ身の安全だから、みんなばらばらっとそっちへ駆け出す。
「えいっ、――とうっ」
　それと見た雪太郎が、奮然と切って出た。
　浮き腰立っている浪人組だからひとたまりもない。
「わあっ」
　と、剣陣が左右に飛び散って、雪太郎は得たりと泉水にそって、火事のほうとは反対のほうへ走り出す。

「追え、――逃がすな」
　高柳は味方を叱咤しながら、自分もそっちへ走ろうとしたが、急にバカくさくなってやめた。市郎太などにこき使われて、命がけになったところでつまらないと気がついたのだ。
　――あの男と勝負を決する機会は、まだいくらもある。
　そして、おなじ命がけになるなら、一番有効な時、花々しく切ったほうが得だと、そんなそろばんもはじいている。
　雪太郎が泉水のうしろ側をまわって、林の中を中木戸のほうへ出てくるころ、西の書院の火はもう軒下へめらめらと赤い舌を見せていた。
　いつの間にか追ってくる敵も影を消して、人数はみんな火事場のほうへ集まってしまったらしい。
「若だんな、こっちだ」
　そこの林のかげから、ひょいと堅田が飛び出してきた。
「やあ、無事だったか」
　ほっとして思わず走り寄っていくと、
「わしも無事だが、みんなも無事です。姫君、お妻姐御、それから三井鐘太郎藤原の吉秀うじも」
「なにッ」
　唖然と目をみはる雪太郎である。

消えた姫君

　そのころ――。
　曲崎将監は三ッ俣の中屋敷をたずね、ちょうど急を聞いて上屋敷から駆けつけていた諏訪頼母と、表書院で対決していた。
　将監は大胆にも一人だが、屋敷側は頼母のうしろに弥一郎と松江が同席している。
「御家老、困ったことになりましたな」
　あいさつがすむと、将監は至極あっさりと切り出したのである。
　頼母はうかつに口がきけない。策の多い将監

のことだから、おそらく露姫を手に入れて、脅迫にきたのだとわかってはいるが、それだけにこの応対は難しいのである。

「実は、夕刻、露姫さまが美代一人をつれて、突然分家の下屋敷へまいられたのです」

「なにしにまいられたのかな」

やっぱりそうだったのかと、頼母は絶望しながらも、色には出さず、冷淡に聞く。

「だんだんお聞きしてみると、姫君はこんどのお国入りはいやだというお気持ちのようです。と申すのは、姫君は又一郎君がすでに亡くなられていることを、だれからかお耳にしておられる。それを御家老がかくして国入りをさせようというのは、自分を人形あつかいにしていることだ。これがまず気に入らぬと仰せられるのです」

「それで、どうせよといわれるのかな」

頼母はもう一度冷淡に突っぱねてみる。

「国もとへは、身がわりをやればすむ。ご自分は行きたくないと、すねておいでになります」

さも当惑したように将監はいう。

「なんでまたさようなことを、分家へなどまいられて申すのかな。そのようなことは、分家へ申し入れてもなんにもならん話だが」

「おっしゃるとおりで、手前も当惑しています」

こんどは将監が冷淡に出てきた。

「分家は当家の立場をよく存じているはず、一応おなだめして、おつれしてくれればよかったにな」

「それは手前も如才なく、そうおすすめしてみました。姫君はどうしても御承知がない。よくよく問いただしてみますと、姫君は大学さまをのぞんでおられるようです。これは手前も少々意外でした」

ぬけぬけと切り出すのを聞いて、

「たわけたことを——」

頼母は思わず吐き出すような言葉が出る。

「そのとおりです。できることではない。しかし、そういう下心がおありになるから、姫君としては分家をたよられたので、それができないことなら、このままお里方へもどりたいと、いちずにお覚悟のようです」

「やむをえぬことだ。たって分家の夫人になおりたいというおぼしめしなら、一度お里方へもどられて、改めて分家へお輿入れいたすほかはあるまい」

大学を当主になおせば、その形式は取らずに、先夫人から現夫人になおることができる。頼母はそれを百も承知で、あくまでも突っぱねて出た。

「そうですなあ。やはり一度お里方へおもどり願うほかはございますまいな。立ち帰ってそのように申し上げ、とにかくお里方へお送りいたしますかな」

将監はその上を行く白々しい顔つきだ。

「将監、御分家さまは郡山十万石を断絶させる気でいられるのか」

言葉はおだやかだが、頼母の声音に悲痛なひびきはかくしきれない。

同席する弥一郎も松江も、その責任は自分たちにあるので、じっとくちびるをかみしめたまま顔をあげていられなかった。

「これは御家老のお言葉とも思えぬ。御本家あっての分家、なんでさようなことを考えましょう。お家の安泰を願う心は、御本家も分家も少しも変わりはございません」

将監もしゃっきりと正面を切った。

「しからば申し聞かせるが、この度又一郎君国もとにて突然の御逝去は、お跡目のないうちゆえ、公儀に知れれば当然家名断絶のほかはない。それゆえ、策をろうして、姫君にはおいたわしくは存ずるが、あくまで又一郎君の御看護のためお国入りを願い、その間に御舎弟順之助さまをお跡目として公許を請い、しかる後に喪を発する。程経て露姫さまには逆縁をおねがいして、順之助さまの夫人になおっていただく、これ以

外にお家安泰を計る道はないのだ。それでなくとも、お代替わりには公儀の目が光っている。どこに一つ落ち度があっても、家名断絶はまぬがれぬ。才人といわれているその方が、これしきのこと存じておらぬはずはあるまい」

　切々として説き聞かせる頼母だ。そのためになら将監の前へ両手をついてもいい、そういう苦衷がはっきりと顔色に出ている。

「御家老、露姫さまは大学さまを望まれております。その望みさえかなえば、この度のお国入りをなんでもいやだとは申しておりませぬ。ここは姫君のお胸の中を考慮に入れ、この度は大学さまをお跡目になおし、次に順之助さまに御家督をゆずる、これでも道は立つと存じますが」

　将監はいよいよ切り札を出してきた。

「将監、露姫さまは本当に大学さまを望まれていられるのか」

　弥一郎は思わずなじらずにはいられない。

「そうです。それでなければ、わざわざ分家へ身をよせられるはずもないでしょう」

　ちゃんと人質を握っているのだから、将監は気が強い。

「順之助君がおられるのに、大学さま御家督は、順からいっても一藩が納得すまい」

「しかし、家来どもの都合で、まるっきり露姫さまのお心を踏みにじってしまうわけにもいかないのではありませんか。露姫さまのうしろには明石家がついておりますからな」

　そうはっきりと出られると、それは露姫の本心ではないとわかってはいても、本人を敵にとられている弱みで、頼母には強く押しかえす手がないのだ。

「将監、姫君の江戸御出立は十四日と、公儀にも届け出てあるのだぞ。明日は築地のお里方へお別れの日、御出立の十四日は明々日だぞ」

　その日取りに一つでも間違いがあれば、そこからどんな不祥事がわいてくるかわからないのである。

「それは姫君もよく存じておいでになります。さればこそ、今日分家へお身をよせられてきたのでございましょう」

　折れて出るなら今のうちだと、将監は逆手を取ってきた。

「将監、ともかくもわしを一度、露姫さまの御前へ案内してくれぬか。姫君の申し分もよくおうかがいしてみたい」

　頼母は虫を殺して、あくまでも下手から出てみる。

「露姫さまが御承知あそばすかどうか。――しかし、案内はできませぬと申し上げては、将監が仲に立って事をかまえているように取られましても迷惑。こういたしてはいかがでしょうな」

　将監はなにか思いついたように、ゆっくりと言葉を切ってから、

「露姫さまお国入りの儀は、どうあっても納得していただかぬと困ることです。これは手前からたってお願いしてみます。そこで、明々日十四日の朝、御当家から姫君の行列を出していただき、手前のほうはおしのびで品川の宿まで露姫さまをおつれいたします。御家老さまはお見送りということにして、品川で御対面願いましょう。それまでにこちらの意見をまとめておいていただいて、お旅立ちの姫君のはなむけとする。いかがなものでございましょうな」

　と、それとなくすごい匕首を突きつけてきた。

「その節、そちの、いや、姫君の望まれるはなむけが差しあげられぬ時は、どうなる」

　しかし、これは聞くだけ野暮だった。

「その節は、万事露姫さまのお心におまかせするほかはないでしょう」

　将監は冷たく言い切る。

「明日の築地へのごあいさつはどうする気だな」

「それも御家老の胸三寸ということになりましょうか」

こう負い目になってきては、もう口をきくだけむだである。
「よし、よくわかった。いずれ明朝までに返事をしよう。今夜はこれで引き取ってくれ」
「承知いたしました。それでは、これにて失礼いたします」
「弥一郎、――松江」
見送りをせよと、頼母が目でいいつける。
「はい」
悔しいが、礼だけはつくしておかぬと、どんなしっぺ返しがくるかわからないのだ。
表玄関まできた将監は、
「お見送り御苦労でした。御家老によろしく――」
如才なく二人にあいさつをして、式台に横づけになっている駕籠に乗る。
供は中間二人、若党、士分一人ずつ、六尺を入れても六人という手軽なものである。たった一人で敵の屋敷へ乗りこんでくるくらいだから、大した度胸だ。
駕籠が門の外へ出るのを見とどけて、弥一郎は物をもいわずもとの座敷へ駆けこんできた。
「父上、裏門から出れば間にあいます。手前一人でたくさんだ。どうぞお許し願います」
「あわててはいかん。切るのはたやすいが、おそらく将監はその時の用意をちゃんとしてきているだろう」
頼母は暗い顔をして、
「それにな、わしが将監を討っても将監がわしを討っても、ここへきては家名が立たなくなるのだ。絶対に血を流してはいかん」
と、重い声音だった。
「父上、なんとか姫君を取りもどす手はないものでしょうか」
父の暗い顔色を見ていると、そのためになら自分の命をかけてもと、弥一郎は生きていることがつらくさえなってくる。
「いや、手のないことはない。最後まで闘ってみよう」
頼母は無造作に言ってから、
「松江――」
と、いま座にもどって悄然とそこへ座った松江に声をかけた。
「はい」
「わしはな、たしかに姫君さまを人形あつかいにした節はある。一藩の老職として、家が大切か、人が大切かといえば、人は犠牲にしても、家名はまもらなければならぬと考えるほかはない。それは、たとえわが身一つは殺しても、主家はまもらなければならぬという心から出ている。わかるな」
「はい」
「侍というものは、それでいいと考えていた。そうでなければならぬと考えていた」
「はい」
「しかし、そこにわしの考えのまだ至らぬところがあったようだ。犠牲ということは人に強いるものではないということを、ついうっかりしていたのだ。いまさらかえらぬ愚痴ではあるが、わしはもっと姫君の心の中へ飛びこんでいって、わしの苦衷というものを理解していただくべきであった」
「おじさま、まだおそくはないと存じます」
松江が必死の顔をあげる。
「そうか。教えてくれ、松江はどうすればよいと思うか」
頼母の顔に素直な微笑がうかぶ。
「さきほども申し上げましたように、松江は今夜四ツ、比良雪太郎さまにお目にかかることになっております。一度おじさまがお目にかかって、比良さまの胸の中へ飛びこんでみてくださいませ」
「うむ」
「比良さまは、おじさまがもしや姫君さまに不義の汚名をきせるようなことはないかと、それを心配していました」

「なにッ」
「そうなれば、池ノ端組もおじさまに不義不忠の名をきせるから、結局はどろ試合になると申していました」
「そうか。恐ろしい男だな、そこまで見ぬいていたか」
　頼母は寂しい苦笑をうかべながら、
「実は、一時はそれを考えた。不義の汚名をきせて、姫君に犠牲になっていただけば、人質の役には立たなくなるとな。が、それは手前勝手なひとりよがりだったことに気がついた。こっちが苦しい策をろうすれば、敵もその上の策をろうしてくるだろう。比良のいうとおり、結局はどろ試合に終わる。――よし、一度比良という男に会ってみよう」
　と、ようやく心が動いてきたようである。
「父上、念のためにおうかがいしておきますが、比良にもしこれはという決め手がなかった場合は――」
　比良にばかりたよっている父では心細いと、弥一郎は子として不安になってくる。
「決め手はわしにもある。お前にも松江にもあるはずだぞ」
　頼母はもう決心がついたように、わらいながらそんななぞのようなことをいう。
　そのころ――。
　三井は露姫とお妻を先に立てて、小名木川の南岸をやっと秋元但馬守の下屋敷の土塀のあたりにかかろうとしている。
　いま脱出してきた横川の下屋敷のほうを振りかえってみると、そのあたりの空が真っ赤になって、遠く近くものものしく半鐘が鳴り出している。
　ふだんはこの辺は夜になるとほとんど人通りのないところだが、半鐘が鳴り出してからは、二人三人と町の野次馬や、屋敷奉公の中間小者が、みんな火事場のほうへ駆け出していく。
　しかも、姫君とお妻のはだし姿に気がつくと、

例外なくびっくりして顔を見て通りすぎるのだ。
「姐御、もっといそげないもんかなあ」
　人目についてはならない落人なので、三井は気が気ではなく、その度にお妻をいそがせるほかはなかった。
「お露さま、駆け出すのはおいやですか」
　町へ出て姫君さまでは耳につきやすいので、わざとお露さまと呼び、手を取ってやっているお妻も、内心はらはらしているのだ。
　露姫は一向そんなことは気にしていないらしく、
「そのうち雪が追いついてきます。走るのはそれからにしましょう」
　と、一つ間違えば立ち止まって待ちますといい出しかねないように、うしろばかりふりかえっている。
「そんなにお待ちにならなくたって、お寺で待っていれば、若だんなはきっときてくれる約束になっているんですけれどね」
「露は菩提寺へ入るのは気がすすみません」
　そこで昨日は眠り薬をのまされている露姫なのだ。
「なるほど、――ごもっとも」
　うしろから三井がうめくようにいってうなずいた。
「でも、若だんなにはお寺だといってあるんですから、いまさらしようがないでしょう、三井さん」
「うむ。それに、一番近いし、ちょっと敵の気のつかない場所だし、かっこうだと思ったんだがねえ」
「三井、雪を待ちましょう。雪がいっしょなら、菩提寺でもかまいません」
　おっしゃるわ、姫君なんてこんなものなのかなあと、お妻はため息が出てしまった。
「しかし、お露さま、こんなところでぐずぐずしていると、いつまた敵が出てこないとはかぎ

りませんぞ」
　三井はちょいと脅してみる。
「ああ、お妻、美代やそなたのお浜は、無事に火をのがれたでしょうか」
　とうとう露姫は立ち止まってしまった。
「ごらん、あんなに空が赤くなっています」
「ごもっとも——」
　三井にはどうしようもなくなってきた。散々人を食ってきた三井だが、こんないじらしい姫君の本音にふれると、たわいもなくじいんと胸が熱くなってしまう。
「もうすぐそこがお寺なんですけどねえ」
　お妻も三井とおなじで、無理にも露姫の手を引っぱりかねてきた。
「見ろや、あれは火事場から逃げてきた人たちらしいぜ」
　野次馬がそんなことをいって、じろじろと女たちを見て行きすぎる。
　——なにが幸せになるかわからない。
　女たちの足袋はだしを、焼け出されて避難してきた者と野次馬どもが見てくれるのはありがたいと、三井は少し安心した。
が、いつまでもそこに立ってはいられないので、
「さあ、ともかくも出かけますかな」
と、うながした時、
「いたいた、あそこにいる」
　新高橋のほうから、意外にも早く雪太郎と堅田が追いついてきてくれた。
「ああ、雪——」
　それと見た露姫は、自分から飛び立つように雪太郎の前へ走り寄っていった。
「おお、お露さま」
　雪太郎がしっかりと両手で露姫の手を取る。
「この世で、この世でまた会えましたね、雪」
　露姫はおおらかに雪太郎の顔を見つめながら、にっこりと美しい笑顔になって、その目からすうっと大粒の涙があふれてくる。

「あなたさまも御無事でなによりです」
　雪太郎の顔にも、しみじみとした微笑がうかぶ。
「雪——」
　姫君はもう一度名を呼んで、おっとりと雪太郎の胸の中へ涙の顔を埋めていく。
　雪太郎は無言でその肩を静かに抱いた。
　まったくあたりに人目のあることなど忘れてしまっているような二人の姿だった。
　——いいところを見せるわ。
　お妻はあっけに取られて、そういう二人を絵のようにながめていた。お姫さまの恋なんて、なんというのろのろした悠長なもんだろうと思い、そのくせじいんと目頭を熱くさせられている。
　気がついてみると、三井と堅田は肩をならべて、黙って川の方を向いている。
　考えてみると、このほうがよっぽど立派だった。
　人のいろごとなど、あっけらかんとながめているのはバカげた話だし、あまりにも気がきかなすぎる。
「憎らしい。仲間外れにしなくたっていいじゃありませんか」
　お妻はいそいで三井と肩をならべていきながら、思わずその腕をつねっていた。
「痛い、邪慳にするなよ」
「いい月ねえ、三井さん」
「わしは火事をながめているんだ」
　なるほど、三井の目も、堅田の目も、赤い空を見ているようである。
「火事なんかながめて、どうするのさ」
「堅田うじが、お浜さんを忘れてきてしまったと、心配しているんだ」
　その心から出ているような重い声に、お妻はどきりとして、
「大丈夫よ、あの娘はそんな間抜けじゃありません」

意地になって言い切りながら、しかし、三井の腕をわしづかみにして、ひざがしらが急にがくがくしてきた。

「わしだけでも引きかえしてみようか。三井うじ」

「いや、行く必要があれば、わしが行く」

その三人のうしろから、

「三井――」

と、雪太郎が静かに呼んだ。

「なんです、若だんな」

三井がくるりとうしろを向いたので、お妻も堅田もそっちを向いた。

雪太郎が露姫とならんで立っていて、

「三井、お妻姐御、ありがとう」

と、まず二人に頭をさげた。

「いや、いちいちそんな礼をいわれては困る。そこで、どうするね、これから。予定どおり菩提寺へ入るか、それともほかに策があるか」

三井がさっそく切り出す。

「菩提寺はまずいと思う。敵もあそこを一時の避難所にするに違いない」

「なるほど――。地の利からいってもそうなりそうですな。あぶない、あぶない」

「高橋際に船宿があったはずだ。我々は船にしよう」

「よろしい。では、船宿へ出発」

いつまでもここにぐずぐずはしていられないので、三井はお妻をうながして先に立つ。

「堅田うじ――」

雪太郎は露姫とならんで後につづきながら、如才なくしんがりをつとめてくれる堅田を呼んだ。

「なんですな、若だんな」

「貴公は玄蕃にも高柳にも顔を見られている。敵は必ず我々の長屋へ目をつけるに違いない。一足先へ帰って、千代どのをつれて、裏の桟橋で待っていてくれたまえ」

先から先へと、よく気のまわる雪太郎だった。

「なるほど、長屋は危険かもしれませんな」

「この上、妻女を人質にとられてはおもしろくない」

「そうですなあ」

堅田は納得したようである。

「雪、露は船でどこへ行くのです」

露姫はそっと雪太郎の手を取りながら聞いた。

「雪は今夜これから松江と会うことになっています。あなたさまの身のおきどころは、その時きまります」

雪太郎の声はなんとなく冷たい。

「では、露はまた中屋敷へもどるかもしれないのですね」

悲しげな露姫の声音だ。

「あなたさまは今日、無断で中屋敷を出られたのは、どんな事情がありましょうとも、お軽はずみのそしりはまぬがれません」

「もうしからないでください。ただ雪に会いたかったのです」

「しかるのではありません。あなたさまのお身に間違いのないようにと、心配しているのです」

「雪も、三井やお妻たちといっしょに、中屋敷へきてくれますか」

露姫がそんな無邪気なことを言い出す。

「雪は日かげ者ですから、表へは出られない体です」

「では、だめなのですね。また別れるのですね」

雪太郎は返事をしなかった。

露姫は黙って雪太郎の手を握りしめてくる。

月かげの道は、やがて高橋際の船宿に近い。

――あたしたちの前だから、あんなに冷淡なのかしら。

お妻には露姫が哀れでたまらなくなってくる。

「雪、一つだけ教えてください」

露姫が訴えるようにいう。

「どんなことです」

「あの、露はどうしてもお国入りをしなくてはいけませんか」
「たぶん、そういうことになるかと思います。たとえつらいことでも、そうしなければ多くの人が迷惑をする。路頭に迷うという場合は、しのべるだけしのんであげるのが人のつとめなのです」
露姫は黙ってしまった。
「若だんなときたら、無理ばっかりいうんだから」
お妻はわざとうしろを振り向かず、聞こえよがしにいう。
「そうかなあ。無理かなあ」
雪太郎は苦笑して、
「三井、わしたちはここで待っている。船をこっちへまわしてくれぬか」
と、どこかの下屋敷の前の桟橋（さんばし）のあたりへ立ち止まった。露姫の顔はなるべく人に見られないほうがいいと、用心したのだ。
「心得た。無論、屋根がいいでしょうな」
「うむ、屋根の方がいい」
「姐御（あねご）、行こう」
三井が気をきかせて、お妻の腕を引っぱる。
「ちょっと待って、三井さん」
お妻はくるりとこっちを向いて、
「若だんな、お露さまは今夜あいつらに、座敷牢（ざしきろう）へまで入れられているんですよ。少しはお露さまの身にもなって考えてあげなくちゃだめじゃありませんか」
と、食ってかかる。
「ありがとう。それはよくわかっているんだ」
「わかっているんなら、もっと親切にしておあげなさい」
お妻は一本決めつけておいて、
「さあ、行きましょう。三井うじと道行きじゃ張り合いがないけれど、しようがない」
と、きびすをかえして、船宿のほうへ歩き出す。

「若だんな、わしは船がくるまで残りますかな」
堅田が遠慮そうに聞く。
「いや、貴公のほうも急を要する。間違いがあっては取りかえしがつかぬ」
「では、お言葉に甘えて」
「それがいい。いそいでくれたまえ」
堅田はおじぎをして、三井たちの後を追っていった。
「雪、みんないい人たちですね」
露姫がそっとため息をつく。
「そうです。友達というものはありがたいものです」
「露も長屋というものに住んでみたい」
「お露さま、あなたさまがいまどんなに苦境に立っているか、雪はよく存じています。あなたさまのかげには、必ず雪がついているとお考えになって、勇気を出さなくてはいけません」
「本当ですか、雪」
「雪はうそはいいません」
「では、お国入りの時も、かげにいてくれますか」
「いつでも、どこにいても、お露さまが幸せになれるまでは、きっとかげからおまもりしています」
「うれしい、雪」
露姫は安心したように、胸の中へ顔を埋めてくる。
「寒くはありませんか、お露さま」
もう夜は冷え冷えとする。
あまりやさしい言葉をかけては、別れて後の姫君が余計つらい思いをすると慎んではいるが、お家の不祥事からこうして路頭に迷っているいじらしい姿を見ると、雪太郎はついいたわらずにはいられなくなってくる。
「雪がそばにいてくれれば安心です」
肩を抱かれている露姫は、夢のようにいいながら、
「なぜ、雪は黙って浪人をしたのです。築地に

いてくれれば、それだけでも安心していられましたのに」

と、思い出したようにうらめしげな顔になる。

「わしはたとえ浪人しても、お露さまのこと、お家のことは一日も忘れてはいません。ただ日かげにいるというだけのことです」

「露があんなことを言ったからですか」

「そうです。あの時以来、雪はなにもかもすてて、ひたすらお露さまのためにと考えているのです。それでいいのです」

「来世まで、どうしてもだめなのですね」

あきらめてはいるが、どうにもあきらめきれないものがある露姫のようだ。

「来世をのみ祈るということが、お露さまのためにも、わしのためにも一番しあわせなことなのです」

「それはよくわかっていますけど――」

露姫はちょっと口ごもりながら、

「雪、しからないでください。露はこんどお国入りが無事にすみましたら、築地へもどる心でいます」

と、きっぱり言い切るのである。

それはいけませんとは、雪太郎にもいい切れないことだった。どっちがしあわせかといえば、築地へもどったほうが露姫には安らかな一生かもしれないのである。

「お露さま、それはなすべきことを無事になしとげた上で、考えてみましょう。それからでもおそくはありません」

「雪がそういうなら、そうします」

無邪気な露姫は、もうなにもかも雪太郎にまかせる気でいるらしい。

船宿のほうから屋根船が一隻こぎくだってきて、すうっと目の前の桟橋（さんばし）へ寄せてきた。

「若だんな、お待たせいたした」

艫（とも）に立っている三井が、こっちを見あげて声をかける。

この辺は火事場からやや遠く、そう人は通ら

ないといっても、まるっきり人目がないわけではない。雪太郎は船を心待ちにしていたところだから、

「さあ、お露さま、早くあれへ」

と、露姫の手を取る。

「雪もいっしょに乗るのでしょう」

「いや、雪は陸（おか）を行きます。どこに敵の目が光っていないとはかぎりません。陸から船をまもっていきます」

「でも、もう一度会えますか」

急に悲しげな目になる露姫だった。

「わしはいつでもあなたさまのかげ身にそっていると、申し上げたではありませんか」

雪太郎はその耳もとへ、わざと強くいっておいて、先に桟橋をおりていく。その手にしっかりとつかまりながら、露姫の足もとはひどくあぶなげである。

「三井、たのむぞ」

雪太郎は露姫を船の上の三井に手わたしてやる。

「承知いたした」

「船は四ツまで新大橋の下流を流していてくれ。話がつき次第、岸から合図をする」

「よろしい」

「長屋の桟橋で、堅田夫婦をたのむよ」

「心得ている」

「船頭、もういい。船を出してくれ」

てきぱきと指図をして、船頭にそういいつけると、

「雪――」

露姫が悲しそうに呼ぶ。

「もう船房へお入りなさい。夜風は冷えます」

たしなめるように言い切る雪太郎だった。

「はい」

露姫は素直にうなずくほかはない。

「出しやす」

船頭が棹（さお）を一つ突っ張ると、船はゆらりと桟橋（さんばし）を離れた。

雪太郎はさっさと桟橋から往来へあがって歩き出す。そうして見せなければ、露姫はいつまでも船房へ入りたがらないだろう。

――甘い顔を見せてはならない。

露姫の気持ちは、去年と少しも変わっていないのだ。いや、あの分ではおそらく一生変わりそうもない。

本心をいえば、いじらしくてたまらない。

が、ここで間違いを起こしては、なんのために主家を去り、両親まで捨てて浪人したかわからなくなってしまう。

いってみれば、今夜思いがけなくも露姫の肩をこの胸の中へ抱くことのできたのは、皮肉な運命のいたずらであって、それに甘えてはならないのだ。あくまでも自分はかげの人として、露姫の前へ出てはならないのである。

そう思いながら、それとなく船のほうを見ると、姫君もあきらめて船房へ入ったか、艫に立っているのは三井だけだった。

そして、船は間もなく高橋の下をくぐりぬけていく。

――しかし、今夜お露さまをこっちへ取りもどせたのは、まったく天佑だった。

みんな三井と堅田の協力のおかげである。雪太郎は月の道を河岸と別れて、大工町へ入りながら、感謝せずにはいられなかった。

それにしても、敵は目的のためには平気で姫君を座敷牢へさえ押しこんでいる。場合によっては好色の大学の餌食にすることぐらい、むしろそれを一番手っ取り早い手段だと考えているかもしれない。

――諏訪党はお露さまをおまもりきれるだろうか。

雪太郎はそれが不安でたまらないのだ。

万一、諏訪党の力でおぼつかないとすれば、露姫をわたすことはできない。

その場合は、幸い、露姫は今夜、あの座敷牢で焼死したことにしてもいい口実があるのだか

ら、このまま築地へ送りこんでしまうほうが一番安全なのだ。

――今夜の諏訪党の出方一つで、こっちも考えなければならん。

雪太郎はそう覚悟をきめて、まず浪宅へ足を向けてみた。

堅田の家のあかりが消えているのは、夫婦してすでに桟橋へ出ていった後なのだろう。

雪太郎が浪宅へ寄って、足袋と草履を新しくはきかえ、路地から横町へ出てくると、ちょうど桟橋のほうから引きかえしてくる堅田にぱったりと出会った。

「やあ、若だんな」

「どうしたんだ、堅田うじ、貴公は船へ乗らなかったのか」

雪太郎はちょいと意外である。

「うむ。三井うじから若だんなは陸だと聞いたんで、それならわしも陸のほうがよかろうと思ってね」

「千代どのは――?」

「あれはともかくも三井うじにあずかってもらうことにした」

「そうか。とんだまきぞえをくわしてすまんな」

「そうそう、若だんなにこれをおかえししておいてくれと家内からあずかってきた。たしかにおわたし申す」

堅田はふところから重い金包みを出して、雪太郎にわたす。出がけに千代にあずけておいたものだ。

「これはまだ御家内にあずかっておいてもらったほうがよかったんだがねえ」

「その若だんなの気持ちはありがたいが、あれはたとえわしがいなくても、自分で身を立てることぐらいは承知している女なんだから、安心していただきたい」

にっこりとわらってみせる堅田だ。

「そうか。感謝する」

なまじいまさら余計なことをいうより、素直

に夫婦の志をうけておくべきだと雪太郎は考えたのだ。
「ところで、もうそろそろ新大橋へ出かけてもいい時刻になりはせんかな」
「実はそうしようと思っているところだ」
「わしはかげ供ということにしよう。そのほうがいいと思うが」
「そうだな。先方がなんと出てくるか、はじめはわし一人のほうがいいかもしれない。合図をするまでかげにいてもらおうか」
「心得た。じゃ、かまわず出かけてくれたまえ」
「よろしくたのむ」
　雪太郎はふらりと横町から表通りへ出た。
　これでこっちの段取りはすっかりできたのである。後は先方の出方一つで万事きまるのだ。
　やがて、万年橋をわたりながら、小名木川の川筋を見わたしたが、露姫の船はすでに大川へ出たらしく、どこにも見あたらなかった。
　万年橋をわたって少し行くと、左手が百六十間の新大橋である。四ツにはまだ少し早いようだが、人通りはもうほとんど絶えていた。
　雪太郎はからんと月のあかるい橋板をゆっくりとわたっていく。
　――今夜は、きっと出てくるだろう。
　そうは思うが、昨夜すっぽかしをくって、はかないおもいをさせられているだけに、なんとなく一抹の不安がないでもない。
　ふっと川下のほうを見わたすと、案外橋のすぐ下あたりに、屋根船が一隻こいでいる。ほかにそれらしい船は見あたらない。
　――一隻というのは目につきやすいな。
　そんなことも気になり出したが、これはいまさらどうしようもなかった。
　新大橋を三分の一ほどわたると、向こうから橋の上へ二つの人影があらわれて、こっちをみながら急に立ち止まったようだ。
　一人はお高祖頭巾をかぶった女、一人は男で、これも頭巾で顔をかくしている。

　――女は松江、男はたぶん弥一郎だろう。
　雪太郎は大股に二人のほうへ近づいていった。
「比良さま――」
　果たして、松江が声をかけながら、二足三足出迎えるようにする。
「松江さんか。橋の上は人目に立つ。向こうへわたってしまおう」
「はい、弥一郎さまにいっしょにきていただきました」
「比良うじ、弥一郎です。かぶり物のまま失礼」
　弥一郎がていねいに会釈をした。
「いや、用心するに越したことはありません」
　雪太郎を中にして、三人肩をならべて橋をわたり切り、左へ折れて、そこの橋たもとへ立ち止まった。
　ここは前に手摺があって、川からはかげになるが、こっちからは川も橋も道もよく見とおしがきく。人が近づいてくればすぐわかるから、絶対に立ち聞きされる心配はない。
　そこから五、六間離れた川っぷちに辻番小屋はあるが、これは油障子がしまっていて、中にあかりがともっているから、そう気にすることもあるまい。
「あの、さっそくでございますが、姫君さまの御様子、なにかわかりましてございましょうか」
　松江が待ちかねるように切り出した。
「わかりました」
「まあ、――どうなのでございましょう」
「正直に申し上げよう。姫君は三井と堅田の手で、無事に救い出してあります」
「なにッ、本当か、比良うじ」
「本当です。例の下屋敷は目下出火中です」
「まあ」
　弥一郎が松江をかきのけるようにして、いきなり雪太郎の腕をつかんできた。
　松江は信じきれないように目をみはっていたが、

「それが、それが本当でしたら、うれしい、あたくし」

と、たちまち涙があふれ出る。

「弥一郎さん、曲崎はひょっとすると、今夜、中屋敷をたずねたのではないかな」

雪太郎が改めて聞く。

「そのとおりなんだ。それを話す前に、比良うじ、ぜひ父に会ってくれぬか。これまでの不明をわびた上、今後ともあなた方の力が借りたいといっているんだが」

「よろしい、お目にかかろう。姫君をおわたしする前に、わしもうかがっておきたいことがある」

「御案内いたそう。——どうぞ」

弥一郎はすぐ先に立って歩き出す。

「比良さま、今夜こそあたくし、生きた空はありませんでした。こんなうれしいおたよりが聞けるなどと、まるで夢のようでございます」

肩をならべて歩きながら、松江はひとりごとのようにいって、心からため息をついている。

辻番小屋の前を通りぬけると、向こうの桟橋にいつの間にか屋根船が一隻ついている。

——はてな。

雪太郎がそれとなく川面を見わたすと、中流のやや下のほうにも、屋根船が一つゆっくりとこいでいる。

まさか三井がこんな岸へ船をつけるはずはないから、中流の船がそれだろうと見ていると、先に立つ弥一郎がその桟橋の前で立ち止まって、

「比良うじ、父はあれにおります」

と、あいさつをして、船のほうへおりていった。

中屋敷には間者の目があると見て、わざわざ船にしたのだろう。そのくらいの用心は当然だと雪太郎は思った。

「比良うじ、どうぞ」

船のほうから弥一郎が呼ぶ。

「松江さん、手をとろうか」

「いいえ、だいじょうぶでございますから」

「そう、あなたは娘一人で道中のできる人だった」

雪太郎はわらいながら、あたりに人目のないのをたしかめ、先に船へおりていった。

「どうぞ——」

弥一郎が船房の戸をあけてくれる。

「失礼いたす」

雪太郎は遠慮なく中へ入って、頼母に相対した。

初めて見る諏訪頼母は、五十をいくつか越した年輩で、それだけの貫禄はそなわっている人のようだが、さすがに今夜は心痛がかくしきれない暗い顔である。

「初めて御意を得ます。比良雪太郎です」

雪太郎はていねいにおじぎをする。

「この度はいろいろ御尽力かたじけない。諏訪頼母です」

「父上、比良うじは今夜、姫君さまを取りもどしてくれたそうです」

松江といっしょに船房の戸口近くに座った弥一郎が、早く父を安心させたかったのだろう、早口に告げた。

「なにッ、姫君を——」

頼母はさっと目を輝かしてから、

「比良うじ、かたじけない。感謝します」

本当にうれしかったらしく、みえをすてて、心からそこへ両手をついた。

「そのごあいさつでは恐れ入ります。どうぞお手をおあげください」

老人のそういう正直な姿を見ると、雪太郎も安心して、これなら裸でぶつかっていけると思った。

船はすでに岸放れして、艪にかわっている。艪を握っているのは中間の菊造のようだった。

「昨日といい、今日といい、一藩をあずかる老職として、まことに面目のない不明、不行き届

き、頼母赤面いたす」
「いや、わなをかけるほうが老獪すぎるのです。曲崎は今夜中屋敷へ押しかけたそうですな」
「憎いやつです。姫君は大学どのの夫人になおりたくて下屋敷へ身を寄せている。お跡目はまず大学さま、次に順之助君ときめてはどうかと、あからさまに脅迫して帰った。憎いが、人質を取られていては、なんともいたしようがない。当方としては、ほとんど手段につきていたところです」
頼母は今夜の将監との会見の顚末を、かくすところなくうちあける。
「曲崎は、明々日、品川の宿で勝負をしようというのですな」
「そのつもりでいるようだ」
頼母はうなずいてみせる。
「それでは、手前のほうの話を一通りお耳に入れておきましょう」
雪太郎はそう前置きをして、お妻お浜が曲崎に菊川橋の下屋敷へつれ去られたことから、今夜の高柳の果たし状を幸いに、わざとその手に乗って、三井、堅田と三人で虎穴へ飛びこみ、座敷牢に押しこめられていた露姫とお妻を、三井と堅田が運よく救い出した顚末をあらまし耳に入れた。
「すると、青島市郎太は姫君を座敷牢へ押しこめた。そこから火事が出たというのですな」
「そうです。火事が燃えあがったのは無論姫君が庭へ助け出されてからで、西の書院で乱闘中に火ばちが引っくりかえった。お妻は座敷をぬけ出す時、そこがぶすぶすと燃え出しているのを見て通ったということです」
「かたじけない。いずれにしても、あぶないところだった」
頼母はいまさらのように慄然たる面持ちである。
「おっしゃるとおり、まことにあぶないところでした。青島らが気がついて西の書院へ駆けつ

けた時は、すでに座敷牢へは近づけなかったでしょう。つまり、姫君は焼死してしまったことになります」
雪太郎の顔に、ちらっと微笑がうかぶ。
「なるほど――」
頼母にはその意味がすぐに通じたらしく、大きくうなずいた。
「比良うじ、姫君はいまどこにおられるのです。菩提寺ですか」
弥一郎は早くそれを聞いて安心したいらしい。
「いや、菩提寺へは、おそらく焼け出された下屋敷の連中が、今ごろ避難してきているでしょう」
「まいった。そのとおりだった」
今夜の弥一郎は、率直にかぶとをぬぐ。
「比良うじはなにか策を持っておられるようだ。今後のことについて、一応御意見がうかがいたいな」
頼母も用心して下手に出る。なにか条件があるなら、遠慮なく出してみてくれといっているようだ。
「誤解があるといけませんから、正直に申し上げておきます。比良雪太郎はもと明石藩に仕えていた者です」
「まあ」
松江が思わず目をみはって、
「では、では、比良さまは露姫さまを、いいえ、露姫さまは比良さまをよく御存じなのでございますね」
と、さすがに敏感である。
「よく存じています」
雪太郎は冷静にうなずいてみせながら、
「だから、松江さんの話を聞いて、わしが即座に命を投げ出す覚悟になったのは当然のことで、その点わしのことは心配しないでいただきたい。また、三井と堅田はわしの親友で、義のためにわしと行動を共にしている以外に、なん

の野心も欲もありません。願わくば露姫さまが一日も早くしあわせになれるようにと、そう考えているだけのことです」
と、誤解のないように、こっちの立場をあきらかにしておく。
「比良うじはなぜ明石家を浪人されましたな」
当然な質問が頼母の口から出た。
「それはただいまは申し上げかねます。ただし、主家へ顔向けのできぬことがあって、浪人させられた者ではありません。拙者一代かぎりは浪人と心に誓って、自分から身をひいた者です」
雪太郎としては、そう答えておくほかはない。
「なるほど。では、強いておうかがいはいたすまい。あなたの人柄を信頼いたそう。そこで、姫君の今後のことについて、御意見をうけたまわりたい」
頼母は改めて切り出す。
「姫君は明々日、どうしてもお国入りをしなければならん立場にあるようですな」
「当家としては、そうお願いすることが一番よろしいのです」
「若輩が失礼な申し分ですが、お国もとは赤柴党の勢力が大きいと聞いています。その勢力から姫君をまもる用意は、よろしいのでございましょうな」
頼母は答えない。答えられないのだろう。
無論、まもり切ってみせるといってしまえばそれまでだが、現に今夜これだけの失敗をしているのだから、到底断言しきれぬものがあるのだろう。
「比良うじ、国元へ姫君のお供をするのは我々です。我々はもちろん一命にかえても姫君をおまもりする覚悟をきめていますが、明石家にゆかりの深い比良うじにも、この際ぜひ御同行願いたい。どうでしょうな」
弥一郎がうまい発言をしてきた。
「拙者を信用してくれるなら、よろこんで同行いたそう」

「無論、信用します。天地神明に誓ってもよろしい。我々は一切の小我をすて、必ず比良うじの良識にしたがって行動することを誓います」
「弥一郎、よく申した。一切の行きがかりをすてて良識を師とする、今日はそれ以外にない。——どうであろうな、比良うじ」
頼母も雪太郎のひざを抱いてくる。
「では、一応愚存を申し上げてみましょう。姫君は今夜焼死したことにします。おそらく、敵は偽姫を仕立てて、明々日品川へ乗りこんでくる以外に手はありません。こっちは空の行列を仕立てて品川へ行く。ここで曲崎の条件ははねつけ、こっちに偽姫の用意のあることをほのめかして、品川を立ちます」
「なるほど——」
「後の策は、それからの敵の出ようを待って立てましょう。それまで絶対に敵の目にふれずに姫君をかくしておく場所は、高輪の明石の下屋敷を使うがよいと思います」
「すると、今夜にも明石家のほうへ一通り当方の事情を話しておかなくてはならんが」
ちょっと当惑そうな顔をする頼母だ。お家の恥辱は、できるだけ里方へは知らせたくないのだろう。
「いや、御家老にしても、弥一郎さんにしても、今夜みだりに動くとすぐ敵の目につきます。明明日まで姫君はきっと比良があずかりますから、明日築地へおことわりの使者を立てた折、お方さまだけに一通りの事情をそっとお耳に入れておけばよいと思います」
雪太郎は自分が是と信じる策を、ずばりと言ってのける。
翌日——。
曲崎将監は菩提寺の控え屋敷を一時避難所に借りうけて、不安な一夜をあかした。
昨夜、将監が三ツ俣の中屋敷を辞して、途中で菊川橋のあたりに火事のあるのを見かけ、駕籠をいそがせて現場へ駆けつけた時は、すでに

下屋敷中へ火がまわり、もうどう手のつけようもなかった。
　ちょうど一足先に池ノ端から着いた老女清野の駕籠も、新高橋まできて、そこに立ち往生をしている。
　お浜も美代たちといっしょに、青島市郎太にまもられて、そこに避難していたが、肝心の露姫とお妻の姿がない。
「市郎太、姫君はどこへ避難されたのか」
　将監は真っ先にそれを聞いた。
「御用人、残念ながら、姫君はたぶんあの火の中です」
　青島はあたりをはばかりながら、小声で答える。
「なにッ、逃げおくれたと申すのか」
　さすが将監は愕然とした。
「高柳のあほうが比良というやつを今夜屋敷うちへ呼びこみましてな、裏の外庭で果たし合いをやったのがそもそもこの間違いのもとになったのです」
　市郎太は事の顛末をあらまし告げて、自分たちが西の書院へ駆けつけた時は、もう手おくれで、座敷牢へ近づけなかったのだという。
「比良たちが二人を救い出して逃げた形跡はないか」
「到底不可能でしょう。わしが座敷牢へ駆けつけた時は、比良も堅田という男も、まだ庭で闘っていましたからな」
「もう一人の、三井とかいうやつもか」
「そやつは前から姿を消しています。おそらく、どこかで切り死にしているんでしょう。たとえ生きていたにもせよ、一人であの座敷牢は破れません。それに、火事が大事にいたるまでは、中木戸にも裏門口にも手くばりがあったのですから、女づれで外へは出られません」
　青島のいうとおりだとすると、姫君もお妻も座敷牢で焼死したと考えるほかはなくなってくる。

「そうか。おいたわしいが、やむをえないな」
　将監としては、事実焼死したのならまた手の打ちようもあるが、生きて外へ出られたとなると、万事休すことになる。
　とりあえず、ひそかに清野に耳打ちをして、お浜を露姫に仕立てさせ、顔にやけどをしたことにして白布でつつんで菩提寺へ避難させた。
　一方、花屋長兵衛を使って、比良たちの浪宅を調べさせたが、昨夜は一人も長屋へはもどってこなかったようである。
　三人が三人とも下屋敷で切り死にしたとは思えないが、彼らも長屋へ帰っては危険と見て、今のところいずれかへ姿をかくしているのだろう。
　また、昨夜はおそくなって、中屋敷から用人牧村源左衛門が避難所へ火事見舞いにきて、それとなく姫君の安否を聞いて帰った。
　今朝になって、中屋敷の間者からの報告によると、昨夜諏訪頼母は上屋敷へ帰り、弥一郎と松江はそれを途中まで送っていったが、やがてもどってきた。用人牧村が火事見舞いに出たのは、それからだったとわかった。
　ここにも無論、姫君の姿はないようだ。
　今朝、夜のあけるのを待って、火事場へ花長をやり、焼け跡を調べさせると、西の書院のあたりから焼死体が二つ出た。しかし、一つはたしかに女だったが、一つはどうも男のようだったという。
　昨夜こっちへ避難してきてから人員を調べてみると、腰元が二人、給人が一人不足している。これも逃げおくれて焼け死んだのではないかと心配していたが、出た死骸が女一人に男一人となると、その死骸はだれとだれなのか、まったく見当がつかなくなってくる。
「男はたぶん町田でしょう。彼に座敷牢の番をいいつけておいたのです」
　さすがに青島もまゆをひそめながらいった。
「すると、女のほうは――」

「無論、姫君です。町田は火事と知って、責任があるから牢口を破りに行った。どうにか牢口があいて、お妻だけはああいう女だから、夢中で火の中をくぐってのがれたが、姫君にはその気力がない。町田が気をもんではげましているうちに、いっしょに火にまかれてしまったんでしょう」

「腰元二人のほうは――」

「二人とも江戸の者ですから、混雑にまぎれて親もとか知人の家へ避難しています。お妻は比良たちがかくまっているんだと思います」

青島はなんでも女の焼死体を露姫ときめてしまいたいらしい。

それは違うだろうと反駁する証拠は、いまのところ将監にもなにもない。といって、その死骸を露姫だと断定できる証拠もないのだ。

無論、腰元二人の親もとへはすぐ人をたしかめに走らせてあるが、それが帰ってくる前に、三ノ俣の中屋敷から昨夜の用人牧村源左衛門が改めて姫君の見舞いに乗りこんできたという。

昨夜は取りこんでいるからといって、将監は会わずに玄関先から追いかえしている。中屋敷としても、姫君の無事な顔を見ないうちは安心できないのだろう。

すると、姫君の消息はまだ中屋敷へなにも入っていないと見ていい。ということは、姫君は焼死したという事実に、また一歩近づいたことになる。

「よし、会ってみるから、玄関わきへあげておけ」

将監は取り次ぎにそういいつけておいて、奥の間へ老女清野を呼びにやった。

「御用人さま、御用でございますか」

清野は静かに入ってきて、行儀正しく座につく。まだ三十前の、どっちかといえば冷たい面立ちで、御殿奉公が長いから才はじけて意地が強く、決して男などには負けていない根性っ骨を持っている。女好きの大学が主人を笠にたわむれかかって、ひどく腕をつねられ、手も足も出なかった、それ以来清野にだけは頭があがらないという逸話さえ持っている女だった。

その根性っ骨を見こんで、将監はいつか大望の味方に引き入れ、そのほうが安心だから、すでに有無をいわせぬ仲になっている。

「清野どの、また中屋敷から源左衛門が見舞いにきたそうだ」

用心深い将監は、二人きりの時でもめったになれなれしい顔は見せず、あくまでも清野を老女あつかいにしてどのづけに呼ぶ。いってみれば、その老獪ぶりにころりとまいってしまった清野なのだ。

「牧村さまにお会いになりますか」

清野はもうおよそ将監の胸の中を見ぬいているようだ。

「会ってみようと思う」

「結構でございます。もしお目通りを望むようでしたら、おつれくださいませ」

「うむ、勝負と出てみるほかはあるまい」

「少しも心配はございません。奥で姫君の秘密を知っているのは、あたくしと美代だけです」

「表ではわしと青島の二人きりだ」

「江戸を離れてしまいさえすれば、またなんとでもなりますから、今日と明日だけが勝負でございましょう」

「その覚悟でたのむ、いいな」

清野ははっきりとうなずいてみせて、

「あたくしの覚悟は、もうあの時からちゃんときまっています」

と、さすがに燃えるような目がかくしきれなくなる。

あの時とは、二十九で初めて女にされた時のことをいうのだろう。将監のは半分は手段のためのそれであったが、清野には女の一生をかけての誓いであった。だからこそ、善悪共にこの男のためにならと、いちずに思いつめている。

――あの女は怖い。

清野をかえして、牧村を待たせてある玄関わきの小座敷へ進みながら、将監は内心得意でもあった。
　半生を女ということを忘れたようにかたくなに生きぬいてきた清野が、一度もろさを見せてしまうと、その男のために命まですてて燃え狂ってくる。そのかわり、こっちの愛情に少しでも偽りが見えれば、たちまち悪鬼となって男を殺さずにはおかない。そういう激しいものを持っている清野のようだ。
　――まあいいだろう。のるかそるかの大ばくちを打っているおれだ。女に殺されるようなら、このばくち、とても勝ち味はない。
　今の将監はその大ばくちのほうが先で、女など道具にすぎなかった。じゃまになるようなら、清野でさえいつでも殺せるだけの冷酷さを持っているつもりである。
　その冷酷さを政治家の秘訣の一つだと自負している将監でもあった。

「これはこれは、お待たせいたした」
　源左衛門の前へ出ると将監は如才なく会釈をして下座についた。
「なんの――。お取りこみ中を、またおじゃまいたした」
　牧村用人はちゃんと麻裃を着用して、将監以上に如才がない。
「そう申せば、昨夜もわざわざおたずねくだされたのに、まことに失礼いたした。なにぶん、中屋敷からもどってみると、もう出火最中で、それ避難だ、人に間違いはなかったかと、若い者ではなに一つ用が足りませんのでな」
「お察し申す。御家老もな、とにかく姫君さまは御無事と申し上げると、たいそうおよろこびでな」
「たしか、姫君さまは今日、築地へお別れのあいさつにうかがう日でしたな」
「さようでござる。しかし、出火などあっては、そうもまいるまいと存じ、一応弥一郎どのがお

ことわりに出ました」
　源左衛門はそれとなくこっちの顔色を見ているようである。
「どうですな、御家老の腹はもうきまったようでござろうか」
　将監はぬけぬけと高飛車に出てみる。
「さあ、それがな、いよいよお立ちは明日と迫って、だいぶ考えこんでおられるようです」
　源左衛門は暗い顔をした。
「それがどうもわしには解せんのです。ここは姫君さまの切なるお心をくまれて、まず大学さま、次に順之助さまでも一向さしつかえない。年の順から申しても、むしろそのほうが自然だと思うのですが、御家老はどこに不満があるのでしょうな」
「御家老には御家老の苦労が、またいろいろとおありのようです。とにかく、一度姫君さまのごきげんをうかがいたいと存ずるが、いかがでござろうか」

「さようですな。正直に申し上げると、姫君さまは御家老をひどくきらっておられる。しかるから怖いと申されてな。源左衛門どのならそうおいといもなさるまい。せっかくですから、御案内いたしましょう」
　将監はさりげなく恩にきせる。
「かたじけない。まことにかたじけない。手前の儀は、ただ御無事のお姿さえ拝すれば、この上もないよろこびでござる」
「ごもっとも――。なまじ御都合をうかがって、ふきげんになられても本意ない。いきなりまいって、後はごきげん次第ということにいたそう」
　これなら偽姫に口をきかせないですむ。あらかじめそれだけの用心をしておいて、将監は気軽に立ち上がった。
「将監どのの御好意、立ちかえってよく御家老のお耳にも入れておきます」
　人のいい老源左衛門は、心から感謝しているようだ。

姫君は奥座敷に、清野と美代にかしずかれて、人形のように座っていた。
　源左衛門があっと目をみはったのは、顔の半分を白布でつつんで、その上から紫縮緬のお高祖頭巾をかぶっている。
「これはこれは姫君さま、源左衛門めにござります」
　源左衛門はおそるおそるそこへ平伏した。
「姫君さまには昨夜、お顔に少しやけどをなされました。明日のお旅立ちにさしつかえるほどではございませんが、見苦しいからと申され、——お傷を冷やして跡になっても困りますので、かように大事を取っております」
　清野がかわって説明する。
「それをうけたまわりまして、源左衛門安心つかまつりました。お大事をお取りあそばすに越したことはございませんが、もうお痛みはないのでございますか」
　姫君はじっと源左衛門を見つめながら、かむりを振ってみせる。
「それにしましても、おあぶないことでございましたな。——美代、そなたがおそばについていながら、なぜお身がわりをつとめなかったのじゃ」
「はい」
　美代は顔があげられないようである。
「牧村さま、そのおしかりは御無理でございましょう。火の粉と申すのは、人を選びませんもの。申さば、姫君さまの御災難ということになりましょうか」
　清野は軽くうけて微笑する。
「なんにせよ、おけがが軽くすみましたのは不幸中の幸い、源左衛門およろこび申し上げます。明日はいよいよお国もとへお旅立ちの日でござりますれば、十分お大切にあそばしますように、願わしく存じます」
　源左衛門は慎んでいいながら、なにか姫君の言葉を待っているようである。

　姫君は伏し目になって、ただうなずくばかりだ。
「おっしゃるとおり、姫君さまには今日は十分御休養が肝要かと存じます。牧村さま、わざわざのお見舞い、御苦労でございました。いずれ明日、品川にてまたお目にかかれるかと存じます」
　清野が姫君にかわって、もう引き取るようにといわぬばかりにいう。憎いほど取り澄ました冷たい顔である。
「お言葉で恐れ入ります。しからば失礼つかまつります」
　取りつく島がなかったか、源左衛門は早々に一礼して座を立った。
　玄関先まで見送った将監は、
「源左衛門どの、明日品川宿御到着は、午の刻がよろしゅうござろうな」
　と、押しつけるように聞く。
「結構でござる。立ちもどって御家老にもそう申しておきましょう」
　牧村老人は唯々諾々と答えて、
「将監どの、お造作をかけました」
　と、改めておじぎをして、よぼよぼしながら駕籠に乗った。
　——たぬきめ、ことによると見ぬいたな。
　ふっと将監はそんな気がして、待てよと思った。敵が偽姫を見ぬく、見ぬかぬは別として、こっちはその時の用意をしてかかるのが本当だったと気がついたのである。
　居間へもどると、清野と青島がきて待っていた。
「御用人、うまくいったようですな」
　青島がさっそく聞く。
「市郎太、牧村がこっちの偽姫を見ぬいて帰ったとすると、どうなるな」
　将監が微笑しながら反問する。
「では、見ぬいているといわれるんですか」
「いや、見ぬいていると見て、あらかじめ手を打っておくほうがよいのだ」

「なるほど――」
　青島はうなずいて、ちらっと清野の顔を見たが、清野は澄ましてひざに目をおとしている。
「偽姫と見ぬいたら、敵も偽姫をこしらえますかな。こんどのお国入りは、なにも本物でなくてもさしつかえないんですからな」
「うむ、さすがだな」
　将監は我が意を得たりというように感心してみせて、
「それで、こっちの打つ手は」
と、意見を求める。
「偽物と偽物なら、どっちがその偽物をけおとすかで、勝負はきまるでしょう」
「その勝負は、どこでどんな風にやるな」
「それは品川の結果を見てから、臨機応変の処置をとる。いずれは血戦と見て、その用意さえしておけばいいと思いますが」
「よかろう。そっちはその方にまかせるから、昨夜の失敗をくりかえさぬように、今から十分味方の人選をしておくことだ。軍規をみだした者やひきょう者は切る。そのくらいの覚悟でなければいかんな」
　将監はそれとなく青島を一本きめつけておく。
　市郎太が本堂を借りている浪人組たちのほうへ立っていった後で、将監はゆっくり清野のほうへ向いた。
「清野どの、なにか御用かな」
「はい」
　取り澄ましてはいるが、清野の目に二人きりになったという甘えがかくしきれない。
「姫君を美代一人にまかせておいていいかな」
「はい、あたくしがそばにばかりいると、かえって窮屈がります。たまには美代と二人きりにして、くつろがせておくほうがいいかと存じまして――」
「うむ、それもそうだな」
「あの娘はしっかり者ですから、十分恩にもき

せ、脅してもおきませんと、とんだことになりそうです。さっきも牧村の顔を、わざとまじまじと見ていました。早く偽物だとわかるようにと考えてしたことでございましょう」
　さすがに清野はこまかいところまでよく見ている。
「なるほど――。それで、清野どのの目から見て、牧村は姫君は偽物と見ぬいたろうか」
「あたくしもその心配がございましたから、こうして御相談にうかがっていたのでございます」
「そうか。わしにどんな知恵を貸してくれるな。遠慮なく教えてくれ」
　将監は心からたより切っているという微笑を見せることを忘れない。
　清野はするりと立ち上がって、次の間へ行き、廊下のふすまを細目にあけて人のいないのをたしかめてから、座敷へもどり、そこのふすまもしめきってしまう。
「御用人さま――」
　こんど座ったのは将監のひざの横で、そっと肩を投げてくる。
「どうした、清野」
「あたくしを、あたくしをこんな命がけにさせて」
「命がけはおなじこと、地獄まで共にと約束してある」
　将監の手が清野の肩をそっと抱いてやる。
「切ない、あたくし――。女は弱いもの」
　珍しく小娘のようなことを口にして、身をもんでいる。
「弱くはない。そちは男まさりだ。わしがたのみに思うは、そち一人だ」
「お上手なことを――」
「これこれ、年寄りをそうなぶってはいかん。ひがむぞ」
「もっと強く抱いて――。だれも見てはおりませぬ」

「こうか――」
　抱きよせた清野の顔は火のように燃えて、愛撫を待つように目をとじながら、
「もしもの時は、明日品川で、あたくし頼母を刺そうと覚悟しました」
　と、思いつめたことを言い出す。
「頼母を刺す――？」
「お浜にもそう申しつけておきました。清野の言いつけに背くと、その場で刺すと」
「うむ」
「しょせんは頼母を刺す以外に、二人の天下はまいりません」
　清野は口走るようにつぶやきながら、
「あたくしは、あたくしはかわいそうに、こんなに命がけ――」
　と、狂ったように胸へ顔を埋めてきた。

裏の裏

　翌日――。

　諏訪頼母は露姫国入りの行列を仕立てて、約束どおり午の刻少し前に品川本宿の本陣へ到着した。
　本陣の門前にはちゃんと郡山松平露姫様御休息所の関札がうってあって、すでに曲崎将監は偽姫をつれて先着しているようだ。
　姫君御見送りの名目で、乗馬で供をした頼母は、門内へ入って馬を供の者にあずけ、玄関先へ進んだ。頼母は、裃姿だが、それにしたがう弥一郎は旅支度で、打ち割り羽織、陣笠をかぶっている。
　駕籠で国もとまで姫君の供をする中老松江は、掻取り姿で駕籠をおり、弥一郎とならんで頼母にしたがう。
「諏訪頼母到着いたしたと、将監に取り次いでくれ」
　玄関まで出迎えに出た分家の家来青島市郎太に、そう申し入れると、
「御本家御家老さまには、御苦労に存じます。

将監すでにお待ちしておりますので、御案内つかまつりましょう」
　と、市郎太は人を食った面構えで会釈をした。
「さようか――。造作をかけるな」
　頼母は松江をつれて一足先にあがり、中間が弥一郎のわらじのひもをとくのを待って、市郎太の後から奥へ進んだ。
　今日の三人は、一昨日の夜の場合と立場が逆になっているので、足取りまですっかり落ち着いてはいるが、しかし一抹の不安がないでもない。あの晩、船で露姫や比良たちと別れたきり、大事を取って高輪の上屋敷とは一度も連絡をとっていないからだ。
　露姫をどこでこの行列へ加えるかは、今日ここへ比良から連絡をつけてくることになっているのである。
　ことに、昔かたぎの頼母としては、若い者たちの手前、口にこそ出さないが、
　――一介の素浪人をこんなに信用していいのだろうか。
　という不安が、理屈をぬきにして、ともすれば胸を重くしてくる。
　が、それも事ここに至っては、あくまでも比良を信用して、今日の勝負を闘うほかはない。
　座敷に通されて、案内役の市郎太が去ると入れちがいに、これも裃姿の将監が出てきて下座についた。
「御家老、お待ちしておりました。今日はわざわざのお見送り、御苦労に存じます」
　将監は丁重にあいさつをする。その態度のどこにもいつもと変わったところのないのはさすがである。
「将監、今日は道中日和で結構であるな」
「はい、この分では当分この天気もつづきましょう。――弥一郎どのも、松江どのも、この度は御苦労です」
　将監は例によって如才がない。
　弥一郎と松江は、軽く会釈をかえしただけだ

った。
「御家老、さっそくですが、姫君さまに御対面なさいますか」
それとなく探りを入れてくる将監だ。
「もうそれにも及ぶまいと思うが」
頼母はあっさり一蹴しながら、ひそかに将監の顔色を見すえる。
「姫君さまにお目通りのことはいらぬと申されるのですか」
将監は意外そうな顔をした。
「将監、お顔にやけどのある姫君なら、こちらにも用意がある」
わざと暗い顔をして、静かにいう頼母だった。
「なるほど――」
その顔をじいっと見かえしながら、
「姫君は用意できるから、大学さまの御家督はならぬと、御家老はいわれるのですな」
と、これも至極おだやかな声だ。
「大学さまの御家督は、一藩が望んでおらぬ」
「やけどの姫君について、明石家へはなんと申し訳いたしますな」
「その儀は姫君江戸へおかえりまで、まだ日のあること、あわてるにも及ぶまい」
「なるほど――」
将監はもう一度うなずいてみせてから、
「大学さま御家督は年の順から申しても至当のこと、一藩が望んでおらぬと御家老はいわれるが、手前のほうから申せば、大半はそれを望んでいると見ていい節があります。ここで水掛論はするにも及びませんが、手前は多くの支持があるゆえに大学さまをあくまで推していますので――再考願う余地はもうないでしょうかな」
と、不敵な念を押してきた。
再考しなければ偽姫の事実を明石家へあばくぞと、居直ってきたのである。
頼母としては、そんな脅迫にのる必要はない立場だから、

「将監、一昨夜の出火の責任はそちにあるのだ。そちこそ、もう一度反省してみてはどうか。家督の争いは、他家へ聞こえても見苦しいものだぞ」
と、軽くたしなめておく。
「よく相わかりました。この儀立ちかえって、主人大学さまにも必ず申し聞けましょう。それでは、これにて当方は引き取ることにいたします」
「帰るか。お分家さまにくれぐれも御配慮をたのんでおいてくれ」
「承知しました。姫君さま道中の御無事を、心から祈っております」
将監は丁重におじぎをして、案外あっさり座を立っていった。
「父上、案外おとなしく退散しましたな」
弥一郎はなんとなく無気味なものを感じずにはいられない。
「ここはおとなしく帰るほかはあるまい」
「おじさま、将監が打ってくる次の手はどんな手でございましょう」
松江も不安そうである。
「やけどの姫君のことさえ敵にさとられなければ、まず行列のほうは心配なかろう。こんど手を打ってくるとすれば、順之助君のほうかもしれぬ」
頼母はそう考えるほかはなかった。
「大丈夫でしょうかな、父上。若君に万一のことがあっては、こっちの道中が無事でも、ほとんど無意味なものになります」
若君毒殺という手に思い当たって、弥一郎はさっと顔色をかえた。
「いや、江戸のことはわしにまかせておきなさい。――それより、比良はまだ来ぬかな」
今の頼母はそのほうが気になる。
「約束を間違えるような比良さまではございませんから、もうなんとかたよりがあると思います」
その実、松江も気が気ではなかった。比良が

自分たちを裏切るなどとは絶対に考えられないが、ひょっとして姫君の身になにかあったのではないかと、そんな心配が起こってくるのだ。

　そういえば、一昨日の晩、大川の真ん中で船と船とを横づけにして姫君に対面した時、ひどく疲れたような顔をしていた。思いもかけない目にあって、あやうい死地を足袋はだしでのがれてきたというのだから、精神的にも肉体的にも大きな打撃をうけていたのだろう。

「姫君さま、どこか御気分がお悪いのではございませんか」

　ことに夜の川風は冷えるので、思わず舷（ふなべり）へにじり寄っていって聞くと、

「いいえ、なんともありません」

　露姫ははにかむように微笑してから、

「松江、そなたに心配をかけてすみませぬ」

　と、さすがに自分でもこんどの軽はずみを後悔しているらしく、つと舷へ寄ってきて、しっかりとこっちの手を握り、涙ぐんでさえいた。

「いいえ。ただ、御無事な、御無事なお顔を拝して、松江は、松江は――」

　胸がせまって、松江はそのいじらしい手をしみじみと握りかえしながら、人前もなく涙にくれてしまったが、その時の露姫の手の冷たさが、今でもはっきりと心に残っている。

　しかも、あの時は、双方に知らない顔が多かったから、つい御対面が長びき、自分でさえ川風が身にしみたので、

　――お風邪を召さなければいいが。

　と、後で心配になったほどである。

「それにしてもおそいようですな。父上、高輪（たかなわ）へだれか走らせてみましょうか」

　どっちかといえば気の短い弥一郎は、とうとうじりじりしてきたようだ。

　もう日がだいぶ短くなっているので、今夜の泊まりはここから二里半、川崎の宿ときめてある。多少ここで手間取ってもいい時間をあらかじめ計算に入れてのことだったが、その時間の

ことより、弥一郎もやっぱり姫君の安否が気にかかるのだろう。

「いや、もう少し待ってみよう」

　頼母もなんとなく落ち着けないようだ。

「申しあげます」

　そこへ小侍がきて両手をついた。

「なにかな」

　やっとたよりがあったかと、松江はほっとしかけたが、

「ただいま玄関へ、分家さま老女清野どのが取り次ぎをもって、大学さま御名代にて姫君さまにお見送りのごあいさつが申し上げたいと、申し入れてまいりましたが、いかが計らいましょう」

　と、これはまた意外な取り次ぎであった。

「すると、清野はもう別室についているのか」

　頼母がまゆをひそめる。

「はい、そのようでございます」

　要するに、将監は清野に、こっちの姫君の首実検をさせようというのだろう。

「将監はまだ別室にいるのだな」

「帰るところを見かけませんから、まだいると思います」

「取り次ぎの者にな、名代のあいさつをうけるからと返事をして、清野がまいったらこれに案内しなさい」

「はっ」

　小侍はおじぎをしてさがっていく。

　頼母はとっさに腹をきめたようだ。

「憎いやつ、将監はこっちも偽物を立てると考えて、清野をさぐりによこそうというのでしょう」

　弥一郎が憤然とした顔になる。

「いや、ここは敵の手に乗ったと見せておくほうがよかろう」

　頼母はもうおだやかにいって、

「松江、ともかくも姫君をこしらえてきてくれぬか」

と、松江にいいつけた。

姫君の支度は一通り用意してきているから、供の腰元の一人を姫君にこしらえるのは造作もないが、高輪からまだなんの知らせもないだけに、松江は妙に不安である。

「おじさま、もし清野がたって姫君のかぶりものを取って見せてくれと申しましたら、どうなさいますの」

「その時はその時で、また考えようもある。姫君には無論一切口をきかぬようにと、かたくいいつけておきなさい」

「はい」

ともかくも松江は立って、腰元たちの控えの間へいそいだが、こっちの立場は受け身で、偽姫では押しとおせないだけ、どうしても不利なところがある。

松江が重い気持ちで、控えの間の前までくると、さっきの小侍が小走りに引きかえしてきて、

「あ、お中老さま。ただいま玄関へ駕籠がつきまして、高輪からまいった者だが、お中老松江さまに取り次いでくれと申しておりますが」

と、早口に告げた。

「まいってみましょう」

はっと胸を突かれたが、松江はさりげなく答えて、小侍の後から玄関へ出てみた。

男の乗り物が玄関式台に横づけになっていて、若党中間をしたがえた中年の侍が、そのそばに立っている。

「お待たせいたしました。わたくしが松江でございます」

「これはこれは――。手前は高輪から大切なおとどけ物にまいった者、どうぞおうけ取り願いたい」

「あの、失礼でございますが、比良さまからでございますか」

松江は念のために小声で聞いてみる。

「はい、比良が御前へまかり出るまでは、どんなことがあってもかぶり物をお取らせにならぬ

ようにとのことです」

「かしこまりました」

松江は駕籠の前へひざまずいて、静かにとびらをあける。

「姫君さま――」

目深にお高祖頭巾をかぶって、ほんの出ているのは目ばかりだが、それはたしかに待っていた露姫に違いない。

姫君は松江に手を取られて、駕籠から出るとすらりと式台へおり立った。

「では、手前はこれにて失礼いたす」

高輪の使者は名も名乗らず、空駕籠をうながして、さっさと玄関を離れていく。

「さ、姫君さま、これへ――」

松江は天にも昇る心地で、取りあえず露姫を腰元たちの控えの間へ案内した。事のいきさつを一通り耳へ入れておかなくては、いきなり座敷へつれていくわけにはいかないのである。

「まあ、お姫さま」

四人の腰元たちもびっくりして露姫を迎え、さっそく着座の褥を正面になおす。

「姫君さま、比良さまは後からお越しになるのでございますか」

松江はそっと聞いてみた。

姫君は黙ってかむりを振ってみせる。

おやと思ってその目を見ると、なにかひどく沈みこんだ目の色である。

「では、あの、比良さまのことは御存じないのですか」

こんどはうなずいてみせるのだ。

そういえば、今の高輪の使者は、比良がくるまでかぶり物は取らせないようにとことわっていた。

しかし、この目はたしかに露姫さまの目に違いない。では、どうして口をきいてくれないのだろう。

「あの、姫君さまは比良さまがくるまで、お口をきいてはいけないと、とめられているのでご

ざいますね」

姫君はうなずいてみせる。

「よくわかりました」

なあんだと、松江は思った。おそらく、道中はあくまでも偽姫で押しとおすようにという腹で、比良は姫君の口をとめたのだろう。

それにしても、自分だけぐらいには口をきいてくれてもいいのにと、あんまり正直に比良の言いつけをまもろうとする姫君が、ちょっとうらめしい気もしてくる。

が、考えてみると、油断は禁物なのだ。ここには自分のほかに腰元が四人いる。みんな気心は知れている者ばかりだが、この間の美代の例もあることだからと、松江は気を取りなおし、

「さっそくですが、姫君さま、ただいまお座敷へ分家の老女清野が、お見送りのあいさつにまいっております。あちらでは姫君さまはもうこの世にないものと思っているようでございますから、そのおつもりであいさつをおうけあそばして、やはりお口はおききにならないほうがよろしいかと存じます」

と、今の立場を話してみた。

露姫はまたしても黙ってうなずくだけである。

「では、お越しあそばしますように」

松江はそううながして、

「そなたたちもお供なさい」

と、腰元たちに言いつけた。

先に立って廊下へ出ると、姫君は黙ってついてくる。

廊下を歩きながら、松江はふっと変な気がしてきた。

お高祖頭巾の中の目はたしかに姫君の目だし、背かっこうも間違いなく露姫である。しかし、こんなにまでかたくなに黙っていられると、まだ一度もはっきりと素顔を見たわけではないのだから、ことによると比良雪太郎が姫君そっくりの娘をさがしてきて、それを露姫に仕立ててよこしたのではないかしら。

絶対にないとはいえないことなので、そんな疑心暗鬼さえおこってくるのだ。

清野はすでに座敷へきて、頼母たちと言葉をかわしながら、露姫の出座を待っていた。

「姫君さま、御出座にございます」

松江が廊下へひざまずいて声をかけると、一同一様にそこへ両手を仕えて、出迎えの形をとる。

姫君は松江に手を取られて、正面へ着座した。

腰元四人は頼母たちと向かいあった一方へならんで座る。

「清野さま、姫君さまには折り悪しくお顔に腫物(はれもの)がでまして、見苦しいからと仰せられ、かぶり物のままごあいさつをおうけあそばします。お見送りの御使者、御苦労に存じます」

と、松江があいさつする。このあいさつは、昨日老用人牧村が菩提寺(ぼだいじ)で、清野からうけてきたのと、ほぼおなじである。松江は老用人の報告をそばで聞いていて、ちゃんと耳にとめておいたのだ。

清野はまだ両手を仕えたまま、静かに顔だけあげる。かぶり物は覚悟してきたのだろうから、むしろ思うつぼだったに違いない。

ぶしつけと思われるほど、大胆に姫君を見あげて、頭巾の中の露姫の澄んだ目が、心なしかきびしくそっちを見かえしているのを見ると、一瞬清野の顔へ、はてなという狼狽(ろうばい)の色にも似たものがかすめ、

「これはこれは姫君さまにはごきげんうるわしくいらせられ、大慶至極に存じあげます」

と、もう一度おじぎして、

「この度はまた初のお国入りの御道中、なにとぞ御無事にわたらせられますようにと、分家大学より申しつかりまして、清野お見送りのごあいさつにまかり出ましてございます」

と、よどみなく口上をのべる。

「ごていねいなるごあいさつ、姫君さまにかわ

りまして、松江お礼を申し上げます。御分家さまによろしくお伝えくださいますように」

無言の姫君にかわって、すかさず松江が答える。

昨日源左衛門に自分がやったのとおなじ筆法なのだから、清野は内心苦笑するほかはなかったろう。

「お腫物だそうでございますが、道中にさしつかえはございませんのですか」

それとなく口をきかせようとかかってくる。

姫君は鷹揚にうなずいてみせた。

本物の姫君なら怒った目になるはずだ。

「お口の端の御腫物でございますか」

こんどはそんな皮肉を口にする。

露姫は冷たく清野を見すえながら、またしてもうなずいてみせる。

清野はあきらかに判断に迷っているらしい。

いや、清野ばかりではなかった。頼母も弥一郎も、さっきからそれとなく姫君の顔ばかり見ているのである。

「召しあがり物には、御不自由はありませんのでございますか」

こんどうなずけば、口だってきけるだろうということになるのだ。

「召しあがり物の時が、一番お困りのようでございます」

松江がかわって答えた。

「それではお旅は無理なのではございませんでしょうか。お大切なお体なのでございますから、御名代を立てるというわけにはいきませんものでしょうか」

清野は不敵にも頼母に挑戦していく。どうせ偽姫だろうといわぬばかりの皮肉なのだ。

「当世流は諸事お手軽に名代ですませることが多いようだな」

頼母は苦わらいをしながら軽くうけ流し、

「清野、御名代御苦労であった。分家さまによろしく申し上げておいてくれ」

もうさがるようにといわぬばかりのあいさつも、昨日のしっぺがえしである。

「はい、必ずありのままを申し聞けますでございます」

清野ももう引きあげ時と見たのだろう、そんな当てこするような返事をして、

「それでは、姫君さま、道中くれぐれもお大切にあそばしますように、――清野はこれにておいとまいたします」

と、もう一度姫君の顔をぶしつけに見あげた。

露姫の目は少しも動じた色を見せず、あくまでも冷たく清野を見すえながら、軽くうなずいてみせる。

いってみれば、こういう人を頭から見くだすような冷たい目は、生まれながらの姫君でなければできるものではない。

さすがの清野もなにか戸惑ったように、おじぎだけは丁重にして、搔取りさばきもあざやかに引き取っていく。

それを待ちかねるようにして、頼母と弥一郎が松江の顔を見た。

これは本当の姫君かと聞いているのである。

「さきほど、高輪からお駕籠にて玄関へおつきになりましたので、さっそくではございますが、すぐに御出座をお願いいたしました」

松江がありようを告げる。

「これはこれは、姫君にはようこそ御無事にて、――頼母この上のよろこびはございませぬ」

頼母はほっとしたように、改めて心から両手を仕える。

「弥一郎もこれにて、やっと安心つかまつりました」

姫君は例によって、黙ってうなずいてみせるだけだ。

「高輪のお使者は、いずれ比良さまがまいるでしょうから、それまでかぶり物はお取らせせぬように、姫君さまはお口もなるべくおききにならぬようにと、これは比良さまの御注意だった

ようでございます。——そうでございますね、姫君さま」

露姫はまたしてもうなずきながら、その目はさっきよりずっとやわらいで、はにかんでいるようにさえ見える。

「そうかそうか。道中はお窮屈でも、なるべくそのほうがいいのだ。それで、比良うじはここへ見えるのかな」

頼母が松江に聞く。

「お使者のことづてでは見えるはずなのでございますが、姫君さまも比良さまにはずっとお目にかかっておりませんそうでございます」

松江はつい姫君の顔を見てしまう。これだけは姫君の口から説明してもらわぬと、松江にはどう話しようもないのだ。

が、露姫は目を伏せたまま、やっぱり口をきいてくれようとはしない。

頼母はちょっと当惑したように弥一郎と顔を見あわせる。

「すると、姫君さまはあの船以来、比良うじには会っていないのでございますか」

弥一郎がたまりかねたように聞く。

姫君は相かわらずうなずいてみせるだけだった。

「比良うじが船で別れたきりだとしますと、だれが姫君さまを高輪へおつれいたしたのでございましょう」

弥一郎がかさねて露姫に聞く。

露姫は目を伏せたまま答えない。

口をきくなというのは、敵を欺く用心のための方便であるはずだ。こんな重大な問題まで返事をしてくれないのは、姫君もあまりにかたくなすぎる。弥一郎はなにかむかむかしてきて、

「比良うじも、少し無責任すぎるようですな」

と、つい父頼母に口をすべらせてしまった。

「いや、あの仁にはあの仁で、また深い考えがあるのだろう。もう少し待ってみるがいい」

そういう頼母も、なんとなく浮かない顔である。

——本当にこれは露姫さまだろうか。

松江はまたしてもそんな悲しい疑いをおこしながら、

「とにかく、お中食いたしましてはいかがでございましょうか」

と、取りなすようにすすめてみた。

「おお、そうであったな。では、そういたすように」

頼母の声がかりで、一同の前へ中食の膳が運ばれた。

露姫は黙念と伏し目になったまま、箸を取ろうともしない。もっとも、箸を取るにはお高祖頭巾を取らなくてはならない。

「気のつかぬことをいたしました。お膳部を別室へお運びいたしましょうか」

いそいで松江が聞いてみたが、姫君はかむりをふるだけだった。

「では、失礼して、一同箸を取るように」

弥一郎の声は妙にとがっている。

——ああ、そうか。菩提寺でのことがある。それで用心されているのかもしれぬ。

松江はなにかはっとして、それにしても別室の将監たちはどうしたのだろうと、急に気になってきた。

どうにも落ち着くことのできない気まずい中食である。

そこへ、さっきの小侍が廊下へきて、

「松江さまに、吉と申す者がお目にかかりたい、吉と申せばわかるからと、玄関へまいっていますが、いかがいたしましょう。下郎風の男でございます」

と、取り次いできた。

「吉というのですか」

松江はちょっと思いだせなかったが、いずれ比良からの使いだろうと考えたとたん、ああそうかと思い出した。

「庭先へまわしてください」

「はい」
「あの、分家さまの方々はどうしました。まだいますか」
「いいえ、つい先ほどお帰りになりました」
やっぱり、もどったとみえる。
「では、吉という者を、庭へ案内してください」
「かしこまりました」
小侍はいそいでさがっていく。
「松江、存じているものかな」
頼母の目を比良からの使いかと聞いているようである。
「はい」
松江ははっきりとうなずいてみせた。
「下郎をつれてまいりましてございます」
間もなく小侍が告げてきたので、松江が立って廊下へ出てみると、なるほど、紺看板をきた中間風の男が、座敷の前をさけて、下手のほうにひざまずいている。
近づいてみると、案の定、箱根峠からいっしょだったおしゃべり吉である。根が役者だけあって、中間風がぴたりと板についているから器用なものである。
「吉、久しぶりでしたね」
箱根の下りで一度林の中へつれこまれ、妙なまねをしようとしたので、逆手を取ってこらしめてやったことはあるが、それはほんの男の出来心で、さほどの悪人とも思えないから、比良にさえいわずにおいてやった。
こうして会えば、やはりそれだけの親しみはおぼえる男である。
「へえ、その節はどうもお世話になりやして――」
吉もなつかしそうにおじぎをする。
「なにか用ですか」
「さっそくでござんすが、若だんなからのおことづけを持ってまいりやしたんで」
「比良さまからですね」
「へえ」

吉はしきりにあたりを気にしているようだ。他聞をはばかるのだろう。
「もっとお寄りなさい。うかがいましょう」
松江は自分も縁先へ出て座った。
「ごめんなすって――」
吉もずっとひざを進め、
「若だんなは都合で川崎へまいる途中でお目にかかるそうでござんす。今し方、分家の行列はここを出て、川崎へ向かいやした。女乗り物が二丁、将監、市郎太がついている。念のためにお耳に入れておけとのことでござんす」
と、声をひそめながらすらすらという。
これは比良でなくてはいえないことだし、すると比良は近くへきていて、分家の行列の出ていくのを見ていたのだ。いや、分家の家来たちの帰るのを待っていて、連絡をつけてきたのだろう。
「行列は川崎へ向かったのですね」
「へえ、しかし、後にまだ間者の目が光っているかもしれない。姫君さまには一切召し上がりものはさしあげぬように、それから、召しあがっても安心の湯茶など御用意があるだろうか。なければこっちで用意して、途中でお駕籠へとどけますがということでござんす」
聞いているうちに、松江はかあっと体中が熱くなってきた。
こっちでは姫君の真偽にばかりこだわっていて、分家がいつ帰ったことさえ気にせずにいた。まして、本陣で作った膳部をそのまま姫君にすすめることは、たとえ毒味はさせるにしても、なんというらかつだったのだろう。恥ずかしくて顔から火の出るおもいだ。
「よくわかりました。召し上がり物のことは、念のためにそちらでおとどけくださるものにいたします。いずれお目にかかりまして、くわしく申し上げますが、分家の老女清野と申す者が姫君さまにごあいさつに出ましたと申し上げておいてください」

面目にかかわっている場合ではないから、松江はありのままを吉の耳に入れておく。
「では、お中老さま、失礼いたしやす」
吉はすぐに立ち上がろうとした。
「ああ、吉、そなたはこんど若だんなの御家来になったのですか」
松江が微笑を見せながら聞く。
「へえ、拾ってもらいやしたんで」
「ようございましたね。御苦労でした」
「ごめんなすって」
小腰をかがめながら、足取りも軽く表玄関のほうへまわっていく。
——あたくしたちの負けだった。
外にいる比良にいちいち指図をされて、それがみんなこっちの痛い急所を突いているのだ。大事は自分たちの藩のことだのに、よっぽどしっかりしないと、あの人たちにわらわれる。
松江はしゃっきりと立って、露姫のそばへもどってきた。
「姫君さま、あの方は途中でお目どおりするそうでございます」
そっと耳もとへささやくと、露姫の目が物問いたげにこっちを見てから、思いかえしたようにうなずいてみせる。
「どうであったな、松江」
頼母が待ちかねるように聞いた。
若い弥一郎の目には、まだおもしろからぬ色がはっきりと出ている。
——どうしてこう一本気なのかしら。
松江はなにか姉のような気持ちになりながら、
「間もなくお立ちになります。そなたたちはさがって支度をしますように」
と、腰元たちに命じた。
これからのことは、あまり人に聞かせたくない話だからである。
「はい」
腰元たち四人はおじぎをして、静かにさがっ

ていった。
「御家老さま、分家の行列は川崎へ向かったそうでございます」
「なにッ」
さすがに頼母が目をみはる。
「女乗り物が二丁、用人と市郎太がついてまいったそうです」
「うむ」
「菩提寺の例もあることですから、安心のできる湯茶の用意がなければ、こちらで用意しますと申しますので、念のためさようにお願いいたしますと、たのんでおきました」
「うむ」
頼母は深くうなずく。
「どこへ持参してくれるのかな」
弥一郎がはっと目をあげて聞く。
「途中でお駕籠の中へとどけていただけるそうです」
「たしかに安心の品なのだろうな」
「お毒味はあたくしがいたしますから」
やさしくたしなめるようにいうと、そうかというように弥一郎はうなずいて、多少気恥ずかしそうである。
「分家はなにをいたすつもりかな」
頼母はひどく不安そうである。
「弥一郎さまも、松江も、命がけでございます。おまかせくださいまして、お見送りくださいますよう」
ここで小田原評議をやっていてもしようがないのである。松江はきっぱりといって、
「弥一郎さま、もうお立ちの時刻でございます」
と、うながした。
「松江、では道中必ずたのみおくぞ」
姫君につづいて、玄関から駕籠に乗る時、頼母は感慨をこめてそっと念を押していた。
「おじさま、大丈夫でございます」
にっこりしてみせる松江だったが、それは事のなるならぬを誓ったわけではなく、失敗した

ら二度と生きてお目にかかりませんと、覚悟のほどを告げたのである。

江戸から和州郡山まで百三十四里、どうせ敵にねらわれていく道中になるだろうし、無事に国もとへ着いたにしても、そこには強敵赤柴刑部が待ちうけているのだ。事の成否は、今からだれにだって誓えるものではない。

「うむ、十分体に気をつけてな」

頼母の目に不憫なという思いやりの色がちらっとうかぶ。

「おじさまも、お体を大切にあそばして」

松江は会釈をして駕籠に乗った。

「お立ちい」

この度の道中奉行をつとめる物なれた加納庄兵衛が、先頭へ声をかけた。

先頭は制止の中間二人、次は挟箱四人、前衛の士十五人、露姫の駕籠、これに腰元四人が徒でつづき、次が中老松江の駕籠、後衛の士十人、しんがりが父頼母の名代として総指揮を取る諏訪弥一郎主従、その後に長持ち二棹と中間小者がつづく。総勢五十人ほどの行列だが、いざという時の戦闘員は弥一郎、庄兵衛を入れても二十七人ほどである。

――比良さまのほうの手配りはどうなっているのかしら。

分家の行列が先行しているとわかっているだけに、松江がたのみとするのは比良雪太郎一人だった。

行列はやがて南品川を出て浜川橋をわたり、鈴ガ森へかかってくる。

そこの浜辺の一本松の下に、よしず張りの掛け茶屋があって、表からはよしずの陰になって見えないが、海に面した奥の床几にさっきから旅支度の浪人者らしいのが二人、こいきな年増女を一人つれて休んでいた。

浪人者は三井鐘太郎と堅田雁之助、こいきな女はお妻である。

「あら、こんどこそ姫君さまの行列らしいわ。

一体、若だんなはどうしたんでしょうねえ」

よしず張りの前を長々と通っていく郡山の行列をながめながら、お妻が不平そうに小声で口走る。

「心配はいらんて――、そのうちにたよりがある」

三井は例によって憎らしいほど図太い面構えである。

この三人も、実は一昨日の夜、高輪の明石の下屋敷で別れたきり、雪太郎の顔を見ていないのだ。指図はすべて高輪の用人岡部重右衛門をとおしてきた。

「三井さん、若だんなはお姫さまが怖いんじゃないかしら」

お妻はどうもそんな気がするので、昨日も三井にそういってみた。

「怖い――?」

三井はちょっと変な顔をしたが、すぐに、

「ああ、そうか。若だんなは偉物だからな」

と、感心したようにいった。

「どうなんだ、それでお姫さまのごきげんは」

「それがねえ」

高輪での露姫の世話は一切、お妻と、堅田の妻女千代とがまかされていたのだ。

「そりゃお姫さまだって、若だんなを待ちかねているにきまってるじゃありませんか。お気の毒なほど沈みこんでしまって、あんまり口もききたくなさそうよ」

そう同情せずにはいられないお妻だった。

「まあ、そうだろうなあ。だから、若だんなはわざと顔を見せないんだ。もっとも、いそがしいこともいそがしいんだろう」

「なにがそんなにいそがしいのかしら」

「のんきだなあ、姐御は」

「おや、三井さん、妙なことを言いますね。どうしてあたしがのんきなんです」

お妻がたちまちきかない目つきになる。

「そうか、のんきといっちゃ悪かったかな。の

んきなのは、本当はおれ一人かもしれん」
「ごまかさないで、早くいってごらんなさいよ、のんきってわけを」
「若だんなはな、分家の様子をよくさぐっておかなくちゃならんし、いざ道中へ出たとなると、その責任はみんな自分の肩へかかってくる。正直なところ、郡山家のほうでたよりになるのは、松江さんだけだ。これが男なら若だんなもいい相談相手になるんだが、いくらしっかり者でも女では限度があるからな」
「じゃ、女はだめだっていうんですか」
「そう突っかかるなよ。そりゃ女でなくちゃならん仕事もある。が、行って帰ってひと月あまりの道中、悪知恵にかけては目から鼻へぬけるような曲崎を相手に、若だんなは姫君をまもりぬくために、一人で采配を振らなければならないんだ。たぶん、体がいくつあったって足りないだろう」
「そんなによくわかっているんなら、どうして三井さん手伝ってあげないのさ」
「これで、おれももう少し頭がいいとな、若だんなもほうっちゃおかないだろうが、おれは人足だけの役にしか立ちはせん。三井、川へ飛びこめ、へえ。それ、こんどは火の中だ、心得た。まあ、そのくらいの役にしか立たぬ。だから、若だんなのほうで、今のうちはこうしてゆっくり休ませておいてくれるのさ」
三井は負け惜しみでなくそんな冗談口をきいて、のんびりとわらっている。
「悔しいなあ。あたしも三井さんなみに見られているのかしら、若だんなから」
「なあに、姐御はあんまり知恵がありすぎるんで、若だんなも用心しているんだろう」
「ふん、さる知恵がね」
「あれえ、知っているのか、そんなことを」
「ぶん殴るぞ、三井柳原土手」
「なんだって」
「まちがえたわ。藤原の吉秀さんでしたっけね」

しょうがないから、口ではのんきなことをいって、昨日は一日すごしてしまったが、その実だれの気持ちも決してのんきではいられなかったのだ。
そして、今朝になっても肝心の雪太郎はついに姿を見せず、朝食がすむと、用人岡部重右衛門から申しわたしがあったのである。
「姫君の儀は手前が責任を持って、昼までに品川の本陣へお送りいたす。あなた方は旅支度をして、浜川橋の掛け茶屋で待っていてくれるように。――ただし、堅田うじの御新造はこの下屋敷で必ずおあずかりいたすことになりました。これが比良からのことづけで、比良は後刻浜川橋で方々と落ちあうそうです」
気の毒なのは千代だった。
「あの、あたくしは残るのでございましょうか」
と、いかにも悲しそうな顔だったが、
「うむ、お前はここで待っておれ、そう長い間のことではない」
堅田がきっぱりというと、もう貞女はかえす言葉がなかったらしく、
「はい」
と、うなだれてしまった。
「お千代さんは、江戸へ出てきてから、堅田さんと別々になるなんて、初めてなんでしょう」
お妻は同情せずにはいられない。
これが長屋へ帰って留守番をしろというのなら、あぶないのはいっしょに行ったっておなじじゃありませんかと、加勢もできるが、この下屋敷であずかってくれるというなら、一番安心なのである。
「御新造、まあ我慢なさい。比良もいろいろ考えてのことだろうし、たまには夫婦は別々になってみるのもまた味なものです」
三井がそんななぐさめ方をする。
「三井さんはまだおかみさんを持ったことがないんでしょう」
「ないな」

「それでよく夫婦別々の味なんてのがわかるんですね」
「わしはこれで、案外物のあわれということを心得ている男だ」
あっさりとぼけて澄ましてはいるが、三井にはどこかそういういいところのあるのが、お妻にもここへきてからわかりかけていた。
こうして、千代はついに留守番ときまり、三人は早々に旅支度をして、露姫の駕籠について高輪の下屋敷を出た。そして、姫君の駕籠が本陣の門へ入るのを見とどけ、そこを通り越してこの浜川橋の掛け茶屋へ入ったのである。
が、いまだに約束の比良は顔を出さない。
そのうちに露姫の行列は茶店の前を通りすぎてしまったようだ。
「どうするのさ、三井さん」
さすがにお妻はじりじりしてくる。
「まあ待て、そうせくことはない」
「秋の日は短いってのを知らないんですか、あんたは」
「日が短ければ夜は長い。姐御、さっき分家の行列が先へ行ったろう」
「それがどうしたんです」
「それで、若だんな、また急にいそがしくなったのかもしれん。なあ、堅田うじ」
「わしもいま、それを考えているところだ。あれが予定の行動なら、もう若だんなはここへくるはずだからな」
堅田の顔はひどく真剣になっているようである。
――じゃ、なにか手違いでもおこったのかしら。
お妻はどきりとして黙りこんでしまう。
「三井のだんな、今日は」
表から入ってきた旅支度の中間風の男が、ふらりと三井のそばへ立って、おじぎをした。
「やあ、おしゃべり吉じゃないか。どうしたんだ」

三井はきょとんと顔をながめている。
「まあ、変わった姿でどうしたの、吉つぁん」
お妻もびっくりして、吉松の中間姿を見まわす。
「姐御、あの節はお世話になりやした」
吉はお妻にも如才がない。
「吉、若だんなに会ったのか」
三井ははっと思いあたったようだ。
「お手の筋、恐れ入りやした」
「あら、どこで会ったの、若だんなに」
お妻の目がさっと光り出す。
「昨日の夕方、深川大工町と聞いていたんで、姐御のお宅をたずねたんでさ。江戸へ帰ってきても、あんまりぱっとしたこともない。なんだかばかに若だんなが恋しくなってしまって、きっと三井さんもいっしょだろうから、当分居候にころがりこもうかと、そんな虫のいいことを考えやしてね」
吉は頭をかいてみせる。
「お気の毒さまねえ。留守だったんでしょう、家は」
「がっかりしちまいやした。第一、腹がすいていて、もう動くのもいやになってしまって、ぼんやり軒下へ立っていると、ふらりと若だんなが帰ってきたんです。どうしたって聞かれた時は、あんまりうれしくて涙がこぼれそうになりやした。人間腹がすくと、からきしだらしがなくなるもんでしてね。三井さんはそんなことありやせんか」
「わしは腹がすくと、むやみに怒りたくなるほうだ」
「吉、若だんなからなにかことづけがあるんなら、そのほうを先にしたらどうなの」
お妻が気がついたように、声をとがらせる。
「ちげえねえ。若だんなは途中でいっしょになるから、行列から一、二町のところをついて歩いていてくれるようにってことです」
「そうか。じゃ、すぐ立とう。――堅田うじ、

これは若だんなとちょいと縁の深い中村吉松といってね、これでも役者なんだ」

三井がわらいながら、堅田に引きあわせる。

「わしは堅田雁之助と申す」

「お隣のだんなだそうですね。若だんなからうかがいやした。どうぞよろしくお願いいたします」

吉は行儀よくおじぎをした。

「堅田さん、この人の当たり芸は、御殿のねずみなんです」

そばからお妻がさっそく憎まれ口をきき出す。

茶代をおいて外へ出た三井と堅田は、すぐに深編み笠で顔をかくした。

お妻は手ぬぐいをあねさまかむりにして、吉松と後からつづく。

「家の前で若だんなにあって、それからどうしたの」

「まず飯屋へつれていってもらいやしてね、やっと人間らしくなってきやがった。そこで若だんながいうには、せっかくだが、わしは明日また旅に出なくちゃならない、留守番でもするかと、やっぱり若だんなは苦労人でさ。いいえ、ぜひお供しやす。しかし、命がけだぞ。あっしの命を、若だんな買っておくんなさい、金なんかいりやせんとたのんだら、そうか、それなら中間姿になって、明日の朝高輪の大木戸のところで待っておれと、つまりあっしはもう若だんなにこの命を売っちまったんでさ」

吉はなにかうれしそうである。

「じゃ、吉つぁんは今朝若だんなに会っているんだね」

お妻はせきこまずにはいられなかった。

「そりゃ会いやしたよ。会わなけりゃ用が足りやせんや」

「どこで会って、どんな用を足して、いま若だんなはどこにいるんだか、神妙に白状してごらんよ」

「さあいけねえ」

吉はちょいと困ったような顔をする。

「なにがいけないのさ」

「吉、おしゃべりだけは慎めと、若だんなからかたくとめられているんでさ」

「だって、それは敵に対しての用心で、あたしたちはみんな仲間同士じゃないか。仲間同士にかくしごとがあるのは、おもしろくないじゃないか」

「なるほど、それも理屈だな」

「そんなにもったいをつけないで、早く話してごらんよ」

「じゃ、ここだけの話ですぜ」

吉は急にあたりを見まわす。やがて鈴ガ森を出外れようとして、前を歩いているのは深編み笠の三井と堅田の二人だし、別にだれも後からつけているような様子はない。

「姐御、二度いうと風邪を引くっていうから、一度しかいわねえよ」

「結構さ、あたしはまだ耳が遠くなるような年じゃありませんからね」

「分家の行列が本陣を立つとすぐ、あっしは若だんなの言いつけで、本陣に行ったんだ。箱根のお嫁のお中老さまに会いにね」

「松江さんだね。その用ってのはなんだったんだえ」

「敵は川崎へ向かった。けど、お寺でのことがあるから、お姫さまには湯茶一つあげてはいけない。そっちに安心のできる湯茶の用意があるかって聞きやすとね、お中老さまの顔色が変わりやがった」

「ふうむ。じゃ、用意がなかったんだね」

「若だんなはやっぱり大したもんでさ。それから、かまわずここは出発してくれるように、若だんなは途中でお目にかかりますと、これであっしの用はすんだ。出てきてだんなに、行ってきやしたというと、この次は浜川橋の休み茶屋へ行けと言いつけられました。それから先は御

存じのとおりなんで」
「それで、いま若だんなはどこにいるのさ」
「分家の行列を追っていやす」
「まあ」
お妻は啞然とした。それが本当なら、こっちはちゃんとあの掛け茶屋で分家の行列を見送っていたのだから、比良の姿も見かけているはずなのである。
「三井さん、あんた若だんなの姿を見かけなかったんですか」
思わずお妻は三井に肩をならべていく。
「うっかりしていたなあ、堅田うじはどうだった」
「わしも気がつかなかった」
堅田は三井をお妻にゆずって、うしろの吉と肩をならべ、
「吉松うじ、若だんなは姿をかえているのかね」
と、小声で聞く。
吉松は黙ってうなずいてみせる。そこをひょいとお妻がふりかえってみて、
「吉、なぜ早くそれを言わなかったんだよう」
と、悔しがる。
露姫の行列はやがて大森を出外れて、畑道へかかってきた。
地形の起伏はあるが、この辺はずっと見とおしがきくので、伏兵の心配はまあない。
——しかし、将監はなんの目的で偽姫などをつれて先行しているのだろう。
しんがりを守っていく弥一郎は、しきりにそれが気になる。なにかたくらむところがなければ、品川からおとなしく引きあげるはずなのだ。
そして、なにかたくらむとすれば、どこかに伏勢を用意して、こっちの行列を攪乱し、姫君の駕籠を奪う、まずそれだろうと考えられるが、すると清野はさっきこっちの姫君を本物と見ぬいたのだろうか。
——そんなはずはない。
正直にいえば、自分たちでさえまだ姫君の真

偽は疑っているくらいなのだ。
では、偽姫を奪ってどうしようという気なのか。
弥一郎にはどうにも見当がつかない。強いて想像すれば、敵の目的は姫君の駕籠ではなくて、松江か自分をねらっているのかもしれない。これなら、どっちを手に入れても、父頼母を脅迫する種にはなる。
——いずれにせよ、比良さえきてくれれば、なにか様子がわかるはずなんだが。
弥一郎も今はただ比良雪太郎一人が心のたのみだった。
が、その比良はいつまでたっても姿を見せず、行列はついに六郷の渡しへかかってきた。
今夜の泊まりは川崎の宿で、この渡しをわたればもうその川崎である。
——また一杯食わされたか。
途中伏勢のなかったのはまだしもだったが、心だのみにしていただけに、弥一郎は比良の再三の違約が腹にすえかねてくる。
しかし、こんどの場合は、小賢しくも自分から、姫君の湯茶は安心なものを途中でとどけるからと、ちゃんと松江に言ってきているのだ。
それがとどかなかったとなると、姫君は朝から湯茶一つのどへとおさなかったことになる。なんとおわびしていいか、それもあるし、
「もう絶対に信用できぬ」
と、考えれば考えるほど、弥一郎は忿懣にたえなくなってくる。
しかし、ただ腹を立ててばかりはいられない弥一郎なのだ。
比良が当てにならぬとなると、一切の責任は名実共に自分の双肩にかかってくる。
六郷の渡しは幸い物なれた加納庄兵衛がついているので、手順よく川崎へわたることができた。
すると、そこに、すでに川崎の本陣へ先乗りをして、姫君の行列を迎えるはずの石沢半之助、

住田三五郎の二人が待ちかまえていて、
「お供頭、一大事でござる」
「今夜の御宿泊本陣へは、さきほど分家の行列が露姫さまお着きと称して、無理に奥へ通ってしまいました」
と、顔色を変えながら報告した。
「バカなことをいわっしゃい。お手前方はそのために先乗りをしていながら、なんで分家にそんなまねをさせたか」
庄兵衛も事の意外にさっと色をなしながら、二人をしかりつける。
「それは、手前どもも、ここは今夜露姫さまの御宿泊所になっているのですから、なにかの間違いではございませんかと、何度も念を押したのですが、間違いではない、本家からのたのみによって露姫さまのお駕籠を守護してまいったのだ。その辺の事情はその方たちも江戸屋敷出立の折もれ聞いているはずだと、曲崎さまはおっしゃるのです」
先乗りの二人は、行列が三ツ俣（みまた）の屋敷を出る時、空駕籠であったのを承知しているだけに、曲崎にそう出られると、強くは言いかえせなかったのだろう。
——憎いやつ。
将監はそんな手を打つ気だったのかと、弥一郎が供先のほうへ進み出ようとした時、
「弥一郎どの」
ふっとうしろから小声に呼びとめる者がある。
見ると、意外にも、中間姿はしているが、たしかに比良雪太郎だ。
「おお、貴公は——」
「比良です。かまわず行列を本陣へ乗りこませていただきたい」
「承知した」
いつの間に比良はきていたのだろうと、唖然（あぜん）とはしたが、それとわかると急に安心もして、
「庄兵衛、かまわず行列を本陣へ進めなさい」

と、きおいこんで命じていた。
「はっ。——お立ちい」
加納庄兵衛がきびしく触れて、行列はすでに立つばかりになって河原へ隊伍（たいご）を組んでいるのだから、先頭からしずかに進み出す。
「弥一郎さま、よろしゅうございますな」
庄兵衛が覚悟をうながすようにいって、
「うむ、堂々とやってくれ」
弥一郎がうなずいてみせると、一礼して、石沢、住田の二人をしたがえ、先頭へ走っていった。
警固の士も事態容易ならずと見て、みんな緊張しながら弥一郎に目礼をして通る。
河原はいま秋の日が落ちたばかりで、赤く夕焼けていた。
やがて、しんがりがきたので弥一郎は持ち場へ入りながら、一足後からついてくる比良に、
「貴公、いつから行列にいたのだ」
と、聞いてみた。
「大森からです」
「かまわぬ、肩をならべてくれ」
「はい」
「姫君さまの湯茶をとどけてくれるはずだったが」
思わず皮肉が口に出る。
「それはもうおとどけしてあります」
「なにッ、——本当かね」
「品川の本陣を立つ前に、湯茶はひさごにつめ、握り飯の包みといっしょにお駕籠に入れておきました」
「ふうむ」
弥一郎は全くあきれざるをえない。
「よくだれにも見とがめられなかったな」
「いや、光吉も菊造もわしの仲間ですから」
雪太郎はわらっている。
「なるほど。——貴公は怖い男だ」
若党光吉、中間菊造の二人は、菩提寺（ぼだいじ）の事件以来雪太郎といっしょに働いているのだから、こ

の男の言いなりに手足になるのは当然だった。
「比良うじ、分家は本陣を占領してどうするつもりだろう」
弥一郎は雪太郎の意見を求めてみる。
「品川で清野がお見送りのあいさつに出たそうですな」
「あれは相当な雌ぎつねのようだ。こっちを本物と見ぬいたのかな」
「いや、半信半疑だから、ぜひそれを見きわめる必要があるんでしょう」
「なるほど」
「偽物と偽物なら、先着しておいてこっちをけおとす。本物とわかれば、また別な手を用意する。曲崎は今日、大森に高柳を大将とする浪人組を待機させておいて、これが分家の行列といっしょに川崎へ入ったはずです」
「すると、どうしても姫君に頭巾を取っていただかなくてはならぬことになりそうだな」
「そのために分家は川崎へ先行したと見るべきでしょう」
「抜け目のない手を打つ」
弥一郎は駕籠の中の姫君の真偽を一言比良にたしかめて安心したかったが、さすがにそれだけは口に出しきれなかった。
行列の先頭は、やがて大和郡山松平露姫様御宿泊所と関札を打った本陣の門前にかかって、
「松平露姫さま、お着きい」
と、触れ声をかけさせながら、堂々と玄関へ進んでいった。案の定、青島市郎太が若侍数人をしたがえて、ばらばらっと玄関へ躍り出し、
「控えろ、その方どもは何者か」
と、突っ立ったまま誰何する。
「黙らっしゃい。これは和州郡山松平露姫さまの行列なるぞ。青島市郎太、無礼であろう」
玄関先へ進んだ供頭加納庄兵衛が居丈高にしかりつける。
「これはけしからん。露姫さまは本家よりの依頼により、我々どもがお供して、すでに当所へ

御到着あらせられている。貴公たちはなにを寝ぼけているのだ」
市郎太は不敵な面構えで、せせらわらってみせる。
「黙れ、市郎太。露姫さまはあれなるお駕籠にあらせられる。さようなざれ言を申すその方どもこそ奇っ怪至極、あまり無法なことを申すと、分家の家来といえども容赦はせぬぞ」
「これはおもしろい。容赦のできぬのは我々のほうだ。露姫さまは我々がお供いたして、すでに奥に御休息あるに、それなるお駕籠に露姫さまがあられる道理はない。さては、その方どもなにか含むところがあって、偽姫を仕立てたな。あまりむちゃを申すと、本家の家来といえども容赦なく、偽姫ぐるみ問屋場へ引きわたすぞ」
姫君の駕籠はもう玄関近くまで進んで、地にはおろさず、玄関式台があくまで六尺がかついだまま足ぶみをしている。
次につづく松江の駕籠も同様である。
「弥一郎どの――」
「うむ」
雪太郎にうながされて、弥一郎は駕籠の前を通りぬけ、玄関の前に立った。
「市郎太、偽物呼ばわり無礼であろう。この上無法を申すと手は見せぬぞ」
弥一郎は頭から高飛車に出て、いきなり柄に手をかける。
「諏訪弥一郎どのですな」
青島は冷ややかに弥一郎を見すえて、
「お駕籠の中の姫君が本物だといわれるのなら、これにてお目にかかりましょう。偽物に無礼呼ばわり無礼討ちなどはまことに迷惑千万、たって横車を押そうとなら、当方にも考えがありますぞ」
と、逆に威嚇してきた。
「市郎太、まことの姫君なれば、その方おとなしく手討ちになるか」
詰めよる弥一郎の胸の中を、ちらっと不安な

ものがよぎる。頭巾を取った露姫の顔を見ていない弱みだ。

「弥一郎どの、偽物だったら、御貴殿こそ、ここでお腹を召されるかな」

市郎太はあくまでも図太い。

――曲崎を呼び出してくれるといいのだが。

すでに露姫の駕籠わきへきてひざまずいている雪太郎は、それを待っていたのだが、市郎太を相手にここまでやりあってしまっては、もう姫君を出すほかはない。

「姫君、雪です。かぶり物をおとりになって、お出ましの御用意をしていただきます」

そっと駕籠の中へ声をかけると、

「ああ、雪まいっていたのですか」

と、うれしそうな露姫の声がきく。

「はい。かぶり物をお取りの時は、お口をきいてもよろしいのです」

雪太郎はそういっておいて、後ろの松江の駕籠わきについている菊造を振りかえって、手で合図をした。

菊造はうなずいて、駕籠の中の松江に声をかけたようだ。

「これ、駕籠をおろしますように」

松江の声がはっきりと六尺に命じた。

「ねえい」

六尺が足ぶみをやめて、駕籠が地におりると、菊造がとびらをあけて、前へ草履をそろえる。掻取りの褄を取った松江が、夕やみの中へすらりと駕籠を出て立つ。

こっちの駕籠も、もう地におりていた。

雪太郎にかわって、腰元四人が駕籠わきにひざまずき、松江のくるのを待っている。

「姫君さま、お出まし願わしゅう存じます」

松江の声といっしょに、一人の腰元が駕籠のとびらをあけ、一人が前へ草履をそろえる。

すらりと駕籠を出た露姫は、それとなく雪太郎を目でさがしている。

腰元たちのうしろへさがっていた中間姿の雪

太郎が、ちらっと顔をあげてみせると、びっくりして目をみはったようだが、それでやっと安心したように、松江に手を取られて玄関先へすすむ。

手を取っている松江も、小腰をかがめてそれを目で迎える弥一郎も、今こそはっきり美しい露姫の顔を見て、心から歓喜しているようである。

供頭庄兵衛をはじめ、それに控えていた供まわりの士が、ばらばらっと姫君の左右をかためていく。

じろりとこっちを見た青島市郎太は、まだ自分の目を疑っているようだ。

「市郎太、頭が高い。下におろう」

弥一郎が叱咤するように叫んだ。

「はっ」

分家の若侍たちは愕然としてそこへ両手をついたが、市郎太は立ったままでもう一度ぶしつけに露姫の顔を見さだめてから、しようがないというようにそこへ座る。

「市郎太、姫君のお顔、とくと拝したであろうな」

弥一郎が詰めよるようにいう。

「はっ」

「差し出がましくもあらぬ疑いをかけて、御宿泊所を騒がしたのみならず、玄関先にてお駕籠まで相とめたるは言語道断の無礼、手討ちにいたすからそれへ直れ」

ついにどたん場へきて、あたりはしいんと息をのむ。

「あいや、しばらくお待ちくだされ」

奥から若侍の声が高らかに呼んで、右手のかげからつかつかと玄関衝立の前へ出てきたのは、思いがけなくも乗馬姿の分家松平大学であった。

あっと、弥一郎も松江も、いや、そこに詰めていたほどの者が一様に目をみはる。

「弥一郎、久々であるな」

「はっ」
弥一郎はあまり意外だったので、ただ会釈をしたきり、あいさつの言葉も出ない。
「市郎太の無礼、言語道断のようではあれど、これは予が指図いたしたことだ。聞くところによると、本家ではこの度頼母の計らいにて、ひそかに姫君の名代を国入りさせると、もっぱらのうわさである。かくては公儀の手前、後のおさたもどうあろうと心配になったゆえ、予が当地へ先乗りをして、かように計らわせたのだ。うわさは単なるうわさでなにより、市郎太の無礼は予に免じて許してやってくれ」
無論、将監がかげで糸をあやつっている見えすいた遁辞(とんじ)とわかってはいるが、分家の口からそう出られては、押して無礼呼ばわりもできかねる。
「これはこれは、御分家さまにはわざわざ当地までお運びの上、御念の入りました御取り計らい、恐縮に存じます」
弥一郎はそういって、くちびるをかむほかはない。
「姫君、この度は御苦労に存ずる。今もお聞きおよびのとおり、分家先乗りをして、万事取り計らいおきました。さあ、御座所へ案内つかまつろう」
大学は白々しい顔をして、露姫にも如才がない。
「わざわざのお出迎え、恐れ入ります」
露姫は冷たくいって、玄関式台に進む。
「市郎太、さがっておれ」
「はっ」
市郎太は、どうだこっちのほうが上手だろうといわぬばかりの面構えで、ゆうゆうとさがっていく。
弥一郎も庄兵衛もすすぎをとっている暇はない。姫君と松江だけを奥へ進ませては、どんな悪辣(あくらつ)な手段が待ちかまえているかわからないのだ。

が、そこは松江がちゃんと心得ていて、姫君を式台でとめ、腰元たちの支度のできるのを待っている。
その間に、弥一郎も庄兵衛も、それぞれ小者の手でわらじをぬぎすて、供侍もわらじをぬいだ者から、次々にと姫君にしたがう。
「菊造うじ――」
はるかにさがって様子を見ていた雪太郎は、弥一郎の用をすませてもどってきた菊造を呼んだ。
「御用ですか、比良さま」
おもしろからぬ事態に、菊造は目を光らせている。
「すまんが、門の外にわしの仲間がきているはずだ。ここの出入り口を見張って、分家の者がどこへ逃げ出すか、見とどけておいてくれと、たのんでおいてくれぬか」
雪太郎は素早く菊造に命じる。
「かしこまりました」
菊造は心得て、門の外へ走り出す。
程なく若党光吉が玄関から出てきて、
「比良さま、弥一郎さまがお目にかかりたいそうでございます」
と、ひそかに告げた。
「どこにおられるのかね」
「こちらでございます」
光吉は先に立って、玄関わきから庭のほうへまわっていく。
日はもうほとんど暮れ切っていた。
弥一郎は玄関わきの小座敷のぬれ縁まで出むかえて待っていた。
「比良うじ、さあ、あがってくれ」
「いや、足がよごれていますから」
「かまわんかまわん。こっちは足もとをすくわれるかどうかの境なんだ」
「では――」
雪太郎はわらじをぬぎ、足を手ぬぐいでふいて座敷へあがる。

「光吉、見張っておれよ」
弥一郎は光吉に命じておいて、ぬれ縁の障子をしめきった。
「分家さまはもうおさがりになったのですか」
「うむ、おさがりにはなりたくなかったようだが、姫君さまは初旅のことでお疲れのようだからと、無理にお願いしてな」
「わしも十分注意はしていましたが、分家さまの出現はちょっと意外でした。しかし、考えてみると、こういう切り札を用意しておかないと、いかに将監でもあんな手は打ちかねるでしょうからな」
「こっちがもし偽物だったら、どうする気だったのだろう」
「無論、問屋場の役人を引っ張り出す腹です。問屋場の役人には姫君の真偽はわかりかねるから、江戸へ照会することになる。どうしても今夜のうちに頼母どのが川崎まで急行することになりましょう。そこで敵には待ち伏せという奥の手があるわけです」
「恐ろしいやつだなあ」
弥一郎はいまさらのように目をみはる。
「しかし、今日の勝負は敵をけおとしたかわりに、こっちは姫君のお顔を見せてしまっている。五分と五分の引き分けということになるのか」
「まあ、そういうことになりましょう」
「そこで、問題は次の手だが、無論このまま引きさがるような将監じゃあるまい。貴公の見こみはどうだろう」
「無論、勝負はこれからです。本物とわかれば、敵は是が非でも姫君さまが手に入れたいでしょうからな」
「なんなりと指図してくれ。我々は絶対に負けるわけにはいかんのだ」
「そのとおりです」
「比良うじ、こっちに逆襲という手はないだろうか」
「といいますと――」

「将監の宿所をつきとめて、将監さえ仕留めれば、道中の心配はなくなるはずだ」
弥一郎は声をひそめるのである。
「弥一郎さん、それは機会を待つことにしましょう。おのずから漏る賤が家の月で、曲崎が望外な野心をすてぬかぎり、結局は自分で自分の墓穴を掘るようになると思います」
雪太郎は、こっちから相手の命をねらうようなひどい手段は、あくまでも避けたかった。
「そうか。それもそうだな。こっちは決して事を好んでいるんじゃないから、相手の出方を待つ、ただ乗じられないように先手を打っていく、その心がまえのほうが本当かもしれぬ」
一つ間違うと、敵はいつやけになって、国元の秘密をあばき、抱き合い心中の挙に出ないともかぎらないのだ。無理はなるべく避けたほうがいいと弥一郎も気がついたのだろう。
「弥一郎さま、こちらでございましょうか」
廊下へ若侍がきてひざまずいたようだ。
「ここにおる。なにか用か」
弥一郎は自分で立っていって、そこの障子をあけた。
「ただいま、分家の組は店のほうからみんな引き払ってまいったようです」
「大学さまもか」
「はい」
「どっちへまいったようだな」
「神奈川のほうへ向かってまいりましたようです」
「そうか、御苦労だった。しかし、まだ油断はできぬ。もうしばらく交替で、持ち場をかためていてくれ」
「承知いたしました」
若侍が去るのを見とどけて、弥一郎は障子をしめ、元の座へもどってきた。
「比良うじ、敵はどうしてもやる気らしいな」
「そのようですな」
「こんどはどんな手を打つ気だろう」

「考えてみましょう。まさか、今夜ここへ夜襲をかけるような乱暴もしないでしょうから、とにかく今夜は姫君をゆっくりと休ませてください」
「貴公はこれからどうする」
「我々はこの筋向かいの林屋という旅籠についていますから、急なことがあったらいつでも菊造なり光吉なりをよこしていただきたい」
「そうか、なにぶんたのむ」
「姫君の召しあがり物は、わしのほうで用意してとどけましょう。だいじょぶとは思うが、敵の立った後ですから、用心しておいたほうがいいでしょう」
「かぶり物はどうする」
「お寝間へ入るまで、わずらわしくとも辛抱していただくように、申し上げておいてください」
「心得た」
雪太郎はすっかり打ち合わせをしておいて、ぬれ縁から小座敷を出た。
「光吉うじ、わしたちは今夜、前の林屋へ泊まることにするから」
若党にもそういいおいて、玄関のほうへまわり、用ありげに門の外へ出てみる。
うまくかくれているとみえて、だれの姿も見えない。
ゆっくり林屋のほうへ後もどりをしていくと、そこの本陣の塀の角から、深編み笠を手にした三井がふらりと出てきて、
「下郎、待て」
と呼びとめながら、ひそかにあたりへ目をくばる。
「三井、前の林屋へ行って部屋を取っておくから、みんなをつれてきてくれ」
「心得た」
雪太郎は三井がうなずくのを見て、そのまま林屋のほうへ通りすぎる。
「いらっしゃいまし。お早いお着きさまで」
林屋の番頭が如才なく出むかえるのへ、

「番頭さん、後からだんな方が三人で着くから、上座敷へたのむよ」
と、注文しておいて、すすぎを取ってあがる。
女中が案内してくれたのは、奥の八畳と六畳の二間つづきの座敷だった。
「ねえさん、ちょいととどけてやるところがあるんだから、お膳とは別に極上の折り詰め弁当を三つ、大いそぎでこしらえてもらいたいんだが」
もうすっかり旅なれている雪太郎は、女中に祝儀を握らせてたのみこむ。
「上等のをですね」
「うむ。いそがしい時にすまないが、向こうも腹をすかして待っているんだから、なるべく早いとこたのむよ」
「かしこまりました」
女中は心得顔にさがっていく。
間もなく、三井が堅田とお妻をつれて、番頭に案内されてきた。
「若だんな、ずいぶん心配させるじゃありませんか。どうしたのよう」
お妻がいきなりぺたりと雪太郎の前へ座って、うらみがましい顔をする。
「御苦労だったなあ、姐御」
「苦労なんかかまやしないけど、いまどこにいるぐらいは知らせておいてくれなくちゃ、余計な気をもむじゃありませんか」
「まあ、姐御、用件から先にすまそう」
三井はわらいながら火ばちのそばへ寄って、
「若だんな、あの連中の後は吉につけさせたが、吉一人でよかったかな」
と、いそいで聞く。
「大丈夫だろう。今夜はおそらく神奈川泊まりだろうから、行って帰って五里――、吉はたいへんだが、もういたずらはないとみていい」
「そうか。しかし、あくまでもああして先行するところを見ると、こっちはあすに備える必要があるな」

「うむ。あす、あさってがまず勝負の山だろうな」
「というと――」
「敵としては、箱根を越える前になんとかしないと、江戸が遠くなりすぎる。第一、箱根には関所があるから、あの行列をつれて通るわけにはいくまい」
「なるほど――」
三井がむずかしい顔をしてうなずいてみせる。
「比良さん、曲崎はお浜をどうする気なんでしょうねえ」
さすがにお妻は敵の中にいるお浜のことが気になってくる。
「分家の考えでは、たぶん本物を自分のほうへ奪って江戸へつれてかえり、そのかわりお浜を本物の身がわりに国もとへやろうというのだろう」
「すると、どっちへころんでも命だけは大丈夫なんですか」
「さあ、それなんだ」
雪太郎の顔は暗い。

藤沢の夜

翌朝――。
露姫の行列は正五ツ（八時）に川崎の本陣を立った。
川崎から神奈川へ二里半、神奈川から程ガ谷へ一里九町、程ガ谷から戸塚へ二里九町、戸塚から藤沢へ一里三十町、今日はざっと八里歩いて藤沢泊まりである。日の短いころだから、藤沢へ入る前に無論日が暮れる。
その日が暮れてから道中が問題だと、供侍たちはみんな覚悟していた。
――雪はどこにいるのかしら。
駕籠の中の露姫は、敵のことよりはむしろ雪太郎のことが気になる。
この行列のどこかについてきていることは、

昨日品川を立った時からわかっていた。駕籠へ乗ってみると、握り飯の包みと水の入ったひょうたんが用意してあって、雪と書いた紙きれが結びつけてあった。
それとは別に、うしろのほうに着替えらしいふろしき包みと、大小を包んだのとがおいてあって、これにも雪という紙きれが結んである。
「まあ、よかった」
雪太郎がいっしょに行ってくれるのなら、郡山へ行くのもそう苦にはならないと、着替えのふろしき包みをそっとひざの上へのせて、露姫はすっかり安心していたが、しかしその雪太郎がまさか中間姿になっているとは、川崎の本陣へ着くまでまったく思いもかけなかった。
しかも、雪太郎はあの時玄関先でちらっと顔を見せただけで、後でゆっくり話ができるのかしらと、たのしみにしていたのに、それっきり二度とは姿を見せてくれなかったのである。
そのかわり、やがて宵も深くなってから、お妻が雪太郎からだといって、折り詰めの弁当をとどけてきてくれて、
「お中老さまもお夕食はまだなんでござんしょう」
遠慮のないお妻は、さっそく松江に聞いていた。
「はい、姫君さまが召しあがりませんのに、あたくしがいただいては申し訳ございませんもの」
「たぶんそうだろうと比良さんもおっしゃって、折り詰めを三つ用意してくれたんです。一つはあたくしもお姫さまといっしょにお相伴をしてくるように言いつかりましてね。若だんなとくると、とてもよく気がつくんですからねえ」
お妻が弁当の包みをひろげると、
「手前はお次へ遠慮いたしますから、どうぞごゆるりとおつかいくださいますように」
と、弥一郎は気をきかせて次の間へさがっていった。

松江とお妻と三人きりの、それは心からたのしい夕飯だった。それに、だれに心おきなく雪太郎のことがなんでも聞けたのが、なによりうれしかった。

「お妻、雪はいまどこにいるのです」

「ここの前の林屋という家に泊まっています。三井さんも堅田さんもいっしょで、今夜はもう何事もあるまいといってましたから、二人は今ごろ安心して一杯やってるでしょうよ」

「雪は仲間外れなのですか」

「いいえ、若だんなはあんまりのめないんです。それに、やっぱりお姫さまのことが心配で、とてもお酒なんかのむ気になれないんでしょう」

お妻はまじめな顔をして、そういっていた。

「お妻、雪はどうして今夜、自分でここへあいさつにきてくれなかったのです」

相手がなにもかもよく知っていてくれるお妻なので、ついそんな言葉が口に出てしまった。

「それはお姫さま無理ですよ。若だんなはとてもいそがしいんだし、それに中間姿じゃ、まさか御前へ出られませんもの」

「雪はなぜ中間姿などになったのでしょう」

「さあ、いろいろ都合もあるんでしょうけれど、お侍姿のままだと、ギヤマンの中の金魚の姫君がいつまでもおこがれなさる、それではお身のためにならないと、ああいう物がたい若だんなのことですから、そんなことを考えているのかもしれません」

「そう申せば、この間の夜も、雪は露に怖い顔ばかりして、しかっていました」

「本当にねえ。高輪へきてからだって、一度も顔は見せなかったし、――けれどねえ、お姫さま、泣かぬほたるが身をこがすっていう歌がござんしょう。若だんなだって、心の中ではどんなにつらいかしれやしません」

お妻はしんみりといってから、ふっと気がついたように、

「あらあら、ごめんなさい、松江さま。あたし余計なおしゃべりをしてしまって。育ちが悪いものですから、しようがないんです」

と、いそいで松江にわびていた。

「いいえ、なんでもおっしゃっていただいたほうが、姫君さまもお気がまぎれてよろしいのでございます」

聡明な松江は、とりなすようにそういってわらっていたが、露姫は雪太郎とのことを松江にかくしていては悪いと思い、やがてお妻が帰ってから、

「松江、露はこちらへまいる前、本当は雪のところへ嫁ぐつもりでいました。雪はそのために、露をしかって、黙って明石を浪人してしまったのです。雪を不義者と疑ってくれませんように」

と打ち明けて話しておいた。

「よくわかりましてございます。松江も比良さまに道中でお世話になっておりますので、あの方がどんなにお立派なお人柄か、よく存じあげておりますから」

松江もそういって、昨夜は箱根からの話をくわしくしてくれた。

そして、今朝、こうしてまた川崎から駕籠へのせられたが、雪太郎の顔はどこにも見あたらなかった。

「雪はいそがしいのだから」

露姫は自分にいいきかせて、でも日に一度ぐらい顔を見せてくれてもいいのにと、ついそんなわがままが出る。

いつか雪太郎の着替えのふろしき包みをひざにのせて、なつかしくその上へ手をおきながら、

「雪、露はこんどのお国入りが無事にすんだら、明石へもどしてもらいます。いいでしょう」

と、話しかけてみる。

――でもそうなったら、雪も明石へもどってきてくれるかしら。

こんどはそんなことが心配になってくる。

今日はどうしても八里歩かなくてはならないとかで、駕籠は昨日より少し足が早いようだっ

た。
　露姫の後の駕籠にのっている松江も、今日はさっきからなんとなく雪太郎のことばかり考えていた。
　――露姫さまと比良さま。
　二人をならべて考えてみて、松江はなにかほほえましい。いや、正直にいえば少しねたましくもある。
　箱根からこっちの道中を、お嫁の約束で二日いっしょに歩き、二晩一つ部屋にまくらをならべて寝た。考えてみると、ずいぶんあぶない綱わたりだったが、こっちにお家のためという張りつめた一念があったのと、雪太郎が思ったよりもずっと立派な男だったので、間違いがおこるなどという心配さえしないで、無事に役目を果たすことができた。
　が、あの程ガ谷で一足先に立ってから、なんという立派な男と思うにつけても、ああいう殿御とならたとえ間違いがあっても、後悔などしなかったかもしれないのにと、ふっとそんなことを考えて、ひとりで顔が赤くなったりした。
　――でも、あの方には露姫さまというお方があったのだ。あたくしはもうきれいにあきらめなければいけない。
　いや、あきらめるというほどの恋ではなかったが、女だもの、あんなに男らしい親切を見せられては、だれだってついそんな心にさせられるのはあたりまえだと思う。
　それにしても、比良さまという人は、なんという意地の強い男なのだろう。
　あんな美しい姫君に振り分け髪のころから深いおもいをよせられて、明石家でも家老の家柄だというし、たって望めば主家の姫君を奥様にもらうという例がないではない。それを、黙って浪人してまで、主従の道を立てる。しかも、自分は生涯娶らず、仕官もしないと心に誓って、それをちゃんと実行している。
　――立派な男。

　考えれば考えるほど、松江はそっとため息をつかずにはいられなかった。露姫さまがしみじみとうらやましいと思う。
　二人の仲がそうとわかってみれば、雪太郎がこんどのことに命をかけるのも、姫君がつい美代にだまされてこの間屋敷をぬけ出した気持ちも、なるほどとうなずける。
　――では、あのお二人はこれから先、どうなるのだろう。
　松江はまたしても露姫と雪太郎の顔をならべて、まぶたに描いてみる。
　なによりも、雪、雪と呼ぶ時の姫君の深いまなざしがいじらしい。
「雪は露をしかってばかりいます」
　と、昨夜も姫君は無邪気にお妻に訴えていた。
　本当はお妻も、ああいう女なりに、一度は雪太郎に激しいおもいをかけていたに違いない。
　でも、あの姫君の信じ切っているようなまなざしを見ては、自分の恋などあきらめるほかはなかったろう。
　――あたくしもそうなのだから。
　松江は我にもなく寂しい微笑がうかぶ。いや、目の底に涙さえわきあがろうとするはかない気持ちだった。
　――さあ、もういいでしょう、松江。夢のようなことは、ここだけのことですよ。
　自分の心にいいきかせて、松江はしゃっきりと座りなおしてみた。
　今日の道中は、日が暮れてから、到底無事にはすまないだろうという、だれもの見とおしなのだ。
　行列は程ガ谷の宿で中食をとり、いよいよ午後の道中へかかった。
　程ガ谷から戸塚へ二里九町、途中ちょいとした坂道は二つあるが、日のあるうちはまず大丈夫だろう。
　敵の襲撃があるとすれば、藤沢の宿へかかる手前に千本松という長い松並木がある。ちょう

ど夜になるし、その辺が一番あぶない。
――比良はどんな策を考えていてくれるのかなあ。
相かわらずしんがりを守っていく弥一郎は、さっきからそれを考えていた。
雪太郎は今朝からまだ一度も顔を見せてはいない。しかし、今日も行列から二、三町離れた後から、中間姿で三井や堅田といっしょについて歩いていることは、菊造がちゃんと見とどけてきている。
「いずれ後刻お目にかかりますからと、伝えておいてくれ」
比良はその時そういっていたそうである。
ことによると、比良は敵の待ち伏せにまともにぶつかる腹をきめているのではないだろうか。たとえ小細工をろうして、今日の襲撃をかわしたところで、まだ明日、明々日があるのだ。むしろ正面衝突をして、こっちにも犠牲者は出るだろうが、できれば曲崎を討ち取ってしまう、そのほうが一番手っ取り早い。
――あの三人にならそれができるのだ。
正直にいって、弥一郎のたのみは、比良、三井、堅田の三人組だった。この三人はすでに菊川橋の下屋敷へ押し入って、池ノ端党の人数を震駭させてきている。三人でさえそれだけの底力を持っているのだから、これに味方の人数が加われば、たとえ正面衝突をやっても、絶対に敗れる心配はないと思う。
その点は十分自信が持てる弥一郎だったが、その弥一郎にもただ一つ気になることがあった。昨夜松江から、露姫と雪太郎の昔のことをちらっと耳にしたからである。
「今でも姫君は昔のことを忘れずにいられるのか」
弥一郎はびっくりして聞いてみた。
「忘れろというほうが、無理ではありませんかしら」
松江はそう答えてわらっていたが、

――そりゃいかん。
と、弥一郎はひそかにまゆをひそめた。お家のためという立場から考えて、露姫はどうしても順之助君の奥方になってもらわなくてはならないお方なのである。
比良はああいう人物だし、そのために自分から身をひいて浪人したくらいだから、いまさら、間違いがおこるなどとは考えられないが、下世話にも恋は思案のほかということがある。まして、姫君の胸の中に少しでも昔の比良のことが残っているとすれば、冷酷なようでも、できるだけ比良を姫君に近づけてはならないことになる。
一本気な弥一郎としては、そう考えるほかはなかったのだ。
行列はやがて戸塚の宿を通りぬけて、藤沢へは一里三十町、秋の日はもうすっかり西へ傾いてきた。
「若だんな、もうすぐ夕方ですよ」
行列の後を追っているお妻は、肩をならべている中間姿の雪太郎に話しかけて、そろそろ気がもめてくる。
「日が暮れると、敵が出ることだけはたしかなんでしょう」
お妻はさっきから沈みこんで、あまり口をきこうともしない雪太郎の様子が気になってしょうがない。
「うむ、どうしても出るだろう」
「ちゃんと計略は考えてあるんですか」
「考えてはあるんだが、それがうまくいくかどうか――」
「いやだなあ、そんな心細いことをいっちゃ。吉はどこへ使いに行っているんです」
「うむ」
雪太郎はなんとなく上の空のようだ。
「姐御――」
一足前を深編み笠で堅田と肩をならべていく三井が、ひょいと振りかえって、

「今夜の手はずは大体ついているんだ。まあ、心配しないで見ていてくれ」
と、とりなすようにいう。
「なんですって。じゃ、ゆうべあたしが本陣へ行っている留守に、三人で相談してしまったんですね」
お妻は仲間外れにされたようで、ちょいとおもしろくない。
「違う違う。姐御にはまだ話してなかったかなあ」
「今夜のことはなんにも聞いちゃいません。さあ、うかがいましょう」
お妻はいきおいこんで、三井の左へ肩をならべていく。堅田はすぐに心得て、一足さがって雪太郎と肩をならべる。
「三井さん、あたしをじゃまにすると承知しないから」
「いや、じゃまにしたわけじゃない。ついうっかりしていたんだ。なあ、堅田うじ」
「なにも堅田さんのせいにしなくたっていいじゃありませんか。堅田さんは高輪の奥さんのことを考えなくちゃならないんだし、若だんなは金魚姫のことで胸が一杯なんだから、うっかりしたって無理はないけれど、三井さんにはうっかりするような相手は一人もないんでしょ。うっかりしちゃだめじゃありませんか」
お妻は、相手が三井だと、一番ぽんぽんやっつけいいようである。
「やれやれ、三人のうちで一番甲斐性のないのは、わしということになりそうだな」
「そうひがまなくたっていいわ。三井さんにだって、いまにあたしがいい人を見つけてあげます」
「ありがとう。なるべくわしを食わせてくれるような働き者をたのむ」
「相かわらず虫がいいのね。あんたって人は。あんたは楊枝削りもできないの」
「わしのできるのは、精々すごみをきかせて、

人の店へ座りこむぐらいなものだ」
「あんたの顔、そんなにすごみがあるかしら。あたしにはそう見えないけどな」
「いや、若だんなのふところで食えるようになってから、いくらか柔和な顔になってきたらしい」
「そのうちに仏造ってくるかもしれない」
「縁起の悪いことをいうなよ。これでも目の前に大事をひかえている体だぞ」
「そうそう、その大事の話を聞かなくちゃ」
この二人が寄ると、とかく話にむだごとが多くなる。
「ゆうべの話はな、姐御、敵の待ち伏せはたぶん千本松あたりだろうというのが、こっちの見こみなんだ。そこで、千本松へかかったら姫君とお中老さまを駕籠からそっとおろして、空駕籠の行列だけを先へやってみようという計略なんだ」
さすがに三井は声をひそめて、お妻に打ちあける。
「あたしたちでお姫さまをまもって、後から行こうというんですね」
「そうなんだ。無事に千本松が越せれば問題はないんだが、もし待ち伏せがあったら、乱闘がすむまでこっちはどこかへかくれていて、敵が退散するのを見とどけてから、姫君を駕籠へおもどしする」
「そううまくいくかしら。もし駕籠が空だとわかると、敵は後から行くあたしたちを躍起になってさがすでしょう」
お妻はなんとなく不安である。
「計略というやつはな、姐御、うまくいくかいかないかを心配するくらいなら、なんにもしないほうが一番いいということになるんだ」
「そりゃまあそうね」
「ところで、今日はそれで無事にしのげても、また明日の道中がある。藤沢から小田原へは八里あまりの道のりだから、やっぱり酒匂川をわ

たるころには日が暮れる」

「こっちはまた空駕籠にするんですか」

「と姐御でさえ考えるくらいだから、敵は無論そう考えるだろう」

「姐御でさえとはなによう。だれが考えたってそうなるにきまってるじゃありませんか」

「だから、こっちはその裏をかこうというんだ」

「じゃ、こんどはお姫さまを乗せていこうというんですか」

「そうはいかん。明日は敵の目が方々に光っているだろうから、空か空でないかすぐわかってしまう」

「それもそうねえ」

「そこで、若だんなは、今夜のうちに手を打つのが一番いいと考えている」

「今夜のうちっていうと――」

「藤沢の本陣へ姫君が着いて、玄関をあがる。敵の目はきっとそこにも光っているだろう。ことによると、また分家さまが出迎えに出るかもしれない」

「あたしもそう思うな。あの分家さまは、お姫さまをなんとかして自分のものにしたいんだっていいますからね」

「分家は郡山十万石より露姫さまのほうがほしいらしい」

「お姫さまもいやなやつに見こまれちまったものねえ」

「まあ、因果というやつだろうな。そこで、一度奥へ通った姫君は、そのまま裏口から本陣をぬけ出す」

「なんですって――」

「つまり、我々の手で守って、三里半の夜道は少し無理かもしれないが、平塚までのしてしまおうというんだ」

「じゃ、明日は行列よりずっと先に小田原へ着いてしまおうというんですね。うまいうまい、それなら安全だわ」

「ところが、たぶんそれは弥一郎さんが大事を

とって許すまいと、若だんなは心配しているんだ」

「弥一郎さんて、そんなにわからない人なのかしら」

絶対に雪太郎びいきのお妻は、つい口をとがらせたくなる。

「いや、全責任を負っているんだから、どうしても大事が取りたくなるんだろう」

「じゃ、三井さん、そういってやるといいわ。計略がうまくいくかいかないか、そんなことを心配するくらいなら、なんにもしないほうがいいって」

「あは、は、さっきのしっぺがえしか、姐御」

三井はのんびりとわらってから、

「それになあ、若だんなは金魚姫と昔のことがあるんで、どうしても弥一郎さんに気がねがあるんじゃないかと思うんだ」

と、声をひそめる。

「そんなことをいったって、いまさらしようがないじゃありませんか、バカらしい」

こっちは命がけで働いてやっているんだもの、そんな気がねなんかする必要があるもんかと、お妻は思うのである。

「おや、吉が帰ってきたようだな」

すでに秋の日が落ちて、真っ赤に夕焼けてきた街道を、向こうからいそぎ足に近づいてくる中間風の男が、ひょいとこっちを見ると、急に手をふって駆け出したのである。

「まあ、やっぱり吉だわ。どこへ行ってきたんだろう」

お妻が目をみはっているうちに、ぐんぐん近くなって、

「みなさん、御苦労さん」

と、先頭の三井とお妻に声をかけ、うしろの雪太郎のところへ行って肩をならべる。

「若だんな、行ってきやした」

「御苦労だった。どんな具合いだったな」

「みんな藤沢の宿へ入りやして、今日は本陣で

はなく、常陸屋という旅籠屋へ着きやした」
「浪人組もいっしょか」
「へえ」
「常陸屋というと、こっちから行くと本陣の手前だったかな」
「そうでござんす。小半町ほど手前になりましょう」
「分家さまの駕籠もいっしょについたんだろうな」
「へえ、分家さまは普通の道中駕籠でござんした。馬はきっと川崎へあずけてきたのかもしれやせんね」
「いや、馬は後から中間がひいてくるんだろう」
雪太郎はなにか思案しているようである。
「若だんな、その馬を調べてくるんなら、一っ走り行ってきやしょうか」
吉松は張り切っているようだ。
「いや、それにも及ぶまい」
秋の日は落ちるとたそがれが早い。もう野面には夕もやが煙のように漂い出してきた。
「三井――」
「なんです」
「堅田うじも、このままの足なみで歩いていてくれ。わしはちょっと弥一郎さんに会ってくる」
「承知いたした」
「若だんなあたしがいっしょに行ってあげようか」
お妻がいきおいこんでいう。
「いや、姐御では目立つから、やっぱり吉をつれていこう」
「じゃねえ、若だんな、こっちの計略は計略なんですから、なにも弥一郎さんに遠慮なんかすることはないんですよ。ようござんすか」
お妻はそれが心配になるのである。
「ありがとう。――吉、いっしょにきてくれ」
「へえ」
雪太郎は吉をつれて足を早め出した。
もう一足ごとにたそがれてくる時刻だから、

江戸へ向かう旅人はほとんど藤沢泊まりになるので、戸塚へ向かう人足はぱったりと絶えていた。
露姫の行列はやがて千本松へかかろうとしている。
「弥一郎さん――」
雪太郎は行列へ追いつくとすぐに弥一郎の持ち場へ行った。
「比良うじか」
待ちかねていた弥一郎である。
「そろそろちょうちんの用意をさせてはいかがでしょう」
「うむ」
今夜は十五日の月があかるいから足もとには困らないが、行列は夜は無ちょうちんで歩くわけにはいかない。
「その間に姫君と松江どのに駕籠を出ていただき、わたしたちがおあずかりして、しばらく様子を見たいと思いますが」
「なるほど。ここは空駕籠にして通りぬけようというんだな」
「そうです。待ち伏せがなければ、藤沢の入り口でお駕籠へもどしますし、襲撃があった場合は、味方が敵を撃退してから、その場でそっとまたお駕籠へ案内します」
「待ち伏せはあると、貴公は見るんだな」
「分家の行列は、例の浪人組をしたがえて、すでに藤沢へ着いています。大学どのもいっしょだそうですから、必ず待ち伏せはあると考えます」
弥一郎はしばらく考えていたが、
「よかろう。待ち伏せがあるとすれば、空駕籠のほうが思い切って闘える。比良うじの策にしたがおう」
と、すぐに先頭の庄兵衛のところへ菊造を走らせ、行列をとめさせた。
行列がとまると、中間小者たちがいっせいにちょうちんの用意をはじめる。
もう日はすっかり暮れかかって、月かげが青

い。
「姫君、雪です」
　雪太郎は素早く露姫の駕籠わきへ走って中へ声をかけた。
「ああ、雪――」
　うれしそうに姫君がいそいでとびらをあける。
「雪がお供をしますから、しばらくお駕籠からお出ましくださいますよう」
「歩くのですか」
「お掻取りはじゃまですから、おぬぎ遊ばしますように」
「はい」
　姫君は雪太郎のいうがままに、掻取りをぬいで駕籠からおりる。
　雪太郎は、駕籠の中の自分の大小と、着替えの包みを取って、ついてきた吉松にわたし、自分は姫君の掻取りを取ってそでだたみにし、右へかかえて、左の手で姫君の手を取る。
　後ろの駕籠から出た松江も、じゃまになる掻取りは若党光吉にあずけ、これは自分できりっと小褄をしごきの間へ取りあげて、こっちへ寄ってきた。
「比良さま――」
「おお、わしにつづいてくれ、松江さん」
「はい」
　すぐ目の前は雑木林になっていて、その奥の一郭はどこかの墓地になっているらしい。
　雪太郎は姫君の手を取って、かまわず林の中へ入っていく。松江が後につづき、光吉と吉松がうしろを守ってくる。
「お立ちい」
　その間にちょうちんの用意のできた行列は、供頭の指揮でふたたび前進をはじめる。
「庄兵衛、もし敵が出たら、味方は必ず二人ずつ一組になって闘うように触れておいてくれ。腰元たちは小者たちと一つになって、できるだけ安全な場所へ早く避けさせることだ」

　弥一郎が庄兵衛に注意して、それを一同に触れさせる。
　行列の足取りは前とおなじだが、全員が一足ごとに緊張してくるのは、いつの間にかその足音が一つになっているのでもよくわかった。
　そのころ――。
　数町離れた松原に、曲崎将監は手勢をひきいて、露姫の行列のくるのをいまやおそしと待ちかまえていた。
　将監は浪人組を二手にわけ、一組は高柳峰十郎を部将として、行列の前衛を襲う。一組は大俵玄蕃を大将として、後衛にかかる。
　もう一組は、分家の家来五人をひきいる青島市郎太が、将監の手もとにいて、命令一下、姫を駕籠ごと奪って戸塚の宿へ走ることになっている。
　――今夜こそのがさぬ。
　将監は万全を期して、今夜ひきょうな振る舞いのあった者はだれにもせよ切ると、厳重に申しわたしてあった。
　露姫はあの下屋敷の火事で焼死したものとばかり信じていたので、
「御用人さま、お高祖頭巾の姫君さまは、どうやら本物のようです」
と、品川の本陣で清野に耳うちされた時は、唖然とせずにはいられなかった。
　では一体、だれがあの火の中から姫君を助け出したのか。無論、助け出したのは比良たち三人で、お妻が協力している。そう見るほかはないが、それらの敵がどこからどういう風に屋敷の外へのがれ出たのか、逃がした味方はまったくふがいないやつらだということになる。
　が、それを責めるとなると、あの時自分が屋敷を留守にしたのが一番不覚だったことになる。それらの失敗を、今夜こそ取りかえさなくてはならないのだ。
　もし、今夜さえ成功してくれれば、露姫が生きていてくれたということは、こっちにとって

も望外の幸いだったことになる。
露姫さえ手に入れてしまえば、百の小細工をろうするより一番簡単に郡山十万石をわがものにできるのだ。
「だんなさま――」
街道のほうから、物見に出しておいた若党倉平が、一散に駆けこんできた。
「倉平、どうした」
「だんなさま、行列が見えました。もうすぐここを通ります」
「よし、――一同、支度」
将監は小声で命じながら、自分もいそいで顔をつつみ、ふところから短筒を取り出して握りしめる。殺生が目的ではないが、万一の場合の身のまもりだ。
「市郎太、もう一度全員に触れておけ。一歩でも退く者があったら切るとな」
「はっ」
「高柳と大俵には、特に組中の責任を持たせておくように」
「承知しました」
市郎太はすでに街道端近くに身を伏せている味方のほうへ走っていく。
「倉平、お妻と深編み笠の二人は、まだ行列を追っているんだろうな」
念のために聞いてみたが、これは無理な質問だった。それをたしかめるには、一応敵の行列をやりすごしておいて見とどけ、ふたたび行列を追いぬいてこなければならないのである。
「手前そこまでは手がまわりかねましてございます」
「そうであったな。それはそれでよい」
将監は苦笑しながら、今朝の花長の子分の報告で、行列の後からお妻と三井、堅田の三人が、昨日からつかず離れずついてきているのはわかっている。が、いつ見ても比良の姿だけは、行列の中にも見かけないということだった。
たとえ見かけなくても、比良はどこかについ

てきているのに違いないのだ。
――一体、あの男はどんな策をろうしているのか。
あの夜以来、深川の浪宅へも一度も帰っていないし、露姫は品川の本陣へあらわれるまで、その比良がどこかへかくまっていたに違いないと考えられるだけに、将監はそれだけがなんとなく不安である。
が、どんな策をろうそうと、もうこうなってしまっては、今夜こそ網にかかるだろう。
将監はじりじりするような気持ちで、じっと街道のほうをにらんでいた。
「まいりました、だんなさま」
「うむ」
松並木の間へ行列のちょうちんの灯がちらつき出してきた。
「下にい、下に」
先触れの声が、からんとした月明の夜気の中に、次第に近づいてくる。
行列は並み足を取って、しゅくしゅくと進んでくる。
弥一郎といえども、今日はこの辺がくさいぐらいのことは気がついているだろうから、行列もひどく緊張しているようだ。
先供が松原の前を通りすぎようとして、どう気配を察したか、はっとこっちを見たようだ。
「かかれッ」
姫君の駕籠はややうしろだが、気がつかれてしまっては今が襲撃の機と見て、市郎太が激しく叱咤した。
「わあっ」
高柳組も大俵組も一度に喚声をあげて、どっと街道へ躍り出していく。
「それ、くせ者だ」
「油断するな」
行列の前衛も、後衛も、すかさず抜刀して、そこにもここにも白刃が激しい火花を散らしはじめた。

見ていると、行列は二人一組になって、意気軒昂たるものがあるようである。これは敵もあらかじめ覚悟をしてここまできているのだろうから、別にふしぎはないが、

――はてな。

将監は姫君の駕籠のほうを見て、ふっと疑問がわいてきた。

当然駕籠のまわりをかためなくてはならないはずの行列組が、一人もそっちへ走ろうとする者さえない。

腰元たちも六尺どもといっしょに難を反対側の松原へさけたとみえて、露姫の駕籠も松江の駕籠も往来へ放り出されたままになっている。

二人ともまだ駕籠を抜け出すすきはないし、反対側へのがれたとすれば、そっちへ何人かの供回りがつくはずである。

「市郎太、来い。あの駕籠は空かもしれぬ」

「そうですな。少しおかしいようですな」

思わず顔色を変えた将監は、大股にそっちへ進んでいった。

その前後で戦っている行列組は、こっちの新手が一団となって駕籠へ近づくのを見ていないはずはないのに、なんの動揺も示そうとしない。

市郎太は姫君の乗り物へ走り寄るなり、がらっととびらをあけた。

「やっぱり空です」

こんどは少し離れた松江の駕籠のとびらをあけてみる。

「これも空だ」

「座布団にさわってみろ」

「なるほど――」

市郎太は座布団に手をやってみたが、冷やりとして、ぬくもりは少しも感じない。

「こりゃ初めから空だったんですな」

しまったと将監は思った。

しかし、駕籠が空だとすれば、姫君は必ず後からくるはずだ。先行しているのでないことは、自分たちがさっきからここで見張っていたのだ

から間違いない。

「市郎太、ひとまず引きあげだ。味方に合図をしてくれ」

将監はそう命じておいて、家来五人をしたがえ、さっさともとの位置に引きあげてきた。

戦況はまだ五分と五分で、どっちにも死者は出ていないようである。

ぴ、ぴいっ。ぴ、ぴいっ。

市郎太が引きあげの呼び子を吹く。

ばらばらっと味方の人数がこっちへ引きあげはじめた。

「追うな、追うな」

「追うには及ばぬ。とまれ」

敵はたがいに声をかけあいながら、持ち場へもどり、油断なくこっちの出ようを見ている。

「高柳、――峰十郎はどこにおる」

将監が呼んだ。

「ここにおります」

抜刀をさげたまま高柳が前へ出てきた。

「お前の組は敵の後ろへ出て、戸塚のほうをかためてくれ。必ず姫君が微行してくるに違いない」

「駕籠は空だったんですな」

高柳が聞く。

「うむ」

「比良のやりそうな小細工ですな。承知しました。今夜こそ、この間の敵を取ってやります。――おい、わしの組はわしにつづけ」

高柳は組下の浪人組七人をひきいて、松原を迂回しながら、行列の後方へいそぐ。

行列はまだ立ちどまったままこっちの様子を見ているようだ。

市郎太が小声でささやく。

「敵も姫君が追いつくまで、動けなくなったようですな」

「そうかもしれんな」

「万一引きかえすならどうします」

「これだけの人数で、もう一度襲撃をかけるの

だ」
「なるほど――」
「敵がもし藤沢のほうへ動き出したら、わしの組はその後を追うことにするから、おまえは大俵組をひきいて、ここに残ってくれ」
「高柳組を援護するわけですな」
「うむ、万一ということがあるからな」
　将監は相かわらず用心深い。
　一方、弥一郎は、敵が退散しても、うっかり行列が動かせなくなっていた。
　こっちが空駕籠とわかれば、敵は後方をさがすに違いない。無論、そのために将監が戦い半ばに引きあげたことは、火を見るよりあきらかなのだ。
　比良組が敵に発見されたとなると、三人ではとても防ぎ切れない。
　――少し小細工すぎたかなあ。
　弥一郎は比良の策に乗ったことを、いまさらながら後悔せずにはいられなかった。
「庄兵衛、いつまでこうして待っているわけにもいかん。思い切って行列を引きかえしてみるか」
「さようでございますな」
　年輩の庄兵衛にも、これはうっかり答えられない。
「しかし、弥一郎どの、行列を引きかえすことは、わざわざ敵に姫君は後からくると知らせるような結果になりはしませんか」
「うむ」
「ひょっとして、比良組は間道を取って、もう先へ出ているかもしれません」
「わしも実はそれが唯一のたのみなのだが、万一そうでなかった場合が心配なのだ」
「しかし、どのみち戦いはこの一度ですむものではありません。万一の場合はまた万一の戦いをやればいいんですから、とにかく藤沢の宿外れまで行列を進めてみてはどうでしょうな」
「そうか――。では、そうしてみるか」

　弥一郎もやっと決心がついてきた。比良との打ち合わせどおりに実行しても、またここから引きかえしてみても、どっちにも不安があるとすれば、一応は打ち合わせどおりに事を運んでみるほうが本当だと気がついたのである。
「よし、庄兵衛、できるだけ堂々と出発しよう」
「かしこまりました」
　庄兵衛は先頭の持ち場へ走りながら、
「お立ちい」
と、大声に叫んだ。
　行列が千本松を出外れようとする時、弥一郎の左がわへすっと肩をならべてきた中間がある。比良雪太郎だった。
「おお、比良うじ」
「おそくなりました」
「で、姫君は――」
　なによりそれが気になる。
「間道づたいに進んでおります。あの松原へは、敵の目があって近づけませんでした」
「たぶんそうだろうとは思ったが、ちょいと心配した」
　万事は計画どおりに進行していたのだった。
「そこで相談があるのですが、この行列はいま少し後から将監の組が尾行しています」
「それは承知している」
「浪人組はさっきのところへ残って、姫君のくるのを待っています。しかし、事実は姫君はすでに敵の網のあるところを外して、前進してきているのです」
「うむ」
「ここから前にいる敵は、藤沢の宿の常陸屋(ひたちや)に分家と、女たちがいるだけです。明日もまた今夜の轍(てつ)を踏まないために、我々はこのまま姫君をおあずかりして、平塚まで先行する。明日は一足先に小田原へ入って、行列を待つということにしてはどうでしょうな」
「なるほど――」
　弥一郎はすぐにはうむと賛成しかねるのだ。

「敵が気がついて、追い討ちをかけたらどうするね」
「敵は姫君は後からくるものと思いこんでいますから、先行したとはおそらく気がつかないでしょう。気がついても、かなりおくれてからです。万一、分家がゆうべのようにきげんうかがいに出たら、今夜の偽物を頭巾のままであわせておくことです」
「なるほど――」
策としてはおもしろい。比良のいうとおり、うまくゆきそうにも思える。
しかし、万一ということが絶対にないとはいえないのだ。さっきの時でさえ、あれだけ心配しなければならなかったのだから、今夜はおそらく眠らずに気をもむことになろう。おなじ気をもむなら、姫君をそばにおいて苦労したほうが、臨機応変に取るべき手段も考えられるから、そのほうが安心だ。
それに、一番避けなくてはならないことは、姫君と比良を二人きりにしておくということなのである。
「比良うじ、わしはおなじ苦労をするなら、姫君と一つ場所のほうが安心なような気がする。決して貴公たちの力を疑うのではないのだが、さっきの時も正直にいうと、生きた気持ちがしなかった。まだこれから長い旅なのだ。詭道はなるべく避けて、正道で闘うべきだと考えたのだが、どうだろうな」
弥一郎は思い切っていった。
「そうですな。弥一郎さんがその覚悟なら、詭道はやめましょう。前言は撤回します」
雪太郎はなんのこだわりもなく答える。
「承知してくれるか」
「責任者はあなたなのだから、我々はあなたの方寸の中で働くべきです。姫君は藤沢の宿へ入るまでに行列へもどしますから、このまま進んでいてください」
雪太郎はそう告げると、すっと行列を離れていった。
雪太郎は間道づたいに歩いている露姫たちのところへもどってきた。
本街道から小一町ほど離れた畑道だが、こっちのほうがやや地形が低くなっているので、街道からほとんど見とおされる心配はない。
先頭を堅田と若党光吉が歩き、次を松江が露姫の手を取って歩き、うしろを三井とお妻がまもっている。
少し離れたしんがりを、吉松が万一の追っ手に備えて、八方に気をくばりながらついてくる。
「雪、弥一郎はなんと申していました」
雪太郎がそばへ行くと、露姫はさっさと松江の手を放して、雪太郎と肩をならべてしまう。育ちが育ちだから、家来たちの目など少しも気にしていない。
松江は心得て、すぐに一足後へさがる。
「松江さん、また振られましたね」
お妻が遠慮なくいって、くすりとわらっている。
「姐御、少しつつしまぬか」
三井がもっともらしい顔をしてたしなめ、あべこべにどすんとひじで小突かれる。
「雪の策は、やはり少し過激のようでございました」
雪太郎はおだやかに告げる。
「いけないと、弥一郎は申すのか」
「詭道には詭道の危険がともないます。おなじ危険でも、危険がおこったとなると、正道のほうが防ぎいいのです。これから行列へお供することにします」
雪太郎は弥一郎についての批判がましいことは、一言も口にしない。
「では、露はまた行列へかえるのですね」
姫君は雪太郎の手をさぐりながら、浮かぬ声音である。
「やっぱりだめだったの、若だんな」

うしろからお妻が不満そうにいった。
「策を取りあげるか取りあげないかは、責任者の弥一郎どのがきめる。それでよいのだ」
「松江さんはどう思います」
お妻は松江を味方に引き入れようとする。
「あたくしは比良さま次第でございます」
これも弥一郎を非難するような言葉は、絶対につつしまなければならないのである。
「あたしは反対だな。また明日おなじような待ち伏せをかけられたら、こんどは今日の手もだめだし、どうしようもないんじゃないかしら。三井さんはどう思う」
「わしたちは若だんなの手足なんだから、万事若だんなまかせだ」
三井はうまく逃げてしまう。
「若だんなは腰が弱いからいけないんです。どうして、もっとわかるように、弥一郎さんに話してあげなかったんだろうな。一番大切なのは、お姫さまを無事にまもりとおすというだけなんじゃありませんか」
お妻は一人で躍起になっているが、だれも相手にならなかった。というより、だれもうっかり口がきけないのだ。
「若だんな、もう一度しっかり掛けあってきたらどうなの」
「いや、今夜の策はもうきまったのだ」
「うそばっかし――、若だんなはあの人に遠慮しすぎてるんだわ」
「お妻、雪をいじめてはいけません」
露姫が悲しそうにいう。
「松江さん――」
雪太郎がうしろへ呼んだ。
「はい」
「今夜もし本陣へ分家さまが姫君のごきげんうかがいに出たら、十分警戒を厳重にして、必ず寝ず番をおくように、弥一郎どのにすすめておいてください」
「はい、きっとそう申し上げます」

すると、今夜中になにか起こる気配があるのだろうかと、松江は不安になってくる。
「雪は今夜も本陣へはまいってくれないのですか」
露姫が本意なさそうに聞く。
「本陣へはまいらなくとも、雪はいつもお露さまのおそば近くにおります」
「それはそうですけれど、呼んでも聞こえないところでは心細い」
「松江どのがおそばについているのですから、安心していなければいけません」
「ここには松江もいますし、雪もいてくれます。三井も、堅田も、お妻もいます。みんないっしょに本陣へまいってくれれば、一番安心ですのに」
「我々には別に大切な仕事があるのですから、我慢なさらなくてはいけないのです」
雪太郎の声音にはどこか堅いものがある。
「露は前から我慢ばかりしていますのに」
涙ぐんでいるような哀れ深い声である。
「それでこそ姫君なのです。今はだれも自分のことは考えていられない時なのです。お心を強く持っていませんと、悪人どもに負けます」
「若だんな、もっとやさしい声でお話ができないんですか。まるでお姫さまをしかっているように聞こえるじゃありませんか」
お妻はたしなめずにはいられなかった。
「姐御、まあそういうな。若だんなは責任が重いんだ」
こんどは三井がお妻をたしなめる。
「責任ばかり重くて、気がねばかりして、損な性分てありゃしない」
「若だんな、行列が見えてきたようだ」
前を行く堅田が注意する。
本街道と間道がずっと近づいて、ややうしろのほうの松並木の間に、行列の灯が点々と進んでいる。もうすぐそこが藤沢の宿の入り口なのだ。

ちょうど間道から本街道へ出る横の道がそこにある。
「光吉うじ」
「はい」
「姫君と松江どのを案内して、そこの道を本街道へ出てくれ」
「かしこまりました」
雪太郎はそこで立ち止まった。
「松江さん、行列へ入っても、駕籠はとめないほうがいい。うしろから分家の手の者が追っている。気づかれないように、行列の中へ入って、本陣まで歩くのです」
「はい」
「姫君、我々はここから見ていますから、安心して、松江どのの言うとおりになさるのです」
「雪は、雪はここにいるのですか」
いっしょにきてはくれないのですかとはせがめないので、姫君は雪太郎の手にすがったまま、いまにも涙があふれてきそうな目をしている。
「雪はここからちゃんと見ております」
雪太郎は松江のほうへ、無理に露姫を押しやるようにする。
「あの、雪、今夜もお夜食をとどけてくれますか」
「おとどけいたしますとも、お姫さま。またゆうべのように三人で、たのしくいただきましょうね」
お妻がかわって約束する。
「さ、早くおいでにならなければ、追っ手に見つかります」
危ない綱わたりをしているのだから、雪太郎はつい強い語気になる。
「雪はすぐに怖い顔をするのですもの」
姫君は泣きそうになりながら、それでも、
「みなの者、御苦労でした」
と、一同に会釈をして、松江に抱きかかえられるように、本街道のほうへ歩き出す。
行列はもうすぐそこへきているのだ。

「間にあうかしら」
お妻ははらはらせずにはいられない。
「一同、身をかがめてくれ」
月があかるいから、ここは本街道から見とおされるおそれが十分あるのだ。
一同は畑のかげへしゃがみこむ。
光吉に先導されていく姫君の足は、ひどくおそいようだ。
「おかわいそうに、本当は別れたくないんだもの、しようがありゃしない」
お妻がのびあがるようにしてつぶやく。
「どうにか間にあいそうだな」
三井は、行列の進み具合いと、姫君の足とを目測しながら、ほっとしたようだ。
果たして、ちょうど駕籠が前あたりへきたところで、姫君と松江はすっと行列の中へ入っていったようだ。
「やれやれ――」
三井がまたしても安心したようにいう。
行列は少しも足なみをかえず、そのまま通りすぎていく。
「若だんな、弥一郎うじはやっぱり承知しなかったな」
「やむをえぬ」
「押しつけるわけにはいかん相手だしな。それで、今夜はどういうことになるんだ」
こっちはもう気のおけない同士になったので、三井はつい不満の声をかくし切れない。まるで雪太郎に食ってかかっているような調子に聞こえる。
「三井さん、若だんなをいじめたってしようがないじゃありませんか」
お妻がそばからたしなめた。
「いや、別にいじめるわけじゃないが」
「若だんなもそうよ。なにもお姫さまに罪があるわけじゃなし、もっとやさしくしてあげたらどうなんでしょうね」
「どうやらきたようだ」

じっと後ろのほうを見ていた堅田が注意する。

やがて、頭巾で顔をかくした五、六人の一団が、黙々と宿外れのほうへいそいで通りすぎていった。

「まだなんにも気がついていないようだな」

雪太郎がつぶやく。

「だから、今のうちに平塚までのしてしまったほうがよかったんだ」

三井がまたしてもそれをいう。

その夜——

藤沢の本陣へ無事に着いた露姫は、すっかりふきげんになってしまって、一言も口をきこうとしなかった。

おまけに、追いかけ比良からの口上を菊造が持ってきて、

「お中老さま、今夜のお夕飯は約束どおり折り詰めをさしあげるわけにはいかないから、本陣のものを吟味してさしあげてくれるようにとのことでございます」

と、ことわってきたのである。

まさか比良が気を悪くしたとは、無論松江は思わない。今夜は敵の手が本陣の台所まで入っていないと見たから、そういってよこしたのだろう。

夕飯のほうはそれでもさしつかえないのだが、姫君が待っているのは、折り詰めよりむしろお妻のほうなのだ。いや、お妻の口から聞かされる雪太郎の話を心待ちにしているのである。

そのお妻まできてくれないとわかったのだから、姫君が沈みこんでしまうのも無理はないと思った。

「弥一郎さま、比良さまの策はなにかおもしろくないことがあったのでございますか」

松江は折を見て、弥一郎にそっと聞いてみた。

「どうしてだ、松江さん。比良がなにかいっていたのか」

「いいえ、比良さまは、責任者の指図にしたがうのが、一番いいのだからと、姫君にもはっきりとおっしゃっていましたが、姫君は平塚までまいったほうがよかったのにと、そういう気持ちがあったようでございます」

「それはわしにもよくわかる。わかっているから、わざと詭道はさけたのだ」

「どうしてでございます」

「松江さん、そんなことを聞くもんじゃない。わしの立場としては、敵も怖いし、間違いも怖いんだ。つらいが、これもしようがないじゃないか」

「よくわかりました、弥一郎さま」

松江はこれ以上弥一郎を責められないと思った。弥一郎の立場にも十分同情ができるのである。

「姫君さまには、あたくしからよく申し上げておきましょう。ただ、比良さまは、今夜もし御分家さまが姫君さまのお顔を見にくるようだと、きっとあぶないから、寝ず番をおくようにと申しておりました」

「承知した。寝ず番は必ずおくようにしよう」

しかし、幸か不幸か、今夜はその大学さえ本陣へ姿を見せなかった。

敵の泊まっているのは、ここから小一町ほど戸塚寄りの、常陸屋という旅籠である。

無論、なにかたくらんでいるのに違いないから、油断はできないが、まさかこの本陣へ夜討ちをかけるような無謀なまねもできないだろう。

すると、敵の手は明日の道中でということになるのではなかろうか。

大体そういうことに意見が一致して、それにしても寝ず番は厳重にしようと、それぞれ手くばりをして、寝につくことにした。

「松江、雪からまだなんとも申してきませんか」

寝所に入る時、姫君はさすがに遠慮そうに松江に聞いていた。

「姫君さま、比良さまは今時分、もうきっと本

陣の外へまいっていると思います。御用の時はいつでも松江がおつかいにまいりますから、安心しておやすみくださいませ」

　松江はなぐさめるように、そうささやく。

「そうでしたね。雪は外にきているのでした。今夜は少し風があるから、外は冷えるでしょう」

　露姫は雨戸の外へ耳を澄ますようにして、それでやっと満足したらしく、まくらについた。

「明日はまた比良さまに、お駕籠わきをかためていただくように、お願いしておきます」

　松江は掛け布団をなおして、

「おやすみあそばしませ」

と、あいさつをして屏風の外へ出た。

　そこに松江の布団がのべてあって、松江は帯もとかずに横になるのである。

　次の間には腰元が二人ずつ、一刻交替で寝ず番をする。

　今夜は玄関も奥庭も、絶えず警固の夜番がまわっているはずである。

——どうぞ間違いのありませんように。

　松江はそう祈りながらまくらについた。

　どうしてこんなに苦労をして、国もとまで行かなくてはならないのだろう。

　何事もお家のため、それはよくわかってはいるが、姫君はただ国もとへ行って帰ってくる、それだけのことで、御当主さまはすでにこの世にないのだから、里方へ引き取られるか、それとも順之助さまの夫人になおられるか、いずれにしても失意の人にならなければならない。いわば、この間自分で口にされたとおり、まったく人形あつかいにされている苦しい道中なのである。

　——だから、弥一郎さまもせめて比良さまに会うことぐらいは、大目に見てあげればいいのだけれど。

　松江はつい露姫に同情せずにはいられなくなってくる。

　が、弥一郎の立場にすれば、姫君の胸の中は

よくわかっていても、それでは侍の道が立たない、心づらくともあくまで間違いの起こらないようにと、これも必死なのだろう。

　——因果な旅。

　松江はまくらについてもなかなか寝つかれなかった。

　樹木に鳴る秋風が寒々と耳につく。

　比良たちはこの秋風に吹かれて、本当に外に立っているのではなかろうか。

　姫君にさっきそういったのは、その場の気やすめではあったが、義理がたい人たちだから、やるだけのことはきっとやっていてくれるのだ。

　——あの人たちといると、あたくしでさえたのしくなるのだもの。

　姫君が別れたくなくなるのも無理はないと思う。

　——箱根のお嫁の時は、本当にたのしかった。

　松江はまたしても考えてはならぬことを思い出して、甘く胸がうずきながら、疲れているからいつかぐっすりと寝こんでしまったらしい。

「火事だ」

　けたたましい叫び声に、はっと布団の上へ夢中で起きあがりはしたが、はて、ここはどこなのだろうと、一瞬ぽかんとあたりを見まわしていた。

　どこからか薄煙がはいよってきて、つうんと鼻を突く。

「火事だ」

「火事でござるぞ」

　急にどたばたという物音が耳につき出した。

「火事——」

　ぎょっと我にかえった松江は、もうまっすぐに屏風のうちの姫君の臥床へ走りよっていた。

「松江、火事ですね」

　露姫もいま目がさめたらしく、きょとんと床の上へ座っている。

「姫君さま、お立ちあそばせ」

「はい」
露姫が人形のように立ち上がる。寝まきを着がえさせている暇はない。いそいで細ひもで腰あげを取り、上から打ち掛けをきせて、これもしごきであげを取らなくてはならぬ。
「お中老さま、火事でございます」
寝ず番の腰元がやっと駆けつけてきた。
「はい」
「早く雨戸をおあけなさい。落ち着くのですよ」
腰元たちは廊下へ走り出ていく。
「はい」
「懐剣をお持ちあそばせ」
松江はついでにまくらもとにたたんである姫君の衣類をひとまとめにしてかかえ、露姫の手を取って廊下へ出た。
もうかなり濃い煙が廊下をはっている。
一気に廊下を突っ切って庭へ出ると、秋の月が真昼のように明るい。
「おお、姫君――」
弥一郎も身支度のまま横になっていたとみえ、押っ取り刀で駆けつけてきた。
「弥一郎さま、裏へ出ましょう。警固の方たちを――」
「よし、――おうい、近くにいる者は姫君のお供をしろ」
「はっ」
庭を横切って、木戸口から裏へ出ると、そこは畑になっていて、向こうに雑木林が見える。
本陣の軒から、もう赤い火が吹き出していた。
「あの林がいい。――一同つづけ」
弥一郎は先頭に立って畑の中をまっすぐ雑木林の中へ進む。
「松江、雪の姿が見えませんね」
露姫は松江に手をひかれながら、しきりにあたりを見まわしている。
「いまにきっとまいりましょう。表のほうをさがしているのかもしれません」
松江は気やすめをいって走る。

やや遠くなった本陣の裏手は、黒い人かげが右往左往して、口々になにか叫びあっている。
「一同、気をつけろ。敵だ」
先頭の弥一郎が絶叫しながら抜刀した。
「おうっ」
うしろにさがっていた四、五人の侍が、言下に抜刀して前へ出た。
すぐ目の前になった雑木林の中から、覆面の一隊がおよそ十数人、手に手に抜刀して、
「わあっ」
と、殺到してきた。
――しまった。この火は敵がかけたのだ。
松江は畑の中へ立ち止まりながら、さっと顔から血の気のひく思いである。
戦はあきらかに不意を突かれた味方の負けだった。
弥一郎をはじめ、姫君をまもってきた警固の士五、六人は、たちまち敵の覆面十数人に包囲されて、自分の身をまもるだけが精一杯になる。
それと見かけて、本陣のほうから駆けつけようとする味方数人は、横合いから走り出た敵に道をさえぎられてしまった。
畑の中に取り残された露姫のまわりには、松江と腰元二人の三人きりしかいない。
そこへ雑木林の中から別の敵が六、七人、女乗り物を持ってこっちへ駆けつけてきたのである。
「おのれ」
歯がみをした松江は、もう切り死にのほかはないと、懐剣を抜いた。
腰元たちもそれにならって、懐剣を抜きはしたが、しょせん懐剣は闘う武器ではなく、自害のためのものでしかない。
しかも、覆面の先頭に立っているのは、曲崎将監で、
「お手向かい無用、おとなしくなさらんと、まず姫君のお命をいただきますぞ」
と、不敵にも短筒の銃口を、ぴたりと露姫に

向けたのである。
「ひきょうです、曲崎さま」
「いや、お家のためにかくは取り計らったので、手向かいすればやむをえない。あなた方を三人とも切る」
抜刀した覆面どもは、もう女たちをぐるりと取りまいて、将監の命令を待っているのだ。
「松江も、みなの者も、けがをしてはなりません。懐剣をおさめなさい」
露姫は女たちの血を見るにしのびない。きっぱりとそういってから、
「将監、弱い女の血を流してはなりません。露姫はその駕籠に乗りましょう」
と、自分から将監の前へ出ていった。
「あっ、姫君さま」
「松江、よいのです。そなたたちの命には替えられません。後で短慮なまねはなりません。わかりましたか」
「は、はい」
手向かいすればみな殺しにあうのだから、松江も涙をのむほかはなかった。
「姫君、立派なお覚悟です。将監決して悪くは計らいませぬ」
将監は一礼してから、
「これ、お駕籠をこれへ」
と、六尺どもに命じた。
「ねえい」
偽姫をのせて歩いていた駕籠が、露姫の前へきておろされ、将監はそこへひざまずいて駕籠のとびらをあけた。
「なにとぞお召しくださいますよう」
さすがに礼儀は失わない。
「松江、決して短慮はなりませぬぞ」
「姫君さま」
松江は申し訳なさに身も世もなく、へなへなとそこへ泣き伏していた。
露姫は静かに駕籠へ乗る。
将監はとびらをしめ切って、

「それッ」
と、六尺どもに合図をする。
駕籠は将監が先頭で、抜刀の覆面どもに取りまかれ、早足に畑の中を迂回して街道のほうへいそぐ。
もう夜空に半鐘がけたたましく鳴り出して、藤沢の表街道はごったがえしていた。
露姫の駕籠はその人ごみの中をかきのけるようにして、戸塚口の宿外れのほうへ足を早めていく。
——万事好都合に運んだ。
駕籠の先頭に立つ将監は、これで千本松での失敗は見事に取りかえせたと思った。
千本松では完全に裏をかかれているだけに、この成功は将監としても実にうれしかった。
宵に行列の後を追った将監は、常陸屋へ入ると間もなく、念のために本陣へ張りこませておいた花長の子分から、意外な報告をうけ取った。
露姫と松江とが徒歩で駕籠のあとにつき、今たしかに本陣へ着いたというのである。
すると、弥一郎はあらかじめ千本松でのこっちの襲撃を予期して、姫君たちを駕籠の後から歩かせておいたのか、それとも間道づたいに進ませておいて、宿の入り口で行列の中へ加えたのか、いずれにせよ千本松へ残してきた待ち伏せは全然むだだったことになる。
そこで、将監は使いを走らせて、青島組も高柳組も一応常陸屋へ引きあげさせ、早急に第二の手段を講じたのである。
が、第二の手段は焼き打ちという過激な非常手段で、これが世間へもれると、たとえ姫君はうまく手に入っても、家名のほうがあぶなくなる。
だから、味方の者にさえ一言も相談せず、本陣へ切り込みをかけるという名目で、人数の配置をした。
そして、花長の子分のうちでもそういうことになれている勘吉という悪党一人だけにそっと

放火のことをいいつけて、本陣へ火をつけさせたのである。
　これさえうまくいけば、後は案外すらすらとこういう結果になることはほぼ見当がついていた。
　ただ、勘吉だけは後で切って口をふさいでおきたかったが、さすがに悪党だけあってそこは抜け目なく、
「だんな、あっしはその場から高飛びをしやすから、さきに金をおくんなさい」
と、五十両持っていっているから、火をつけるとすぐ逃げてしまっているだろう。
――むやみにそんなことを口外すれば、自分の首がなくなるのだから。
　このほうは、今が今、そう心配するにもあたるまい。
　それにしても、実にうまくいったものだと思う。
　このまま駕籠が宿外れへかかれば、そこに大学さまが馬の用意をして待っている。姫君をうけ取った主人は、戸塚まで一里三十町、一気に馬を飛ばすだろう。
　戸塚には花屋長兵衛がすでに旅籠（はたご）を取って待っているはずだ。姫君はいやでも今夜主人のものにされなければならない。そのほうが姫君としてもあきらめがつきやすいだろうし、諏訪党（すわとう）としても傷物になった姫君まで命がけで奪いかえす気にもなれないだろう。
　こっちはほどよいところで人数を千本松まで引きあげさせ、あくまでも敵の追っ手をここで食い止めてしまう。
　夜が明けたら、偽姫を敵のほうへ送りつけてやる。それで万事こっちの思いどおりに解決ということになるのである。
　駕籠が宿外れへかかると、中間に馬をひかせた大学が、気をもみながら待ちかねていた。
「おお、将監、姫君は――」
　うまくいったかなどとやられてはぶちこわしだから、
「幸い御無事におつれいたしましてございます」
と、将監はぎろりと目くばせしながら、すかさず答える。
「過分――」
　大学はさっと目を輝かせて、うなずいてみせる。
「姫君さま、当宿はごたごたしておりますので、分家さまが戸塚の宿まで御案内しますそうです。どうぞお出ましを」
　将監はひざまずいて駕籠のとびらをあける。
「履物は、将監」
　露姫は足袋はだしのまま畑の中へのがれているのだ。
「これは心づかぬことを――。失礼でございますが、急場のこと、どうぞこれを」
　将監は自分の草履をぬいで、いそいで懐紙で表を払ってから、駕籠の前へそろえておく。
　露姫はもう観念しているとみえ、黙ってこれをはいて駕籠を出る。
「姫君、大学が戸塚までお供いたす。少しも心配はない」
　大学はそんな気休めをいって、心せくままにひらりと乗馬にまたがり、
「さあ、姫君――」
と、上から手を差しのべる。
「馬に乗るのですか」
　さすがに露姫はびっくりしたように顔色をかえた。
「しばらくの御辛抱でございます。それに夜分のことでございますから」
　将監は何くわぬ顔つきで、
「これ、急場のことだ、背をお貸し申せ」
と、家来の一人に命じる。
「はっ」
　覆面侍の一人がそこへ両手をついて四つんばいになる。

「さ、どうぞ、姫君」
　将監がいやおうなしに姫君の一方の手を取り、もう一人が別の手を取って、両方から引っ立てるように台の侍の背中へ乗せる。
「それ――」
　その背中が少し高くなったとたん、大学が姫君の体を両手で抱きとるように鞍の上へ引きあげ、横がけにさせて、左手でしっかりと帯のあたりを抱きかかえる。
「手綱――」
「はっ」
　中間がわたす手綱を右で取った大学は、
「将監、後をたのみおく。――つづけ」
　そう言いすてるなり、馬腹に角を入れる。
　馬はいきなり早足に歩き出した。
「殿、お気をつけられますように」
　将監が声をかけている間に、馬はもう駆け足になっている。
　家来が三人ばかり、中間といっしょに馬のあとを追い出す。
　――これでよし。
　将監はほっとして、
「常陸屋へもどるぞ」
　と、残った家来たちに声をかけた。
　馬上に露姫をかかえて走る大学は、有頂天になっていた。
　――この名花さえ手に入れば。
　郡山十万石などにはあまり未練はない大学なのである。
　それにしても、藤沢の宿を早く離れてしまわなくては、諏訪党の追撃が怖い。ここまできてこの名花を万一敵に奪いかえされるようなことになっては、それこそこういう機会はもう二度とないのだ。大学は夢中で馬腹へ角を入れている。
　供の家来たちは、ぐんぐん後になっていく。
　露姫は激しい体の動揺に、じっと身をかたくして、真っ青になっているようだ。

　――もうわしのものだ。
　その体をしっかりと抱いて、大学は歓喜せずにはいられない。
「お露どの、しばらくの辛抱だ。この千本松を出外れたら、馬を少しゆるめよう」
　露姫は答えない。
　――雪、雪、どこにいるのです。
　たのみの綱は、ただ雪太郎だけである。
　それがあるから、露姫は敵のなすがままに、おとなしくしているのだ。
　きらいな大学などに胴をしめつけられているのは、体がすくむほどいやだと思うけれど、今は辛抱していなければならないのである。
　――でも、だんだん藤沢の宿が遠くなってしまって、大丈夫なのだろうか。
　雪太郎はこうして自分が馬で運ばれているのを、果たして知っているかしらと、それを思うとなんだか心細くなってくる。
　このまま戸塚まで運ばれてしまっては、分家にどんな目にあわされるかわかりきっているだけに、もう生きてはいられないのである。
　――やっぱり、あの時、どんなにしかられても雪のそばを離れなければよかった。
　露姫はいまさらのように後悔されてくる。
　弥一郎も松江も一生懸命になっていてくれるのはよくわかっているけれど、本当にたのみになるのは、やっぱり雪太郎一人なのだ。
　弥一郎だって、今夜雪のいうことをきいて、平塚まで敵を出しぬいていれば、こんな間違いはおこらずにすんだのだ。
　――そういえば、雪は、今夜はお妻さえよこしてくれなかった。
　ことによると、弥一郎のかたくななのを怒って、もう手を引く気になってしまったのではないだろうか。
　それだと大変である。雪ならどんなことになっても助けてもらえるという当てがあるが、ほかの者ではたとえ心はあっても、そんな力は到

底望めない。
　――どうしよう。
　露姫は心の望みを失うと、急にくらくらっと目まいがしてきた。いまにも馬からすべり落ちそうになる。
「どうした、お露どの」
　大学のいまわしい腕が、びっくりしたように胴を抱きしめる。
　――もういや。いっそ馬から落ちて死んでしまったほうがいい。
　そんな気さえしてきた時、
「あっ、何者――」
　大学が口走りながら、ぐいと手綱をひいたようだ。
　すでに千本松の半ばをすぎて、大学は前方に躍り出した黒い人影を見たのである。
　月あかりの街道へ躍り出した黒い人影は武士のようだった。
　馬をとめようとするもののごとく、いきなり大手をひろげて、行く手に立ちふさがっている。
　たった一人だから、まさかそれが比良雪太郎だとは、大学はまったく気がつかなかった。
「これッ。あぶない。どけ」
　大声に叱咤しながらもぐいともう一度手綱をしぼったので、それでなくてさえ目の前に迫った人の姿におびえていた馬は、ひ、ひいんといななきながら、前脚をあげて棹立ちになる。
「あっ」
　馬術には相当の心得のある大学だったが、前にともかくも人一人を抱えているので、どうにも鞍にいたたまらず、どっと落馬してしまった。
　上になって落ちた姫君は、花のように散ったもすそを恥じて、夢中ですぐふらふらと起きあがったが、大学は後頭部を打ったらしく、そのまま失神してしまったようだ。
「お露さま」
　よろめく姫君をしっかりと抱きとめたのは、雪太郎のたくましい腕だった。

「あっ、雪」
　露姫は月の光で、はっきりと雪太郎の顔を見さだめたとたん、気がゆるんだのと、激しい馬の動揺でそれでなくてさえ目まいを感じていたところだから、急に目の前が真っ暗になって、体がくずれ落ちそうになる。
「しっかりなさい」
　雪太郎は思わず姫君の体をささえ、次の瞬間無造作にそれを抱きあげていた。
「比良うじ、早くこの場を離れるほうがいい」
　松並木のかげから堅田が注意した。
「よし、出かけよう」
　雪太郎は露姫を抱いたまま、大股に間道のほうへ歩き出す。
「若だんな、うまくいきやしたねえ」
　吉松がそっと声をかけながら、雪太郎の深編み笠とふろしき包みを持って、いそいで先に立つ。
　堅田が引きそうようにうしろへつづいた。
　馬は小一町ほど先へ行ってとまったらしく、そっちから、ひ、ひいんといななく声が耳についた。
　――あぶない綱わたりだった。
　雪太郎はいまさらのように冷や汗を感じる。
　今夜は必ずなにかある。このままではすまないと見た雪太郎は、中村屋という旅籠につくとすぐ、吉松を常陸屋の見張りに立てておいた。
　果たして、九ッ（十二時）近くなって、常陸屋の敵はほとんど出て、本陣へ向かったと吉松が知らせてきた。
「それ」
　と、こっちが中村屋を出た時は、本陣はすでに火事を出していたのである。
　偶然ではあるまい。おそらく、曲崎が火をかけさせたのだ。とっさにそう直感した雪太郎は、現場へ駆けつけてもかえって混乱するばかりだと見た。
　敵は露姫を手に入れれば、必ず戸塚へ走る。

それに、こっちには敵の手からお浜を取りかえすという仕事もあるのだ。
　それやこれやで、雪太郎は思い切った戦法を選んだのである。
「三井、敵はほとんど本陣へ出払って、常陸屋は無人になっているはずだ。貴公は姐御と二人で、なんとかお浜を救い出す工夫をしてみてくれぬか」
　雪太郎はごったがえす本陣の前を通りぬけながら、三井にいった。
「で、若だんなは――」
「敵は姫君を手に入れれば、必ず戸塚へ向かう。奪還されやすい藤沢にはおかぬと思う。わしは堅田うじと二人で千本松に待ち伏せをかけてみようと思う」
「そうか。それも手には手だが、万一見こみが外れると、取りかえしがつかんことになりはせんか」
　三井は心配そうだった。
「それも考えてのことだ。わしの見こみが外れた場合は、敵は姫君を常陸屋へつれこむほかはない。その時は、貴公、なんとか弥一郎さんと連絡をとって、適当な処置を取ってくれ。わしたちもすぐに引きかえしてくる」
「なるほど、その手があるなあ」
「わしの見込みどおりだったら、貴公たちはお浜が手に入っても手に入らなくても、行列組は一応中村屋へ引きあげるだろうから、そこへ合併して、弥一郎さんにわしの行動を告げ、はやまったことをしないように注意しておいてくれ。わしは姫君を奪還した場合は無論だが、失敗した場合でも吉を中村屋へ走らせて、必ず連絡をとる」
「わかった、やってみよう」
　三井は例によって打てばひびくといったように、すぐ納得してくれた。
「たのむよ」
「心得た。若だんな、おたがいにあくまでもし

ぶとくならんといかんぜ」
　どんなことがあっても、決して望みは失うなという意味だったのだろう。
「大丈夫だ。必ず一人勝手な行動は慎むつもりだから」
　雪太郎はあつい三井の友情を感じながら、常陸屋の手前から用心して、裏道を取ることにした。
「堅田うじ、たのむよ」
　三井はまた堅田にも声をかけていた。
「よろしい。我々は若だんなの手足である」
　雁之助はぽんとわが胸をたたいていた。
「若だんな、あたしにはなんにも言ってくれないんですか」
　お妻が不平そうにいうと、
「姐御は三井うじの手綱である」
と、堅田がとっさにかわって答えていた。
　こうして千本松の中ほどへきて陣取った雪太郎は、万全の策は取ったつもりでも、遠く分家の馬のひづめの音を聞くまでは、まったく気が気ではなかった。
　しかし、今はこっちの考えていた以上にうまく事が運んで、露姫をしっかりとわが胸に抱き取っている雪太郎だった。
　ただ心配なのは、いま自分たちが取っている道は、さっき一度通った間道だということである。分家に追いついた家来たちが、分家の口から姫君を奪還されたと聞けば、少し頭の働く者なら、すぐにこの間道に気がつくだろう。
　――追っ手が怖い。
　雪太郎の足は自然に早くなる。
「雪――」
　ふっと我にかえった姫君は、よろこびをかみしめるような目をして、しみじみと雪太郎の顔を見あげる。
「気分はなおりましたか、姫君」
「もう大丈夫です。重いでしょう。露はすこし歩きましょうか」

「さあ、歩けますかな。この辺はまだ追っ手の心配がありますからな」
　だんだん抱き重りはしてくるが、しかし姫君の足をおもうと、雪太郎は歩かせる気にはなりきれない。
「追っ手がくるのですか」
　露姫はびくりとしたように、胸へすがりついてくる。
「藤沢を通りぬけてしまうまでは、安心はできません」
「では、このまま平塚まで行くのですか」
「そうするほかはないと思います」
「うれしい。もう敵につかまるのはいやです。露を、露を放してはいけません」
　雪太郎はそれには答えず、
「堅田うじ、宵の計画どおり、平塚までのしてしまおうと思うが、どうだろう」
　と、うしろの雁之助に相談してみた。
「賛成です。やっぱり、最初の計画のほうが一番よかったんだ」
「吉、中村屋へ走って、三井にそっとこっちの報告をしてきてくれ」
「へえ」
「御苦労でも、藤沢の様子が聞きたいから、すぐに三井の返事を持って、追いかけてきてくれぬか」
「合点です、あっしは若だんなの足でさ。どこへでも飛んでいきやすから、遠慮なく使っておくんなさい。この笠とふろしき包みはどうしやしょう」
　ふろしき包みの中には中間の衣装が入れてあるのである。
「それはわしがあずかる」
　堅田が前へ出て、荷物をうけると、
「行ってきやす」
　吉松はもう一散に走り出した。
「若だんな、それでは重かろう。いっそおんぶにして、ひもでくくりつけてはどうか」

　いかに軽いといっても、子供ではないから、抱いたまま三里半の道は無理だ。
「お露さま、おんぶにしますか」
　雪太郎がわらいながら聞く。
「人が見て、わらいませんか」
「お姫さま、こんな真夜中に、だれも人は通りません。それに、ひもでしばりつけておいたほうが、若だんなも一人で逃げられないから、安心じゃありませんか」
　堅田がそばからうまく持ちかけていく。
「では、そうします。雪、おぶってください」
　露姫は無邪気に乗ってきた。
「まあ、藤沢を出外れるまで、このまままいそぐことにしましょう」
　腕は重いが、抱いているのはわが心の宝なのだ。堅田が前になっているのをいいことに、雪太郎はつい抱きしめて、ほおずりせずにはいられない。
　見ている者は明るい秋の月だけだった。
　その月あかりの中で、露姫のうれしそうな顔が、うっとりとわらいかけてくる。

一難また一難

　宿外れから常陸屋のほうへ引きかえす途中で、将監は高柳峰十郎の組が十人ばかりの人数をしたがえて、かねての打ち合わせどおり千本松へ出向こうとするのに出会った。
「おお、御用人、そっちはうまく運びましたか」
　たった今乱闘場から引きあげてきたのだから、この組はまだみんな殺気立っているようである。
「うむ、こっちは順当に運んだから心配はない。青島の組はどうした」
「予定どおり常陸屋の前まで引きあげて、敵の反撃に備えています」
「人数に欠けた者は一人もないか」
「ありません」
「敵の様子はどうだ」

「なにしろすっかり狼狽していますからな、逆襲に出るにしても、そう簡単にはいかんでしょう」
「そうか。では、千本松のかためをたのむぞ」
「承知しました」
こんどは勝ちいくさなのだから、みんな張り切っているようだ。
本陣はまだ盛んに燃えているが、常陸屋は風上になるので、ほとんど類焼の心配はないだろう。それに、もう火消し人足が続々と駆けつけて、火を本陣だけで食いとめようと必死になっているから、そう大事になるおそれはあるまい。
――なるべく本陣だけですんでくれるように。
自分でかけさせた火なのだから、さすがに将監にもそれだけの良心はあった。
「御用人、うまくいきましたなあ」
常陸屋の前までくると、そこをかためていた青島がそばへ寄ってきて、にやりとわらった。
「うむ、こんどこそどうやらな。もうしばらくかためをたのむぞ」
風上ではあるが、風向きはいつかわらないともかぎらないので、常陸屋は客も家人たちも、気もそぞろにごったがえしている。
将監は足袋はだしで、玄関からは入らずに、庭をぬけて奥座敷の廊下へまわっていった。
座敷という座敷の戸障子は、いつでも立ちのけるように、もうみんな開け放している。
「あ、御用人さま、とんだことになりました」
美代一人をしたがえて廊下に出ていた清野が、目ざとくこっちを見て、いつになくあわてた声を出す。
「どうしたな、清野どの」
「お浜の姿が見えません」
「なにッ」
「今し方まで、美代といっしょにいたのですが、急に見えなくなってしまったのです。ごたごたと人の出入りが激しいので、それにまぎれて逃

げ出したのではないでしょうか」
「あんなにおとなしくしていたのにな」
今まで逃げ出すなどという風は一度も見せていないお浜だが、考えてみると、それだけこっちに油断がなかったからで、機会さえあれば逃げたいのは当然だった。
それに、姿こそ見せないが、比良たちの一行が藤沢のどこかへ忍びこんでいることはたしかなのである。
その比良たちが、今ごろこんなところをうろついているとすれば、将監としてはむしろ安心していられることにもなる。
「清野、お浜のことはまあいい、ほうっておこう」
将監は小声でささやきながら、廊下へ腰をおろした。
「では、本物のほうが、うまくまいったのでございますか」
にじり寄るようにして、清野が聞く。
「うむ、たった今し方、殿さまが馬にのせて戸塚へ向かった」
「それをうかがって安心いたしました」
「それにな、わしが心配していたのは比良たちの行動だが、お浜をここからつれ出すとすれば、まず彼らのほかにはない。ということは、殿さまは今ごろとりこをつれて、もう彼らの手のとどかないところまで走っているということだ」
「それはそうでございますね。それで、こちらはこれからどうするのでございます」
「我々もすぐに戸塚へ引きあげることにしょう。もうここには用はない」
「行列のほうはどうなりましょう、肝心の人をとりこにされて」
「さあな。行列はお浜でも身がわりにして、明朝ここを立つほかはあるまい。一方、弥一郎が今夜にも江戸へ飛んで、おやじ頼母を引っぱり出してくる。そのころには、殿さまのことだから、もう如才なくとりこをわがものにしている

だろう。頼母がどうあがいても後の祭りという
ことになる」
「そううまくいってくれるとよろしいのですが」
清野にはなにか不安な予感があった。現に、自分が思わぬ失敗をしているだけに、妙に安心しきれないものがある。
果たして、その予感を裏書きでもするように、
「おお、御用人、ここでしたか、一大事が起こったようです」
と、青島市郎太が庭づたいに駆けつけてきたのだ。
「どうしたな、一大事とは」
「殿さまが千本松で落馬されて、気を失っているうちに、とりこがいずれかへ逃げてしまったというのです」
「なにッ」
将監の顔色がさっと変わった。
「市郎太、殿さまは落馬されたのか、それとも落馬させられたのか」
「無論、させられたほうでしょうな。千本松の中ほどまで進むと、だれか一人松の木のかげから躍り出して、いきなり大手をひろげた、おどろいて手綱をしぼったとたん、馬が棹立ちになったというのです」
「そうか。すると、その男はとりこを取りかえす目的で、千本松へ先まわりをしていたことになるな」
「そうでしょう。まさか追剝がそんな大胆なまねをするはずはない。たぶん比良雪太郎の仕事だろうと思います」
「うむ、比良に相違あるまい。――そうか」
将監はさすがにもう冷静さを取りもどしていた。
「市郎太、だれか気の利いた者を二、三人、すぐに敵のほうへやって、様子を監視させてくれ。比良なら必ずとりこを行列へ運ぶだろう」
「心得ました」

「そちは組下を指揮して、逆に間道を洗ってみてくれ。あるいは途中でぶつかるかもしれぬ」
てきぱきと指図する将監だった。
そのころ――。
本陣の裏の雑木林の前の畑へ、弥一郎と松江をかこんで集合した行列組は、みんな暗然と息をのんでしまった。
そのあたりまだ燃えつづける火事場の火に、人も、林も、畑も、赤々と無気味にうつし出されている。
「だれも火に巻かれた者はないだろうな」
遅まきながら、さすがに弥一郎はそこへ気がついて、一同を見わたす。
その弥一郎はじめ、敵と散々に闘った供侍たちは、いずれも切っ先に衣類を切り裂かれて、中には薄手を負った者さえ数人いた。
「幸い人数に欠けた者はないようです」
道中奉行の加納庄兵衛が、一同にかわって答える。
「道具の類はどうか」
「これもほとんど持ち出しております」
姫君と松江の駕籠が二丁、挟箱、長持ちまで無事にそこへ持ち出されている。
無論、これは庄兵衛以下の働きだったが、そっちへかかっていたために、三十人近い警固の人数が、残らず乱闘に参加することができず、大切な姫君を敵の手に渡す結果となったのだ。
が、これは決してそっちで働いていた者たちの責任とはいえない。むしろ、とっさの火事に、まず人員を、それから道具類まで、落ち着いて指図して、事なきを得たのは、庄兵衛たちの手柄というべきだろう。
「一同それぞれによく働いてくれてかたじけない」
弥一郎はともかくも一同をねぎらうことを忘れなかった。
しかし、一同はただ黙念としてうなだれているばかりだ。

「申し訳ございません、弥一郎さま。松江が、松江がふがいないばかりに――」
　松江はたまらなくなったように、たもとで顔をおおって泣き出す。
「いや、今夜のことは松江さんだけの責任じゃないんだ。申し訳ないといえば、この弥一郎は当然腹を切っておわびしなければならない立場だ。しかし、いまそれより大切なのは、どうして敵の手から無事に姫君さまを奪還するかということなんだ」
　弥一郎は必死なまなざしで、じっとくちびるをかみしめる。
「そのとおりです、弥一郎どの。腹はいつでも切れます。その前に、一同心をあわせて、もう一戦、命がけでやってみましょう。一同はどうか」
　年輩だけに庄兵衛がきっぱりといって、一同をうながす。
「お供頭のいわれるとおりだ。心をあわせて、みんなで死力をつくしてみようではないか」
「賛成だ。悪人どもに負けっ放しということはない。弥一郎どの、なんなりと指図していただきます」
　若侍たちは急に意気を取りもどしてきた。
「ありがとう。では、その意気で逆襲に移るとして、――光吉、光吉はおらぬか」
　弥一郎は若党を呼ぶ。
「はい、ここにおります」
「おお、――お前常陸屋へ走って、敵の様子を見とどけてきてくれ。備えがあれば、まだそこに姫君はいる。菊造もいっしょにつれていくがいい」
　大きな責任を持っている弥一郎は、内心腹を切る以上につらいものがあった。
　この火事は、無論、目的のためには手段を選ばぬ将監が、何者かにいいつけて放火させたものに違いないのだ。
　宿場の迷惑を考えると、この上常陸屋へ逆襲

をかけて、宿中を混乱させるのは忍びないものがあるばかりでなく、その争いのもとがこの火事の原因になっているのだと、少し心ある者ならだれしも一応は疑ってみたくなるだろう。
　そういう事実が表立ってくると、たとえ姫君は取りかえせても、家名断絶はまぬがれなくなる。
　――むしろ、比良の説にしたがって、姫君を平塚まで先行させてしまったほうが、賢明であったかもしれぬ。
　弥一郎はいまさらながら、おのれの不明を後悔せずにはいられなかった。
　松江ももう覚悟ができたらしく、ふっとそれを心配し出す。
「弥一郎さま、将監は姫君さまを常陸屋へおつれしていますかしら」
「どうしてだ、松江さん」
「敵はちゃんとお駕籠の用意をしていました。ことによると、あのまま戸塚へ引きかえしたのではないでしょうか」
「うむ、そういうことも考えられるな」
「あたくし、いっそそうであってくれたほうがよいと思います。それなら、闘いは途中になりますから、この上この宿に迷惑をかけずにすみます」
　さすがに松江の頭はよく働く。
「そのとおりだ、松江さん。わしも今それを考えていたのだ。よし、追撃するなら早いほうがいい。すぐ追い討ちをかけよう」
　そう弥一郎の決断がついた時、光吉といっしょに物見に走った菊造が、あたふたと引きかえしてきた。
「若だんなさま、三井さんがまいりました。なにか大切なお話があるんだそうです」
「なに、三井うじがきてくれたのか」
　三井のかげには比良がついているのだから、弥一郎は思わず目を輝かさずにはいられなかった。

「おお、三井うじ」
　その三井は深編み笠(がさ)を左手でかかえて、大股(おおまた)にこっちへ近づいてきた。
「弥一郎さん、みんな無事ですか」
「いや、たった一人、大切なお方が――」
「それは承知しています。そっちは比良が堅田といっしょに出向いていますから、たぶん大丈夫でしょう」
「なんと言われる」
「姫君は分家が馬で戸塚へおつれしたようです。敵の人数はこっちの追撃に備えて宿外れへ集結するだろうから、肝心の分家の供は多くても四、五人、比良と堅田で十分です。間もなく比良から連絡があるでしょう」
「本当か、三井さん」
「わしはお妻と二人で、常陸屋から偽姫のお浜を助け出す役だった。これはお妻がうまくやってくれました。二人ともあの林の中へかくしてあります。後はこの火事のおさまるのを待って、中村屋へ避難するようにという比良のことづけです」
　委細を告げる三井の顔は、世にもあかるかった。
　翌朝――。
　露姫の行列は定刻五ッ（八時）に、中村屋から藤沢を立った。
「姫君のお駕籠には、お高祖頭巾(こそずきん)を目深にかぶった姫君が乗りました。お浜がお身がわりをつとめたのでございましょう」
　物見に出ていた若党倉平が、常陸屋へ引きかえしてきて、将監に告げる。
「行列の中に、比良の組の者はいなかったか」
「あの組の者はだれも見かけませんでした」
「そうか」
　廊下に立っている将監は、今朝もよく晴れた深い秋空へ目をやって、ふっと疑問がおこってくる。
　昨夜、時を移さず千本松の間道を洗わせた青

島組は、それらしい者はだれも見あたらぬといって、むなしく引きあげてきた。
　千本松をかためさせた高柳組も、無論だれにも出会っていない。
　そして、家来たちに守られて馬で帰った大学は、
「いきなり馬の前へ飛び出してきたのは、一人だった。それが比良というやつなら、ひづめにかけてけちらしてやるのだった」
と、悔しがっていた。
「比良はことによると、こっちの意表を突いて、戸塚へ向かっているかもしれません。殿はこのままお馬で、予定どおり戸塚へまいってみてくだされたい」
　将監は念のために家来五人をつけて、大学を戸塚へ走らせたが、そっちにもそんな様子はなにもないと、程経て花屋長兵衛から報告の使いがとどいている。
　本陣の裏の畑へ出した間者たちは、すでにお浜を手に入れた行列組は、それを守るようにして火事がおさまるまで畑の中にいたが、火がようやく衰えかけると、そこで行列を組んで、中村屋へ入ったと報告してきている。そして、ここでも比良たちの姿はだれも見かけていないのだ。
「お浜が一人で行列組へ行けるはずはありませんから、あのお妻という女を入れれば四人のうちのだれかがついていったに違いありません。その者たちは、お浜を弥一郎どのにあずけるとすぐ、姫君のほうへ走ったと見ていいのではないでしょうか」
　この清野の意見は、ほぼそのとおりだろうと、将監にもうなずける。
「で、姫君は彼ら四人に守られて、いまどこにいるだろうな」
「藤沢にいるとは思えませんから、平塚へ走ったのではないでしょうか」
　これはまだ戸塚から大学の使いがとどく前で

はあったが、将監もたぶん平塚と見当をつけていたので、
「市郎太、ともかくも平塚へ走ってみてくれ。どのみち、明日は小田原泊まりになる。比良たちは必ず先行しているに違いないから、敵に追いつくまで追ってみてくれ」
と、青島組にいいつけた。
「承知しました。それで、御用人は――」
「わしは高柳組といっしょに、行列のあとをつけてみることにする。箱根を越えてしまっては事が面倒になる。ぜひ明日中になんとかしなければならんのだ。たのむぞ」
「心得ました」
青島組はこうして昨夜のうちに平塚へ向かっている。
今朝になっても、昨夜平塚へ走った青島組からは、まだなんの報告もとどいていない。おそらく、いまだに姫君の手がかりがつかめずにいるのだろう。
平塚の宿も、その次の大磯（おおいそ）も、そう大きな町ではない。敵がどううまくかくれたところで、姫君という目につきやすいお荷物がいっしょなのだから、そういつまでも手がかりがつかめないはずはないのだ。
――ひょっとすると、今朝駕籠にのったお高祖頭巾の姫君というのは、お浜ではなくて、本物かもしれんな。
将監は急にそんな気がしてきたのである。つまり、比良たちは昨夜平塚へ向かったのではなく、藤沢のどこかにかくれていて、明け方近く本物を中村屋へとどけ、お浜と引きかえていく。今までの比良のやり方から見て、そんなことは絶対にないとはいい切れないのだ。
――では、どうしてそれをたしかめるか。
お浜を手に入れた比良たちは、こっちが行列を追って藤沢を出ていくのを待ち、もう用のないお浜とお妻二人だけでも、江戸へかえすのではないか。

「倉平、高柳を呼んでくれ」
将監はいそいで若党にいいつける。
「はい」
高柳たちはすでにわらじをはいて、店の土間に出発の命を待っているのだ。
「御用人、出発しますかな」
峰十郎が庭からまわってきて聞いた。
「うむ、すぐに行列の後を追ってくれ。ことによると、お駕籠（かご）の中は案外本物かも知れぬでな、適当に間者を使って、様子をさぐらせてくれぬか」
「なるほど、そういえば青島からなんの報告もありませんな」
ことごとに青島と張りあっている高柳は、もう目を光らせている。
「どっちみち襲撃は日が暮れてからだから、それまでに偽物か本物かをたしかめておいて、わしの指図を待つ。わしは一足後から立つから、なにかあったら必ず連絡を怠らぬように。今日が勝負の山だ。しっかりたのむぞ」
「心得ました」
高柳は自分の組の浪人どもをつれて、すぐに出発していった。
「倉平」
「はい」
「お前は戸塚口の宿外れへ行って、ひょっとするとお妻がお浜をつれて江戸へ向かうかもしれぬ。姿を見かけたら、すぐここへ知らせにもどれ。連絡はいい時にこっちから取る」
「かしこまりました」
倉平が走り去るのを待って、将監は清野が待っている座敷へ入った。
「御用人さま、あたくしの今日のお仕事は、なにをすればよろしいのでございます」
清野は切り口上にいいながら、将監が火ばちの前へ座るのを待って、つとひざへにじり寄ってきた。品川を立って以来、人目が多く、こうして二人きりになれたのは今日がはじめてなの

である。
「清野どのはな、今日は戸塚へ引きかえして、大学さまといっしょになってもらうことにしょう」
将監は熱ぼったい女の目を見すえて、わらいながらずばりといった。
弥一郎は今のところ、すべてを比良雪太郎に信頼しているほかはなかった。
昨夜本陣の裏の畑の中で、三井から話を聞いているところへ、吉松がどこからかふらりとまぎれこんできて、
「お姫さまは無事に比良さまの手に助けられました。比良さまは堅田さんといっしょに、お姫さまをまもって、このまま平塚まで先へ行くそうでござんす。あっしは三井さんのほうの話を聞いて、すぐに若だんなのほうへ追いつかなけりゃなりやせん」
と、三井に告げた。
「聞いてのとおりです、弥一郎さん」
「ありがとう。恩にきる、三井うじ」
弥一郎は思わずしっかりと三井の手を握らずにはいられなかった。
「吉松、御苦労でしたね。姫君さまはお元気な御様子でしたか」
松江もよっぽどうれしかったとみえて、いきなり吉松の前へ走りよって聞いていた。
「へえ、馬から落ちやしてね、あっしはびっくりしやしたが、分家さまの上になって落ちたんで、けが一つありやせんでした。分家さまはそのまんま気絶していたようです」
「家来どもはついていなかったのか」
と、三井が聞く。
「きっと先をいそいだんでげしょう。家来どもなんかにかまわず、馬を飛ばしてきたんでさ。まさか、うちの若だんながあんなところで待ち伏せしているだろうとは、お釈迦さまでもご存じあるめえの口ですからねえ」
「若だんなはやっぱり頭がいい」

三井がうれしそうにいうのを聞いて、弥一郎は内心赤面せずにはいられなかった。
「姫君さま、おひろいになれましたかしら」
藤沢から平塚までは三里半あるのだ。
「いいえ、追っ手があぶないってんで、若だんながおんぶで行くことになっていやす」
「そうでございましょうねえ」
比良が露姫をおぶって、月の街道を歩いている姿を思いうかべながら、しかし弥一郎はただほほえましいだけで、なんの邪念も感じなかった。
分家の手にわたらなくてよかった。ただしみじみとそう思っただけである。
「弥一郎さん、松江さんもちょっとこっちへきていただきたい」
三井は二人をさそって雑木林の中へ入った。
そこにお妻がお浜といっしょに待っていた。
お浜は偽姫姿だが、掻取りは着ていなかった。
三井はお妻に一通りの話を告げて、
「わしはなあ、姐御、吉をつれてすぐ若だんなに追いつく気だ。若だんなの気持ちは、たぶん、お浜うじが助かったら、姐御はお浜うじといっしょに江戸へ帰るようにと考えていると思うんだが、姐御はどうする」
と、お妻に聞いていた。
「あたしは三井さんといっしょに若だんなの後を追います。姫君さまにはやっぱり女手が入りますからね」
「お浜うじはどうなるんだ」
「行列にはお姫さまが入用なんじゃないんですか」
「そりゃまあそうだろうが、これは姐御が一人で勝手にきめてもいかん。お浜さんの気持ちを聞かなくちゃな」
三井がたしなめてわらう。
「あたし、姉さんのいない江戸へ一人で帰りたくありません」
お浜は訴えるようにお妻にいっていた。

「大丈夫よ、一人で帰れなんて、だれもいいやしないから」
お妻ははっきりと引きうけて、
「弥一郎さん、しばらくお浜をあずかっていただけますね」
と、なにもかも一人でのみこんでいるような口ぶりだった。
「お浜うじ、姫君の身がわりになっていいのかね」
三井がそばから口を足す。
「はい、あたしでお役に立つことでしたら、お役に立ててくださいまし」
お浜はどこまでも素直な娘だった。
「さあ、それで話がきまった。三井さん、あたしたちはすぐに出かけましょう」
お妻がせき立てる。
「よかろう。弥一郎さん、行列は明日の朝定刻に中村屋から立つことになるんでしょうな」
三井が改めて念を押す。
「そうすることにしよう。なにかあったら、できるだけ度々連絡を取ってくれるようにと、比良うじにことづけておいていただきたい」
明日どこで姫君を行列にもどしてくれる予定なのか、一番それが聞きたい弥一郎だったが、そこまではさすがに口にしかねたのである。
「心得た。必ず連絡を取るようにいっておきます」
三井はそう約束して、お妻と吉松をつれ、その場から平塚へ向かっていった。
そして、こっちは今朝定刻に、お浜の偽姫をまもって中村屋を立ってきたのだが、あれっきり三井からも比良からもなんの連絡もない。
無論、連絡のないのは無事だからだろう、昨夜果たして三井の一行は比良たちにうまく追いつけたか、昨夜はどこへ泊まったのか、弥一郎は責任者として、やっぱりそれが早く知りたかった。
「弥一郎さま、あたくしは昨夜一度死んだ体で

ございます。もうなにも考えずに、天の啓示にしたがいましょう」
今朝藤沢を立つ時、松江がきっぱりといい切っていた。
「うむ、わしもその覚悟だ」
比良たちに助けられたのだから、今後は比良たちの采配に信頼しているほかはないのだが、なんの連絡もこないのは、なんとしても不安でもあり、不満でもあった。
が、行列の諸士は、ともかくも姫君は無事とわかっているので、昨夜の寝不足のわりにみんな足取りが軽かった。
今日は大磯で中食になり、午後は小田原まで四里の道のりだから、酒匂川へかかる前に日が暮れるだろう。
――将監はどんな手段をたくらんでいるかな。
この行列の後を十数人の浪人組がつけていることは、菊造の報告でわかっている。
が、その中に女駕籠もないし、将監の姿も見あたらなかったという。
すると、将監の組は浪人組の後からくると見ていいはずだが、万一自分たちより先へ出ているとすると、これは比良たちとの間を中断されていることになるから、えらいことになってくる。
そのころ――。
平塚の農家を起こして、二刻半ばかり休養を取った比良組は、そこで姫君を町娘に仕立て、五ツ半（九時）ごろ平塚を立った。
昨夜、途中で三井組が追いついているから、一行は男四人女二人のにぎやかな道中である。
「比良さん、お露さまは駕籠がいいんじゃありませんか、まさか、真っ昼間おんぶもできませんからね」
平塚の宿を通る時、お妻がすすめたが、
「いいえ、露は歩けます」
結いつけ草履で雪太郎と肩をならべている露

姫は、町娘になってみんなといっしょに歩けるのがおもしろかったか、元気よくそう答えていた。

　ここから大磯まで二十七町、大磯から小田原までが四里、どうゆっくり歩いても今日は明るいうちに小田原へ入れるはずだから、雪太郎も無理に駕籠になさいとはいわなかった。

　それに、昨夜は平塚までずっとおぶいとおしてきたのだから、足は少しも疲れていないはずでもある。

　今日は先頭を堅田と吉松が歩き、次を姫君と雪太郎、しんがりを三井とお妻が歩いていた。

「三井さん、やっぱりだめね」

　やがて向こうに大磯の松並木が見えはじめたころ、姫君はもうすっかり足がおそくなって、雪太郎に腕をかかえられるようにして歩いているのだ。

「下駄(げた)をはいて往来を歩くなどということは、ほとんどないんだろうからな」

「金魚を大川へ放したら、あんな風になるかしら」

「なるほど、金魚姫はどこまでも金魚姫というわけだな。あれじゃとても家来のお嫁にはなれない。若だんなが逃げ出すわけだ」

「そうでもないんじゃないかしら。ゆうべから抱いたりおぶったり、若だんなとても親切なんだもの」

　寝るにも起きるにも、そばから雪太郎を放さない。少しでも姿が見えないと、雪はと目でさがしているお露さまだった。

「やけるか、姐御」

「なに言ってんのよう」

　お妻はいきなり力一杯三井の腕をつねりにいっていた。やっぱり、多少はやけるのである。

「痛いッ。おれに八ツ当たりしたってしようがないぜ」

「お手近で間にあわせておいたのよ」

「しかし、若だんなも本当はかわいくてしよう

がないんだろうな」

「そういえば、ゆうべからあんまりしからなくなりましたね」

「なにもしかることはないじゃないか。お露さまは天真爛漫(てんしんらんまん)なんだ。好きだから好きだと、はっきりいっているだけの話なんだからな」

「雪、くたびれたでしょうって、ゆうべなんかその度にほおずりをしているんだもの、ちょいと天真爛漫すぎるわ」

「見ているほうが悪いのさ。いちいちそんなところを見てよだれを流していたなんて、姐御も相当天真爛漫だなあ」

「三井、もう一度言ってみろ」

「あぶない」

　三井はあわてて二尺ばかりわきへ飛びのいていた。

「お露さま、もうだめになったのですか」

　雪太郎はまるっきりもたれかかってくる姫君の腕を引っ立てるようにして歩きながら、これはいかんと思った。

　これから先、この足を計算に入れてかからないと、とんだ手違いが生じてくる。

「露もっと歩けると思ったのですけれど」

　お露さまは意地もみえもなくなってきたようだ。

「もうすぐそこが大磯です。大磯へ行ったら駕籠にしましょう」

「本当は、いつまでもこうして雪と歩いていたいのですけれど——」

「昼間はおんぶはできません」

「わかっています。でも、雪、行列へかえしてはいやです」

　姫君は一番それを恐れているようである。

　雪太郎はわざと答えなかった。敵の様子によっては今にも行列へもどさなくてはならなくなるのだし、たとえ無事に国入りをすませても、結局は別々に生きていかなくてはならない二人なのである。

「露はゆうべから本当にたのしい。いまもとてもうれしいのです」
　お露さまはうっとりとささやきかけてくる。
「露は郡山へまいってはいけなかったのです。いつまでも明石にいればよかった。でも、雪はどうして明石を浪人してしまったのです。露がきらいなのですか」
「そんなことを、お口になすってはいけません」
「いいえ、こうしていればたのしくいられるものを、雪は露がきらいなものだから、わざと黙って明石を浪人してしまったのです」
　姫君はそんなだだをこね出しながら、だんだん気が高ぶってくるようだ。
「露はもう雪を放しません。露は雪といっしょに暮らすのが、一番しあわせなのです。雪だって本当はそうなのでしょう」
「そうだだをこねては困りますな」
「だだではありません。露はちゃんともう覚悟をきめています。こんどお国入りをして、無事に江戸へかえりましたら、露は明石のおうちへもどらせてもらいます。その時は雪も明石へもどってくれなければいけません」
　露姫は夢のようにそんなことを考えているらしい。
　そして、そんなはかない夢にあこがれて、うっとりと現実を忘れている一時こそ、お露さまの一番しあわせな時なのだと思うと、雪太郎はあまりにもいじらしくて、もうどうにもたしなめる気にはなれなかった。
「雪、怒っているのですか」
　抱えられている腕にまつわりつくようにして、肩へほおを寄せてくる姫君だった。
「お露さま、うしろで三井とお妻がわらっているかもしれませんぞ」
「足が弱いからですか」
「それもありますが、そんなに寄りかかってくると、またおんぶをねだっているとしか見えませんからな」

「雪の背中は楽です。でも、昼間は人がわらいますね」
　あわよくば昨夜のように背中がねだりたいのらしい。
「さあ、もう大磯の宿へ入りますから、少ししゃっきり歩かなくてはいけません」
　どうやら大磯の宿へかかってくると、先頭を吉松といっしょに歩いていた堅田が、ひょいと立ち止まった。
　見ると、宿場のほうからきたこれも深編み笠の旅の武士が、三間ばかり前へ立ち止まって、意味ありげにじっとこっちを見ているようだ。
　――はてな。
　敵かもしれぬと、こっちも深編み笠の中から雪太郎が思わず目をみはりながら、堅田のほうへ近づいていくと、向こうは急に笠のふちへ手をかけ、わざとこっちへ顔を見せるようにして、にっとわらったと思うと、ゆっくりときびすをかえし、すたすたと今きたほうへ引きかえしていく。
　その顔はたしかに浪人組の秋山信助だった。
「秋山うじだな、若だんな」
　振りかえって堅田がいった。
「うむ、わしもそう見た」
「なに、あれは秋山うじだって」
　三井が後から追いついて聞きとがめる。
「うむ、たしかに秋山だった」
　その秋山の姿はみるみる遠くなっていく。
「すると、この先に敵の伏勢ありということになるぞ」
　三井の声は重い。
「たぶんそうだろう。ゆうべのうちに先まわりをしていたのだ」
　雪太郎はそう断定するほかはない。
「わざわざ知らせてくれるなんて、おもしろい男だな、あれは」
　堅田はそう感心してから、
「しかし、どうする、若だんな」

と、さすがに心配そうだ。
「まあ、歩きながら話そう。まさか、この真っ昼間、宿中で待ち伏せもしていまい」
　立ち話は目立つので、雪太郎は一同をうながしながら、将監の腹を読んでみる。
　こっちがお露さまをつれて先行していることは、無論詭道だ。たぶんそうだろうと将監は考えても、自分が先頭に立って全員で昨夜のうちに先へ出たとは考えられない。
　人数の半分にこっちを追わせ、後の半分は戸塚方面をよくさぐった上、今朝行列の後をつけることにしているのではないか。
　分家の家来をのぞいた浪人組の半数といえば、十人足らずだ。こっちを三人と見ていれば、おそらく八人の人数で事たりると見ているだろう。
　――できれば切り払って、このまま小田原へ押し通ってしまったほうがいいのだ。
　大磯で行列を待って一つになるという手もあるが、それだとまた日が暮れてから、こんどは前後から挟撃されるおそれがある。敵は昨夜の失敗で、今日は決死の腹をきめているだろうから、一つになられるとそれだけ犠牲者も多くなるだろう。
「三井、敵の待ち伏せはたぶん浪人七、八人と見るが、どうだ」
「なるほど――、それで」
「思い切って三人で切りぬけてみようと思う。冒険すぎるだろうか」
「お露さまはどうする」
「問屋場で駕籠を雇って、状況によっては姐御といっしょに引きかえしてもらう。吉松を先へ弥一郎さんのほうへやって、行列にいそいでもらうという手もある」
　一番安心なのは、敵は絶対に姫君には刃を向けないということなのだ。
「よかろう、やってみることにしよう、若だんな。多少の冒険はあらかじめ覚悟の前だ。なあ、

堅田うじ」
　三井は納得して、前の堅田に同意を求める。
「それがいいとわしも思う。こんなことを当てにするわけじゃないが、秋山信助うじは、この間の晩のやり方からみても、なかなか味のあることをやる男だ。いかんものなら、きっといかんとなぞをかけて帰る」
　堅田は堅田らしい見方をしているようだ。
「若だんな、あっしはすぐ行列のほうへ突っ走ることにしやしょうか」
　吉松が振りかえっていう。
「うむ、弥一郎どのにな、よくわけを話して、とりあえず前衛だけを急行させてくれるようにたのんでおいてくれ」
「かしこまりやした」
　吉松はすぐに逆もどりに走り出す。
「雪、露はまた行列へもどるのですか」
　お露さまはしっかりと雪太郎の腕をつかんでいる。
「場合によってはそうなります」
「それは雪たちが負けた時のことですね」
「無論、勝てばこのまま小田原へ走ります」
「負けてはいけません、雪。露のために、きっと勝ってください。雪が死ねば、露も生きてはいません」
　雪太郎は愕然とした。お露さまは本当にそんなまねをしかねないのである。
　が、これも宿命ならしようがないじゃないかと思ったので、
「大丈夫です。雪は強いから、きっと勝ちます」
と、明るく答えておいた。
「三井――」
　お妻が三井の腕をつかんで、わざとそこへ立ち止まる。
「なんだ、姐御」
　その間に前の雪太郎とお露さまは次第に離れていく。もうこっちの話は耳にとどかないと見て、

「お前さん、若だんなのかわりに死んでおくれよ」
と、押さえつけるようにしていいつける。
「おれに切り死にをしろというのか、姐御」
「そうよ。そのかわり、あたし、その場で尼になって、一生お前さんのお墓掃除をしてあげる」
真剣なお妻の目の色だ。
「しかし、墓の下と上とで話ができるかな」
「お露さまがかわいそうだとは思わないの、三井。あの人は、若だんなが死ぬと、本当に自害する。とても無邪気なんだもの」
「しょうがあるまい。あの金魚は、もう若だんななしでは生きていられなくなっているんだからな」
三井はそういいながら歩き出す。
「死んでくれるわね、三井」
「姐御はそんなに尼になりたいのか」
「なりたかあないけど、一日でもいいからこの世で金魚を若だんなにそわせてあげたいだけさ」
「その言やよし。よかろう、じゃ、今日はわしが切り死にすることにしよう」
「本当ね。あたし三井が好きになっちまった。なんなら、いっしょにお墓の下へ行ってあげてもいいわ」
わざとさばさばと言ってのけるお妻である。
大磯の問屋場でお露さまのために駕籠（かご）をやとい、雪太郎たちはそのまま小田原へ向かうことになった。
「若だんな、わしと堅田うじが露払いをつとめるから、若だんなはなるべく最後まで駕籠のそばを離れないようにしてくれ」
三井はそういって、堅田と二人で十間ばかり先を進んでいく。
雪太郎はお妻と二人で、すぐ駕籠の後からつづいていった。
「雪、駕籠のそばを離れてはいやです」
お露さまの厳命なのだからしようがない。

「若だんな――」
「なんだ、姐御」
「今日は三井さん、きっと強いわよ」
お妻がわらいながらいう。
「どうしてだね」
「今日は死んでおしまいなさいって、あたしがいいつけたのよ」
「あんまりむちゃなことをいっちゃいかんな」
「むちゃなのは敵のやつらよ。こっちもむちゃでなくちゃ防ぎきれませんからね」
「まあ、そういえばそうだが」
「三井よろこんでたわ、その言やよしといって」
「なんだね、その言やよしというのは」
「つまりねえ、お露さまと若だんなはどうしても生かしておかなくちゃいけない。そのかわり、三井のお墓はあたしが尼になって一生番をしてやるといったんです」
「なるほど――」
「あれで三井も案外いいところがあるんですね。お墓の上と下で話ができるかなって、考えこんでいるから、じゃあたしもいっしょにお墓の下へ入ってやろうっていっておいてやりました」
「その厚意は涙が出るほどありがたいんだが、しかしなあ、姐御、姐御はお露さまと二人きりになっても、決してはやまったことはしてくれちゃこまるんだ」
「どうして」
「敵は女たちには決して刃（やいば）は向けない。無理をしないで、我慢できるだけ生きていさえすれば、後からきっと行列が追いつく」
「それもそうねえ」
お妻はちょっと考えてから、
「じゃ、あたしたちはできるだけ我慢することにして、後はまた後でお露さまと相談します。三井、がっかりしやしないかしら」
と、後は冗談にまぎらせてしまう。
「えんほい」

「えんほい」
なんにも知らない駕籠は、ぐんぐん先をいそいでいる。
そのまた十間ばかり先を大股に歩いていく三井は、
「堅田うじ、今日はわしに死ねと姐御がいうんだ」
と、うれしそうに話しかけていた。
「なるほど、今日は手足から先に死ぬ覚悟のほうがいいな」
「いや、堅田うじは死んじゃいかん。こんなところで死んじゃ、高輪に残っている奥方がかわいそうだ」
三井はおどろいて言いなおす。
「なに、千代はそんな女じゃないんだ」
堅田は事もなげにわらっている。
「そんな女じゃないって、亭主が死んでよろこぶ女房なんてあるまい」
三井が聞きとがめるようにいう。
「いや、千代という女は、家におとなしくさえしていればなに不自由のない娘でいられたんだが、内職をしてでもわしのそばがいいといって強情を張りましてな、まったくかわいいやつです」
「なるほど」
「高輪へあずけて、こんど出てくる時もこういうんです。あなたは男なのですから、死ぬ時がきたらいさぎよく死んでください。千代はいつでもよろこんで、すぐあなたのおそばへまいりますからと、まったく感心な女房どのです」
「さようか」
三井はがっかりしてしまった。せっかくお妻ののろけを言ってやろうと思ったのに、見事に逆を取られてしまったのである。
「これはとんだ失礼――。しかし、三井うじはまだ女房というものの味を知らんようだから、こんどのところはわしが切り死にを引きうけよう。冥土の旅も二人づれと、わしたちはしゃれ

るが、ひとり旅では味けない。切り死には道づれをこしらえてからのことにしたほうがよろしい」
「堅田うじ、拙者にもたった一言だけ言わせてくださらんか」
三井はもう我慢できなくなってきた。
「さあさあ、なんなりとどうぞ――。我らの仲で遠慮はいらん」
「では、ちょいとお耳に入れておくが、拙者にいいなずけが一人ござってな」
「ほほう、それは初耳――」
「そのいいなずけが申すには、金魚と若だんなとは一日でもこの世でいっしょにしてやらなければかわいそうだ。だから、三井、今日はお前さんが死になさい。そのかわり、お墓の下へ入っても寂しくないように、あたしが話し相手に行ってやると、かよう申すのでござる」
「やはり、江戸を立つ時の話でござるかな」
「いや、ほんの少し前の話でござる」
「どこでそのいいなずけさんに出会ったのでござるな」
「いや、わしの後をずっとつけてきているのでござる」
「はあてな――」
堅田はちらっと三井のほうを横目で見て、
「それは三井うじ、少し水くさい。どうしてこの堅田に早く引きあわせていただけなかったのかな」
と、こっちの話をうそだと取っているらしい。
「いや、堅田うじは毎日会っているはずだがなあ」
「このわしがでござるか」
「さよう。なかなか美人で、親切気もある女なんだが、少し育ちが悪くて、口の悪いのが玉に傷でしてな、一時は若だんなに夢中になっていた姐御でござる」
「なるほど、なるほど、よく相わかってござる。これはどうも失礼つかまつった」

堅田がにやにやわらい出す。
「おっと、堅田うじ、地獄の一丁目が近くなったようでござるぞ」
やがて小磯の切り通しへかかるあたりに、深編み笠の武士が一人突っ立って、じっとこっちを見ているのが目についたのだ。
「あれは秋山うじだな」
「うむ、地獄の一丁目が近いぞと教えているんだ」
そうこっちが話しあっているのを見とどけると、深編み笠はくるりときびすをかえして、すたすたと切り通しへかかっていく。
「若だんなに教えておこう」
三井は振りかえって、うしろの雪太郎のほうへ手をふる。
雪太郎は手をあげて、わかったというようにうなずいてみせた。
「さあ、これでよし」
「三井うじ、姐御の顔を見てくるんなら、いまのうちでござるぞ」
「ありがとう。しかし、それでは堅田うじにすまんからなあ」
「なんの、千代はいつもわしのふところにいる」
「というと、なにか形見の品でも御持参かな」
「さよう、ぜひ持っていってくれと申しますのでな」
「なるほど、その手があったなあ。こりゃいいことを聞いた」
冗談口をたたきながら、足を早めて切り通しをぬけたとたん、そこの雑木林の中から、ぞろぞろと四人、たすきはち巻きの浪人らしいのが行く手へ出てきて立ちふさがった。今日は真っ昼間だから、さすがに覆面は用いず、四人とも図太い面構えをむき出しにしている。
この中に秋山信助の顔はないようだ。人数にしても四人というのはすくなすぎるから、敵は二手にわかれているのだろう。
「おい、かぶり物を取れ」

敵ははじめからけんか腰だ。
「これはごあいさつ、――なにか用かな」
三井が深編み笠をぬぐと、その顔見さだめて、
「よし、たたっ切れ」
先頭のやつがいきなり抜刀した。が、それより早く三井が笠をすてて一刀を引きぬきざま、
「強盗だ」
だっと横なぐりをかけたので、あっと敵は横っ飛びに右へ飛びのきながら、足がもつれて思わずしりもちをつく。
「くそッ」
左からすかさず一人が切って出る。
「とうっ」
引っ払っておいて、三井は強引にも激しく前へ飛んだ。
「それッ」
「おうっ」
うしろの二人は、まさかと思っていたところへ、火のように三井が飛びこんできたので、夢中で刀を振りかぶりながら、だだっと後ろへさがる。
「えいっ、――とうっ」
立ちなおるすきを与えず、三井が右を切り、左をかえして、ぐいぐい突っこんでいくので、二人は後へ後へとさがるばかりだ。
「うぬッ」
「くそッ」
二人は歯がみをしながら、完全に機先を制されて、どうにも立ちなおることができない。
人間うしろに目がないから、ついに一人のほうがなにかにつまずいたか、
「あっ」
どすんとしりもちをつく。
先頭の二人が浪人組に道をさえぎられた時、十数間後からつづくお露さまの駕籠も、別の浪人組に襲われていた。
こっちは行く手をふさがれたのではなく、

「おい、待て」
と、うしろから呼びとめられたのである。つまり、敵は二手にわかれて、こっちの前後の道を断ち切ったことになるのだ。
　抜刀して林の中から躍り出してきたのは二人で、林の中にまだ二人立っている。青島市郎太と、一人は秋山信助である。
「出たわ、比良さん」
「駕籠をたのむぞ、姐御」
　雪太郎はさっと深編み笠をかなぐりすてた。
　その間に駕籠は二、三間たたらを踏んでいって止まり、
「出たあ」
　駕籠かきはどすんとそこへ駕籠をおろすと、さっさと林の中へ逃げこんでしまう。まごまごしていてけがでもすれば、明日から女房子供が養えなくなるのだから、これは逃げるのが常識なのだ。
「行くぞ、比良」
「やっちまえ」
　こっちははじめから問答無益の口で、いきなり抜刀を青眼につけて迫ってくる。雪太郎の腕は、この間の晩の菊川橋の屋敷の乱戦で十分知っている連中だから、そう無造作にはかかってこられない。それだけ敵も必死のようだ。
　雪太郎は無言で抜き合わせる。
　ちょっと心配なのは、林の中の青島がその間に駕籠の姫君をねらいはしないかということだったが、今のところ別にそんな様子もないようだ。こっちはたった一人なのだから、必ず倒せる自信があるのだろう。
「とうっ」
　右の一人がこっちを誘いこむように、ぐぐっと踏みこんできながら青眼から上段にかわる。そのまま切りこむのが目的ではなく、その上段にさそわれてこっちが動いたところを、仲間に左から踏みこませようという作戦だったらしい。

　いつもならわらってすませておく見えすいた小細工だが、今日の雪太郎はお露さまのために、どうしても彼らを切らなければならないのだ。はじめから意気ごみが違う。
　敵の構えが青眼から上段にかわろうとする一瞬、
「えいっ」
　こっちからも猛然と体当たりに出るように踏みこんで、だっと籠手へ切りこむ。
「わあっ」
　ぼろりと右の手首から切り落とされた敵が、絶叫しながらのけぞるのと、
「おうっ」
　待ちかまえていた左の敵が一気に切って出たのと同時だった。
　が、それはちゃんと計算に入れてある雪太郎だから、籠手を切った一刀は身をしずめざまつばめがえしに、
「とうっ」
　流星のごとく左を払っている。敵の振りおろす太刀より、そのほうが一瞬早く、
「わあっ」
　敵はしたたか胴へ切りこまれて、断末魔の悲鳴をあげていた。
　それはほんの一瞬の、火の出るような勝負だったが、あっと目をみはった時には、もう颯爽と林の中の青島のほうを向いて、来るならこいというように立ちなおっていた。
　市郎太はけわしい目をして、じっとこっちをにらんだまま動かない。
　向こうの勝負を待っているようだが、そっちもあまりたのみになりそうもないと見て取ったのだろう。
「比良、相かわらず勝負運がいいようだな」
　急に不敵な冷笑をうかべてきた。
　雪太郎は答えない。
「勝負というやつは、最後に勝ちさえすればいいんだ」

市郎太はそんな捨てぜりふを吐いてから、
「秋山、来い」
若い信助をうながして、切り通しのほうへ歩き出す。
信助はにこりと人なつこい微笑をこっちへ見せてから、青島の後を追っていった。
「若だんな、ようござんしたね」
お妻が青い顔をして、駆け寄ってくる。
「あっちはどうだ」
雪太郎がくるりとそっちを向いた時、三井と堅田が手をあげながら、こっちへ駆け出してきた。
「どうした、両君」
「二人は堅田うじがたたっ切ったが、後は逃げてしまった。ほう、若だんなも一人倒したか」
三井がそこに倒れているやつを見て、目をみはる。
「だめじゃないか。三井は一人も切らなかったの」
負けずぎらいのお妻が悔しそうに三井に詰めよる。
「そのかわり、三井うじは二人に相当な痛手をおわせている。わしが切ったやつも、本当は三井うじが半分気勢をそいでいってくれたおかげなんだ」
堅田が正直にそばから弁解していた。
「しかし、思ったより軽くすんでよかった。ありがとう」
すんでしまえばこれだけのことだが、一つ間違えばこっちの命のない勝負なのだから、雪太郎は心から二人に感謝せずにはいられない。
「雪、――雪」
駕籠のほうからお露さまが呼んでいる。
「雪はここにおります」
雪太郎は刀をぬぐって鞘(さや)におさめ、いそいで駕籠のそばへ飛んでいった。
「どこもけがはありませんでしたか」
「大丈夫です。みんな無事ですから御安心ください」

「雪――」
お露さまは手を出して、雪太郎に手を貸せという気らしい。
「どうしたのです」
手をさし出すと、その手をつかんで自分の乳の下へ押しあて、
「こんなに露が心配していますのに、早く顔を見せてくれなくてはいやです」
と、涙ぐんでいる。
すぐに駕籠のそばへ飛んでいかなかったのが不服なのだろう。
「申し訳ございません」
素直に頭を下げる雪太郎だった。
「だんな、無事にすんでおめでとうござんす」
くせ者はもう逃げてしまったと見て、近所にかくれていた籠かきが駕籠のそばへ帰ってきた。
「やあ、お前たちも無事だったか」
雪太郎はお露さまを放して立ち上がった。
「へえ、薄情のようですが、おれたちはすぐ逃げることにしていますんで――どうもすんません」
「いや、お前たちはそれでいいんだ。なまじけがなどあっては妻子が困る」
「そういってもらうと助かりやす。そのかわり、小田原まで、駕籠は大切にかつぎやす」
「そうか。では、たのむ」
もう前に敵はいないはずだから、雪太郎はすぐに出発することにして、
「お露さま、このまま小田原へ向かいます」
と、駕籠の中へ告げ、お露さまのうなずくのを見てから垂れをおろす。
「若だんな、行列のほうへ知らせてやらなくてもいいかな」
三井がそばへきて聞いた。
「そうだな。心配はしているだろうが」
「よろしい。わしが連絡の任にあたろう」

堅田が気軽に買って出た。
「では、お願いしよう。しかし、十分気をつけてくれたまえ。同じ方向へ敵は逃げているだろうからな」
「心得た」
堅田はもうさっさと大磯のほうへ引きかえし出す。それを合図に、
「相棒、いいか」
「そらよ」
駕籠かきが駕籠をあげた。
お露さまが呼び立てる。
「雪、――雪」
「ここにおります」
雪太郎は三井のほうへ合図をして、すぐに駕籠わきへつく。
「三井、あたしたちは前がいいの、うしろがいいの」
「うしろでよかろう。もう前には敵はいないはずだ」
三井はお妻と肩をならべて、駕籠の後へつづいた。
「姐御、冥土へ行きそこなったなあ」
「いそぐことないわ。どうせこのままですむ道中じゃないんだもの」
「それはまあそうなんだが、おれはちょいと恥ずかしいんだ」
「なにがさ」
「どうせ切り死にと覚悟したんでな、さっき堅田うじに姐御ののろけをいってしまったんだ。命があったとなると、どうも少し面はゆいな」
「案外気が小さいのね、三井は。そんなことかまやしないじゃないか」
「そうかなあ」
「お露さまをごらんなさい。雪、雪って、平気でだれの前でも若だんなを呼びつけて、さっきなんかもお乳の下へ手を持っていったじゃありませんか」
「本当だなあ。あのくらい堂々としていると、

あれはあれでまた立派なものだ」
「三井だって、堂々とやればいいじゃないか」
お妻はわらいながら、そっと三井の手をさぐってくる。
お露さまの駕籠は、予定どおりまだあかるいうちに、小田原の本陣へ着くことができた。
行列が着くのは、おそらく一刻ほど後の、日が暮れ切ってからになるだろう。
先乗りの石沢半之助、住田三五郎の両人に出迎えられたお露さまは、本陣の手前姫君としてではなく、奥の一間で休息を取ることになった。
三井とお妻は本陣へ泊まるわけにはいかないから、筋向かいの田沢屋という旅籠に入り、いずれ雪太郎もそっちへ行くことになっている。
「お露さま、ゆうべから夜道をかけたりして、お疲れでしょうから、横におなりになりたければ、雪は次の間へさがっておりましょうか」
ぐったりと座っているお露さまを見ると、雪太郎はついやさしくせずにはいられなかった。
お露さまは物憂そうにかむりを振ってみせる。暗いふきげんそうな顔つきである。
「行列がつくまでは、まだ間があります。横になられたほうが楽でしょう」
「雪――」
お露さまがきっと顔をあげた。
「どうしたのです」
「今日から先は、露はまた行列なのですか」
「そうなりましょう。箱根の関所は、行列のお駕籠にいなくてはなりません」
「三島から先は――」
「常識からいえば、将監の追跡も箱根から西へはのびないはずです。たとえこれから先でお露さまを手に入れても、関所を通るのが問題になりましょうし、江戸までおつれするのが大変ですからな」
「では、ずっと露はもう行列なのですね」
「そうできれば、それが一番安全なのです」
「そして、郡山へまいればどうなるのです」

「郡山のほうへは、雪がもうちゃんと手を打ってありますから、少しも心配はありません」
「じゃ、雪はここからもう江戸へ帰ってしまうのですか」
「いいや、郡山まで必ずお供をします」
「きっとですね」
「雪はいつもお露さまの手のとどくところにいると申し上げてあるではありませんか」
「でも、露は顔が見えなければ安心できません」
無理なことをと、雪太郎は微笑しているほかはない。
お露さまはそういう雪太郎の顔をじっと見あげている。
夕方の旅宿はまだしいんと人けがなく、秋というよりはやがて冬に近い風の音が、耳にしみるようにわびしかった。
しかも、ここは古びて寒々とした暗い裏の小座敷なのである。生まれてからずっと御殿住まいのお露さまには、なにか無気味でもあり、たよりなくて、気がめいるばかりだったろう。
「雪――」
お露さまの目に涙が一杯盛りあがってきたと見る間に、つと立って、雪太郎の胸へ身を投げかけるようにすがりつき、
「露はもう別々はいや」
と、ほおをよせて激しく泣き出していた。
――ここで甘い顔はいけない。
雪太郎ははっとして、そう心をひきしめようとするのだが、どうしてもしかる言葉が出なかった。
「お露さま、そう雪をいじめてはいけません」
雪太郎は切なくいいながら、そっとお露さまの体を抱いていた。
「雪こそ、雪こそ露につれなくばかり――。露はこんなに、死ぬほど雪のことをおもいつめていますのに」
押しつけているほおが熱く燃えて、お露さまは身もだえしながら、涙がたちまちこっちのほおをぬらしてくる。
――いじらしい。
と思うと、つい抱いている手に愛情がこもってきて、
「雪もつらいのです」
と、本当に切なくなってくる。
「雪は前とおなじように、露が好きなのですね」
「それを、それを口にしてはいけないのです」
「いやっ、いやっ、好きだといってください。露は寂しい」
「わしは間違っていたかもしれない。こんなにお露さまを苦しめ、自分も苦しむくらいなら、あの時お方さまになにごとも打ち明けて、おすがりすればよかったのだ」
なまじ主従の道を正しくしようとしたのが、形にとらわれすぎて間違いだったかもしれぬと、雪太郎は今にして後悔に似たものを感じてくる。
「うれしい、雪。露はこんど江戸へもどりましたら、明石へかえしてもらいますから、きっとお方さまにお願いして」
「さあ、それが今となっては――、雪はもう浪人者ですし」
「いいえ、露はお長屋へでも、どこへでも住めます。千代やお妻になんでも教えてもらって、お台所も自分でします」
お露さまはそんな夢ばかり見ているのではないだろうか。
本当の裏長屋を見たら、さぞびっくりするだろうにと思うと、雪太郎はふっとほほえましくさえなってくる。
「お露さまにお台所ができますかなあ」
「できます。御飯をたくおけいこもします。楊枝も削ります」
「楊枝を――。千代に聞いたのですか」
「ええ、千代に教えてもらいました。千代は、我慢さえすればどんなことでもできる、つらい暮らしでも、自分はしあわせだと申していまし

た。千代にできることが、露にできないことはありません。雪と、雪といっしょなのですもの」

心からたのしそうに、胸をはずませているお露さまを見ていると、到底できない夢だけに、雪太郎はお露さまがいとしくてたまらなくなってくる。たとえ実際にはできなくても、そう思いつめている一筋の心がうれしい。

この人形のようなお露さまは、やっぱり生まれながらにして、自分の花嫁ときめられているのではないだろうか。

「お露さま」

雪太郎はかっと愛情が火のように高ぶってきて、我にもなくそのくちびるを寄せ、たわいなく涙があふれてきた。

「わしのお露さま――」

「うれしい、雪」

世にもしあわせそうに、お露さまは自分からもひしとくちびるをよせてくるのである。

翌朝――。

まだ明け六ッ前に、十五、六人の武士の一団が小田原の虎屋という旅籠を立って、箱根峠へかかっていった。城下町を出外れるまではあまり口数をきかず、黙々と足を早めていくのが、なんとなく物々しく様子ありげな一団であった。

それからしばらくたって、まだ朝霧の晴れぬ本陣の玄関へ、問屋場から肩代わりつきの山駕籠が一丁、式台に横づけになった。

奥から警固の若侍が十人ばかり出てきて、念入りにわらじの緒をしめ、玄関の左右へひざまずくと、それを待っていたようにお高祖頭巾を目深にかぶった姫君が中老に手を取られてあらわれ、無言で山駕籠に乗った。

「どうぞお気をつけあそばしますように」

中老が式台に両手をつく。

中老の後からついて出た立派な若い侍が、つとそこへ進み出て、これも式台へひざまずき、

「姫君さま、弥一郎も後よりすぐに立ちます。

万事は雪太郎どのが心得ておりますから、お心安くおいであそばしますように」

と、あいさつをした。

駕籠の姫君は黙ってうなずく。

「一同、くれぐれもたのむぞ」

「心得ました」

「駕籠屋、御苦労だな、出発してくれ」

「へえ。――それ、相棒」

「合点だ」

箱根の雲助といわれるいずれも六尺豊かな人足が、元気一杯に山駕籠をかつぎあげ、とっとっと玄関を出ていく。

左側の供侍五人が駕籠の前へつき、右側の五人が後ろをまもって、駕籠はたちまち本陣の門を出ていった。

本陣の筋向かいの旅籠の軒下で駕籠を待っていたのは雪太郎組の四人で、駕籠が門を出ると、

雪太郎は供侍たちに会釈して、すっと駕籠わきについて歩き出しながら、

「姫君、雪太郎はこれにおります」

と、駕籠の中へ声をかけた。

「はい」

姫君の声は細い。

堅田は行列の先頭に加わり、三井とお妻は一番しんがりへついた。

吉松はどこへ使いに出ているのか、姿が見えない。

行列はまだかなり濃い朝霧の中を、ひたひた城下外れのほうへいそぐ。

「三井、今日こそ切り死にかもしれないよ」

お妻は一番しんがりをいいことにして、しっかりと三井の腕につかまって歩きながら、小声でいった。

「なあに、もう思い残すことはないさ。姐御はちゃんとおれの女房ときまったんだからな」

にっと三井が感慨深げにわらう。

「本当をいうと、わたしはまだ少しつらいなあ」

「あれえ、急に未練が出たのか」

「そうらしいのよ。自分でもまさかこんな気になるなんて考えもしなかったんだから、しようがありゃしない」
「姐御は少し情が深すぎるからなあ」
「いやだってば、そんなこといっちゃ」
お妻は赤くなって三井の腕をゆすりながら、
「でも、三井はあたしに少しも未練なんかないの」
と、横目で顔をのぞきこむ。
「そりゃわしだって未練はあるさ。わしは姐御に首ったけなんだからな」
三井は正直に甘いところをぶちまける。
「ねえ、三井、あっちはどうだったんだろう、昨日」
お妻がいたずらっぽい目をして聞く。
「あっちって、若だんなのほうか」
「ええ。あっちだって、昨日はずいぶん長い間二人きりだったはずでしょ」
「しかし、若だんなは我々と違って行儀がいいからなあ」
「いくら行儀がよくたって、男と女だもの、金魚のほうからやいのやいのといわれたら、ついふらふらとそんな気になっちまうんじゃないかしら。それに、金魚のほうはあんなに夢中なんだもの」
「しかしなあ、育ちが違うから、まさか姐御のようにいきなり首っ玉へしがみつく度胸はないだろう」
「ふ、ふ、あたしどうしてあんな行儀の悪いことしちまったのかなあ。恥ずかしいわ、いま考えると」
「なあに、かまわぬ。おれはどうせ首ったけなんだから、姐御の御意のままだ」
三井はうれしそうにわらっている。
「弥一郎さんとあのお中老さまはどうだと思う、三井」
「そう人のことばかり心配しなくたってよかろう。あっちはあっち、こっちはこっちだ」

「だからさ、こっちがこっちだから、あっちもそうじゃないかと、気がもめるのよ」
「お中老さまはしっかり者だからな。それに、いつも人目が多いし、あっちは二人きりになる折はないだろう」
「じゃ、二人きりになれば、やっぱりあぶないわけね」
「いやに気にするんだな」
「そういうわけじゃないけど、お行儀の悪いのはあたしだけになりたくないんだもの」
お妻はやっぱり気がさすらしい。
「いいじゃないか。だれも見ていたわけじゃなし、そんなことは二人だけの話なんだから、気にすることはない」
だんだん箱根山が近づいてくるはずだが、今朝はまだ霧がはれないので、もうどの辺まで来たのかちょいと見当がつかない。
「それはそうと、今朝のお姫さまは本物なの、それとも偽物のほうなの、どっち、三井」
思い出したようにお妻は急に声をひそめる。
「さあ、どっちかなあ」
昨夜雪太郎はおそくなって本陣から帰ってきて、明日は早立ちにするからと、今朝の手段は話したが、その姫君が本物か偽物かは口にしなかった。
「たぶん、ゆうべは若だんなにもそれはわからなかったんだろう」
「どうしてさ」
「手段としてはそういう手段を取るが、果たしてその駕籠に本物をのせるか、偽物をのせるかは、弥一郎さんに一任したんだろうと思う。遠慮深いからなあ、若だんなは」
「じゃ、三井、あの駕籠に乗っているのは、お浜かもしれないんだね」
「うむ」
「敵はきっと箱根峠に待ち伏せしているときまっているの」
お妻は気が気ではなくなってくる。

「今朝、虎屋に泊まった分家の浪人組は、まだ白々明けに箱根へ向かっている。姫君に箱根の関所を越えられてしまってからでは、曲崎も仕事が難しくなるから、その前に最後の襲撃をかけてくるだろうということは、若だんなも弥一郎さんもゆうべから意見が一致していた。そこで、本行列が出発する前に、偽行列を出してみようという策も、昨夜のうちにきまっていた。そして、そのどっちの行列にお露さまを入れるかということだけが、なかなかきまらない。結局、今朝の状況によって、弥一郎さんがきめることになっていたんだ」

三井が声をひそめて、はじめてお妻にそれを打ちあけた。

「どっちへお露さまを入れるかってのが、どうしてそんなに難しいの」

「敵の襲撃は一度しかかけられない。最後の一戦だから、こんどは総力を集めてぶつかってくる。一体どっちへぶつかってくるだろうという予想は、二つに一つだから、なかなか決しかねるのは当然なんだ」

「じゃ、三井はどっちへぶつかってくると思うの」

「わしは前の行列、つまりこの行列へぶつかってくると思うんだ。こっちが向こうへ見張りを出してあるのとおなじように、向こうも本陣へ見張りをつけている。我々でさえあの山駕籠の姫君が本物か偽物か区別がつかないんだ。敵はごまかされては一大事という気持ちがあるから、どうしても本物と見がちになる。きっとこっちへぶつかってくるに違いないんだ。しかも、こっちへは我々がついているんだからな」

「じゃ、お露さまは後ろの行列へ入れたほうがいいんでしょう」

「常識からいえば、そういうことになる」

「もったいぶらないで、はっきりおっしゃいよ、どっちがいいのさ」

「そうあわてるなよ。ここがちょいと難しいと

ころなんだ。姐御が帯を解くように、そう簡単にはいかん」

「三井、もう一度いってごらん」

お妻が血相を変えて、往来の真ん中へ立ち止まりながら、ぐいと胸倉を取ってきた。

「そうか。悪いことをいっちまったなあ。わしはそんなつもりじゃなかったんだ」

「じゃ、どんなつもりだったのさ」

「つまり、姐御はわしにほれてくれたから、昨日簡単に帯を解いてくれる気になった。わしはよろこんで、感激しているんだ。しりが軽くてだれにでも帯を解かれた日にゃ、第一わしがたまらん。そんな姐御なら、たたっ切ってしまう。――あやまるから、こんどのところは勘弁してもらいたいなあ」

三井は小さくなって一生懸命に哀願する。目をしょぼしょぼさせているのが、図体が大きいだけにひどく哀れっぽい。

「じゃ、本当に三井は、あたしを浮気女だとは思っちゃいないんだね」

「そんなこと思うもんか。おれは墓の下までいっしょに行ってくれるっていうから、本当に感謝しているんだ。勘弁してくれよ」

「ならいいから、さっさとお歩きよ」

お妻はやっと納得したらしく、三井の腕をつかんで邪慳に引っ立てる。

「やれ、助かったか」

ほっとした顔の三井だ。

「三井、なんでその先を早く話さないのさ」

お妻が怒ったように催促をする。

「なんの話だったっけな」

三井はまだしょぼんとしている。

「バカだよ、この人は。――お露さまの話じゃないか。しっかりおしよ」

「おれはなあ、姐御、姐御に怒られると、なんだかこう、急に腹の底に力がなくなってくるんだ」

「だから、もう怒ってなんかいやしないじゃな

いか」

「本当か――」

「たよりないなあ。そんなことで、お前さん、本当に切り死にができるのかねえ」

「そりゃ大丈夫だ。おれの怖いのは、今のところ、若だんなと姐御だけなんだ」

「若だんなは一体、どっちへ今日はお露さまを入れておきたかったの」

「それはなあ、こういうわけなんだ。つまり、この行列にお露さまを入れていけば、敵が見のがした場合、どんどん先へ行ってしまえる。たとえ襲撃されても、その時はできるだけ闘えばいいんで、敵はお露さまの命をねらっているわけじゃないんだから、万一とりこにされても、後から弥一郎さんたちがくるんだから、そっちで取りかえす手もある」

「それはそうねえ」

「若だんなはたぶんこっちを望んでいたろうと思うんだ」

「後のほうへ入ると、どういうことになるのかしら」

「それだと、こっちが敵を倒した後へくることになるから、安全には安全なんだ。もし敵が後のほうへ目をつけて、こっちを素通りさせた場合は、ある場所まで行って待っていて、急に乱闘場へ引きかえすという手もある」

「それだって悪くないじゃないの。どっちのほうがいいかなあ」

お妻には判断がつかなくなってきた。

「しかしなあ、こっちが素通りをした場合、ここに敵の待ち伏せがあるとはっきりわかってくれればいいが、敵がうまくかくれていると、遠く離れすぎて、乱闘場へ引きかえしても間にあわなくなる場合がないともかぎらないからなあ」

「じゃ、あたしは前のほうのにきめるわ。弥一郎さんはどっちにしたのかしら」

「それがわからん」

「だって、若だんなにはもうちゃんとわかっているんでしょう。ああして駕籠のそばについているんだもの」

「そりゃ若だんなにはわかっているだろう」

「三井はどっちだと思う。こっちのは本物か偽物か」

「おれには見当がつかないなあ」

「あたしちょいと行って、若だんなに聞いてみてやろうか」

「そんなことをしちゃいかん。どんなことから手違いがおこらないとはかぎらんからな。まあ、我々はどうせ若だんなの手足なんだから、敵が出たら切り死にと覚悟していりゃそれでいいんだ」

「それもそうねえ。でも、無理に切り死になんかしちゃいやですよ。せっかく帯まで解いた仲なんだもの」

いよいよ坂道にかかってきたが、まだ霧ははれようとしない。

小田原から箱根へ上り四里八町のちょうど中ほどに畑の立て場がある。

一坂のぼり切ったところから道がしばらく平坦になって、両側が松山になり、そこを越えていったところが畑になる。

高柳峰十郎は大俵玄蕃以下十四人の浪人組をひきいて、この松林の中に行列ののぼってくるのを待ち伏せていた。

昨日は大磯で惜しいところを青島市郎太が失敗している。

「たった三人に、八人がかりでだめだったのか。惜しい機会を逃したもんだな」

この時とばかり、高柳は昨夜、将監の前でそんな憎まれ口をたたいた。

「行列の中に本物はいないとわかっていながら、のんべんだらりと行列の後ろからついてくるやつがいるからしようがない。せっかく本物を手に入れても、だれもそれを受けつぐ者がい

ないんだからな」
図太い市郎太は、平気でせせらわらっていたが、彼のいうことにも一理はあるのだ。
昨日はつまらない小細工をやめて、全員が行列の先へ出て、あくまで青島組の後を追ってやれば、本物は必ず手に入ったのである。
変な小細工をやって、あたら好機を逃した責任は将監にある。
――清野などをつれて、でれでれして歩いているから、いざという時踏ん切りがつかないんだ。
高柳でさえそんな腹があるのだから、その点は青島もおなじことだったろう。
「まあよい。すぎたことはもういうな」
将監は苦わらいをして、
「そのかわり、明日は勝敗を一挙に決することにする」
と、断然いい切っていた。
清野は藤沢から帰したらしく、もうついてきてはいなかった。
「敵はまた二組にわかれていく策に出るかもしれぬ。その場合は先発組に本物がいるときめて、かまわずここへ主力をつくそう。しかし、万一という場合があるから、わしは屋敷の者と花長の組とをひきいて、後の行列を襲撃する。主力は畑の立て場の手前の松山で待ち伏せしろ。わしの組はそこから一坂下ったあたりで、うしろから行列に追いうちをかけることにする。前の組はできるだけ早く敵の先発組を片づけて、急遽こっちへ合流するようにしてくれ」
そして、主力の大将を高柳ときめ、これに大俵以下の浪人組をほとんど全員つけることにして、
「これが襲撃の最後の機会なのだ。関所を越えてしまっては仕事がしにくくなる。そのつもりで、明日はしっかりたのむぞ」
といいそえることを忘れなかった。
将監の組には屋敷の家来三人に浪人組から二

人参加して、これに青島を加える六人が主力だ。将監は花長の子分三人と若党中間を身のまもりにして、場合によっては自分も切って出るというから、そっちは総勢十一人ということになる。
が、なんといっても今日の襲撃は高柳組の十六人が主力なのだから、峰十郎は昨夜の高言の手前も、ぜひ勝たなければならない一戦なのである。
やがて五ツ（八時）近くなって、霧はだいぶ薄れてきたが、今日は空が曇っているとみえて、あたりはなんとなく薄暗い。
――今日こそのがさぬ。
松山に陣取っている高柳は、さっきから一人で張り切っていた。
すでに将監から花長の子分が注進にきていて、先行の行列の人数は十人ほど、これに比良、三井、堅田の三人が加わっているから、山駕籠の姫君は本物に違いあるまい、必勝を期するようにといってきている。
人数からいってもこっちのほうが少し多い。手ごわいのは比良組の三人だけで、供侍たちはそう恐れるに足る腕の者はいない。
味方の浪人組は、一人一人が自分の腕一本で身を立てようとしている者ばかりだから、ともかくも免許の力を持っている。絶対に負けるはずはないのだ。
「大俵先生、あなたには三井をお願いしよう。わしは比良をうけ持つことにする」
「承知いたした」
「この二人さえ片づけてしまえば後は簡単だ。ただし、姫君にけがをさせないように、一同によく注意しておいてもらいたいな」
「それは大丈夫です。なるべく敵を松山の中へおびき入れるようにして切るようにと、よく申しつけてあります」
「しかし、山はやっぱりもう少し寒いなあ」
なんとなく武者ぶるいがとまらない高柳なのだ。

「やってきやしたぜ、高柳さん」
坂の上まで見張りに出しておいた花長の子分が飛んで帰ってきて告げた。
「よし、一同伏せろ。わしの合図を待って、いっせいにかかるんだ」
高柳はそう命じて、自分も深い熊笹(くまざさ)の中へ身を沈めた。
坂をのぼり切った行列は、ほっと一息ついたような足どりで、薄霧の中を墨絵のようにこっちへ進んでくる。
前に六人、うしろに五人、駕籠わきに一人ついているのは比良雪太郎に違いない。ちょうどその駕籠が目の前へきた時、
「それッ、かかれッ」
「わあっ」
味方は一度に立って、行列へ殺到していった。
雲助がどすんと駕籠をほうり出すようにして、反対側の松山へ逃げ出していく。
「それッ」
「おうっ」
敵も覚悟はしていたろうから、いっせいに抜刀した。
「えいっ、――とうっ」
先頭の一人が少しもちゅうちょということを知らないように、逆にこっちへ切って出るのを、高柳ははっきりと目にしながら、
「比良雪太郎、行くぞ」
自分もまたつかつかと駕籠のそばに立っている比良のほうへ進んでいった。
「おお、来い」
さっと比良が抜きあわせる。
鈴ガ森以来これが四度目の決戦になるが、まったく相手にまわして不足のない堂々たる比良の構えである。
三度失敗していながら、それを失敗したとは少しも考えていない高柳も、また典型的ないのしし武者であった。
「とうっ」

今日の雪太郎は、はじめから攻勢だった。執拗(しつよう)あくなき敵の襲撃なのだ。その執念を断ちきるには、結局相手を倒す以外に手はない。姫君の道中はまだこれから長いのだし、もう余計な手かげんは無用だと、腹をきめてしまったのである。
「おうっ」
雪太郎の激しい闘志をはねっかえすように、高柳はぐいと一足踏みこもうとしたが、相手の火のような切っ先がぴたりとのどへ吸いついてきたので、思わず逆に一歩じりじりとさがらざるをえなかった。
「えいっ」
くそッと思いながら、敵のひく息にのろうとしたが、
「とうっ」
雪太郎はすごい底力で圧倒してくる。
――こんなはずはない。
三度の勝負でいつもこっちは勝機こそつかみそこねていたが、腕は自分のほうがたしかに一枚上だと見ていたのである。
負けずぎらいの高柳は、ついかっとなってきた。捨て身で行けと、気違いじみた闘魂を駆り立てながら、
「おうっ」
地をけって、目ざわりな敵の切っ先を強引に引っぱらい、無謀な体当たりに出た。
うまく図にあたれば、敵の体勢がくずれたすきに、二の太刀が利くはずだったが、雪太郎は引っぱらわれた切っ先を軽く流しながら、さっと左へ飛んだ。
目標を失った高柳が、しまったと思った時には、濃い霧が目の前でうずをまいて、だっと敵の攻撃圏内へ体のほうが飛びこんでいた。
無論、二の太刀をあわてて右へかえしてはいたが、それより待ちうけていた雪太郎の胴へのつばめがえしのほうが一瞬早く、
「えいっ」

「わあっ」
　高柳はわきっ腹をしたたか切りあげられて、どっと前へ突んのめっていた。
「高柳峰十郎を討ち取ったぞう」
　味方の士気をはげますように、雪太郎が大声に勝ち名乗りをあげる。
「おうっ」
　それは案の定大きな反響をおこして、そこここに入り乱れて今が激闘最中の味方にすばらしい活気を与えたようだ。
　逆にいえば、敵はにわかに狼狽してきたことになる。
　この時、松林の中では三井が大俵玄蕃を向こうにまわして、一騎討ちをやっていた。
　お妻といっしょに一足おくれていた三井は、わあっという前方の喊声を耳にすると、
「姐御、さらば」
　ひいていたお妻の手を突っ放すなり、霧の中を一気に松林の中へ駆けこんだ。
「三井っ」
　お妻がなにか叫んでいたようだが、もう三井の耳には入らない。
「えいっ」
「とうっ」
　林の中でぶつかった敵の一人は、走りざまに切りすてた。
　見ると、その少し向こうに大俵がまだ抜刀もせず、ぬっと立って街道の戦況をながめていた。
　おそらく、ずるい大俵玄蕃は、なんとか自分だけは切り合いの仲間入りはしたくないと思って、ゆっくりそんなところで日和見をしていたのだろう。
「大俵先生、見参」
　三井が颯爽と名乗りをかけていくと、
「おう？」
　しようがないというように、さっと抜刀した。
「六郷以来の悪縁ですな、遠慮なくまいりますぞ」

「うぬッ」
　たちまち凶悪な形相になって、いきなり上段に振りかぶってきた。
　――あっ、この男には含み針という武器があった。
　とっさに三井は気がついて、そういえばきっと結んだ口つきがいかにも怪しい。こいつ油断ができぬと、思わず緊張してきた。
「えいっ」
　気合いをかけて、じりじりと進む形を取ってみたが、果たして玄蕃はくちびるを結んだまま無言である。たしかに口の中へ針を含んでいるのだ。
　――どうしてくれよう。
　こっちから踏んごんでいけば、必ず目をねらって針が飛ぶ。今の距離にいる間は安心だが、しかし向こうから飛びこんできた場合もおなじ危険を覚悟しなければならない。
　――こいついよいよ切り死にかな。
　この敵を倒すには、目をつぶって飛びこむほかはないのだ。その一刀で相手がうまく倒せればいいが、仕損じた場合は目をつむっているのだから、相手の太刀をどう防ぎようもない。
　しかし、これが若だんなでなくてよかった。おれがやられる分には、お妻が泣くだけですむ。ふっとそう考えたとたん、ふしぎに三井はもういつもの冷静さを取りもどしていた。
「まいりますぞ、大俵先生」
　仕かけを誘って、目をつむって突いて出る、それ以外に戦法はないのだから、三井はわざと舌刀を用いる。
　その時だった、高柳を討ち取ったという比良の高らかな声を耳にしたのは。
　玄蕃はあきらかにぎょっとしたようである、そのすきをのがさず、
「とうっ」
　三井は目をつぶって体ごとまっしぐらにもろ手突きを入れていく。

右のまぶたへ数本の針が突き刺さったようだが、こっちの切っ先にも手ごたえがあって、

「わあっ」

絶叫の声が耳に入った。

目をあいてみると、玄蕃が大きくのけぞりながら、どっと熊笹の中へぶっ倒れていくところだ。

「大俵玄蕃を三井が討ち取ったあり」

比良に負けずに大きな声を出すと、どこからともなくわあっと、どよめきの声がかえってくる。

急にばらばらっと、熊笹を踏んで敵は逃げ出したようである。

「追うな。一同無事か」

駕籠のそばで比良が叫んでいる。

「あっ、その目どうしたのよう、お前さん」

いつの間にきていたのか、霧の中からお妻が金切り声をあげて走り寄ってきた。

「なあに、ちょいと大俵の含み針にやられただけだ。大したことはない」

その大敵大俵玄蕃を見事に仕とめたばかりだから、三井は内心大いに得意である。

「あらあら、こんな針が――。おしゃがみなさいっていうのに」

お妻はまゆをひそめながら、三井をおさえつけて、まぶたから目のまわりに五、六本突き刺さっている細い針を手早く抜き取ってくれる。

「目は大丈夫なの」

「うむ、はじめからこうくるなとわかっていたんで、目をつぶって突っこんだんだ」

「さあ、もういいわ。痛くない。目をあいてごらんなさい」

針を抜いた跡に血がにじんで、痛々しく少しはれあがっているようだ。

「ちょいとひりひりするようだな。なに、もう大丈夫だ」

三井は目をあいて、にっこりわらってみせる。

「でも、強かったわ、三井。あたし見なおしちまった」

お妻はまだ三井の肩をおさえつけながら、手放しで感嘆を惜しまない。

「そうか、ありがとう」

三井はうれしくなりかけて、急に気がつき、

「あっ、いかん。若だんなが待っている」

と、あわてて立ち上がった。

敵のかげはその辺にもう一人もなく、街道の駕籠のあたりへ、今味方がどんどん走り寄っていくところだ。

「どうした、三井うじ」

先に帰っていた堅田が、三井の顔を見るなり聞いた。

「あぶなく山師先生に片目にされるところだった」

「そうか、含み針というやつだな」

二人の私語はそこで断ちきられた。

「一同、一人も欠けた者はないか」

駕籠の中の姫君となにか話していた雪太郎が、すっと立ち上がって一同を見まわしたからである。

「みんなそろっています」

「大丈夫のようです」

二、三人が口々に答える。

「三井は大俵を仕とめたらしいな」

「はあ、たった一人――。いや、もう一人切ったはずだが、そいつの生死は不明です」

「すると、二人だな。ほかに敵を仕とめた者は」

「堅田雁之助、たった二人」

堅田が遠慮そうにいう。

藩士たちはだれも身をまもるのが精一杯だったらしい。

「敵の討ち死には五人、その中に大俵玄蕃と高柳峰十郎がいる。御一同の奮闘を感謝します」

雪太郎は味方の労をねぎらってから、

「しかし、逃げた敵はまだ七、八人いそうだ。しかも、こっちには曲崎と青島の姿が見えなかった。比良、三井、堅田の三人は、これからす

ぐ後の行列のほうへ走ります。藩士の方々は姫君の駕籠をまもってこのまま畑の立て場へ入り、そこで後の行列を待っていただきたい。いいですな」

と、きっぱり指図をする。

——すると、こっちの駕籠はやっぱりお浜だったのかしら。

お妻は思わずそっちの山駕籠のほうを見ていた。

ちょうどそのころ、一坂下の杉木立道を進んでいた後の行列は、後方から将監組の猛烈な追い討ちをうけていた。

行列は前衛七人に道中奉行の加納庄兵衛がつき、次は姫君の駕籠、これに腰元四人がつきそい、次が松江の駕籠、その後に弥一郎が、若党光吉、中間菊造をつれてつづき、後衛の士は八人、しんがりは人足小者が長持ちをまもってつづいていた。

敵はその人足小者をけちらして、たちまち後衛へ迫ってきたが、両側がやや急な土手になっているので、敵も味方も三人とならんでは闘えぬ。精々二人と二人の戦闘だ。

わあッと鬨の声をあげて、敵の先頭に立ってきたのは青島市郎太で、

「えいっ、——とうっ」

たちまち後衛の二人をなぎ立て、これが思わず道をひらくと、また次の二人にかかっていく。ついに後衛八人の最後の二人のところまで猪突してきた。

「かまわず行列を進めろ」

弥一郎は、戦闘は後衛の八人にまかせて、そのまま行列を進めた。

前衛から三人ばかりうしろへまわってきて、後衛の戦闘に加わろうとする者があった。

「いかん、貴公たちは姫君のお駕籠を、あくまでも死守するのだ」

と、弥一郎はとめた。

「はっ」

三人はすぐ姫君の駕籠のうしろへ引きかえす。

「光吉、——光吉」

駕籠のとびらをあけて、松江が呼んだ。

「はい」

「弥一郎さまに、差し添えを拝借してください」

「心得ました」

駕籠がとまったら、松江も切って出る覚悟なのだろう。

弥一郎は黙って鞘ごと差し添えをぬいて、光吉に持たせてやった。

後衛の闘いは、味方、敵、味方、敵と道なりに入り乱れて、たがいに死力をつくしているようだ。その一番先頭の市郎太は、さすがに最後の二人が必死に道をふさいでいるので、ちょっと斬りぬけかねている。

駕籠にしたがう弥一郎主従との間が、みるみる三間、五間と離れていく。

突然、その弥一郎主従の側面から、

「わあっ」

敵が二、三人絶叫しながら、土手を駆けおりてきた。

先頭の一人は浪人だが、つづく二人は博徒らしく、長わき差しを振りまわしている。

「えいっ」

「とうっ」

弥一郎は切りこんでくる浪人者の一刀を引っ払いながら、駕籠の後を追おうとする。

博徒二人は光吉と菊造が一人ずつ引きうけたようだ。

それと見たさっきの三人が、わあっと抜刀しながら引きかえしてきて、浪人を取りまいていく。

敵はその三人にまかせて、弥一郎はかまわず駕籠のほうへ走る。

——こっちの敵は十人前後のはずだが。

弥一郎は小田原を立つと間もなく、吉松の報告をうけて、そう計算していたのだが、こうな

ると霧があるだけに、誤算をしたかなと、急に不安になってくる。
だあん。
杉木立の中から銃声が一発こだまして、
「あっ」
弥一郎は左の股を棒で打ちのめされたような激痛を感じ、どっと前へ突んのめっていった。
——しまった。
飛び起きようとしたが、左の足がきかない。
銃声におどろいた行列は、いっせいに立ち止まった。
すぐ前の駕籠から身支度をしていた松江がかいがいしく飛び出してきて、
「弥一郎さま、どうなされました」
と、声をかけながら、きっと銃声のした土手の杉木立のほうを見まわす。
切って出る敵があったら迎え討つ覚悟だったが、霧の杉木立のかげの人かげは二、三人、じっと立ったたまま動こうとはしないようだ。
「弥一郎どの、いかがされた」
前から加納庄兵衛が血相をかえて駆けつけてきた。
「庄兵衛、行列をとめてはいかん。わしにかまわず駕籠を進めてくれ」
弥一郎は痛む足を投げ出して起きあがりながら、必死に叫んだ。
短筒を撃ったのは将監に違いない。しかし、手勢がすくないから切っては出られず、後衛組と闘っている味方が切りぬけてくるのを待っていると、とっさに見て取ったのだ。
「えいっ、——とうっ」
青島市郎太はもうついそこまで切りぬけてきて、博徒二人と合体し、これを防いでいる味方三人はじりじりと後へ追いつめられてくる。
それと見た杉木立の中の人かげも、急に切って出る気配を見せてきた。
「おのれ」
松江が弥一郎をかばうようにして、わき差し

の柄に手をかけた時、
「わあっ」
前衛のほうから鬨の声があがり、
「比良雪太郎、到着」
「三井鐘太郎——」
「堅田雁之助、到着」
と、呼ばわる声がはっきりと聞こえた。
「あっ、比良さまです」
松江が思わずよろこびの声をあげた時には、もう颯爽と飛びこんできた雪太郎が、
「三井、土手に敵がいる」
と、うしろへ声をかけておいて、自分はだっと青島のほうへ走りぬけていった。
「弥一郎さん、やられたか」
三井は一声かけておいて、がさがさっと杉木立の土手へ突っこんでいく。
「わあっ」
味方の喊声があがった。
「追うな、もういい——。追うな」
ずっとうしろのほうから雪太郎の制止している声が聞こえてきた。
敵はついに坂下のほうへ敗走し出したのだろう。
「弥一郎どの、左の足ですか」
もう大丈夫と見た堅田が、つかつかと手負いのそばへ寄っていった。
「松江どの、姫君を——」
さすがに弥一郎は露姫のことを忘れてはいなかった。

郡山へ

弥一郎の傷は左の太股のあたりで、弾丸はまだ芯に残っているようである。
これは外科医の手でなくてはとても抜けそうもないので、とりあえず万能膏を塗って、晒でしっかりとしばっておいた。
ほかに味方には三人ばかり手傷を負った者はあったが、幸い死者は一人も出ず、手負いも歩

行にさしつかえる者はないようだった。
敵の襲撃は、人数からいってもともと無理だったので、二人の死骸を残して敗走した。
おそらく、将監はこうして闘っているうちに、先発の高柳組が必ず勝って引きかえしてくると信じていたのだろう。
そっちの犠牲者とあわせると、敵の死者は七人の多きにのぼることになる。
「弥一郎どの、体にはかえられぬ、小田原へ下って医者の手当をうけてはどうです」
雪太郎は一応すすめてみた。
「いや、わしはなんとかして歩く。とにかく、このまま行列を箱根へ進めていただきたい」
こんどの道中の責任者なのだから、弥一郎がそう言い張りたくなるのも無理はなかった。
これ以上引きとめてもむだだと思ったので、
「では、松江どのの駕籠に乗っていただこう。松江さんは箱根路にはなれているはずだから、ともかく畑まで歩いていただく」
と、雪太郎はてきぱきと指図して、こんどは有無をいわせず弥一郎を松江の駕籠にのせ、畑の立て場まで行列を進めた。
ここで前の行列と合流して、お浜の偽姫はもうその必要がなくなったから、山駕籠が一丁あくことになる。
それを松江にすすめてみたが、
「いいえ、あたくしは歩けますから」
と、旅なれている松江はさっさと身ごしらえをして、わらじまでつけてしまったので、山駕籠はそこからもどすことにした。
「姐御、いろいろ世話になったが、こうしてお浜うじも無事にもどったことだし、あんたたちは箱根に残って、ゆっくり湯治でもして江戸へ帰ってはどうか」
雪太郎はまたお妻にもそっとすすめてみた。
「じゃ、お姫さまはもう道中、あぶないことはなくなったんですか」
「正直にいって、そうはいい切れぬ。郡山には

赤柴刑部というこんどの陰謀の張本人がいるんだからな」
「じゃ、あたしたちも郡山までいっしょに行きます。これでもお姫さまの身を心配しているのは、あたしだって比良さんたちとおんなじなんですからね」
「そうか」
「足手まといにならなけりゃいいんでしょう、若だんな」
「いや、足手まといなどと、今までだって考えたことはない」
「じゃ、いいじゃありませんか。いっしょに郡山まで行かせてくださいよ。あたしがついていてやらないと、三井のやつがしょんぼりしちまうんです」
真顔でそんなことをいうお妻なのである。
「そうかそうか、――じゃ、この双六の上がりまで、我々長屋組はいっしょということにしよう」
「お露さまだって、きっとそのほうをよろこぶわ」
これでこっちの話もきまった。
雪太郎が弥一郎の駕籠のそばへもどってみると、ちょうど露姫が松江をつれて、弥一郎を見舞っているところだった。
「弥一郎、けがをしたそうですね。傷は痛みませんか」
姫君は駕籠の前へしゃがんで、いたましそうに聞く。
「わざわざのお見舞いにて、恐縮に存じます。弥一郎思わぬ不覚を取りまして、申し訳ございません」
「いいえ、短筒ではたとえ勇士でもしかたありません。敵のほうがひきょうなのです。まだ弾が残っているのでしょう」
「御心配くださいますな。三島へ着きましたら、医者に手当をさせますから。なに、弾さえ抜いてしまえば、すぐ歩けるようになります」

「無理をしてはいけません。庄兵衛とよく相談して、あまり痛むようでしたら、小田原へもどって手当をしてもらってください」
「大丈夫です。ほんの小さな弾傷なのですから。さあ、御安心なされて、お駕籠へおもどりください。一時も早く箱根を越えなければならないのです」
「はい。大切にしてくださいね、弥一郎」
素直な露姫は目に一杯涙をためながら立ち上がった。
ふっとそこに立っている雪太郎のほうを見て、なにかいいたげだったが、雪太郎がうなずいてみせると、姫君は松江に手を取られて、黙って駕籠のほうへもどっていく。
「弥一郎どの、出発させましょうか」
雪太郎は露姫が駕籠に乗るのを見て、弥一郎に聞いた。
「よろしくたのむ、比良うじ」
「前衛に堅田を入れ、お駕籠わきは松江どの、わしはここ、三井はしんがりにつきます」
「結構だ。万事一任する」
「お供頭、出発――」
雪太郎は加納庄兵衛に合図を送って、行列は先頭から動き出す。
お浜は腰元の姿になって、松江のそばについていた。
一番しんがりは、またしても三井とお妻である。
「もう敵は出ないかねえ、三井」
お妻は澄まして三井に手を引っぱってもらって坂道をのぼりながら聞いた。霧はまた少し深くなってきたようである。
「さあ、まだ将監と青島というくせ者が残っているし、浪人組も十人はいる。将監も必死だろうからなあ」
「出るとすれば追い討ちでしょう」
「そういうことになるだろう」
「ここが一番しんがりなんだから、こんどは三

井が真っ先にねらわれるわけね」
「どかあんと一発くるかもしれんな」
「あんまり脅かさないでよ。飛び道具じゃ、いくら三井が強くたって、へたをすればころりでしょ」
「うむ。弥一郎さんよく足ですんだ。運がよかったんだ」
「あんたも足ぐらいなら、あたしが肩を貸してあげればそれですむけど、ころりはいやだなあ。どうしようもないもの」
「なあに、わしはこれで案外運が向いてきているところだから、たぶん大丈夫だろう」
三井は自分でそうきめているようだ。
「三井、弥一郎さんはあれで郡山まで行けるだろうかね」
お妻は思わずまゆをひそめる。
「さあ、むずかしいだろうなあ。早く弾をぬいてしまわなくちゃ、痛みはとまらん」
「ずいぶん痛そうねえ」
「そりゃ痛いだろう。あんな細い針が皮に刺さっただけでも、ちくりとするんだからな」
「あんたはもう大丈夫なの」
いそいでお妻は三井の顔をのぞきこんでいる。
「わしはもう大丈夫だ。しかし、考えてみると、めっかちにならなくてよかった。おれはやっぱり運が向いてきているんだな」
「さっき若だんながね、お浜も無事に取りもどせたんだし、あたしに箱根で湯治でもして、ここから江戸へ帰ったらどうだっていうのよ」
「なるほど――」
「あたし、だめだっていったの。あたしがそばにいてやらないと、三井がしょんぼりしてしまうからかわいそうだって」
「そりゃそうだ。姐御はおれの幸運の守り神みたいなんだからな」
ここのところ、お妻に対してはまったく手放しの三井だ。

「三井にはあたしっていう運の神さまがついているし、堅田うじもまだ無傷だし、弥一郎さんは後を若だんなにまかせて、ゆっくり傷養生をしたほうがいいんじゃないかしら」
「うむ、それが一番いいんだが、弥一郎さんとしては責任があるからなあ、そんな気にはなれないんじゃないかな」
「だって、体にゃかえられないじゃありませんか」
行列はやがて箱根の関所へかかった。
道中奉行加納庄兵衛が関所役人に、畑の立て場付近で不逞浪人どもが七、八人行列に無礼を働こうとしたので、やむをえず切りすててきた、御迷惑ながら後始末をお願い申すと、丁重にことわりをいい、無論分家の名は出さず、うまく了解を得て、そのまま三島へ向かった。
三島の本陣へついたのは、その日もすでに宵に入ってからである。
雪太郎は関所をこえるとすぐ、藩士二人を三島へ先行させ、三島に適当な外科医がいなければ、沼津まで行って招いておくようにといいつけておいた。
幸い沼津に蘭方の三宅良斎という外科に練達の町医がいたとかで、弥一郎は本陣へつくと、別室で良斎の療治をうけることになった。
「太股で幸いでした。これが少しでも腹部にかかっていると、結局は命取りです」
もう四十年輩の良斎は、手際よくさっさと傷口を切り裂いて弾を取り出し、後を縫って療治は無事にすんだ。
「骨に別条はないようですから、このまま四、五日安静にしていれば、化膿しないかぎり、傷口がついて、ぐんぐんよくなってきます」
「安静にしていなければいけませんかなあ。実は、このままぜひ駕籠で道中をつづけたいのだが」
一目でめっきり憔悴の目立つ弥一郎が、当惑そうにいうと、

「動いては傷口がつきません。万一化膿でもすると、足一本ではすまなくなります」
と、良斎は道中などとんでもないことだといわぬばかりだった。
さすがに強情な弥一郎も、医者の言葉にはだいぶまいったようである。それに、荒療治をしたばかりの傷の痛みも、決して生やさしいものではなかったに違いない。
「比良うじ、今後の道中の見とおしはどうだろう。敵は箱根を越えてまで、まだ襲撃をくりかえすだろうか」
良斎が帰ると、すぐにそれを切り出した。席には加納庄兵衛と松江が心配して、まだそのまま残っていた。
「弥一郎さん、横になって話されたらどうです。そのほうがいくらか楽でしょう」
雪太郎は軽くすすめてみた。
「いや、駕籠にゆられて山坂を越えてきたことを思えば、今のほうがずっと楽なんだから」
弥一郎は苦笑しながら、はじめて弱音を吐く。
「あたくし、何度も御様子をうかがおうかしらと、気が気ではなかったのですけれど、おうかがいしてどうしてあげられるものではございませんし、つろうございました」
松江が申し訳なさそうにいう。
「いや、顔を見られないほうがよかった。これでもみえがあるから、人にしかめっ面は見せたくないしね」
「姫君さまが、弥一郎は苦しんでいませんかと、再三御心配あそばして」
「もったいないことです」
弥一郎ははっとしたように、姫君の座敷のほうへきちんと会釈をして、
「まったく、こんなざまになろうとは不覚でした。なによりも姫君に申し訳ありません」
と、急にうなだれてしまう。
「いや、憎い将監です。弥一郎どのさえ倒せれば、必ず望みは達せられるものと見て、ねらっ

たに違いない」
　庄兵衛がいたましそうにいった。
「どうだろう、比良うじ、これからの見とおしは」
「将監の襲撃はもうないと思います。箱根を越えてからでは、たとえ姫君を手に入れても、ちょっと関所は通りかねましょうし、第一敵の人数はほとんど半分になっていますから、そのままでは襲撃する力がありません」
「わしもそうは思う」
「問題は郡山へ近づいてからですが、そこまで日がたってしまうと、おそらく順之助君跡目のお許しが公儀からおりてしまうでしょうから、もう姫君を手に入れてもほとんどむだです。むしろ、これからの策動は江戸へ移る、わしはそのほうが心配です」
「つまり、順之助君を直接なんとかしようということだな」
「そうです。これとて、例の件を発表してしまってからでは遅い。どうしても姫君が国もとへお着きになる前のことになりましょう」
「なるほど――」
　弥一郎はちょっと指を折って日取りを数えているようだったが、
「比良うじ、残念ながら、わしはここ二、三日、やっぱり自重したほうがいいようだ。どうだろう、わしにかわって国もとまで一切の指揮をあずかっていただけまいか」
　と、率直に切り出した。
「さあ、拙者には少し大任すぎますが、場合が場合ですから、加納どのを補佐する、それならお引きうけします」
「弥一郎どの、決して御無理をなさらぬがよろしい。不肖ながら庄兵衛、比良うじとよく談合の上、必ず国もとまでの大任を果たします」
　そばから道中なれた加納庄兵衛も、深い決意をこめて誓った。
「たのむ、庄兵衛。――たのんだよ、松江さん」

　心から二人に頭をさげる弥一郎の気持ちは、悲壮なるものがあったに違いない。
「弥一郎さま、万一の時の覚悟は、江戸を立つ時、おじさまにも約束してきているのでございますから」
　松江は案外落ち着いてそう答えていた。
　これで話はきまった。
　弥一郎がやむなく三島へ残って傷養生をすることになったので、道中一切の責任は加納庄兵衛が比良雪太郎の助力を得て果たすことになった儀は、露姫には松江から、藩士たちには庄兵衛から、ただちに発表された。
　藩士たちはすでに雪太郎の実力を十分承知しているので、別になんの動揺もおこらなかったし、無論露姫に異存のあるはずはない。
　姫君はすぐに松江をつれて弥一郎の座敷を見舞い、
「弥一郎、弾は無事にぬけたそうですね。少しは痛みがとれましたか」
　と、やさしい言葉をかける。
「はい、おかげでずっと楽になったようでございます」
「それはよかった。どうぞ後を大切に養生をして、露が帰りにここを通るまでには、きっとよくなっていてください。江戸へいっしょに帰れますようにね」
「お役にも立たぬ私に、そのお言葉では、あまりにも冥加すぎます」
　弥一郎は思わず涙をおさえていた。
　別室では、三井、堅田、お妻の三人が、雪太郎から事の次第を告げられて、たぶんそうなるだろうとは三人とも予期していたことだが、
「いよいよ責任が重くなったわけだな、若だんな」
　と、たがいに顔を見あわせていた。
「けど、若だんな、道中はもう大丈夫としても、あっちへ行ってからはどうなんです。国もとの赤柴とかいう家老が、敵の大将だっていうじゃ

ありませんか」
　お妻はひどく心配そうだった。
「無論、国もとは大変だが、道中だってまだ決して油断はできないんだ」
　三井がもっともらしい顔をしていう。
「ふうむ。曲崎はまだ行列を追ってくる気かしら」
「こうなれば、敵も意地になるだろうからな」
　そういう三井の言葉を裏書きするように、見張りに出しておいた吉松が、あたふたと飛びこんできた。
「若だんな、やっぱり青島のやつが後を追ってきやしたぜ」
「なにッ、青島がきたのか」
　三井はもう刀を取りに立とうとする。
「待った、三井さん。青島は手下の浪人者を四人つれて、さっさと三島を素通りしてしまったんです」
「同勢五人だな。曲崎の姿はその中に見えなかったか」
　堅田も立って床の間から一刀をわしづかみにしてくる。
「三井、まあ待て」
　雪太郎の目がいささかあきれながら、おだやかにとめる。
「いや、災いの芽は小さいうちに刈りとっておくほうがいい。堅田うじと二人で追いかければ、五人ぐらいなんとかなる。なあ、堅田うじ」
「若だんな、わしも今のうちだと思いますがなあ」
　堅田という男は、いつの場合でも興奮をあまり表に出さない。壁一重の隣で愛妻と声を出さずに夫婦げんかをしつけてきたのが、第二の習性になってしまったのかもしれないと、雪太郎はついほほえましくなる。
「いや、青島の目的はおそらく国もとだろうと思う。道中ではもう手は出すまい」
「というと――」

「将監は道中の襲撃を断念して、江戸へ引きあげた。そのかわり、青島を国もとへ急行させて、こんどは郡山で人数をそろえ、途中まで迎え討ちに出るか、行列が領内へ入るのを待って一挙に決戦に出るか、まずその辺のところだと思う」
「それにしても、いま青島を片づけておくことは、決してむだじゃないと思うが」
　と、三井はまだ納得がいかぬようだ。
「いまここで青島を片づけてしまえば、それで陰謀が逼塞するのならそれも一策だが、青島は陰謀の主体ではなく、たかが道具に使われている手先なのだ。むしろ、彼のこれからの行動を尾行して、国もとの策動をさぐる道具にしたほうがいい」
「なるほど、その手もあるにはあるな」
「吉松、お前御苦労でも青島たちの後をつけてくれ」
　雪太郎はかまわず吉松にいいつける。
「かしこまりやした。――すると、郡山までつけるんですか、若だんな」
「そうだ。今夜はたぶん沼津泊まりだろうが、明日からは夜旅をかけていそぎ出す。どう少なくとも行列より三日か四日は郡山へ早く着くようになるだろう。それから国もとの赤柴刑部と打ち合わせをして、必ず人数を出すことになる。そこまでよく見とどけて、なるべく早く引きかえすようにしてくれ」
「大役でござんすねえ」
　吉松は目をぎろりとさせて、ちょいと見得を切っている。
「吉つぁん、御殿のねずみよりずっと大役なんだから、役不足はないんじゃない」
　お妻がにやにや笑いだす。
「若だんな、わしもいっしょにまいろうか」
　堅田が心配そうにいった。
「そいつはいけやせんや、堅田さん。この大役だけは中村吉松の一人舞台ってことにしておくんなさい。あっしが男になるかならねえかの正

念場でござんすからね」
「よかろう、その意気でお前一人でやるがいい。これは路銀だ」
雪太郎はふところから手早く小判を一枚出して、吉松の前へおく。
「いいえ、路銀はまだこの間のが残っていやすから」
「遠慮するな。多すぎてじゃまになるものでもない」
「そうですか。すみませんねえ」
吉松は小判を取って押しいただいていた。

三島から宮へ五十八里あまり、八日の道中である。
宮から桑名へ海上七里、これは船でわたる。その日は桑名泊まりで、翌日は桑名から亀山へ九里、三島からいえば十日目の泊まりが亀山になる。
亀山から関へ一里半、行列はここで東海道にわかれて伊賀街道へ入る。関から伊賀上野へ九里あまり、十一日目は上野泊まりで、翌十二日目は上野から笠置へ五里、笠置から奈良へ三里あまり、奈良から郡山へ二里、約十里歩いて国入りをすることになるのである。
雪太郎の見込みでは、敵がこんどなにか策動するとすれば、伊賀街道へ入ってからで、東海道の道中はおそらく無事だろうと見ていた。
「しかし、比良さん、敵はそんなにまでして姫君を奪ったところで、実際問題としては、もうどうしようもないと思うんですがなあ」
加納庄兵衛は律義者らしく小首をかしげていた。
「わしもはじめは敵の襲撃は箱根を越すまでと見ていました。たぶん、曲崎もその考えで、藤沢でのような強引な手も打ってきたのでしょう。しかし、それが全部失敗したとなると、意地としてもこのままは引きさがれなくなりますからな。最後の手段として、又一郎君の喪を発

する前に、姫君を手中におさめ、こんどは姫君の名で、又一郎さま御遺言ということを盾に取る手がないでもありません」
「つまり、又一郎君が分家を跡目にと、姫君に直接遺言されたと、こしらえるわけですな」
「そうです。非常に無理な手で、へたをすればそれこそ家名を危うくする非常手段ですが、獲物を追う猟師山を見ずで、江戸の曲崎にしても、国もとの赤柴にしても、もう後へはひけない気持ちになっているんでしょう」
「それで、比良さん、正直なところ我々は比良さんがたよりなのだ。無論、主家のためなのだから、我々は一人として決して命を惜しむ者はない。が、いざ采配を取るとなると、弥一郎さんのいない今日、これは比良さんにたよるほかはない。どうでしょうな、国もとへ乗りこんでの対策は——勝算が持てましょうかなあ」
「さあ、必ず勝つとここで断言はしかねることですが、しかし絶対に負けてはならぬ闘いです。あらかじめできるだけの手はもう打ってあります」
「なるほど、なるほど——」
それはどんな手かと、ぜひ聞いてみたいところだろうが、さすがに遠慮して、
「とにかく、比良さん、なにぶんお願いしますぞ」
と、庄兵衛は引きさがっていった。
翌朝、行列は三島へ弥一郎主従を残して、予定の時刻に本陣を立った。
先頭に庄兵衛が立ち、雪太郎はいつも弥一郎がいる松江の駕籠の後につく。
これも前衛につくはずの堅田が、今日はしんがりの三井と肩をならべて歩き出した。
「堅田うじ、なにかわしに用か」
三井が不審そうに聞く。
「ゆうべちょっと考えたことがあるんだがなあ、三井さん」
果たして堅田はなにか三井に話したいことが

あるらしい。
「どんな話だね、堅田うじ」
「若だんなは亀山の城下までは敵はもう小細工はしないだろうと見ているようだが、わしはそうは思えないんだ」
「というと――」
堅田は声をひそめて、そんなことをいい出す。
「無論、姫君に手を出すようなまねは、たった五人ではできないだろうが、この行列のうちで敵がじゃまになるのは若だんなだろう」
「うむ」
「彼らが国もとで一仕事するにしても、若だんながいるといないとでは、だいぶ話が違ってくる」
「わかった。つまり、青島ら五人の役目は、途中で若だんなをなきものにするにあると、貴公はいいたいんだな」
察しのいい三井が先まわりをする。
「そのとおりだ。現に、弥一郎さんを狙撃した手がある。彼らは短筒を用意しているに違いない」
「なるほど――。短筒というやつがあったなあ」
これは三井も聞きずてならなくなってきた。
「青島は先をいそぐだろうから、彼らは三人と二人にわかれ、二人の浪人者のほうが短筒をまかされることになるだろう」
「飛び道具はいかん。いくら若だんなでも、飛び道具にはかなわんからな。どうする、堅田うじ」
「若だんなをまた中間にして、行列のどこかへかくしてしまい、我々が身がわりになって歩くのが一番いいんだが、これはたぶん若だんなが承知すまい」
「そうだなあ。弥一郎さんにたのまれてきた責任があるからなあ」
「そこで、わしは考えたんだ、若だんなにはなんにもいわないで、両側へ人が立って歩く」
「うむ、それがいい。堅田うじと二人で弾よけ

になって歩くことにしよう」
「ところが、それではいかんのだ。二人でそんなまねをすると、ああいう若だんなだから、すぐにそれと勘づいて、いやな顔をする」
「なるほど――」
「貴公とわしとかわるがわる、なんとなく若だんなのそばへ行って、むだ話をしながら歩くようにするんだ」
「片方のほうはそれで防げるが、片一方のほうはどうする」
「話はそこなのだ。貴公の時は、すまんが姐御に片一方へまわってもらう。どうだろうな」
「引きうけたわ、堅田さん」
お妻がうしろから二人の真ん中へ割りこんできて、
「堅田さんの時はだれに相棒をたのむんです」
と聞く。
「こんなことなら愚妻千代をつれてくるんだったが、その相棒で困っているんだ」
「吉松でもいれば、あれでもいいんだが」
「お浜じゃだめなの、堅田さん」
「お浜うじは腰元姿だし、うまい芝居はできないだろうと思うんだ」
「よし、こうしよう。三人で車掛かりというのはどうだ。それに、あぶない場所はたいていきまっているんだから、のべつに二人でくっついて歩くこともあるまい」
窮すれば通じるで、三井がうまいことを考え出す。
堅田のこの心配は、やっぱり杞憂ではなかった。
その日は三島から九里ほど歩いて、蒲原宿泊まりだったが、富士川の渡しをわたったのがもう暮れ六ツ前で、そこから蒲原まで一里近く、晩秋の日は一足ごとに暮れていった。
今日はすでに十八日で、月の出は五ツ(八時)すぎになるだろうから、宿場へ入るまでは宵闇の道中である。

行列は用意のちょうちんを手にして進んでいった。
　雪太郎警固の当番はちょうど堅田とお妻の番だったが、三井はなんとなく油断ができない気がしたので、かまわずお妻のほうへ出ていった。
「どうも暗い道だなあ、姐御」
「おや、三井うじは一人で歩いているのが怖くなったの」
　すぐうしろにつづく後衛の藩士たちは、もうお妻の口の悪いのにはなれているから、くすくすとわらっている。
　前が松江の駕籠で、この前後はことにちょうちんの灯があかるい。
「いや、別に怖くはないが、やっぱり明るいところのほうがにぎやかでいい」
　口ではそういいながら、この明るいのはまずい、的がはっきりしすぎるからなあと、三井はそれとなくあたりを見まわす。
　両側は田んぼつづきで、この辺は大丈夫そうだが、その辺りを通りすぎると宿場へ入る前に七難坂というのへかかる。両側が松林になるから、ここが一番あぶない。
「三井――」
「なんですな、若だんな」
「すまんが、姫君の駕籠わきへついていてくれ」
　雪太郎も敵の狙撃は計算のうちに入れているらしい。
　三井がはっとしたとたん、
「若だんな、あたしだっていいでしょう、どうせ弾よけなんでしょうから」
　ずばりとお妻がいって、もう駆け出そうとする。
「いや、姐御うじ、それなら我々がつきます。どうぞお控えください」
　すぐうしろの藩士二人が、赤面したようにうながしあって、ばらばらとわきを駆けぬけていった。
「あらあら、御馬前の御奉公を横取りされちまった」
　お妻がうまいことをいってわらい出す。
「そうだなあ。敵は血迷っているから、なにをやり出すかわからん」
　三井はてれくさそうに一人ごとをいいながら、雪太郎のそばを放れようとしない。
　お妻は仕方がないので、すっと雪太郎のうしろへつく。
「これから郡山へ入るまでは、毎晩宵闇ということになりますなあ」
　堅田がなんとなく三井に調子をあわせてくる。
　――ああ、そうか。比良さんは自分で駕籠わきへつかないのは、ちゃんと自分がねらわれていることを知っているんだわ。
　お妻はやっとそこへ気がついて、一人で感心していると、
だあん。
　右手の松林の中から耳もと近く一発、ぱっと銃口から赤い火のほとばしるのが、はっきりと目についた。
　弾はたしかに、ひゅんと頭の上を通ったようだ。
「くせ者だッ」
　堅田は自分のほうの側からの銃声なので、一喝するなり抜刀して、だっと松林の中へ躍りこんでいった。
　行列はぴたりと止まって、息をのみ、次の瞬間騒然となりかける直前、
「行列は進め。けが人はない。隊伍を乱してはならん。このまま進め」
　叱咤するように雪太郎の声がひびきわたった。
「行列は進め、――隊伍を乱してはならん」
　庄兵衛がそれを復唱して、先頭からもうひたひたと進み出していた。
「堅田、どこだ」
　一足おくれて、三井も松林の中へ飛びこんで

いる。
　堅田は暗い松林の中を、がさがさと奥へ逃げこんでいくくせ者の足音をたしかに耳にした。
「待てッ」
　短筒の狙撃(そげき)だから、そう遠いところではない。この辺で銃口から火の吹いたのを見たと思うあたりを、一気に走りぬけようとすると、
「堅田さん、敵はここにいる」
　ふっとそこの暗い松のかげから、静かに声をかけてきた者がある。
「なにッ」
　思わず立ち止まって、身構えながら、街道からのちょうちんのわずかなあかりでそっちへ目をすえると、短筒を持った手をだらりとさげたまま立っているのは、どうやら秋山信助の若々しい顔である。
「秋山うじか――」
「さよう、発砲の主は秋山信助」
「貴公、一人か」
「いや、仲間が一人、――これはすでに逃亡した。大した男じゃない、見のがしておやりなさい」
　信助はにやにやわらっている。
「貴公の銃口は、的より一尺ほど高かったようだぞ」
「そんなことはない。的のほうがやみのいたずらで、一尺ばかり高く見えただけだ」
「猟人(かりうど)としては、あまり信頼のできる腕ではないようだな」
「見解の相違ですな。へたな猟人にはまぐれ当たりということがあるから、かえって油断ができない」
「堅田うじ、だれと話しこんでいるのだ」
　三井がのそのそとそばへ寄ってきた。行列のちょうちんはすでに通りすぎてしまったから、あたりはもう真っ暗である。
「へたな猟人と掛け合っているんだが、当人は名人だとうぬぼれているんだ」

「いや、今の手練だと、案外名人かもしれないぞ。第一、名人でなければ、青島が大切な短筒はわたさんだろう」
「なるほど――」
「これ、名人、こんどの狩り場はどこだね」
「いや、わしはもう江戸へ帰る。名人は一発でいいものだ」
「そうか。長い間御苦労だったな」
「諸君の健闘を祈る。さらば」
　信助は気取ったあいさつをのこして、がさがさと街道のほうへ歩き出したようだ。
「そうか、あれは秋山だったのか」
　その夜、蒲原(かんばら)の宿に着いて三井から報告を聞いた雪太郎は大きくうなずいていた。
「こんどの狩り場はどの辺だねと聞いたら、もう江戸へ帰るといっていた」
「じゃ、いつかまた江戸で会うこともあるだろう」
「いい男だった。江戸でいい運を射とめてくれるといいがなあ」
　三井は感慨深げである。
「ついでだから両君にたのんでおくが、運はおたがいのものだ。堅田うじにしろ、三井にしろ、ぜひその命運をつかんで、よろこびを分かたなくてはならない人がいるんだ。好意はありがたいが、わしの運はわしがまもる。決してわしの分まで余計な心配はしないようにしてくれたまえ」
　雪太郎は改めて弾よけの介添いを辞退しておいた。
「若だんな、そこまでいっちゃいかん。我々のすることは、この先とも我々にまかせておいてくれ。なあ、堅田うじ」
「うむ。どうせ大したことができるわけじゃない。三人そろって、おっと四人か、四人そろって深川の長屋へ無事に帰れれば、こんなめでたい運はないというものだ」
　堅田はおだやかにわらっていた。

「だめよ、若だんなは別なんだから」
お妻は意味ありげにたしなめる。
「姐御、それをいっちゃいかん。いまは四人で深川へ帰ることにきめておけばいいんだ」
三井が珍しくしかるようにいう。今朝から見ていると、雪太郎が一度も姫君のそばへ近づこうとしない。その腹の中がよく読めるからだった。
「そんなに怒らなくたっていいじゃありませんか。そりゃ、あたしだって、四人で深川へ帰ればこんなうれしいことはないんだけれど」
「しかし、三井うじが姐御の家へ引き取られてしまうと、若だんなの世話はだれがするんだね」
堅田はお妻の言葉をくぎづけにするように、わざと長屋の話のほうに引っぱってしまう。
「なあに、吉松がいるさ。飯は我々のほうへきて食ってもらっていいしな」
三井が相槌をうっている間に、お妻はぷいと座を外していってしまった。
「三井うじ、姐御はすねたかな」
堅田が声をひそめて心配する。
「そんなことはない。貴公の家と違って、わしの家の夫婦げんかは相当派手になるだろうと思う」
「まだ幾日も住んだわけじゃないが、こうして思い出してみると、深川の家はなつかしいねえ」
雪太郎はなにか気持ちがあかるくなったような気がする。打てばひびくような友達の心というものをはっきりと感じたからだった。
それから九日目に、行列はその後うそのように何事もなく亀山の城下へ着いた。
その間中、雪太郎は朝駕籠が本陣を立つ時と、夜その日の泊まりの宿の玄関へついた時、駕籠のそばへひざまずいてあいさつをする以外に、決して露姫の前へは出なかった。
姫君のほうでもまた、覚悟をしているとみえて、一度も雪を呼べとはいわなかったようである。そのかわり、毎晩お妻が話し相手に呼ばれ

ていた。
亀山の城下へ泊まった夜も、雪太郎は三井と堅田の座敷に同居して、藩士たちの広間へも、無論露姫の座敷へも顔を出そうとはしなかった。
藩士たちのほうは加納庄兵衛が指揮を取る、姫君は松江が見る、そういう建て前を取って、自分は万事になるべく目立たぬようにと心がけている雪太郎である。
その夜も、お妻は本陣へつくとすぐ姫君の座敷へ呼ばれていって、夜食もそこですませたようだった。
「若だんな、いよいよ明日は伊賀路へ入ることになるな」
食事がすんだ後で、三井がいい出す。
「うむ、いよいよ伊賀路だ」
雪太郎はさすがにじいんと胸へこたえるものがある。
「道中記でみると、明日は関から伊賀路へ入って、伊賀上野まで十一里ほどかな。あさっては上野から笠置へ五里、大和路へ入って奈良まで三里あまり、奈良から郡山へ二里、まず勝負はあさってでしょうな」
堅田はちゃんと計算しているようである。
「いや、伊賀上野は荒木又右衛門の敵討ちのあった地だ。地の理からいえば、この辺も油断はできない」
三井は今から目を光らせている。
「いずれにしても、明日からは油断は禁物ということになる」
堅田は決して人にさからわない。
「吉松はどうしたろう。今夜あたり帰ってくるんじゃないかと、わしは計算していたんだが、まさか間違いがあったんじゃなかろうな」
三井がそんな心配をし出す。
「いや、吉松には敵が動き出すのを見てから帰ってこいと言いつけてあるから、まだ帰るまい」
雪太郎はたぶんあさっての道中で行きあうこ

とになるだろうと踏んでいた。

「すると、敵はまだ動き出していないことになるんだな」

「うむ、吉松が帰ってこない間は、まあ大丈夫だろうということになる」

「しかし、吉松がとりこにでもなっていると、裏をかかれることになるぞ、若だんな」

「それがないともいえないから、無論油断はできない」

「どうだ、明日から物見を先へ出して進んでは」

「その手もあるな」

「道中の敵は切り破っても押し通るとして、若だんなは国もとへ入ってからの策を、無論持っていられるんだろうな」

堅田が遠慮そうに聞く。だれの心配も、最後にはここへくるのだ。おそらく、広間の藩士たちの間でも、今夜はそれが問題になっていることだろう。

「わしはわしだけの手は打ってあるんだが、それがなるならぬは天命をまつほかはない。運がなければ、死なばもろともと腹をきめておいてもらいたいな」

「心得た。その点は、江戸を立つ時から覚悟なんだから。——なあ、堅田うじ」

「そのとおりだ。なにもいまさら余計なことを聞かなくてもよかったんだ」

堅田がわらい出した時、がらりと障子をあけて、お妻が颯爽と入ってきた。

「若だんな、姫君さまのお召しでございます」

お妻は行儀よくそこへ三ツ指をついて、切り口上にいった。

「姫君が——?」

「はい。庄兵衛さんも呼ばれています。すぐに行ってあげなければいけません」

たちまち笠にかかってくるお妻だ。三井と堅田が目をみはっている。

「承知いたした。まいりましょう」

雪太郎はうなずいて立ち上がった。思いあたることがあるからである。

「両君、ちょっと失礼」

「どうぞごゆるり——」

「三井、おとなしくしているんです」

お妻が二人のほうへにっこりして、先に立って廊下へ出る。

露姫の座敷へ出てみると、なるほど、庄兵衛もそこへきて控えていた。

正面に姫君、右側に松江を上席にして、腰元たち、お浜が並んでいる。

「姫君さま、雪太郎さんをお呼びしてまいりました」

お妻は両手を仕えてそう告げ、お浜のそばへさがって席へつく。

「姫君さま、お召しでございますか」

雪太郎は露姫の正面へ行って両手を仕える。

「雪——」

姫君の顔はいくぶん青ざめて、さすがに旅やつれが出てきている。

「明日はいよいよ伊賀路へ入りますね」

「はい、関から東海道にわかれて、伊賀路へ入ります」

露姫はすっと褥からおりて、

「雪、これまでの道中、いろいろ御苦労でした。改めて礼を申します」

と、そこへ両手をつく。

「あっ、なにをなされます。どうぞお手をおあげくださいますように——」

「いいえ、伊賀路へ入れば、もう国もとが近い。また不意にどのようなことになるかもしれませぬ。雪にも、庄兵衛にも、みなの者へも、今のうちに礼が申しておきたかったのです。露のために、一同ほんとによくしてくれました。ありがたく思っています」

「まあ、姫君さま——」

「もったいない」

思わずはっとして、一同はそこへ平伏してしまう。だれもしばらくは顔があげられないよう

だ。
「雪、一言だけ申しておきたいことがあります」
「どのようなことでござりましょう」
「露はこんどもしこの体に敵の手がふれるようなことがありましたら、駕籠の中で自害する覚悟をきめました。もう止めてはいけません」
じっとこっちを見つめながら、きっぱりと言い切るのである。
小田原でしばらく二人きりだった時、この世では到底縁のないことを、くりかえしてさとしておいた。三島からこっちは、ほとんどやさしい顔一つ見せてはいない。
露姫はもうすっかりあきらめて、万一の場合は死を覚悟してしまったのだろう。
「立派なお覚悟でございます」
雪太郎は姫君の目をおだやかに見かえして、微笑しながらいった。
「姫君、そのお覚悟はお立派ですが、雪の目の黒いうちは、姫君のお体に決して敵の手はふれさせません。雪が、さあ御自害をと申すまでは、はやまったことは慎んでいただきます」
雪太郎はきっぱりといっておく。
「本当ですか、雪」
「はばかりながら、雪はなんの策もなく姫君のお供をして、あぶない敵の中へ乗りこむのではございません。これでも打つべき手はちゃんと打ってあります。それでも万一手違いがおこった場合は、これは天命、無論雪も生きてはおりません。まずまずそのようなことは絶対にないと信じていてよろしいのです」
「それならうれしいと思いますけれど、自害の時はきっと教えてくれますね、雪」
「必ず声をかけます」
「そして、雪もですね」
露姫の目がさっと明るく輝く。
雪太郎はっきりとうなずいてみせた。
——まあ、うれしい。
それは声には出さず、くちびるだけでたしかにそういったようである。
「姫君さま、御自害の時は松江も必ずお供いたします。さようなことがあってはなりませんが、心ある者はみんなその覚悟でお供してきているのでございます。どうぞ御安心くださいませ」
松江が顔をあげて、誓うようにいった。口先だけでないことは、その静かな声音でよくわかる。
——相かわらず立派だなあ。
雪太郎は感心せずにはいられなかった。
「姫君、この度の供の者は、かく申す加納庄兵衛はじめ、残らずが必死でございます。比良さまに心をあわせて、必ず生死を共にいたしますから、なにとぞお心やすくおぼしめしくださいますように」
庄兵衛も負けてはいなかった。
「うれしく思います、庄兵衛」
「お姫さま、三井も堅田もそう申しています。ことに三井には、真っ先に切り死にをするんだよと、よく申しつけてございますから、大丈夫です。みんながこうして一生懸命なんですもの、悪人どもに負けてたまるもんですか。こっちにはちゃんとお天道さまというものがついているんですからね。——ねえ、比良さん」
お妻の口からのろけまじりの威勢のいい言葉が飛び出す。
「ありがとう、お妻」
やっと姫君の顔が明るくなったようだ。
「それでは、姫君、明朝はまた早立ちでございます。どうぞ今夜はよくお休みおきくださいますように——」
もういいと思ったので、雪太郎はあいさつをして立ち上がった。
「どうだった、若だんな」
部屋へ帰ると、三井がさっそく聞いた。あらましのことを話して聞かせると、
「さすがだなあ」
と、三井は感心していた。ただし、なにに感心したのかは、説明しなかった。

「どうだ、こっも早寝をして、英気を養っておこう」
　堅田は例によって、感心したような言葉はあまり口にしたくないらしく、さっさと床の中へもぐりこんでいた。
　翌日の道中は、全員が打てばひびくように緊張していた。露姫の悲壮な覚悟が、昨夜のうちにだれの耳へも入っていたからである。
　行列は予定どおり関から伊賀路へ入り、柘植の宿で中食をとり、夜にはなったが無事に伊賀上野の本陣へ入ることができた。
「三井、一日だけ命がのびたわね」
　お妻はさすがにほっとしたようにいった。
「うむ、明日はこんなわけにはいかんだろう」
「本当ねえ。気が重いなあ。どうせぶつかるんなら、いっそ早くぶつかってしまうほうがさばさばとしていいんだけど」
「なあに、明日はきっとさばさばとなる」
「荒木又右衛門さんに追われていた河合又五郎って人の気持ちも、きっとこんなだったかもしれないね」
　お妻がうまいことをいう。
「まあそうだろうな」
「あたしねえ、今日、日が暮れてから、歩きながらいろんなこと考えちまった」
「びくびくしながらかね」
「ところが、いろんなことを考え出したら、びくびくしなくなっちまったの」
「へえ、そんないいおまじないがあるのかねえ」
「第一に考えたのは、お露さまと若だんなのこと。ようござんすか。風がもてくる攻め太鼓ってんで、ぶう、どん、じゃらじゃら」
「鳴り物入りだなあ」
「まあお聞きなさいよ。さんばら髪になって若だんなが刀をつえにお露さまの駕籠のそばへよろめきながら逃げてくるんです。――お露さまあ」
「姐御、気はたしかか」

「黙ってお聞きなさいってのに、大切なところじゃありませんか。――お露さまが駕籠の戸をあけてまろび出て、雪、しっかりしてたもいのうと、すがりつくんです」
「なるほど、おもしろそうだなあ」
「バカねえ、おもしろいって人がありますか。これから雪がお露さまを抱いて、因果をふくめてまず刺し殺すところじゃありませんか」
「おいおい、不吉なことをいうなよ。またつまらないことを考えながら歩いていたもんだなあ」
「その次があたしと三井さ」
「おれと姐御がどうするんだ」
「しっかりおしよ。戦に負けて、お露さまと若だんなが討ち死にをしちまったから、こんどは三井があたしを抱いて、お妻、覚悟、――あたしがこう両手を合わせて南無阿弥陀仏」
「やれやれ、おれたちはもう死んじまったのか。じゃ、明日の道中は気が楽だな」
　三井はのんきそうにわらっていたが、本当は気が気ではなかった。
　その夜も吉松はまだ姿を見せない。いや、吉松が帰ってこようとこまいと、明日の敵の襲撃は確実で、相当以上に猛烈なものと見なければならない。
　そして、たとえその道中をなんとか切りぬけることができても、乗りこんでいく先が敵地なのだ。
　――若だんなは一体どんな秘策を持っているんかなあ。
　それについてはまだ一言も雪太郎から聞いていないだけに、三井は心配せずにはいられないのだ。
　露姫の行列はいよいよ最後の日程を行く日の朝を迎えた。
　行列は六ツ半（七時）に伊賀上野の本陣を出発。姫君は玄関から駕籠に乗る時、いつものとおり駕籠わきにひざまずいて待っている雪太郎を見て、

「雪、今日ですね」
と、立ち止まって声をかけた。
死なばもろとも、そういいたげな目が一瞬ひしとこっちを見おろして、返事を待っている。
「御安心あそばすように」
雪太郎はその目を見あげて、にっこりと微笑してみせた。
露姫は満足したようにうなずいて駕籠に乗る。
——これが最後の別れになるかもしれないのだから。
うしろについていた松江は、じいんと目頭を熱くしながら、
「姫君さま、よろしゅうございますか」
と、駕籠の中へ聞き、うなずくのを待って戸をしめる。
姫君の駕籠が前へ出ると、かわって松江の駕籠が式台へ着く。
「比良さま、御免くださいませ」
雪太郎に会釈をして、松江が駕籠にのると、雪太郎が黙って駕籠の戸をしめてくれた。
「お立ちい」
庄兵衛の触れ声で、行列は先頭から行進をはじめる。
白々とうす霜のおりている朝だった。
「三井うじ、じゃ失礼」
堅田は三井にあいさつをして、大股に前衛の供の中へ入っていった。
雪太郎は例によって松江の駕籠の後にしたがう。
一番しんがりは、今日も三井とお妻だった。
「若だんなはひどく落ち着いてるじゃないの。負け惜しみじゃないのかしら」
「なにが——」
「本当はなにも策があるわけじゃなく、なりゆきに任せてしようがないから落ち着いているって手もあるわ」
「バカなことをいえ。そんな若だんなじゃない

さ」
三井は雪太郎を信じ切っている。
「三井、あたしが南無阿弥陀仏といってから刺すのよ。わかってるわね」
「わかっている」
「覚悟はよいか。——あい、南無阿弥陀仏」
お妻は今日一日、また昨日とおなじ夢を見ながら歩くつもりなのだろう。
伊賀上野から六里近く歩いて、笠置の宿で行列は無事に昼食をとった。
吉松は今になっても姿をあらわさない。
笠置から加茂へ二里、加茂へかかったのはすでに八ツ半（三時）をまわったころである。
これからは一足ごとに日が落ちはじめて、奈良へ入る途中で日が暮れるはずである。
「だんな、行ってきやした」
加茂へかかると間もなく、道端で土下座をしていた吉松が、ふいに声をかけながら、雪太郎のそばへ走り寄ってきた。
「おお、吉松か。御苦労だったな」
雪太郎は肩をならべて歩けと、いそいで目くばせをする。
「敵の様子はどうだった、吉松」
雪太郎はさっそく聞く。
「へえ、やっと今朝になりやして十人ばかり、それも二人、三人と別れ別れになって、奈良のほうへ出かけるのを見かけたもんですから、いそいで引っかえしてきやした」
吉松の返事は至極簡単である。
が、その点はあらかじめ雪太郎も覚悟はしていた。
「その先発組の中に、青島らしい姿は見かけなかったか」
「あっしもずいぶん気をつけて見ていたんですが、どうもいないようでした」
「その連中を、どこで追いぬいてきたんだね」
「奈良の町へ入って、大きな料理屋へ中食を取りにあがるのを見かけたんで、その間にいそい

で突っ走ってきやした」
「青島はいつごろ郡山へ着いたね」
「三日前の昼ごろでした。それがねえ、だんな、沼津を立った時から人数は三人きりだったんです。あっしが三島で見かけた時は、たしかに五人いたんですがねえ」
　吉松は小首をかしげている。
「いや、そのうちの二人には途中で出会った。つまり、青島は二人を沼津へ残して、三人で郡山へ向かったんだ」
「やっぱりそうなんで――」
「ところで、青島は三日前に郡山へ入ったとすると、今朝までにまる二日半ほどになるわけだが、その間吉松はどこにいたんだね」
　雪太郎は念のために聞いてみる。
「あっしは城下町を出外れた奈良街道の出口で、夜も昼も見張っていやした。やつらを見のがした日にゃ、それこそえらいことになりやすからね」
「うむ、それでいい。御苦労だった。そのほかに、別に気がついたことはなにもなかったんだな」
　城内の動きを見ていろとは、いいつけても無理だから言わずにおいたのだ。こんなことは聞くだけむだな話だとはわかっている。
「ほかには別に気がついたことはありませんが、こんど江戸からお姫さまが殿さまの看病にお国入りをするってことは、領内の者はみんな知っているようでした」
「そうか――」
「もう一つ、あっしにわからねえのは、敵はたった十人ぐらいしか出さないのかどうかってことなんですがね」
「いや、その十人は先発組だろう。奈良の料理屋で後の組と落ち合うことになっているんだろう」
「やっぱりそうなんでござんしょうね」
「とにかく、御苦労だった。しんがりに三井がいるから、ちょっとここへくるようにいってくれ」

「かしこまりやした」
　吉松はいそいで後ろへ走っていく。
　――まず予期したとおりらしい。
　さすがに雪太郎は全身がじいんと緊張してくる。
　今夜の襲撃は猛烈をきわめるだろう。この分では、加茂と奈良の中間で日が暮れる、その間一里ばかりのところに、何段にもわかれて待ち伏せがあると見なければならない。
　つまり、敵は順々にこっちの人数を減らしていく計画なのだろう。
「若だんな、吉が帰ってきたな」
　うしろから三井が追いついてきて、肩をならべながらいった。
「うむ、日が暮れると決戦になるだろう」
「吉の見たのは十人ばかりだそうだが、無論それだけじゃあるまい」
「おそらく、敵の作戦は、何段にも待ち伏せをかまえて、なしくずしに味方の人数を減らし、奈良へ入るまでにお駕籠一つにして、駕籠ごと奪う気だろう」
「なるほど――。奈良から郡山まで二里ある、第一の作戦が失敗したら、その二里の間でまた決戦ということになるのか」
「無論、敵はその計画だろうが、こっちはたぶん今夜は奈良泊まりになるはずだ」
「ふうむ」
　三井はちょいとわからないといった顔をする。
「だから、我々は奈良までの間の一里を、全員討ち死にの覚悟で、もみにもんで走りぬければいいことになる」
「うむ、それは覚悟している」
「たそがれかけたら、お露さまと松江さんに駕籠から出てもらって、男装をさせる。わし、三井、堅田の三人が男装の二人をまもって、後衛の人数の中へまぎれこむ。行列はたとえ待ち伏せが出ても、立ち止まってはいかん。立ち止ま

った者は残して走る」
「なるほど――」
「最後には我々五人になって奈良へ入るようになるだろう」
「それから――」
「いや、それでおしまいだよ、三井」
「おしまい――？」
「奈良の入り口までたどりつけば、どこに泊まるかわかるようにしてある。なんでもかんでも奈良の入り口まではたどりつくようにと、加納さんに告げて、全員に触れさせてくれ」
「心得た」
三井は前へ駆け出そうとしたが、
「しかしなあ、若だんな、お妻、お浜の女たちはどうなるんだね」
と、心配そうに聞いた。
「なるべく行列から離れずに、一団となって奈良の入り口まで駆けつけるようにいっておいてくれ」
そこまでの面倒は見きれないといった雪太郎の口ぶりだ。
「よし、わかった」
たしかにそのとおりだと思ったので、三井はいそいで前方の加納庄兵衛のところへ駆け出す。
入れちがいに前方から堅田がきて、肩をならべた。
「いよいよやるそうだな、若だんな」
堅田はもう三井の話をいくらか小耳にはさんできているらしい。
「堅田うじは最後までわしのうしろをまもってくれ。たのむよ」
「心得た。若だんなのうしろにさえついていればいいんだな」
「それでいい」
雪太郎の命令は、加納庄兵衛から口うつしに、順々に藩士たちの間へつたわり出した。
行列の歩きつきがまったく変わってきたよう

である。
日はすでに西の山脈の上へ落ちかけてきた。
中ノ川へかかろうとする林道で、行列はちょうちんの用意をするためにちょっと中休みをした。あたりはもうすっかり薄暮れてきている。右手の林の中に、なにか堂があるようだ。
雪太郎は駕籠がとまるとすぐ、前の松江に声をかけた。
「松江どの、今だ」
「はい」
松江はやや大ぶりなふろしき包みをかかえて、するりと駕籠を出る。搔取りは駕籠の中へぬぎすててきたようだ。
「早くあの堂の裏へ行って、待っていてください」
「はい」
「それは拙者が持ちましょう」
堅田がふろしき包みをうけとって、先に立って林の中へ駆け出す。その間に、雪太郎は露姫の駕籠の前へ走った。
「姫君、お出ましください。雪です」
「どうかしたのですか、雪」
松江にはあらかじめ、いざとなったら男装になる計画を話して、その用意をしてきてもらったが、露姫にはまだなんにも言ってなかった。
「お搔取りは駕籠の中へおぬぎになって、ここからは雪といっしょに歩いていただくのです」
「はい」
雪といっしょと聞いて、露姫は搔取りをぬぎすてるなり、いそいそと駕籠を出る。
その手を取って雪太郎は一散に堂のほうへ走った。
「どこへ行くのです、雪」
「いまにわかります」
ちょうちんの支度ができると、もうよしと見た庄兵衛が、
「お立ちい」
と、大声に叫んだ。行列は先頭から静かに進

み出す。
堂の前には三井と堅田が身を低くして、八方に気をくばっていた。吉松も道端にしゃがみこんでいる。
堂の裏には、松江をかこんで、お妻とお浜が待っていた。
「松江どの、わしはあの林の中で見張りをする。さっそく支度をなおしてください」
雪太郎は姫君を松江にわたして、裏の林の中へ見張りに入った。
もうあたりはぐんぐん暗くなってくるところである。
「どうするのです、松江」
「お支度をなおすのでございます」
露姫は三人の手で、たちまち帯を解かれ、衣類をはがされてしまったらしい。
「これは男の着物のようですね」
「はい、今夜は男になるようにと、比良さまのお言いつけです」
「雪はそこにいますね」
「おりますから、大丈夫でございます」
「さあ、これがお袴、――松江さん、後はあたしがお手伝いしますから、あなたも早くお支度を」
お妻の声だ。
「はい、お願いいたします」
後はだれも口をきかなかった。林をわたっていく風は、もう一足で冬に入るのだから膚に冷え冷えとしみてくる。
「若だんな、すみましたよ」
お妻が叫んだので、
「おう」
と、雪太郎はすぐ林の中から堂の裏へ出てきた。
わずかに残るほのあかるみに、露姫も松江も見ちがえるような若衆姿にかわって、髪まではなおしている暇がないので、お高祖頭巾をかぶっている。お妻とお浜が二人のぬぎすてた衣類を手早くまとめてふろしき包みにしている。

「雪、これでいいのですか」
露姫が少し恥ずかしそうに走り寄ってくる。
「お立派です」
雪太郎は力をつけるようにいって、姫君の手を取り、
「姐御もお浜も御苦労だった」
と、女たちをねぎらうことは忘れない。
「比良さま、姫君さまには重いようですから、差し添えだけにいたしました」
そういう松江は、ちゃんと大小を帯しているのである。
「結構です」
どうせ姫君は刀を抜いて戦うわけではないのだから、大小はいらないのだ。それに、やみ夜だから、姿形にこだわることはいらない。ただ走りいいように男装させたのである。
「さあ、いそぎましょう」
雪太郎は露姫の右手を取ったまま堂の前へ出てくる。
姫君の左側は松江がかためた。
「三井、堅田うじ、出発」
「おう」
堅田は三井の気持ちを察して、自分から先頭に立つ。三井はうしろをかためた。
その後に吉松とお妻、お浜がつづく。
街道へ出ると、すでに足もとが少しあかるいだけで、日はすっかり暮れかけている。しばらく走ると、向こうに行列のちょうちんが点々と見え出してきた。もうだれも口はきかない。
一行がやっと行列のしんがりへ追いついた時、両側の林はようやく浅くなってきたようだ。
「出たぞう」
「わあっ」
ふいに鬨の声が林をふるわして、右手からも、左手からも、覆面の一隊が一度に襲いかかってきた。
大した人数ではないようだ。左右からいっせいに姫君の駕籠を目がけて殺到する。

「えいっ」
「とうっ」
「止まるな。走れ走れ」
駕籠わきについていた供侍たちが、激しく敵と応戦しているうちに、駕籠は空で軽いから、どんどん走り出す。
「えいっ」
「とうっ」
白刃が火花を散らしながら、次第にしんがりへ近づいてくる。後衛の中から二、三人、列を離れて敵に向かっていったので、そこをしんがりの比良組が走りぬける時には、もうかかってくる敵はなかった。
たちまち乱闘の声がうしろになる。
これが敵の待ち伏せの第一陣だった。十人ほどの人数だったろうか。
「堅田うじ、敵はお駕籠を目がけて襲撃するようだ。我々は前衛の中へ入ることにしよう」
走りながら、雪太郎がいう。
「承知しました」
堅田はすぐに行列の右へ出て、どんどん前衛のほうへ追い抜いていく。道が狭いから、一列にならなければ駕籠は追いぬけない。雪太郎は露姫の手を引っぱるようにして、堅田の後を追いながら、
「六尺、必ず駕籠をとめるなよ。たのむぞ」
と、声をかける。
「へえ、合点でござんす」
「死んでも駆けぬけやす」
六尺たちもすっかり度胸をきめて、みんな興奮しているようだ。
「奈良へ入るまでの我慢だ。たのむぞ」
「きっとやっつけやす」
「安心しておくんなさい」
駕籠が走っている間は、敵は駕籠を目あてにぶつかってくる。それだけこっちは敵の目をのがれられるのだ。
「三井、後衛の者に、だれか必ずいつも駕籠わきについているように、注意しておいてくれ」
「心得た」
後ろの三井は足をゆるめたようである。
そして、雪太郎組が前衛の中ほどへ割りこんだ時、
「若だんな、たしかに申し渡してきたぞ」
と、三井は元の位置へかえってきていた。
今の乱闘で、行列のちょうちんの数は半分に減っている。
人数も四、五人は後へ残って敵と闘っているだろう。
道は丘のだらだら坂へかかってきたようだ。
――この辺があぶない。そう見ていると、案の定、
「わあっ」
左右の森の中から第二陣の十人ばかりが、駕籠を目がけて殺到してきた。
「えい」
「とうっ」
堅田が列を飛び出して、一人を切ってすぐに列へもどった。
「おうっ」
雪太郎は一人の白刃を片手なぐりに引っ払っただけで走りぬけたが、
「とうっ」
うしろの三井が、これも列を出てそやつを切ったようである。
「三井、列を離れてはいかん」
「うむ」
幸い、松江の側の敵は、前衛のしんがりあたりからかかってきたので、松江は刀をふりまわさずにすんだ。
「走れ走れ」
「大丈夫かあ」
「おう」
駕籠は二丁ともうまく敵の中を走りぬけたらしい。乱闘の声はすでにうしろになっていた。
「雪、腰元どもは大丈夫ですか」

露姫があえぎながら聞いた。
「口をきいてはいけません」
雪太郎がしかるようにいう。今は人のことなどかまっている暇はないのだ。
丘が下りにかかると、さえた星空のはるかかなたに、奈良の灯とおぼしいあかりが三つ、四つ暗い地上にまたたいているのが目についた。
——果たして、あそこまでたどりつけるか。
いや、たとえ石にかじりついても、姫君だけはと雪太郎は歯をくいしばる。
先頭は加納庄兵衛が走り、次に十五人いた前衛の士が今は七、八人になって抜刀を引っさげながらつづく。
その次が堅田雁之助で、次が露姫を両方からささえるようにして雪太郎と松江、うしろは三井だ。
その後から駕籠が二丁、
「えんほい」
「えんほい」
六尺どもは掛け声をあわせて走る。先頭がだらだら坂を下ったとたん、並木のかげから、こんどは真っ正面へ、
「そら来た」
「わあっ」
またしても十人ばかりの敵が黒々と一度に立って、行く手をふさいだ。
「えいっ」
「とうっ」
「走れ走れ、止まるな」
やみに白刃が火花を散らして、こっちの前へ出る勢いが激しいから、先頭から順々に敵と切り結ぶ一組ずつが両側の畑の中へ列から押し出されていく。
ついに堅田が最先頭になって、
「えいっ、——とうっ」
一刀を左右にたたきつけたたきつけ、残る三、四人の覆面どもをけちらしてしまった。
「走れ走れ」

なおも追いすがろうとするやつを、雪太郎は片手なぐりに引っ払って、味方をはげましながら走りつづける。
第三陣はこうしてやっと切りぬけたが、ひょいとうしろを振りかえってみると、ついてくるのは三井一人である。
結局こっちは五人きりになっているのだ。
しかも、敵はあの丘を中心にして主力を伏せておいたらしく、丘の向こうの第二陣組の残りが、
「わあっ」
と、坂を駆けくだりながら、第三陣の血戦場へなだれこんできたようだ。その第三陣の乱闘の中に駕籠が二丁立ち往生をしているのだから、敵としてはいやが上に活気づくのは当然である。が、その駕籠の中が空とわかれば、何人かの追撃は到底まぬがれない。
果たして、まだいくらも走らないうちに、
「駕籠は空だぞう」という声が聞こえ、
「追え追え、逃げた組が怪しい」
「逃がすな、追え」
口々にわめきながら、敵はこっちを追い出したようである。その人数が意外にも多いようだ。たしかに十人以上はいるようである。
「若だんな、わしはここであの追撃をくいとめるぞ」
ちょうど小川にかかった土橋を一つわたったところで、うしろの三井がそういいながら立ち止まった。
「たのむ、三井」
振りかえってみると、三井は土橋の上へ黒々と一人で突っ立っている。
三井はたとえ切り死にをしても、この橋は一人も通さぬ覚悟で、土橋の真ん中に突っ立っていた。
「うぬッ、じゃまだ」
一隊十人ばかりの先頭を走ってきたやつが、がむしゃらにだっと切りこんできた。敵も気が

立っているから、おそらく夢中だったのだろう。

「とうっ」

三井はよけもかわしもせず、自分のほうからまっしぐらにもろ手突きを入れている。

「わあっ」

その突きのほうが一瞬早かったとみえ、敵は右の肩のあたりを一突きにされ、悲鳴をあげてよろめきながら、どぶんと川の中へ転落していった。

「うぬッ」

「たたッ切れ」

二番手を二人で、一人は上段、一人は青眼につけてわめいたが、こんどは二人ともそう無造作にはかかってこられない。

「おうっ」

三井は青眼につけたまま、仕かけてきたほうから切る、その意気でじっと相手の出ようを待っている。

後につづく七、八人の敵は、そこで食いとめられて、前へ出ることができない。

「どうした、早く片づけろ」

「先へ行ったやつに逃げられてしまうぞ」

「たしかにお高祖頭巾をかぶっていたのは女だ。早くしろ」

口々にいらいらとせき立てている。

「川を飛び越せ。そのほうが早い」

だれかがやっと気がついたように叫んだ。

「よし、川だ」

ばらばらっと七、八人が橋の左右へ走り出す。

川は九尺に足りない川幅だから、飛び越せば飛び越せないことはないのだ。

「えいっ」

「よいしょ」

星あかりをたよりに、気の強いのから先に向こう岸へ飛び越え出したが、中には飛び越し切れずにざぶんと川の中へ飛びこんだ者も二、三人あって、

「しまった」

「畜生――」

口小言をいいながら、それでもざぶざぶと岸へはいあがって、

「それ行けッ」

と、一団となって街道を走り出す。

三井ももうぐずぐずはしていられないから、

「えいっ、――とうっ」

と、自分のほうから二人の敵の中へ切って出た。

こっちは、露姫の足がもうすっかりおそくなっている。雪太郎と松江が左右から、まるで引きずるようにして走っているのだ。

「雪、もういや」

泣き出しそうな声で訴える。

「なにをいう、お露さま。捨てていきますぞ」

雪太郎がしかりつける。

「苦しい。――苦しいのです」

そうまで訴えられては、足をゆるめるほかはない。

「あそこだ。あれらしい」

「もう一息だ」

追っ手の足音がぐんぐん近づいてくるようである。

「若だんな、一足先へ行ってくれ」

たまりかねて、堅田が道をゆずりながら立ち止まった。

「たのむ、堅田うじ」

雪太郎はそのそばを走りぬけながら、なぜかふっと妻女千代の白い顔をまぶたに思いうかべていた。

ついに露姫をまもる者は、自分と松江の二人きりになってしまったのである。

物の十間と走らないうちに、背後のほうで、

「えいっ」

「とうっ」

「わあっ」

すさまじい乱刃の絶叫が聞こえ出した。

――たのむよ、堅田。

雪太郎は祈りたいような気持ちである。

　道はまた林の中へ入ってきた。ちょうちんがないから、足もとが暗くてひどくあぶなっかしい。

　ばたばたと足音が追いすがってきて、

「暗いから、気をつけろ」

「おうっ」

　たがいに声をかけあっている。

　切りあっている堅田たちのわきをすりぬけて、この二人だけがこっちを追ってきたのだろう。

「松江さん、姫君をたのむ」

「ああ、雪、行ってはいけません」

　すがりつこうとする露姫を、松江のほうへ突っ放しておいて、雪太郎は三足四足あともどりをした。

「それ、いたぞ」

「ぬかるな。気をつけろ」

　敵も足をゆるめたらしい。

　じっと木の下やみにひとみをさだめて待っていると、

「姫君、走るのでございます」

　しかるようにいっている松江の声が、はっきり聞こえた。

「おお、あそこだ」

「いそげ」

　敵の足がまた早くなった。

　その声をたよりに、やみになれた目が、黒々と近づいてくる人影をおぼろにとらえたから、すかさずこっちから踏みこんで、

「えいっ、――とうっ」

　一刀を右へたたきつけ、かえす二の太刀が左を払う。

「わあっ」

　右の一人はたしかにのけぞったようである。

　左の一人はひらりと飛びのいたが、

「畜生――」

　うめくように一声もらすと、そのままふらふ

らっと逃げ出していくようだ。致命傷でなくても、どこかへ一太刀入ったのだろう。

　耳を澄ますと、もう追ってくるような足音もないようだ。

「姫君、――お露さま」

　雪太郎は大股（おおまた）に二人の後を追う。

「雪、――雪」

「比良さま」

　その声はあまり遠くはなかった。

　――こんなところに伏勢でもあったら、こんどこそおしまいだがなあ。雪太郎は気が気ではない。

「雪――」

「おお、姫君」

　露姫が手さぐりで、ひしと胸の中へすがりついてきた。

「お露さま、いそぎます。背中へおまわりください」

　雪太郎は刀をぬぐって鞘（さや）におさめ、露姫の手を取って背中へまわした。これ以上姫君を走らせるのは無理だと考えたからである。

「雪、大丈夫ですか」

　露姫はもう意地もみえもなく、雪太郎の背中へすがりついてくる。

「松江さん、足もとに気をつけてください」

「はい」

　雪太郎は全身を緊張させて、やみの気配に神経をとがらせながら、大股に歩き出した。

　――こんなところを、不意に切って出られたら、ひとたまりもない。

　覚悟はしているが、まったく気が気ではなかった。林の道はゆるく曲がりながら、やがてつきて、ひょいと畑道へ出てきた。急に星空がからりと見上げられて、足もとの道がほの白く目につく。その行く手の道に、ひとところちょうちんの灯がいくつかかたまって、ちらちらと動いているようだ。

「比良さま、あれはなんでございましょう」

松江がどきりとしたように聞いた。
「あの辺はもう奈良のようですな」
そこを中心にして、左右のやみにも民家のあかりがいくつかまたたいている。
「あのちょうちんの灯は立ち止まっているようでございますね」
もしや敵の第四番目の関所ではないかと、松江はそっちばかり見ているようだ。
「たぶん、敵ではないでしょう。敵ならあかりは消している」
「そうでございましょうか」
しかし、敵がわざとちょうちんをつけて、最後の関所をかまえている、そういうことが絶対にないとは言い切れないのだ。
「雪、露は歩きましょうか」
姫君もこんど敵に出あえば、それが最期の時だとわかっているから、背中でじっと息をのんでいるようだ。
「いや、もう少し様子を見てからでいいです」
雪太郎は足をゆるめずに、ぐんぐんそっちへ近づいている。
「雪、もしあれが敵でしたら、こんどは露を刺しておいて、闘ってください」
露姫が思い切ったことをいう。
「場合によっては、そうなるかもしれません。しかし、最後まで希望を失ってはいけません」
「はい」
露姫はひしとほおにほおをよせてきた。
「比良さま、松江もその時は姫君さまのお供をいたします」
これも、女一人がどう闘ってみたところで、こんどはむだと覚悟しているのだろう。
「よろしい。万事はわしに任せておいてください。その時にはわしが声をかけます」
「お願いいたします」
次第にちょうちんの灯が近づいてくる。その一団は、たしかにそこに立ち止まっているようだ。

――敵か、味方か。
もうだれも口はきかなかった。全力をつくして闘えるだけは闘ってきたのだから、あれが敵ならそれまでの天命とあきらめるほかはあるまいと、雪太郎は思いきわめている。

朝の道

――助かった。
ちょうちんの紋どころに目をすえて歩いていた雪太郎は、それが見えるところまできて、ほっとした。
「雪、あのちょうちんは九曜の紋のようですね」
一人がこっちの足音を聞きつけたか、それとももうきそうなものだと思ってちょうちんをかざして見たのか、背中の露姫もその紋どころが目に入ったとみえて、ふしぎそうにいった。
「姫君、我々はどうやら救われたようです」
「本当ですか――」
「あのちょうちんは、明石の平井平左衛門が、奈良まで姫君をお迎えに出たものと思われます」
「まあ、平左がですか」
「はい。江戸を立つ時、雪が明石へ急を告げて、救いを求めておいたのです。殿さま御名代として、ぜひ郡山へ御病気お見舞いに出向いてもらいたい。姫君が奈良を通られるのは幾日ごろの予定だからと言ってやっておきました」
「まあ」
平井平左衛門は明石藩の国家老で、雪太郎の父である。
里方の国家老が主君の名代として、郡山へ当主の病気を見舞うのは当然なことだし、明石の名代の目が光っている間は、いかに赤柴刑部でも露姫には手が出せまい、そう見て、雪太郎があらかじめ打っておいた秘策だったのである。
「松江、明石から平左がまいってくれましたから、もう大丈夫です」
露姫がほっとしたように、うれしそうな声を

出す。

「はい。——比良さまのお策というのは、これだったのでございますか」

「そうです。平左は雪の父なのです」

「まあ」

松江もこれは意外だったらしい。

「雪、おろしてください。おかしいから、露ここから歩きましょう」

「では、そうなさいませ」

雪太郎は立ち止まって、背中から露姫をおろす。

明石の藩士たちは、どこかの寺の門前にたむろして待っていた二十人あまりの人数らしい。

「おお、雪之助さんだ」

「御家老、お着きになられたようです」

街道へ出て待ちうけていた五、六人が、ばらばらっと雪太郎たちを取りまいてきた。みんな顔見知りの者ばかりだ。

「諸君、御苦労です」

「人数はこれだけか、雪之助さん」

「これだけです。後の者は向こうでまだ戦っています」

雪太郎はわざと他人行儀な口をきく。

「おお、着いたか。——姫君は」

父平左衛門が人をかきわけて、つかつかと雪太郎の前へ出てきた。

雪太郎が年を取ったらこうなるだろうと思われるような、がっしりとした体軀（たいく）の平左衛門である。

「平左、露はここにいます」

露姫はいきなり平左衛門の胸の中へすがりついていった。

「おお、これはこれは姫君——」

変わった男装なので、平左衛門は目をみはりながら、やっと露姫だとわかったらしい。

「お姫さま、御苦労なされますな」

平左衛門はいたわしそうに露姫の肩をさする。

「平左、こんどは雪に、雪に何度も命を助けられて」

訴えるように姫君がいう。

「それはよろしゅうございました」

ちらっと平左衛門はわが子のほうを見たが、表向き勘当ということになっているので、藩士たちの手前、うっかり口はきけない。

雪太郎は父のほうへていねいにおじぎをしながら、

「姫君の儀お願いいたします」

と、だれにともなくいって、うしろに立っている松江に、

「松江どの、後をたのみます」

と、言いおくと、すっと父の前から身をひいた。

「あ、雪、どこへ行くのです」

露姫がびっくりして走り寄る。

「姫君、雪はこれから味方の者を助けにまいらなければなりません。あなたさまは松江どのをおつれになって、一足お先にお宿へまいっていてください」

雪太郎は行儀正しくおじぎをして、姫君を近づけようとしない。

「後で雪も、きっとまいってくれますね」

露姫ははっと気がついて、明石藩の手に助けられたのは安心だが、そのかわりもう道中の時とは違う。気ままには雪と口もきけないのだ。いや、このまま雪はそっと自分の前から姿を消してしまうのではないかと思うと、急に不安がこみあげてきた。

「必ず、後ほどまいります。——さあ、松江どの」

雪太郎はさりげなく答えて、松江に目くばせするのだ。

「姫君さま、まいりましょう」

松江が心得て、露姫の手を取る。

「明石藩の方々、御苦労でも拙者が行列をまとめてくるまで、二、三人ここで待っていただきたい」

「いや、我々も雪之助さんといっしょに行こう。そのほうが早い」
「そうだ、それがいい」
四、五人がその気になって、前へ進み出てきた。
「その厚意はかたじけないが、今夜明石藩が表に立つのは、後に面倒が残ります。ここはあくまでも郡山だけの私闘ということにして、ただ姫君だけをお願いします」
雪太郎は相かわらず用意周到だった。
「そうか。しかし、一人で大丈夫かなあ」
「いや、向こうへ行けばまだ味方がみんな残っているんだから。——では、たのみます」
雪太郎はにっこりしてみせて、くるりときびすをかえす。
「雪、——雪」
露姫が松江の手を振り切って、走り出そうとした。
「姫君さま、お待ちなされ、味方は一人でも多く助けなければなりません」
つと平左衛門が進み出て、露姫の肩をおさえてとめた。
「雪、もう一度——雪」
露姫が身もがきしている間に、雪太郎の姿はぐんぐんやみの中へのまれていった。
翌朝。
郡山城の御用部屋へ詰めた国家老赤柴刑部は、別室へ青島市郎太を招いて、二人きりで密議を凝らしていた。
昨夜せっかく奈良郊外まで出した四十人近い一味の襲撃隊は、全然失敗というわけではないが、結果から見れば見事に敵に裏をかかれてしまったことになる。
つまり、襲撃隊は次々に露姫の行列を襲って、とにかく奈良へ入るまでにほとんど行列を四分五裂にして、姫君は最後には五人ほどの人数になって奈良へ入った。
奈良へ入るまでに姫君を駕籠ごとこっちのものにできれば、それこそ大成功だったのだが、そこまでは青島も期待はしていない。行列の人数をできるだけ落伍させ、半数以下にできればそれでいいと見ていた。
その点からいえば、たった五人で姫君が奈良へ逃げこんだということは、上々の出来といわなければならない。
そして、襲撃隊の仕事は、急遽、奈良口に集結して、落伍組が奈良で姫君組と合体できないようにあくまでもじゃまをすることであった。
姫君組はたぶん余儀なくそのまま奈良を出て、郡山へ向かうだろう。その途中、郡山領へ入ったところに、市郎太が三十人の一味をしたがえて待ち伏せしていたのである。
が、いつまで待ってみても姫君の行列らしいものは来なかった。再三奈良の出口まで物見を出してみたが、すべてむだだった。
時刻からいえば、やがて四ツ半（十一時）近くなって、やっと襲撃隊のほうから連絡があった。
「我々はたしかに行列の落伍者たちより一足早く奈良口に集結したのですが、そこに明石藩の者が十人あまりちょうちんを持ってかためていたのです。残念ながら、こっちはみんな異装をしていますし、腕力に出れば奈良奉行へ訴えられるおそれがあります。しかも、彼らは露姫さまの行列を迎えに出ているのだと、はっきり言っているのです」
余儀なく一味の者は、なんとかうまくごまかしてそこを通り抜けたが、そのまま引きあげてしまうわけにはいかないのは、戦場に味方の死骸や手負いを数人残してきているのだ。そこで、一味の者は明石藩の関所へひそかに見張りをつけておいて、本隊は別のところへかくれていた。
それから大分手間取って江戸の行列組が人数をまとめ、手負いや死人をそれぞれ戸板にのせて奈良口へ到着した。
明石藩の人数はそれらを迎えて、やっと引き

あげていったので、二人にその後をつけさせ、本隊の者は戦場へ、味方の手負い、死人をまとめに引きかえした。

行列の後をつけた者は、その一行が猿沢の池のほとりの松屋新右衛門という豪家の控え屋へ入った。明石藩の頭取は国家老平井平左衛門で、三十人あまりの供をつれて泊まっていると、すっかり様子を調べてもどってきたが、おかしいのは、戦場へ向かった本隊は一人の死骸も手負いの者にも出会えない。たぶん行列組が収容していってしまったのではないかということになった。

「どうすればいいか、お指図が願いたい」

というのが、連絡の者の口上だったのである。

奈良の町の中では、どう手の打ちようもない。

要するに、昨夜はこっちが失敗したというより、敵に思いもかけないあざやかな手を打たれてしまったというほうが当たっている。しかも、死骸が三体、重傷者が四人までつれていかれているのだから、このどたん場へきて、こっちは完全に胸もとへ匕首を突きつけられたことになるのである。

「市郎太、明石の平井はそんな手を打って、一体どう出ようというのだろうな」

平井平左衛門の出ようによっては、こんどの陰謀の張本人たる刑部は、当然詰め腹を切らなくては郡山十万石の家名が立たなくなりそうだから、暗い顔をせずにはいられなかった。

「明石の平井は、おそらく明石侯の名代として、殿さま御病気お見舞いという触れこみで、当地へ乗りこむ腹でしょう」

「そうだろうな。たぶん、江戸の頼母から、一切の事情を打ちあけて、密使がまいったか、あるいは密書にしたか、とにかく明石へすがったに違いない。しかも、こんどは生き証人まで取られてしまったのだからな。――過ぎたことはいまさら愚痴にはなるが、せめて箱根を越えるまでに、なんとかしておきたかった」

「いや、曲崎さんも打つだけの手は、くりかえしくりかえし、ずいぶん念入りにぶつかっていきました。だからこそ、江戸で一度、藤沢で一度、姫君を手に入れて、十中の八、九、敵を窮地に追いつめています。その度に、比良、三井、堅田の浪人組にじゃまをされている。つまり、あの三人が敵についたというのが、運不運のわかれ目だったと言えるでしょう。一度は曲崎さんも抜け目なく三人に口をかけているんですからな」

「すると、これだけこっちがたくらんでかかったことを、たった三人の素浪人どもにかきまわされてしまったということになるのか」

ついいやみが口に出る刑部だ。

「江戸の曲崎さんも、たった三人の素浪人どもと、はじめはたかをくくってかかった。だから、強いてこっちの味方へ引き入れようとしなかった。そもそもそれが失敗のもとだったと申しても過言ではないでしょう」

昨夜の一戦も、その三人組が最後に姫君をまもって走ったとわかっているだけに、青島も比良雪太郎という男を見なおさずにはいられなかった。

「まあ、過ぎたことはいうまい。で、明石の平井をどうするかということだ」

「御家老、それより前に、大学さまお跡目の儀はどうなさいますな」

「ひとまずあきらめるほかはあるまい。昨夜のうちに姫君がこっちの手に入っていれば、まだなんとか押してみる手も残っていた。しかし、その姫君が人もあろうに明石の手に入ってしまったのでは、大学さまのお命を助けるだけが精一杯ということになりそうだ」

さすがに刑部も今はすっかり矢尽き、太刀折れたという形である。

「いや、御家老がそのお覚悟なら、平井の口をふさいで、大学さまのお命はもとより、御家老はじめ一味の者が立派に生きられる活路が、た

った一つ残っています」
自信ありげに言ってのける市郎太だ。
「なにっ、活路があるというのか」
刑部は思わず老いの目をみはる。
「御家老、明石の平井は、たとえ人質を取ろうが取るまいが、こっちの一味の計画は江戸の頼母からの知らせでみんな知っているに違いない。だからこそ、こっちの意表を突いて、昨夜ひそかに奈良まで急行していた、ということになりましょう」
市郎太は当然なことをいう。
「無論、それはそうだろう」
刑部がうなずいてみせる。
「しかし、平井の目的は、こっちの非をあくまでもあばいて、郡山藩を断絶させるにあるのではなく、表面はあくまでも病気お見舞いを口実にして、露姫さまを無事に江戸へ送りかえすにあると、拙者は思います。それが成功すれば、我々は自然に自滅することになる。他藩の内情に余計な口出しをすれば、いろいろと面倒もおこるし、それだけ出費もかさむ。損をすればといって、決して得にはなりませんからな」
「うむ、それで――」
「それは多少、いやみぐらいは口にするでしょう。御家老は柳に風とうけ流して、悪いことはみんな江戸の曲崎さまのせいだろうと、その点はあいまいにあしらっておく。御当主さまの儀は残念ながら昨夜御絶命あそばしたとお棺に対面させる、向こうはそれを承知の上できているのだから、深い詮索(せんさく)はしません。そこですぐ喪を発して、江戸表へ急使を走らせる。お跡目はすでに順之助さまときまっているのですから、敵はこれで安心するわけです」
「うむ」
「今夜は通夜ということになります。平井も姫君もお棺の前へ詰めることになりましょう。四ツをすぎましたら、姫君には旅のお疲れがありますから、別間へ御休息をすすめます」

「それで」
「その別間で、姫君は御悲嘆のあまり自害して又一郎君の後を追われるのです」
「なに、自害――」
さすがに刑部はまゆをひそめる。
「そうです。姫君の貞節が郡山十万石を救ってくれるのです。同時に、平井としては大きな過失をおかしたことになりますから、自分が生きようと思えば、こっちの筋書きどおりにしているほかはない。つまり、めでたしめでたしということになるのです」
市郎太は不敵にも、にやりとわらってみせるのだ。
「市郎太、姫君はどうしても御自害なされなければならんのか」
「はあ、そのほうが公儀へ対しても堂々と葬儀が行えますし、ここで明石藩の頭を一度押さえておきませんと、第二の策が立ちませんからな」
「第二の策というと――」
「江戸の頼母に手をひかせて、大学さまを順之助君の後見役に立てるのです」
「姫君が自害して、そんな策が立てられるのか」
「はあ。姫君は自害しますが、露姫さまは江戸へお送りして、大学さまの夫人になってもらいます」
「なにッ」
「その間に御男子出生まで、御家督は順之助君にあずけておきましょう。こうなっては根くらべよりほかに手はありませんからな」
あくまでも図太い市郎太だった。
「申しあげます」
廊下へきて小侍が両手を突いた。
「なにかな」
じろりと刑部がそっちを向く。
「ただいま領分界奈良口(さかいならぐち)の番所より注進がございまして、明石藩の使者橋田武右衛門どのと申される方が、お城へ向かわれたそうでございます」

「明石の使者がな」
刑部は市郎太と顔を見あわせながら、
「使者は一人か」
と、念のために聞く。
「はい、お使者は一人ですが、つり台を七つ人足どもにかつがせ、その一台ごとに士分一人がつきそい、ほかに中間小者が四、五人ついておりますそうでございます」
「さようか。使者の一行が大手へ着いたら知らせなさい」
刑部がいうと、市郎太がそばから、
「これ、大手の門番どもに、つり台は城内へ入れてはならぬ。橋の向こうでとめて、そのおもむきただちに御用部屋へ知らせるように、かたく申しつけておきなさい」
と命じた。
「心得ましてございます」
小侍はいそいで去っていく。
「市郎太、つり台は昨夜の手負いだな」
「さよう、死体三つ、手負い四人、七台になりますからな」
「明石の使者は、わざわざそれをこっちへかえしにきたのだろうか」
「そうではありますまい。使者の表向きの役目は、明石の名代が今日到着する旨を申し入れにくるのでしょう。おそらく、その土産物として、つり台を持ちこもうという魂胆でしょう。つまり、こっちへ恩をきせようという腹です」
「すると、黙ってうけ取っておくほかはないのではないか」
「それはその時の次第によります。手前はつり台についている士分の中に、例の比良雪太郎、三井鐘太郎、堅田雁之助の三浪人がまじっているのではないかと見るのです」
「なるほど――」
「できれば、この三人は今のうちになんとか始末しておくほうがよいのです。せめて比良だけでも、ぜひ切っておくのです」

市郎太の目に露骨な敵意が燃えてきたようだ。こんどの道中の味方の手違いには、そのかげに必ず比良雪太郎が働いていると、はっきりわかっているのだからだ。
「しかし、市郎太、まさか明石の使者の前で、切るということはできまい」
「いや、切る口実さえつけば、明石の使者といえども、黙って見ているほかはないでしょう。まあ、拙者に任せておいていただきましょう」
市郎太は自信ありげに図太い微笑をたたえているのだ。
そのころ――。
明石藩の使者橋田武右衛門の一行は、郡山の番所の士分一人、足軽二人の道案内で、すでに城下町へかかろうとしていた。先頭の橋田武右衛門は馬上で、くつわを中間に取らせ、槍持ち、挟箱、草履取りをしたがえ、乗馬のわきは若党がかためている。その後から物々しいつり台が七台、わきについている七人の士分の中に、市郎太が想像したとおり、比良、三井、堅田の三人の姿があった。
昨夜、雪太郎がふたたび戦場へ引きかえした時は、すでに乱闘は終わっていた。
途中で敵の覆面どもが三々五々、奈良口のほうへいそいでいるのに幾組となく行きあったが、雪太郎は用心深くそれを道端へさけて、もう無益な血は流さなかった。
味方はだらだら坂のこっちがわへ人数を集めて、けが人の手当をしていた。三井も堅田もそこにいた。堅田は奈良口に明石藩が出張っていて、姫君が無事にその手にわたったのを見とどけ、すぐに引きかえして、三井といっしょに味方の収拾にかかったのだという。
「比良どの、拙者はもう死んでも本望です。かたじけない、かたじけない」
姫君は明石藩の手でまもられたと聞いて、加納庄兵衛は雪太郎の手を取って、何度も押しいただいていた。

味方は大なり小なり傷をうけていない者はほとんどなかったが、しかし幸いにして、一人で歩けないほどの重傷を負った者は、一人もなかった。無論、死者はない。

そこで、味方の傷の手当がすむと、雪太郎は敵の残していった死傷者を、大切に収容するように命じた。

敵と味方にわかれていても、もとは内輪同士の仲なのである。中には余儀ない立場から、一門の者が敵味方にわかれているかもしれない。人々は熱心に死傷者をさがし求めて、死者三人、重傷者四人を拾い、民家へ走って戸板を求めてきて、行列の中へ加えて奈良まで運ぶことにした。

「重傷者をいたわることはいくら親切にしてもさしつかえないが、詰問するがごときことは絶対に口にせぬこと」

そう注意しておくことも雪太郎は忘れなかった。

「かわいそうに、微禄(びろく)の者の中から、抜擢(ばってき)という名目でつって、狩りあつめたのでしょうな」

一人一人をひととおり見舞った庄兵衛は、気の毒そうにまゆをひそめながら、雪太郎にささやいていた。

空駕籠(からかご)と戸板七枚をまもった行列が、奈良口で明石藩のちょうちんに迎えられ、猿沢(さるさわ)の池のほとりの松屋新右衛門の控え屋へ入ったのは、やがて四ツ（十時）に近い時刻であった。

よく気のつく平井平左衛門は、ちゃんと外科医の用意をして待っていてくれた。

「そうか、敵の死傷者を収容してきたか。それはなによりである」

庄兵衛から一切の報告を聞いた平左衛門の顔はあかるかった。

雪太郎が一人で父の居間の庭先へまわっていったのは、手負いたちの手当もすっかりすんで、一同おそい夜食を取り、やがてこれから寝につこうとするころであった。

「父上、雪之助です」

雨戸の外から声をかけると、

「おお、まいったか」

父は待ちかねていたように、すぐに雨戸をあけてくれた。

「父上は御壮健のようなので、雪之助安心しました」

「お前も達者のようだな」

一年ぶりに相見る父と子は、暗い廊下の上と下で顔を見あわせながら、感慨無量なるものがあった。

「家ではみんな、かわりはありませんか」

母、弟、妹、なつかしいそれらの顔が、ちらっと雪太郎のまぶたをかすめて走る。

「うむ、みんな達者でおる」

父はあっさりうなずいてから、

「お前、こんどはずいぶんえらい道中だったろう」

と、それとなく子の労をねぎらってくれる。

「どうやらこれで、万分の一の御恩がえしをさせていただきました」

「うむ、殿さまにもな、たいそう御心痛の御様子で、雪がついていてくれるのがせめてもの頼みだと申しておられた」

明石侯はちょうど在国の折だったのである。

「ここまでくれば、もう安心です。明日の朝、手前は明石の先触れの使者の供の中へ加わって、郡山へ死傷者を黙ってわたしてやりましょう。そうしておけば、先方にも良心はあるでしょうから、姫君と父上をたって別々におくような小細工はできないだろうと思います。それでももしそんな鉄面皮なことをたくらむようなら、その時こそしかりつけてやればいいんです」

「無論、わしは片時も姫君のおそばは離れぬ覚悟でおる」

「それから、父上、こんどの御名代のお役目が一応すみましたら、姫君はお里方の御見舞いに答礼という名目で、いっしょに明石へおつれし

てください。まだ縁の浅い郡山の内紛のために、姫君まで犠牲にする必要はありません」

　雪太郎は分家一派の冷酷なやりかたに対して、つい鬱憤がたぎってくる。

「うむ、その儀は十分含んでおこう。それで、お前はこれからどうする気かな」

「手前は明朝の役目をすませて、父上の御帰国をかげながら見送りましたら、その足でまた江戸へ引きかえします」

「もう姫君のお目通りへは出ないでか」

「はい。そのほうがよいと思います」

　そう言い切ってしまうことはつらかったが、結局そうするよりほかはない雪太郎なのである。

「そうか。どこにいても体だけは大切にいたせよ」

「はい」

「浪人はいたしても、時折は殿さまのお口からお前の名がもれる。忘れてはならんぞ」

「忘れません。手前はいつも明石の家来だと考えて、身を慎んでいます。その点は、父上、安心してください」

「うむ、それでよい。身を慎んでいさえすれば、いつかは時というものがめぐってくる。なにか不自由なことがあったら、江戸の親戚へそっとすがるがよい。こっちからもよくたのんでおく」

「はい」

　長居は無用だと思った。だんだん涙が出てきそうになる。

「父上も、どうぞお体を大切にしてください」

「心配するな。わしは大丈夫だ」

「では、おいとまします」

「そうか、もう行くか」

　沈んだ父の声である。

「おやすみなさい」

　思い切って雪太郎は、足早に縁先を離れた。そして、暗い庭へきてから、あふれるような涙をそっとそでおさえていた。

　今朝は、雪太郎は姫君にも父平左衛門にも会わずに奈良を立ってきた。

　今日一日だけは三井も堅田も明石の藩士の資格だから、ちゃんと供侍の支度をしている。

「姐御とお浜さんは、ここへ泊めてもらうように話をしておいたから、わしたちが引きかえしてくるまでここに泊まっていてくれ」

　松屋の控え屋を立つ時、雪太郎はお妻とお浜にそう言いおいてきた。

「あら。じゃ、あたしたちは郡山へお供はできないんですか」

　ちょっと不服そうなお妻だった。

「うむ、姫君のことはもう心配ない。なまじ郡山へいっしょに行って、なんといっても敵地なのだから、間違いがあってはならん」

　万一、どんなことで人質にでも取られては、かえってやっかいなことになる。父にしても露姫をまもるだけが精一杯だろうからと、雪太郎は用心したのである。

「じゃ、比良さんたちはすぐここへ引きかえしてくるんですか」

「おそくとも五日とはかかるまい。姫君は父がお供をして明石へまいることになるだろう。それを見送ったら、すぐに引きかえしてくる」

「若だんなは明石へ行かないの」

「行かない。わしは深川の大工町の家へ、みんなといっしょに帰る」

「だって、それじゃ姫君さまがあんまり――」

　おかわいそうという言葉は、さすがにお妻ものみこんでしまったようである。

　雪太郎は昨夜から晴れて父と子の名乗りもしていないようだし、露姫の前にさえ顔を出していないのだ。

「三井、ちょっと――」

　すきを見て、お妻は三井を物かげへ呼んだ。

「わかってるよ、姐御。向こうへ行って、もし危ないことがあったら、わしが真っ先に切り死にをすればいいんだろう」

三井はちゃんと心得ているような顔つきだった。

「そりゃいうまでもないことだけど、もう一つ大切なたのみがあるのよ」

「なんだ、言ってみろ」

「ことによると、若だんな、もうお露さまには会わない覚悟をきめているかもしれない。それじゃあんまり姫君さまがおかわいそうだから、あんた仲に立って、いよいよお別れの時には、一目だけ会わせてあげてくれない」

「さあ、そんなことわしにできるかなあ」

「できても、できなくても、骨を折っておくれよ。あたしも今日はいよいよ姫君さまとおわかれなんだから、せめて三井がこうこうですからって、よろこばせてあげたいんだからさ。きっとたのみましたよ」

「大役だなあ。わしにうまくいくかなあ」

「うまくやらなけりゃ、家へ入れてやらないから」

お妻ににらみつけられて、

「よし、わかったわかった」

と、甘い三井はとうとう大役を引きうけさせられてしまった。が、実をいうと、三井はそんなことよりもっと大きな心配がほかにあった。今朝自分たちが明石の家来としてこの供の中に加えられたのは、いわば敵地へさぐりを入れに行くのだから、どうせ無事にはすまない。雪太郎はそこで死に場所をさがす気じゃないかということである。

明石の使者橋田武右衛門は番頭役をつとめる温厚沈着の士で、年配も四十をすぎ、こんどの名代では副使を仰せつけられていた。

「雪太郎どの、今日の行動は一切橋田の指図にしたがってくださらんと困りますぞ」

雪太郎の気性をよく知っている橋田は、自分の下で万一けがでもされては大変だと心配したらしく、出がけにくれぐれも念を押していた。

「決してお先っ走りはしませんから、安心してください」

「いや、役目がすむまで、わしに無断で姿など消してはいかんということです」

武右衛門もまた、用さえすめば雪太郎がいつ姫君の前から姿を消すかもしれないことを、薄薄は知っているようだった。こうして、使者の行列はやがて郡山の大手へかかってきた。

明石の使者が昨夜の死傷者をつり台に乗せてくるとだれから聞き知ったか、大手の広場にはもうかなり藩士の家族たちが集まって行列の着くのを待っていた。無論、それらの人立ちの中に、死傷者の身内の者が多いことは、その息をのんでいるような必死な顔つきでもよくわかる。

行列が大手の橋手前までくると、橋田武右衛門は行列をとめて、馬からおりた。

「しばらくお待ちを願います。ただいま城内へ取り次いでまいります」

当然城から出迎えの者が門前まで出ているはずだのに、そんな様子も見えないので、案内役の士はそうことわって、いそいで橋をわたっていった。

——これは無事にすみそうもない。

たぶん、つり台に難癖をつける気だろうと、雪太郎にはすぐぴんときた。門内へ走った取り次ぎの士は、なかなか引きかえしてこない。橋田は小者が用意した床几に腰かけて、ゆうゆうと待っている。

つり台は前の四台が重傷者なので、それについている雪太郎たちは一応つり台の中へ顔を入れ、容体をたしかめた上、なぐさめの言葉をかけていた。

中には水を所望する者もあったが、これだけはもうしばらくの辛抱だからと、なだめて与えさせなかった。

「おお、出てきたようだぞ」

やっと大手門の外へ、さっきの取り次ぎの士

の後から、四人ばかり裃をつけた侍たちが出てくるのを見ると、むしろ遠巻きにしている人立ちの中から、そんなざわめきがおこった。みんな待ちかねていたのである。

「若だんな、ありゃ青島のようだな」

うしろから三井がいった。

「うむ」

裃組の先頭に立って、橋をわたってくるのは、たしかに青島市郎太である。しかも、うしろについている四人のうちの二人までが、どうやら江戸からついてきた浪人組の者らしい。武右衛門は静かに床几から立ち上がって、かぶっていた陣笠をぬぐ。供の者は一同笠のままそこへひざまずいて待つ。

「明石藩の御使者、御苦労に存じます。手前は当藩の青島市郎太と申す者、お出迎えにまかり出ました」

市郎太は橋田の前へ出て、神妙に小腰をかがめた。

「拙者は明石藩にて番頭役をつとめる橋田武右衛門と申す者です。この度、御当主さま御病気見舞いのため、主人名代として藩老平井平左衛門儀昨夜奈良へ一泊つかまつり、後刻当地へ到着の予定にて、拙者を先触れの使者につかわされました。なにとぞよろしく城中へお取り次ぎを願い申す」

橋田は丁重に市郎太に申し入れる。

「お役目御苦労に存じます。つかぬことをおうかがいいたすが、つり台を御同行のようですな」

市郎太はなにくわぬ顔をして、橋田のうしろに控えているつり台のほうを見ながら聞いた。

「申しおくれましたが、あれなるつり台は、昨夜道中にて思わぬけが人を拾い、その口からいずれも御当家の御家来衆と判明しましたので、事情はともかくとして、いまは一門につながる御当家のこと、さっそく手当を加えて今朝これまで運ばせました。お改めの上、めいめいの家族の者にお引き渡しください。これは役目以外

のことですから、別に辞儀には及ばぬことです」

こっちは先方がうけ取りいいように、一切を不問のままつり台を引き渡そうというのである。

「失礼ですが、一応けが人の顔を改めさせていただきます。よろしいでしょうな」

「それは差しつかえありません」

市郎太はまず雪太郎のついている第一のつり台から、一つ一つ中をのぞいていく。ちょっとのぞくだけだから、すぐすんでしまう。

「橋田どの、けが人といわれたようだが、うしろの三人は息が絶えているようですな」

武右衛門の前へもどってきた市郎太がぶしつけにいう。

橋田はわざと返事をしなかった。そんなとがめだてをうける筋合いのものではないからである。

「それに、せっかくですが、その七人の者はいずれも当家の家来ではありません。なにかのお間違いではないでしょうかな」

「いや、間違いではござらん。けが人が自分の口から郡山藩なんのなにがしと名乗ったのですから、これほどたしかなことはありますまい」

「もしそれが事実なら、そのけが人は頭が狂っているのでしょう。恥を知る侍なら、そんなぶざまなかっこうになって主家の名は出さぬものです。どうぞおすておき願いたい」

冷酷な顔をして、きっぱりと言い切る市郎太だ。

江戸などでは、家来が町へ出てけんかをして切り殺された場合、藩の恥辱としてこういう扱いをすることはままある。が、こんどの場合は、まったくそれとは違うのだ。

いってみれば、この犠牲者たちは、青島一味が口車にかけて狩り出した味方の者なのである。

「やっちまうか、若だんな」

三井が義憤に歯がみをしながら、そっと雪太

郎のそでをひいた。思いはおなじなのだろう。そのうしろへ堅田がきて、じっと雪太郎の合図を待ちかねている。

しかし、雪太郎は出がけに一切指図にしたがうようにと、かたく武右衛門から言いつけられているから、うっかり勝手な行動は取りかねるのだ。

「お手前は江戸詰めの御仁とみえるな」

温厚な武右衛門は怒りの色など少しも顔に出さず、おだやかに聞く。

「さよう、本来は江戸詰めでござる」

「しからば、国もとのことはあまり御存じあるまい。どなたか国詰めの方にここまで御足労を願いたい」

「それは無用のことかと存ずる。明石のお使者におうかがいいたすが、今日の供の方々はみな明石藩の御家来でござるかな」

市郎太が意味ありげに逆襲してきた。

「さよう、みな明石の家来ばかりでござる」

「それはおかしい。供の方々の中に三人だけ、江戸以来顔なじみの浪人どもがまぎれこんでいます。この者たちは、この度露姫さま御入国の行列の中へ入りこんで、けしからんふらちを働いた者どもです。右の三人は願わくば当方へお引きわたし願いたいが、いかがでござろうか」

ぬけぬけと正面を切ってみせる市郎太だ。

――うぬッ。

と、三井がまたしても歯がみをする。

「まず待たれい。順序から申して、つり台のほうから先にかたづけましょうかな」

武右衛門は軽くうけ流して、人立ちのほうへ三足四足ゆっくりと進み出た。

「失礼ながら、方々はいずれも当藩御家中の御家族方と存ずる。拙者は明石藩の使者橋田武右衛門と申すが、昨夜奈良にて当藩の手負いの者を拾い、かようにつり台を仕立てて運んでまいった者、このつり台をめいめいの御家族のもとへ送り届けてあげたいと存ずる。心当たりの方は、一応つり台をごらんになって、その屋敷をお教えくだされぱかたじけない。どなたにても、どうぞ御遠慮なくお進み願いたい」

人立ちの中には無論死傷者の身内の者がきていて、さっきからの青島市郎太の言動に忿懣の色をたぎらせているのだが、さて改めて橋田からそういわれてみると、死傷者はいずれも微禄の士が多いようだから、ちょっとためらわずにはいられなかったようだ。

その中から、三十がらみとも見える裃姿の気魄ありげな侍が一人、若党中間をしたがえて、つかつかと武右衛門の前へ進み、丁重に一礼した。

と、見ていた市郎太が、

「控えろ、三之丞。滅多なまねをすると、藩名にもかかわる落ち度になるぞ」

と、威嚇するようにしかりつけた。

が、三之丞は取りあおうともせず、

「手前は郡山藩にて郡奉行をつとめます丹羽三之丞と申します者、お使者の御厚情まことにかたじけなく存じます。お言葉に甘えまして、これらのつり台を家族の者に引きわたしてつかわしたく、おゆるしいただけますれば、身寄りの者のよろこび、いかばかりかと存じます」

と、折り目正しいあいさつである。

「これはこれはごていねいなるごあいさつ、なにとぞお改めの上、お引き取り願います」

「さっそくのお言葉、ありがたきしあわせに存じます」

三之丞は慎んで会釈をしてから、

「これ、つり台に心あたりの者は、遠慮なくこれへ出なさい」

と、人々のほうへ声をかけた。

「はっ」

言下に何人かがもうつり台のほうへ走り出す。

「ならんぞ。そのつり台をうけとった者は、即日追放の処分を取るから、さよう心得ろ」

市郎太がこっちから居丈高になってわめき立てた。
一瞬、大手の広場中がしいんと青ざめて、次の瞬間群集の中からわあっと不穏な喊声がおこり、いまにも市郎太のほうへなだれ打って動き出そうとする。微禄組の怨懣がついに爆発しかけたのだ。
「一同、待てッ。暴挙はいかん」
三之丞が大手をひろげておさえ、
「つり台の者の縁者は、めいめいつり台を引き取って、早々自宅へ運びなさい。責任は丹羽三之丞が一命にかけて持つ。引き取ってさしつかえない」
と、改めて申しわたす。
わあっと、またしても群衆の中から喊声があがったが、こんどは喊声だけで直接行動に出ようとする者はないようだ。と見て、三之丞はくるりときびすをかえし、市郎太の突っ立っているほうへ進んでいった。
「青島市郎太、その方は分家の付け人の分際で、何者の命をうけ、かように明石藩お使者の応対に出たのか。僣越であろう」
「黙れ、三之丞。その方こそ、だれの許しをうけて、今日登城いたすのか。その方儀は妹松江にこの度の道中ふらちな所業のあることが判明いたせしゆえ、当然その責めを負い、閉門を仰せつけられるはずである。直ちに屋敷へ立ち帰って謹慎いたしておれ」
市郎太は負けずに、強引にやりかえす。
「なにッ、もう一度申してみよ」
「相わからなければ、わかるように申してつかわそう。この度露姫さまお国入りのお供申しつけられし中老松江は、その道中、行列に明石藩の浪人と偽る不逞な浪人者三人を引き入れ、そのうちの一人比良雪太郎なる者と不義を働き、諏訪弥一郎に見とがめられたるを根にもって、これを箱根山中において仲間の者に狙撃させたるため、弥一郎は道中不能となって、三島の宿

に取り残されたる事実、弥一郎よりの密訴によって判明したものである。追って程なく露姫さまのお国入りと同時に、松江儀をきびしく取り調べの上、処分いたすことになっている。相わかったか、三之丞」
口先だけは達者だが、まったく小理屈にもなっていない一方的な放言である。市郎太にすれば、ただ相手を怒らせて、うまく雪太郎まで刀を抜いてくれればもうけ物だと思ってのでたらめなのだから、図太い顔をしてけろりとしている。
「その方のいうことはそれだけか」
三之丞の声音は冷静そのものである。
「なにッ」
「ほかに申すことがなければそれへ直れ、僣上者の成敗をしてつかわす」
三之丞はひらりと肩衣をはねて、柄に手をかけた。
「無礼な、成敗とはなんだ。貴様にそんなことをする権限がどこにある」
「問答無益、分家の付け人の分際で、自ままに他家のお使者の応対に出たるふらち者、覚悟せよ」
ただ感情にはやって抜く刀ではない。お家のためにふらち者を成敗するという立派な名分があるのだから、三之丞は断然切ってすてる覚悟で、さっと抜刀した。
「それ、この狂人を取りおさえろ」
市郎太はとっさに供侍どもに命じて、自分はすっと橋の上まで身をひいた。
四人の供侍のうち二人は江戸からつれてきた浪人剣客で、二人は赤柴刑部が屋敷へ養っておく食客浪人である。江戸の二人も、食客の二人も、無論それだけの腕を買われて養われているのだから、いずれも一流のつかい手だ。
「おうっ」
ここが腕の見せどころだと思うから、江戸組の木村丈八、丸田万之助の二人がまず抜きあわ

せて、三之丞の前へ出た。
「逃げるか、市郎太。ひきょうだぞ」
三之丞は叱咤したが、前へ出た二人を切らなければ進むことができない。
「わしは狂人は相手にせぬ。三之丞、狂人になって切られたくなければ、屋敷へさがって追っての沙汰を待ってはどうか」
市郎太が橋の上から冷笑するようにいう。
――うぬッ。前に強敵を二人までうけた三之丞は、もう口がきけなかった。
「若だんな、大丈夫かなあ」
三井がいまにも立ちあがりそうにしながら、雪太郎に聞いた。
「うむ」
雪太郎はちらっと武右衛門の顔を見あげる。
武右衛門は立ったままじっと三之丞のほうへ目をすえている。
「えいっ」
「とうっ」
三之丞も腕はたしかなようだが、強敵二人ではうっかり自分のほうから切って出られないから、相手の出ようを待っているようだ。
「えいっ」
「おうっ」
二人のほうはまだたがいにゆずりあっているようだが、どっちもその気になればすぐにも切って出られるだけの腕は持っているらしい。
「いかん、ほうっておくと丹羽さんのほうがあぶない」
三井がまたしてもいらいらしながらいう。
「橋田どの」
雪太郎にもそれが見えてきたので、もう黙っていられなくなってきた。しかも、三之丞は松江の兄なのだ。なんとしてもここで切らせたくはない。
「橋田どの」
雪太郎はたまらなくなってもう一度呼ぶ。
「なりませんぞ、雪太郎さん」

武右衛門はじろりとこっちを見ていった。
いってみれば、こっちは明石藩の使者として乗りこんでいるのだから、直接こっちへ切りかかってきた敵ならともかく、郡山藩同士の切りあいにはどっちの味方もできない立場にあるのだ。たとえ三之丞が切られても切られてしまうまでは黙って見ていなければならない。
雪太郎もそれはよく承知しているが、みすみす理由が正しい三之丞が切られるのを見てはいられない気がする。
――こんなことなら、ただの浪人としてついてくればよかった。雪太郎はそう思いながら、我にもなくそっと立ちあがっていた。
雪太郎が立つと、三井も堅田も立ちあがった。
つり台は人足がかついで、すでにそれぞれの身寄りの者が家へ運んでいっている。その一台一台についていた明石の家来たちも、みんな立って、雪太郎のほうへ集まってきた。
「一同、ならんぞ」
武右衛門はそれと見て、強く手で制しながらしかりつけるようにいった。が、こっちが助太刀に出る前に、
「わあっ」
群衆の中から異様な喊声がおこり、ばらばらっと四、五人、たすきがけの士が怒りに目をぎらぎらさせながら、切りあいのほうへ走り出した。
「丹羽どの、御加勢」
「三之丞さま、お手つだい」
口々に叫びながら、さっと抜刀して二人の敵に向かった。
これらの助太刀は、さっきからの群衆の怒りを代表して起こったのだから、腕の強弱の問題ではなく、はじめから全身が火の玉のように燃え狂っている。
「江戸の悪人ども、覚悟」
「えいっ」
「とうっ」

五人が五人とも待ったなしに二人のほうへ切りこんで行った。
「うぬッ」
「おのれ」
敵は刀をふるって一応は応戦したが、一人を払えば一人が踏みこんでくるので、思わずじりじりと橋のほうへさがっていく。
「わあっ」
それと見た群衆が、またしても味方に盛んな声援を送る。それらがいまにも抜刀して、一度に襲いかかってきそうだ。
――こりゃいかん。市郎太は内心おだやかならざるものを感じて、城内から味方を呼ぶために、いそいで門のほうへ引きかえしはじめた。
「あっ、なにをする」
思わず色を失ったのは、その目の前で大手の表門がぎいと両方から閉ざされたのである。
「これ、なんで門を閉める。あけろ」
しかし、中からなんの返事もなく、がたりと閂(かんぬき)をかけてしまったようだ。あわててくぐりのほうへ走ってみたが、これも同時に桟(さん)をおろしてしまったらしい。
「これ、門をあけろ。勝手にかようなまねをいたすと、重罪に問われるぞ」
激しく門扉(もんぴ)をたたいてわめいてみたが、中からはうんともすんとも答えない。
「わあっ」
江戸組の二人はたまらなくなって、ついに橋の上まで退却し、五人の助太刀組がこれを追い討ちにしょうとしたが、
「各々方、待たれい。切るのは分家のふらち者青島市郎太だけでよろしい。まず待たれい」
と、三之丞が前に立ちふさがって制した。
「青島さま、門がしまりましたな」
四人の供侍は、橋のこっちまで引きあげてきて、その閉ざされた門の前に市郎太のぼうぜんと立ちつくしているのを見ると、さっと顔色をかえた。濠(ほり)へ飛びこんで逃げる以外に、逃げ道

がなくなったからである。
――この門は刑部がしめさせたのだろうか。
市郎太はじっと門扉(もんぴ)をにらんでくちびるをかんでいたが、たとえだれがしめさせたにしても、この門があかなければ、こっちは切り死にをするほかはないのである。
考えてみると、こっちは江戸以来分家大学を擁立するために、無理は承知であらゆる手を打ってきた。
そうして、もう一息というところで、いつも失敗をくりかえしてきている。つまり、こっちに運がなかったのだとあきらめるほかはあるまい。現に、国もとは国家老赤柴刑部が一味でかため、こんどこそ安心して闘える、もう露姫もこっちのものだと考えていた。
ところが、その安心してこっちの思い通りに闘える国もとでさえ、このどたん場へきてこうして門扉一重のために身動きのできないような窮地に立たせられる。要するに、刑部が国家老という地位と藩金を勝手にまいて築きあげた地盤でさえ、国もとの人心を残らず集めるということはできなかったのだ。
いま橋の向こうに抜刀している丹羽三之丞のような正義派が、この門扉の向こうの城の中にも何人、あるいは何十人といて、明石藩の使者が到着したのを幸い、ひそかに立って、奥の刑部と門外の自分たちの連絡を断ち、二分して討ち果たす手に出た、そう考えて考えられないことはない。
――おそらく、それに違いあるまい。
刑部がこんな小細工をして青島市郎太一人をここで犠牲にしたところで、その申し訳によって命が助かるなどということは、万に一も望めないのだ。
すると、運命の門扉は、正義派の手によってしめられたということになりそうである。
事はすでに破れたのだ。
――よし、おれも江戸の青島市郎太だ。どう

せ死ぬならせめて仇敵比良雪太郎を道づれにして、いさぎよく死に花を咲かせてやろう。

市郎太はとっさにそう腹をきめた。いや、比良を切った勢いで、一気にあの群衆の中へ飛びこんでしまえば、ひょっとして活路がひらけ、江戸へのがれることができるかもしれない。そんな希望さえ捨てかねている市郎太である。

「青島どの、向こうから三之丞がやってきますぞ」

江戸組の木村丈八が、これも決死の形相で青島に告げた。三之丞は味方を少しさがらせておいて、左手に抜刀をさげ、右手をあげてこっちへ合図をしながら、ただ一人で橋へかかってくる。おそらく、なにか掛け合いにこようというのだろう。

「わしが行ってみよう」

市郎太はこっちも手をあげて合図をしておいてから、

「おい、貴公たちは、もしわしが敵を切って群衆のほうへ走り出したら、一度に切って出て、わしの後を追うのだ。目ざすのは刑部どのの屋敷、それ以外にこの窮地を脱する手段はないんだから、思い切ってやるんだぞ」

と、早口にいっておいて、ゆうゆうと橋へかかっていく。

「承知しました」

うしろで四人が口々に答えていた。

大手の広場の群衆も、明石藩の使者組も、しいんと鳴りをしずめて見まもっている中に、ちょうど橋の中央で三之丞と市郎太は出会うようになった。

「市郎太、大手の門がしまっては、もうのがれる道はあるまい。その方武士らしく、ここで自決してはどうか。その方のおかした罪は、到底自決以外にゆるさるべきでないことは、自分が一番よく知っているはずだぞ」

三之丞はなじるというより、むしろさとすようにいった。

「いや、そっちにそう言い分があるなら、こっちにもまたしかるべき言い分はある。青島市郎太は事ここに至って、未練がましく命を惜しむものではないが、ただ一言、明石藩の使者に問いただしたいことがある。その上で貴公の言い分に返事をするから、わしを一応明石藩の使者の前へ案内するがいい」

三之丞は抜刀を左手にしているが、市郎太はまだ刀を抜いていないのだ。相かわらず図太い面構えではあるが、その図太きの底にこれが最後という一脈のあわれさを感じた三之丞は、

「よし、明石藩のお使者が承知されるかどうかは知らぬが、その希望はいれてつかわすことにしよう。いっしょにくるがいい」

と、刀をぬぐって鞘におさめ、前に立って橋を引きかえしはじめた。

背後からいきなり抜き討ちをかければ切れないことはない。はっと一同が息をのんでいるうちに、別にそんな風もなく、三之丞は橋をわたり切って、橋田武右衛門の前へ出た。

「お使者に申し上げます。青島市郎太儀、前非を自覚いたし自決する前に、お使者になにか一言申し上げたいことがございますそうで、この儀お聞きとどけくださいますでしょうか」

武右衛門は武士の情けとして、これはことわる理由はない。

「よろしゅうござる。なんなりとうかがいましょう」

「かたじけなく存じます。――市郎太、おゆるしが出た。そこから申してみるがよい」

三之丞は少しうしろへさがって、油断なく抜き討ちの利くあたりへ陣取る。市郎太に少しでも不穏な気配があれば、容赦なく切ってすてるつもりである。

「青島市郎太、お使者におうかがいしたい一儀がござる」

「なにかな」

「それなるお供のうちにいる比良雪太郎、三井

鐘太郎、堅田雁之助の三人は、たしかに明石藩の御家来なのですな」

「さよう。比良雪太郎は相違なく明石藩譜代の家来、三井、堅田の両人は比良が養う食客なれば、家来に準じる者と思ってもらって差しつかえござらん」

　武右衛門はきっぱりと言い切る。

「その明石藩の比良雪太郎なる者は、この度露姫さまお国入りの道中について、江戸以来お供まわりの中にあり、中老松江としめしあわせて、箱根山中において道中奉行たる諏訪弥一郎を狙撃させ、三島からこっちおのれが弥一郎の地位を乗っ取って、中老松江とひそかに不義の泊まりを重ねてきた不埒ないたし方は、すでに諸人の知るところでござる」

　市郎太はまたしてもそれをぬけぬけと述べ立てる。

「無礼だぞ、市郎太」

　またしてもあまりの暴言に、三之丞はたまりかねてそばから一喝した。

「いや、言うだけのことは言わなくてはわからん。もうしばらく黙っていてくれ」

　市郎太は平然とやりかえして、武右衛門のほうへ言いつづける。

「しかし、わしがそうだとここでいかに真相を暴露しても、そっちでいや違うと反駁してくれば、まだ証人が到着していないのだから、結局は水掛け論になる。といって、わしはこの場になって証人が到着するまで待ってくれなどという女々しいことは言いたくない。比良雪太郎という横着者は、江戸以来、宿怨のかさなる仇敵なのだ。わしは武士として比良雪太郎に尋常の果たし合いを申しいれる。この儀、ぜひともお取り上げねがいたい」

　詭弁といえばあきらかに詭弁ではあるが、尋常の果たし合いといわれては、武士として後へひくわけにいかない。

　それでなくてさえさっきから腹にすえかねる

憤怒がたぎっている雪太郎だから、

「承知した。その果たし合いたしかにうけよう」

と、武右衛門が答える前にきっぱりとうけて、

「橋田どの、この儀だけは雪太郎のわがままをおゆるし願いたい」

　と、手早く笠を取って、改めて武右衛門に許しを請うた。

「やむをえぬ仕儀のようですな。よろしい、ここにて見分いたそう。双方尋常に果たし合いをなさい。――丹羽どのもどうぞそれにて御見分ありたい」

　事ここに至っては、橋田もそう腹をきめるほかはなかったのだろう。

「お使者がその御意見なれば、御意にしたがうほかはございません」

　当然自分が成敗すべき相手が、ほかに勝手な敵手を求めてしまったのだから、三之丞としては本意ないが、一応見分役にまわらなくてはならなくなった。

「三井、堅田、助勢は絶対にならんぞ」

　雪太郎は下げ緒を取ってたすきにかけ、手ぬぐいではち巻きをしながら、これも黙々とおなじ身支度をしている三井と堅田に、かたく念を押した。

「いや、決して助勢はせぬ。ただ、相手が相手ですからな。うしろを用心するだけのことです」

　三井がけろりとして答える。

　それは無用とは言いかねる雪太郎だし、またいったところでおとなしく引きさがる二人ではないから、黙ってまかせておくことにした。市郎太は自分のほうから仕かけた果たし合いなのだから、無論悪びれた様子は少しも見せなかった。太陽は昼に近いから、すでに頭の上へきている。どこに立っても位置に損得はない。

「比良うじ、支度がよくばまいろうかな」

　市郎太は大手の橋を背に立つ。その橋の上に、これもすっかり身支度をした味方四人が陣取っているのだから、そこに立つのが当然である。

雪太郎が無言で相対して立つと、
「貴公は道中散々いいことをしてきたのだから、思い残すこともあるまい」
そんな憎まれ口を利いて、市郎太はにやりとわらった。
「若だんな、気をしずめて——」
三井がうしろからそう注意していた。
市郎太はわざと雪太郎を怒らせようとしている。その手に乗るなと、心配しているのである。
「行くぞ、青島」
もう問答無益であった。雪太郎は憤然と抜刀する。
「おうっ」
同時に市郎太も抜き合わせた。無論、相青眼である。
見分役たちも、広場を埋めている群衆も、一瞬白々と太陽が青ざめたような殺気にうたれて、しいんと息をのむ。
「えいっ」
「とうっ」
狡猾無類な市郎太は、また高柳峰十郎に勝るとも劣らぬ腕前の持ち主のようである。
——こやつ、油断はできん。
雪太郎はじいんと胸が引きしまってくる。いつもならここでぐっと度胸がすわって、無念無想になりきれる雪太郎なのだ。真剣勝負には、第一に恐怖、第二に焦り、第三に相手を甘く見ること、この三つは絶対に禁物である。
雪太郎は再三の真剣勝負で、よくそれを心得ていながら、今日は市郎太のあまりにも憎々しい放言に、断じて切ってやるという忿怒が胸にたぎりすぎている。それが自然に焦りとなって出るのだ。
「えいっ」
「とうっ」
市郎太の構えに五分のすきもないことをちゃんと見ていながら、雪太郎は強引に間合いをつめて出る。

来るなら来い、こっちは一気に突いて出るばかりだ、そういう気魄が火のように燃え狂っている。
——うぬッ。
その無謀にも似たすさまじい気魄が、市郎太には、こいつ相打ちに出るなと、すぐに胸にひびいてくる。
たとえ相手が生兵法でも、待ったなしの真剣勝負では相打ち覚悟の捨て身の剣が一番怖い。まして、来るなら来いとは徹しきれぬ市郎太には、なんとか雪太郎を切って、この場を切りぬけてやろうという欲があるのだ。
道場剣術ならおそらく自分の方が一枚上だろう、市郎太には相手がそう見えるだけに、ここは負けたくない。
「えいっ」
「おうっ」
市郎太は雪太郎の強引さをちょっとあしらいかねて、思わずじりじりと後へさがった。
そのわずかに引く息に乗って、雪太郎が地をけりながら、猛然と体ごともろ手突きに出た。まったく火の出るようなぶつかり方で、
「おうっ」
市郎太は冷やりとしながら、その突きを引っ払って、戛然と双方の白刃が火花を散らした時、雪太郎は橋のほうへ、市郎太は三井、堅田のひかえている雪太郎のもとの位置へ、さっと風のように飛び違っていた。
見ていた者が、ぞっと背筋へ冷たいものを走らせたほど、それは猛烈な一合だった。
橋のほうへ飛んだ雪太郎は、そこで踏みとまって、無造作にくるりと市郎太のほうを向いた。
橋の上に敵が四人いる、そっちへ背を向けたのだ。
「あっ」
一瞬こっちから見ている三井と堅田が、いや、

見ていたほどの者が愕然と息をのんだのは、橋の上の木村丈八が抜刀を振りかぶって、一気に雪太郎の背後へ走り迫ったからである。

「えいっ」

必死の気合いもろとも、丈八の白刃がきらっと秋日を切って拝み討ちに振りおろされたのと、

「とうっ」

気配に雪太郎がほとんど無意識のごとく、片ひざづきになってうしろをなぎ払ったのと同時、まったく相打ちと見えたが、

「わあっ」

次の瞬間、絶叫をあげて大きくのけぞっていたのは、丈八のほうだった。雪太郎の太刀のほうがわずかに早く、踏みこんできた丈八の脾腹をしたたか切りあげていたのである。後で三井鐘太郎が、

「堅田うじ、我々はやっぱり人がよすぎるんだなあ」

と、しみじみ雁之助に述懐したのは、こっちは市郎太の背中を二人とも目の前に見ていながら、切りつけてやろうなどとは露ほども考えられなかった。しかも、その市郎太が、雪太郎がうしろへ一刀をなぎ払ったと見ると、そのすきへ、

「おうっ」

待ったなしにだっと切りこんでいったのだから、二人ともなおさら自分たちのお人よしに赤面せずにはいられないのである。

が、雪太郎は背後の敵はほとんど無意識のうちに切ったが、そのとたんに前の市郎太が必ず切って出るだろうと直感したので、片ひざづきの体勢から立ちあがろうとはせず、

「えいっ」

二の太刀をつばめがえしに、思い切って前へ横なぎにかえしていた。

「ううっ」

深く踏みこみすぎた市郎太は、その意外にも敏捷なつばめがえしに、さっと高股を切りあげ

られ、思わずうしろへよろめくようにどっとしりもちをつく。

「それッ、堅田うじ」

「おうっ」

この時になってはじめてそれと気のついた三井は、堅田をうながして、雪太郎のそばを走りぬけ、ばらばらっと橋のほうへ殺到していった。そこにはまだ敵の一味が三人残っているのだ。

「待て――待ってくれ」

丸田万之助は大声に制して、いきなり帯刀を鞘ごと抜き取り、橋の上へ座って前へ差しおく。到底のがれる道はないと観念してしまったのだろう。

「この上無益の血は流したくない。このとおりだ。御法どおりにしてくれ」

後の二人もそれに倣って、両刀を投げ出してしまう。

「さようか。立派な覚悟だ」

三井と堅田はいささか拍子抜けはしたが、降参した者を切るほど無法者にもなれないから、つと身をひいて三之丞のほうを見る。

「御両所、お手数をかけました」

それと見た丹羽三之丞が進み出て、三井と堅田にあいさつした上、降参した浪人剣客三人は、その場で大小を取りあげられ、郡山藩士の手に移され、後へさがって城門のあくのを待つことになった。

「比良うじ、お手柄でござった」

そっちの始末をつけてから、三之丞は改めて雪太郎の前へ出てあいさつをする。

「いや、事情やむをえなかったとは申せ、大手をかように血でけがしまして、まことに恐縮に存じます」

雪太郎はあくまでも謙譲で礼儀正しい。

「なんの、非はすべて当方にあるのです。あっぱれなお手のうち、三之丞たしかに見分いたしました」

三之丞は心から感嘆しているようである。

こっちはこれですんだが、閉ざされた城門の向こうはどうなっているのか、これはまだ三之丞にもわからない。城内にはともかく陰謀派の頭目ともいうべき赤柴刑部がひかえているのである。

三之丞は明石の使者橋田武右衛門に、もうしばらくの猶予を請い、肩衣をなおして一人で大手の橋をわたっていった。門扉の前へ立って、

「門番、郡奉行を相つとめる丹羽三之丞である。城内御用部屋へ急用にてまかり越す者、早々開門せよ」

と申し立てると、

「おう」

中から答えがあって、すぐに表門を左右にひらいた。

門内には徒士組の若侍が数名ひかえていて、門扉は赤柴刑部の命令でしめたものではなく、青島らの抜刀さわぎが城内へ波及しては一大事と思い、臨機の処置に出たものだと説明した。

それらの中には、つり台で運ばれた死傷者たちと日ごろ親交のある者が多く、要するに市郎太の処置を憎んで、内部との連絡を遮断したというのが本心なのだろう。

ということは、今まで刑部側の勢力におさえられていた正義派の士たちが、期せずしてこの門衛組から立ちあがったと見ていいのではないかと、三之丞は見て取った。

「市郎太が大手で切られたことは、もう奥へ知らせてあるのか」

「逐一表玄関まで報告してあります。一同、快哉を叫んでいるようです」

「さようか。間もなく露姫さまが御到着の折から、耳寄りな話だな」

「さようです。この上は、丹羽さま、よろしくお願いいたします」

三之丞が郡奉行として城下を遠ざけられたのは、刑部に煙たがられたからだと知っている微禄組の者たちは、今こそ立つべき時だといわぬ

ばかりに、興奮の色をかくそうとしなかった。

三之丞が表玄関へかかってみると、ここも異様に活気づいていて、

「丹羽さま、江戸の青島を成敗されたそうで、おめでとうございます」

と、たまりの間からみんな出迎えに出て、口々によろこびを述べる。

――郡山藩の士道いまだ地におちず。

三之丞は感激せずにはいられなかった。

露姫の行列が明石藩の平井平左衛門にまもられて、無事に郡山城へ着いたのは、その日の八ツすぎであった。

大手門まで出迎えたのは、家老次席の斎藤内蔵之介で、形勢非なりと見た赤柴刑部は一切後のことは内蔵之介にまかせ、自分は病気と称して屋敷へ引きこもってしまったのである。

露姫が城へ入ると間もなく、総登城が触れ出され、在国の家臣を大広間に集めて、露姫と明石侯名代平井平左衛門が立ち会いの上、内蔵之介から当主又一郎君の逝去が伝えられ、お跡目は御舎弟順之助さまであることが明らかにされた上、

「これまで藩内にとかくうわさがないわけではなかったが、順之助さまお跡目と相さだまった上は、一切のうわさはなかったことにして、各各方はこれまで通りそれぞれのお役を大切に相つとめてくれますように」

と、特に申し渡しがあった。

赤柴党とか諏訪党とかいう一切の色わけは不問に付して、既往はとがめぬという寛大の処置に出たのである。

露姫が対面したのは、無論又一郎の柩であって、遺骸はすでにひそかに菩提寺に葬られているのだった。

その通夜の第一夜に、赤柴刑部は自宅で殉死追い腹を切った。到底詰め腹はまぬがれないだけの陰謀をくわだてていたのだから、これは当然の自決ではあるが、その奥にもう一つそうな

るべき理由が重なっていた。
　おなじ日の朝、江戸の分家大学が急死した早飛脚が刑部の屋敷へとどいていたのを、刑部は城からさがってはじめて知ったのであった。
　大学の死因は、藤沢の千本松で露姫を抱いたまま落馬して、ひどく脳を打ったのが原因だったという。
　おなじ早飛脚が江戸の諏訪頼母から郡山の御用部屋へ着いたのは、その夜の五ツごろであった。
「平左衛門どの、おかげで一切の禍根は消滅しました。それにつきましても、露姫さまが奈良口での危急をまぬがれましたのは、まったくお手前の御尽力、おかげさまでござった。おかげさまでござった」
　内蔵之介は平左衛門を別室へ請じて、心から感謝したのであった。
「いやいや、手前などの尽力はほんの一通りのこと、一番苦労されたのは、なんと申しても江戸の頼母どのでしょう」
　平左衛門はさりげなく答えて、松江をはじめせがれ雪之助や三井、堅田の苦労は十分承知しているが、それは一言も口にしなかった。その雪太郎、三井、堅田の三人は、その夜から丹羽三之丞の屋敷へ入って、世話になっていた。三人とも一日だけは明石藩の供侍の中に加わったが、本当の家来ではないのだから、大手門をくぐるのは自分たちのほうから遠慮したのである。
「まずはめでたしめでたしというわけだが、これで露姫さまが明石へ立たれるのは、いつごろになるだろうな」
　その夜、丹羽家の心づくしの夜食がすんだ後で、気の早い三井が、もうそんなことを切り出した。実は、三井には、それまでに重い責任が一つあるからであった。
「それは、これから葬儀をすませて、やはり三七忌がすんでからでないと、明石へは立てまい」

　堅田がそう答えながら、こっちの仕事はともかくもう終わったので、そろそろ高輪へおいてきた貞女の顔が思い出されるといった顔つきである。
「堅田うじ、我々は明日の朝ここを立つことにしよう。お妻たちも奈良で待ちかねているだろうしな」
　雪太郎があっさり言い出す。
「明日か、若だんな」
　三井が目を丸くする。
「うむ。我々が弥一郎どのに託されてきた仕事は、幸い無事にすんだ。仏事は我々には関係のないことだ。明日の朝ここを立って、奈良で姐御たちと落ちあい、ついでだから一同にその希望があれば京大阪を見物してもいい。それとも、堅田うじは帰心矢のごとしかな」
　雪太郎は堅田の顔を見て微笑する。
「さよう、正直にいえば、拙者は京大阪より、早く愚妻に顔を見せてやりたいほうだが、付き合いなら京大阪へまわりましょう。一人で先へ帰ったとなると、愚妻にしかられること必定ですからな」
　堅田は相かわらず正直である。
「若だんなはどうしても明日の朝立つ気でござるかな」
　三井はなんとなく胸がおだやかでない。
「うむ、立つことにしよう。いまもいうとおり、我々は仏事には関係はないのだから、いつまでここにいたってしょうがない」
「しかしなあ、若だんな、姫君さまにも、平井どのにも、一度はあいさつをしなくちゃなるまい。ことに、平井どのには散々世話になっているし、いくら親子でも礼儀は礼儀だからな」
「いや、おやじにはゆうべもうあいさつをしてきている。勘当息子だからな、人の前では大っぴらに会わないほうがいいんだ」
「しかしだなあ、若だんな、貴公はもう平井雪之助ではなく、比良雪太郎なんだ。その比良雪

太郎は、ともかくもこんどの道中で、郡山藩のためには及ばずながらつくすだけはつくしている。そりゃまあ、我々はなにか野心があって働いてきたわけじゃないんだから、つくすべきをつくした、ただそれだけでいい。しかし、つくされたほうの身になって一度考えてみてくれ。いいか。つくされたほうにはつくされただけの感謝というものがある。さぞそのあいさつがしたいだろうと、わしは思うんだ。それを、黙ってこのまま立ってしまう法はあるまい。――なあ、そうだろう、堅田うじ」
三井は一生懸命に述べ立てて、堅田のほうへ応援を求める。
「うむ、三井うじのその気持ちはよくわかる」
ぽつりと堅田は言って、それっきり口をつぐんでしまう。これでは大した応援にはならない。
「堅田うじ、ただそれだけか」
三井はちょっとうらめしそうに堅田をうながす。
「うむ、三井うじの気持ちはよくわかる。姐御の手前、苦しい立場だからな。しかし、苦しいのは、みんなそれぞれに苦しいんだから――」
堅田の目がじんわりとうるんできたようだ。
「三井、姐御になにか言いつけられているのかね」
雪太郎がわらいながら聞いた。
「こうなってはもうしようがない。正直に白状するが、今朝奈良を出がけに、お妻のやつがいうんだ。若だんなは黙って郡山を立ってしまう腹かもしれない。それでは露姫さまがあまりにもおいたわしい。あたしはたぶん今日ここで露姫さまに最後のお別れを申しあげるようになるだろうから、せめてもの餞別に、三井がよく心得ていますから、きっと一度は比良さんをごあいさつに出すでしょうと、お耳に入れておきたい、わかりましたね、三井、とやられてしまったんだ。わしの苦衷も少しは察してやってくれ、若だんな」

三井は当惑したように目をしばたたいている。
「ありがとう。みんなの親切は、雪太郎決して疎略には思っておらぬ」
雪太郎は改めて心から三井と堅田の前へ頭を下げた。
「そうか、承知してくれるか、若だんな」
三井は気が早い。
「いや、お妻姐御にはわしが会って、よく話すことにする。決して三井に迷惑のかからないようにするから、その点は安心していてくれ」
「なんだ、それじゃやっぱり、だんまりで明日の朝立ってしまうのか」
「そうしよう。それが一番いいんだ」
雪太郎の決意は、どう動かしようもないようである。
そのころ――。
宵から大広間の通夜の席に列していた露姫は、道中のお疲れもおありでしょうからという内蔵之介の計らいで、別殿へさがって休息することになった。事実、露姫は道中の重なる気苦労で、身も心もすっかり疲れ切っていた。しかも、その胸の中にいつも重い不安がわだかまっているのである。
「松江、雪はいまどこにいるのです」
「はい、兄三之丞の屋敷に、三井、堅田の三人でお泊めしているそうでございます」
「露が三之丞の屋敷へまいってはいけませんか」
「さあ、その儀は――」
松江はなんとも返事のしようがなかった。道中不時の場合なら、臨機の処置をとってあげようもあるし、また度々それをやってもきた。が、こうして城の中へ入ってしまっては、どうにも松江の一存では取り計らいようがないのだ。
しかも、陰謀派の主たる者は残らず片づいたとはいえ、その残党がいないわけではない。それらが、こっちにすきさえあれば、どんな仕返

しをたくらむか、当分の間はそれも用心しなければならないのだ。

「露は雪に会いたいと思います。ゆうべの礼をいっていないのが、心残りなのです。そっと三之丞の屋敷へ案内してください」

　無理を十分承知していながら、露姫はそんなわがままを言い出す。疲れて神経がいらいらしているとみえ、目が妙に青白んでいる。

　――気が立っていられる。松江は急に心配になってきた。

　――お疲れになってはいるし、こんなに思いつめられて、もし御病気にでもなったらどうしよう。

　松江は不安にならずにはいられない。

「姫君さま、しばらくお待ちくださいませ。兄と相談いたしてまいります」

　それよりしょうがないと、松江は思った。

　露姫はなんとなく目を輝かしながら、はっきりとうなずいてみせる。松江は後のことを江戸からついてきた腰元たちによくたのんでおいて、廊下へ出た。

　――兄にしても、どうしようもないのではないかしら。

　無論、兄の独断でどうできることではないのだ。

　それでも、せめて雪太郎が城まで出向いてくれるようなら、なんとかできないことはない。が、こっちから城を出ていくとなると、これは名分からいってもほとんど不可能ということになるだろう。

　別殿の御錠口まで行って、表の取り次ぎの者に丹羽三之丞を呼んでもらうと、兄は何事だろうというように、すぐに駆けつけてくれた。

「どうした、松江。――私用か」

　万一のことがあってはと思い、姫君の名を出さなかったので、兄は私用と思ったらしい。

「いいえ、姫君さまのことですが、困ったことになりました」

　松江はかたわらの小座敷へ兄を請じ、戸障子をあけひろげておいて対座した。

「姫君さまがどうかされたのか」

「比良さまに会いたい、つれていけと申されるのです」

「なるほど――」

「兄上は比良さまのこと、お聞きになっているのでございましょう」

「それは橋田どのからうかがっている」

「姫君さまは、比良さまが黙って郡山を立ってしまわないかと、それを心配していられるのです。昨夜あの奈良の加茂口で別れたきりだから、一言御自分の口から礼をいわなくては心残りなのでございましょう。それに、今夜はお疲れのせいか、お気が立っていて、あまりにいらいらあそばすと、御病気になりはしないかと、それも心配でございます」

「しかし、困ったなあ」

　案の定、三之丞もひどく当惑そうだった。

「一番よいのは、平井さまにお願いして、比良さまをお城へ呼んでいただけるとよろしいのですけれど――」

「それはだめだろう。平井どのには親子だという遠慮がある。そんなことをたのむのは、平井どのを苦しめるようなものだ――」

「では、橋田さまではいけませんか。とにかく大手門の中まで比良さまにきていただければ、お姿をかえてでも、あたくしが姫君さまをそこまでおつれします」

「うむ。お城の外へというわけにはとても難しいとすれば、それ以外に手はないな」

「橋田さまに一度お願いしてみてくださいませ」

「いや、わしが心配するのは、橋田さまはなんとか承知してくれても、比良うじがうまくうんといってくれるかどうか、これが一番問題なんだ」

　そういわれてみれば、たしかにそうだと松江

にもうなずける。

「丹羽さん、せっかくですが、それはだめかもしれません」

三之丞から委細を打ち明けられた橋田武右衛門は、しばらく思案してから暗い面持ちでいった。

「わしは雪太郎どのと、黙って姿を消してはいけないと、約束はしています。そう念を押したのは、事が一応かたづくと、雪太郎どのは黙って姿を消すおそれが十分あるからです。幸い事件はどうやらかたづいた。御同慶のいたりです。しかし、事がここまで運んできた裏には、雪太郎どのでなければ、とてもこうはいかない事情と苦労があります。申さば、雪太郎どのの献身的な働きが、よく姫君のお命を救いえたと申しても過言ではありません」

「そのとおりです。その点は我々も深く比良どのを徳としております」

「いや、これは失礼。わしは、雪太郎どのの苦労、手柄を吹聴するためにこんなことを申し上げたのではありません。雪太郎どのにはそうしなければいられない宿命が自分にあった。だから、それを人から感謝されたり、恩にきられたりすることはつらい、それが雪太郎どのの本心だろうということを、申し上げたかったのです」

「よくわかります。すると、橋田どのは、黙って比良どのが当地を立ち退くのを、見て見ぬ振りをしておくほうが武士の情けだと申されるのですな」

「やむをえません。たとえわしから使いを出しても、いや、どなたから迎えの使者がまいっても、雪太郎どのはお城へあがることを避けるでしょう。まして、殿御名代の平井どのがここにはまいられているのですからな」

主家に対しても、父に対しても、侍の道にはそむきかねるだろうし、またそれを強いるのは酷だと、橋田はいいたいのらしい。

「それになあ、丹羽さん、雪太郎どのはことに

よると今夜、おそくとも明朝早く、黙って当地を立ちのくのではないかと思います。だれがどんな気持ちでいるかは、一番よく雪太郎さんが知っているはずなのだから」

あっと三之丞は目をみはらずにはいられなかった。そういわれてみると、そのおそれは十分ある人なのである。

「橋田どの、余計な御心配をおかけして三之丞赤面いたします。手前は、露姫さまが郡山藩の姫君であることをうっかりしていたようです」

なにげなくいう三之丞の目に、はっきりと決意の色があった。

「いやいや、あの姫君はどうも、よくよくおいたわしい星の下に生まれてこられたとみえます」

武右衛門は微笑しながら、いとしそうに目をしばたたいていた。橋田の前を辞した三之丞は、家老斎藤内蔵之介にことわり、城をさがっていそいで屋敷へもどってみた。

幸い比良たちはまだ屋敷にいたが、その座敷へ顔を出すと、明朝六ツ半（七時）に当地を立って奈良へ向かいたいからと、比良は改めてあいさつをしていた。橋田がいっていたとおりである。

「それはそれはお名残惜しい」

三之丞はそのあいさつを素直にうけて、余計なことは一言も口にしなかった。

翌朝——。

雪太郎たちはまだ六ツ半少し前に、丹羽の屋敷を辞して、奈良へ向かった。主人三之丞は通夜からもどれる時刻ではないので、昨夜のうちにあいさつをしておいたから、玄関まで見送りに出たのは、妻女と召し使いたちだけだった。

霜の白い朝である。

——強情だなあ、若だんなも。

三井はしようがないとあきらめながらも、のぼったばかりの朝日に甍をそめている郡山城を、つらい気持ちでそれとなく振りかえっていた。

屋敷町を出ると、城下町へ入るまでにしばらく畑道がつづく。その中ほどに、なにかの社の森がこんもり見えていた。その森が次第に近くなると、ふいに森の中から旅の女が一人道へ出てきて、こっちへ手を振り出した。

「あれえ、お妻じゃないかな」

三井があきれてつぶやく。

「そうらしいなあ、三井うじ」

堅田が答えて、これもけげんな顔をする。近づいてみると、それはたしかにお妻で、お浜も吉松もいっしょだった。

「お早うございます。若だんな」

「どうしたんだね、姐御」

「松江さんがお姫さまのおいいつけで、お別れのごあいさつにきてくれるというんで、あたしたちもわざわざここまで出向いてきたんです。若だんなもどうぞ」

お妻は雪太郎のたもとをつかんで、有無をいわせず、森の中におりている女乗り物の前へ引っぱっていく。

三井はうっかりのこのこと後からついていこうとして、はっとそこへ立ち止まった。お妻ににらみつけられたのである。

そういえば、堅田はちゃんと向こうに立ち止まっている。

雪太郎もおよそ見当はついていたが、もう別に逆らおうとはしなかった。

「わがままをおっしゃって、おそばの者を困らせてはいけません」

静かに駕籠の前へひざまずきながら、雪太郎はさとすようにいった。

「雪、このとびらをあけたら、露をしかりますか」

「松江どの、兄上三之丞どのは、万一の時には切腹を覚悟しています。侍とはそういうつらいものなのです。わかりますか」

「はい」

「しかっているのではありません。早々御帰城

の上、姫君によく申し上げておいていただきます。雪はいつも胸の中に姫君をしっかり抱いていますから、少しも寂しくはありません。どうぞ御無事に明石へもどられますように」

駕籠の中からはしばらく言葉がなかった。

「では、雪は江戸の空から、いつもおしあわせを祈っております」

「雪、ほめてください。露は、露はこのとびらをあけません」

「よく御分別くださいました。御立派です。雪はよろこんで、江戸へかえれます」

雪太郎は涙をためながら、とびら一重の向こうで露姫が笑顔になったのが、はっきりと見えるような気がして、ゆっくりと駕籠の前を立ち上がった。霜の白い道に、三井も、堅田も、お妻も、みんな城のほうをながめながら待っている。

そっと駕籠のとびらがあいたようだが、雪太郎は素知らぬ足どりで、森の中を去っていく。

●わが師を語る

忍ぶ恋

一条　明

人はその一生の間に、実に多くの人たちと触れ合っていく。

親や兄弟、友人たちは無論だが、触れ合ったことすら忘れている、もう顔も名前も覚えていない人たちまで、数え上げたら限りがないだろう。

でも、人はこの触れ合いの中で成長し、この恵みの中で生きている。

「我以外皆我師」というのは、吉川英治氏の言葉だったと思う。

それでもなお、私はこの世で心に師と決めているのは、山手樹一郎ただ一人である。その思い方は、だが、私の独断で、我流である。小説の勉強がしたくて、豊島区要町の先生のお宅に伺うようになってから、もう二十年余の歳月が経つ。この間、私はひたすらに、先生に恋い焦がれてきたのであった。

当時、先生に師事する若い作家の集まり〝要会〟があった。月に一度、要町のお宅で勉強会が開かれる。会員のほとんどは、私もそうだが、元編集者という経歴の持ち主だった。

このことについて私は、昭和三十六年に講談社から発行された「山手樹一郎全集」の月報付録に書いている。

――これは、先生がやはり僕たちと同様に、以前は編集者であった、ということには、あまり関係がないような気がします。

僕の想像ですが、いよいよ職をはなれて、ものを書く決心をした彼たちが、妙な言い方ですが、昨日と変わって一文の利用価値もなくなった自分を、なお、昨日と変わらずに迎えてくれ

る場所として、まっ先に要町を思い浮かべてしまうからではないでしょうか。

作家としての先生に対する尊敬と思慕は無論ですが、それ以前の何かが、彼たちを要町に惹きつけてしまうに違いありません――

私がはじめて〝要会〟で作品を読んだ時、緊張のあまり原稿用紙をめくる手がふるえ、かさかさと音がしたのを忘れない。だが、先輩たちの批評は残酷無惨なものだった。

勉強会が終わってから、お酒やご馳走を頂きながら、先生を囲んでの雑談が行われる。

その席で先生が、ふと、私の名を呼んで、

「君の原稿をきいていて、とても懐かしかったよ。ぼくも若いころは君みたいに、すみからすみまでぎっちり書いたもんだ」

こう言われたのである。

二十年も前のことだ。が、「　」の中の言葉は、一字一句とまではいかないが、先生の口から出たままを書いたつもりだ。はっきり記憶しているのである。この時の先生の声の調子も、表情も、私はいつでも再現できる。

月にわずか一日だけだが、先生にお会いするのがどんなにうれしかったことか。当日は朝から胸が高ぶって、苦しかった。作品を読めば必ず、先生が批評して下さる。いま考えてみると、その批評が頂きたいためだけに、原稿を書いてきたような気さえする。

たまらなく先生にお会いしたくなることがあった。無理に用件をでっち上げて、お訪ねした。望みかなっておめにかかることができて、門を出たとたん、私はびっしょりと汗をかいているのに気がつく。

幼い子供が遠足の日を指折り数えて待つような、そんな思いで〝要会〟の日を楽しみにしていた私が、いつごろからか、その日の近づくのが恐ろしく、つらくなってきた。

〝要会〟の若い仲間たちで、勉強会の日を別に持ち、新しく〝新樹〟という同人誌を出すこ

とになったのが昭和三十二年の末で、多分、このころからだろう。

〝新樹〟の日が迫るにつれて、食欲がなくなり、神経がいら立ち、電話のベルにも動悸が激しくなった。ずいぶん晩熟だが、小説の難しさが、私にもわかりかけてきたからだ。

「でも、面白かったよ」

いつもいつも先生の批評には、その一言がついた。

不肖の弟子はそれで満足し、こころ安らかであった。

だが、このころから私には、先生のその一言が、ひどく冷たく思えてきたのである。私は先生の本心に触れたかった。

私は先生が決してのぞかせない心の奥をゆさぶり動かすような、そんな作品を書いてやろうと思った。が、書けなかった。

いまだに私の思いは、先生に届いてはいない。それが悲しく、つらい。

たしか二年ばかり前になるが、要町のお宅に〝新樹〟同人の一人と、先生のお見舞いに伺い、帰りに池袋で飲んだことがあった。

先生のお話をしながら私は、不意に、感情の抑制ができなくなり、泣き出してしまった。

「忍ぶ恋だな」

つぶやいた彼の眼もまっかだった。

いま、先生は自宅療養中である。

時に、私たちをふるえ上がらせたような、音を立てて燃えた激しく厳しい炎は、現在の先生の姿からは消えている。

だが、私はその先生の姿に、幾多の戦場を駆けめぐり、一歩も退くことなく戦い続けた古武士の、全身に返り血を浴びたすさまじいまでの姿を、どうしても重ねてしまうのである。

山手樹一郎長編時代小説全集39

浪人八景

発行―一九七七年一一月一〇日初版第一刷
一九八四年四月一〇日初版第一三刷
著者―山手樹一郎©
装画―国貞（静嘉堂文庫提供）
装丁―玉井ヒロテル
発行者―和田欣之介
発行所―株式会社春陽堂書店
東京都中央区日本橋三―四―一六
〒一〇三 ☎東京二七一―〇〇五一 振替東京〇―一六一七
印刷製本―城北印刷製本センター
◆―定価はカバーに表示してあります
乱丁本・落丁本はおとりかえします